THE CENTRAL REVIEW

中央公論

10-1921

十月號

36

[illegible] 第十一號 第四百一號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は

腦病良藥
健腦丸
を要求す

島村博士發明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効
腦充血 神經痛 頭痛 眩暈
腦膜炎 腦貧血 耳鳴 健忘
逆上症 卒中 中風 便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

改正價藥

五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓九拾錢
三週分	貳圓六拾錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舖 大阪市順慶町 東京市箔屋町 丹平商會藥房

東京高等師範學校教授 岡倉由三郎先生
東京帝國大學文學部教授 市河三喜先生
主幹

研究社 英文學叢書

知識階級にも文學階級にも——絶對信頼に價する解題と註釋

豫約會員募集

英文學が世界文學の一大照明たることは凡百の文學史皆これを語る。實に文學こそは其國文化の爛漫たる開花なり。これを他にして、英米文明の新生命は遂に把握し得べからず。且つ英文學が人格向上と思想趣味の涵養とに於て眞に「魂の糧」たる事は歐米大陸に於ても善く唱へらるるところ英語に熟せる邦人にして猶且つ此處に留意する者少きは、現代の一恨事と云ふべし。弊社これを慨して、本叢書編纂のことを岡倉、市河兩先生に請ふ。兩先生夙に感を同じうせられ、即ち英學壇諸大家の奮起を慫慂し自ら陣頭に立つて解題註釋の執筆より每卷校閲校正の任に當らる。我が讀書界は茲に初めて我國民向きの「英文學叢書」を有するの歡びに遇へり。冀くは知識階級の各位、本叢書を各位の書庫に加へて、深く知り深く味ふ處あり給へ。

豫約申込み期日 十一月十日限り

※本叢書は豫約會員外に販賣せず

會期 自大正十年十一月至同十一年十月、一ヶ年にて完結 全廿四冊 每月二冊宛配本（一ヶ月平均約七百頁）

會費 每月拂（二冊）金五圓 一時拂（廿四冊）金五拾五圓 送料市外七錢 滿、朝、臺、樺金五拾五錢

內容見本 本叢書刊行の趣意、實物寫眞、刊行書目、及原文對照註釋の見本附規定書、申込次第即時贈呈す。

研究社英文學叢書部

東京麴町區富士見町六丁目・電話九段一五七〇番 振替二八六〇一番


男性化粧料と
化粧界を
化學的改造する
ゼピー紳士液
"ZePY"
GENTS TOILET WATER
ゼピー紳士液
（男子用化粧液）
Good looks is a social asset. Personal appearance has determined the social standing of many a man has made or lost for an enviable place in his own circle.
MOOREHEAP & JARDINE.
一品定價五十錢均一
紳士統一化粧
ゼピー紳士液
ゼピーワイト
ゼピーヘヤー
大阪市

ジャック・ロンドン原著、和氣律次郎氏譯（定價壹圓六拾錢 送料拾五錢）

（最新刊）

強者の力

ジャック・ロンドンは米國が生みし唯一の偉大なる近代小説家である。勞農露西亞に於て最も人氣ある劇は渠の小説を脚色せしものであるに徵して其作風傾向を窺知することが出來る。本書に收むる各篇は彼が代表作で其天外より來る奇拔の着想と他に見る能はざる諷刺の鋭さは、低級安價の戀愛小説に慊らざる人々に溢るゝばかりの滿足と感激とを與へるであらう。

ミュンステルベルヒ著 西宮藤朝氏譯

藝術教育の原理

來るべき新文化の基礎は實に文藝と教育との提携に依て初めて基礎を得るであらう本書はミュ氏が文藝教育を學問的に研究した出色の名著の全譯である

定價貳圓參拾錢送料拾七錢

エレン・ケイ原著 原田實氏譯

戀愛と結婚

人生の根本問題たる戀愛と結婚とを論じて微に入り細に徹し固陋なる因襲道德を駁擊粉碎し眞正なる道德を樹立せんとせるエレンケイの代表作の全譯也

定價貳圓四拾錢送料拾八錢

エドウアド・ウエスターマーク原著 島村民藏氏譯（四六判、箱入、細洋字印刷 定價參圓貳拾錢送料拾八錢）

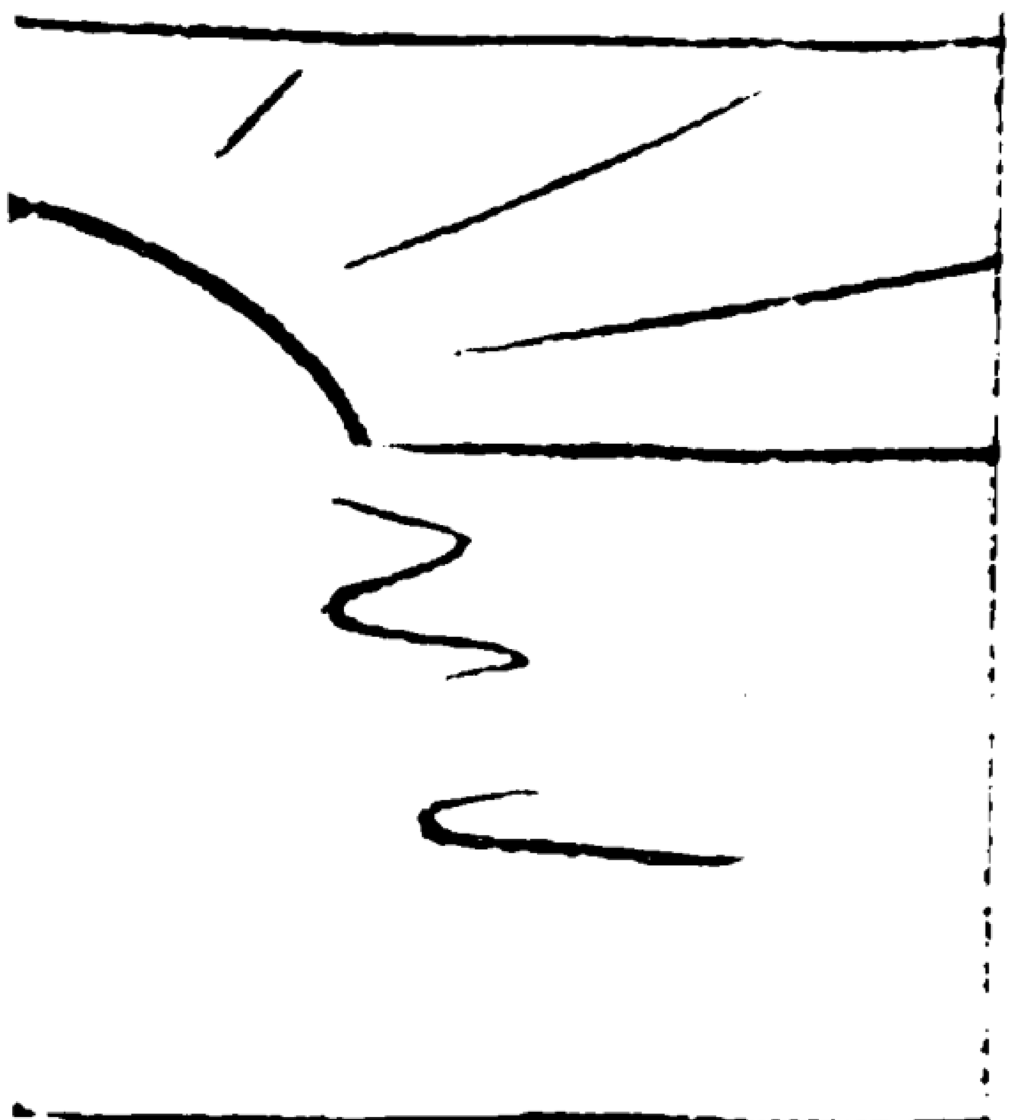
（最近刊）

人間結婚史

本書はロンドン大學の教授たりし原著者が社會學、人類學、生物學等に關する該博の智識を傾倒し原始時代より今日に至る「人間結婚」の發達をあらゆる方面より觀察研究したもので、男女關係の進化史であると同時に又東西を通じての兩性問題の變遷史である。「婦人が男子の情慾、僻見、及利己心を漸次征服して行つた歷史である」と著者は結論して居る。

東京市麴町區飯田町壹の貳 株式會社 天佑社（振替東京一〇一二八番 電話九段一一七三番）

鏡臺や手鏡は可成り長い間在來の



▼説　苑


專賣特許の自働鉛筆
PLATON
三十萬字
鉛心の出入自由自在で削る手數も折れる心配もなく十二本の替へ心で優に三十萬字を書くことが出來ます
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣
プラトン
シヤープ鉛筆



"THE COMING OF BRIDE" BY J. DUNCAN, A. R. S. A.

慶應義塾大學
教授講師執筆
經濟學講義

時勢は何人にも皆大學程度の教育を必要ならしむ

學長　慶應義塾大學經濟學部長法學博士　堀江歸一氏

顧問　慶應義塾大學總長　鎌田榮吉氏

十月開講

我邦に於ける唯一大學程度の通信教授にして、學科目及び講義擔任者全然慶應義塾大學經濟學部と同一なり。講義は毎月二回（十日　二十五日）發行す、毎號約二百頁、新聞紙を解讀し得るものは、何等の豫備智識を要せず、皆之に依つて最高程度の經濟學を講習するを得、本講義の與ふる利便を盡く享受するを得。本講義の利便、其主要なるもの左の如し。

一、講　義　三學年完了の後は分綴して各一卷の書籍を爲さしむるを得、一卷三百頁乃至千頁。何れも我邦第一流大家の新に稿せる所なり。

二、百科全書　三學年の講義完了の後は、細密なる索引を編纂して、三學年修了者に凡て無代價を以つて配付す。之に依り講義全體は一箇の經濟學百科全書として利用するを得べし。

三、懸賞論文　講習者は何人も之に應ずるを得、其優等なるものは講義誌上に發表され、其賞として學資減免さる。

四、卒業論文　其優秀なるもの及び佳良なるものには、凡て卒業書授與され、優等なるものには特に金時計金鎖付又は金時計又は金牌賞賜さる。

五、雜　錄　毎册若干頁の雜錄を有し、經濟、産業、金融等に關する時事の眞相を報道し、各種の有益なる統計を載錄す。

六、質　疑　講習者は何人も講義に關する疑義を質問することを得るのみならず、講習期間中は無償、經濟に關する限り、公私を問はず、有らゆる事項につき教を[illegible]

入學金	貳圓
學資	
三學年前納	五拾貳圓
一學年前納	拾八圓
六箇月前納	九圓五拾錢
三箇月前	五圓
毎月前	壹圓七拾五錢

發行所
時事新報社

東京市芝區西久保廣町二十二番地
時事新報社出版部編纂所
電話芝一〇〇五　振替貯金口座東京五七五九三番

郵券二錢封入又は往復はがきにて申込まるれは本講義の詳細を說示せる册子を無代送呈す

本件に關する御照會は編輯所宛にせられたし

秋

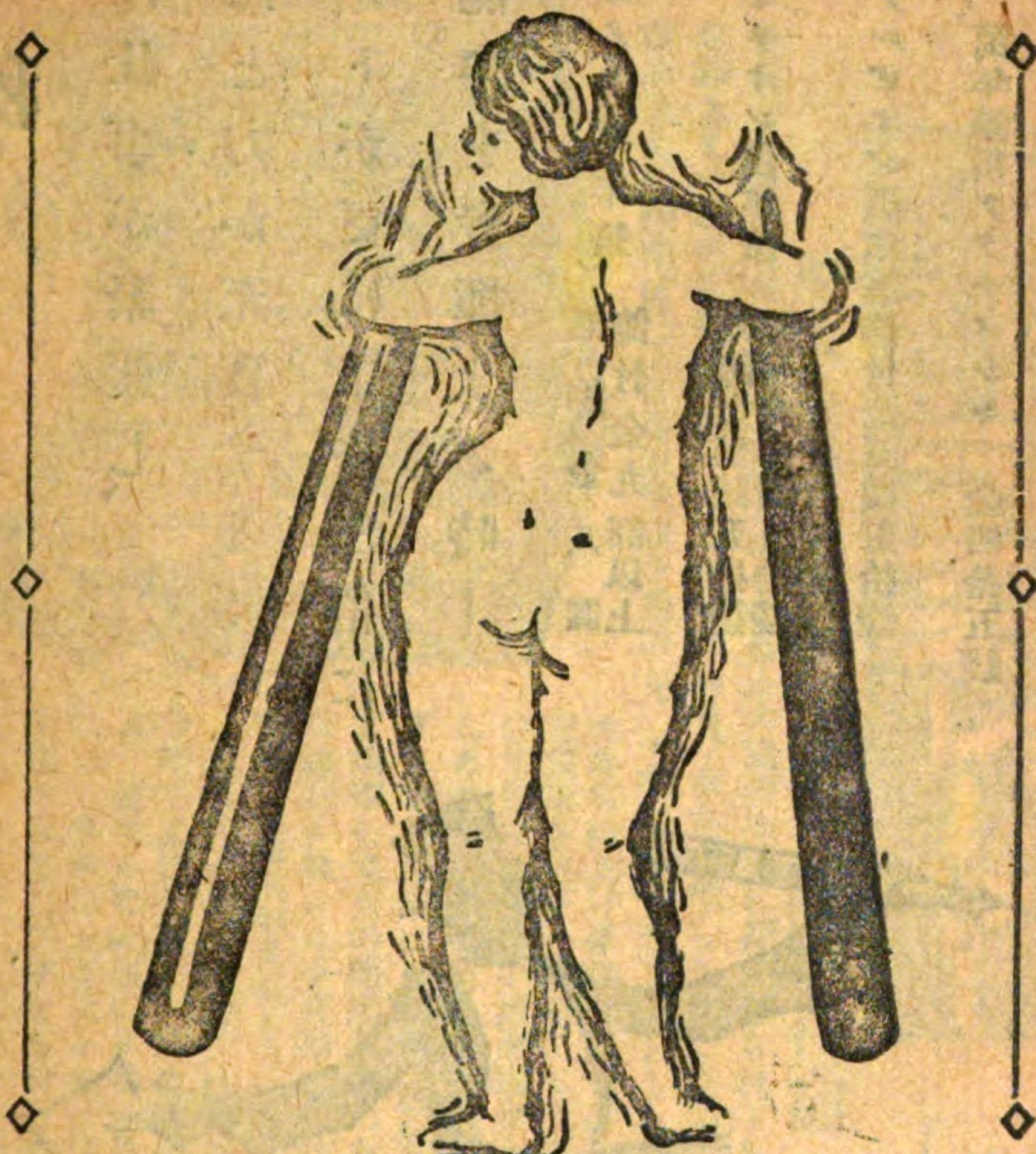
秋は仕事が緊張し、
自然と力が充實する時。
オノトが更に二倍三倍に
其能率を發揮する時—

オノト萬年筆　無飾金八圓　飾付金九圓以上
オリオン萬年筆　無飾金參圓五拾錢　飾付金四圓五拾錢
アルピオン萬年筆飾付金五圓五拾錢
萬年筆用アテナインキ　金四拾五錢
送料各金四拾五錢



東京日本橋通
丸善株式會社
（振替東京五番）

東京神田駿河臺下（振替東京二八一六番）
大阪東區博勞町（振替大阪七四番）
京都三條通（振替大阪一七一三番）
横濱辨天通（振替東京一一八五二番）
福岡上西町（振替福岡五千番）
仙臺國分町（振替仙臺一五一番）



大正十年

中央公論

十月一日發行

十月號

第卅六年第十一號

第四百一號

軍備縮小の徹底的主張

近く開かるべき華盛頓會議は軍備縮小の協定を主題とする會合である。太平洋及極東に關する複雜困難なる問題も附議せらるゝからとて主題を曖昧にしては不可い。飽くまで軍備縮小の會議たらしめなければならぬ。而して吾々は之を機として是非とも海陸兩面の尨大なる軍備の大縮小を決行するの覺悟が無ければならない。

よその國はいざ知らず、今日の我國の軍備は誰が見たつて不釣合に尨大である。政府の豫算を見るがいゝ。有らゆる文化的設備を犧牲に供して軍備の充實に全力を傾倒して居るではないか。交通機關の不完全、何よりも大事な教育的設備の缺乏、之等は何の爲めか。座敷を塵埃だらけにして飯も食はず子供も學校に遣らないで只管門と塀とのみを堅固にしたつて何になる。所謂軍備の充實に依つて國力の發展を夢想する者は、鰒の腹のふくれるを喜ぶの類にして、圖に乘ると軈て破裂するの悲慘を覺悟せねばならぬのである。

夫れでも、其の尨大なる軍備が帝國の防備として完全に其の任務を盡し得るのならまだいゝ。國家の防衛が兵隊と軍艦とばかりで動くと思ふ者は、自働車を買つてガソリンを用意しない樣なものだ。軍器彈藥の供給を如何する。石油は如何。將た戰時に於ける國民の衣食は如何。之を全然等閑に附して而かも仍ほ今日の軍備を其儘維持せんとする者の妄や驚くに堪へたるものがある。本當に自動車を活用せんとならば、其中二三臺を賣り飛ばしても速に多量のガソリンを買へ。ガソリンを用意せずして自動車を買ひ揃へよと勸める自働車屋に警戒するを要すると同じく、産業教育等を等閑に附して軍備の充實擴張を說く軍閥者流の言を、吾々は眉に唾して聞くの必要があるではないか。

今ある丈けの軍備を有効に活用するが爲にも、軍費の一部を割いて他の文化的施設に轉用するの必要はある。軍國主義者でも眞に國を思ふの至誠があらば、少くとも此點に於て軍費制限論者とならねばならぬ筈だ。併し乍ら吾々は更に一歩を進めて、今日の軍備は果して帝國の防衛に必要なものであるか否かを省量して見たい。軍國主義者は動もすれば曰ふ。我等はたゞ帝國の消極的自衞の爲に策するのみと。然し、國防に積極消極の別を立つるは抑も人を欺くの甚しきものである。四隣に敵なしとする見地を取れば、國防は國内の警備を以て最高限とす

る。が、東も彼だけも防めぬと疑つておゝれば、之等の設備を彼に準備し得るに至るまでは、其等の安全——消極的の意味に於ても——を語ることが出來ない。所謂積極消極の別は主觀的の觀念で、自分丈が自衛の爲と思ふても、過度の擴張は相手に於て之を積極的の脅威と感ずるや必せりである。此意味に於て、帝國今日の軍備が東洋に於ける一大脅威であることは、殘念ながら、爭ふことの出來ぬ明白な客觀的事實である。之がたまたま國際間の問題になつたからとて今更驚くには當らない。

併し國際的一大脅威として問題になるのは固より日本の軍備ばかりではない。英國の海軍然り。佛國の陸軍然り。北米合衆國の海軍擴張の計劃に於て殊に然りである。而して其結果自ら軍備擴張の競爭といふ不祥の形勢を馴致し、各國共に苦むことゝなるのである。而して軍備の問題は、各國共に、如何に苦しいからとて單獨に縮小制限の斷行には出で兼ねる。一旦劍を拔いて起つた者は、中途如何に鬪爭の過誤を悟つても我れひとり劍を棄つる譯には行かない。是れ即ち軍備制限の國際的協定の必要なる所以である。

軍費の負擔が國民の生活を脅すの甚しきは、近代國家の通有の現象である。如何にかして此苦痛を脫せんと熱望するも、單獨では何とも始末の附け樣がない。と云つて互に睨み合つて居ては益々擴張を競ふのみである。斯くして國際的協定は必然起らざるを得なかつた。第一回萬國平和會議はこの爲に出來たのであつたが、不幸にして目的を達しなかつた。軍國主義者は、此時の失敗を指摘して軍備制限の國際的協定の不可能を說くも、吾々はあの時以來二十年の長きに亘り、世界の人々の良心が如何に此問題に思ひ惱んだかを識るが故に、今次の華盛頓會議を最も嚴肅に迎へざるを得ざるものである。之を一時の機略に出づると爲すが如きは妄誕の甚しきものと謂はねばならぬ。

さらでも我國は不釣合な軍備の擴大に苦んで居る。之が結果たる各種の欠缺が最近到る處に暴露して、最早や單獨でも緊縮の斷行に出でねばならぬ必要に迫られて居るの際、華盛頓會議の提唱に接したのは實に勿怪の幸である。必要の上から云へば、日本は最も多く此機會を利用すべき地位に居る。現に今回を機として最も多くの利益と幸福とを得るものは我が日本であらねばならぬ。若し此際權衡問題がどうの相手方の肚裏がどうのと、巧に國民を瞞着して此の好機の利用を誤らしめんとする者あらん乎、吾人は之を眼中軍閥ありて國家なき不忠の徒輩として斷々乎として排斥しなければならない。

中央公論



第卅六年第十一號
十月號
第四百一號

美術教育

山本鼎

本誌上に「自由畫教育の要點」といふ一文を發表してから、ちやうど一週年になる、一週年の此頃になつて、此說もやうやく全國の教育會に眞面目な問題として取扱はれ來り、どうやら消し難い火とはなつたが、而もなほ、八十何パーセントは舊式臨畫をやめないし、文部省は例の傳統的な態度で新舊折衷の策に據り、目下再び新畫手本の編成を急いで居るといふし、各縣に圖畫教育研究會が催され、自由畫教育說を挾むで右黨左黨對峙し珍らしい活氣を見せては居ても、簡明な消理をいやに七めんどうに討議するばかりで、結局、「新定畫帖は是を適宜活用する事とし、專ら寫生畫を奬勵する事」といつた處へ納りをつけ、私の主張が美術教育を志すものであり、又哲理に根底するものである事などには考へ

及んで居ないかのやうであるし、むしろ、一と度、それが美術敎育であると聽くと、斷乎として不服を聲明し、もしくは困つた顏をする敎育家が、殆ど九十何パーセントでもあらうかと考へれば、ものを言ふのもいやになつてしまうのである。——併し、一度でも云ふ必要のあつた事なら、千萬度と雖くりかへさねばなるまいと思ふので、又々此處に其後の感想を述べる事にした。

×

私の提唱を捉へて、「自由畫敎育論は反動として表はれたものか研究の結果表はれたものか」と質問した人があつた、私はそれに答へて「反動として表はれたのである。それをさしたのは私の信念だ。研究はこれからあるだらう、學校に家庭に社會に如何にこれを順當に生長せしむべきやといふ事は方法の問題である、今日まで私の費した言葉は信念の披瀝であつた」と云つたが、其信念は何處から來たか、と問はれたら、それは、二十年の美術家生活ののちに與へられた悟性から來た、と答へる。悟性は無邊の愛を觀念せしめた。「畫家は決して他の畫家を眞似てはならぬ。もしさうするならば彼れは自然の子ではなく孫だと云はなければならぬ」とレオナールドに云はせ、「見たゞけの事を描いてそれで下らない畫の出來るやうな者は駄目だ」と、マネエに云はせ、「作る事の出來るのは見るからだ」と、ロダンに云はせ、「自分の見たやうに描くがいゝ、それが出來なかつたら良い人の眞似をして居るがいゝ」と、ルノワールに云はせ、「自然に對して子供となる事を要す」と、セザンヌに云はした其悟性が、私をして「お手本といふ仲介者を用ひて自然を學ばしむる事を止せ、形態、色彩、調子、構成、のすべてを、直接に自然に就て學ばしめよと」云はしたのである。

×

美術家は觀る事のよろこびを知つて居る。そして、其モチーフは到る處に遍滿して居るのである——今、これを書いて居る眼の前には二枚の硝子戸があり、其處に谷の景色を容れて居る。今日は、所謂眞珠灰の曇日で、すべての立館が軟かいトオンに和められて肌ざわりの良い絨氈を思はせる。圓錐形の鱗を疊み秋が來て燻金に染めた落葉松林が中景をなし、林と空との堺に、遠い山の峯が朧銀色に霞むで居る。目近は煙のやうな明るい草叢になつて居て、其處に、野菊の白い點々や、萱刈坊主の紅い粒や、オパール色の薄の穗などが撒かれて居る。草叢と落葉松林との間に、谷から象の脊のやうに盛り上つた草山があり、其前には一本の櫻の木が華車な梢を擴げて居て、一とつの梢ははや珊瑚紅に色づいて居る。景色のなかには栗の木もあるが、あの堅實な線の屋内に黄色い小さな鞠のやうな實が見えて居る。胡桃の木もある、これは又遠見に、靑磁碧を混へた高雅な線となり、豐かな梢を挑し重ねたはつきりとしたデッサンは、まさに Poussin の樹木を聯想させる——凡そこれらの物體、景觀、時の現象の渾然たる、平凡自然なリアールも、私をして美と美術に係る無限な煩惱へ導くのであるが、さやうな煩惱の淨土から生れ出る製作に對する同胞のあまりな無理解に觸れる時、私は腹が立ち、寂しくなり、竟に見る事のよろこびを知らぬ人々を氣の毒に思ふのである。美術家と素人との異を見るといふ事の差である、と斷案した人もあるが、私は素人と專門家との差を描くといふ差だけに認められる時代が來るといゝと思つて居る。見える事だけは父にも母にも妻にも兄弟にも友人にも赤の他人にも見えてもらい度いのだ。處が、現在は專門家でも見えないで描いて居る人が澤山居るのだから心細い、圖畫教育界の如きは、見せない教育を容易に捨てやうとしないのだから心細い。

今日、大多數の小中學で行はれて居る圖畫教育なるものは、明治三十何年かに文部省令で規定され、四十何年かに國定教科書とされた「新定畫帖」なるものを中心とする示範教育であるが、吾が國の圖畫教育には大體四つの變遷があるさうである。はじめは方眼紙を用ひてお手本を模寫さした時代、次が、日本畫の畫法を練習さした時代、其次が和洋折衷の畫法を示範した時代、それから最近の創造主義の時代といふ順序であるとの事だ。方眼紙時代、日本畫時代はしばらく問はず、現在なほ普く遵守されて居る第三期の教案を觀るに、それは趣味教育ともつかず、職業教育ともつかず、變に理屈ツぽい教育論から混成された啓蒙教育なのである。即ち、文部省の示した教授要目には、

「寫生畫ヲ授クルニハ成ルベク先ヅ教員自ラ模範畫ヲ示シテ其布置描法ヲ説明スベシ」

とか、

「畫題ハ成ルベク他の學科目ト教授上の連絡ヲ圖リ、應用ノ廣キモノ又ハ生徒の趣味ヲ養フニ足ルモノヲ選ビ其ノ高尚ニ過グルモノ或ハ鄙陋ニ渉ルモノハ之ヲ避クベシ」

などと訓令してあり、更に、新定畫帖にはさま〲な約束が示範されて居て、生徒等の智慧や、技巧の自由な發露を思ふさま邪魔して居るのである。處が、さやうな訓言とさやうなお手本とで、正確だの美感だのといふ事を示範しやうと志したのだから呆れざるを得ない。啓蒙教育はまさに彼れらにこそ必要であつた。彼れらの教科書には至る處に實用實用と書いてある、併し、彼れらの裝飾學、造形學から何の實用が奬められたか?。

圖畫教育の實用とは、つまり造形的物件の美的價値に關する事であらうが、彼れらの畫學からそれが少しでも豐富になつたであらうか、小中學は無論の事、師範學校まで其教授要目に大さう立入つた教授法や處理法の課業はあつても、美とか美術とかに關する何等の學課もなく、裝飾造形の智慧や技能を統整する一つの理性――即ち藝術觀といふものが皆

發される事なくしてなんで藝學が實用となり、建築や、服裝や、家具などまで漸次に良くされてゆくやうな結構な事があり得やうか。彼れらも遠慮がちに其事を云つては居る、「務(かね)て美感を養成するにあり」と。併し要するに後てゞあつて大事なものではなかつた。私に言はせると此處に本末顚倒があり、ために從來の藝學は智慧をも技能をも活き〳〵と生長せしむる事が出來ずに、其學科は教育上に無駄事の如く扱はれるやうになつてしまつたのである。

×

彼れ等が最も重んじたのは實用といふ事であつたが、其教育は、物體を圖學的に認識せしむる事であつた。彼れ等の一人は斷言して居る「すべて實用といふ事は所謂圖學的に描かなければならないのである」と。又文部省も、小學校中學校に向つて、

「圖畫は通常ノ形體を看取シ正シク之ヲ畫クノ能ヲ得シメ」

と云ひ

「圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且ツ自由ニ之ヲ描クノ能ヲ得シメ意匠ヲ練リ」

云々と訓示して居る。處で、其通常の形體といふのは人間の眼からの直接な感覺とか、印象とか認識とかいふものをまるで無視した、冷たい教授法で抽象され概念化された模型なんだ、又物體を精密に觀察しといふのは、例へば薔薇(ばら)の花に就て云へば、花びらの枚數も、葉のまはりのぎざ〳〵も、枝のとげの數も實物通りの數と位置とに描かせやうとする事で、求むる處はつまり標本的精緻なのである。彼れらは、姿(ポーズ)に就ても、色價(ワリユー)に就ても、調子(トオン)に就てもまるで無關心だ。物體の奥深い價値を悟らしむる立體觀、色價(ワリユー)の限りない智慧となる物質美、綜合的な美を形づくる環境の詩趣、さては時の現

氣、空氣、光線の美しさなどにもとんと冷淡だ。彼れらの教育には有機的な要素がすべて省かれて居るのである。

×

彼れらは、机や、茶碗や、花や、建築などを所謂圖學的に觀、且つ描かしめる教育を以て、實用に奉仕するものと思つて居るが、さやうな教習は指物屋の小僧とか、標本繪師とか、建築技師なんかに必要でもあらうが、普通學には不向きだ。普通學には、机なり茶碗なり花なり建築なりの美に對する學問を與へなければなるまい。どういふ机や茶碗が美しいのか、なぜ美しく見えるのか、といふ事を識らせる學問の種をおろして育てゆかねばなるまい。それには四五人が啓蒙のつもりで案出したそくばくの模型を與へて、貧弱極る形の學問をさせるやうな事をやめにして、だれの身邊にも隨所に溢れて居る立派な自然の材料に就て、美のすべての要素を識らしむべきである。チョークに分解されない前の渾一體に直接して、觀させ、描かせ、又語り聽かせる事によつて、生徒らが本具の智慧を無碍に流露せしめ、闊達に生長せしむる事にこそ教育の旨味を解すべきである。

×

從來の圖畫教育は、まつたく見る事のよろこびに導かなかつた。智慧の自由も技巧の自由も妨げて、子供のうちに早く既に裝飾の本能を萎縮さしてしまつた。美の道德から評すればそれは實に非理な事であつた。英國の印度政策なるものは印度人の文化的な悟性をあらゆる教育機關を通じて妨げるのにあると聞き、又聯合國の對獨策は、彼の國の乳牛を奪つてまづ獨逸の小兒を體質的に弱者にしやうとする深酷な邪智を有つものと聞いた時、體中の血が額に上るのを感じ

たが、それとこれとに善意と悪意の差はあつても、人生の順當な成育を妨げる事に於ては共に見のがし難い非理なのである。勿論私は、二十何年か前に從來の圖畫敎育の規範を作つた其人達を詰問しやうとは思はない、なぜならば、當時にあつては、それでもかなりな勇斷を以て劃策された、順路への一轉進であつたらうから。――唯私の不服なのは、今日の環境にあつて、なほさやうな美の敎養に關する一つの背理が横行し、而もそれが政府の權威によつて支持され、美術學校によつて保證され、美術家も一般の父兄もとんと知らん顏をして居る事である。

×

自由畫は併し廣まつたものだ。其處らぢうで自由畫展覽會が催され、子供相手の雜誌は皆自由畫の募集をやり、大新聞の日曜附錄に三色のグラビアで自由畫が複製され、呉服店文房具店の飾窓（ショーウインド）にまで自由畫が用ひられるやうになつた。先日訪ねて觀えた田舍の人が眞面目顏で「先生は自由畫の家元で居らつしやいますから……」と云つたのには吹き出したが、惡くすると私の名は日本洋畫史には載らずに、敎育史の方に少さく遺らうも知れない、それは何とやら同僚に氣まりの惡い思ひであるが、併し多くの誤解曲解を想ふ時、つい身を乘り出して辯ぜざるを得なくなる。誤解の內でも一番いけないのは「畫家の好奇心から子供の自由畫の稚拙な面白味を有頂天に歡迎してその畫風を廣めやうとするものだ」といふ謬見である。「あんな形の狂つた畫ばかり描かして居てどうするのか」とか、「自由畫はたゞ子供の畫として面白いのだ」とか、「自由畫ばかりが畫ではない」とかいふ評語は、自由畫敎育說が、圖畫の一樣式を奬めるのでなくて表現の精神を說くものであり、モチイブを美術に採らずに美に由らしめ、模造よりは創造を勸め、夢想よりも感銘を重んぜしめ、過去よりは現在に住せしめんと圖るものである事を知らないからだ。吾々が祈願するのは表現の純といふ事

である。誰れ人にも植ゑつけられてある『創造』の苗が愛し愛されつゝ生長する事を正しい道徳とする吾々は、子供らから創造の契機を奪つて、模造の練習を强要する書學を不正な書學と見なすのである。

兒童自由詩の宣傳に對しても同樣な謬見がむけられると見えて、北原白秋もこう云つて居る。

「彼の論者の嗤ふべき誤謬は詩を作る小供等が成人すれば皆童謠詩人となる、またその爲に私達が彼等のさうした詩の芽を引き出したのだと思つてゐる。さうでは無いのだ。私は彼等兒童を童謠詩人たらしめむが爲に兒童自由詩の宣傳と啓發とに奮起したのではない、兒童に兒童の詩を作らせる事は、彼等を愈々眞純な彼等たらしめ、彼等の感覺感情を彼等自身に自ら練磨させると同時に、眞の人間としての叡智を幼い乍らにその本質から耀かさしたいと思ふばかりである。かうして自由に成長して行く彼等兒童は、成人すれば成人するほど、彼等の詩情を更に深く更に高く廣く膨大さしてゆくに違ひない。畢竟するに成人として一の立派な詩を作るに臻る可きである。究極に於て童謠詩人に仕上げやうといふのではない」

云々。

×

最も馬鹿氣た曲解にこういふのがある「自由教育では、自制とか謙遜とか讓步とかいふ美德　毀いらるゝと同時に、自から忌わしき過激思想の如き惡しき思想發生の因を醸す危險性を含むで居る。――苟も君主國の美育及技能科としては自由畫を本體とする事は不可だ。」こういふ事を云ふ人は、自由といふ字の因習的な感じだけで腹を立てゝ居るんだ。一とつ龍丘村へでも往て見て來るがいゝ。あの村の子供達が各々に手製のカルトンのなかに自分の畫を愛藏して居

て、畫の端が折れたり、汚れがついたり、ピンの痕がついたりする事をひどく厭がるといふ事や、或子供は、大きな畫の寫生に夢中になつて身をだん〳〵に乘り出してたんぼへ眞逆樣に陷ち込んだが、泥だらけになつて這ひ上ると、幸ひによごれずに、道端へとび散て居た描きかけの畫を畫板へ拾ひとつて、小石をおもしに置いて自分の家へ馳け戻りお母さんにすつぱり淸めてもらつてから又モチイブへ馳せ歸つてとう〳〵十二分に描き上げちまつた、といふ話や、使ひにくゝなつた短かい色鉛筆は軸を割つてチヨークを取り出しそれを糊と共にねう鉢で磨つて粘土細工を彩る顏料にするといふ話や、其他さま〴〵、子供らが、各々の智慧と、氣力と、情熱とを傾けて、嬉々とし豐富な自然界に呼吸し、其處に自由に順當に各自の amour du beau を肥しつゝある、頗る德育的な實狀を見聞して來るがいゝ。

「自由畫とは要するに寫生畫といふ事にすぎない、すれば從來とてやつて居る事だ、今更仰々しくいふ程の事ではない、これから寫生の時間を少しふやせばよいであらう」これは半可通な誤解だ、吾々の自由畫教育は寫生を重んじては居る、併し自由畫とは寫生の事じやない。それに、從來の小學の寫生畫なるものは多くなほ、示範敎育の成績で、今日の自由畫とは發生の態を異にして居るものである。

×

まつたく、自由といふ文字は哲學的な味ひが深いだけに、いつまでも誤解され易い、それが敎育といふ字に結びつくといよ〳〵變な感じがすると見える。ほんに二ッ共脊中合せに惡い因習を有つて居るので、自由畫教育といふ標語は、年老た敎育家を迷はせ、又惜せしたのである。併し、トルストイも敎育論で斷言して居るやうに、「敎授學の唯一の軌範は自由であり、唯一の方法は實驗である」といふのは眞理である。此頃「自由畫とは絕對無干涉の放任敎育であるか?、

然らば自由説は教育上の邪道である」と憤激した人や、「人生に絕對の自由といふものはない、それは單に空漠の觀念にすぎない」などと冷笑した人があつたが、――馬鹿な話で、自由の觀念は却つて萬人普遍のものであり、それを順當に生長せしむる事に反對の理由はなささうなものだが、意外にさうでないのは、つまり自由を絕對なものと考へる誤りから來るのであらう。自由はいつも相對的なものだ、長い、人類の歷史に、さまざまな不自由を喰つて今日のやうに肥え太つて來たものである。――私は想ふ、日本の歷史の上でもいろいろなドラマを演じて來た、此怖るべく賴る可き彈力を有つた理性を、愈々立派なものに仕上げる事こそ教育の使命ではないか、と。

吾々の自由教育とは、教師の自由勝手に教育する自由教育ではむろんなく、自由といふものを軌範して臨む自由教でもむろんなく、自由共事を教育する自由教育なのである。從來、教育と云へば、自由を制限したり、壓迫したりする事で、人間を良くするには、自由に足枷手枷をしなければならないやうに考へられては居なかつたか？。私の信ずる處では、自由を拘束したのでは人間の本質は決して良くならない、少くとも自由を知らない者に生長はない。即ち各人の自由共ものを豐かにしやうとするのが吾々の教育觀なのである。喩へば、スペイン風を防ぐにマスクを以てせずに强健な體力を以てせしめやうと圖るのであり、不幸な性慾的失足を防ぐに男女の交際を禁ずる事を以てせずに交際の自由に基く兩者の理解によらうとするが如きである。私はいつぞやこんな風に言つた事がある、

「自由が道德の形をとつたのが正直といふものである」

と。但し自由も正直も良い自由、力ある正直とならなければ駄目だ。此理性位有機的なものはない、それは竪と橫とに消長する、現に昔知られなかつた自由が今日澤山に目覺めて居るし、正直も又昔と今とであべこべになつたのが澤山にある。見給へ、自由の相對が奴隷制度であつた時代よりはそれが徒弟週休問題になつて居る今日の方が自由は肥えて居

る。又、自由の相對が、家風といふ因習であり姑のいぢわる根性であつたりした時代よりは、それが夫（おつと）趣味などに相關する近頃の方が自由は肥えて居る。又、自由の相對が賃銀問題であつた時代よりそれが仕事の質の問題である時代が來たら自由はより肥えるのだ。

自由畫說の如きも、六十年前白耳義で叫ばれ露西亞で行はれたが、併し當時の環境は、其自覺の芽を僅かに圖畫の一樣式として開かしたのみであつたけれど、今日の吾々の環境は、それが教育全體を刺戟する或精神として提唱され且つ實績の上に浸潤しつゝあるのである。

蓋し、自由畫といふ文字は私も好きではない、それに就ては昨年こういつた事である。

「自由畫といふ言葉を選んだのは不自由畫の存在に對照しての事である、云ふまでもなく不自由畫とは、模寫を成績とする畫の事であつて、臨本――粉本――師傳等によつて個性的表現が塞がれてしまう其不自由さを、救はうとして案ぜられたものである。――自由が不自由に代つた時、創造が模寫に代つた時、はじめて自由といふ言葉は勇退すべきであらう」と。

×

前年私は、自由畫教育は美術教育に奉仕するものである事を說いたが、其後自由畫は意外に廣く行はれたにもかゝわらず、其目的觀に關しては又意外な無關心を觀た。私がくりかへし設問するのは圖畫教育なるもの丶使命である。何のために普通學の過程に圖畫教育が編み込まれてあるか、其生長は何を意味し、其價値は何であるか――此根本問題がわりに閑却されて居るのは怪しむべきである、「如何に教ふべきや」よりもさきに「何を教ふべきや」がなければならない筈だ。先頃、澤柳博士を戴く新圖畫教育會の委員は、圖畫教授の要旨を規定して、

「圖畫科ハ物象ニ關スル觀察鑑賞ノ力ヲ練リ其創作力ヲ啓發シ、描寫ノ能ヲ得シムルヲ以テ目的トス」と發表した。是によつて觀るに、圖畫教育界の元老大家連も又まさに圖畫教育の使命を藝術教育とも、美術教育とも、趣味教育とも見なす事に異議はなさゝうであるが、而も此人達は畫學を美術教育の一科と解する事には不同意なのである。單に美術教育といふ文字が氣に喰はないのか、但しは物象の觀察、鑑賞、創作、描寫、といふやうなものを美術心の外に置かうとするのか？。

私の自由畫教育説は、圖畫教育の使命を明かに藝術教育（美術といふも同じ）と認る處から發生した。それ故觀察、鑑賞、創作、描寫一切の生長を各人の智慧と技工の自由に基かしめ、彼れらの生涯を一貫する發達を希ひ願つたのであつた。臨本、範畫といふやうな仲介を排斥して、各人の眼を心を直ちに萬象へ導き、其處に自然を知り、其美を知り、其美術を知り、其趣味の深淵を會得する事を勸めたのである、私の理論の略圖はこうである。

圖畫教育
- 製作
  - 智慧……自由
  - 技巧……自由
- 鑑賞
  - 審美學的考察……自由
  - 美術史的考察……自由

（以上）——藝術教育

×

「自由畫説は良いやうだ、併し藝術教育なら反對だ」と或縣の視學が研究會の終りの日に挨拶したさうであるが、して見ると此人は自由畫教育の何に賛同したのであらうか？、私は、「藝術教育説はいゝやうだ、併し自由畫説に反對だ」と

いふ言葉をこそ待ちうけて居るんだ、なぜならば其處でやつと圖畫教育なるものが、哲學や藝術觀で鍛えられるからである。それにしても藝術教育の他に圖畫教育の使命があるとするとそれは一體何だらう?。

子供らが樂みながら描く、——描く事によつて、自然の活き〳〵した立派な種々相、姿や、形や、彩や、調子の交響樂に親みを重ねる、——其親みのうちに美の觀念が培はれ、美術に對する愛を知り、其要領を會得し、やがて常住に觀る事のよろこびを有つた潤ひある生活が惠まれる。そして彼れらの環境に充滿するあらゆる造形的物件、文房具とか什器とか、家具とか、書籍とか、着物とか、建築とか、市街とか公園とか、身振りとか、顔とか、畫とか、劇とか云つたものゝ美術的價値を鑑賞し批評し、享樂する、し——さうした藝術的涵養と功利を別にして何か他に圖畫教育の意味があるとするとそれは一體なんだらう?。

物理、數學、國語、音樂、倫理、それらすべての文化價値をなす學問は、小學生と專門家を貫く一線の眞理の上に置かれてある。小學生の理科と專門家の理科とは全々別のものではない筈だ、たゞ深淺廣狹の差があるにすぎない。獨り圖畫教育が何故、美術家の信念する處と軌を異にされねばならないのか。圖畫教育が美術教育でなかつたら、何處に美術教育がある、あくまで藝術教育を欲さないとならば、人類全體が具有する裝飾の智慧の捨て場所を考へてもらはねばならぬ。

×

少壯氣鋭な圖畫教育の當務者に望む處は、まづ使命觀を明瞭にして然る後方針を建て次いで勇敢に實驗せらるゝ事である、使命觀がはつきり極つたとする、——圖畫教育はまさに「美術教育の一科である」と信念せられたとする、其

時、多分諸君は自由畫敎育說の適切を悟らるゝであらう。少くとも從來の如き啓蒙的示範敎育から一轉進せらるゝのと思惟せらるゝであらう。然らば一轉進せらるべきではないか、——如何なる思想も十全ではない、唯十全を目ざす思想がある。悟性はちやんとそれを嗅ぎわけて居る筈だ。悟性に從つて、諸君が生徒に臨まれた時に、生徒は諸君を忽ち議論のを外へつれてゆくであらう。此處に、私は少し、ホルムスの自由敎から抜萃する（杏村氏の譯を拜借した）

英國の一女性、校長エゲリアは、子供の性質の絕對的信用の上にたつて敎育した——ホルムスが叙述した其圖畫敎育の一例である。

『十年か十二年許り前に、圖畫は英國のすべての小學校で敎へられなければならぬといふ命令がホワイトホールから發せられた。エゲリヤは直ぐに兒童を信賴して次のやうに言つたのである。

「皆さんはこれから圖畫のお稽古をするのです。皆さんはどうして畫くのか其仕方も知りません。先先もどうして描いてよいかそれを知らないのです。ですがまあ、私達皆なして畫いて見て、どんな物が出來上るかやつて見ませうね。」

數年後に、視學が此學校を訪問したが、此人は大變熱心な豫言者として、又說明者、敎師として圖畫敎育の改革を提唱したので、全國を擧げて大變の影響を受けた人である。其人の訪問記が此處にあるからそれを抜き出して見よう。

「此學校の圖畫敎育は私の從來見た小學校の中では、其最高の敎育的レヴエルに達したものであり、其出來上りは全く子供自身の考への純粹なる表現である。單調な臨畫帖はすつかり使用しない。子供はみんな自分自身のテクニツクを持ち、校長さんは其れに何の干渉もしない。思想の發達は技巧の發達を伴ひ、其れは明かに子供の圖畫に現れて居た。其れはよい形と比例、光線と陰影とに關する或知識、デリケエトな上品な色の知覺、及び透視法的のむづかしい事にまで立ち入る不思議な力を示して居たのである。中心的法則は自己努力〔Self-effort〕といふ事であり、信賴と自己依賴とが其れに續いて來る。子供の自發的活動性は正當に認められ、何を描き、如何に描き、又其れを描く材料は何といふ事

は、子供の決定する處である。其學校に居ると、臆病とか、間違ひをする事の恐ろしい恐怖とか、我が國の多くの子供の心と身體とを痲痺させて居る其等のもの丶姿はどうしたつて見られない事である。校長さんのお蔭で子供達は鋭い批評家になる。校長さんの方法は余が長い間支持して居た意見と全く精確に一致する處で、彼女自身の言葉でいふと次の樣になる。

「私は皆んなの子供に菖蒲の葉を渡して次の樣に申しました。「さあ此れをよく御覽なさい。」私達は其れをずつと眺めて居て其れの特質を話し合ました。そして私は子供に其れを畫く樣に言つて出來たものを又原物と一々對照させました。それから、私は子供達の圖畫を檢査して行きました。勿論其大部分に間違ひがあります。此ういふ場合にも私は「さあ皆さんはいけないのです、此うして畫きなさい」と申して、黑板の方を向かせるなどといふ事を致しません。私は申します「どの部分とどの部分とが葉と同じでせうか、どの點が違つて居ませうか、どう直したらよいでせうか」。など丶申すのです。私は子供達に其間違ひを話させます。黑板描きなどはすつかりやりません」

子供達の仕事を見て居ると、明かに子供達は描く事を敎へられなかつた許りでは無く、其の圖畫を愛し悅んで居るのである。形と色とは單に見らる丶といふのでは無くて、理解せられ、又感じられるのである。子供達は眞理に達し其れを表現する事の拒む事の出來ない慾望を持ち、此うして敎育的行動の常に動きつ丶ある途を進みつ丶あるのである。」

云々。

×

お手本から解放されると、たいていの子供は、彼れらのリアールの上に、感覺も認識も技巧も驚く可き發育を見せるも

のだ。それが中學生から成人へと限りなく生長するならばすばらしいわけであるがさうはゆかない。現在の社會生活はさやうな智能を萎縮させるやうに出來ては居るし、天性で、喰ふ事の他に樂みを有たなくなる者も出來るから。――それにしても、たとへ小學時代四五年だけでも、自然を直接に觀る事は決して無駄にはならないだらうじやないか。「お手本を臨模する事も模寫なら、自然を寫生する事も又模寫である」などといふ人がたま〳〵あるが、それは大違ひだ。なぜならば、モチイブを『自然』に得て、作つたものは、他人のリアールではなくて其人のリアールであり、他人が美と感じたものよりプロダクシヨンではなくて、彼れが美と感じた其物だからである。

「若し繪手本が美であるならば模寫したつていゝではないか」と、云ふ人がある、勿論繪畫史の上には、立派な畫、ずいぶん指摘する事が出來る。それらの畫を模寫して惡いとは云はない。ゴツホがドラクロアの畫や、ミレーの畫を模寫したものは有名である。併し、ゴツホのそれらの模寫（コツピイ）は、筆技の追從ではない、ゴツホ獨特な、ツーシユで變へられて居る。とは云へ、其モチイブは、其自然觀は、ドラクロアのものでありミレーのものなんだ。――だから若し、ゴツホの大部分のタブローがさやうな模寫であつたとしたら、彼れはつまらない美術家だらう。處で、小中學の生徒に名畫を與へて、單に技巧の追從でない模寫、卽ちゴツホと『種蒔き』の關係のやうなものが出來ると思へるか?。私は屢々質問に答へて、「美術家教育には模寫が、時には必要ですらあり得る」と云つた其意は、專門家にあつては、彼れ等の先輩が目と心と智慧で組織したそれ等の美を、已れのリアールと相對して認識する事も出來、隨つてそれを技巧の末々にまでほどいて洞察する事も出來るからなんだ。――子供に臨本を與へれば、唯眞似をする。なぜならお手本といふものは、皆技巧的に簡約されて居るから其の線や筆致を追從するより路はないからである。――したが、一體、現在あるやうな、又あり得るやうな描いたお手本に一體美があらうか。――美はお手本のために作つた畫には無い筈である。

さて、美術教育其事に就て云ふべき段とはなつたが、今更、美術教育が何故必要であるかを縷說するでもあるまい。とにかく、小中學に美術敎育の無いのは間違つて居る、圖畫、手工敎育がそれに當るならば、其目的觀、方針、處理法等が、藝術論によつて解決されずに居るのは間違つて居る。歐羅巴は學校、家庭、社會を通じて美術敎育の機關も豐富であるが、露西亞のやうな國でさへ、モスクワにアレクサンドル三世美術館のやうなものがあつて、美術史上の重要な資料を、大なるは、パルテノン大理石柱から、小なるはエヂフトの碧磁像に至るまで、複製して、彫刻、繪畫、工藝術の各部門を設け、學生等のために美術史の臨物敎育に供へて居るのであるが、吾々の環境には一體何がある。大東京にさへ一個の美術館すらない有様で、モスクワの敎育美術館の如きは思ひもよらない處だ。米國のやうな半野蠻國でさへ近來は中等學校の課業の三割は藝術敎育になつて居るといふではないか。然るに日本はどうだ。圖畫、手工、の敎習をすら美術敎育となすを肯ぜず、かんじんな其道の敎師までが美や美術に就ての學問を生徒に與へる事をいやがるのだから、開いた口が塞がらない次第だ。尤もいやがるのに理由はある。なぜならば、彼れらは、たいてい、師範學校で、敎授法とか、敎材の撰擇排列とか、敎科書の研究とか、敎場の處理法とかいつた、敎務上の知識は仕入れてあつても、それ等の事を綜合し分解しそして整理する哲學的な力、卽ち美及美術に就てのまとまつた觀念は有つて居ないからだ。——刺繡の先生が圖案を作れない、作れないのを當り前だと心得て居る。其處で、生徒にも繡ひ方だけを敎へる。生徒も、圖案は米屋から買つてくるか、畫家に授けてもらうものときめ込んぢまう。そして裝飾的な智能を行使する樂みを知らずに一生を終つちまう——今、小中學の生徒も敎師も槪ねこれと同じやうな因果に置かれてある。それでも近頃の中學生

はだいゞ美術に對する sense を有つやうになつては來た。併しそれは、學校以外の雜多な機關、展覽會とか、繪葉書とか、雜誌とか、新聞とか、いふものから發はれるものであつて、さういふ教材に指導された當然の結果として彼れ等の嗜好は小賢いジャーナリズムだ。例へば繪の具の名は知つて居ても色に就ての愛は知らない類だ。彼れ等は自然に就ては何にも知つて居ない、たまに彼れ等のパージニチイが「おゝ、美しい」と目を覺す事はあつても、悲しいかな彼れらの美に對する理性は唖者だ。美しい意味を何にも話してはくれない。それでもいゝ、彼れらが常住、いろ／＼なものに「おゝ美しい」と思ふならば、觀る事のよろこびを識るならば。——けれどもそれは出來ない相談だ、彼れらのお父さんもお母さんも先生も、さういふ『小兒の純朴』を一向悦んではくれないから。

×

文部省に要求したい事は、小中學に於ける美術教育の設定だ。美術教育といふよりも、作文、音樂をも包攝する藝術教育の編成だ。凡そ、造形的物作には、二つの價値がある、一とつは美術的價値、一とつは經濟的價値だ。云ふまでもなく美術的價値とは、形態、權衡、面、色價、等で表現された綜合的もしくは部分的な美の價値であり、經濟的價値とは、堅牢、便宜、廉價等を意味する實用上の價値である、處で、小中學では何れの價値に關する學問を與ふべきかと問はれて、それは堅牢、便宜、廉價に關する理解を授くべきであると答へる者は、まさかなからう。それは、職業教育の一科目であつて、一般人が知らねばならぬ知識ではない、一般人が知らなければならないのは、吾々の社會生活に繞く可く多種目饒多になつて居る造形的物作の『味ひ』に就ての學問であつて、それは、藝術家、藝術、藝術心の立場から、理解され、價量さる可きものである。

藝術は藝術家に求むべきであらう、併し藝術心は、私は是れを同胞の全體に求めやうとする。何となれば、藝術心とは、人類本具の智慧であつて、それこそ人間のあらゆる生活に脈絡する靈活なるエネルギイであると信ずるからである。私は其エネルギイに就て曾つてこういつた。

「藝術心は、美しい指輪も作るし tableau も作るが、同じ心で建築をも市街をも、國家をも、時代をも、更に人類全體をも立派なものにしやうと企てる。其本來の性質は、微妙な分裂を圖ると共に、時あつて力の雄大な綜合を示顯する。――藝術心を恃まない他の分裂と綜合とは、屢に慘憺たる犧牲者をいださねばおかない、而も、慘雨の過ぎ去つた跡の世に、何ものも遺らない。」まことに、私は吾が國の現狀が、藝術心に對する一般的な敎養をまるで無視して居る事を痛嘆せずには居られない。

×

如何なる美術敎育を施すべきやは、蓋し、興味ある論題である。例へば其處に、美術の遠い傳統を尋ねて、民族性とか、國民性とかいふものを豫期しつゝ立論するならば、當然、嚴しい軌範を以て臨む美術敎育でなければならないし、又、さういふ鄕土色、時代色は、智術を以て圖るべきものでない、靈妙必然な價値であらねばならぬと思惟して、ひたすら兒童の無碍な開眼を希ひ、時代と鄕土とを超越した『人間』の美術を念じて、單だ、充實へ導くのを敎化の誠と信ずる者は、むろん無軌範を以て美術敎育を行はうとするであらう。而して、私は卽ち後者の一人であつて、述べ來たつたやうな信條で自由畫敎育を提唱して居るのである。

自由畫敎育はリアリズムに建つて居る。繪畫史上のリアリズムではなく、たゞ、各々の眼で見よ、各々の靈で觀よ

各々の意味で統べよ、といふ哲學的なリアリズムだ。それだから、私はまづ第一番に、お手本を否定し、モチイプを無際限に廣くしたのである。モチイプまでも兒童に勝手に撰ばせるといふ事は云範教育に慣れた教師にとつて最も不服な點であつた。彼れ等はそれでは大人の老婆心の使ひ道がなくなると云つて險しい顔を見せた。處がモチイプの攫みぶりにまづ其人の價値が量られるものだ。人文の推移は、觀念の變遷よりも、モチイプの變化を最も鮮かに語つて居る。

例へば、大昔、太陽が人間に禮讃された。人間は其處で神話をつくり、彫刻家が擬人法であの廣大な明るさを讃美した。――十九世紀になつた、太陽はやはり人間に讃美された。人間は、あの廣大な光に醉つて居る石造りの寺院を描き、草原を描き、海や岩を描いた。

モチイプは西洋美術史の上にも實に面白く變轉してゆく。大昔から中世紀へかけて、人間は敬神の念に支配され、英雄崇拜の感情に充ちて居た、美術家は其處に仕事を見つけ、美しいモザイクや、清楚なフレスコや、立派なマーブルや、銅や、陶土や、木でもつて、澤山に神話や耶蘇の奇蹟や、英雄の事蹟や、宮廷の儀禮や、さま〳〵な傳説などをモチイプにして彼れらの藝術慾を充した。それ等の仕事のうちに彼れらの自然物に對する認識はだん〳〵發達して行つて、衣服の皺がなかなる軀幹を示すやうになり、體が筋肉で組織されるやうになり、權衡、立體觀、風景なども表現されはじめた。併しそれ等のリアールは主題に奉仕するもので、未だモチイプ其ものではなかつた。

處が十九世紀になると、それがモチイプ其ものになりはじめた。人間は身邊の現實を殆ど細大洩さず材料にした。曰く、湖水、牧場、市街、池、波濤、空、黒い衣物の女、赤いショールの娘、犬、豚、鷄、小便をして居る小兒、水浴せる娘、化粧室の舞妓、相撲、醉ぱらひ、コップ、林檎、椅子、布、光線、空氣、なんといふ田園、市井のあらゆるリアールがタブローの主格になつて、彼れ等の藝術慾を充したのである、それらの仕事のうちに、彼れらの感覺はだん〳〵精

になり、其うちでも色價に就ての味覺は驚くべき深さに達して、彼れらのある者は、現實な形象を超脱した、線、色、調子、胸の交響中に新奇な美を嗅ぎつけた。併し、其新奇な美は、むろんまだモチイブそのものではなかつた。

處が、間もなくそれがモチイブ其ものになりはじめた。未來派の製作がそれである。人間のそくばくが其處に、長い間美術のモチイブであつた『自然美』をすて、彼れ等の Vision 及び理論をモチイブにして彼れらの嗜好に溺して居るのである。

×

私は、これ等、モチイブのどれが最も藝術的であるとも云はない。併し、自然美の無垢な使徒たらん事を希ふ私は、吾が兒童らが此立派なる『自然』に直接して、暢び／＼と美の愛を啓發されん事をこれ祈るのである。

『私は美に對する偏見となる事を悲しむ。例へば、印象に溺れて偏見となり、爲に、昔、レオナールドが「美しい物は常に正しい物だとは言へない」と訓へた、その嚴然たる實在性の立派さを忘れる事を惧れる。又、認識に僻して偏見となり、爲に「自然は鳥の如し」と歎ぜしめた現象の美しさを忘れる事を惧れる。

×

私は小學校の美術教育に、繪畫と彫塑とを課したい。そして鳩、兎、栗鼠、猿といつたやうなものを彫塑のモデルとして與へたい。繪にしろ彫塑にしろ必ず寫生が良いとは限らないが、併しモチイブを親しく見る事は肝要である、小學生に、さやうな動くモデルはむずかしすぎるだらうなどと思はないがいゝ、むづかしさは、實は茄子や胡瓜も同じなのである。

さういふ配慮よりは、子供らにとつて、興味多かるべき材料を撰ぶ事を心配すべきではないか。

中學には、男女共に、美術史大要と、美術雜話とを課し度い。美術史大要では、人文的推移に伴ふ、主題と表現の變遷などを說き、(勿論東西の史實を)如何なる時代があり、如何なる畫派があるかを知らしめる。美術雜話では、各時代の有名な畫家の生活とか、其藝術論とかいふものを分り易く摘要して聞かせる。又工藝美術や、印刷美術(例へば創作版畫と複製版畫の別とか、各版種の特色と其用途とかいつた事)のお話をする。又時には、其折々の展覽會の所見などに就て語るのであるが、そんな博識を中學教師に望むのは無理だとは云はない事だ。師範學校の五年間にでも、美術學校師範科の三年間?にでも此位の事は準備出來ねばうそなんだ。それにさういふ資料を採錄した教師用書が出來れば、更に困難はないわけである。

手工科は小中學共に課し度い。今日のやうな馬鹿氣たものでなく、もつと質材の智識も其つき、裝飾の智識をも啓發する方法をとつてもらはねばならぬ。但し私は繪畫も彫塑も手工も、實技はすべて隨意科でいゝと思ふ。たゞ美術史と美術雜話は必ず聽かせておき度いのである。なぜならば實技は學校以外の時間でもやれるだらう。講話は、それによつて廣く美術の關係的知識にさそつてゆけるものであるからである。

×

併しこういふ注文を出すと、まづ、第一時間がないと云ふかも知れない、けれども、一週に一時間として小中學を通して四百五十餘時間あるとすれば、決して不足はないやうに考へられる。でも、設備其他の費用はどうすると云はれると、此點は私には答へられない。

全體、費用の點はとにかくとして、現在のやうな兵營式大建築に營まれる教練では、かれこれの注文は教師がお斷りだらう。

「學校は單に學ぶべき兒童の便宜のためばかりでなく、教師も愉快に教へる事が出來るやうに建てられねばならぬ」とトルストイが注意したが、まつたくだ。今日のやうに一人の教師が三十人から四五十人の生徒を受持たなければならないやうでは、とんと流行醫が患者に冷淡になるやうに、各生徒の特質などに興味を有つて、日々の教導を樂しむ事などは思ひもよらないかも知れない。

小學校はせめて一村に八つか十もあるやうにならなければうそだ。エリオットとかいふ人は、十人十四五人一と組の教場にならなければ駄目だ、といつて居るが、さうするには現在の數倍教師を增加しなければならないから、つまり出來ない相談で、米國あたりでも從來の步率でゆくと、其處まで達するには一千年かゝるといふから、殆ど夢物語であるが、併し、たとへ一千年が一萬年でも、良いときまつた事なら、それを目安に一本道を押し進むでゆくべきである。而も必ずしも一千年かゝらずに實現しまいものでもない。夢物語りと思つて居た事が、すぐ目の前に現れて來た例はずいぶんある事で、殊に此の頃の世の中はさういふ驚異が頗る多いのであるから。

×

私は、なほ多くの語る可き事をのこして、此處で切り上げなければならない。美術教育の事は學校のみに注文すべきでなく、家庭、社會のあらゆる機關にむかつて望まねばならぬ事で、特に、地方のたいていの學校長が、日本の現代美術の標準と心得へ、樂みにしてはる〳〵見物にゆく帝展の開催も間近の事であるから、政府の社會的美術教育に對す

る責任も問ふて見やうと思つて居たし、文化が著しく民衆的にならうとするにつれて印刷美術が漸次新領土を開拓し來り、各種の專門的な版畫家の出現をしきりに待たるゝ此頃、美術學校に版畫科を設置する事を、案を具して要求して見やうとも思つて居たが、もはや時がないから次の機會にゆずらねばならぬ。（十年九月廿日）

欺瞞か誤謬か

團體交渉權と工場委員會とを混同せる我勞働爭議の現狀

林　癸未夫

勞働者操縱の達人を以て任ずる工場經營者も、勞働運動に對しては十分の理解を有するつもりの一部の智識階級も、今夏の爭議に關して發表した彼等の言論文章によつて、遺憾なく其無識無理解を暴露してしまつた。而して吾等をして日本の社會運動の現狀に對し、既に幾分か發せざるを得なかつた所の嘆聲を、更に又今夏の阪神勞働爭議に際して繰返さゞるを得ざらしめたのであつた。

團體交渉權と工場委員會との混同——理論上の性質も、實際上の作用も全然相違してゐる此二つのものを同一視して、其爭務に火花を散らしたといふことが、實に今回の勞働爭議の根本に横つてゐた所の欺瞞若くは誤謬であつた。私の確信する所によれば、工場委員會の設置は斷じて團體交渉權の承認を意味するものではない。工場委員會なるものは其本來の性質上、決して團體交渉の機關たり得ないものである。然るに今夏の爭議に

一　「今昔物語」中の勇士

一切が欺瞞か、然らずんば誤謬であつた。今夏の阪神勞働爭議に於ては、其當事者たる勞働者も、工場主も、第三者として之を觀察し或は批評した政黨員も、操觚者も始めから爭議の性質を曲解或は誤解してゐた。勞働者等は何を求めやうとしてゐるのであるか、工場主は何を拒まうとしてゐるのであるか、第三者は何が是認さるべきであるのか若くは否認せらるべきであるのかを何れも自ら知らなかつたのである。斯くの如き誤謬が若し何人かによつて故意に造られたものとするなれば、それは疑ひもなく欺瞞である。斯くの如き欺瞞が若し何人にも無意識に行はれたものとするならば、それは明かに誤謬である。凡そこれ位不思議な爭議は滅多に有り得ない。憐むべく悲しむべき現實の暴露であつた。爭議の渦中に在つた罷業團の指導者も、

於ては、勞働者側は工場委員會を設けらるゝことは團體交渉權を承認せらるゝことであるとして之を喜び、工場主側は工場委員會を設けることは團體交渉權を容認することであるとして之を拒み、世上の識者も亦此兩者を混同して擅に是非の論を鬪はし、或は資本家の橫暴を咎めたり、或は罷業團の非望を難じたりした。遂に滑稽千萬と言はなくてはならない。彼等は宛ら己の影法師と戰つた『今昔物語』中の勇士であつたのである。

二　團體交渉權とは何ぞや

團體交渉なるものゝ經濟的及法律的意義に關する私の研究は、別に詳述して世に問うたからして、玆に之を繰返すことを避けたい。(太陽九月號參照を乞ふ)只玆に必要なる結論のみを要約するならば斯うである。

今日世上普通に用ゐらるゝ團體交渉なる語は、未だ學問上の用語として一般の學者に採用されてゐない。併し大體に於てそれは獨逸語のタリフフェルトラーグ、佛語のコンヴンション・コレクチーフ・ド・トラパイユ、英語のコレクチーヴ・バーゲニング又はコレクチーヴ・アグリーメントに相當する語であるとは爭はれない。日本では福田博士は勞働協約、關博士は集合協約と言つてゐられるが、團體交渉なる語を創始されたのは、私の知つてゐる限りに於ては、[illegible]博士である。昨年來此語が世間に流布して殆ど確定用語と看做さるゝに至つたから、今後は此語を學問上にも一般的に使用するのが適當であらうと思ふ。

團體交渉なる言葉の含蓄する意味に就ては、學者の見解に多少の相違がある。獨逸の學者は最も狹義に之を解するのであつて、「傭主の團體と被傭者との團體とが、將來締結さるべき個々の雇傭契約の內容をなすべき一般共通の雇傭條件に就き、豫め協議約定する」ものであると說明してゐる。日本に於ても福田博士の如き獨逸系統の學者は此說を祖述して居られる。此定義は科學的ではあるけれども、當事者が双方とも先づ團體組織を有してゐなければならぬといふ點と、交渉の目的が「將來の雇傭契約」に係るといふ點に於て少しく局限され過ぎてゐる憾みがある。英國の學者は團體交渉の當事者たる傭主は必ずしも團體であることを必要としない。個人であつても差支ないことを認めると同時に、被傭者も亦勞働組合を組織してゐることを必要としない、假令臨時の一集團であつても、雇傭條件に就き一致して代表者を選出し傭主と折衝せしめるならば、それが直に團體交渉と名づくべきものであると主張してゐる。即ち最も廣義に此語を解するものである。次に米國の學者間は交渉の當事者たる傭主は個人であつても、團體であつても差支ないが、被傭

者は必ず勞働組合として團結してゐなければ、團體交渉は成立ち得ないと說くのであつて、正に英獨の中間に立つものと言ふべきである。佛蘭西の學者の見解に就ては、私は寡聞にして未だ之を聽かないが、一九一九年の三月に制定された團體交渉公認の法律に依ると「勞働團體の代表者と、傭主團體の代表者又は一傭主との間に雇傭條件に關する團體的勞働協約を締結することを得」といふ一條項があるからして、大體米國の學說と一致して居るものと推察することが出來る。

右の如く團體交渉の意義に就ては學說に多少の相違があるけれども、何れの說にも共通の、動かすべからざる要素と認むべき點は、團體交渉の一方の當事者は必ず勞働者（或は被傭者）の團體であつて、其代表者は嚴に當該團體の所屬員から選出せられ、團體員の利害を代表して、傭主と雇傭條件の協定に當り、依つて以て成立した所の協約事項は、傭主及勞働團體双方が必ず之を遵守するの義務（それが單に道德的の義務であるとしても）を發生するものでなくてはならないといふ事である。かくてこそ勞働者は從前の如く個々別々の雇傭契約から當然結果する所の自己の不利益から免かれ、傭主と經濟的に平等の地位に立つて、雇傭條件の決定に與ることが出來るのである。畢竟團體交渉の基礎觀念は、從來の法律學者に金科玉條視されてゐた契約自由の原則が、今日の産業組織の下に在つては實質上傭主と被傭者との間に公平に適用されてゐないといふ一大缺陷を塡充せんがために、個人的雇傭契約に換ふるに團體的雇傭契約を以せんとするものに外ならぬのである。而して團體交渉は雇傭契約の締結若くは更改に至るまでの手續として、被傭者が其代表者を選出し、各自に代つて契約の內容條件に就き傭主と交渉せしむる行爲を意味するのである。此場合交渉委員たる代表者が被傭者總體から一々委任狀でも徵するならば完全に代理權を有つことになるけれども、さうするには印鑑證明書も添付しなければならぬとか、未成年者であれば親權者の同意を要するとか、いろ／＼な面倒が附隨して、到底一般の勞働者間には實行が困難である。そこで勢ひ被傭者が一個の團體に結合し、其團體から選擧された代表者が責任を負うて交渉の任に當るといふ方法に出づることが最も便宜である。而して此團體は組合ならざる臨時的の集團であつても理論上差支ない筈であるけれども、傭主と被傭者との交渉は種々なる問題に就き斷えず起るのであるからして、團體其者も臨時的であるよりは恒久的な勞働組合である方が、何かにつけて便宜でもあり又有利でもある。此故に團體交渉は學說は兎も角も、事實上に於ては何れの國に於ても勞働組合の幹部と傭主若くは其の代表者との間に行

てゐるのであつて、特に或問題に就き組合幹部以外に別個の交涉委員を選んで傭主に折衝せしめるといふやうな例は殆どないと言つて可い。何となれば組合幹部の最も重要な任務は、組合員の利益を代表して之を擁護伸張するといふ事の外にはない筈であるから。

團體交涉の眞義は上述の通りであつて、此眞義に悖る一切の制度は、其名は如何に美しくとも團體交涉であり得ないことを記憶して置かなければならぬ。

三　工場委員會とは何ぞや

工場委員會も亦舶來品である。從つて其性質を明かにするためには先づ外國の例を調べて懸らなければならぬ。

堀江歸一博士は工場委員會制度は一九一七年の英國のホヰツトレー報告を起源とするものであると說かれたが（九月七日東京日日新聞）之は甚しい誤謬である。その誤謬たることを立證すべき資料は澤山あるが、就中最も權威あるものを擧げるならば、一九一八年三月に英國の勞働省から公表された『工場委員會調査報告』である。同報告は其所に記してゐる通り、工場委員會の「實施に際し試みられたる各種の目的、作用、手續及組織を明にせんがため、現存せる主要なる産業に於ける典型的の委員會を注意深く研究し」たる結果、政府から發表せられたものである。而して同報告本文の冒頭に曰く、

戰前に於ける工場委員會存在の範圍は主として此定義の如何に據る。此範圍に關する吾等の觀測は此語（工場委員會（ウオークスコンミツチー））に廣義の解釋を附するか、將一事業所に於ける職工全部を代表する委員に限るかに依つて相異するものである。後の意味に於ける工場委員會は戰前諸種の産業に存在し、且若干の例に在りては多年に亙り存續してゐた。が若し此語を廣義に解釋し、あらゆる種類の委員會を含むものとするならば（例へば個々の職業（トレード）或は部局（デパートメント）を代表するもの、若くは特定の期間、限られたる目的のため設置せられたるもの等）戰前に於ける委員會の存在數は夥しく增加することになる。尤も或種の産業就中機械工業に於ては、戰時の狀態に依り工場組織の形式及作用共に變化を生じたるため、工場委員會の一般的觀念に就ての論議は是等の狀態から進展し來つたものと言ふとが出來るかも知れぬ。併しながら全體としての工場委員會は、工場內に於ける勞働組合組織の普通の手段として發生したものであつて、戰爭開始前久しきに亙つて存在してゐたものである。云々

これに依つて見ても、英國の工場委員會が戰爭後半期に組織

されたホヰツトレー委員會の案出に係るものではなくて、同委員會は單に既存の工場委員會の効果を認めて、これを産業協議會の附屬機關たらしむることを推奨したに止まることが判るであらう。堀江博士の論法に從へば、一九〇九年の「トレード・ボード條例」によつて設置することゝなつた最低賃金協定機關すら其起源をホヰツトレー報告に發するとも言ひ得ることになる。何となれば同報告は組合組織の不完全な産業に對して切りにトレード・ボート設置の要を說いてゐるからである。私の信ずる所では本來ホヰツトレー報告なるものは、それが著名である程、内容に格別のオリヂナリチーを有するものではない。同報告の眼目ともいふべき全國聯合産業協議會の提唱すら、併は其以前から行はれてゐた鐵道、炭坑、製鐵等の團體交涉方法を一般の産業に擴充しやうとしたものに過ぎない。私はホヰツトレー報告が以て英國産業界に及ぼしつゝある多少の効果は之を認識するに躊躇しないけれども、同報告はあらゆる意味に於て「起源」をなすものでないことを高唱しておきたいと思ふ。

勞働問題に就てはすべての點に於て英國に遅れてゐる米國に於てすら、多數の工場委員會が一九一七年のホヰツトレー報告出現以前に設置されてゐたことは、本誌前號の拙稿『産業民主主義への次の一歩』中に詳說した通りである。

現今世界の主要産業國中、比較的工場委員會制度の普及してゐる國は英米獨の三國である。併し是等三國の工場委員會は各特獨の沿革、組織、機能を有つてゐるから、今簡單に之を分說しやう。

獨逸の工場委員會はベトリーブスラートと云ひ、昨年一月制定された法律に依り、常時俸給者並に勞働者二十人以上を使役してゐる全國各種の鑛山工場では、必ず强制的に之を設置しなければならぬことになつてゐる。委員の數は被傭者數の多寡に應じ三名以上三十名以下で、俸給者、勞働者の數に按分し、各別に選擧される。選擧權は年齡十八歲以上の者には男女の差別なく一樣に與へられるが、被選擧權には年齡二十四歲以上たること、三ケ年以上同一職業に從事したること、現在の工場に六ケ月以上勤續したること等の制限が設けられてゐる。委員會は雇傭條件に就き傭主と協定する權限を與へられてゐるが、其條件の内容に就ては豫め所屬の勞働組合と協議を遂げ、步調を一つにしなければならぬことになつてゐる。これを言換へると委員會は勞働組合と工場主との間に成立した團體交涉の協定事項の範圍内に於てのみ、協議決定することを許されるのである。乃ち團體交涉機關としての同委員會は完全な自主權を有してゐないと言へるのである。併し一面に於て同委員會の稍大なる

のは、傭主に對し事業上の景況に就き詳細なる說明を求むることを許されてゐるのみならず、俸給者五十人以上、勞働者三百人以上を使役してゐる工場に在つては、傭主は每營業年度の損益計算表及貸借對照表を委員に示して其內容を說明すべき義務を課せられてゐるから、委員會は間接に營業上の監督權を法律に依つて賦與せられてゐると見られるのである。獨逸の工場委員會制度の特色は實に玆に在ると言つて可い。

次に英國の工場委員會は通常ウォークス・コンミッチーと呼ばるゝものであつて、獨逸の如く法律に依り設置せられるのでなく、任意的に發達したものである。前述の如く戰前から存在してゐたものではあるが、一九一七年のホキットレー報告が聯合產業協議會、地方產業協議會と共に工場委員會の設置を勸奬したので、一層本制度の普及を早めたことは疑ひない。併し元來が各工場主と被傭者との任意の協定に依つて設置されるものであるから、委員の員數や共選擧權、被選擧權等にも何等の制限が在るわけではなく、極めて不統一な狀態に在る。而して英國では勞働組合は何れも殆ど完全なる團體交涉權を有し、或は全國的に或は地方的に、多數の工場に一般的に實施さるべき雇傭條件を、傭主團體の代表者と勞働組合の幹部との間で協定することになつてゐるから、各工場の委員會は雇傭條件に關する團體交涉權を行使すべき資格を有しないで、單に組合幹部に依つて定められたる雇傭條件を實施するに必要な細目を工場主と協定するに止まつてゐる。併し雇傭條件以外の工場內特有の問題に就き被傭者を代表して協議決定の權能を有することは勿論である。但獨逸に於けるが如く事業經營の內容に觸れることは未だ許されてない。

米國の工場委員會はショップ・コンミッチーの名を以て知らるゝ。勞働省發表の文書にエンプロヰー・レプレゼンテーションと記してあるものも亦本制度を意味する。米國の委員會制度は獨逸の如く法律に依つて强制されるのでなくして、任意的に發達した點に於ては英國と同樣であるが、戰時中政府の管理の下に在つた造船所並に諸種の軍需品工場では、政府の命令又は勸告に依り本制度を採用したものが尠くなかつた。戰後に於ても著名の大工場にして進んで本制度を實施したものが澤山ある。一九一九年八月現在の米國工場委員會施行工場は二百二十五であるが、其內政府の命令又は勸告に依り設置せられたもの百二十、傭主自身の發意に基くもの百五であつて、被傭者の要求に出たものは絕無であつたことは特に注意を要する。

米國に於ける工場委員會制度は各工場に都合の好いやうに任意に造られたものであるから、其組織は種々雜多で、委員の員

數、選擧被選擧資格に對する制限、委員討議の權限、議事の方法等、各相違があつて更に歸一する所を知らない。唯其最も多數に共通の點を擧ぐるならば、第一に米國の委員會の大部分は被傭者の選擧に係る彼等の代表者と、及之と同數なる工場主指名の職員とから成立してゐる。これが被傭者の代表者のみから成立つてゐる英獨二國のそれと先づ根本的に相違してゐる所である。第二に米國の委員會は雇傭條件の協議に當り、勞働組合に全然無關係の地位に立つてゐる。工場主は決して勞働組合の幹部を相手としない。又勞働組合に對して何等の權利も主張しなければ、何等の義務をも擔ふことを欲しない　全然勞働組合と無交渉である。これが又英獨のそれと著しく相違する所である。第三に米國の委員會は傭主被傭者双方の代表者から組織されるけれども、委員會自體は決定權を有しないで、唯其可決したる意見を工場主に提出することを許されるに止まり、之が採用して實行すると否とは工場主の自由意志に留保されてゐることである。(尤も規定の表面には此事を明示せずに默殺してあるものが多いが)して見ると委員會に於ける工場主の代表者と稱する者は、法理的に工場主の代理人として出席してゐるのではなくて、單に委員選出の一方法として工場主から指名された者に過ぎないことになるのである。これ米國の工場委員會が團體交渉機關

と認められてゐない所以である。

四　何故に工場委員會は團體交渉權を有たないか

私は先づ團體交渉權の何ものたるかを説明し、次に工場委員會の何ものたるかを説　した。これに依つて讀者は既に工場委員會が決して團體交渉權を有し得ないものであることを會得されたことゝ思ふが、尚私は念のために數言を添へて之を敷衍して置きたい。

獨逸式の委員會は本來の性質から言へば團體交渉權を賦與されてゐるのであるけれども、それは前に述べた通り勞働組合の團體交渉權に對し從屬的地位に置かれてゐる結果、事實に於て各工場委員は雇傭契約の基礎的條件に對して發言權を有しない。何となれば獨逸は戰後勞働組合員急速に增加し、其員數の多數なる點に於ても、結合の强固なる點に於ても、遙に先進たる英國の勞働組合を凌駕する勢を示してゐる。しかのみならず一九一八年十二月に發布された法令を以て、組合と傭主との團體交渉に依り協定された雇傭條件は、之を登記すると法律に同様の拘束力を生ずべきことに定められてゐるから、今や全國の勞働組合は完全な團體交渉權を掌し、工場委員の選擧に當つても

其候補者は組合本部から指名される有様であるから、工場委員會は全く組合の支配の下に在ると言つても過言でない。從つて委員會が組合から離れて團體交渉權を行使するやうなことに事實有り得ないことになつてゐるのである。

次に英國に於ても、雇傭條件に關する團體交渉權は全然勞働組合の掌中に在つて、工場員は與り知らない。尤も戰時中ショツプ・スチュアード運動なるものが起つて、一部の工場委員が組合幹部の制止を肯ぜず、勝手に雇傭條件を左右しやうと試みたことがあつたけれども、戰後此運動は全く屛息してしまつた。

米國の工場委員會は最初から勞働組合に對し獨立の立場に在るのであるから、英國に於けるが如く團體交渉權を組合幹部に掌握されて、委員會は唯其成を仰ぐといふやうな關係は存在しない。併しながら其の爲に米國の委員會自身が團體交渉權を與へられてゐるかといふに、斷じてさうでない。何となれば屢々說いた所の如く、米國の委員會は工場主の代理人と被傭者の代表者とが直接相面して雇傭條件を議定する機關ではなくして、工場主は別席に控へて直接委員會の決議に支配されない安全地帶に立籠つてゐるからである。法律的に言へば傭主は交渉の當事者でなくして第三者である。從つて傭主は委員會の決議が其意に叶へば勿論之を實施するが、意に叶はなければ「承り置く」だけでも可いし、「何れ考慮の上」で放つて置いても可いし、斷然之を拒絕しても亦差支ない。若し日本の一部の人が信じてゐるやうに、工場委員會が團體交渉權を有するものとするならば、其決議は傭主對被傭者の協約であつて、當然直に双方に實行的義務を生ぜしむるだけの約束力を有せなければならない筈である。然るに數百を以て算する米國現在の工場委員會中斯くの如く約束力を有してゐるものは唯の一つもないのである。而して米國の工場委員會を模倣して造られた日本の工場委員會が亦同様であることは言ふまでもない。

右の私の意見を補足するために、私は米國の一學者の說を茲に引用しやう。市俄古大學のポール・エチ・ダグラス氏が本年二月同大學から發刊せられた『經濟雜誌』に「工場委員會」と題する一論文を掲げてゐるが、其中に先づ工場委員會制度の缺點として左の六項を指摘してゐる。

(一)傭主の選擧干渉

多くの場合に於て傭主は委員の選擧を管理し又は左右する。尤も會則の上では何れの制度も傭主は選擧に關與してはならぬことになつてゐるけれども、事實に於ては急進思想を懷いてゐる者に多少の壓迫を加へ、成るべく工場主側に都合の好い者をばかりを選出することに努めるのが常である。

(二)附議事項の制限

委員會の附議事項は餘り重要でない事項に限られてゐるものが尠からずある。單に幸福增進の施設に關してのみ發言權を許されてゐるものも多い。賃金、時間、其他の雇傭條件に關する各自の不平を、工場の幹部に訴へることを許されてゐるものも若干あるには相違ないが、それとても工場全部の賃金制度に就き一般的に討議する權能を與へられてゐるのではない。

(三)議事に對する制肘

傭主被傭者双方の委員から成立つてゐる會議は、多くの場合傭主側によつて制肘せられる。

(四)決議の效力の薄弱

傭主被傭者双方の委員から成立つ會議でも、多くの場合に、其決議は決定力を有つてゐるのではなくて、其決議を實施するに先ち、工場の幹部の承認を得なければならぬことになつてゐるのである。此故に工場委員會は單に幹部に對して勸告をするに止まり、幹部がそれに不同意であれば、それ以上施すべき術はないのである。

(五)選擧權の制限

選擧權又は被選擧權に對し種々なる制限を設くる結果、被傭者の一部は除外されることになり、委員會なるものは被傭者の眞の代表機關とは言ひ難い。

(六)言論の不自由

委員たる勞働者は工場主から解傭又は壓迫されることを懼れて自分の信ずる所を强硬に主張し得ない場合が屢々ある。殆ど總ての委員會規則には、委員は完全に言論の自由を與へられ、其ために傭主から差別的待遇を與へられるやうなことは決して無いと規定してある。それにも拘はらず傭主は、會議の席上で急進的な意見を發表したり、抗爭的な態度を取つたりする委員を威壓しやうと試み、被傭者の熱心な味方に對しては一種の偏見を挾んで、いつしか自然に差別的待遇を敢へてするやうになるのである。よしんば傭主側に言論壓迫の意志が事實ない場合でも、被傭者側はさうは信じないで、自然に其の要求を差控へ、又は提示の方法を緩和することになり易い。何となれば彼等は餘り奔走したり詰問したりすると、傭主は必ず之を含んで、昇給の場合に手加減を加へたり、事業縮少の場合に眞先に馘首するかも知れぬと懸念するからである。

ダグラス氏は更に言葉を次いで斯う論じてゐる。「前述の如く、多數の工場委員會制度は稍多の大なる缺陷を有つてゐるけれども、斯ういふ缺陷を有たない工場委員會を想像することは十分出來得べきことである。遠き慮りある眞面目な傭主は、其

被傭者を公平に待遇するに熱心で且聰明でありさへすれば、如上の缺點の殆ど全部を取除くことが出來るに相違ないのである。併しながら、假令さうなつても、被傭者が工場の外部から彼等を後援する勢力なくして、克く其の自信を强硬に主張し得る程に、其半意識的な畏怖心から完全に蟬脫し得るか何うかは甚だ疑問とせざるを得ない。否進んで今一層仔細に工場委員會の現狀を調査するならば、假令前述の如き各種の缺陷を取除いた、模範的の工場委員會であつても、其本來の性質上到底勞働組合の如く團體交渉の機關として効力のあるものでないといふことが判明するであらう。從つて勞働者の立場からすれば、工場委員會は勞働組合の代理の役目を果し得るものではないのである。」

右のダグラス氏の意見は米國現在の工場委員會制度に對する批評であるが、日本の工場委員會に對しても其儘適切に當てはまることは勿論である。

工場委員會が團體交渉機關たり得ないといふ私の見解を最も明白に裏書してゐるものは、米國の勞働組合が擧つて工場委員會制度の反對者であるといふ事實である。戰後に於ける米國の組合運動の第一の目標となつてゐるのは團體交渉權の獲得である。昨年來米國言論界のやかましい問題となつてゐる「開放工場（クローズドショップ）か閉鎖工場（オープンショップ）か」の論爭も、畢竟各工場每に團體交渉權を認めさせやうとする勞働團體側の主張に對し、何處までも雇傭條件の決定權を確保しやうとする工場主側の抗爭に外ならない。組合組織の比較的發達した部分例へば紐育、市俄古を中心とした工業地方に在つては、既に團體交渉を樂んでゐる工場も尠くはない。就中裁縫、建築、印刷、電氣、交通、波止場荷役等に關する諸事業にはそれが多い。併し之を全般の上から見るならば、團體交渉の行はれてゐる事業は、地理的にも產業的にも極めて局限されてゐるのであつて、殊に鑛山、金屬、機械、造船、紡織、化學工業等の所謂基本產業（パーマネントインダストリー）に在つては、勞働團體必死の努力にも拘はらず、團體交渉權の行はれてゐる範圍は甚だ狹少であつて、之を英獨佛等に於ける全國的團體交渉に比較するならば、到底同日の論ではないのである。一昨年秋米國產業界に大波瀾を捲起したスチール・ストライキの如きも、畢竟米國勞働團體が團體交渉權獲得の目的を以てした一大攻勢に外ならなかつたのである。併しジャッジ・ゲーリーを元帥とする資本主義の防禦線は案外に堅牢で、流石のゴムパースやフオスターも惡戰苦鬪の結果、終に退却の憂目を見なければならなかつた。當時大統領ウヰルソンに依つて召集された首府の產業會議が結局團體交渉權否認の問題に行詰つて破裂に了つたことは周知の事實である。

ゴムパースを統領とする米國勞働聯合會の年次總會の如き

は、英國のトレード・ユニオン・コングレスと同樣、勞働組合年中行事の内最も花々しく宣傳的の氣勢を揚げるものではあるけれども、恰かも陸軍の特別大演習と同じやうに、謂はゞ一つのお祭りであつて、世間的に呼聲の高い程、實質的に有用な役目を果してゐないことは、所謂玄人筋の皆認めてゐる所である。況んや米國に於ける勞働運動の全國化（ナショナリゼーション）には種々なる事情から英獨のそれに比し非常に遲れてゐるがため、英獨の基礎的産業が全國的又は頗る廣い地域の上に團體交渉を實施してゐるやうな眞似は、如何にそれが米國勞働組合に取つて羨望に堪へないものであつても、到底近い將來に企及し難いものであることは、彼等自身も能く之を承知してゐる。從つて歐洲の勞働運動に比し一層空想的分子の少い米國の勞働組合は、一舉全國的の團體交渉權を獲得しやうといふやうな非望を放擲して、漸進的に、一工場、一會社を相手に少しづゝ團體交渉の範圍を押擴めて行かうとするのが、スチール・ストライキ慘敗以後に於ける彼等の一般方針となつてゐるのである。

此故に若し數年來米國の有力なる諸會社、諸工場が競ふて設置してゐる所の工場委員會なるものが、眞に團體交渉權の確認を意味するならば、勞働組合は之を歡迎こそすれ、之に反對すべき理由は毫もない筈である。米國の大工場は表面總て職工の組合加入の自由を認めてゐる。日本流に云へば横斷組合を承認してゐる。組合員たると然らざるとにより決して待遇に差別を設けないのが普遍的の方針となつてゐる。而して同時に是等の諸工場が工場委員會を通じて職工に團體交渉權を與へたとするならば彼等は正に勞働運動の一大勝利として之を祝福しなければならぬ道理ではないか。然るに事實に於ては彼等は絕對に工場委員會なるものを受付けない。工場委員會たるもの、斷じて團體交渉權の實のないものであつて、唯、狡猾なる工場主が組合運動の鋭鋒を挫かんとする一種の詭計に過ぎないとする。ゴムパースは曾つて斯う言つた。「余は米國勞働組合全體の名に於て所謂工場委員會制度なるものに反對する。それは組合の勢力を壓伏しやうとする傭主等の巧慧な策略に外ならない。若し彼等にして眞に其被傭者を産業上の協力者と認むるならば、何故勞働組合を相手として就業條件を協議することを欲せないのであるか。」と。米國現存の數百の工場委員會が悉く政府又は傭主側の發意に由つて設けられたもので、被傭者側の要求に出たものは絕無であるといふ事實から考へても、右のゴムパースの說は米國勞働者全體（少くとも運動に參加してゐる）の思想を表示するものと見て疑ひないのである。

以上說く所により、私は工場委員會なるものが、理論上から、

も又實際上にも、決して團體交渉權を所持するものでないことを明白にし得たと信ぞる。

五　住友の工場協議會

今回制定實施された住友の工場協議會なるものが全然米國式の工場委員會であることは、一讀して何人にも領解される明白な事實である。

この工場協議會の規則中には其主要な部分に餘りに工場主側の安全率を計算に入れ過ぎた結果としての、故意の曖昧と逋避とがあるやうに思はれる。併し私は今茲で左樣な細目を論ずるの必要はない。私は唯この協議會なるものが米國式の工場委員會たるが故に、全然團體交渉權を有たないものであることを重ねて斷定して置けば足りる。若しそれを疑ふ人があるならば該規則の第二條を精讀玩味せらるべきである。曰く

工場協議會は本所事業の進歩發展を圖り職工の幸福增進に資せんが爲隔意なき意見を以て本所の諮問又は委員の提案を調査審議し其決議を本所に提出するものとす

同時に讀者は委員の半數が工場主の指名する工場の傭員であり、其議長も亦同樣であることを記憶しなければならぬ。斯くの如き機關が理論上到底團體交渉權を有ち得ないことは前節に詳述した通りであるから、之を繰返すは無用である。

然るにそれは全く意外であつた。六月の下旬いよ／＼住友の爭議が最後の一齣に入つた時、交渉の結果如何と鶴首して待ちあぐんでゐた數千の罷業者に對し一大勝利は報ぜられた。曰く「吾等は要求の主眼たる團體交渉權を獲得した。竟に頑冥な住友も屈服して工場協議會の設置を承諾した」と。之を聽いて罷業者等は萬歳を三唱して此勝利を祝福したのであつた。

嗚呼、この新聞記事を暗涙なくして讀み得た者は、天下に私一人であつたであらうか？

憫るべき欺瞞か、然らざれば痛ましい誤謬である。彼等は貴金を望んで眞鍮を與へられた。しかも彼等は心ゆくばかり之に滿足したのである。

これは指導者を除いた一般の同盟罷業者のみの關する限りに於ては、欺瞞でも誤謬でもなく、唯指導者への盲從であつた。此指導者に對する盲從性に富んでゐる點が、關東の勞働者に比べて、關西勞働者の强味でもあり又弱味でもあると私は思ふ。

今夏の大阪の勞働爭議は、大阪電燈を手始めとして、次に藤永田、次に住友と、三個の團體交渉權の要求の連鎖として先づ出現した。而して大阪電燈と藤永田とは不完全ながらも實質の上では團體交渉權を認容したが、最後に住友だけは團體交渉權

を與ふる代りに工場委員會を與へた。欺瞞又は誤謬は其處に發端したのである。しかも罷業團の指導者は之を以て要求の貫徹と揚言し、罷業者等は無邪氣に此聲明を信じて凱歌を擧げた。而して「團體交渉權とはつまり工場委員會と同じものだ」といふ誤想が天下に流布されてしまつた。

その直接の結果と見るべきは、大阪から神戸に飛火した爭議熱が、川崎と三菱の兩造船所に工場委員會の要請運動を起させたことであつた。言ふまでもなく彼等の意は團體交渉權の獲得に在つたらうと思ふ。それはいやしくも勞働組合としては要求しなければならぬ筈のものを要求することであるからである。然るに彼等は團體交渉權と言はないで工場委員會と言つた。其理由は極めて明白である。住友の爭議が工場協議會の發表で解決したのが六月二十八日であつた。その三日前の六月二十五日に提出した三菱內燃機製造職工の歎願事項の第二條には、「團體交渉權を確認されたき事」と記してあつた。然るに住友爭議解決後一週間の後に提出された、同じ三菱の造船所職工の歎願書の第一項には、「工場委員制度を採用されたき事」と記してあつた。而して團體交渉權には全然觸れてゐない。七月十一日に提出された三菱電機會社職工の歎願書も亦同樣である。而して七月二日に提出された川崎造船所電氣工作部職工の要求書の冒頭には、「工場委員制度を採用すること」を記してあつて、別項に該委員會の組織概要なるものが、添附されてあるが、其組織概要の內容は、住友の工場協議會と殆ど全く同一のものであつた。(賀川豐彥氏は『改造』八月號の『團體交渉權獲得運動』と題する文章の中で、住友の工場協議會の案文は實は氏自ら起草されたもののやうに記されてあるから、川崎造船所の工場委員會組織概要も矢張賀川氏の執筆に成つたものかも知れない。)此に依つて之を見ると、大阪電燈に始つて、三菱川崎の兩造船所に終つた阪神勞働爭議の主要題目が、住友の工場協議會を境に、忽然として團體交渉權問題から工場委員會問題に移つたことが分るであらう。恐らく三菱川崎の數萬の罷業者等は、工場委員會といふ形と名とによつて、大阪電燈や藤永田罷業者同樣に、團體交渉權を得らるべきものと信じつゝ、數週間に亙る戰苦鬪に堪へたのであつた。彼等は同じ物ながら、團體交渉權といふよりは、工場委員會といふ方が「住友も既に與へたではないか。」と云ひ得る點に於て、作戰上有利と考へたのであらう。而して彼等は此二者が全然別個の物であることを知らなかつたのである。

之を知らなかつたのは獨り彼等ばかりではない。當の相手方たる兩造船所も亦恐らく之を知らなかつたのであらうと推測す

べき理由がある。何となれば彼等は甚しく、寧ろ不思議な程工場委員會なるものに鬼胎を抱いてゐるやうに見えたからである。私の信ずる所では當今の日本の一般工業家に取つて、工場委員會程恐ろし氣のないものはないのである。團體交渉權などゝは比較にならぬ程安全であり、且便利なものである。三井の三池炭坑の如き、久原の日立鑛山の如き、三菱の美唄炭坑の如き、古河の足尾銅山の如き、鐵道院の如き、呉海軍工廠の如き、いづれも既に昨年から工場委員會若くはそれに近似したものを實施して居るのである。住友の新工場協議會の如きも實は只內容を形式上幾分か整頓したものに過ぎないのである。米國の如き資本主義の旺盛な國に於てすら、大工場が先を爭うて設置しつゝある所のものである。川崎三菱の兩造船所は何を恐れ、何に憚る所があつて其設置を躊躇しなければならなかつたのか、私には全く不可解な謎である。併し若しこの謎に對する私の唯一の解答を求めらるゝならば、「工場委員會即ち團體交渉權の認容」といふ勞働者側の誤解の傳染と言ふより外はない。

新聞の傳へる所によると、床次內相は國民黨代議士に對して「罷業者の要求が工場委員會の設置に在るのならば、それを拒む工場主側の心持ちは領解が出來ない」と言はれたさうである。若しそれが事實ならば、流石に彼は縱斷組合案の創意者だけに、好く工場委員會の意義を會得されてゐると思ふ。併し當時の世論は床次內相よりも此點に於て遙に無識無理解でつた。併し私は今一々それを擧げるの煩に堪へない。

六　賀川豐彦氏の責任を糺す

唯私が此際何うしても默過することの出來ないことは、今夏の阪神勞働爭議に附纏つた欺瞞若くは誤謬に對する賀川豐彦氏の責任である。工場委員會と團體交涉權との混同は決して一時の勘違ひとして濟まされる問題でない。それは日本の勞働運動の將來にゆゝしき影響を持來すべき重大事である。さなきだに勞働運動が動もすれば理性の境を逸して、とかくセンチメンタリズムに陷り易い傾向を有する日本の現狀から見て、勞働指導者が多衆の勞働者を統率するには、何處までもごまかしのない理義の上に終始するといふことが最も必要な用意であるべきだと私は思ふ。いかに勞働團體の左翼にインテリゲンチヤのリーダーを排斥しやうとする感情があるにしても、大體の上から言へば、まだ／＼日本の勞働運動はインテリゲンチヤの指導から寸刻も離れ難い事情の下に在る。離れない方が勞働者自身のために利益だといふことは、大多數の勞働者によつて理解されてゐる筈だと私は信ずる。それだけ彼等を指導する地位に在るインテ

リゲンチャの責任は重い。彼等は何ういふ方針を取ることが、眞の意味での勞働階級の利益であるかに就て、常に深甚の注意を拂はなければならぬと同時に、其方針が常に合理的であることが、リーダーとしての彼等の名聲とか威信とかいふもののよりは、もつと貴重なものであることを忘れてはならない筈である。私は從來世間を騒がした幾多の勞働爭議に當つて、如何に其結末を着けるに就てのリーダーの苦心なるものが、彼等の率ゐる從業者等が無識であることに依つて支持されなければ、到底辻褄の合はぬやうな宣言や報告によつて彩られることの甚だ多かつたことを遺憾とするものである。或はそれで一時を彌縫することは出來たであらう。併し勞働者もいつまでも無識ではゐない。彼等が數年の後に至つて、嘗に信頼してゐた其指導者等は、實は一個の欺瞞者であつたことを疑ふやうなことが起るとするならばそれは勞働運動者としてのインテリゲンチャの致命傷であることを知らなければならぬ。これは實に痛ましい想像であるけれども、決して其絶無を保證することは出來ない。

私は決して妥協交讓を非とするものではない。猪突は畢竟匹夫の勇である。勞働運動は外交と同じやうに、戰ふよりも平和の談判に依つて利得を伸張するが主眼とすべきである。既に談判である以上は多少の互讓は當然のことである。絶對に讓歩の出來ない所には談判は有り得ない。只其後は腕の打つかり合ひがあるばかりである。而して戰爭があるばかりである。併し勞働運動に取りて無謀な戰ひの恐るべきことは、法外な讓歩の恐るべきよりも、より以上であることが屢々ある。何となれば勞働運動の初期に於ては、一敗地に塗れて全然壊滅の憂目を見ることすら稀でないからである。勞働組合が隱忍自重の指揮者を必要とすることは、勇猛活潑な指揮者を必要とすることに優るとも決して劣るものではないのである。

併しながら讓歩は如何なる場合に於ても欺瞞の原因であつてはならない。自重は如何なる場合に於ても卑怯の結果であつてはならない。レーバー・リーダーは常に其進退合理的なる點に於て、八面玲瓏の中に濶歩し得る概がなくてはならない。リーダーは如何に過激であつても、如何に謙讓であつてもそれは差支ない。唯其行動はいつも光明正大なる理路の上に置かれてなければならぬ。そこにレーバー・リーダーとしての偉大さがある。ジョン・ミチェルやロバート・スマイレーが、勞働運動者として不朽の盛名を馳せた所以は全く茲に在るのである。

私は賀川豐彦氏に對しては一面の識がある。私は詩人として、傳道者として、又一個の人格者としての氏に對しては尊敬を拂ふに躊躇しない者である。私は又賀川氏がギルド・ソーシャリ

ズムの共鳴者であり。商業上の無抵抗主義者であり、議會主義の奉持者であり、直接行動の否認者であり、階級鬪爭の回避者であることを知つてゐる。併しながら私は賀川氏が實際的勞働運動の指導者としての現在の地位は、氏自らが喜び進んで推任に當つてゐられるのであるか、或は周圍の事情に餘儀なくされて立たれたのであるかを知らない。唯私は今回の阪神勞働爭議に際し採られた氏の言動が、私の所謂欺瞞か若くは誤謬かを惹起す最も有力な原因であつたことを指摘しなければならないことを遺憾とするものである。

賀川氏は『改造』の八月號に「團體交渉權獲得運動」なる一文を寄せて、自分の所信と立場とを公にされた。私をして忌憚なく批評せしむるならば、此一文は學者としての賀川氏の名譽を甚しく裏切るものである。何となればそこには團體交渉權と工場委員會との性質に對する收拾すべからざる欺瞞或は誤謬が暴露されてゐるからである。賀川氏は該文の最後の一節で、團體交渉權獲得戰の勝利の報告として、「住友が團體交渉權を工場委員制度の形で認め」たと言はれた（米國の勞働組合員が此一語を聽いたら、餘程妙な顔をするであらう。）「工場委員會は大阪に於ては常識となつて來た」と言はれた。（讀者は大阪電燈や藤永田の爭議の題目が團體交渉權であつて、工場委員會でなかつたことを記憶せられよ）「國粹會は大正の昔には、團體交渉權は國家を亡ぼすと云ふてゐたが、遂には團體交渉權は横斷組合と職能と工場委員會の範圍に於ては、國家が亡びないと知つたと見えて、もうぐず〲云はなくなつた。」と言はれた。

實に不可思議な論法である。これが果して欺瞞でも誤謬でもなくて濟むものであらうか。

嗚呼、住友の勞働者は名譽ある賀川氏の盡力により「團體交渉權を工場委員會制度の形で認め」られて、欣舞雀躍したが、果して何時まで彼等は滿足してゐることが出來るであらうか。同じ賀川氏の斡旋によつて工場委員會を與へられた神戸のダンロップ工場の職工は、先頃委員會が滿場一致で可決した議案を（讀者は委員十四名中の七名が工場主の指名した職員であつたことを記憶せられよ）むざ〲工場主が拒否したので、痛く工場委員制度の効果に失望したさうである。見よ、現實は早くも暴露しつゝあるではないか。茲に於てか私は寧ろ工場委員會の獲得戰に敗れた三菱川崎兩造船所の勞働者諸君を祝福したい。何となれば彼等は失望の苦痛を味はずに濟んだから。

最後に私は、賀川氏に冷嘲された國粹會に一語を寄せたい。

國粹會よ、私は貴會が何人により組織され、何を目的として居

るものか、すこしも知らない。唯私は一片の老婆心から斯ういふことを貴會に致へて上げたい。團體交渉權が「工場委員制度の形」である間は、國家は決して亡びないばかりでなく、資本主義の基礎はビクともする氣づかひはないから、貴會は安心して御休息をなさい。

國字改良の原理

——不都合不合理不徹底なる國字の現狀と其救濟策——

福永恭助

國語國字問題の一端に就き私が八月號の本誌上で述べた事に關聯して、「日本のローマ字社」の方へ書面を以つて色々と問ひ合はせて來られた方が豫想外に多かつた——本誌讀者の總數に較べたら或は採るに足らぬ數であるかも知れ無いが——事實や、又昨今諸種の雜誌が競つて國語國字に關する議論を揭載して居る有樣などから思ひ合はせると、國語の整理と國字の改良とは漸次、國民の止み難き要求となりつゝある事を認めないわけには行か無い。そこで私は此時機に於て之等二大問題の根本になつて居る處の國字の改良と謂ふ事に就いて私の見る所を述べて偕く事は今日特に其時機を得て居ると考へる。

一 前置き

◇今日我國の前途には諸種の難問題が横たはつて居て、何れも吾々及吾々の子孫が早晩何とか根本的に解決をつけなければならないもの計りであるが、其内でも我國の興廢に關する甚だ重大な問題が一つある。即それは私がこれから追々と申し述べやうとする處の國字問題である。

◇彼の太平洋問題であるとか、軍備制限であるとか謂ふ問題

も。勿論日本にとつて重大な事件であるに相違ない。併し乍ら一國の興廢盛衰は一般に、之等の對外的事件よりも寧ろ對内問題に依つて消長する事が多いと謂ふ事を思ふ時、吾々はそれ等の問題に較べて心的方面から見ても物的方面から謂うても、より大切である處の國字問題を等閑視してはならない。外ばかり見て足許を御留守にする國民は危い。

◇國字問題の樣なものは其專門の學者例へば國學者や文學者などの考へる可き仕事であつて、一般世人の取扱ふ問題では無いかの如くに考へて居られる方があつたら、それは大變な心得違ひであらう。國字は國民一般の使ふものであるから其改良には凡ての日本人が參與す可きであつて、教育家であらうと、軍人であらうと、實業家であらうと、文學者であらうとに差別は無い。

◇さて私はこれから國字改良問題の玄關から奧の院迄を讀者諸君に紹介するのであるが、豫め諸君に御斷りして置く可き事がある。凡そ誰でも或議論を進める時には相手の心裡に強き印象を刻せんとするの目的からして、議論が往々極端に趨る事を免れ無いものだ。丁度曲つた棒を眞直に直すのには之を稍反對方向に抂曲げ過ぎる事が必要である樣に。從つて「眞理は兩者の中間に存する」などと謂ふ大ざつぱな平均値をとる樣な事になるのであるが、私は特に此點に細心の注意を拂つて掛値無しの中庸の道を辿る事に勉める積りである。而して其引用する處の數字や統計には凡て確實なる根據のある事をも諸君は見落さないであらう。

◇打開けて謂へば、國字問題は私の如き後輩が今更述べ立てる迄も無く、既に立派な解決を終つて今や實行時代に進入す可きものであると稱せられて居るに拘らず、それが多數の國民に對しては常に新らしき問題であるのだ。既に議論の時代を通り越したと謂はれて居る其議論を再び此處に蒸し返す事を必要とする處の日本の現狀を私は悲む。

二　文字と言葉

◇私の知つて居る範圍に於て、世間で相當識者と謂はれる位の人で、字と語卽文字と言葉との區別を辨へて居られない樣な議論をする方が少く無い。讀者諸君に對しては極めて判り切つた事の樣であるが、話を進める順序として一通りこの區別を明かにして置くのは強ち無駄な事ではあるまい。此書き物を段々と讀んで行くに從つて諸君は私の用意が極めて周到であつた事を悟られるに相違ない。

◇由來日本人は字と語とを混同して取扱つて居る。混同の原

因は謂ふ迄も無く漢字の罪であるがその事は後で述べる事として、例へば彼の「アドバタイザー」や「神戸クロニクル」などの事を日本人は一般に英字新聞と呼んで居るけれども、これは寧ろ英語新聞と謂ふ可きである。尤も色々とこぢ付ければ英字新聞と云つて云はれぬ事は無いが、之を英語新聞と呼ぶ事の適切なのには敵ふまい。

彼のヘボン式ローマ字の大立物たる櫻根博士でも此點を混同して居られるやうだ。と謂ふのは九月號の雜誌 Rômaji 第一頁にある同博士の文章の中に次の一節がある。

"Jissai *Morumotto* de yoku wakatte iru tokoro ni, kotosara *Kaimei* (海溟) nado to iu muzukashii *monji* o mochiiru hitsuyôga nai to omoimasu."

即博士は「モルモット」を「カイメイ」に變へる事を文字の變化であると思つて居られる樣であるが、實は言葉が變るのである。但し博士が『モルモットと云ふ原語でよく判つて居る處に、殊更それをカイメイと云ふ譯語に直し、而もそれを難しい漢字で「海溟」と書き表はして居るが、其必要は無いと思ふ』と云ふ可き處を略して右の樣に述べられたのだとすれば別に問題は無い。

◇右は語と謂ふ可き處を字と取り違へた例であるが、次にそれと反對に、人に依つては字と云ふ可き所を語と取り違へる事もある。例へば假りに——假りにに注意——原首相が『どうも日本語は不都合だ。私の名前なども原敬(ハラケイ)と讀まれて、誰も「ハラタカシ」と呼んで呉れ無い』と不平を零されたならば、それは首相の間違ひであつて、日本語は少しも此場合には不都合では無くて、たゞ「ハラタカシ」と云ふ日本語(文法上固有名詞に屬する日本語)を表はす處の日本の文字(此場合には漢字)が不都合なのである。

◇誰も承知の通り、言葉と云ふのは人間が口と耳との仲立ちに依つて思想をとりかはす處の一方法——最も有力な——である。近代の經濟學者は、人類の文明が他の動物に較べて獨今日の如き盛觀を呈するに至つたのは、他の動物と異りたる或る有名なる特徵を有するが爲めである稱して、其特徵を手の延長即道具の製造に歸して居るが、吾々はより一層根本的の相違として言葉を擧げて見度い。これは實に人類生活の特徵であつて蟲や鳥や獸などの生活には見られ無い現象である。

◇話は鳥渡脇道にはいるが、近世の遺傳學の示す處に依れば『生物が一代に獲た處の變化——智識や肉體の上などの——は遺傳しない』と謂ふ事に多くの學者の說が一致して居る。これは何う謂ふ事かと謂ふと、親父が車挽きをやつた爲めに胴が發達したからと云つて生れる兒供はその部分が別に發達して來る

ものでなく、又親が一生の間に獲得したさまざまな智識は其兒に傳はるものではないと云ふことだ。

◇其生れた兒供は嘗て其父や母が生れた時と同じ樣に附語の智識も理學の智識も地理の智識も持たないのだ。親に較べて此點で少しも進んでは居らない。然るに人類の文明が逐年進步をして遂に其趣く處を知ら無いと云ふ樣な偉觀を呈するに至つたのは何の理由によるかと云ふに人間のみ獨り言葉を持つて居ると云ふ事が大きな源因をなして居る。

◇他の動物例へばそれ等の內の最高等動物と云はれて居る猿などでも言葉は極めて不完全なものになつて居て、自己の經驗した智識を他の猿に傳へる事が出來ない。前に述べた通り一代に獲た經驗は消傳しないから、例へば親猿が嘗て河豚を喰べて腹痛を起こして苦しんだと謂ふ風な事があつても、其後に生れた子猿は河豚の毒に就いては何等知る處がない。而も親猿が子猿に河豚の毒を敎へてやらうとしても言葉と云ふものを持たぬ畜生の悲しさは、如何とも其手段がつかない。斯て此貴重な經驗は誰に傳へる術も無く、埋れ果てて子猿孫猿は申すに及ばず、隣の木に住む猿も其子孫も繰り返し繰り返し河豚に中てられるのであらう。これは啻に河豚計りで無く、凡て此調子であるから猿社會の文明程度は幾代經つても元の木阿彌である。

◇そこへ來ると有難いのは人間樣である。親が河豚に中毒したが最後兒供にはチヤントそれを言ひ聞かせる。其子は又自分の子に祖父の經驗を話す。斯くて昔から所謂『言ひ繼ぎ語り繼ぎ……』と云ふ事が行はれたわけである。而もこれは時間的に語られる計りで無く空間的にも行はれるから其一人の智識や經驗が廣く人類社會の文明や幸福に貢献するに至るのだ。私はこの事を考へる度びにいつも、始めて河豚を喰べた人もさる事乍ら、海鼠を喰べた人類最初の人や、雲丹のやうな刺々のある動物が吾人の食用に供せられる事を發見した人の事を思つて、之等の人々の勇氣に多大の尊敬を拂ふ。

◇扨此人類に限り許されたる思想表現法の一種なる言葉は目下の處國々に依り或は民族の異なるに從つて同一で無い。卽日本人の使ふ言葉は日本語であり、英國人のは英語、又支那人のは支那語と云ふ風に。

◇次に文字と云ふのは右に述べた言葉を寫す爲めの記號であつて、これにも亦色々な種類がある。漢字、假名、ローマ字、土耳古文字、露西亞文字其他がそれである。尙以上の關係を例を擧げて說き明かせば、鼠を捕へる動物の事を「ねこ」と云ふのは日本の言葉であつて之を漢字で「猫」(ベウと讀んではいけない)と書いても、片假名で「ネコ」と書いても、又ローマ

字で Neko と書いても、それは依然として日本語である。それと同時に英語の cat を片假名で「キャット」と書いても、それは決して日本語になつたのでは無い。

◇ そこで國字問題と國語問題とが判然と切り離して考へられる。私が此話で國字問題と云ふのは、日本語を寫す處の現に國字即漢字と假名とを吾々日本人は此儘で生大事に守つて行く可きものであるかどうか、若し此儘でいけないと謂ふならどうすればよいかと謂ふ問題である。從つて言葉の問題を論ずるのは此話の主眼とする處では無い。今假りに段々と攻究の結果、日本は國字としてローマ字が一番適當して居ると云ふ結論に達したとしてもそれは單に日本語をローマ字で書けと謂ふだけの事であつて、決して英語の採用とか、佛語の採用とか云ふ事を指して居るのでは無い。

◇ 然るに世間には、吾々が國字問題を持ち出すと直ちに『ローマ字をやる位ならエスペラントをやれ』とか何とか云ふ識者が少く無い。『假名を使ふ位ならローマ字にしろ』とか『英語を學ぶ位ならエスペラントを習へ』と云ふならば話は判つて居るが、ローマ字の代りにエスペラントと云ふのは餘程問題が掛け離れて居つて、前者は文字の問題であり後者は言葉の問題である。

◇ 勿論吾々は字と語との間に密接の關係がある——にもそれは日本語と漢字とは切つても切れぬ縁があると云ふ樣な意味ではない。此の意味は追て分明する時があらう——事を認めるし（語を離れて字を考へる事は出來ない）、尚又日本語の中にも整理改良を要するものが少く無いと云ふ事は既に八月號で述べた處であるが、最初の間は明かに此兩者を區別して掛らねば往々議論の錯綜を招く虞があるので、特に長々しく此項目を設けて兩者の立場を明かにした次第である、

三　現用國字と國民教育

◇ 今日迄國字として我國は永く、漢字を主要文字として假名をそれの補助文字として居つた——現にしつゝある——事は誰しも承知の事である。此二種の文字には各々救ふ可からざる缺點があつて是非共國字の改良を計らねばならぬ事はこれから追々と述べるのであるが、私は先づ第一に、此内でも主力たる處の漢字の攻撃から始めて、次に時機を見て鉾先を假名に差し向けやうと思ふ。

◇ 兒童教育の上から見て漢字に數の多いこと（尋常小學六年間の讀本の字數が千三百六十字、讀本以外のものを含めて兒童の習ふ漢字數は二千六百餘字——漢字專門學者文學士後藤朝太郎

氏の調査に據る)、及其一字一字に色々な讀み方があつて實は三千足らずの文字を覺える事が一萬字にも匹敵する事になると云ふ事などに就いては既に私は八月號で述べたが、成る可く話の重複を避けて私は更に詳しく此問題を研究するであらう。

◆話の種◆

私が八月號で述べた様に、「行」の字の讀み方がザット十種にも及んで居ると謂ふ話を或る處でしたら、聽衆の中からこんな事を云ひ出す人があつた。

『いや、それよりは洋の字の方がズット澤山の讀方がある。字引を引くとヨー、ショーの二つの音とナダ、タマヨフの二つの訓がある外に、洋燈(ランプ)、洋傘(コーモリ)、洋杖(ステッキ)、洋琴(ピヤノ)、洋風琴(オルガン)、洋漆(ワニス)、洋灰(セメント)、洋鬼(ヤンキー)、洋妾(ラシャメン)……などいくらでも讀み方がある!』

◆今一字に就き十種の讀み方を覺える――行の字の場合の樣に――と謂ふ事と、十種の別々の文字を覺えると謂ふ事との難易を比較して見るのに、前者の場合には、「カウ」と讀む可き處を「アン」と讀んで三井銀行の事を三井ギンアンなどと謂ふと丸で意味も判らなくなり、又無學者として人にも笑はれる(落語の題材に斯う云ふ風なのを取扱つたのが多い)から、十種の讀み方を覺えた上に吾々は尚それぞれの場合に適當な使ひ分けを暗記しなければならない。此各種の場合に應じて適當な使ひ分けを憶えると云ふ事は決して容易な業では無い。兒童が頭を悩ます事は、十種の別々の文字を覺えると云ふ事よりも一層大である。要するに兒童の負擔は一萬何千字も覺えると云ふやうな莫大(これに小の字を添へると莫大小(めりやす)と讀むのだから堪らない!)なものに相當して仕舞ふのだ。

◆『小學校に於て適當たる教師の指導の下に、兒童の好奇心と智識慾とを利用して、巧に教授を行へば二千六百字(稲永曰く實は一萬數千字に匹敵する)の漢字を覺えさす事は大した負擔でも無く、兒童は特に苦痛を感ずるとも無しに、知らず識らずの間に二千六百字を覺えて仕舞ふ事が出來る』と謂うて、學校に於ける兒童の苦心及負擔を輕く視る人も世間には少く無い樣であるが、それは小學教育又は兒童の實際を知らない人の議論である。

◆兒童が二千六百の漢字を覺えるのにどれだけ苦勞して居るかは、彼等の下調べと復習とが永い間――卒業間際になつても未だ――讀み書きであるのを見ても判るし、若し又論者の云ふ様に、特に目立つた苦勞なくしてそれを教へ或は覺え得たとすれば、それは教師が毎日少し宛小出しをして六ケ年の長日月を費したと云ふだけの事で、其時日と努力との總合計は大したものであるに相違ない(別表保科氏の取調べを見られ度い)。『知

らず識らずの間』と云ふ文句は、此際兒童の教育と云ふ事に冷淡な父兄の知らず識らずの間と解釋すべきである。

◇成程兒童の智識慾は大であらう（人の記憶力は滿十三歳の時が最高だと云ふ）。併し、凡そ學問と云へば單に讀み書きだけであつたと云ふ徳川時代なら知らぬ事、今日の樣に學ぶ可き事が山程ある時代に（近頃義務教育年限を更に二ケ年延長すべき事が叫ばれて居る位ではないか！）兒童の智識慾や好奇心を正味のある學問に振り向けずに、之を單に文字を覺えると云ふ事に費して仕舞ふのは、歐米諸國の狀態に比較して見て、殊に詰らない話である。

◇全體文字は思想又は智識其物では無い。田中館、芳賀、山丸の三博士は其著書『ローマ字獨り稽古』で此點を面白く說き明かして居られる。即『元來文字は言葉を表はす符牒で、其言葉は思想や智識を表はす符牒であるから、中味たる智識や思想から見れば言葉は丁度容器（即重箱）に相當し、文字は其重箱を包む風呂敷位の格である。』

◇今日飛行機や蒸汽機關がどんなものであるかと云ふ位の事は誰にとつても必要缺く可からざる智識であると云うて差支無い。處が我國では其飛行機とか蒸汽機關と云ふ文字が仲々難しい。私が多數の機關科將校――蒸汽機關の專門家である處の――に就いて試した處に依ると此れと云ふ文字を完全に書き得た人は至つて少かつた。而も此難しい文字を一生懸命になつて覺えた處で（日本の小學校は之をやつて居るのだ）、それは飛行機や蒸汽機關を學んだのでは無い。我國の小學教育が（陸海軍の新兵教育も幾らか之に似た所はないか？）この忙しい世の中に大部分の時と力とを此難かしい文字即ち風呂敷の詮索に費して居る間に、文字の易しい歐米諸國では、恐らくは既に中味たる飛行機や蒸汽機關の構造から取扱法まで研究を進めて居る事であらう。

◇日本の小學教育が、歐米に比べて、如何に風呂敷の詮索に多大の時と精力とを費して居るかを一層明確に讀者諸君に意識して戴く爲めに、私は昨年春東京御茶ノ水に開かれた文部省主催、時展覽會の出品表を左に掲げて見る。

一、小學校に於ける國語の毎週授業時間表（六ケ年間の平均）

漢字を使ふ日本では……………一一・三時間

ローマ字を使ふ歐米では…………八・〇時間

これを總科目の授業時間に較べると

日本……………………………四四%

歐米……………………………三一%

二、これを學ぶ讀本の分量を頁數（字數ではない）で

(第三學年に就いてミュンヘン市の教科書に比べた例)

日本……………………九九〇〇語
獨逸……………………四八〇〇〇語

三、同じく百語を學ぶに要する時間は

日本……………………四時間と二十分
獨逸……………………只の三十八分

即日本は獨逸の七倍も暇が費る

四、普通の書き物を相應に讀み得る迄の年限(大凡の見當)

日本(中學三年位と見て)……………八年
歐米(小學二年生が自由に讀む)……一年半

(文部省國語調査主任東京高等師範學校教授兼東京帝國大學助教授、文學士保科孝一氏の取調べに依る。)

◇即右の統計に依れば、我國は歐米諸國に較べて毎週三時間と二十分だけ餘計に國語教育に力瘤を入れて居るのに、其効果は獨逸の五分ノ一にしか當つて居ないと云ふ有樣である。これは抑何に源因して居るかと云へば、其最大理由は云ふ迄も無く我國の國語教育の大部分を擧げて實は國字教育の方に振り向けられて仕舞ふからである。斯くして總科目授業時間の四割四分の大部分は風呂敷の詮索に徒費されつゝある。

◇斯くの如く多大の時間と精力とを費して教はつた國字教育は、それなら非常な好成績を示して居るかと云ふに、これは又驚く可き程不結果に終つて居る事は、小學校を出ただけでは社會へ出て用が足りない(本誌八月號參照)のを見れば直ぐに了解される事であらう。尙更に驚く可き事實は、中學校を卒業する頃になつても未だ平常使用の文字を憶え切れないのはおろか、帝國の最高學府と稱せられる大學を卒業しても尙座右に和漢辭典やローマ字引きの國語字典を備へて居る事である！

◇以上述べたのは文字即風呂敷に就いての話であるが(更新たる言葉に就いては前表の通り獨逸の七分の一の成績)、次私には中味たる思想や智識に就いて述べなければならない。專門家の研究に據れば、我國の尋常小學六年間に習ふ讀本の材料を獨逸あたりの小學校の同年限に教はるそれに較べると、僅に六分ノ一にしか當つて居ないと云ふ事である。我國の兒童が讀み書き夢中になつて居る間に彼等は道草を喰ふ事無しに六倍の智識や思想を得て仕舞つて居るのである。國民一人々々が此狀態にあるから、國全體として彼に比較して實に容易ならぬ差を生じて居る。この障害なくしてさへ立ち遲れの我國が文字の鎖で足を縛られて、どうして歐米諸國民と駈歩競爭が出來やうぞ！

◇世には吾々が漢字の缺點だとして取扱つて居る所のものを却つて漢字の特徴――優れた――だと信じて居る人があるから

實に世は樣々である。曰く『漢字が兒童の頭を惱すのは事實であるが、兒童の頭を惱すことはこれ、とりも直さず兒童に對する頭腦の鍛錬に外なら無い。漢字にヘコたれる樣な國民は矢張り劇烈なる生存競爭には勝て無いのだ』と

◇ 此議論に對しては私は餘り多く答へるの必要が無いと思ふ。第一に兒童の頭を鍛錬するのは賛成であるが、それの材料に何故に風呂敷を持ち出さねばならないか、今日は兒童の頭の鍛錬に利用し得る處の中味のある必須學問の寧ろ多きに苦んで居るのでは無いか。尚後段の論法に對しては私はアベコベに論者に反問しやう。『歩行に堪へられない樣な國民は劇烈なる生存競爭に敗けると云うて、論者は東京から長崎へ行くにも膝栗毛をやる積りか』と。『日本の交通機關を破壞して日本人は凡て歩行に依れ』などと云うたら、列強との競爭はおろか、人は皆論者を氣狂ひと呼ぶであらう。

尚此鍛錬問題に就いて一言すべきは、字を記憶すると云ふ事は機械的の記憶力を要する事である結果、兒童の推理の力の發達を鈍らすと謂ふ話である。

◇ 扨私は長々と漢字の弊害を兒童教育上から述べ立てた。漢字の不都合な事は色々な方面から論ずる事が出來るけれども、此所に述べた教育上の不都合程大なる不都合はあるまいと考へて、重ねて私が此章の說明を繰り返した次第である。世間には吾々が第四位或は第五位以下に取扱つて居る問題を取り出して、さも之を吾々の主要問題でもあるかの如くに取扱ひ、そうして之に對する些細な缺陷を發見して吾々の國字問題の全部を否定し去る樣な論法を採る人が少く無いのは、吾々の屢々閉口する處である。そこで私は特に此章を冒頭に推し立てて、逐次他の論に移らうとする次第である。

◇ それは扨置き本論に還つて、日本を前述の樣な憐れな狀態から救ふのにはどうすればよいか。これは唯日本語を書く方法を簡單にするより外に致し方が無い。

四　所謂「民衆の自覺」

本章で述べる所は私が嘗て岡山の六高及醫專の講演會の爲め準備した所の草稿であるが、前章と關係する處が淺く無いから特に一章を設けて此處に插入することとした。

◇ 文明開化の現代は有り難いものである。今は日本も行燈や洋燈の時代は疾うに過ぎて、鄙も都も電氣燈が行き渡るやうになつた。『螢の光、窓の雪』はおろかな事、今時の青年には、油買ひの話や――油搾りは今でもあらうが――洋燈の掃除や、さては洋燈の心の切り方の苦勞を話して聞かせても――それ等

皆書生や居候の重要なる役割の一つであつた——何の感じも起るまい。嗚呼便利なる電氣燈よ！心を出し過ぎてホヤを割る處もなければ、ひつくり覆して火事を起す心配もない。

◇處が不思議な事には、日本には其便利な電氣燈を夜中點け放しにして居る家が少く無い。而も點け放しの言ひ草が振つて居る。『うちはメートルでないから、電氣を消して寢たつて會社が儲ける計りだ。マシヤクに合はないから點け放しにしてやれ！』だと。

◇全體夜中に電氣燈を點けた儘寢ると、メートルの無い家庭自身にとつても、(イ)安眠を妨げる、殊に兒供の爲めによく無い。(ロ)電球の命數が減つたり、球の光明度が減退する。(ハ)外が暗くて家の中が明るいのは盜賊を吸收し易い——序乍ら述べて置くが之と反對に家の周圍に電燈を一個設備する事はよく交番一ケ所を設けた事に匹敵すると云ふ專門家の話である——等の不利があるから利己主義で世渡りをする心掛けの人でも電氣は消して寢た方が得策なのである。

◇次に私は利他主義の人に對して忠告しなければならない。日本は所謂五大國の内でも名高い貧乏國である。金持の國とても決して無駄をしてよいと云ふ理屈は無いが、殊に貧乏な日本にとつて電燈の點け放しは驚くべきエネルギーの無駄使ひである。日本中の家庭が夜間不要の電燈を消す事に依つて日本の動力はどれ丈け浮いて來るかを考へて戴き度い。而して此の省かれた動力は諸種の機械を運轉する事も出來やうし、又は之を電氣化學工業に振り向ける事も出來やう。

◇聞く處に據れば、大戰中習志野に收容された獨逸の俘虜は、夕方散歩でもして居る時、遙か彼方の自分達の室に電燈が無意味に輝いて居るのを見付けたが最後、突撃の稽古でもするかの如き疾驅を以て室内に跳び込み、そうして電燈を消した後に緩々と更に元の散歩に復つて居つたと謂ふ事である。日本人が同じ日本人の設て居る會社を敵の樣に思つてワザと電氣の點け放しをして居るに較べて、彼等から見ればこれは又本統の敵國の財產であるのに！

◇議論の公平を期する爲め私は順序として、當に電燈の使用者側計りを攻擊する事を止めて、鋒を彼の橫暴なる我國の電燈會社にも向けなければならぬ——私の住んで居る町の電燈會社などは料金の破格に不廉なこと、送電々壓が規定の量に達しなくて燭力の低いこと、故障の爲め送電の出來ない事が少くないこと、而も料金は送電したと同額を請求する事など目に餘る事が度々重なつて居る——處であるが、その方の事は今日の話に關係が無いから直ちに次の話に移ることにしやう。

◆水道の水の使ひ方の荒い事といつたら、それが數限の無い（併し小學校だけは終へて居る筈だ）女中達の直接使ふ處だけあつて素晴しいものだ。弁の開け放しも時々見受けられるが、さても水の使ひ方の荒さよ！吾々の様に海に育つて艦を住家とした者には勿體なさが身に浸みて空恐ろしくなる。併し昔から我國には『金錢を湯水の如く使ふ』と云ふ諺がある位であるから、使ひ方の荒いのは湯水に附き物ではある。

◆世界大戰の爲め金物の値段が暴騰した頃の話である。ある造船工場の職工が繋留中の船に仕事に來た歸りに、拵へて來た螺子や鋲類の殘りを工場へ返す手續の面倒さ——大した手續が要るわけでも無かつたが、それを還納する爲めに幾らか歸宅時刻が遅れるのは事實であつた——からしてそれ等の殘りを海中に投げ棄てる者が少く無かつた。

◆以上述べた樣な事實をまのあたり見た所謂我國の識者は必ず次の様に議論を結ぶに違ひ無い。

『勞働問題も普通選擧も週休制度も陪審法も日本では亦だ早い。民衆がもつと自覺して、勞働者の頭でも何でも西洋の様に進步しなければ駄目だ。』

◆勞働問題や普通選擧や陪審法やは私の問題の外の事であるから、これに觸れる話は一切避け度いと思ふが、唯右に述べた識者の結論にはその根本に面白い理窟を含んで居る樣に思はれるから其事に就いて一通り私の所見を述べ度い。それは外でも無い、社會を改良するには、其組織だけを變へたのでは足り無い。社會を組織し運轉しつゝある處の各々の人間の改良は更に一層大切な事であると云ふ事だ。

◆所謂組織の改良とは何かと云へば、私が述べた電燈の例に就いて云へば、會社が各人の家にメートルを取り付ける事である。又人間の改良とは、家庭の主婦なり女中なりを教育して、電氣燈の附け放しが此の世の寶を溝に捨てるやうなものである事を覺らせる事である。また螺子や鋲類の如き金物を海中に投棄する話に就いて述べれば、使ひ殘りの品物を工場に還納する手續を簡易にして彼等の歸宅時刻に支障なき樣に取計らふ事は即組織の改良に外ならない。而して職工を教育して無意味の海中投棄は天意に背くものである事を知らしむるが即人間の改良である。

◆諺に『境遇は人を造り、人は又境遇を造る』と云ふ事がある。從つて組織の改良も人間の改良と共に忽にす可からざるものである。例へば電氣燈の話で謂へば、メートルを設備するだけで此問題は殆んど解決するではないか。其處で吾々は組織と個人との兩方を改良して凡ての社會改良に從ふべきである。

◇であるから兩者の內孰れを重しとする事も出來無いが、今若し孰れがより根本的の改良かと問うたならば私は『それは人間の造り替へである』と答へるであらう 組織の改良でさへ其人間が行ふのでは無いか。其又人間は制度や境遇に依つて左右される事はあるけれども。

◇さて問題に立ち歸つて、それなら個人の改良言ひ換へれば民衆の進歩と自覺とは何に依つて得られるかと謂へば答は誠に易しい。即ち民衆教育――小學校教育――に依るのがそれの大本である、勿論小學校を出てからの社會の教育に負ふ所が少く無い。處が日本の小學教育は既に多くの人の氣付いて居る通り、たゞ文字を教へると云ふ事だけに非常な時と精力とを費して居る有樣である。社會の教育と云ふ內にも色々な類があるけれども、とりわけ新聞や雜誌や書籍等（殊に百科全書の樣なもの）に依る教育は仲々效果が淺く無い。處がそれ等は日本で熊公や八公やお鍋などの間に廣く讀まれて居るか。文字を易しくしない限り、又新聞や雜誌の値段を安くしない限りそれは覺束ない話だ。即凡ての問題は唯一つの事即文字をとり換へる事に依つて解決が付く。小學校の教育を救ふのも文字をとり換へるのにある。讀み物を易しくするのも文字をとり換へるにある。書物の値段を安くするにはライノタイプの應用が與つて力多い。詰り『日本語をローマ字で』である。

五　間に合せの文字

◇既に私は漢字の不都合な點を主として教育上から論じた。物作りの好い讀者諸君は、教育上の理由だけではや充分漢字廢止すべしの結論に到着せられたに違ひあるまい。併し諸君は早まつてはいけない、斯樣に不都合な漢字でも、それが本來の性質上日本語に適して居るものであるならば、言ひ換へれば、日本語は性質上漢字で書くべきものであるならば吾々は尚一顧の價値があると認めてやらねばならないのである。然りその樣に日本語と切つても切れぬ緣があるならば、教育上の困難なども或程度迄は我慢しなければなるまい。そこで私は愼重に此問題の吟味に取り掛ることに仕度い。

◇話は再び脇道にはいるが、明治四十二年――私が少尉候補生の時――私は亡くなられた伊地知彥次郎少將に率ゐられて、軍艦阿蘇、宗谷で米國西岸の見物をした。始めて外國を見た忘れる事の出來無い數多い印象の中で、今だに忘れる事が出來無いものが一つある。それは在米日本人の蝟集である。

◇今でこそ米國の西海岸には我軍艦旗の翻る事などは敢て珍しくも無いが、此時は十何年振りかで始めて、而も排日問題の

凡並しい眞最中であつたから、在留日本人の我練習艦隊に對する歡迎も亦素晴らしいものであつた。殊に廣島縣人會とか、和歌山縣人會とか謂ふ在留邦人の團體が同鄕出身候補生に對する特殊の歡迎振り――廣島縣出身候補生は金側時計を、山口縣のは凡てカフス釦を又和歌山縣は萬年筆を贈られたと謂つた樣な――は出稼人の少い他の地方の出身者を羨ました事夥しい。

私は半ば山口縣出身だと云ふので十四金のカフス釦を寄贈された――それは今でも私の軍服の袖口で燦然たる光輝を放つて居る！――し又半ば東京府出身だと謂ふので東京出身の日本人から珍らしい品物を贈られた。別に出稼人らしい出稼人を持たないので贈物の光榮に浴さなかつた或北國出身の一候補生が呟いた。『日本人はこれだから駄目だ。海外へ出ても未だ山口縣だの廣島縣だのとケチな事を云うて居る。これでは何時まで經つても日本人の海外發展は覺付か無い』と。

◇　思はず話が橫道に深入りしたが、カフス釦などは別に國字問題に關係は無い。さて吾々は此等の在留邦人の案内で度々賑やかな大通りや、公園や、寄席や、ホテルや三越紛ひの大建築物などを赤毛布式に見物したものだ。處がどうも腑に落ちぬのは此等案內役たる在留邦人の言葉である。案內者の一人は私達を捉へて次の樣な事を云ふ。

『みいら、たいむが無いけん、でんかあで行く』

右の內『無いけん』と云ふのは廣島から山口遊へかけてのなまりである事は既に吾々三ケ年の江田島生活で充分心得て居る處であるが、さて一寸判らぬのは『みいら』『たいむ』及『でんかあ』である。

◇　併し乍らそれも始の間の事、艦隊が漸次ロスアンゼルスからシスコ、タコマ、シヤトルと經廻るに連れて私共も漸く場數を踏むで、自然の間に此等の言葉の意味を納得して仕舞つたのである。今それを此處で日本に居乍らにして諸君に漏らさうと言ふのである。

みいら　即『me等』……………私達
たいむ　即『time』……………時間
でんかあ即『電car』……………電車

これ以來艦の候補生室ではこの樣な言葉が大流行を來した事は云ふ迄も無い。吾々は今だに在米邦人のことを『ゆうら、みいら（You等、Me等）』と呼んで居る次第である、

◇　話は又違ふが、大正四年八月十七日の大阪每日新聞には金子直吉といふ方の『國字、國文の改良に就いて』と云ふ議論が出て居つた、金子氏の說は要領に於て、何の事は無い、右の『ゆうら、みいら』式に似たものであるが、それよりも先づ次の

例を見られ度い、

フクザワ.Professor idiograph の teaching.

Japan にかなの idiograph ありながら China-character を mix use は very inconvenience なれども…………

即ち主要語たる熟語には英語を使ひ、それの讀み方には第一法としては英語の傍に附けた假名の通り、即日本語の訓の通りに、又第二法としては英語の發音（音）通りにプロフエッサー、イディヲグラフ等と讀ませ様とするのであつて、金子氏の案では其孰れの讀み方をも許さうと云ふのである。

◇ 亞米利加在留の日本人の様に周圍を英語國民で取卷かれて居る者や、又は專門の學問をする或る特別な人達が、それに關係した問題の時に――少數の同臭味の學者や學生を對手として――話の中に英語を挿むと謂ふ事は別段咎め立てをする程の事では無いが、全日本人を對手として、全日本人に使はせる日本文（金子案では或場合は日本字、或場合は日本語）の改良案として、金子氏の様な遣り口が正當なものであるかどうか、又此の様な改革を成し遂げる見込みがあるかどうかは、恐らくは賢明なる讀者諸君に對して說明の限りではあるまい。尙金子氏の様に日本語の中に外國語を生の儘で採り混ぜる事を主張される方に正金銀行の時枝誠之氏などが居られるから、私は大に諸君の戒心と注意とを促す爲めに日本語の中に外國語を採り混ぜる事に就いて他日大に論ずる處があるであらう。

◇ それはそれとして、私は今漸く此處で本論に筆を進める事が出來た様に思ふ。多くの日本人は生れ落ちると直ぐ様自分の名前を漢字で書き記されて役場に屆けて仕舞はれた様に、もともと漢字だらけの世の中に育つたのである結果、『日本語は漢字で書くのが果して正當なのであるかどうか？』などと云ふ疑問すら起して居るまいと思はれるが、讀者諸君だけは此先入的思想を拂ひ落してよく私の述べる處に耳を傾けて戴き度い。抑漢字は誰も知る通り元來支那語を寫す爲の支那の文字である。その支那文字を日本が借用に及んだのである。而も其の使ひみちが今日では、輸入當時の様に日本音を寫すと云ふ行き方で無くて、之を形象文字として取扱つて居る次第である。例へば『猫』と云ふ支那字には『ネコ』と謂ふ響はもともと無かつたのを、我國で『ネコ』と讀む様な約束を作つたのである。そうして、それを音で『ベウ』と讀むと云ふのは支那音（今の支那音とは一致しない事もある）の事であり、それを訓で『ネコ』と讀むのは『ベウ』と謂ふ支那語の日本譯であるから、結局前に掲げた金子式と同じ遣り方に外ならない。尙詳く云へば『ネコ』と云ふ日本語を我國で漢字で『猫』と書くのは日本語の『ネコ』に相當する

支那語を研究し、其支那語に對する支那字が猫であつたと云ふ行き方である。而してそれの反對に吾々が猫と云ふ漢字を見て『ネコ』と讀むのは、『猫』(と云ふ支那字に對する支那語が『ベウ』であり、其『ベウ』と云ふ支那語)に相當する日本譯が『ネコ』である事を搜して『ネコ』と讀むのである。

◇ 然るに、下世話にも『所變れば品變る、難波の蘆は伊勢の濱荻』と謂ふ位であるから、支那と日本とは凡ての事物が必ずしも同一で無い。卽國民の思想も、其所に住む生物の種類も、又國民の使ふ道具や機械も彼と我とは必ずしも一致して居ない。從つてそれ等を表はす處の言葉に就いても亦同樣の事が云へる譯である。

◇ 既に述べた通り、これ迄我國が國語を書き表はす爲めにも、將又書いた物を讀む上にも此の樣な複雜なる手續をして居るから、事實の上に於いて左記の樣な各種の場合が起つて來てそれが爲め吾々の日常生活に色々な不都合を起こす源因となりつゝある。因に私は今主に漢字の攻撃をして居る次第であるが、前に掲げた金子式の遣り方も其主義に於いては漢字と同じ行き方を採つて居るから、左記に示す樣な不都合、不合理、不徹底は矢張り免れ得ない。

(イ)或る日本語に相當する支那語が唯一つあり、其支那語に相當する日本語が唯一つあると謂ふ場合卽式で示せば先づ次の樣にでも表はす可きもの

(或る日本語)≡(或る支那語)

(ロ)或る日本語に相當する支那語が全く無い場合

(或る日本語に當る支那語)＝〇

(ハ)或る日本語に相當する支那語が二つ以上ある場合

(或る日本語)＜(支那語)

(ニ)右と反對に或る支那語に相當する日本語が二つ以上ある場合

(日本語)＞(或る支那語)

◇ 右の內(イ)項の場合には別に差支が起ら無いが(ロ)、(ハ)(ニ)の場合には色々な不都合が起つて來る。第一に(ロ)の樣な場合卽或る日本語に相當する支那語が丁度無い場合にはその日本語の書きやうが無い。

例へば、ワカル、ハイル、ハヤル、キマル、コナレル、スケル、アルク、アヤフヤ、アブナイ、ヤさシイ等の立派な日本語を書き表す事が出來無い。之等の語に對して現在漢字でどう書いて居るかと云うと。別に名案も浮ばないから仕方が無しに、「分る(判る)」、「定まる」、「這入る」、「流行する」、「淨化する」、い(浮雲い)」の樣な無理な書き方をして、先づ當り

に合はせを行つて居る。殊に、たゞ適當な漢字が無いと云ふ丈の理由で「ハヤル」、「コナレル」のやうなよい本來の日本語を捨てて「流行する」、「消化する」のやうな外來語をとり入れねばならぬ漢字の仕組が不都合極まるものであると云ふ事は既に私が八月號の本誌で述べた處である。

◆ 殊に滑稽なのは彼の宛て字である。「サスガ」、「ヤタラ」、「ヤニハ」、「マジメ」、「トカク」、「メデタイ」等の日本語に對しても、それに當る支那語が見當らぬから我國で勝手に流石、矢鱈、矢庭、眞面目、兎角、目出度等の出鱈目な宛て字を作つて、之も應急の不便を凌いで居る。

宛て字の内で最も極端なのは日本の地名、人名を漢字で表はしたものであるが、それ等の大部分は全く遊戯半分に作られたので無ければ謎である。

地名では、相模の釋迦牟尼佛(ヨクルヘ)、羽後の言語同斷(テクラ)(これをテクラと讀むのこそ言語同斷である)、常陸の月出里(スメナ)、下總の行行林(オドロヘヤシ)、常陸の木葉下(アボッケ)、近江の不知哉(イザフ)、甲斐の左右口(ウバグチ)と御袋(ミナヘ)、越中の眼目(サッカワ)、豐後の双(ユ)逕(クロ)、下野の大歩(ヘブ)と巴波(ウヅマ)、上總の小食土(ヤサシド)、美作の小童谷(ヒヂヤ)、羽前の文下(ホウメシ)と及位(ノゾキ)と左澤(アテラサハ)、河内と出雲の日下(クサカ)、薩摩の水流(ツル)、備中の有漢(ウカン)、筑前の目尾(シャカノヲ)、伯耆の車尾(クヅモ)、備前の紙工(シトリ)、甲斐の石花(セ)、陸奥の善知鳥(ウトウ)、出雲の大明(ホノカ)等殆んど讀に堪えない程可笑な宛て字があるが最も奇拔なのは

山城の一口(イモアラヒ)
陸奥の十三(トサ)
遠江の十五七百(キイナゴ)
出雲の十六島(ウップルイ)
陸前の十八成(ククナリ)
下野の十八女(ワカイロ)
上總の二十五里(ツイヒナ)
羽前の二十六木(トドロキ)
能登の廿九日(ヒヅメ)
讃岐、越前、能登の九十九(ツクモ)

などの類である。

◆ 甚だくどいやうであるが、漢字の不都合な事を讀者諸君に徹底的に了解して戴く爲めに、私は引續いて外國の人名や地名の書き方に就き一言せねばならぬ。

亞米利加、佛蘭西、伊太利等の宛て字はまだしも、それを簡單にして或は亞米利加を米國と呼ぶが如きは殆んど意味をなさない。また米綿暴落と云ふ新聞の記事を見て、「米も木綿類もこれから安くなる」と思つて安心した月給取もあつた。佛語か佛蘭西語の事であるか佛語であるか解らなかつたりするやうなフツゴな事もある。併しこの話は寧ろ後段述べる(二)項の例とす

る方が適切である）晩香坡、甲谷陀、伯林、桑港、紐育、黒山國、牛津、劍橋（これは丸で電車式だ！）馬耳塞（馬の耳に念佛だとか、馬耳東風だとか云ふ言葉もあるが、之は又念のいつた話で、その又馬の耳に栓を挿した様な地名である！）や、維遜、黒鳩公、冷忍の類に至つては殆んど文字の遊戯である。

◇次に、第二の不都合は（八）項の場合である。即或る日本語に相當する支那語が二つ以上ある場合には、支那語でそれ等の内、どれを使ふ場合に當つて居るかに從つて（日本語が一つであるに拘らず）書き分けをしなければならない。

例へば、唯一つの日本語の『みる』や『きく』や『まつ』などに對して「視る」、「見る」、「觀る」、「覧る」、「看る」、「瞻る」、「覩る」や「聞く」、「聽く」や「待つ」、「俟つ」、「竣つ」、「須つ」などがある類である。

之等の書き分けは私共が小學校以來殊に多大の苦心をして敎はつて來たのであるが、私などには今だに之等の書き分けの方則がよく吞み込め無い。

◇何故日本語の『きく』なら『きく』を表はす支那の文字が幾つもあるかと云ふに、言ふ迄も無く、この日本語に相當する支那語が幾つもあるからである。從つてそれ等の支那語を表はす支那字がそれぞれ「聞」、「聽」に分れて居るのは當然な話である。而して日本語の『きく』に對して支那語が何故に二つもあるのかと云ふに、此の場合には支那人の思想が日本人のそれよりも複雜である爲めに——言ひ換へれば、日本人の物のきき方が支那人程微妙で無かつたのだ——日本では唯一つしか出來なかつた語に對して支那では二つも出來た次第である。

◇右の様な譯であるから從て吾々が學校で日本語の文章を書く場合に（支那の文章を書く場合は別）之等の書き分けを骨を折つて習つたのは實に馬鹿氣た無用の努力であつたのだ。而も今日の小學校、中學校、女學校は尚それを繰り返して居る。日本語は（字を幾通りに換へても）『きく』なら『きく』一つである。唯それに對する支那の語が用途に從つて二つの場合を區別するだけの事に過ぎない。支那の語では、それが丸で違ふ語であるからそれを書き示す字も違ふのが當り前であるが、日本語は一つであるから一つにするのが當然である。勿論書き分けをして置けば、夫か支那の語の孰れに當るかを示して置くだけ意味の區別が出來て居るから、只『きく』一つよりは意味が精密になる利益はあるが、それは日本語以外の事で示された區別であつて日本語を書くと云ふ點では要ら無い事である、

◇第三の不都合は、（八）項の場合と反對に、或る支那

する日本語が二つ以上ある時には、讀み方が判らないと云ふ事である。

例へば、『こまかい』と讀んで貰ふ積りで「細い」と書くと『ほそい』と讀まれたり、「周り」が『ぐるり』とも『まわり』とも讀まれ、又「止める」が『とめる』か『やめる』か判ら無かつたりするのは此部類に屬する。尙此の様の例は(ハ)項の場合と同じく澤山あつて、

「弾いて」　ひいて、はぢいて、
「側」　そば、わき、かたはら、
「調へる」　ととのへる、しらべる、
「急く」　いそぐ、せく、
「上る」　あがる、のぼる、
「下る」　をりる、くだる、さがる、
「斷つて」　たつて、ことわつて、
「後」　あと、のち、うしろ
「前」　さき、まへ、
「宛」　あて、づつ、

などは共一部分に過ぎ無い。

◇之等の場合、日本語では『ほそい』と『こまかい』或は『とめる』と『やめる』のやうに二つ宛全く違つた語があるのに、何故それに當る支那語が一つ宛しか無い——從つてその支那語を表はす支那字が細、止の一つ宛しかない——のであるかと謂ふに、これは丁度『きく』の場合とは正反對に、此度は支那人の思想の方が日本人のよりも單純なので、詰り支那人は『ほそい』と『こまかい』とを區別するやうな、そんな微妙な觀念を持たないからである。手つ取り早く謂へば(ハ)項の場合は支那の方が思想——從つて言語——が豐富であり、(ニ)項の場合は日本の方が却つて進歩して居ると謂ふ事になるのだ。

◇私は此の處で一言諸君に注意をせねばならぬ事がある。學者往々にして日本語の貧弱なことを嘆き、英佛獨語などの豐富なことを述べる事があるが、この説は或る特別な思想に就いては言ひ得るけれども、又別の方面の思想を表はす事になるとそれが逆になる事があるから、決して一概に論斷する譯には行か無い。彼の英文和譯に從事する人が常に日本語の貧弱なのを慨むと同時に、譯者が和文英譯をする場合に常に英語の語彙の足らざるを託つのなどは此邊の消息をよく物語つて居る。

因に、外國語でヤレ船は女性の名詞、机は男性鉛筆は何性などと云ふ事があつて色々とそれを區別して居るが日本語に此の區別が無いのも、今孰れを優れりとするかは暫く別として、日本人には机や鉛筆に迄も性的區別を付けるやうな觀念が全く無いからで、そんな

本はどうでも好いのである。それと反對に外國語の言ひ廻し方に日本語のやうな敬語が少いのは　外國人には上を敬ふと云ふ觀念が少いから從つて其言葉も出來なかつたたけの話で、所詮は皆思想や知識の相違が根本の問題である。

田中館博士曰く、「本來日本語の素質は立派なものであつて――たゞ漢字が渡つて來た爲めに變な漢語が出來たのだ――例へば「とる」が「とらる」、「とらす」（口語では「とる」が「とられる」「とらせる」）のやうな巧妙な語尾の變化で文法上所謂受身、可能、使役の場合を表はして居る。又人に依つては日本語に單數、複數の區別が無いことを非難するものがあるが。數の觀念を示す必要のない場合でも是非此區別をせねばならぬ處の西洋語の仕組は吾々にとつて煩しく且意味の無いことである。而もそれの必要のある場合には日本語ではチヤント

人々、節々、島々、隅々、所々、

と云ふやうに名詞を重ねて、又は

貴族がた、親たち、女ども、子供ら

のやうに名詞の下に「がた」「たち」「ども」「ら」などを附けて之に應じて居る。尚もつと數學的に數量を示し度い時には

五枚の紙、九人の男、筆三本、薪一わ

等のやうに變通自在にそれ等を表はし得る」

◇それはそれとして再び前の話に戻つて、日本語においては『ほそい』と『こまかい』とは全く別々の言葉であるのに、只支那と云ふ外國に於いてそれが「細」一つになつて居るはつかりの理由で、日本語の書き方で區別が出來無いなどに至つては主客顛倒と云はうか何と云はうか沙汰の限りである。

◇以上述べたゞけでも不都合の極みであるのに、かてゝ加へて、我國では漢字を昔の支那の音の儘に讀む事を許して居るから前に掲げた（イ）項の最も簡單な場合でさへ（ニ）の場合と同じ事になつて、書いてある事が確かに讀めなかつたり讀み誤られたりする事が起る。或人が『家の間數（マカズ）を測つて與れ』と云ふ注文を受けたのに對して、間口何間、奥行何間の間數（ケンスウ）を測つて報告したと云ふ間違も時にとつては只の笑ひ話で濟まされ無い事にもなり得る。尚、見物と見物、表と表平家と平家などの類も控へて居る。

◇話の種◇

林家受付

東大教授、文學博士林博太郎伯が今年の春洋行の時、見送人の便宜を計つて東京驛に「林家受付」と書いた立て札を建てた處が、通りがかりの粗忽者がそれを見てつぶやいた。

『はゝあ、あの男が赤坂の林家の亭主かい？　それにしても立派な男だね……』

◇尚最後に殘つて居る今一つの不都合を述べて私は本章の結論に到り度いと考へる。それは即、右に述べた支那の音がいゝ又呉音、漢音、唐音に分れて居る事である。例へば同じ音讀でも「變化」を『へんくわ』と讀む時と『へんげ』と讀む時とに依つて丸で違ふ意味の語になつて仕舞ふのである。

殊に又前記(ロ)、(ハ)、(ニ)の場合と音讀(而も三種の音がある)の場合とが色々に組合つて複雜な場合が出來るから吾々の日常生活の不都合は右に述べた總計に數倍する理屈である。

◇この様に吟味して見れば、漢字は啻に兒童教育の上から或は國民の效能率を發揮する上から見て不都合である計りで無く、讀者諸君は明かにそれが日本語を書き表はす可く本來不適當な代物であることを看取されたであらう。要するに吾々はもともと、表はす可からざるの文字を持つて來て日本語を表はしてゐつたの第なのである。而して表はす可からざるの文字であるが故に色々の不都合や不合理が生ずることとは知りつゝも、先づ當座の間に合はせには大した差支も無からうと云ふので今日に及んで居るのだ。宛も彼の『茶腹も一時』が辛うじて當座の餓を凌いで居るかの如くに。

◇話の種◇

議會の大問題「蔵原事件」

私の同僚に海軍大尉内藤淳、同黒川淳、及海軍中尉礒部淳と云ふ三人の海軍士官がある。此例を見ても如何に漢字が日本語を寫すのに不適當な代物であるかが窺はれる。日本人の姓名すら書き表はし得無い文字が日本の國字たなとどは戯談にも程がある。

處が一部の無神經なお目出度い連中は『そんな事はどちらでもよい。淳だつて淳だつて淳だつてどちらにでも讀めるのだから構はないではないか』と云ふ。元來固有名詞が『すなほ』でも『じゆん』でも『きよし』でも何れでも構はぬと云ふ法は無いが、それよりも次の蔵原代議士の話でも聞いて其爪の垢でも煎じて呑んだらよからう。

第何議會の出來事であつたか、時の陸軍大臣寺内將軍は衆議院議員蔵原惟郭氏を『ぞうはら君』と呼んだので端無くも問題となり、蔵原氏は金時の様になつて

『ひとをゾウハラとは甚だ怪しからぬ。我輩がゾウハラなら貴様はテラナイだッ!』

此時寺内大臣の態度は如何に?と云ふに、只平謝りに謝る外は無かつたのは惜しき話の限りであつた。國字問題の研究は國務大臣にとつても亦大切である!

六 間に合はせ物の日本の現状

◇漢字が日本語を寫すのに間に合はせ物であると云ふ事は前章で述べた。而して假名も亦同じ様に間に合はせ的のものであ

る事は追て述べる事とするが、併し諸君は熟々我國の現狀を觀察する事に依つて、何一つ間に合はせ物で無い物は無いと感ずる程の色々な事實を發見されるであらう。これは日本が永遠の使命を持つて居ると信じて居る吾々の信念とは隨分懸け離れた現實である。

◇先づ吾々の生活に一番手近な物から調査して見ると、日本服殊に婦人の衣服の如きは、半襟と云ひ、直ぐに擦り切れる裾と云ひ、隨分耐久力に乏しい假製品である。殊に履物となると、足駄とさうして爪革！

◇建物でも同じ事、神社佛閣のやうな千古に傳ふ可き藝術品でさへ永持ちのするのは少い。長野の善光寺の大伽藍も一朝火を失すると烏有に歸して仕舞ふ（善光寺の歷史を見よ）し、鎭守の森はいつも乍らの緑を呈して居る八幡樣の建物は動もすれば幾年かの雨風に朽ち果てる事を免れ無い。白木作りの清々しさを誇る我國の神社を今迄に鐵筋コンクリートに改める事を申し出したら愚に非れば狂の類であるが、それでも畏くも明治神宮の神燈は石造りである。今度新に落成した靖國神社の大鳥居は金屬製となつた。佛教のお寺も印度、シヤム、ビルマにあるパゴダは日本の樣な弱々しい作りでは無い。

◇ずつと下つて吾々の住居と來たら、間に合はせ物の見方であらう。『紙の家』とは西洋人の譬であるが、この障子と云ふ奴が又恐ろしく永持のしない代物であつて、宿屋等では指先きに唾を付けて、往々隣室を覗くための孔を開ける者さへある。子供の多い家では腰の方は大抵孔だらけになつて居る。故に子供持ちは通例家主から敬遠される。

◇又『疊と何とやらは新らしいに限る』と云ふ俚諺が明に證明して居る通り、この疊が又其場限りの植物性のものだ。其他垣根でも板塀でも永持ちのするものは至つて少い。

◇近頃東京の道路が惡いと云ふので大層やかましい問題になつて居る。『天氣の好い時は砂漠の砂曝らしのやう、又雨降りの日は泥海の樣な路になつて、船で無ければ渡れ無い』などと極端な事を云ふ西洋人さへある。西洋人への惡口はどうでも好いとして、一番困るのは日本人自身である。其又泥濘を泥除けと云ふ世界の何處の文明國へ行つたつて見られ無い發明品をブラ下げて走つて居る自動車は實に天下の壯觀である。足駄の爪革と自動車の泥除け！爪革の護謨紐が切れて人前でトンダ恥曝しをする事があるのに、泥除けの方は車といつしよにグルになつて廻轉して居るのさへある！

◇吾々の國字問題でも――漢字制限案がまた間に合はせ案である事は既に八月號で述べた――衣服や住居の事でも、建築の

設備にした處で凡てが斯の樣に間に合はせになつて居て、日本ではそれ等を根本的に改良すると云ふ事がなされて居ないのは何故か。或人は日本が貧乏だからであると云ふ。併し少くとも是等の問題では、永い間の算盤勘定から謂へば間に合はせ物が詰りは非常な損になると云ふ事は否定出來無い。此理屈が判つて居乍ら、日本人が間に合はせ物で我慢して居ると云ふのは日本人の性質に依るのであらう。それなら日本人がどうして間に合はせの性質を持つ樣になつたかと云ふのに、私の見る處では次の二つに依るらしく思はれる。

(a)佛敎の影響を受けて、『此の世 假りの物、うつし世に暫く腰掛けに來て居る處で、本統に生のあるのは死んでから』と云ふ考があるから、常々此の世の不滿足や不充分と謂ふ事に滿足して――寧ろ諦めて――居る事。

(b)日本は外國に較べて恐ろしい天然の影響を受ける事が多い地震、雷、火事及親父の外に毎年秋になると此國を襲つて來る處の暴風（あらし）や洪水やさては津浪（つなみ）などは日本人の永年に亘る計畫と勞苦と施設とを根こそぎに覆して仕舞ふ。そこで日本人は永い間の經驗からして、この樣な先きざきを見越した計畫をしても駄目だと云ふ事をよく心得て仕舞つた。

◇かてゝ加へて、近時の功利的思潮の流行は、國民をして自分自身の事だけしか考へ無い樣にしてしまつた。少くとも自分の生きてゐる間の事だけしか考へ無い者が多い。聞けば植林事業などは日本で最も流行し難いものゝ一つだとの事である。

◇日本の現狀がいくら間に合はせであつても、日本の國と民族とは決して其場限りの線香花火であつてはならない。永遠の使命を持つて居る我國がいつまでも間に合はせでは濟まされ無い。吾々が此世に生れて來たのは何の爲めであるかと云ふ事はよく判ら無いが、吾々が日本に生れたからには吾々の活きた社會即日本を吾々が祖先から受取つた時よりも一層立派なもの――住みよく學びよい世の中――にして次の國民に引き渡すと云ふ事が吾々のこの世に對する一番大きな務めではあるまいか。

七　國語の正當健全な發達

◇扨これで愈々漢字のやうな形象文字は敎育の不經濟を省くと云ふ點から見ても、又日本語を寫すと云ふ方面から謂うても不都合極まるものであると云ふ事に議論が定まつたが、形象文字がいけないとすれば殘る處日本人の口で云ひ耳で聞く處の音即ひゞきを表はす音文字である。

音文字はローマ字にしても假名にしても、漢字の樣に字數が多く無いから敎育上漢字のやうに不都合な事が無い。又言葉の

ぴどきの通りに寫すのであるから、私が第五章で述べたやうな不都合、不合理、不徹底が絶對的に無い（尤も假名には幾分かある）。

◆此處迄述べて來ると讀者諸君の多くは多分判を捺したやうに、次の疑問を發せられるに相違ない

『ローマ字や假名のやうな音文字は改良論者の云ふやうな利點もあるが、又缺點も少くない。第一、形象文字のやうに花、鼻、初や原、腹の區別が書き表はせない』

◆この疑に對しては私は先づ次の樣に答へたい。

『それは多くの場合、話や文章の前後の關係や、場合々々で區別が判る。今草花の事をかいてある文章の中で Hana とあつたら誰だつて鼻と間違へる事はあるまい』

そうすると頭の好い讀者は引續いて反問されるであらう

『多くの場合はそれでもよからうが、百回の内たとへ一回でも不完全なことがあつては矢張り間に合はせたるを免れない。例へば今顏の事をかいてある文章の中で Hana no Kambase とあつた場合には誰でも一度は鼻の事を考へるに違ひ無い』

◆そこで私は第二の答辯を申し述べるであらう。

『若し讀者をしてその樣な疑問を起させる處がある場合には吾々は左の樣に音の揚げ下げを利用して符號をつける事に依つて區別する』

Haná（花）, Hana（鼻）, Hána（初）

Hará（腹）, Hára（原）

すると八月號の本誌で既に豫備智識を貯へて居られる讀者はこの答辯に滿足する事無く更に突き込んで尋ねられるに違ひない。

『花、鼻、初や原、腹の例はそれでは撤回するが、公爵と侯爵、議院と議員などの漢語は音の揚げ下げも同じだから符號の付けやうもあるまい』

さてこれからが愈々本論である。

◆今假りに私が太平洋會議の全權の一人として樽俎折衝其宜しきを得大に國權を伸張し國利民福を計る事が出來た爲め上叙の華族に列するの光榮を得たと想像して見るのも惡くない。すると其事を傳へ聞いた私の舊友は菓子折の一つでもブラ下げてキツト私を訪ねるに違ひ無い――西郷從道侯が華族に列せられた時の述懷談に『華族になつて別に大して變つた事も無いが、只親類がいやに急に殖えたよ』と云ふ話がある。

『君は今度華族に列せられたさうだが、華族は公爵何爵か。伯爵か子爵かね？』

すると私は鼻をうごめかし乍ら、グット反り身になつてい

も應揚に答へるであらう

『ウン、こうしやくだよ』

◆扨問題は此處だ。これでは私の友達には私が公爵であるか將た侯爵であるかサツパリ見當が付くまい。而もこの事は啻に私の友達に見當が付か無い計りで無く、どんなエライ日本人——文學博士でも——を連れて來たつて決して解りつこはない。つまりこの『こうしやく』と云ふ言葉は日本人同志に通じ無い言葉なのだ。凡ての日本人に通じないやうな言葉は果して日本語であらうか？少くともそれは正當なる日本語ではありやうが無い。

宮内省邊りの實際を見ても式部官が五爵の席を指定する場合には次のやうに云つて居るとの事である。

『ソウロウコウシヤクの方（侯は候と違ふのだけれども）はあちらへ、キミコウシヤクの方はこちらへ』

即此場合にはコウシヤクと云ふ言葉は忽ち權威を失墜して仕舞つて、キミコウシヤク及ソウロウコウシヤクに取つて代へられたのである。

◆既に日本人同志に通じ無い——凡ての日本人に判らない——言葉は日本語で無いと云ふ事が承認されたならば、吾々の公爵と侯爵との書き分け方に對する答辯は極めて簡單である。吾々は元來「日本語をローマ字で書くこと」たゞ研究して居るのであるから、日本語で無いやうなものの書き方は研究の限りでは無い。今少しく親切丁寧な物の言ひ方をすれば、譯す可き言葉が既に不完全であつて日本人に通じないのはそれは、言葉の側の責任である。日本人に通じない言葉をローマ字書にして判らないといふは寧ろ當然な事であつて、それは文字其物に缺點があるからでは無い。

◆それなら何故に斯くの如き不都合な言葉が日本人に澤山出來たかと云ふに（八月號の本誌參照）、それは我國が漢字を使ふからである。書いたものを見た場合には區別が付くと云ふ漢字を使ふからこそ人々は此等の言葉を整理しない計りでなく、新しく惡い言葉がドシドシ製造されつゝあると云ふ事に就いては既に八月號で述べた。即漢字を日常使用の文字として居る結果我國は第三に日本語の正當健全なる發達を妨げられつゝある。而してそれを救ふ爲めにも日本がローマ字や假名のやうな音文字を採用せねばならぬ事に就いても私は前々號本誌上で詳述したから今それを繰り返さない。

八　むすび

◆以上述べた事の要領をかいつまんで見れば

第一、教育の經濟と云ふ點から見て、漢字は頗る宜しく無い。

第二、日本語を書き表はすと云ふ點から見ても、本來漢字は不適當なものである。即國字としての任務を完全に果して居無い。

第三、漢字を使ふ爲めによい日本語が滅びると共に、書いたものを見なければ判ら無いやうな語が殖える。言ひ換へれば日本語の正當健全なる發達を計る爲めには是非漢字のやうな形象文字を捨てねばならない。

第四、第一の弊害を救ふには日本語を書く方法を簡單にする事に依つて第二及第三の缺點は日本人の口で云ひ耳で聞く處の音(ひゞき)を寫す處の文字を採用する事に依つて達成される。これ即ローマ字國字論の起る根本原理に外ならない。

◆國字改良の原理は勿論これで盡きたのでは無い。漢字と國民思想殊に儒教との關係、ローマ字採用に伴ふ外國語との交渉、日本語の世界的發展、文明的諸機械と國字問題、二種の音文字――ローマ字と假名――との比較、各種ローマ字綴り方の問題等に亘つて更に詳細なる攻究を要するのであるが、私は讀者の倦怠を慮れて此處に一先づ筆を擱く事とし、他の機會を俟つて逐次それ等の問題に言及したいと考へて居る。終りに臨んで吾々の主張する處のローマ字(日本式綴り方)の短い日本文を左に掲げて諸君の參考とし併せて諸君の疑問を喚起するの材料に供し度いと考へる。(大正十年九月十二日、)

◈ Hanasi no Tane. ◈

Midu no Kawa to Hone.

Rômazi no daikiraina aru Kangakusya ga aru Atumari de Kanzi no Kônô wo nobetatemasita. "'日' to '月' to wo awaseta no ga *akarui* to nari, '清' (*Midu no aoi* no) ga *kiyoi* to naru no mo omo-iroi ga, '波' sunawati 'Midu no Kawa' ga *Nami* to naru nado wa zituni Rikutu ni kanatte iru. Konaida aru Kaigunsi-kwan no Hanasi ni, Aranami no tokini itiban heikina no wa Senkôtei da to iu koto de aru ga, kore sunawati *Nami* ga 'Midu no Kawa' de aru rippana Syôko dewa naika!"

Suruto Kikite no naka kara tondemonai koto wo taduneru mono ga dete kimasita.

"Imano Senkôtei no Hanasi de, '波' ga 'Midu no Kawa' de aru koto wa yoku wakarimasu ga, tagai

'清' (*nameraka ga*) 'Midu no Hone' de aru to iu Wake wo osiete kudasai!"

Oyakorosi to Sinsetu to no Kwankei.

Kore wa Môa-gakkô de kita Hanasi de aru ga, Kanzi no Kyôiku wa Osi ni taisite kotoni mudukasii to iu. Tatoeba, '**親**' to wa Titihaha no koto de ari, mata '**切**' to wa *Ki wo kiru*, *Hara wo kiru* nado no *kiru* to iu Imi de aru koto wo osieta atode, '**親切**' to iu Mozi ni dekuwasita tokini makotoni komaru. "Titihaha wo kiru" sunawati "Oyakorosi" to iu koto ga rippana Nippon no Dôtoku de aru towa dosite Gatten ga dekiyo zo!

附記――本論を書く上に參考とした書類は左の通りである、而して私の議論中往々田丸博士の說を其儘借用に及んだ處が少く無いことを此處に御斷りして置く。

理學博士田丸卓郎著「ローマ字國字論」

田中館、芳賀、田丸三博士著「ローマ字獨りげいこ」

月刊雜誌「ローマ字世界」

（以上東京本郷駒込曙町十一田丸博士方日本のローマ字社發行）

生存權の脅威から來る社會的罪惡の諸相觀

千葉龜雄

一

生存の脅威から來るところの、現代罪惡の諸相を細かく檢討する人には、その檢討が、屹度意外な逆說的な結論に到着することを自分ながら驚ろくであらう。それは謂ふ所の諸他の社會的罪惡が、脅威される側から發生したものが大變すくなくて、

却つて脅威する側の罪惡が、案外その大部分を占めて居ることである。そして其の脅威する側の罪惡には、多くか少くか、生存權を脅威する爲の意志と手段が、屹度加へられて居ることである。

生理的に社會的に生存權を脅威されたものは云ふまでもなく貧窮者である。「貧窮は罪惡であるか」と云ふ警句は、可なり長い間世界の常識になつて居た懸案であるが、殊に英國の十八世紀頃から現代までの救貧論者や社會思想家によつて、垢光りのするほど取扱はれた論題である。それを肯定する人々にも貧窮を持ち來すところの色々な不德が、罪惡と垣一重だからと云ふのと、「貧乏が罪惡の父ならば理性の缺乏はその母だ」と云つたラフルイエルのやうに　貧乏が理性を必然的に蝕ばむ故にそこに罪惡が續いて起るのだと考へるのと二つの相違があるが、何にしても貧乏罪惡論の肯定者たるに違ひは無い。けれども此處には後に考へやうとする論點を確かめる爲に、バアナァド・ショウの「マジョル・バルバラ」中の對話を少し長いけれども此處に引用さして貰ふ。

アンダアシャフト「私はお前に着物も着せ家も貸してやり、食はせて遣りもした、それから氣を付けて小綺麗な生活が出來るやうに尤分なお金も遣つた――いや尤分以上に遣つた。今日お前さんがこんな風に悠々と懸念も無く使ひたいほどお金の使へるのもみんな其の御蔭ぢやないか。私はかうしてお前の魂から致命的な七つの罪惡を救つてやつたのだ」

バルバラ(どぎまぎして)致命的な七つの罪惡ですつて」

アンダアシャフト「そうとも恐ろしい七つだ(と指を折つて數へながら)まあ、食物だ、それから着物に火に屋賃、税に他人の尊敬と子供達とこれで以て丁度七つになる。人間の首に掛つて居る此の七つの重い石臼を揚げるも揚げられぬも皆んな金一つの力だからな。靈魂でさへ此の石臼が揚げられない限りは浮べないのだ。かうして私は貧乏の罪惡から彼女を救つた譯なのだ」

カズンス「貴方は貧乏を罪惡だと云ふんですか」

アンダアシャフト「罪惡だともさ、その中でも一番質が惡いのだ。外のどんな罪惡でも其傍には何かしらの德用がある。他のどんな不正直でもそれに比べればずんとお侍た。處がそれが貧乏となるとそこ全體の町を腐らかして了ふのだ。身ぶるひす　やうな惡疫をふり蒔く、それをかいだり見たり聞いたりした人間は一人殘らず死んで了ふのだ。なるほど其處に人殺しとか、彼所に窃盗とか、今まなぐり合ひがあるとか、それから呪ひ合ふとかへんな騷ぎはどこにも始終在るが、それが何だ。倫敦中でまさか五千人とた贓まがたしの犯罪人がある譯ではあるまい。處が倫敦市中には、下劣でむさぐるしくて、營養不良で、襤褸を着て居る貧民が何百萬人と居るのだ。

彼等は何時我々を相手として蜂起して我等を彼等の地獄の世界へ叩つ込むかも知れぬのだから、だから我等はその用心の爲に我等の自由主義なんてものは七里結盃にして、思ひ切つて殘酷な防禦手段を講ずるのも止むを得ないと云ふ譯ぢやあるまいか。犯罪人を恐れるのは唯馬鹿者だけだ。我々凡ては誰でも貧乏を怖がるのだチエツ！」

二

之はシヨウが例の深酷な諷刺の眼から眺めて、現代資本家階級の心理を説き現はしたものであらうが、たとへ資本家ではないにしても、大抵の人は貧乏と罪惡との交渉を、多少の範圍でこんな風に考へて居ないものは尠ない。それは何故であるか。思ふに罪惡の反面に立つものは道德であり、それを更に照り返すものは法律でなければならない。だから前者の浸潤的思想に何等かの間違ひがありとすれば其の檢討は先づ傳統道德と傳統法律の展望から出立されねばならない。

私は凡ての世界は、國家は、社會は、個人は、みな一列に思想世界、思想國家、思想社會、思想個人であり、又た一列に道德世界、道德國家、道德社會、道德個人であるべきだと思ふ。そして夫れ等が皆な夫れ夫れの地位を占め得るのは、それが皆な正しく、充分に樂しく生き得るだけの物質的資料を與へられた後でなければならぬと思ふ。それが充分に正しく樂しく生き得る資料を與へられた後でも、未だ正しい道德生活を爲し得ないとならば、それは、道德的罪惡として責められる許りでなく、その生存さへも擧げて消滅させられねばならぬのである。何故かとなれば、私は道德とか思想とか云ふものを以て、今までの倫理學者が考へるやうに、人生をよりよく支持する爲の手段であり、屬性であるとは考へない。唯だ正しい樂しい價値の爲に生存することそれ自身が直ちに道德であると考へるからである。けれども此處に何等かの準備で、均一に誰にでも自由に許さるべき等の生存權をゆるされず、充分に樂しく生きる資料を與へられない爲に、正しい價値の生存を持ち得ない社會が一つでもありとする。それを私の理論に延長すれば、充分の生存權を得られないものは、又た充分な道德性を持ち得る機緣のないものである。隨つて道德上の責任も持ち得ないと云ふことゝなる。一體反道德と云ふことは道德性を持つものにのみに對して攻めらるべきであつて、道德性を持たぬもの、即ち沒道德性者に對して責めらるべきものでは無い、ましてや彼等が生存權を持ち得ぬのは、少しも自分自身の責任では無くて、みんな他の搾取階級の發慾によるものとすれば、搾取階級はいはゆる彼等の罪惡と認むる何物の責任をも被搾取階級の責任とすることは出來ぬばかり

でなく、却つて自己等の貪慾が、こうした不幸な階級を社會の上に持ち來した事について、充分の辨償をすべき自辱を感ぜねばならないのである。即ち彼等は自分等が搾取した爲に正當な生存權を失ひつゝあるところの、奪はれ、蹂躪された階級の爲めにその不正な獲物を吐き出して、彼等の生存權と道德的生活を保證する處に、始めて社會共存の基礎は成り立つのである。

三

つまり私の茲で云はうとするのは、充分な生存權を持たないものに、其の保持し得られない道德の履行と、生存の脅迫から來るいはゆる犯罪の責任を持たせる意義が無いと云ふ事なのである。或は夫は犯罪と云ふやうな道德性を帶びてさへも居ないかも知れない。何故かなればそれは世間のいはゆる犯罪が、道德性の教養に依らねば矯治されぬに拘はらず、彼等の犯罪が、もし夫れが充分な生活權さへも獲られたならば、決して起らなかつたであらう事によつても解るであらう。それであるのに決斷のよい多くの倫理學者は、多數の資本家と共に、かう考へる。善の根を傷ける惡の根がどうしても切り取られねばならぬやうに、かくも犯罪の根であるところの貧民階級も亦たそれを改造するよりは、寧ろ自然的に取除かるべき筈のものだと考へるのである。或ひはそれほど亂暴に考へぬにしても、最近までの社會研究者には、善種的に救へない頽廢の一集團として貧民階級を認め、永久に汚辱的な慈善組織の中に、人種的研究の材料として殘して置かうとした者さへもあつた。然し多年慈善事業に努力した英國の故カノン・バアネツトの近著「貧富の危機」を見ると「慈善事業の不評判」と云ふ一章の中に、近代貧民の慈善に對する思想が變つた事實と、昔のやうに金錢だけの慈善ではいかぬ、たとへどんな大資本の慈善團でも、貧民の健康と知識を增進することを最先にせずには、慈善事業の無意味になつた事を語つて居る。そこでは又た或る勞働團體の首領が、此等の慈善事業が、第一に被慈善者の人格を認めず、第二に道德並びに社會的進步を拒むものである事を抗議したと云ふ。又た政府事業としてならば或は成功しても、個人或は團體の名で行はれる慈善事業は大抵成功せぬものだとも云ふ。つまり個人や團體の搾取の剩餘を、慈善の名に於いて分配されることが、今日のやうに自分と云ふものに目覺めた無産階級に取つては、たしかに堪えられない侮辱だと云ふのである。そこで彼等の或るものは、侮辱の意味で感謝なしに平然として享け取る。また或るものは全く跳ね付けて了ふ。それは當然に有り得てもよい事である。ニイチエは同情といふものの價値をあたまからこき下した・・

私は彼が云ふ强者落伍者の關係を離れて　慈善などと云ふ語彙の內容が、そのまゝに享け入れられて居る現代を激しい侮辱だと考へる。

四

私は又た生在權の無いものに、道德を自覺する責任を塗りつけるいわれの無い事を先に說いたのであるが、それは單に推論の結果を見たのに過ぎないので、事實、日々に生存權の脅威を受けつゝある無產階級は、決して道德性に於いて缺けて居るものではない。もし彼等の缺點を云ふならばそれは生活の脅威の爲に敎養の餘裕を持たないとから起るところの諸種の雅趣を缺いた行動と思索とであらう。もし彼等がショウのアンダアシヤフトが發明したやうな七つの缺乏を負はされた爲に、直ぐ罪惡の道に走る蓋然性があるものならば、現代のやうに無產階級の迫害が激しい日には、彼等の犯罪事件が、もつともつと日々の新聞に現はれてもよい筈のものであらう。處が市內國內の日々の現實を眺めて居る我等の眼には、そうした犯罪はあまり現はれて來ないのである。大正の新講談家と云ふ人達があつて、現代の社會組織には、五分刈頭の鼠小僧や角刈の鑄掛松の處世哲學が續々實行されることも、或は止むを得ないとだらうと結論して居る。又た第一、奈翁のやうな超人ラスコルニコフから見れば、螻蟻のやうな金貸の一老婆を慘殺して、あまねく世間の貧乏人をすくふ事は、超人萬能の哲學から見て何でも無い理論だと「罪と罰」が說明して居る。その「罪と罰」はひろく青年の間に愛讀されて居るけれども、それ等の處世哲學が、直ぐ手頃の實例として眞似をされ、實行されるには、現代無產階級の頭腦の働らきはもつと複雜になつて居る。彼等はみな我等に完成した產業組織中の一員として、正當な地位と生存權を獲やうとするのだ。そして充分にそれに參加する資格があるのだ。彼等は人類の結合の名實によつて、不正な剩餘價値に生存するところの搾取階級から、白晝堂々と生存權の讓り渡しを受けやうとするのだ、或はそうした不合理な社會組織の存在をどこまでも否定して、理想社會の建て直しに進戰しやうとするのである。何を苦しんで暮夜法律の際をぬすみ、人格の尊嚴を失つてまで資產階級の若干の家財財物を奪ひ取る必要があらうか。ウキクトル・ユウゴオが「哀史」の中で、「飢と凍えと、孤獨と、缺乏からのいたましい取引き、麵包の一とかけらの爲に一人の魂、悲慘がそれを提出して、社會がそれを受取つた」と云つてる哲理は現代の無產階級に取つてはあまりに消極的である。時代はちがつて來た。現代には斯うした積極的な社會改造の鬪士達が、法

理國家の治安と衝突して、牢獄に入るものが日々に多くなつた。そうした、實が毎日のやうに起つて居る。もし生活權の脅威から起つた直接生産として數へられるやうな犯罪者があつたならば、この各所の勞働戰の多數の犧牲者こそは確かにその唯一のものであらうが、しかし彼等の犯罪の特質は、その動機に於てより多く純であることを認めなくてはならない。或るものは正義の主張である。主張の貫徹に用ゐた熱情と手段の不適當なことが、公安と衝突した程度のものが大抵の場合であつて、主觀的に惡といはるべき分子を含んでは居ない。

五

唯だこゝに一つ見逃すことの出來ない犯罪は、無産階級者の公金の費消や、私物の窃盜やに關する裁判事件が近頃減きり殖ゑて來たことである。それは强盜とか追剝ぎとか云ふ暴力による刑事事件ではない。單に知識的な手段によつて他人の所有權を都合よく自分のものに移入し横領しやうとする質の惡い犯罪である。村役場、學校若くは郵便局員の頻々たる公官金費消などもそれであり、廣い意味で婦人の萬引などの罪目の繁多になつた事もそれに附け加へられよう。所が彼等の犯罪の目的は、脅威された生活の補償として、どうでもこうでも遣り切れなくて犯したものではない。だから犯罪によつて獲た財物は、大抵正當な彼等の生活の爲に費消されることが尠なくて、所有階級の遣るやうな、酒色の享樂に費ひ果される事が多い。たとへ犯罪によつてさへもそんな享樂を一度でもして見たいと云ふ彼等の欲望心理には無理はないが、一方所有階級の傍若無人に振舞ふ資本家心理が、正直な、小心な無産階級の人々に、どれほど强い催眠的幻惑を與へることかは、たにほど注意しても足りると云ふ事にないのである。

六

かくして生存權の脅威が激しい現代に、脅威される側に罪惡者が少なくて、世間を驚ろかすやうな罪惡が、大抵却つて脅威する側から起つて居る事は一見大へん矛盾した不思議な事實のやうに見えて、實は一向不思議でも矛盾しても居ないのである。

第一國家の法律と云ふものは、大抵の起原が一國の征服者とか特級階級とかによつて制定されたものであつて、無産階級は十に一にもその議定に參與してない。それだけ無産階級にとつては大抵不利なものである許りでなく、隨分高價なものである。「一體此の裁判は金がかかる」と云つた皮肉は、エドリアン、

カアペンタアの文句であるが、それを丁度よい實例のやうに提出してるのが、ジョン・ガルスウオジの「裁判」と云ふ短篇小説である。或る職工の不埒な女房が家を飛び出したが、それが爲に其男は一生涯新らしい女房を貰ふ事が出來ない。何故なら其男はいかに不埒な女房だからと云ふて離緣するには裁判を受けねばならぬ。所が其の裁判費用がいくら安く見積つても六十磅から百磅かゝるのだから、其日暮しの其男には二十年かゝつても溜められるかどうか請合へない。夫をガルスウオジが諷刺してるのだ。「君はそうしたら輿論で結末をつけると云ふだらう。處がどうして！、君が考へなくちやならん事は輿論などゝ云ふものは、君などよりはずつと暮し向きの立派な、裁判費用などは五人分も六人分も優に支拂へる人間共の寄集りなんだからね。（其場合は職工などは何時も沈默さ）．沈默した事件は統計に出ない、統計にさへ載らんなら、國家の道德にも名譽にも何の差障りにはならないのだからね」と斯う皮肉つて居る。尤も日本はいくらか事情が違ふが、こんな譯で、何にしても無產階級はあまり裁判所などには近寄れもしないし、又た近寄ることは何方にしても德のない事になる。が何よりも彼等は手から口への生活と正當な生存權獲得の努力の外には、そうした犯罪すらもしやうとする餘裕だにも持たないのである。

七

所が之れが權威階級になると、どうせ權威と搾取の階級である以上は、その搾取の手段をどこまで延ばしたとて、それが搾取の延長である以上、何等の不可思議もない譯になる。だから昨今の新聞を賑はして居るところの種々の大きな犯罪は、名もなく、地位もない無產階級から生れずに、みんな却つて地位もあり、名望もある、いはゆる、敎育もある紳士階級から出るのであるが、世論はそこを考へない、そしてその結論を方々へ探し廻つて、或る人々は全たく解決され得ない奇妙な現象のやうに考へ、或る人々は現代になつて紳士階級が全く腐敗して了つたと云ふやうな常套の歸決を見つけ出して、漸やく安心の胸を撫で居る。がそれはみな眞理を外れて居る。

彼の人々がそう云ふ結論に達したのに、敎育がある故に地位があり、道德がある故に名望があるのだと云ふ前提の間違ひから來て居る。そうしてそれは何よりも現代敎育の本質を、眞實に認識することの出來ない手落ちから來て居る、有名な「社會主義下の人間精神」で、オスカア・ワイルドが「社會で富者よりも一層つよく金の事を考へる唯だ一つの階級がある、それは貧民階級である。實際貧者は金　事しきや何も考へない。それが

貧者である事の悲慘だ」と云つたが、それが現代の世間に當て嵌めると、此の批判は決して眞實ではない。現代にあつては貧民階級よりも、より激しく金について執着するものは正に富者である。そして現代の教育の方式は、最も熱烈に此の獲得の精神を刺激する。

一體人類の大初に於いて、一番早く現はれた心理現象は、恐怖の觀念と獲得の觀念のやうに思はれる。恐怖の觀念は想像力を刺激することによつて不可知世界を創り出し、結局宗教の方へ入つて行つたし、獲得の觀念は戰爭と貿易の方へ精力を發散させるやうになつたのであるが、もう一度それを繰返して見ると獲得の觀念は即ち所有衝動の變化であり、恐怖の觀念は、前者の裏側を爲す所の所有をなくする事を怖れる思想である。それが段々と人間の親和力が加はり、社會の集中力が強くなると、自然と所有を失ふ心配も少くなる。恐怖の觀念の範が段々とゆるんで來て、こゝで獲得の精力だけが精一杯にのさばり出し、經濟組織が全たく情緒や戰爭の上にすわるやうになつた。こうなると時代は全く經濟戰爭の白熱期に入つて、その激烈な競爭によつて運び入れられた財力は、悉く國內國外に廣がつて資本制度となつた。資本制度の專制は、忽ちの中に貧富の階級の差別を不可抗力なものにして了つたが、そうなればなるほど、根本衝動であるところの所有の慾望はますます凡ての人を煽つて、專制の味はひをより強く玩味させようとする、其揚句世界を擧げて、狂亂の渦中に投込まれることすらも豫想されるところの、不老不死の恐ろしい呪咀の力を持つたものは此の所有の慾望であることがわかつて來る。

八

所有の慾望は其內容として、當然競爭と不平等とを含んで居る。それは當然人類世界の理想たるべき自由と平等とを抹消する思想を持つものであるからして、自由と平等を宣傳する爲に作られた筈の教育は、先づ何よりもそうした所有衝動が持つ概念を打ち滅ぼす事に力めねばならない。所がどうであらう、現代の教育の精神と形式は、全たくそうした期待を裏切つて居るのである。

それを何故かとなれば、教育の目的は全國民を平等に教育すべき筈であり乍ら、事實は少數者の職業教育に止めて、大半は落伍の運命にある。今は知らぬ、十數年前には、歐洲でも英國、それから米國を除いては、高等教育を受け得られる者は、國民の何分の一以上に少なかつたが、流石に英米兩國には個人の大學があつて大抵の貧學生にも相應の便宜を計つて與れた。國家

の高等教育機關が國民ノ租稅によつて成り立つて居るに拘らず、いざ入學を許すとなると、志願者の何百分の一しきや收容されぬと云ふのは至極不都合な話であるが、その少數も特別に知能がすぐれて居るとか、天才であるとかなら未だ承知もされやう。その撰拔が單にその靑年の財政狀態だけによると云ふ事は確かに許すことの出來ない非合理である。だから大學に行く者を秀才教育と云つてもそれは國內全體の中の秀才では全く無くて、少數の有產階級の中の、少數の秀才に過ぎないのである。始めから貧乏で、其の撰に入らない靑少年の間に、どんな秀才が潛んで居やうか、それは全たく未知數なのである。そして國內の大多數を占める無產階級の子弟達は、全く高等教育の光榮に預かることが出來ないのである。こうした文化の最高機關たる教育の狀態が社會に示唆する結論はどう云ふ事であるか。こゝでさへも所有精神の最も卓逸した持主たる資本家階級が、教育界の勝利王であり得ることでなければならない。

九

それはまだよい。

けれども恐らく一般國民の信念に宿る教育の概念は、全たく夫れ等の實情と夥しく違ふ所の、よほど理想に近いものであるべきである。いやあるらしい。しかし彼等は氣の毒なことに斯うした限定教育の實情を念入れに調べない。だから彼等限定教育者が、或ひは犯罪人であり、殺人者であり、收賄者であり、詐欺者である場合に一般國民の意識は全たく顚倒して批判がつかなくなる。けれど之れは當然すぎるほど當然な理窟なのであつて、つまりそれを前にあげた限定教育者の側から見れば、教育でさへも一切の標的と意義は競爭にあり、金錢にあつて、正義と人道とには無いと云ふ事の實物教授を受けた。彼等が其廿年間享け得た教育の効果を利用して、又たその教育によつて儲け得た鋭敏な所有慾を應用して出來るだけの搾取を計らうとすることも一向不思議な話ではない。已に搾取である以上は、それが道德の埒外にそれて居ることは一步でも十步でも違ひは無い譯である。もしそうでなく、そこに物の內殼に沈潛して、彼等の享けた教育の實質を檢討した人達があるならば、彼は決して斯うした人達を以て、社會の上流にも置くまい、名望も與へまい、彼等に名望を與へ、地位を與へることは、單に彼等の臨終を益す非慘にする許りでなく、社會根柢の平安を何ほどかでも次第に覆へすことになる。そうした怖ろしい間違ひを平氣で無意識で容して居たのは、つまりそれを容す國民のあまりに無知であつたことを示すものでなくて何であらう。若し社會に現は

れただけの道のやうた所有慾望の非慘な犯罪が、之ほど多いとしたたらば、不幸にして現はれないで居る罪惡は更に何程であらうか。もしかうした教育を受けた人間達が、一つの公共團體の中に置かれたなら、すぐそこに利慾一方のボス制度が出來て公共性の悉くを腐敗させることは當り前のことだ。一二正義の士がそこに居ても、結局何の足しになるものではない。其意味で昨今のいはゆる有產階級の非慘事は、昔し清潔で今日改めて腐敗したのではない。始めから頽廢するやうに組み立てられた十組織が、今日はもう救へない崩潰期に達したものであることを語るものでなくて何であらう。自ら蒔いた種は自分で刈らねばならぬ。今更苦情を申し込む理由は無い譯である。

一〇

思ふに社會の罪惡を杜絶する唯一の方法は道德なり、法律なりの上に、階級或は時代によつて差別するやうな有限的　躓づきを置かない事にある。チオツサ・モネエが「富と貧窮」に擧げた統計によると、英國民が一年十八億四千四百萬磅の歳入が在つた十三年前の一千九百八年に、其中九億九百萬磅の收入を得るものは國民中の五百五十萬人で、殘りの九億三千五百萬磅を、三千九百萬人で分配することになるのであつた、つまり歳入の半分は國民の十二パーセントが享受する事になり、當時四千四百五十萬人の人口の中で、三千九百萬人の多數が「貧民階級」と呼ばれる事になるのであつた　「我國のやうな世界の富國でさへ、此頃からそんなに廣く貧民が廣がつて居たのは驚いた事だ」と、彼は自國の有產階級の昔からの專制を批難して居るが、それは今日頻々として惹起されるところの英國の階級戰を見る時に、モネエの歎息の決して無意味でない事が首肯されるのである。已に兩つの階級にそんな激しい差別のある處へ、さらにそこへ特殊な道德や法律を設けることは、益す其の葛藤を強める途でなければならない。

たとへば或る種の倫理學者は、貧民階級の懶惰である事を責めて、それがその階級に定住して居なければならない必然の理由の一に數へるが、もし貧民階級の有閑が惡いとならば、有產階級の特權の一つたる無爲無勞働が何故にたびらに、より高い人間の誇りであるとして許されて好いのであらうか。社會科學者はその起因を調べて見て、それは中古時代の遺習が、今日までに傳へられたものだと斷定して居る。即ち中古時代には、無爲無職であることは、貴族と征服者の標章であり、勞役する者は征服され　者であり、屈從すべき低級者の宿命を自然に持つてゐたものとして見られてゐた處が、今日では、有閑階級を羨ん

者も、一向違つた人種の末裔でもなければ、百萬長者は征服種族の後裔でもなく、又たプロリタリアットは戰敗者の宗族でもないのである、唯だ歴史的の間違つた傳統が、その儘の間違つた觀念を今日まで因襲さして居るに過ぎない。

二

法律にもそう云つた處がある。道徳と法律の關係については古來色々な議論もあらうが、我等が正しい樂しい自由な生存を直ちに道徳であると見やうとする時に、直ぐその後衞に、反道徳のすきを見つけ出して、直ぐ刑罰を賦へやうとする法律の控へて居る事は淋しい。刑罰の豫想をいだいた法律に道徳が護衞され、道徳が規範されねばならぬと云ふのは確かに何處か間違つて居るものがあるので、かの老莊が、法律が起つた爲に大盜が出たと云つた逆説はたしかにその反應を見たものである。新らしい文化主義者は、道徳の基調を、自己と隣人を區別する爲の努力から出立するものだから、道徳その者の存在すらも間違つて居ると考へる。又たなまじいに法律があるが爲に、人は安心して法律と刑罰のすれすれにまで、その道徳墮落の緣線を觸れさゝせ延長させる附性を持つて居る。もしせめて道徳の責任を法律に依頼せず、また强制されずに、道徳自らで處分する世界になつたならば、世界の罪惡と云ふものは全く姿を變へたものになるだらう。法律はまた其の創始者が征服國家に起因する爲めに、所有の權利について殊に鋭敏な感覺を含んで居る。たとへば死刑などでもさうである。一つの尊とい生命をほろぼした代用に他の尊とい所有である生命を滅ぼすと云ふならば、それは取も直さず昔の復讐の精神の復用であつて極めて簡單である。しかし本當に人間を生かす途から云へば、懺悔の新生を許さない事は、尊とい愛と心靈の働らきを撥無することでなければならない。所が法律の眼は、第一に何よりも所有と云ふ事にのみ力點を置いて居る、そこで征服者たる幕府の昔では十兩以上を盜めば首が落ちたと云はれるが、十兩の黃金に値する生命の價値は、他人の所有を奪つた一時の暴力及び非道徳性と釣合が取れるものであらうか。此處にも所有者法治の精神があらはに出て居る。何故かなれば所有だけを生活の目的であるとすれば、彼等に取つて何よりも恐ろしい事は、その所有を奪はれる事だけであるからだ。該撒は自分は國民と共有の田地を耕すもので、私有地といふものは少しも持たないと云つた。其の代にあつては私有財産の持主は盜賊であつたのだ。然るに今日は、その私有財産を永久に子孫に傳へる爲の相續法さへも法律によつて保證されて居るのである。盜む事は罪惡として一班に認められ

るけれども、スパルタでは寧ろ勇敢な青年が必ず持つべき一つの德目と考へられて居たものだ。有閑階級と倫理學者の哲學はまた、仕事を持たぬ事の弊害を高唱する。すべての生理的機關は、それを活動させ、使用ない場合に於いては、即ち働かない場合に於いては發達せぬ許りか萎縮する有機的な肉體だと云つた。しかもその機關が懶惰よりも、過勞によつてより早く破壞されつゝある事實を看過して居る。

二

法律も道德も、すべてこんな風に一階級の思想に縛られて居てはならない、それは必ず文化と時代に連れて絕えず開展せねばならない。それが或る前代に有効であつたと云ふて、決してそれが後代に存在する理由を肯定しはしない。もしそうでなく後時代の人々が、前時代の傳統と因襲ばかりにかぢりついて、時代の生命を達觀する事が出來ねばそれはとりも直さず其時代人の無智を示すものである。

法律と道德が進轉する示標は、いつも絕對至上の人道的精神の開展の上に置かれなければならない。そこに至つて始めて刹那を通ずる瞬斷と永遠性を持つことが出來るのである。そしてそれが達成された時代の際に振返つて見たら、恐らく生活權の脅威の爲に現代無產階級が犯しつゝあつた所謂罪惡も、それは決して罪惡と呼ばるべき性質のものではなくて、それは止むを得ない生命の要求から泉む、躍動の一形相に過ぎなかつた事がわかるであらう。

三

それよりも眞の罪惡としてどうしてもゆるす事の出來ないものは、所有者階級がより以上を所有する爲に、敢てすることを惜まぬところの罪惡そのものである。實を言へばこんな罪惡で貪慾な所有的觀念は、もう早い頃に文化と敎育の力で、他の人生の有益な衝動に向けて在らるべき筈であるのに、それが今日まで具現しないのはみんな民衆の目覺めが遲いのと文化能力の稀薄な爲である。單に日本だけの歷史で云へば、封建時代の富豪者は、嚴重で犯すことの出來ない階級制度の爲に富の能力を示すことが出來なかつた。勢ひ御用商人とか札差とか雅俗とか云ふ程度の、武士階級の接觸によつて得た階級を誇りとして、一般町民と農民の上に僅かに溜飲を下げて居たものだが、一たび封建制度が崩潰して、階級的な精神が根本から威力を失つて了つた。又たデモクラシイの考へから、勳位官爵の空虛なつまらなさがわかつて來ると、どうしてもその心裏に反撥する

唯一所有慾の衝動そのものでなければならない。何と云つても最もまがひのない現前な人生の享樂は物質慾の享樂であつて、それには富の權力さへ握つて居れば、どこの世界だつて裏書して振出して異れない所は無い。けれども私は決して物質的慾望を精神的慾望より下に見やうとする唯心派ではない。人類が人間の生活を豐富にし、その內容を擴大し、深化して行くには、どうしても物質的慾望が必要がある、いや必要と云ふよりも物質的慾望の具現が必ずその後からついて來る。經濟學者は贅澤とそうでないものの差別を、必要の一線に置くのであるが、人生が必要だけの一線に沿ふて生活するだけでは、決して餘裕のある享樂の生活を生きて居るとは出來ない。又た發達した創造文化の生活を完成することは出來ない。人力車でも差支ひないものが自動車に代つたのは、必要よりも深く生活の有用化であり享樂化であるので、かの簡單生活の宣傳なんかと云ふものは、蒲燒の後の御茶漬とでも云ふべき貴族的趣味に過ぎない。だから生活の享受は何ほどでも深く大きい事を厭はないのであるが、唯だ一方で一人の人間が山林のやうな邸宅を占有する場合に、一方で膝を容れる住宅すらも獲られない何萬人の階級が居ると云ふことは、社會共存を土臺とする人間精神の名に於いて見るに忍びず又た許すとの出來ない罪惡である。色慾は人間の最大慾の一つであるが、資產階級は美貌な婦人の階級を集めた藝妓と云ふ職業を各所に存立さして、そうした婦人を、何等の神聖な心的交渉なしに專有する。それは國內幾萬の婦人階級接の人格的生活を滅ぼすものである許りでなく、それが間接直にひき起すところの一般若い婦人の思想と實際生活の頽廢を考へることは全く忍びない事である。けれども此等の現象と罪惡は、法律にとつては何等の緣故もないものとして取扱はれて居る。

一四

ところがその罪惡の感化が、現はれたものよりもより無限に深大であり許りでない、より多くの思索に觸れられない爲に、一層深刻に考へられねばならぬのは此の種の罪惡である。そうして我等の胸を暗くする現代の罪惡性は、最も多く此等の性質を帶びたものである。

要するに生活權の脅威が生む時代の罪惡を差別すると、第一が所有階級が生活權を脅威しつゝある其の罪惡である。第二が脅威せんとする罪惡——卽ち他の者を無殘におしのけて、自分だけが最大限の生活の優勝を占めやうとする罪惡である。法律上の犯罪者として記錄される等は多く此の場合である。第三た脅威して得た財權によつてあらゆる專有の衝動を滿たさう

とする其の罪悪である。そして之はどれも皆な所有者側の罪悪であつて無産者階級は之れに加はらない。或は無産者階級側から出る所有に屬した犯罪でさへも、みな所有者側の所有衝動の暗示をうけて、殆んど魔睡剤をかけられた心理作用に在る者の仕業であることは前に述べた。かくて見て來たすべて所有衝動の心理は、いつでも自分以外の他の者との存在と抱擁を絶對に否定することである。昔の國家征服慾の特權は、現代には金權的征服慾に轉回した。軍國主義の非合理を否定するものは當然資本專制の非合理をも難ぜねばならない。已に資本專制そのものが罪悪である時に、それが起した個々に現はれた罪悪を少し位ゐ批難したところが何の足しにならうか。已に其の罪悪を履行し得る社會制度と生活組織を許して置いて、その一二の非理だけを攻めそれを絶滅しやうとする人々の矛盾が私には分らない。

そうした絶大な無知を否定するが故に、私の結論はいつも理想文化の社會改造論までに後戻りする。

米が再び高くなつたら

法學博士　堀江歸一

米價の將來

米價が今後如何なる趨勢の下に、變動するであらうか。米の定期賣買を定業として居る投機業者の間には、此點に就て確乎たる見込があり、又餘り正確の處まで行かないとしても、大體の見込みを基礎として、今や種々の方面に取引を結び幾日の利益獲得に望を繋いで、已まないことであらう。私の如き米穀取引に對して全然無關係であり、又無經驗である者に取つては、斯る機微を理解し、將來の米價――其れが近い將來であつても、又遠い將來であつても――に對して正確なる推測を下すが如きは、不可能事に屬する。然し世間の風說を聞いたり、又私の常識に基いたりして、考へると、我國米價問題の將來に不穩の徴候が見

し來つたことは、爭ふ可からざる事實であつて、今や國民の注意も亦此一事に繋がつて居るように見受けられる。

元來本年の米の作柄は餘程都合好く行つて、漸く平年作に近い所位いか、又は次第に依つては、平年作より大分低いものであらうと云ふことは、此夏から世間の噂に上つた所であつた。固より一場の噂話しには過ぎないやうなものゝ、私は此說には自ら根據の存することを認めたのである。大正九年春の恐慌以來約一年間我國の諸物價は全體に下落の趨勢を辿つたが、個々の物資の價格に就て見れば、下落の程度の大なるものと、小なるものとの別があり、又近頃諸物價が騰貴の勢を盛返し來つた場合にも、騰貴の程度の強いものと、弱いものとの差がある。今最近一年間の米價に就て觀察すると、其下落した率は他の諸物資に比較して、最も強い一方に、近頃に爲つて其騰貴した率は他の諸物資に比較して、甚だしく弱いのである。其一斑は左の一表に依つて、之を知るを得るであらう。

諸物價指數比較（大正三年十二月中の指數を一〇〇としたるもの）

	大正十年七月中	前月中	前年同月中	前月中に比較	前年同月中に比較
米	二三四	二二四	三八二	騰四分五厘	落三割八分七厘
砂糖	三二五	三〇四	五七二	〃六九	〃四三二
生糸	一九二	一八九	一七六	騰一六	騰九一
綿糸	二八〇	二五五	三六三	〃九八	落二二七
木材	三〇九	三二六	三六二	落五二	〃一四六
鐵	一五一	一五五	二二六	〃二六	〃三三二

右は數種の物資の價格指數を拔抄したものに過ぎないが之を以てしても尙ほ物價の大勢を解するに足りる。而して之に據れば、米は物價下落時代には、三割八分七厘も下落し、砂糖に次いで最も著しき下落を示したのであるが、物價の騰貴しかけた昨今に於ては、騰貴率は必ずしも大なるものと云ふを得ない。此事は地方農家の經濟なり、生活なりに、如何なる影響を及ぼすであらうか。吾人の攻究に値する問題である。元來今日の農家を以つて、自給經濟を營み自足生活に安んじて居るとしたならば其れは大間違であつて、彼等は米なり、絲なり、其他農家の產出する物資を賣つて、他の必要品を購ひ、斯くて生活の方便を充しつゝあるのである。此際に米價が獨り強く下落して、他の物資の價格に於ける下落は之に伴はない。他の諸物資の價格は相當に騰貴し出したのに、米の價格は之に及ばないとしたならば、農家は之に對して何と考へ、又如何なる態度を持するであらうか。彼等は他の諸物資の價格に對して、米價の均衡を失すること斯の如くである以上は、米作に全力を致して、米の增收

を明することを以つて、有利であるとは考へない。随つて其増收に勉めないのは勿論、増收に必要なる肥料をも充分に爲さず人手をも足らず斯くて米作をして平年以下の作柄に陷らせるのは、自然の勢であるとしなければならぬ。即ち本年は如上の關係から云つて、米の作柄の不振である爲めに、米價に騰貴を來すのは、當然の事と考へられて居つた其上に、八月下旬から九月中旬に至る不順の時候を以つてしたのであるから、益々米價騰貴の趨勢を煽揚するに至ることを免かれないのである。

米價騰貴と政府の責任

今日現に米價は騰貴して居る、而して近き將來に於て、或は暴騰するかも知れない。此場合に世人は米價の騰貴は專ら收穫の不良に基き、而して收穫の不良は主として天候の關係に出づるものであつて、人力の如何ともするを得ない所に屬するとして、之を默過し、座視するであらうか。少なくとも政府は將來必然起る可き米價の騰貴を以つて、何か一種の不可抗力にもで依るもの〻如く聲明して、自家の責任を回避しようとすることであらうし、農商務省の如きに至つては、例の世帶の會とか稱する愚にも付かぬ團體の働きに依つて、米價の騰貴に應ぜよと云ふことを國民に勸告するかも知れない。是等は何れも米價の騰貴に就て、政府に責任なしと信じ、又責任なからしめようとする者の態度なり、言說なりに外ならないが、私は今後米價が騰貴して、已まないような狀態が生じたとしたならば、之に對して政府の負ふ可き責任の輕からざることを斷言するに躊躇しないのである。

物價問題の解決は數年來我國の懸案であつて、何れの内閣も國民の希望に副ふ所の處置に出でなかつた、原内閣に至つては、之を閑却したことの甚だしきものたるを失はない。而して大正九年の恐慌以來米價が下落し出すと政府は却つて之を騰貴させることを企て、種々の手段を講じたのである。然し物價政策なり、又モツト廣い一般經濟政策の見地から云へば、是れは甚だしく當を失した處置であつて、私は當時何故に政府は下落した米價と調節を保つまでに、一般物價を低落させることに、努力しなかつたかを怪むのである、物價政策の根本問題に就て、理解を缺いて居る政府當局者は米價以外の一般物價を調節する何等の方法の存しないと云ふことを以つて、彼等の無經綸を辯護するの資料とするかも知れない。然し斯の如きは彼等の無智を表明するものであつて、何等の辯解とするに値しない。曩日米價下落の端を發した際に、他の一般物價をして米價と歩調を一にするまで、低落させると云ふことに就て、政府に確乎た[illegible]

心があり、又此決心を實現する智慮があつたとしたならば、如何なる物價政策に出でたであらうか、又如何なる方針を取るのを至當としたであつたらうか。第一金の輸出禁止を解除して、將來必ず通貨の收縮される勢の到來することを國民に示すのも、第二米以外の重要消費品に對して、適當の最高價格を公定し、實際の代價をして此價格以下に居らしめることも、第三政府自ら卸賣相場と小賣相場との間に大なる間隔を存するやうな不完全なる商業組織の弊を刈除することも、總て必要の處置たることを失はなかつたのである。

然るに物價問題の解決に就て、何事をも爲すを得ない、否物價騰貴の勢を煽揚すること以外に何等の智慮を有しない政府に取つては、如上三策の如きに、遂に其理解する所と爲らず、米價が下落し絲價が下落するや、他の一般物價を下落させて、物價全體の調節を保たせようとはせず、却つて米價や、絲價の騰貴を促す所の處置を講じた。絲價に對しては此處置が多少なりとも效を奏したものであるか。其れも米國に於ける賣行が少し舊狀に戻りかけた爲めであるか、孰れとも斷定するに難いが、或る程恢復を告げた。然し米價に對しては、政府の恢復策の如きは、度の殆ど效果を奏するを得なかつた。而して此效果が現はれず、一般物價が高くして、獨り米價の低きに居つたことが、米の收穫の増加す可き勢を妨碍し、今後に於ける米價騰貴の狀態を誘致するに至つたものとしたならば、米價の騰貴は政府の物價政策に短慮であり、無智であることを以つて、其根本の原因としなければならず、天候の不良の如き、最も輕微なる原因とするの外はない。

米價の暴騰は不可避の勢か

斯の如く論じ來ると、今後に於ける米價の騰貴は一に原內閣の作爲したものである。原內閣は必ずしも故意に此騰勢を誘致したものではなからう、無智無識であり、加ふるに世間に行はれる公正の説に耳を傾ける雅懷もない。而して地方の農民には飽くまでも歡心を繫いで政治上に權勢を扶植しようと云ふ狡智のある爲めに斯る破目に陷る次第と見なければならぬ。而して上記の如き事情の下に、米價が騰貴し出したらば、種々の働きに依つて此勢は煽揚されることゝ爲るであらう。其一ツは地方農家が米の投機取引に就て、慣熟したことであり、他の一ツは彼等をして投機を敢てせしめる資金の豐富なることである。

從來永い間地方の農民は其性質に於て純良であるとか、其風俗に於て、素朴であるとか云ふようなことが一般に傳されて居つた。然し今日彼等に純良とか、素朴とか云ふやうな所謂良俗

美風は何處に見出されるであらうか。最近數年間株式投機熱の勃興した際、東京や大阪の株式取引所附近に簇生した株式仲介業者は實に地方農民を相手とし、最も投機的と稱され、着實なる投資家の接近することを恐れる株式の賣買を彼等に周旋する機關であり、地方にも金融商會とか、信託會社とか怪しげな看板を掲げて、地方農家の資金を株式に吸收することを業とする者を生じ、新會社の株式の如きは、是等の機關を經由して、多く地方に轉々したのである。彼等にして自分に緣の薄い株式に對してすら、投機を試みること、斯の如くである以上は、自巳の手元に近い米穀に對して、同じく投機を行ふのは勿論であつて、如何なる地方に於ても農家自ら米の買占、賣惜みに依つて其れ〲利益を收めたことの爭ふ可からざるものがある。好景氣時代に農家の經濟が非常に繁昌を告げ、農民の奢侈の甚だしく豐滿に爲つたことを以つて、單純なる米價の騰貴若しくは綜價の騰貴に之を歸したならば、其れは大なる間違であつて、寧ろ投機取引に依つて、斯る利益の生み出されたもの丶、多きを認めざるを得ない。既に彼等にして此經驗の得易からざるものがある。米價が既に騰貴の緒に就き、殊に今後收穫不足の爲めに、更に騰貴の勢を加へようとすることの明白である場合に、前年來既に米價騰貴の齎す利益に浴して、其記憶の新しい地方農家が手を拱ねて、大勢を傍觀するに止まるであらうか。彼等の鍛錬された投機的手腕は忽に米の買占や賣惜みに伸び來つて、米價騰貴の勢を助長するに至らざるを得ない。即ち米價の騰貴し出した場合には、尋常一樣の騰貴に止まらずして、暴騰の趣を生じるのは、一に地方農家の細工に依るものである。彼等は今や既往數年間の經驗に據つて、此種の細工を施すに遺漏なき手腕を備へるに至つた、此手腕を實際に用ゐずに、濟すが如きは、私の想像し難き所である。

此場合に我國の金融が緩漫であるか、其れとも緊縮して居るかは、地方農家をして如何なる程度まで投機的取引を行はしめるかを決定するのに、重大なる關係を持つのである。然るに地方農家に取つて今日最も好都合であるとも云ふ可きは、近來我國の金融が著しく緩漫なる一事である。此狀勢は果して流動資金増殖の結果として、自然に發生したものであるか、其れとも經濟社會沈衰の後を承け、事業界の活動の停止した爲めに、起つたものであるか、此點に就ては、自ら議論なきを得ないが、兎に角目前の金融緩漫である趨勢に對して、直に變化の起るものとも考へられない。地方の諸銀行も亦銀行自身の努力に依り、又都會に於ける銀行との聯絡を密接にすることに依つて、好景氣時代に其實力を增進した次第であつて、此效果は自ら地方農

家に對する資金融通上に現はれ、彼等をして投機資金を得るに容易ならしめる譯であつて、此事も亦米價の騰貴を促すに就て、與つて力ありとしなければならぬ。

政府に如何なる米價政策があるか

私は何としても米價の騰貴殊に其暴騰を以つて、避け難き事實であると考へる。此場合に政府に如何なる米價政策があるであらうか。米穀法の下に於て政府の買上げた米を賣却するが如きは、常平倉の眞意義を發揮する所以であるとした所で、果して政府の所有する米は米價の暴騰を抑制するに足りるものであらうか、疑なきを得ない。外國米は近時米價騰貴の勢の現はれ來つたと共に、輸入の數量に增加を告げたやうであるが、今日以上に米價の騰貴を來した場合に、之を抑制するだけの輸入が行はれるであらうか、日本で多少の外米買付を始めると同時に、外國に於ては必ず其價格に騰貴を來し、斯くて輸入された外國米は必ずしも廉價のものに當らないことゝ爲るのは、最も睹易き道理としなければならぬ。日本にして外國米の供給に依賴して、米價の調節を謀らうとする以上は、每年或る定まつた分量だけの外國米を米產地方に於て、買上げることにし、其數量を標準として、米產地方に於て米產額を增加せしめることを必要とする。或る場合には、日本で米作の凶歉である爲めに、足許から鳥が飛び立つやうな勢で、外國米を買付けようとするが、內地の米作の豐潤であるときには、外國米の如きには、一顧をも與へない、是れでは外國の米產地方に於ても、日本に起る可き需要を勘定の內に入れて、米の產額を殖やさうとはしない。其結果は別に日本の需要を受入れる準備のない所に向つて、無理に需要をすることゝ爲り、自然の道理として、本來低廉である可き外國米の價格をして高貴のものたらしめなければ、已まないのである。

斯の如く考へ來つたならば、我國米價政策の根本問題としては、外國の米產地方をして我國の爲めに、豐富に供給するだけの米を產出させることを主眼とし、一方に我國に亦內地に於ける米作の凶歉であると、豐饒であるとを問はず、年に一定の分量の外國米を買入れることに存しなければならぬ。斯る政策を講じても、尙ほ小麥が一個の國際的商品として、最も自由に各國の間に移動する爲めに、其價格の確實を保つのと同じ働きを米に見ることは甚だしき困難とせざるを得ないが、尙ほ今日に比較すれば、米價の騰貴を抑制するに資するものがあるであらう。卽ち米の孤立的商品である舊來の型を打破して、國際的商品に近づかしめる一事こそ、私の認めて以つて、米價政策の要

訣とする所である。然しながら是れは米價政策に於ける根本的施設であつて、假令ひ之を可なりとすることに、政府の意見が定まつたとした所で、直に之を實行して其效果を擧げ得べき性質のものではない。斯くて目前に殺到せんとする米價の騰貴を如何に處理するかと云ふ問題が起る。而して之に對しては、私は迂廻的方法と、直截的方法と二ツの手段の存することを信ずる。迂廻的方法は金融に人爲的緊縮を加へ、地方農家をして米に就て、投機取引を行ふ餘地なきに至らしめることであり、直截的方法は卽ら米價を始め重要消費品の價格に對して、政府が公定制度を取ることとである。然も通貨問題にも、物價問題にも共に無理解である政府が斯る物價政策に依つて、目前の米價騰貴に處するが如きは、私の覺束なく考へる所である。

要するに米の如きは經濟學で云ふ需要の伸縮不自在なる貨物に屬する。何を以つて、需要の伸縮を不自在でありとするかと云へば、卽ち米に對する需要には一定の動かす可からざる分量があつて、米價が下落したからと云つて、必ずしも米に對する需要が增加する譯でないと同時に、米價が騰貴したからと云つて敢て米に對する需要が廢棄されるものでない、價格の下落した米は何人も顧みない一方に、價格の騰貴した米を何人も爭つて需要して已まない、是れが我國の米價をして時に暴落させ、時に暴騰させる所以である。然し此暴騰暴落を生ずるのは、日本國民の常食として必要である米の或る定まつた分量に比較して或る程度の過剩かあり、又或る程度の不足かある爲めであつて、而して其「或る程度」と云ふのは、決して大なるものでない、些細つ分量であつても、暴騰暴落を惹起すに足りるのである。隨つて米價の調節を期するには此、或る時に生ずる或る程度の過剩米を處分すると共に、或る程度の不足米を補充したならば、優に其目的を達し得る道理である。斯の如き問題は米を少しでも國際的商品に近づかしめたならば、容易に解決し得るのであるが、是れが實行に困難であるとしたならば、常平倉制度の如きものであつても、巧に之を處理することに依つて、効果を奏し得られるであらう。卽ち過剩米の生じた時には、之を買入れ不足米の起つた時には、茲に買入れた所のものを賣出すと云ふことは、米價調節の一手段たるを失はない、唯問題とする所は(一)買入れに依つて米價の暴落を防ぐことと、賣出に依つて米價の暴騰を制することゝ、果して同一分量の米の賣買に依つて、同一の程度に於て行はれるかどうか。(二)既往に買入れた米の分量が少なく、隨つて賣出す可き米の豐富でない場合に、例へば平年作なり、平年以下の作柄の續いた後を承けて、凶作が起つたとしたならば、如何にす可きものであるかと云ふこ

てあつて、斯く攻究すると、常平倉の外に、之を補ふ或る働きを以てしなければ、米價の調節は完全に之を期し得られないと云ふ結論に歸着するのである。

米價騰貴の影響――都市と農村との利害共通點

都會と農村とが經濟上の利害關係に於て、相反する地位に立つて居るのは誠に已むを得ざる所に屬する。米價の騰落の如きは最も露骨に兩者利害の衝突反撥を暴露するものである。今日地方農村の經濟が歐洲戰時の黄金時代と違つて、著しく疲弊困憊して居るのは、絲價の下落したことに基く點もあるが、大部分は米價の下落之を然らしめるのであり、米價の下落に對して、一般物價の下落して居らないことが更に農村の窮乏を加へる所以であると解される。然らば近き將來に於て、米價が騰貴したならば、地方農家が窮迫の境遇を脱出するに至るのは勿論であつて、自己の家庭に於て消費するよりも、賣る可き米を持つことの多い者は其多いだけ、有利なる地位に立つ道理であり、米價騰貴が大地主に對して、大なる恩惠と爲る所以である。

斯く地方農家の經濟の潤澤に爲ることは、間接に又迂廻的に都會に或る利益を及ぼすであらう。例へば地方の農家は曩に述べた通り、今日は決して自給經濟を營んで居るのではなく、日常の消費品殊に衣服諸具類の如き物を都會に於て購入する地方の農家が都會に於けるデパートメント、ストーアの行ふ通信販賣の大華客である一事に依つても、此事實を類推するに足りる。隨つて農家の繁昌は自ら都市に金を落すことに爲り、又都會遊覽に來る田舍の人々が殖えたならば、旅館飲食店の如きも、繁昌を告げることゝ爲る。又斯る一般社會上の關係でなく經濟上の方面に於て、都會と農村との如何に密接なる關係を持つて居るかは、肥料供給の點に於て見出される。今日農村に於て、使用される人造肥料の高は金額に於て小なりとしない。然るに此肥料の製造業は純然たる工業であつて、多くは株式會社の形で經營されて居る。隨つて之に株式の形で出資をして居る人は誰れであるかと云へば、多くは都會に於て資本家階級に屬する者である。米價下落の爲に、地方農村が疲憊して、人造肥料を購入する資力の餘裕に乏しくなり、之に對する需要の減少する爲めに、肥料の價格の低落することは、自ら人造肥料製造業に打撃を與へ、其出資者たる都會の資本家を苦しめることゝなり、斯くて農村と都市との間に、利害の關係を共通のものたらしめる。現に人造肥料業の巨擘たる日本人造肥料會社の如き、一兩年來の米價下落、之に伴ふ肥料價格の暴落に依つて、無配當

の狀態に陷り、容易に產業恢復の緒に就くまいと云ふ噂すら行はれつゝある。固より斯の如く爲るに就ては、會社經營の方法にも、相當の過失があつたことであらうが、斯の如きは地方農村の打擊が都會の住民に、不利の影響を及ぼす一例であつて、兩者の間に經濟上の利害の共通する所以を示す次第である。

都會と農村との利害相反點

然しながら之を全體に就て見ると、都會と農村との利害の相共通する、換言すれば農村の繁昌に依つて、都會も亦有利なる影響を受けると云ふのは、實は都會の一小部分であり、又都會に居住する住民の少數者だけに止まり、多數は其の常食とする米價の騰貴すると共に依つて、生活上に大なる打擊を蒙らざれば已まないのである。現に此事實は兩三年前米價の暴騰した際、全國都會の住民が盡く生活上に困難を嘗めたことに依つて、之を立證し得るのであつて、米價騰貴と云へば、總ての都會住民は之に對して恐怖の念を懷かざるを得ない。誠に米價の騰貴位國民を脅威することの甚だしきものは、他に其例を見ないのである。

私は從來我國現時の經濟社會に於て、不可解の事實のあることとを認めて已まないものである。其れは一方に不景氣であつて、他の一方に物價の下落しないことである。由來不景氣と物價下落とは、形影相伴ふ可きものであつて、不景氣であればこそ、物價が下落し、物價が下落すればこそ不景氣である位に、因果關係の必然たるものがある。然るに我國に於ては政府の誤まつた經濟政策の爲めに、此因果律は打破され、不景氣であつて、尙ほ物價の高貴であるといふ怪現象に接するのである。不景氣であつて、物價の騰貴し、生活費の上進すると云ふことが今日都會住民の生活を壓迫する有力なる原因である一事に就ては、何人も之を爭ふを得ないであらう。若しも物價の騰貴すると同じ割合を以つて、又は此以上の割合を以つて、賃銀が上進し收入が增加するものであるとすれば、米價の將來に於ける騰貴の如き、深く意に介するを要しないことゝ爲る。先年商工業の好景氣であつた際には、或る程度まで物價と國民所得との間に、此關係が保たれたのであつて、或る方面に於ては、物價騰貴の國民生活を壓迫する弊を緩和すること少なからざるを得たのである。其れであつても、尙は社會階級の內には、好景氣の時代に所得の增加する勢の頗る遲く、又其度合の少ないものがあつて、是等は米價を始め、一般物資の價格騰貴に對して、非常の苦痛を感ぜざるを得なかつた。斯くて富山縣下の一漁村に起つた米騷動が全國の人心を刺戟して、到る所に同樣の騷ぎを演出するに至つたのである。

好景氣時代に一部の國民の好景氣の惠を受け、所得の膨脹して居つた際でありながら、米價騰貴の國民を壓迫したこと、斯の如くであつたとしたならば、不景氣時代に米價の騰貴と國民生活との間に、如何なる交渉が有するかは之を知るを難しとしない。不景氣時代の下に、第一國民の內に其職を失ひ、所得を奪はれ、失業失職の苦痛を味つて居る者は其數に於て少なしとしない、第二現に就業中の者と雖も、不景氣の爲めに、仕事が減じた結果賃銀に著しい減損を來して居り、第三事務員其他俸給衣食者に就て云へば、利益減少の爲めに、賞與金の給與をされる爲に減少を招き、所得の一部を失はざるを得ないことと爲つて居る。斯る時期こそ、誠に經濟社會の蟄伏時代であつて、國民をして無難に之を經過させるには、一般物價の下落、生計費の減少に依つて、其生活を容易ならしめることを必要とする。經濟學上の一原則として、不景氣時代に必ず物價の低落すると云ふことの如き、全く自然的調節の最も妙を得たものと稱して可なる次第である。英吉利でも、亞米利加でも此調節が徐々に行はれつゝあるのは、掩う可からさる事實であつて、一方に物價が低落し、生活が容易に爲ればこそ、他の方に勞働者亦賃銀切下げ（ウエーヂスカッチング）に承服するのであり、又斯く賃銀切下げと、一般物價の下落に依る原料費節約とに依つて、製造品の價格を低廉にし其輸出を容易ならしめ、景氣恢復の端緒を開くに至るものと認められるのである。

我國は國際競爭に落伍す

然るに日本の事業主は此點に於て、甚だしき誤解を持つて居る。彼等は諸外國で賃銀切下げの行はれることや、此切下げの爲めに、生產費の節約されることを耳にする。何か彼等の意を迎へて、歡心を結ばうとする御用學者の輩が此の事を註進する。さうすると彼等は此賃銀切下げが如何なる事情の下に行はれたものであるが、抑も亦一般物價と如何なる關係を持しつゝあるかと云ふことは考へず、無暗に賃銀低減に依つて、生產費の節約を謀らうとする、勞働者の方では、此物價の高い時代に、賃銀を低減されては、忽ち生活上に破綻の生じることを恐れて、必死に之に反對する、斯くて外國に於て著しい故障なく行はれる賃銀切下げが日本では劇烈なる勞働爭議を惹起するに至らざるを得ないのである。

日本では近頃如何に輸出貿易を振興するかと云ふことが當業者の間に問題に上つて居る。輸出貿易の振興に依らなければ、今日の不景氣を脫却する道の求められないことは、當初から分り切つた事實であつて、當業者が此點に着眼したのは、遲

蒔きながら、尙ほ着眼せざるに勝るとして、如何なる方法を以つて、其目的を達するかと云へば、第一には物價の下落であり、第二には賃銀の切下げでなければならぬ。然らば我國の如き從來成る可く物價を高い程度に維持しよう、不景氣に爲つても、尙ほ之を高くして置かうとする政策を取つた國は即ち生產業者に向つて、生產費の節約され可き道を塞いだのと同樣の次第であつて、斯の如くして何で輸出貿易の振興が期せられるであらうか。近時の外國貿易に於て、輸出の極めて不振であり、斯くて不景氣の上塗りをして居るが如き有樣であつたならば、我國經濟社會の發展する時は遂に之を求め難きに至るのである。

米價の騰貴が人々の家計に對して、如何なる程度の壓迫を加へるかは、家計の狀態に依つて異ならざるを得ない。所得が豐富であり、米以外に諸種の物資に亙つて、所得を消費する人に取つては、消費品中の一つである米の價格の騰貴した位ゐでは、其家計を壓迫する道理はない。之に反して所得の金額は纔に生活の必要に應ずる程度に止まり、隨つて割合に多くの部分を米の購入に投じなければならぬ階級に居る人に取つては、米價の騰貴は彼等の生活に於ける大なる打擊たらざるを得ない。勞働者の如きは即ち被傭者の階級に屬するものであつて、米價の騰貴したならば、自己竝に家族の餓死する危險を防禦する爲めに、賃銀の引下に對抗するのは勿論、其引上をも企てなければならぬ。經濟社會全體の利害に着眼して、賃銀の切下げを行はなければならぬ場合に、米價が騰貴して、反對の形勢を醸すに至つては、我國に取つて此上もなき不幸とせざるを得ない。

若し夫れ俸給衣食者の生活に至つては、悲慘此上もなきものたらざるを得ない。既に數年に亙る一般物價の騰貴に依つて、彼等の生活の虐げられたるや、甚だしきものであつた。漸く米價だけが他の諸物資に先んじて、下落し出した。他の諸物資の小賣相場も卸賣相場の下落する如くに下落したならば、定めて生計が安易ならしめるを得るであらうとして、殆ど一日千秋の思ひで、此事を望んで居つたのであるのに、彼等の頭上に來たつたものは減俸であり、減給であつて、物價下落ではなく、然も今日早くも再び米價に騰貴を見るとしたならば、彼等は何を以つて之に當らうとするであらうか。由來柔順を以つて殊に政權政令に對する忍柔を以つて、一の美德とする日本人であればこそ、此場合に際しても、米價の騰貴に當る工風をするに就て、穩和を旨とするのであらうが、何時までも國民の忍柔に依賴して、彼等を苦しめることは、吾人の何としても止めなければならぬ所である。

經濟的覺醒を要す

由來我國民は經濟上の問題に就て、知見の乏しき嘆なきを得ない。米價が騰貴したとして、幾ら都會の住民が生活難に苦しまうが、彼等は之を天災の如き、不可抗力に出づるものと諦める。今に自分達にも、何か好都合の事が起つて來て、埋合せが付くであらうと自ら慰める。是れが我國民の性質であるように見受けられる。私は之を以つて甚だ飽き足らないと思ふ。現に今日又は近き將來に於て、米價が騰貴するが如き、決して天災に基くのでもなければ、地殃に因るものでもなく、一に政府の物價政策に於ける誤りの然らしめる所である。此道理は私が既に說明した通りであるとすれば、米價の騰貴を以つて、我國民の生活上に、將た又國運の發展上に不利であると考へる所の人々は事の根源に遡り、斯る經濟政策の過誤を惹起した政府に對して其責任を糺さなければならぬ。此糺す可き責任を糺さず、米價の騰貴を以つて、不可抗力であるが如くに考へ、苦痛を訴へつゝ、尙ほ之を除く手段に出でない我國民こそ要するに經濟的覺醒期に達しない人と云はざるを得ない、私の嘆息を禁ずる能はざる所である。

華盛頓會議と軍備縮限

水野廣德

國難か國福か

太平洋問題就中極東問題の解決並に軍備縮限を目的とせる所謂華盛頓會議なるものが、今回米國大統領に依つて正式に提議せらるゝや、今春來豫て期したる事ながら一時我が國論を衝動せしめ、一部の論者中には或は「國難來」を絕叫するものもあり、或は「日本の裁判日來る」と悲鳴するものさへあつた。併し今日に於ては國民の血は餘程冷靜に復し、國民の態度も餘程沈着

となり、此會議こそ從來誤解されたる日本の眞意と眞相とを世界に向つて表明すべき絶好の機會で、國難どころか寧ろ國福であるとの議論さへ聞くに至つた。其れと同時に一部の人士間には「華盛頓會議畢竟何するものぞ」と、頭から侮蔑の念を以て之を輕視するものさへある。華盛頓會議が果して國難であるか、國福であるかは、今日未だ之を豫想することは出來ない。唯何れにしても此の會議の結果が日本の將來に取りて重大なる意義を有することと丈は爭はれない處であると信ずる。而して會議を善導して國福となすか、或は又惡化して國難となすかは、議事に最も緊密なる關係を有する日本國民の覺悟と決心とに因ること極めて大であると思ふ。左れば我が國民たるものは此際最も冷靜に最も愼重に世界の大勢と日本の國情とに照らし攷へ深思熟慮すべきであつて、彼の一部人士の如く徒に冷罵嘲殺を恣まにするは、決して國家に忠實なる所以ではあるまいと信ずる。

華盛頓會議の目的

華盛頓會議に上程せらるべき議題は世間公知の如く太平洋問題と軍備問題である。是等の二問題は何れが主で何れが從であるか、或は又二者分離して獨立に論議せらるべきものであるか、分議不可能であるか、外國に於ても日本に於ても種々の意見と議論とがある。或る論者に今回の會議の眞目的は軍備縮限である、然るに太平洋問題など云ふ政治問題を添加したる爲め却つて會議を複雜ならしめ、延いて主目的たる軍備縮限の協定を困難ならしむるに至つた、畢竟統領ハーディングは二兎を追ふの愚に落ちたものであると説いて居る。之に反し或る論者は會議の眞目的の如何を問はず、太平洋問題は本であり因である、軍備問題は末である果である。本であり因である太平洋問題を完全に解決せずして、唯徒に末たり果たる軍備問題を協定せんとする如きは一時を糊塗する姑息手段に過ぎずして、決して永遠の大計ではない。故に軍備縮限を實行する爲めにはまづ太平洋問題を解決せねばならぬと論じて居る。何れも傾聽に價する議論であるが、要するに今回會議の眞目的は軍備縮限であつて、太平洋問題は之に到達する爲めの一手段であるかの如く思はれる。甲論者の説く如く太平洋問題の提出は、假りに米國大統領の失敗とするも、事實に於て既に提議せらるゝ、日本政府に於ても欣然として之を快諾したる以上、國民としても亦充分攻究の必要がある。殊に太平洋問題に最も重大密切なる關係の地位に在る我が日本としては、太平洋問題と軍備縮限と何れが果して重きやは大なる疑問であつて、自分としては寧ろ兩者

が重くはないであらうかと疑ふものである。併し此問題に對しては自分は多くの知識を有たないので、專ら軍備問題に關して卑見を述べたいと思ふ。

未だ論議さへ開けざる今日、餘り深く立ち入つて論議することは不利益と信ずるが故、極めて概括的な大體論に過ぎない。從つて趣旨不徹底の點あるは自ら期する處で豫め陳謝して置きたい。

自分の立場

本論に入る前先づ自分の主義を鮮明にして置きたいと思ふ。今日自分は軍備縮限論者である。素より絶對的自主的縮限論者でなく、相對的協定的縮限論者である。自分は三年前本誌に於て姉崎博士の説を反駁旁大に軍國主義を説いた。尤も自分の説ける軍國主義なるものは、今日世間の通り相場たる侵畧、黷武、武斷、懸壓と云ふ如き不淨の意味でなく、國防第一を目的とせる軍國主義であつた。當時世間から叱られたり褒められたり賛否毀譽樣々の意見を聞いたが、僕の耳に達したのは贊成の意見が多かつた。併し之は世間普通の現象であつて、之を以て直に天下の輿論我に在りなど己惚れるのは大なる間違である。唯軍國主義に對する四面楚歌の聲の裡に在つて、尙ほ吾人に共鳴同感の士もあると云ふことを知つたに過ぎない。斯くの如く僅に三年前に軍國主義を高唱したる自分が、今日飜然として軍備縮限を説くを聞かば、當時を記憶せらるゝ讀者は恐らく驚くであらう。恐らく笑ふであらう。併しながら三年前に軍國主義を唱へた自分と、今日軍備縮限を説く自分と、自分自身の心中には恒に一定の信念があるので不變不動であるが、唯四圍の環境即世界の形勢と日本の情況とが、君子ならぬ自分をして豹變せしめたに過ぎないのである。

自分は大正九年より六年に掛け戰時の歐米を漫遊した。當時歐洲戰爭最も酣なる時代で、軍事上に於ては獨軍尙ほ優勢を占め、聯合軍の旗色動もすれば蹙かんとし、交戰各國共に有ゆる犧牲を厭はず、有ゆる努力を盡して戰爭目的の遂行達成に精進して居つた。中歐同盟側の實情は判らぬが、聯合側に於ては英と云ひ、佛と云ひ、伊と云ひ、白と云ひ、何れも貴賤老幼を問はず、男女官民を論ぜず、國民全體が戰爭に對して眞劍なる態度を目撃し、之を日露戰爭當時に於ける我國民の態度に對照すれば、遺憾ながら其處に大なる徑庭の存することを發見した。以武護國を以て國家の安全第一と信じたる自分は、純潔なる軍國主義を我が國民に鼓吹するの切要を感じたのである。然に獨逸の全敗の如きは多くの人の殆んと豫期せざる處で、戰後の世界

は依然として武備の充實軍備の競爭を免れないであらうと同く信じたのである。

然るに米國の參戰以來歐洲の戰局は急轉直下して獨逸は全敗した。外壓と內潰とに依つて恰かも破れ提灯を押し壓いた如く無條件で屈伏した。戰後の情況視察の爲め自分は再び歐洲旅行の程に上つた。先づ佛蘭西に渡つて北佛の戰跡を見舞ふた。休戰後既に八個月を經たりとは云へ、獨兵の屍體は未葬の儘尙ほ風雨に委棄せられある情態で、彈丸飛び劍戟閃めきたる昨日迄の戰場其の儘に殘つて居る。家屋と云ふ家屋は殆んと悉く破壞せられ、田園は荒れ果て、唯徒に雜草の生ひ茂るに委し、ポピイ血に咲く草原には無數の墓標が點々として散在して居る。滿目荒凉とは眞に斯くの如きを言ふのであらうと思はれた。此の悲愴悽慘なる光景を目擊したる自分は、現代戰爭の殘忍と悲慘とを直覺的に痛感した。

大に迷ふ

獨逸がベルサイユ條約の承認を正式に通告し來つた其の日共の時刻、自分は獨逸に入る爲め巴里を出發して瑞西に向つた。巴里全市には寺院の鐘と工場の笛とがガン／＼ブー／＼と鳴り響き、市民は唯もう歡喜に醉ふて居る。國運を賭した五年の難戰が完全なる戰勝を以て愈正式に終了を告げたと思へば、我等心中の喜悅も左こそと察せられた。

瑞西に於て自分は初めてベルサイユ平和條約なるものの正文を見た。戰勝國が戰敗國に課する條件として、正當であるや否やは別とし、其の苛酷峻烈にして壓服的なる點に對しては、恐らく何人も異論はあるまいと思はれた。平和の爲めの平和條約にあらずして、復讐の爲めの復讐條約たるの觀がある。如何に戰爭に敗けたとは云へ、獨逸は是程の惡名を負はされ、是程の重罰を課せらるべきものであるであらうか。過去に於て獨逸の爲せる處と、聯合國及米國の爲せる處とを比較すれば、唯五十步百步の差に過ぎない。世界は依然として勝てば官軍である。依然としてマイト、イズ、ライトであると覺つた。

扨で自分は戰後の實狀を見るべく獨逸に入つた。先づ第一に驚いたのは汽車である。清潔に於て整頓に於て世界第一との評を聞きたる獨逸の鐵道は、寧ろ其の不潔なることに於て、其の亂雜なることに於て世界第一であらうと思はれた。洗面所には水も出ですコップも無く手拭も無きはまだしも、一等客車にさへカーテンの備もなく、強烈なる夏の日は蒸暑き滿々員の車室內に斜に射し込んで來る。石炭と車輛不足の爲め發車回數を減じた結果、乘客は等級を擇ばず、廊下と云はず便所と云はず通行

さへも出來ぬ位にギツシリと詰め込んで居る。機關車は故障頻出して何時伯林に着くか確答は出來ないと車掌は云つて居る。斯くの如き混亂は英佛に於ては見ることの出來ない狀況であつた。是れ戰爭の爲め汽車の破損したる爲めのみでなく、優良なる車は悉く聯合國に沒收せられ、機關車も客車も撰り粕のボロ車ばかりを使用せる爲めであると聞いた。

やがて伯林に着いた。當時に於ける伯林の慘狀は自分が玆に管々しく述べる迄もなく、既に幾多の人々に依つて報道せられて居る。何人の報道を見ても實際以上に誇張せられた記事は未だ見ない樣である。要するに街路公園家屋等の固定物は意想外に良好の狀態にあるも、人間の生活方面に至つては實に慘の慘たるもので、「腹一杯食ふて見たい」と云ふのが、多くの獨逸人が抱ける最初にして又最大の希望であつたらしい。嗚呼敗戰の悲哀！

北佛の戰跡を訪ねて戰爭の殘忍惡虐を心に感じ、ベルサイユ條約を讀んで力の必要を覺り、更に獨逸の慘狀を見て敗戰の恐るべきを知つた自分は、爰に一種のジレンマに陷つた。即ち人類としては戰爭を避けねばならぬ、國家としては敗戰を避けねばならぬ。然らば國際競爭の激しき今の世界に於て如何にして戰爭を避くべきか、勝てば官軍式の今の世界に於て如何にせば敗戰を免かるべきか。戰爭を避くる爲めには戰爭の動因たる軍備の撤廢――少くも縮限――を行ふとも一つの有力なる手段である、之と同時に敗戰を免るゝ爲めには軍備の充實擴張を行ふことも亦一つの有效なる手段である。戰爭を避くる爲めに軍備の撤廢縮限を爲すべきか、敗戰を避くる爲めに軍備の充實擴張を爲すべきか、自分は大に迷はざるを得なかつた。

君子豹變

軍備撤廢縮限すべきか、軍備充實擴張すべきか、理屈では判斷が付かない。此上は之を事實の上に徵するの外はない。戰前に於て獨逸は世界に一二を爭ふ强國であつた。中にも其の軍備の充實整頓せると軍隊の强勇精銳なりしは實に世界に冠たるものであつた。而かも五年の奮戰苦鬪も其の甲斐なく、終に潰滅の大敗に陷つた。凡そ一國の力なるものには限度がある。獨逸の强大優銳を以てしても尙ほ世界を敵として勝つことは出來なかつた。況して獨逸に及ばざること遠き我が日本としては、如何に軍備を充實するも、到底之に依つて絕對安全を期することは出來ない。加之獨逸屈して平和條約の調印さへ未だ終るか終らぬに、「日本は東洋の獨逸なり」「次に叩かるゝは日本の番なり」などゝ氣味惡き囁きが、世界の各方面に於て聞かれた。戰

爭中は散々こき使つて、戰爭が濟めは忽ち邪魔扱にする、狡兎死して良狗煮らるとは此の事であらう。而して日本を叩く理由の主なるものは、日本が分不相應なる大軍備を擁し、獨逸と等しく軍國主義であるからと言ふに在る。日本が果して歐米人の稱ふる如く、危險なる侵畧的軍國主義であるや否やは、唯世界の輿論に依つて決せらるべき問題で、日本人自身の口先きの辯解は何等の權威を有しない。是に於てか吾人は更に考へざるを得ない、即ち敗戰を免れんが爲め世界の誤解を意とせず反感を恐れず、飽迄軍備の充實擴張を行ふべきか、或は世界の感情を融和して戰爭の發生を避くべきかの問題である。然るに前者の危險なることは既に獨逸に依つて證明せられて居る。日本として執るべき安全の途は唯後者あるのみである。之を以て日本國民は人類として戰爭を避くべきのみならず、國家としても亦極力戰爭を避くることに努めねばならぬのである。

　然らば次に起る問題は如何にせば我が日本は戰爭を避け得べきかである。戰爭の原因たるべきものは素より二三にして足らない。經濟上の競爭、政治上の衝突、民族的反感、國民的猜忌など種々あらんも、競爭的軍備の如きも亦其の主要なる一たるを失はない。英獨海軍の競爭、露佛對獨墺との陸軍競爭が、過般歐洲大戰の一大原因たりしは世人の一般に認むる處である。近時日米の關係漸く緊張の狀ある如きも、兩國海軍の競爭的擴張が與つて力あることを疑はない。故に戰爭を避くる爲めには、戰爭誘發の一大因子であると同時に、戰爭遂行の唯一樞關たる軍備の撤廢が最も有效なる手段である。若し軍備撤廢が困難でありとすれば、せめて各國協定の下に軍備を縮限し、以て其の競爭的擴張を防止することが必要である。是れ自分が軍國主義を捨てゝ軍備縮限主義に赴いた所以である。

軍備縮少と制限

　或は軍備縮少と云ひ、或は軍備制限と云ひ、或は又軍備縮少制限とも云ふ。縮少と制限と、同じきか異れるか、同じき樣でもあり又異なれる樣にも思はる。之を文字通りに解釋すれば、縮少とは現在の軍備を幾何か輕減する意義にして、例へば八八艦隊を八六艦隊となし、二十個師團を十個師團に減ずるが如きを云ふのである。又軍備制限とは各國軍備の最大限をば、或は經費に依り、或は武力に依り規定するもので、現在軍備とは比較的關係が薄いのである。例へば日本に就いて言へば、現在の計畫即ち八八艦隊以上に擴張が出來ぬとか、或は八八艦隊二隊以上は建造を禁ずるとか、或は又八四艦隊一隊に制限するとか云ふのである。即ち縮少は現在（計畫中）勢力よりも必ず輕減

すべきことを意味するも、制限は協定次第に依り現在勢力よりも或は増加するかも知れないのである。故に軍備縮少は軍備制限の中に含まれて居るのである。

左れば若し財政經濟の見地よりして、現在の軍備費を輕減するを以て目的とするなれば、軍備縮少でなければならぬ。軍備制限にては動もすれば現在よりも軍備費の増加を來すこと無きにしもあらずである。華盛頓會議が果して積極的に縮少を斷行し得るか、或は消極的の制限に止まるかは、今日尚ほ豫測の限りでないが、自分は縮少と制限とを併合して縮限なる文字を用ゐ來つた。其の熟字を爲すや否やは問ふ處でない。

軍備縮限と其の動因

華盛頓會議開催の動機は、或は昨冬米國上院に於けるボラー氏提案に係る日英米三國海軍造艦半休説に濫觴すとも云ひ、或は軍備縮限に關する英國の裏面的慫慂に發源するとの說もある。其の何れなるにせよ、斯かる歷史的動因に就きては今日探究する必要はない。併しながら軍備縮限の聲が今日翕然として全世界に共鳴するに至りたる理由と原因とに關しては少しく研究する必要があると思ふ。今日軍備縮少を唱ふる人々の間には、少くも二つの大なる系流がある。卽ち其の一は軍備の縮限撤廢に依つて、殘忍なる戰爭を避けんとする純人道上に立脚せる所謂ゆる理想主義者である。他の一は競爭的軍備擴張を制止して、過重なる國民の負擔を輕減せんとする經濟上に立脚せる實際主義者である。而して從來唱へられたる軍備縮少撤廢論は、多くは前者に屬するもので、其の主義主張は極めて高遠にして純眞なるも、人間の日常實生活に對して直接關係の薄きを免れない。從ふて國民間に優越感の尚ほ強烈なる時代に於ては、實行不可能なる理想的空論として世間の共鳴を博することが困難であつた。是れ從來の平和運動なるものが多く失敗に終つた所以であると思はれる。

然るに後者は經濟上に論據せるが故、其の唱ふる處に稍や功利的の傾きあるも、人間の實生活に直接の關係を有せるが爲め、世間の共鳴を得ることが容易である。例へば我が國に於て今日軍備縮限の聲が俄かに國民間に高まれる所以は、主として國費の過半を軍備の爲めに奪はれ、延ひて國民生活を脅かすに至りたる經濟上の見地に發足せるものと思はれる。殊に歐米諸國に於ては戰爭に依つて攪亂せられたる經濟狀態を整頓する爲めには、國家生産と國民生活とに直接關係なき軍費を壓縮するの必要を痛感して居る。

歐米大戰の後に平和運動の起るは自然であり且つ常例であ

る。併しながら經濟上に立脚したる軍備縮限運動なるものが具體的に行はるゝは、恐らく今同が嚆矢であると信ずる。是れ人の力にあらずして時の力である。

今や振古未曾有なる世界大戰の後を受け、世界の人類は戰爭を嫌忌し、平和を憧憬し、人道上より軍備縮限の聲高きと同時に、世界各國民は物價騰貴と生活難と軍費過重とに脅かされ、經濟上よりも軍備縮限の叫びがある。從來常に唱へられたる平和論や、屢試みられたる平和運動に比すれば、今回の華盛頓會議は數層有力なるものである。從うて難解の軍備問題を解決するには誠に絶好の時機であると信ずる。

海陸軍備の性質

華盛頓會議の主目的が軍備縮限に在ることは前述べた通りである。併し單に軍備と稱する範圍の中には、海軍もあり、陸軍もあり、最近には空軍なるものも現はれて來た。華盛頓會議に於て是等の軍備が如何なる點迄論議協定せらるゝやは今日尙ほ豫測を許さない。併しながら世界に於ける一般的空氣より察するに、今回の會議に於て主として論議せらるゝ問題は、海軍就中日英米三國海軍の協定に關するものゝ如く想像せられる。海軍國としての希望と野心とを捨てたる佛伊の海軍の如きは、日英米三國海軍の協定さへ整へば、恐らく自然に解決するであらうと思はれる。

陸軍縮少に對しては先づ第一に目下世界最大の陸軍國たる佛國の不承諾がある。新聞通信に依れば佛國は、獨逸の復讐戰に對して世界が佛國の安全を保證せざる限り、斷じて陸軍の縮少に應ずる能はずと頑張つて居る。佛國にベルサイユ條約に依りて獨逸の陸軍を十萬人に減じたる上、尙ほ種々苛酷なる軍事制限を課せるに拘はらず、自國は七十餘萬人の常備軍を擁し、一面に於ては戰々兢々として獨逸の復讐を恐れながら、一面に於ては尨大なる武力を以て獨逸に對し極端に近き强壓を加へて居る。故に佛國にして對獨强壓政策を變更せざる限り、其の陸軍軍備を縮少する機會はあるまいと思はれる。夫にしても僅に十萬の獨逸陸軍に對し、七十餘萬の陸軍はあまりに大袈裟であると佛國人の勇敢に敬服せざるを得ない。素より佛國は其の尨大なる陸軍々隊の中、約半數はライン占領地の警備に用ひ、而かも其の經費は全部獨逸の支辨であるから、國庫の負擔は比較的輕いと云ふことである。

伊國は常備軍約二十五萬人を有し、其の目標は佛國及ユーゴースラブに在るが故、此等兩國にして軍備縮限を行はざる限り、自國も亦之に應ずる能はずと云つて居る。之は伊國と

は至當の言である。其の他の强國たる日英米に至りては、何れも接隣の强國を有せざるが故、其の陸軍々備は他國と相對的と云ふよりも、寧ろ自國の政策に基づく絶對的の性質を有して居る。我が陸軍の如きも國家存立上絶對に必要なる自主的軍備として、之が縮限には頑然として反對なるかの如く窺はれる。

故に其の相對的なると、絶對的なるとを問はず、佛國の如き過大なる陸軍を有せる國にして、縮限に反對する限り、陸軍々備の縮限を國際的に協定することは極めて困難であらうと信ずる。我が陸軍の爲めには佛國は實に救の神である。之を以て日英米の如き自主的陸軍の縮限を行ふには、各國の國家政策と國家經濟とに依り、國內的に自決するか、或は列國の威壓に依つて强制せらるゝかの外に途はない。

之に反し軍事的に國境を有せざる海軍は、世界を通じて悉く相對軍備である。故に列國の地理と國情とに適應する標準比率を定め得るとせば、縮限の協定は容易に成立すべき性質のものである。

故に相對的軍備たる海軍の縮限は、一國のみに於て之を行ふは極めて危險にして、必ず列國の協定を必要とすると共に、列國にして誠意と雅量とを以て之に臨まば、協定は必ず成立の可能性を有する。然るに自主的と稱する陸軍々備の縮限には、必ずしも列國の協定を待つ迄もなく、一國のみに於て之を縮限し得ると同時に、協定に依つて之を縮限することは寧ろ困難であらうと思はれる。

之を要するに海軍は純國防の爲めの軍備である。陸軍は寧ろ政策遂行の爲めの軍備である。日本の陸海軍の如きは特に此の色彩が鮮明である。故に日本の海軍は國防問題さへ解決すれば容易に縮限に應ずることが出來る。然るに陸軍に至つては先づ日本の政策を變更するにあらざれば之が縮限は中々困難である。卽ち日本にして東洋に於ける從來の積极(?)政策を抛棄せば、陸軍は或は無用の長物となるかも知れぬ。之に反し日本にして在來の政策を飽迄固執するとせば、陸軍の縮限は恐らく不可能であらう。左れば陸軍問題は直接に軍備會議に依つて解決さるよりも、寧ろ間接に太平洋會議に依つて解決する方却つて捷路であると信ずる。

人口と陸軍兵數の比較（調査種々にして正確の數を缺く）

	人口（本國のみ）千人	兵數 人
日本	五七、〇〇〇	二五〇、〇〇〇（？）
英國	四五、五〇〇	三五〇、〇〇〇（內土人兵九〇、〇〇〇）
米國	一〇五、七〇〇	三〇〇、〇〇〇
佛國	三九、六〇〇	七三〇、〇〇〇

伊國　三六、七四〇　二九〇、〇〇〇

協定の根本精神

列國協定に依る海軍々備の縮限は、何人も主義に於て反對せざるのみならず、尚ほ又正面より反對すること能はざる性質のものである。我が國に於ても政府が欣然として之に贊同せるは勿論、當の責任者たる海軍大臣すら、正當なる手段と方法を以てするなれば八八艦隊さへも敢て固執するものではないと聲明して居る。唯之が實行上に横はる難關は、正當なる手段方法である。一層直截に云へば縮限の標準と比率とである。各國の地理國情に鑒へ、其の國の安全を害せざる程度に於て軍備を縮限すべしとは、國際聯盟條文の示す處であるが、而かも其の根本因子たる地理國情なるものを計測する尺度がない。世界六十個國中、一として地理國情を同じふせる國とてはない。地勢に於て、海形に於て、人口に於て、幅員に於て、經濟狀態に於て、文化の程度に於て、一つが同じければ他は反し、一つが似たれば他は異なり、千差萬別殆んど較べ樣がない。

故に各國の地理國情などを一々仔細に研究攷覈して、然る後初めて軍備の標準を決定する如きは、啻に百年河清を待つの類たるのみならず、如何に慎重綿密に攻究するも、到底列國の滿足すべき成案が出來ようとは殆んど信じられない。現在の如く經濟界の急迫と國際間の不安に襲はれつゝある際、斯かる悠長なる研究を待つて居るとは出來ない。今日軍備問題の急速解決を要する點は、先づ第一に危險なる各國の競爭的軍備擴張を制止せんと欲するに在る。即ち今回協定せんとする軍備問題は、永久的解決と云ふよりも寧ろ當面的應急策とでも言ふべきである。之を以て各國の地理國情を考慮尊重すべきは勿論たるも、之に拘泥することなく、寧ろ當面の急務にして、而かも又今回軍備縮限の最大因由たる經濟問題に重きを置くと同時に、一面に於て軍備の目的たる「國の安全」と云ふ點を考慮し之を以て協定の基礎と爲すべきであると信ずる。

既に協定の基礎を經濟問題に置く以上、現在に於ける各國の經濟的地位を無視することは出來ない。即ち經濟力に於て遙かに劣れる國が、優れる國よりも其の國の同意なくして、優勢なる軍備を張らんと欲する如きは協定の精神に反するものである。更に又協定の基礎を「國の安全」に置く以上、成るべく現在に於ける各國の海軍勢力の比率を尊重せねばならぬ。何故となれば現在勢力は各國が國の安全上必要と認めて存置せるものなるが故である。故に大國と雖ども自國の經濟力を恃みて小國の國防を危くせしむる如き軍備を保たんと欲する如きは、是れ亦

協定の精神に反するものと云はねばならぬ。

之を以て經濟力小なる國即ち軍備の競爭に堪へ得ざる國は、軍備の競爭に勝ち得る國即ち經濟力大なる國に對し、若し其の國が欲するならば、或る程度に於いて軍備の優越を認むるの犧牲心が無くてはならぬ。之と同時に經濟力の大なる國に在つても亦、經濟力小なる國の安全を保ち得る丈の軍備を認むるの雅量なくてはならぬ。

故に若し此の小國の犧牲心と大國の雅量との互讓的精神にして缺如するならば、軍備の協定は到底成立の見込は無いものと諦らむべきである。若し夫れ大國にして小國に對し軍備の優越權を讓るが如き國あらば、是れ人間の國にあらずして神の國である。二十世紀に於て世界に神の國が有らうとは夢にも思はれない。日本國民にして軍備縮限協定の成立を望むならば、此の二大精神を忘れてはならぬ。

國富と國費との比較

	國富(概略)	國費(公定相場に換算す)
日本	五四七億圓	一、五六二百萬圓
英國	三、四〇〇〃	一一、八四一〃
米國	六、五〇八〃	七、九四六〃
佛國	一、八三五〃	一〇、〇八二〃
伊國	六〇〇〃(?)	二、四三八〃

協定の手段

大國小國共に此の二大精神を以て協定に臨むとせば、次に生ずる問題は協定の標準を何に依て定むるかである。軍備の標準を定むる手段として、普通世間に唱へらるゝ二の途がある。其の一は經費即ち軍備に要する費用の額に依つて定むるもの、其の二は武力即ち艦艇等の勢力に依つて定むるものである。華盛頓會議が果して何れの手段に依るやを知らぬが、兩者共に夫々利害得失を有し、前途幾多の暗礁難が横つて居るので、之を乘切て彼岸に達する爲には相當大なる努力を要することゝ思ふ。

今假りに前者即ち經費に依つて軍備の標準を定むとせんか、之にも亦二樣の方法がある。即ち甲は軍備費に依つて各國海軍の比率を定むるもので、例へばA國の海軍々備費を一億圓と假定すれば、B國は幾千圓、C國は幾千圓と協定するのである。此の方法は各國海軍の比率さへ協定整へば、實施は最も容易にして又便宜である。乃ち許れたる費額内に於て各國は自國の國防上最も必要と思惟する艦種を任意に建造することが出來るから艦種艦型隻數などを制限規定するの煩累がない。併しながら此の方法の缺點とする處は、各國製艦費の比率を異にし、而か

も其の比率たるや時の物價に從ふて高低あるが爲め、精確なる比率を定むることが困難である。加之協約國にして萬一誠意を有せざる場合に在つては一隻の製艦費を安價に誤間化し多數の軍艦を造ることも出來る。

乙は一部の論者に於て比較的公平と稱せらる方法で、各國の歲出を基準とし、其の幾割を以て軍備費と規定するのである。此の方法は一見公平なるが如きも、凡そ一國の歲出なるものは主として國の經濟狀態、文化の程度等に比例するものであつて、殖民地海岸線の如き防禦海面の大小即ち國防問題とは全然沒交涉のものである。即ち同じ歲出を有する國に於ても、大なる防禦海面を有せるものあり、小なる防禦海面を有せるものもある。故に若し此の弊を補はんが爲め、A國は歲出の幾割、B國は歲出の幾割と、國に依つて差等を設くることゝすれば、所謂地理國情を考察するもので、問題は更に複雜錯綜して之が解決は容易でない。

歲出と軍備費。

	歲出	軍備費	比率%
日本	一、五六二百萬圓	七六二百萬圓	四八・六
英國	一一、八四一〃	二、三〇四〃	一九・四
米國	七、九四六〃	三、〇〇八〃	三七・八
佛國	一〇、〇八二〃	一、九八八〃	一九・七
伊國	二、四三八〃	二五六〃	一〇・四

然らば標準の基礎を經費の上に置くことを止め、武力即ち艦艇等の勢力の下に置くこととせんか、之にも亦種々の質疑が伴ふて居る。乃ち先づ第一に武力の基準を何に置くかの問題ある。或は主力軍艦のみに置くか、或は海軍力全體に置くか。次に若し主力軍艦に置くとせば、主力軍艦とは如何なるものを稱するかとの解說から定めて懸らねばならぬ。更に又之を計算するには隻數を以てするか、砲數を以てするか、排水量を以てするか、扨ては艦齡の關係を如何に規定するかなどの問題が生ずる。又武力の基準を海軍力全體に置くとすれば、艦艇のみとするか、陸上機關をも含ますか、航空機はどうするか、運送船は如何に取扱ふかなどの問題が起る、之が解決も亦相當に難物である。

そこで若し標準の基礎を武力の上に置くとすれば、主力軍艦(戰艦、巡洋戰艦)の隻數のみを以て基準とすることが、問題の解決をして最も容易ならしむる途であると信ずる。而して其と同時に主力軍艦の年齡を規定することである。即ち或る軍艦の起工後何個年を經過するにあらざれば、之が代艦を起工することを禁止するのである。世間で往々耳にする軍艦の新裝艦型な

どの制限は、一面に於て科學の進步を阻害するの嫌あるのみならず、斯かる制限は實際上甚だ困難であると思はれる。此等の點は經令各國の自由競爭に委かし置くも、一朝一夕に案出製造せらるゝものでなく、艦齢さへ適當に制限し置けば左程憂ふるに足らないと信ずる。素より根本の標準さへ決定すれば、是等のデテールは專門家の協定に委かすべき問題である。

要するに經費に依ると、武力に依るとを問はず、各國が虚心坦懐、誠意を以て事に當るにあらざれば、異論百出して遂に協定を不成立に終らしむるであらう。而して若し不幸にして協定破裂せんか、經濟財政の上に於て最も大なる苦痛を受くるものは我が日本であるであらう。現在に於てさへ五大國中、最も重き軍備費を負擔せるものは我が國民である。

國民所得と軍費負擔額

	國民毎人所得額	毎人軍備負擔額
日本	八四・四圓	一三・五圓
英國	三七七・一圓	三六・七圓
米國	一、一八八・九圓	二八・四圓
佛國	三九二・四圓	一九・三圓
伊國	一一三・六圓	四・三圓

協定の比率

各國の經濟力と「國の安全」とを目標とし、海軍比率を如何に定むべきか、是れ軍備縮限の協定に於て、最も重要にして又最も困難なる問題である。現代の如き群雄割據的の國際狀態の下に於て、苟くも向上發展を念とせる有爲の國は、何れも國力の許す範圍に於て、成るべく强大なる軍備を有せんと欲するは、國民的心理の自然に然らしむる處である。殊に直接國防の責任に當れる軍人が、私心以外に軍備の充實を希望するは大に諒とすべきである。併しながら世界の形勢と帝國の實情に照らし、此の上軍備の充實擴張を行ふことが、却つて國家の經濟を危ふし、國家の安全を傷ふの虞あるを知りたる時、最早や軍人としての小見地を離れ國家の大に就くべきである。

我が海軍當局者が果して如何なる成案を以て、華盛頓會議に臨まんとするかは、今日尚ほ未だ外間より窺知するを許さない。併しながら列國にして海軍を縮少すれば、我も亦八八艦隊を强ひて固執するものにあらずとの海軍大臣の聲明より想察するも 當局者としても相當果斷なる決心と覺悟とを有せるものと思はれる。

抑も我が八八艦隊は、或は米國の三年計畫案に對應せんが爲

めに計畫せられたりとも云ひ、或は米國の三年計畫以前に於て既に劃定せられたりともいひ、其何れが眞なるやを知らない。

左れど之を實質の上に徵するに、我が海軍は米國の三年計劃案に對して、八八艦隊を以て滿足し居るかの如き觀がある。即ち當局者の言として、米國にして三年計劃以外に新擴張を行はさるに於ては、我も亦八八艦隊以上に擴張の意志を有せずと稱へ、或は又各國にして造船計劃を變更せざる限り、我も亦八八計畫を變更せずと說いて居る。然らば我が八八艦隊と、米國の三年計畫艦隊とは、其の勢力に於て如何なる比率を有するであらうか、之に依つて當局の意の在る處も略ぼ察知することが出來るゝ思ふ。

元來日本の八八艦隊なるものは、艦型進步の爲め幾度か其基準を更め、現在に於ては十六吋砲を裝する長門以後の建造に係る戰艦陸奧、加賀、土佐、紀伊、尾張外二隻の八隻と、天城以後の巡洋戰艦赤城、愛宕、高雄及外四隻の八隻とより成る合計十六隻の主力軍艦を基幹とせるもので、之が完成期は大正十六年の豫定である。而して米國の三年計畫に屬する我に相當せる軍艦即ち十六吋砲を裝備せるものを擧ぐれば、戰艦に於てテンネツシイ以後の十二隻を算し、巡洋戰艦に於てレキシントン以下の六隻を見る。乃ち合計十八隻にして其の竣成期は大正十二年若くは十三年である。是等の軍艦の外、十六吋砲以下の武裝を有する第二流の主力軍艦に於て、戰艦巡洋戰艦を合し、我の九隻に對して米は十五隻を有して居る。故に十六吋砲艦に於ては、

	戰艦	巡洋戰艦	計	比率
日本	八	八	一六	八・九
米國	一二	六	一八	一〇・〇

又十六吋砲以下の第二流艦に於て

	戰艦	巡洋戰艦	計	比率
日本	五	四	九	六・〇
米國	一五	〇	一五	一〇・〇

之に由つて觀れば、大體に於て我は米の約八割に相當して居る。然るに米國は之を以て尙ほ滿足せず、我が八八艦隊に對抗する爲め、一昨年來更に第二次三年計畫を策定し、已に屢議會に提出したるも、議會に於ては軍備縮限協定の妨げとして常に握り潰して居る。故に若し今回の華盛頓會議に於ける軍縮協定が萬一不成功に終りたる場合には、恐らく米國式の大馬力を以て更に海軍擴張案を議會に提出し、議會も亦恐らく之を容れるであらうとの形勢が窺はれる。

右の如く若し我海軍が、米國海軍の約八割を標準として會議に臨むとせば、吾人の私見としては國防上先づ至當の主張であ

らうと信ずる。單に艦隊戰術上より見れば、若し地理と人力の利を我に占むるを得ば、敵と抗敵小限度は敵の七割と稱へられて居る。併し之は彼我艦隊打ち合ひの場合である。我が國の如き海岸線長く防禦海面廣き國に在つては、戰略上より見たる國防勢力は、少くも敵の勢力の八割位は用意する必要がある。米國の優越權を認むるは獨立國家として誠に耐へ難き讓歩である。而かも尙ほ米國に於て應せずとせば、米國は世界の平和に對して誠意の無きものと言はねばならぬ。而して協定不成立の責任は米國の全然負ふべきものである。

故に若し海軍縮限の基準を主力軍艦に置き其の比率を一〇對八と協定し、且つ米國の三年計畫をスタンダードと爲すと假定せば、日本の八八艦隊には恐らく手を觸れずして濟むであらう。但　其の場合に於ては軍備縮少にあらずして、寧ろ軍備制限に關するもので、唯將來の競爭的擴張を制止するに過ぎない。從うて經濟上の緩和を望むことは出來ない。尤も協定に依り現在建築中並に計畫中のものをも延期することゝなれば問題は自ら別である。

關聯問題

海軍縮限と關聯して研究すべき問題は太平洋上諸島に於ける軍事防備である。米國の有せる布哇、ガム、比律賓等に於ける軍事施設は、島嶼其のものゝ防禦を超越して、何れも艦隊の前進根據たるに適するものである。斯くの如きは我が國に取つて至大の脅威にして、中にもガムの如きは恰かも匕首を振つて我が心臟に擬するに等しい。此等の地に於ける軍事施設大なれば大なる程、我が國はヨリ強大なる海軍力を持たねばならぬのである。故に若し米國が華盛頓會議を開催せんとする本旨が、單に經濟上の理由のみでなく、眞に世界の平和を念とするにあるならば、他國の安全を脅威するが如き施設は自ら進んで撤去すべきであると信ずる。此の問題に對しては我が國は正々堂々米國に向つて之を勸告し之を要求することが至當であらう。我が當局者が之に對して如何なる意思と見解とを有するかは知らぬが、新聞の報ずる處に依れば聊か微溫的なるが如く察せられる。

併しながら既に築設したるものに對して急速破壞を要求するは、縱令道理としては正しきも、之が實行は頗る困難であらう。難きを他に强ゆるは言は壯ならんも、協定を成功に導く所以でない、故に布哇比律賓に對しては將來の增設を中止するは勿論、既成の分に對しても艦隊根據として積極的作戰に使用し得べき施設は漸次縮少撤廢の方針を取ることゝし、唯ガムに對

してのみは其の積極的攻撃用設備を速かに撤去せんことを要求すべきであると信ずる。

之と同時に若し日本の設備にして、米國並に其の屬領地の安全を脅かすものありとすれば、我も亦虚心担懐を以て潔よく之が協定に應ずることが必要である。世間に傳へらるゝ或る方面の頑陋が、果して事實であるとすれば、彼等は協定に對して毛頭誠意を有せざるもので、國家の爲め誠に憂ふべきである。

次には協約の期間である。此の問題に對しては局外者より言議を挿む程の必要を認めない。併し唯一個の私見として希望を述ぶれば、今回の協定は最初の試驗的として其の期限はあまり長からざるを便利と信ずる。國際聯盟の軍備改訂期限は十年なるを以て、應急的の意味を有せる今回の協約は最初先づ五年位を期限と爲すを適當と思はれる。日本と最も重大密接なる關係を有する諸國の加はらざる協約は、期間を短くして成るべく改訂の機會を多くすることが世界形勢の推移に應じ得るの策である。

或る論者の言

最近軍備縮限比率に關する或る論者意見なるものを讀んだ。其の人の説に依れば「日英米共に軍備權能に於ては絶對に同等均一である。然るにも拘はらず協約に依つて他國の軍備優越を承認することは以ての外である。斯かる者を以て使命に任せようとする大使があつたら、初めから切腹して會議に臨まぬが宜い」と云ふのである。誠に以て御壯んな言である。自分も空で言であつたなら、せめて自己慰藉の爲めにでも斯様な壯語をして見たい。遺憾ながら未だ耳が聞へ目が見へる爲め、聊か世界の形勢と日本の實狀とが判り、卑怯かは知らぬが空言をぶつ放なして自己慰藉に甘んじて居る勇氣がない。

論者が如何に大言壯語を逞しふするも、前述べた如く事實の上に於て日本は米國海軍の八割を以て滿足して居たのである。否な滿足せざるを得なかつたのである。若し日本にして英米と同等均一の海軍力を備へ得るの力がありとすれば、論者の言も大に意義がある。併しながら今日の日本は、現在計畫の八八艦隊ですら、已に業に痩馬に重荷で經費上へト／＼になつて居る。最早や此の上軍備の爲めに投じ得る餘力は甚だ微弱であらうと信ずる。若し今度の協定成立せざれば、米國は直に第二次計畫を實施するものと認めねばならぬ。其の時に於ては日本の海軍は米の五割になるやら三割に下るやら判らない。

軍備は唯虚名の權能ばかりでは畫に書いた餅程の價値もない。實質あつて初めて軍備の價値が現はれるのである。如何に

同等均一の軍備權能を振り廻はしたとて、三割五割の勞力を以て國防の實を擧け得べしとは、幾ら自己慰藉の論者と雖ども、認め得ぬであらう。花より團子が軍備の本領である。

論者は又「米國は海軍不用の國柄である。米國海軍は贅澤物である」と云つて居る。或はそうかも知れぬ。吾人日本人より見れば左樣思へないこともない。併しながら米國人自身は決して不用物とも贅澤物とも思つて居ないであらう。若し金持は貧乏人よりも戸締りを一層嚴にする必要がありとすれば、富有なる米國は貧弱な日本よりも、一層餘計に國防の必要があるかも知れない。論者に似たる米國人は乾度言ふであらう「日本の如き貧乏國へ誰が泥棒に入るものか、日本の軍備こそ不用物じや」と。御互に斯かる偏屈なる色眼鏡を以てしては到底協商の餘地は無い。

不用物と云へば、日本の陸軍々備の如きは、外國人より見れば侵略以外には全く無用の長物と思つて居るであらう。否な思つて居るのみでなく、屢々斯かる議論を耳にする。夫にも拘はらず吾人日本國民は之を必要と認め、年々乏しき財布から二億幾千萬圓の巨資を投じて居るではないか。論者の如きは先づ日本の陸軍を無用と認めた後にあらざれば、米國の海軍無用論を説く資格はない。」

凡そ他國と協商の事に當らんとせば、自己の獨斷を以て徒らに大言壯語するのみでは、其の實績は擧らない。足を現實の地に着けて可能性を帶びた言議を立つることが肝要である。論者の如く米國の海軍は無用物なり、我に優越權を與へよと叫ぶは、恰かも米國人が日本の陸軍は無用なり、速かに撤廢すべしと唱ふると等しく、理屈は兎に角實際問題として到底實現不可能なる要求である。實現不可能なる要求を携へて會議に臨む位なら、寧ろ最初より之に列せざる方が優しであると云ふ所以である。

軍備縮限と現存軍備

自分は日本の安全と國民の幸福との爲め、軍備縮限の切要を説いた。併しながら自分は今日尚ほ未だ軍備の不必要を唱へない。完全なる世界の軍備撤廢が行はるれば兎に角、苟くも國家が軍備を存置せる間は、軍備は依然として必要である。軍備が必要である以上、之をして最も有効且つ有力ならしむるは、國家としても國民としても大に務むべき道であると信ずる。

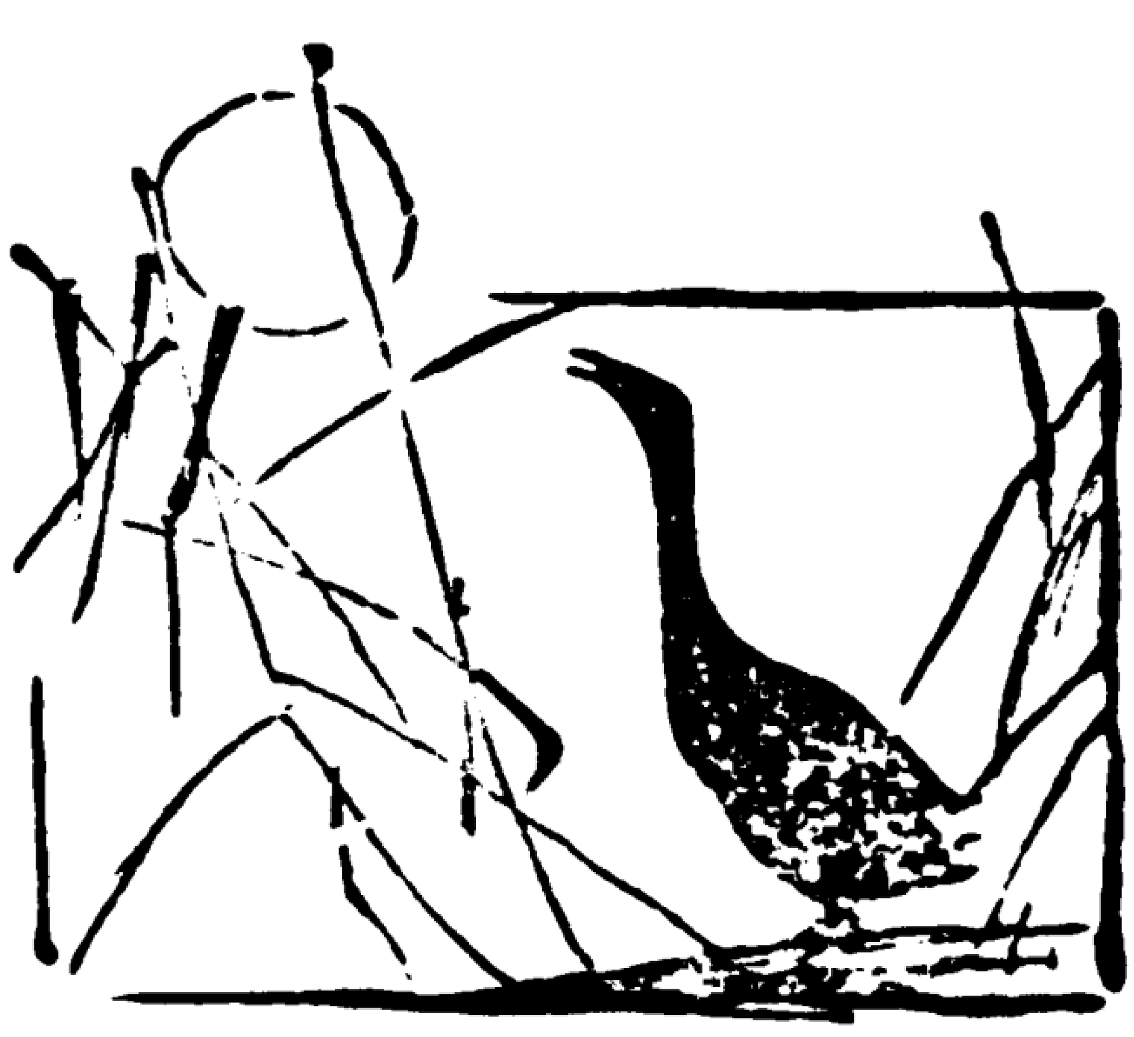
然るに世間動もすれば軍備の縮少と、軍備の不必要とを誤解的に或は感情的に混同せるものが少なくない樣である。殊に軍事當局者並に軍人中には、軍備縮少論者を以て直に軍備反對

者なるかの如く誤解し、軍隊の敵であるかの如く憎惡嫌厭するものがある。甚だしきは彼等を目して非愛國者賣國奴の如く誣罵するものさへある。之と同時に軍備縮限論者中にも、往々感情的に軍隊並に軍人に對して、一種嫌忌の念を抱き、所謂毅沮ぶしの如く輕蔑するものも無きにあらずである。

自分より之を見れば、世間に在つて軍備縮少を說く人も、軍隊に在つて國防の任に從事する人も、共に等しく國家に對する奉公心の發露である。誤解と感情以外に何等だに相敵視する必要も理由も無いと思ふ。自分は今日國民としての立場より、此際軍備の縮限が國家に利益ありと信じて之を唱ふると同時に、軍人に對しても亦國家が必要と認めて存置せる軍職に從事せる人として、之に敬意を表するに吝なるものでない。

併しながら若し軍人にして、自己の權勢を擁護し、自己の安定を圖るが如き不淨なる私心を以て行動するに於ては、堂々として之を責めねばならぬと思ふ。要するに軍備縮限主義者と軍人とは互に相反目邪視するよりも、寧ろ相接觸して腹藏隔意なき意見を交換することが却て相互の爲め又國家の爲め利益ではないかと思ふ。

（引用の表は主として新聞雜誌より拔萃したるものなるに依り、誤謬なきを保し難し。御氣付きの點あらば御敎示を乞



人生の眞味と哲學的教養及び宗教的信念

飽かず高稀な熱の自覺へ

杉森孝次郎

哲學は光りだ。宗教は熱だ。同時に多少の熱でない光り、同時に多少の光りでない熱は、恐らくは心理の世界にない。ありえない。けれども、比較的に弱い光りに、比較的に強い熱を結合した生活と、比較的に強い光りに、比較的に弱い熱を結合した生活とは、存する。その生活の自覺的統一體としての性格または人格も存するのだ。第二流の教祖、殊に祖述的教祖と、第一流の教祖との差は、しばしば、熱の强弱の差よりも、光りの强弱の差だ。ヤソの光りは、ポールの熱、ルーテルの熱の如くに、疑ふ餘地がすくない。釋迦の光りと、日蓮の熱も、顯著な對照だ。プレトオでさへ、ヘーゲルでさへ、その信者には、光りよりも熱の勝つた人がまれならず見いだされる。マヂニは、熱の人として著名だが、かれの書き物を讀むと、光りの人としてのかれの本質と眞價は、實に高い。かれの光りが、かれの熱以上に高かつたとはいはないが、かれの熱から取り離して見ても、かれの光りは、近代の一超人だ。かれは、純熱眞智の一型であつた。カアライルは、熱の人として著名だ。けれども、熱の人としてのかれが、われらに好印象を與へる場合は、その熱の內質に、光りが認められる場合に限る。こゝでわれらといつたのは、明確には、わたし自身をさしたのだが、わたし自身の、その經驗と判斷とに對して、わたしは、理想的普遍妥當價を主張する。信ずる。光りなき熱の、時として一になんぞ哀絕、悲絕、惻絕なる。無智の母が、愛子の將來に對して、空望と誤信とを、純愛に燃えて懷抱する場合を想像せ

よ。涙をそゝる悲劇だ。同時に、光りなき熱は、時として、否な實にしば〳〵、一になんぞ醜劣卑惡なる。下品なる。見ぐるしくも滑稽なる。無智の熱、無智ゆゑの熱を抱いて傲然卑他する者は、その巨魁だ、明察なくして、その巨魁に隨喜渴仰の熱誠を捧ぐるむれは、その窩類だ。

光りは、最後の結論として、熱の精粹だ。熱の自覺が、これこそが、これのみが、人の世の眞の光りだ。われらは、自覺なき熱を厭ふ。自覺なき熱は、物熱に近い。宇宙は永久の瞬間だ。日星河嶽、風雨霜露、戰爭、交歡、複雜無限の內容を包藏し、展開するが如くなれども、聰明の一點光によつて、物みなと事みなは、始めて多少の意義を帶んでくる。眞觀すれば、宇宙は聰明者の舞臺だ。歷史は聰明者の獨占だ。稀貴の位置を占むる實在は、古往今來の卓越聰明者だ。思想家が、眞の意義に於ける思想家の身邊に、萬象は羅拜して奉仕する。思想的超人の一冊、一頁、一行には、古今の英雄と群衆とを、物格につらねさせる不可思議力がある。絕對不可抗の權威がある。たとひ蓬頭垢面でも、濫褸に身をば包むとも、陋屋に貧居しようとも、思想あり、思想力ある人は、斷じて宇宙の帝位に立つ。かれの價値は本質的だ。他のなにものも、かれの價値をいかんともしようがない。さかしまに、かれは、他のすべてのものの價値を決定する。進んでは創造する。思想は聰明だ。思想家は聰明者だ。聰明が光りだ。それの不自由名は哲學だ。

單なる熱の生活はありがたくない。鬪犬の生活、猛牛の生活が、うらやましくも、ありがたくもない如くにだ。單なる光りの生活でさへ、單なる熱の生活にくらべては、ありがたくも、うらやましくもある。プレトオに殉難熱はなかつた。エマサンに革命熱は缺乏してゐた。われらが、かれらにあき足らない一點だ。それでさへ、われらが、かれらの思想表白を見て、先づ不滿足に思ふ場合は、かれらの心光が、かれらの心熱以下である場合が多い。マホメツトは聰明人であつた。聰明人であつた以上に、聰明信者であつた。偶像破壞がかれのいのちであつた。わたしは、生活の眞味に、偶像破壞にあると信ずる。偶像破壞は、眞神創造のための一必要手段だ。世界はひとつほかない。因果律を見ても、わかる。唯一の世界に於いて、眞神と偶像とは兩立しない。一人が、二神の信者たることは不可能だ。偶像の信者は、必然的に、眞神の不信者だ。眞神擁護の意識に於いて、われらは、偶像討伐を要するのだ。生活の眞味は、繰りかへしてい

ふかたちになるが、眞神創造にある。隨つて、その一側面の内容は、偶像破壞に代表される。

近代に及んで、人は科學を發達させた。科學の本質第一價は、眞神創造の一大手段たるところにある。世には、專門的、職業的には、科學者であつても、科學主義者でない人がすくなくない。科學が、生活の總支配則ではないけれども、いはゞ、科學の哲學的意義を、人はすべて知了すべきだ。さでないと、生きながら、生活の眞義がわからない。その眞味が味はれない。哲學者でない科學者は、技手だ。機械師だ。かれは、多年、科學研究にうき身をやつした上げ句に、粗末な神の信者になることがある。熱心な科學研究者であると同時に、低級の信仰及び信仰觀を把持する人もある。科學の研究は善事だが、科學主義の認識體達は、それ以上の根本的、且つ普遍的一必要事だ。反迷信、三字でさへ、現代に於いて、及び恐らくはどの時代に於いても、一哲學の旗幟、一宗教の標榜となれるくらゐだ。ミル、福澤、その例に屬する。偶像崇拜が迷信だ。

ワイルドは獄に入れられた。その原因も卑陋であつた。けれども、獄中のかれは、獄外の紳士淑女の生活をうらやまなんだ。その外的自由をばうらやんだかも知れん。しかし、その内的生活をば輕侮卑下の眼をもつて見おろした。ワルイドの自覺に於いては、ワルイドの人生と世界とは、世俗の善男善女のそれらとは、本質的に別であつた。われらは、ひとへにワイルドに贊同することもできないが、ひとへにかれを、うぬぼれ、ひがみと見てしまふことは、恐らくに、それ以上にもできない。世の凡庸中俗の心の持ちぬしである人々が、うかがひ知ることの絶望的に困難な一境が、ワイルドの心界には實存した。『デ・プロフアンディス』のなかにさへ、多くの男女には、永久に理解されず、味識されずに終はるほかあるまいと考へられる文字の頁が往々にして、あるひはもつとしばしば横たはつてゐる。數量的觀察に從へば、天才も、凡才も、發見されない。かれらは、同樣に眠食し、衣住し、言動する。性質的觀察に從へば、しかしながら、世界は、始まりから終はりまで、一端から他端まで、本質的差別の協力と競爭だ。天才は、異質中の異質だ。風俗の追隨をゆるさない。生活の世界中を見わたして、最も生きがひある生活の能力者は、天才者だ。殊にも聰明の天才者だ。世の光りとしての天才者だ。

思想を除けば、人が、人以外の實在との比較に於いて、特有するなにものもない。思想なき身體は物體だ。生活の眞味は、思想の有無と共に存否し、思想の大小高低深淺と共に、その大小高低深淺を來たす。陽明は、熱としての光りをのみ信ぜんと欲する語氣が著しかつた。實行して見て、始めてわかる道理に特に注目した。一大眞理たることは明らかだ。われらは、すべての知的生活に、體達と、人格と、實在とを十分に供給すべきだ。認識理解の世界が、さながらに、同時に行爲創造の世界として經驗されるやうにあるべきだ。宇宙は、隅から隅まで、物理や生理の支配でなく、專ら心理の支配として洞察さるべきだ。その洞察力を、人はみな持つべきだ。宇宙をことばに譬へていふならば、隨つて生活をことばに譬へていふならば、そのことばは、字引きのなかのことばでなく、創作のなかのことばでなくてはならん。ただ、われらは、いのちとか、熱とか、信とか、意思とか、體驗とか、實行とかいふたぐひの言語に對して、偶像崇拜に落ち入つてはならん。いはゆる信の人、熱の人が、時と共に、經驗と共に、ます〳〵無智の獨斷體と化し、ついには無益無害、または有害無益の病的神秘主義者に墮落してしまふ例は隨分多い。生活の眞味は、かれらの主觀に於いては、深大高稀かも知れないが、觀念のまなこに照らせば、淺はかにして淺ましい。熱は、單獨に價値を全うしない。熱の價値は、量だけではきまらない。質が問題だ。精質、偏質の熱は、凡眼には、無熱、薄熱として映じやすい。加藤清正よりも虎の方が、また秀吉よりも淸正の方が、熱が多いと思はれるのだ。科學界の英雄よりも、武力界、政治界の英雄の方が、英雄主義の高能者だと思はれるのだ。意味に於いて強い熱は、この凡眼には認められない。聲の大きい方が、議論の勝利者と思はれるのだ。なに〳〵宗の信者と聞けば、その人は宗敎的信仰のある人だなと判斷し、なに宗の信者でもない、一思想家だと聞けば、また一人だと聞けば、宗敎的信仰の缺乏した人だなと判斷する。眞實は、多くの場合に於いて、その正反對なのだ。今の世に於いて、たふとき信の人は、また熱の人は、名ある宗敎の傳道師や、信徒ではない。哲學的科學主義者だ。無條件的思想家だ。絕對無條件の思想人だ。

人生の眞味をなめる舌は、いはゆる宗敎的信仰ではない。いはゆる哲學的敎養でさへもない。いはゆる宗敎的信仰の無價値と、いはゆる哲學的敎養の無意義とを、先づ明觀し、確信しうる光りと熱、これこそが、人生の眞味をなめる唯一眞正

の舌だ。宗教的信仰と、哲學的教養には、價値も、意義もある。しかし、いはゆる宗教的信仰と、いはゆる哲學的教養には、生命の枯渇したもの、腐敗したものが多い。それをだに見わけえない頭腦、心胸、態度、方法に、人生の眞味を求索する方角に向いてゐない。自照、他照、光りがわれらの救主だ。

實生活の煩勞から一歩哲學と宗教の世界へ

文學博士 三宅雪嶺

□

人は社會を構造して居り、或る程度まで蟻や蜂と同じく、社會の爲めに働き、之を避けようとしても出來ぬ。違ふたところは人に大腦が發達し、單に本能を以つてせぬにあるが、思慮分別しつゝ手段を目的にし、之を悟らず、已れの利益を圖りながら、他人の爲めにして居る事が多い。豫め他人の爲めにすると心得て居れば、働き方も違ふのであるのに、左うは行かず、自らの爲めになる事も少く、他人の爲めになる事も少いやうにならうとする。蟻や蜂の如く、一々目的と手段との關係が明白になつて居るのと違ふが、其處に何程か自由意思と稱すべきものがあり、一層思慮分別すれば更に働きの功能を多くする事が出來る。最も著しい例は金儲けであつて、多くの人は金を以て何物かを得るの手段としつゝ、途に金其物を目的とし、儲かる程可いとし、之を生涯の目的とすると疑らなくなつたりする。身代が豐かになり、生活の心配が無くなつてからゆつくり樂まうと思つて居つたのが、いよ／＼金が出來た頃、何をして樂しまうか、餘り面白い事もなく、矢張金勘定するのが最も興味ある事になり、其儘老衰して終る。百萬圓、千萬圓、億圓、儲かつた儘で死んで

しまふ。死んだ後に子孫又は關係者が何とか其遺産を處分し、金が何かの役に立つに相違なけれど、儲けた當人は其後までの事を考へず、儲ける爲めに儲け、自ら金を目的にし、之を手段にする事なく、手段にしても其幾百千分の一に止まり、殘るところの最大部分は、死んだ後に人が遣ふ事になる。人が遣ふならば生きて居るうちに今少し遣ひ様があつたではないか。有り振れた公共慈善の事業でも、更に多く手を着ける事が出來、それで何程金を生かして使へるか知れぬ。慈善家と云はれたとて面白い事も無いと言はば言へ、多く金を遺して死んだとて何の面白い事があるか。一生懸命に金を儲け、鬼と云はれて死ぬのも、氣の利いた話と云へまい。然し氣が利く利かぬどころの話でなく、左うせずに居れぬのであり、詰り之れ丈けの金を有用に處分して與れと云ふて遺すに變りは無い。斯く金を遺すのは社會に何かの益がある。少しも儲けず、野倒れ死するよりも、大金を遺し、公會堂でも研究所でも立派に造れるとあれば、確かに社會の利益になる。吝嗇坊(りんぼう)が生涯を蓄財に費すのは、我利我利の最も甚しいものであつて、實は社會の爲めに働いて居つたのである。若し生きて居るうちに自ら社會と何の關係あるかを知つたなら、没分曉漢(わからずや)で終らず、他から觀ても更に幸福らしく過ぎ得たらう。

□

金を遺すのも社會に益するのであるが、その益し方が少いと云ふのは、外でもない、金は世間の何處かに在る。彼の金庫に入らねば何人かの金庫に入り、或は多くの人の財布に入る。大藏省では如何なる富豪よりも多くの金を取扱つて居る。金を遺す事が社會の利益になるにせよ、之を遺すといふ丈けでは特別に云ふの價値が無い。金を貯へ之を後に遺すのが、利己一方に考へられるのも之に據る。もとはと云へば、我利を意識しつゝ、無意識的で社會に奉仕するのであり、奉仕の仕方が拙いと云ふに過ぎぬ。之に較べれば政治家や軍人が敵國の横暴を防ぎ、幸福を增進するの便利を得さすのが利益多く、科學者が新に發見發明したり、藝術家が傑作を出したりするのは大いなる利益になる。歴史が富豪の歴史でなく、之を除外して成立つかに見えるのも偶然でない。然し事業を以て社會に利益を與へ、最も廣き意義に於いてする社會、即ち世界人類に利益を與へるとし、自ら生涯斯くて苦心し、斃れて已むと云ふのが可いか何うか。職人を以

立ち、職分を果して終るのであつて、利益を享ける多數の人は皆等しく賞讃するにしても、苦んで苦しみぬくのが人生であるか。多數に利益を與へれば多數が感謝するに定まつて居つても、人をして感謝せしめるが爲め、自ら寢起きも十分にせず骨折るべきであるか。爪に火を燈して蓄財すると、人に利益を與へる分量に於いて大いに違ふけれど、自ら從事するところの爲に苦しむに於いて似て居らぬとせぬ。人は職分を以つて立ち、職分を果しさへすれば可いと云ふが一般に認められて居るが、單に職務の爲めとしては、蟻や蜂の勞役と似た事になる。既に社會を構造しては左うなるべきものとし、本能のみで生きて居れず、著しく大腦の發達しては、多少異なる事無くてはならぬ。即ち思慮分別して、滿足する所あるべき順序になる。場合によつて自らの意見を加へず、職分と認めらるゝところの爲にする事がある。兵卒として戰場に向ふが如き、右向けと云はれて右向くの外ない。然し平時はそれほどでなく、寧ろ自ら爲すべき事を自ら決定するのを當然とする。自ら決定するの自由ありながら、唯或る職分を假想し、全力を之に盡くし、それで終るのを以て事の宜しきを得るとするか。日々業務に黽勉し、何一つ等閑にせぬのは感心の事と賞められるが、賞められさへせば可いであらうか。賞められるのも疑があり、賞められもせず、惡く云はれて頻りに働くが如き、何の爲めにするのであるか。世界の交通が繁く、年々人が忙しく、奮闘的生活を奬勵して已まず、實に戰場に往來するの有樣であつて、能く之に成功するのが月桂冠を得るが、斯くして忙し過ぎるのが人生であるか。強いて狩り立てられて戰ふならば已むを得ない事、自ら好んで戰ひ、戰ひ續けて死ぬとは何事か。何とか別に生活の仕樣が無いかとは、時として人の考へ及ぶところである。

□

ところで人生は如何なるものかとなれば、普通に此問題を取扱ふのは哲學又は宗教である。佛教で之を合せて居り、基督教で近世之を離して居る。今一般に之を離して考へる傾向あるが、人生を誠實に考へて居ると知られる哲學者及宗教家が、何の生活狀態か。果して一般世間で則るべきものかと云へば、左うとは云へぬ。之れまた御多分に洩れず、自ら職務とするところに忙殺され、頻りに黽勉して居らねば、墮落した者と見られる。その最も秀でた者は絶えず研究したり、或は

眼を閉ちて斷つたりして居る。人生は哲學者宗教家が送るところの生活の如きものであるか。哲學者になつても面白相も無く、宗教家になつても面白相も無い。俗世間を淺間しいと觀て居るやうでも、俗世間の方で逆に之等を淺間しいと觀て居る。世捨人か、世に捨てられ人かと世に稱する。然し此處が疑問の伏在するところであつて、何事にも程度があり、多數の人の平均能力を超えたところに苦痛がある。山遊びは面白く、年々多くの人が思ひ〳〵に山に登るが、高くなる程寒くて淋しい。山上に生活するのは苦痛である。山上が苦痛であるとて、中腹が苦痛と云へず、麓に何の苦痛あるべきでなく、鳥歌ひ花笑ふ頃、紅葉が萬丈の錦を染むる頃、限り無い愉快を感ずる事が出來る。ミケランジエロは藝術を以つて妻とし、九十歲まで刻苦勉勵し、尙、眼が覺めて仕事場に出掛けた。藝術の傑作は勞を以つて成る。圍碁の名人で對局最中血を吐いて仆れたのがある。幾段と云ひ、段が上る程心配が伴ひ、「あそび」と見る事が出來ぬ。然しそれで圍碁が面白くないと云へず、初段以下は「あそび」の分子多く、笊碁になれば何の苦痛が無い。誰でも義太夫でも然うであり、名人は「あそび」どころでなく、如何に間違はないかと心配して已まぬ。玄人になれば苦痛が伴ひ、素人の道樂藝の間が面白い。哲學者、宗教家は安心するところあるか何うか。此處で終りとすれば、力の足らぬのであり、終らぬとせば、安んずる事が出來ぬ。

□

然し一般世間で哲學趣味あるとないと、宗教趣味あるとないと、氣分に少からぬ違ひを見る。印度に哲學宗教の熱心家あるとて、之に倣はうとする者があるまい。羅馬の僧侶を見ても、情なく感ずるであらう。然しバルフオーアの哲學に就て何の非難あるにせよ、其政治家たるの態度に一種の深味がある。日本で渡邊無邊に野狐禪と云はれたが、聊か尋常と變つた所がある。哲學又は宗教で人生が呑込めるか何うか、人による事であるが、いくらか生活に潤ひのつくところがある。實業家が頻りに揺ぎつゝ、時として數歩退いて靜かに眺めるが、そこで缺點を知る事が出來る。奮鬪的生活を以つて、時に退いて反省するの暇を得る方、奮鬪にも利益がある。Amateur（道樂藝）は知れたものであり、無い方が可いと云ふたりするけれども、左う一概に云へず、或る人の道樂は下手な玄人に優る。アルキメデスは地球以外に立場を

得れば、地球を動し得ると云ふたが、ゲーテは此語を造り換へて、地球に或る立場を見出せば地球を動し得ると云ふた。ゲーテは更に云ふやう、人は宇宙の問題を解決し得べきでなく、解かるべきものを求め、解るやうにせば可い、と。ゲーテは、かなり理窟好きであつても、理窟のみに終らず、人生の眞味を解したやうなところがある。孔子の曰ふやう、知レ之者、不レ如二好レ之者一。好レ之者、不レ如二樂レ之者一と之に就いて種々の解釋あるけれど、兎も角も樂しみに重きを置いて居る。近世の社會的傾向なる奮闘的生活のうち、哲學、又は宗教にて樂しむべき餘地を得れば、唯徒らに忙殺せらるゝに優らう。他の動物も安んずるところあるが、本能に出でて居る。人類は大腦發達の爲めに疑問を作り出さずに居れず、それで樂しみ得るのは、他の動物より進んで居るのを示す。

信仰生活と實生活

高島米峰

信仰は、概念でもなく、論理でもなく、思索でもなく、實に吾等の體驗であつて、血であり肉であり力である。然り、信仰は、力である。しかも、それは、吾等の全生活に、無限の向上と歡喜と安定とを與ふる、オールマイティパワーである。孔夫子が、「人而無レ信、不レ知二其可一也、大車無レ輗、小車無レ軏、其何以行レ之哉」と言つたその信とは、謂はゆる宗教的信仰のことではない。しかし、姑く、それを宗教的信仰と解釋して見るに、無信仰の人の生活が、如何にも支離滅裂にして、統一を缺き、その行動、常に左支右吾して、恰も、大車の輗なく、小車の軏無き如きものであることを、看取するに難くないのである。

信仰は體驗である。宗教的體驗は、即ち、自己の知り得ざる境地に對して、依憑する感情を基礎とする。從つて、

科學の教ふるところを拒絶せず、哲學の究むるところに背反せざるのみならず、科學の到り得ざるところ、哲學の達し得ざるところ、即ち、超知識的境界に對して、一路の光明を直觀し、若くは、光明に攝取せられたりと信知して、依つて以て安立するのである。

信仰は、啻に、科學哲學の如き、謂はゆる學問の到達し得ざる境地を、境地とするのみでなく、又、道德の境地をも超越して居るのである。超越して居ると言つても、沒交渉だといふのではない。信仰は、超道德的ではあるが、反道德的であることを許さず。道德は、道德それ自身としても、勿論可能であるが、信仰の根柢の上に立つて、始めて潑剌たる躍動を爲し得るのである。孔夫子又曰はく、『知レ之者、不レ如ニ好レ之者一、好レ之者、不レ如ニ樂レ之者一』と。『之を知る』とは、即ち學問の境地にして『之を好む』とは、即ち道德の境地である。吾等は、學術の研究によりて、種々なる知識を得るが、單にこれを知り得たといふだけでは、それが吾等の全生活の上に、何の力ともなつては來ない。又、善惡を批判し、惡を惡としてこれ厭ひ、善を善としてこれを好むとしても、これが實行の努力に伴ふ苦痛があるのであつて、その生活は、決して歡喜に滿ちたものだとは言へない。然るに、『之を樂しむ』とは、即ち、宗教の境地であつて、こゝに到つて、始めて學術の研究も、道德の實行も、否、吾等の全生活が、向上と安定と歡喜とを得るに至るのである。

近時、帝國大學の教授助教授と稱せらるゝ博士學士の中より、非人道沒人情的行動を敢てするものを出すこと、再三に及べるは、その人のためにも、社會風教のためにも、教育の權威のためにも、頗る遺憾としなければならないこと、もとより言ふまでもないのであるが、これ等の博士學士が、自然科學の研究者であるといふことは、特に注意する價がないであらうか。由來、自然科學者は、……勿論、一概に斷じ去る譯にはゆかないが。……その研究の態度が、極めて冷靜でなければならないところから、不知不識の間に、冷酷の性情を馴致し、木石に對するも、鳥獸に對するも、人間に對するも、一切平等に、これを單なる物として考察する以外、人間に靈性の存在することの如きは、全くその研究範圍の外であるとして、敢てこれを顧みないのである。靈性の發動、そこには、道德もあり宗教もあるのであるが、自然科學者の目に映ずる人間は、單なる物の塊としての一面であつて、最も尊貴なる靈性の方面ではないのである。即ち自然

科學の研究室には、道德も宗教も必要ではないとせられるのであつて、從つて、自然科學者の中から、道德も宗教も、これを必要としないといふ人が出て來るといふことは、或は當然な歸結であるかも知れない。しかし、此くの如きの人々は、孔夫子の謂はゆる、『之を知る者』の階級に屬するのであつて、未だ『之を好む者』の境地にも到り得ず、更に『之を樂しむ者』に加かざること、遙に遠いものであると言はなければならない。此の如き無信仰の人々の生活が、支離滅裂で、常に左支右吾すること、もとよりそのところでなくてはならない。

世には、かゝる無信仰の人々の外に、迷信者と呼ばれる人々もある。この迷信者の態度の、敬虔にして熱烈なる、到底、これを、無信仰者の、傲慢冷酷なるに比ぶべくもない。從つて、この迷信者と正信者とは、往々にして混同して、これが判別に惱ましめられることがある。惟ふに、迷信も正信も、その科學の論究範圍以外に立場を有することに於て、全然その揆を一にして、自己の知り得ざる境地に對して、依憑の感情を基礎とする點に於て、全く異るところが無いのである。然らば、この迷信と正信とは、何に依つて區別し、彼を迷信者と呼び、これを正信者と稱することを得るか。

等しく科學の研究範圍以外に立つものではあるが、科學の研究結果を、消化するだけの力をさへ有せず、科學以下に降つて、科學の論究範圍から逃避するのが迷信であつて、科學の研究結果を承認するは勿論、科學以上に位して、科學の研究範圍を超越して居るのが正信である。又、この世界を現象界と實在界とに別ち、現象界は吾等の知識的境地であり、實在界は吾等の超知識的境地であるとする、この超知識的境地である實在界に對する直觀、又は信賴こそ、正信と呼ばるべきものであるが、これに反して、吾等の知識的境地である現象界に於て、超知識的の信賴をなすものがあるならば、それは明に迷信であると言はなければならない。この故に、迷信は人間の無知を住家とし、正信は人間の靈性に發動すると言へるのである。

無信仰者の跋扈して居る現代には、又、迷信者の跳梁も少くない。何敎とか何會とか稱して居る淫祠邪教もあるし、學會の名に隱れ、人間の弱點に乘じて、金儲けとして居るものもある。しかし、これ等は、もとより言ふに足らないが、この無信仰、この迷信に對する、既成宗教の無力無能は、何としたものであるか。既成宗教無力無能なるがために、

無信仰者跋扈し、迷信者跳梁するとも言へるし、又、奉仕生活とか、乞食生活とかを實行すると稱する、聖者めいた鬪諍の出て來たのも、既成宗教無力無能にして、現代人の憧憬を繋ぐに足らず、欲求を滿足せしめ得ざるに基くとも言へやう。

眞劍になつて、自分といふものを見つめて來ると、自分の生活の支離滅裂なのに愛想が盡き、自分の所行の左支右吾するのに泣きたくなる。無信仰な生活、唯物的な生活、利己的な生活、それ等を、實に惡魔の生活とも呪ひたいのである。しかし、吾等は眼高く天を仰ぎ得られけれども、足一歩も地を離れることが出來ないやうに、呪はしい此の現實を脱出して、彼の慕はしい理想の境に到達することは、頗る困難である。即ち、聖者の生活は營み難く、惡魔の生活には堪へ難い。そこに、不安があり苦惱があり墮落があるといふ人もある。それは眞實の叫びに相違なく、そうした墮落と苦惱と不安とを救ふのが、宗教の目的の一面であることも事實である。然り、しかし、それは、たゞ僅に、宗教の目的の消極的方面であつて、宗教の目的の總てゞはない。

病氣の時には、醫者も必要であるし、藥も必要である。しかし、無病の健康體には、醫藥は却つて迷惑でなければならない。即ち、醫藥の目的は、消極的であつて、たゞ僅に疾患を治癒して、發病以前の現狀に回復するだけである。吾等は、更に、この健康を維持しなければならない、否、進んで、より健康により强壯にならなければならぬ。そうしてそれは、醫藥の力ではなくて、營養の力である、米の飯の力である。宗教も亦、醫藥としての消極的方面を必要とすること勿論であるが、しかし、無煩悶、常慰安、進不息の營養として、米の飯としての、積極的方面を、より必要とするのである。この積極消極兩方面が、打して一丸となつたものが、即ち宗教的信仰と呼ばれるところのものである。

從つて、宗教は、死後の生活のみを目的とするものではなくて、現在の生活を、より多く目的とするのである。如何に死すべきかをも教ふるが、それよりは、もつと力强く、如何に生くべきかを說くのである。死のみの宗教ではなくて、寧ろ、生の宗教である。佛曰はく、『諸法實相』と。凡そこの宇宙間の萬有は、一大道の顯現であつて、道を離れては一物も存在し得ないのである。即ち『現象即實在』であり、『當相即道』である。從つて、『汝等所行、是菩薩道』であ

つて、吾等が日常の實生活そのまゝが、宗教的生活、信仰的生活であり、卽ち吾等の實生活の外に、別に宗教的生活とか、信仰的生活とかいふものは無いのである。若し、吾等が日常の實生活に於て、幾何かの不快と不滿と不安とを見出すならば、その人は、まだ、宗教的信仰を、自己の力として居ないのである。今日、世上の問題となつて居るやうな、諸種の罪惡は、此の如き人々に依つて、産出せられるのであること、言ふまでもない。

吾等は、聖者でない。從つて、幾度か懺悔しては又幾度か犯す、懺悔しては犯し犯しては懺悔す。かくて、車を挽くことを職業とする人ならば、梶棒握る際にも、信仰の力が充實して來るやうになり、商業を營む人ならば、算盤彈く指先にも、信仰の光が輝いて來るやうになる。此くの如くにして、始めて、吾等の全生活は、歡喜と安定と向上とを得て、眞に、生を樂しみ死を樂しみ得るところの、平穩滿足の境地に、到達し得るのである。（大正十年九月十八日）

哲學と獨創

文學博士　金子筑水

第一

吾々の眼前には現に二の異なるタイプの哲學が有つて、我思想界も明らかにそれからの影響を受けてゐる。一ツはアメリカのデューキー教授などによつて唱へられた實行本位又は實利本位の哲學卽ち、プラグマチズムであつて、も一ツは廣い意味で謂ふドイツ理想派の哲學である。一方にあつては徹頭徹尾實行が目的であつて、哲學は此の目的のための方便又は道具に外ならない。哲學にはアクションを整理するためのインストリユメントとしての外に何の價値もない。人

類が外界に順應するための一種複雜な道具だてが哲學に外ならない。然るにドイツの理想派に取つては、哲學は決してたゞの道具でない。彼等に取つては、哲學は一種の主觀生命であるから、主觀生命が直に生活の目的であるかぎり、哲學もそれみづから一種の目的であり、生命である。彼等に取つては哲學は人類を指導する一種の守本尊であり、又深い敬虔の情を以て迎へられる尊い偶像に外ならない。プラグマチズムは飽まで結果本位又は客觀本位の哲學であるに反して、理想派哲學はどこまでも內生命本位又は主觀本位の哲學である。

これは單に數多い外國哲學中最も著しい對照を示してゐる一例を擧げたに過ぎない。活動本位のプラグマチズムは、どこまでも活動的なアメリカ精神を代表した哲學であつて、主觀本位の理想主義哲學は飽までドイツ固有の深秘的精神を代表した哲學である。プラグマチズムは全く精神を異にするドイツに發生する謂はれがなく、理想主義哲學はまた極端に現實的な今日のアメリカに繁榮しやうとも思はれない。吾々日本人が或は實行主義哲學から或は理想主義哲學から深く學ばねばならぬことは勿論であるが、同時にプラグマチズムもドイツ哲學も、畢竟或はアメリカ獨得の哲學であつたり或はドイツ固有の哲學であつたりして、遂に吾々日本民族の哲學でないことも明白である。

私はこゝで簡單に苟も哲學と言はるべきものは必ず民族的であり同時にまた獨創的でなければならない理由を指摘したい。哲學が一面民族的であり他面獨創的でなければならない位な事は、餘りに當然すぎた自明すぎた事に考へられるが、然かも實際に於ては其の眞義が徹底的に十分には明らかにされてゐない。吾々は今日此の問題をこれまでよりももつと〳〵深く考へなければならない時代に到達してゐる。

哲學が一面に於て世界的な全人類的な性質を備へてゐると同時に、他面に於て民族的なナショナリスチックな特質を具備すべきこと——殊に後者の特質は、普通には極めて極て簡單に且粗雜にしか考へられてゐない。卒直に言へば、哲學はそれ〳〵の民族的精神の反影であり統一であるといふ事——此の點が今日まで餘り概念的にか又は空漠にしか考へられてゐない。哲學が必然的に民族性の一シムボルであるべき所以がまだ十分に理解されてゐない。そして此の無理解は主として哲學の本質に關する無理解に起因してゐる。藝術や宗敎の場合に於ては、其の人の個性や人格が一切の藝術

あることが認められながら、哲學の場合に於ては、其の人格と哲學とは分離されて、哲學は哲學として抽象的に獨立したものゝやうに考へられる。哲學と其の人の個性とは極めて縁遠いものゝやうに考へられる。茲に根本の誤解が有る。哲學は普通に考へられるやうに決してたゞ抽象的な理論でもなければ又冷靜な理屈のみでもない。徹底的な意味に於ては、哲學は常に其の人の人格の反映であつて、其の人の人格を抽象しては哲學は考へられない。何故なれば、哲學の極意は自己人格――精しくは人格的生活を基礎とし尺度としての人生に關する全的解釋であるからである。眞正の哲學は常に自己生活の體驗を基礎としたものでなければならない。人格的體驗に基づかない哲學――若し斯やうなものを哲學と名づけ得るとすれば――斯やうな哲學は文字どほりたゞの論理的遊戯であつて、嚴正な意味に於ての哲學ではない。眞は哲學の生命である。人格的體驗に基づいてこそ哲學は初めて眞に透徹し得るのである。故に嚴正な意味に於ての哲學は、決してたゞの空理空談ではなく、自己の生活を基礎としての人生全體に關する解釋――人生に關する全的解釋でなければならない。自己內生命の光に照らされた全的解釋でなければならない。全體的態度に於ける內觀又は內的エリユミネーションが哲學に外ならない。

故に哲學は第一段に於ては先づ個性的又は個人格的である。古來の大哲學であつて果たして個性的ならざるものが曾て有つたであらうか。然るに此の個性は他面に於ては必然的に其の所屬の民族性を代表したもの――殊に大なる個性はいよ〳〵多く其の民族性を代表したもの又は代表すべきものであるから、哲學は第二段に於ては必然的に民族性を代表するもの又は代表すべきものと言はなければならぬ。大なる藝術家や宗教家が最も大仕掛に且最も深く特殊な民族性を代表すると同じく、大なる哲學とは矢張最も大仕掛に且最も深くそれ〳〵の民族性を代表し統一するものと解釋されなければならぬ、最も大きく且最も深く民族性を代表し發揮し統一してこそ、其の哲學には初めて眞實な體驗的基礎乃至內容が存する所以で、民族的特徵を發揮し得ない哲學は所詮體驗的眞實味を缺いた空疎な論理に過ぎない。それ〳〵の民族性はやがて哲學の基礎であり內容である。

更に一歩進んで考察すれば、哲學は民族的精神と密接な關係を有つてゐるばかりでなく、直に民族的精神そのもので

あるとも視られる。何となれば、哲學は單に民族性の反映であるばかりでなく、同時に其の民族性を統率し指導するものであるから、哲學は他の藝術や宗敎と同じく、直に民族的精神の結晶であつて、民族的精神が哲學や藝術の形を取つて現はれるのである。隨つて哲學や藝術を除外して民族的精神はなく、民族的精神とは實は哲學や藝術に外ならない。隨つてまた立派な藝術や哲學やを所有しない民族は、直に同じく立派な民族的精神を所有しない所以で、哲學や藝術やの存在が直に民族的精神の存在を語るのである。

第二

私は次に哲學の獨創性といふことを簡單に考へて見たい。哲學が何等かの意味で獨創的であること若くはあるべきことは誰にも知れきつた事實であるが、私は目下の我思想界の趨勢から觀て、一種特別な意味で此の點を考へて見たいと思ふ。

藝術が獨創的のものであるやうに、哲學もまた最も顯著な意味に於て獨創的乃至創造的でなければならない。獨創的ならざる哲學は所詮眞の哲學とは言はれない。一面から觀れば、哲學が獨創的であることは、それが民族的であることゝ全く同意義である。民族的にそれぞれ獨自の特徵を備へてゐることは、直に其の哲學が獨創的な形式を取る所以で、此の意味に於ては、獨創的といふことは民族的と同一不二である。特殊的民族的であることが、おのづから獨創的結果をもたらすのである。

然しながら一層徹底的に言へば、哲學は其の人の個性生活に立脚すべきものであるから、個性的又は個人的特徵を示すことが哲學に取つては何より大事である。たゞ他人や先人の後を受けて、同じやうた人生の解釋をいつまで繰返へしたとて、それは嚴正な意味での哲學ではない。特に哲學と言はれるかぎりのものは、他人が示し得なかつた其の人獨特の人生の解釋でなければならない。それぞれ新らしく特殊な方面から人生を解釋し得るところにそれぞれ新らしく特殊な哲學の價値が有る。此の點から觀れば哲學は甚しく藝術に似通つてゐる。藝術家が其の人特殊の生活を藝術的に創造

して示すやうに、哲學者も其の人特殊の生活を基礎として、其の人に獨特な人生の解釋を創造しなければならぬ。たゞ藝術家の創造は直に新らしい人生の創造であるに對して、哲學の場合に於ては、主として人生に關する新らしい解釋の創造であるといふ違ひが有る。されば普通に考へられるやうに、哲學はいつでも同じ問題を同じ方面から同じやうに取扱ふ千遍一律なものでなく、民族を異にし時代を異にし人を異にするによつて、それ〴〵特殊なそれ〴〵新らしいものを創造するものと言はなければならぬ。つまり獨創的であつて哲學は初めて一定の哲學たり得るのである。

こゝまで考へてきて私は殆んど必然的に日本哲學の創造といふ大問題に觸れざるを得ない。いや、私のこの短い考察も、實は此の大問題に進まんがための序開きに過ぎない。今日までは吾々は外國哲學の輸入に專心して、それだけで滿足しなければならないやうな氣分に慣れてきた。日本には到底日本固有の哲學はなく、吾々はたか〴〵外國のものを眞似るだけのことゝ諦めてきた傾きが有る。場合によつては哲學は無くとも日本は立つて行かれるやうに考へられた。然しながら其の民族獨得の哲學を持たないことは、やがて獨得の立派な民族的精神を持たないことであり、そして獨得の哲學は、矢張特殊の民族によつて、創造さるべきものであるとすれば、吾々は今や眞面目に日本哲學の創造といふ大問題を考へなければならない時代に進んでゐる。一國の民族性を代表するやうな哲學は、決して突如として簡單に一個人の手によつて造り出されるものでなく、必ず全體の力が斯やうな天才を産み出すべき氣運を造らなければならぬ。

創造的態度――これは吾々に取つて最も重要な而して一種特別な態度である。今日までの吾々の態度は餘りに消極的に餘りに受身的に且餘りに自信を缺いた幼稚な態度であつた。今や吾々は一層自信あり一層勇氣に富んだ一層積極的な態度に進まなければならぬ。與へられるものゝ態度と與へる者の態度とは必然的に異ならねばならぬ。此の點に於て私は次のやうな自信と努力とを持ちたいと思ふ。世界の孰れの文化を觀ても、それが新らしく美しい光を放つときは、いつも特殊の民族性が立派な外來の文化に刺戟された場合であつて、外國の文化と獨自の民族性との抱合が新文明の開發である。例へばヨーロッパのルネサンスは、北歐のそれ〴〵の民族的精神とギリシヤ及ラテン文學との抱合であり、又十九世紀のドイツ理想主義の哲學は、ドイツ民族に固有な主觀主義的神秘主義的精神と彼の壯重華麗なギリシヤ精神との調

和に外ならない。そこで我が民族的精神といふことが問題に成つてくる。此の民族的精神は今日までどれ程單純幼稚であり從つて甚しく未熟なものであつたとしても、古來二千年佛教を取入れ儒教を攝取したところに、假令吾々には甚しく無自覺的であつても、兎もかく一種獨得特殊な精神であり又あつたことだけは拒まれない。吾々は此の民族的特徴の短所や缺點やは思ひきつて放棄して、飽まで美しいと感ぜられる立派な方面だけを助長し發育させなければならぬ。獨自の哲學を造る前に吾々は先づ我民族性の最も美しい精神を發見し創造しなければならぬ。そして外國哲學の修學は、此の美しい精神を喚發し刺戟し發揮するための好個の手段でなければならない。或意味から言へば、外來の美しい立派な哲學のみによつて、隱れた無自覺的な民族的精神は、初めて其の本然の光を發するのである。故に今日我民族が競つて外國哲學の美しいものに觸れようと力めることは、決して單に新奇を好む傾向のみとして非難さるべきでなく、寧ろこれによつて隱れた自己を發揮せんとする努力に外ならないと解釋されなければならぬ。斯やうに考へてのみ吾々は一方外國哲學の輸入といふ事と他方日本哲學の創造といふ事とを互に相即不離なものとして調和的に觀ることが出來る。ヨーロッパ哲學の輸入は即ち自我生活の發見を意味し、特殊な民族的精神は外國哲學の立派な刺戟によつて發見され發揮され助長されるのである。

哲學と宗教に生きる者の幸福

富永徳磨

一

人には靈もしくは精神がある。是は物質及び生命と離れて獨立したものでないかも知れぬ。人性は一元であるかも知

れぬ。けれども吾人が精神的活動と稱して居る所のものを現はす所の本體が人性の内に存在することは認めねばならぬ。若し本體といふ語を使ふことが今日の思想界に於て躊躇すべきものならば、人性の内にさういふ方面又は部分が存在すると言ひ得るのである。精神的活動とは人類相集まつた所に動物的習慣を超越した道徳を生じたり、法律を生じ、國家を成したり、美術文學を起したり、宗教及び哲學を結むだりすることである。さういふ活動をする所が人の性の内にはある。人間以下の物には斯かる内性がない。有るかも知れぬが其が作用して歴史を作る程でない。然るに人には其 有つて其の存續の幾億年を歴史たらしめて居る。文明といふは人類の此の精神的活動及び其の結果に外ならぬのである。

そこで人はさういふ天性のものだといふことを認めねばならぬ。七色版の畫から赤を拔き青を拔いて仕舞つてもまだ跡に一色黄が殘つて居る。美くしい畫は三原色から出來て居るのであつて、其の一つを缺いても其の美くしさは現れぬ。人間生活から物質的のものを拔き生理的のものを拔いても何跡に殘つて居るものがある。靈的のものである。個人の生活、人類の歴史は物質的生理的精神的三要素の活動調合によつて成立し進歩して居るのである。人性は此の三巴の活動をなす所のものである。若し其の一方面の活動をだに爲す能はざるならば、其は卽ち缺陷せる人であつて、至つて價低きもの、又實に幸福であり得ぬ者である。

然るに人は多く人性構成の此の現實を忘れて居る。人を一色乃至二巴より成り立つたものと解し、さういふ風に取り扱つて居る。ここより大いなる而して深い悲慘が産み出だされる。今日資本家が勞働者を取り扱ふには唯だ之を物質のみとして取り扱ふ。勞働者は之に肯んせず今一色生命あることを自覺して二色のものとして取り扱はれんことを要求する。其に精神のあることは忘れて居る。日本の大臣が國民を見るのは矢張その物質と生命とのみを見る。そこで政治を行ふにも物質と生命とより成り立つ人間の群を治めて行くに適當なる計を立つる。親が子を見るもまた二色のみである。子のために計る所如何にして其の物質生命を豐ならしめんかといふことのみに傾いて居る。

けれども此の見方は嘘である。人性の實に合はぬ。そこで其の途は常に必ず行き詰まる。自分を物質と生命の塊のみと解し、唯だ此の二方面の活動のみをなし、此の二方面のみを充實し滿足させて生きて居るものは、時として必ず悄然

として自己の忘れたる靈を見出し、其が全然空虛になつて居たことに驚くのである。或は病が重くなつて來たとき、物質と生命とはいよ〳〵賴み少くなつた。是は近く滅するに相違ないと思ふ。若し自分が二色構成ならば其だけで滿足する筈であるが、尙他に或物が存在することを見出だす、物質生命の衰弱瀕死に拘はらず其が盛に作用する。即ち精神である。始めて其が分る。其時自己の精神を見つむると如何にも棄てられて居て荒廢し切て居たことを認める。之を充たさんとするも既に遲き感がして悲み悶える者も少くない。其他不幸に陷つて自己の靈の忽にされて居たことを思ひつく者が隨分多い。之に反して幸福になつて又自己の靈の空虛を見出だす者もある。路加傳十二章に、或る富める者豐稔のため五穀を收むべき倉も狹くなつたとき、大いに喜むで自ら心の內に此れで多年飮み食ひ樂むことが出來るから我が靈よ安心せよと言はんとしたとき、俄に神が現はれて愚なる者よ、今宵汝の靈取り去らるゝことあるべしと告げたと云ふ聲があるが、幸福極まつてもはや思ひ煩ひがなくなり、此れで我は安心出來ると思はんとするとき、人は俄然として否々、とこに安心すべき立脚點を有して居るか、愚なる者よ〳〵と叫ぶ聲を聞くが常である。或は更に他の例を擧ぐれば、一國を治めて行くに當り、物質的生理的思想ばかりでは人民が少しも幸福にならぬ進步せぬ、人民の狀態を一層高く引き上げんとするとき、そこには精神の力を要する。然し自己の內面は全く空虛にして聊の力もないことを感ずる。一家に於て妻が病むだとき、子供が墮落するとき、其を奬げます力、正しきに引き上ぐる力、自分には微塵もないことを見出だす。斯ういふ風に人は屢々自己を物質生命のみとして取り扱つて、其の極自己はさうでなかつた、もつと異つた方面が存在した、我が是までの計畫は全然無價値であつたといふことを見出だすものである。

　他人を物質と生命として取り扱つて居て又失敗することが多い。釋迦の父は釋迦を唯だ肉の快樂を充たすことに由つて滿足させ得ると信じた。然し釋迦には精神があつた。其は何程の快樂を重ねても充たされなかつた。益々精神の空洞は擴大した。終に堪へられずしてそこを充たさんため出家遁世して仕舞つた。アシシのフランシスの父のこと又同じであつた。親が子を物と命とのみと誤解すると子の靈は自分を充たされたさに飛び出して仕舞ふのである。

社會をまた物と命との集團と見たら大間違ひである。勞働者を物質として取り扱つて來た資本主義の結局には社會革

命が來らざるを得ぬ。國民を物質と見て取り扱ひ來つた軍閥政治の果には國家革命が來ること當然である。吾人小兒を物質視したる孝貞主義の後には家庭革命も來るであらう。或は又唯だ人民の物質と生命とを盟にせんと企つる社會組織の内には、秩序の紊滅と道德 墮頽とが充つるに至ることも明白である。

人には靈的の所がある。其は盛なる活動をなし人類社會を產出して居る、人類活動及び社會狀態は殆ど靈的方面の所產だと言て差支ない。單なる物質と生命とが果して何程のことを仕出來して居るか。されば人は決して靈を無視してはならぬ。靈的生活をせねばならぬのである。

所が靈的生活は多端である。前に言へる如く人の靈的方面は活動して文明の諸の種類を產み出して居る。文學藝術の如きは勿論精神の所產に相違ないが、法律の如きも靈の咲かせた花に相違ないのである。けれども靈的生活の頂に達したものは、ヘーゲルも考へた如く矢張どうしても宗教及び哲學である。其の最高なる理由については必ずしもヘーゲル說を是とする必要はない。けれども後に言ふ所が其の理由として取られもするのである。

二

哲學は人を深からしめ大ならしめる。哲學とは何かと言へば、定義は色々に言はれるが、或人は之を吾人の經驗について反省して其の結局の意味を知ることだと言ふし、或人は物の全體についての學問だと言つて居る。何れにしても物を自分の觸れたまゝ感じたまゝで知るに止まらず、更に其について考へて意味を見出ださうとする努力に外ならぬのである。叡智は賴まれぬ知力は信ぜられぬ直覺で知らねばならぬと言ふ論者でも、矢張反省し推理して其の哲學を立てゝ居る。

科學は經驗する所を知る學問である。目で見耳で聞き、或は器械を用ひて實驗し得る所に由り、物の存在を知り、其の關係を知るのが科學である。勿論科學も超經驗の境まで踏み入て居る。超經驗の或信念を立て、其の助に由て經驗界の事を說明したり、更に探求したりはするが、本來の面目は經驗の學問である。科學の主題とする經驗は直に淺い。吾

人は全く經驗と交渉なき物を知り得ず思ひ得ぬ。經驗を無視したる思惟は徒なる空想である。吾人は個々の事物を其の有るがまゝに知り、其を基として物を考へねばならぬ。哲學の如きは經驗に立脚しなくては價が無い。如何なる美はしい哲學を立てゝも、其が吾人の經驗する所と反して居たり、又は吾人の經驗に全く入らぬものゝ顯彰であつたら、其は眞理とさるべき理由を有せぬ。

然しながら經驗が凡てゞはない。吾人は經驗する所について考へ、其の意味を思はねばならぬ、其は既に經驗ではない。思想である。

所が世界には經驗して知る所の物が澤山あること勿論であるが、思想して知る所の物が其に劣らず多くある。吾人思想しなければ世界と其の事物の意味は分らぬのである。譬へば日光や久能山に行て、あの精巧美麗なる彫刻を見て、其の丹い色碧い色、其の高い所低い所を目に見るまゝ知るは經驗である。其の漆が何寸の厚さに塗つてある、金が何程かゝつたなどいふを究むるは科學的方法である。がさうして彫刻を精知したからと言て其人は果して日光久能を知た人であらうか、其の樂を味つた人であらうか。決して然らず。更に經驗する所を超越して、此の彫刻の全體は何を顯はさんとして居る、其の一部〱は何を顯はさんとして居る、此の表現の背後には何か横たはつて居ると知つてこそ眞に日光久能を知たもの其の眞味を味つたものであらう。他の譬を引くならば書物を讀むでもさうである。一字一字を究めて、是は何篇で何の造りであるといふやうなことを詳しく知ても價は少い。其等の字と字が並むで互に關係を有して居る所で、そこに如何なる意味が潜むで居るかを知るが大切である。此は經驗でなく思想である。所が宇宙には斯く思想して知らねばならぬものが澤山ある。宇宙の全體の意味に至れば吾人は思想して知るより外に途はない。

此の經驗を反省思想するが哲學である。哲學のあらゆる體系は此の經驗についての解釋の差別、經驗より推理した結論の差別である。固より解釋と推論とは流動的性質を持て居るし、又人間の短い狭い貧弱の經驗を綜合して推理した所で、其で終局の動かすべからざる意味を捉へ得べきやは疑はしいが、兎に角吾人は吾人自らが考へ得る限り考へて結局的となし得る所のものをば思想し得るのである。然らされば其は到底思惟し得べからずといふことを明にし得るのでも

る。

そこで哲學的の素質もしくは教養は非常に高い價ありとせざるを得ぬ。何となれば其のなき知識は唯だ經驗の寄合であり、かゝる人の生活は唯だ衝動の連結である。或は宇宙は個々別々のものゝみであつて大にも小にも組織とか統一とかいふやうなものはないから哲學といふものはあり得ぬ又之を要せぬといふ人も稀にあるけれど、其の個々別々觀は即ち一の哲學である。然し宇宙がたゞ空間的點の寄合でなく、歴史が唯だ時間的瞬間の連結でない限り、凡ては相關係して其の全體は統一を有して居る。又宇宙の内部の其々の部分にも又統一が存して居る。統一といふは吾人の心の形式かも知れぬが、然し此の形式に照應する事實が客觀に存在すると思はれる。さういふ宇宙に在つては吾人は又其に相應して物を思はねばならぬ。

吾人は宇宙人生に付て考へ、其の意味を見出だすことを努力しなくてはならぬ。是は必ずしも哲學者のみの仕事ではない。平人も一個の哲學を求めねばならぬ。其を求めて努力し、心の眼豁然として開け、宇宙人生は斯くの如き物と觀念したとき、始めて自分の立場の是非も分り、進むべき道も分り、生活に方針が立つ。其までは凡ては衝動の發するまゝ盲目的に進むで居る。行き當りばつたりである。屢々溝壑に陷らざるを得ぬ。

政治も哲學に由て取らねばならぬ。宇宙の眞相を見、國家の意義を考へ、政治の本義を辨へ、理想を立て、其方に人民及び事物を引き行かねばならぬ。盲目の政治家、唯だ政策ばかりで其場〳〵を切り拔けて行くことを唯一の政治と心得て居るものは、いつでも國家を賊するのである。社會問題も哲學で解決しなくてはならぬ。唯物的な衝動的な思想や方法を以て、社會を改造しやうなどする連中より眞實人類の幸福を齎らさんことは望まれぬ。其の立つる社會組織は決して長く續き得るものでない。家庭にも哲學を要すると思ふ。哲學のない家庭は、統一なく理想なく深さも高さもなく從つて、幸福のない家庭に相違ないのである。

私は近頃の民主運動、勞働運動、平和運動を見て、其等はあまりに外面的に走つて居はせぬかと思うて居る。其等は哲學的觀念から來たもの、理想から來たもの、宗教的信念から來たものであつてもらひたい。要するに世界には經驗を

超越したものが多く、哲學に由て知らねばならぬものがあり、又人は本能衝動のみに由て生活せず、哲學に由て生活せねばならぬ所が非常に多い。

三

宗教は哲學とは異つたものである。私自身には宗教と哲學とは二つであるとも一であるとも言へる。然し宗教の由來から考へれば哲學とは異つた途を辿つて來て居る。哲學は本來から言ふと經驗を本として思索し其の結論として現はれたものである。宗教も人類の始から經驗により推理して抱いた信念もあると見るべく、まして人智進むで後は推理に由て確にした信仰は多くなつて居る。然し宗教の中心點、其の主なる要素は人の要求より來つて居り、之に直覺が加勢して出來て居る。つまり哲學は旋廻梯子の如く、宗教は昇降器(エレベーター)の如きものである。けれども宗教が要求より凝つて實在眞理と信じ、又之を人の感に由て直覺すと信じたる所のものは、即ち哲學が經驗を足盛とし推理思索して終に達した所のものと同じである。此も勿論多少の議論はある。ボサンケやブラッドレーは哲學が究め出だす終局の實在と宗教の神とは違ふと言ふ。私も此説には或點に同情がある。(其は茲で言ふ餘白を持たぬ)。けれども宗教の神でないにしても、神を表面として居る絶對實在に相違ないのである。私が今日の時代に於て基督教を信じ、之を自分の全心を傾くべき價値のものとなして居る理由は、吾人の宗教的要求と共に智的要求が基督教に由て充たさるゝからである。ボサンケも基督教は絶對完全な終局宗教とは理屈上からは言へぬ、何となれば何事にも之で終局だ行き止まりだといふことは言はれぬからである、けれども基督教は今日の吾人の考へ得る所の最高宗教だと言て居る。確に神の人格性を信じ、其の慈愛性を信じ、之を宗教の出發點とし中心點として居る所は、私には矢張哲學的結論として到達する所と同じである。

所が宗教と哲學と異る所は、哲學は結局知ることであるが、宗教は生きることである。固より、學者の一で、生きることを哲學とした人もありはするが、本來から言へば斯く分けることが出來る。宗教は宇宙人間の本源根柢の神を認

め之と意志合一するを目的とする活動である。此は宗教の歴史的定義とは言へぬ。即ち世界古今、あらゆる宗教が斯く共だとは言はれぬ。けれども理想的定義である。即ち世界宗教進化の歴史を通觀すれば、恐く此所を指して居る。

基督教は人格性と慈愛性とを圓滿に具有せる神を表はすに天父といふ觀念を以てして、人を神と父子的關係に入らしめ、斯くて宗教の實を現はさんとして居る。其の理由は、父と子とが、愛し愛され同情同感し意氣投合し全く同心同性となり、父の思ふ所子之を思ひ、子の行ふ所父之を行ひ、人格は二つであつて然も一人たると同じく、萬里を隔てゝ居ても同一人の動くと同じといふ風になるが如く、神は人を愛し、其の力と精神とを人に注ぎかけ働きかけ、人は神を仰ぎ之を慕ひ之に從ひ之を受けて、次第に神と意志相合ひ神と共に動き神と一體となるといふことを理想とするからである。而してに耶蘇基督を信ずるは、耶蘇が人間界に於て實生活に此宗教を實現し、今尚耶蘇の靈の感化著しく、凡て彼を信じ彼れに賴り彼に憧がるゝ者は、昔と少しも變りなく、其人を大惡人より聖者に化し、死より生に移しつゝあるから、此の今も生ける耶蘇を慕ひ仰いで其の靈の至深至甚なる感化を受け、之と同じ意志性格となり、斯くして神の子たる實を現世及び未來に現はして生くるといふ、是が基督教である。

そこで宗教は哲學の如く難課業でない。哲學は自ら勞して思索し一般的のものを發見するのであるが、宗教は己が生ける靈を以て實際的に宇宙の生ける靈に接し之と合一するのである。哲學の分らぬ人もまた思索の出來ぬ人も、神を信ずるといふことは出來る。

然し宗教の信ずる所又その實現せんとする所は哲學と合致して居るから、宗教には哲學と同じ側面があり、同じ用がある。宗教は一の確なる宇宙觀であり人生觀である。神の存在を信じ、其の人格性を信じ、其の愛を信じ、宇宙を之に由て解釋する。世界の事物の背後にかういふ意義を認めるのである。此に於て宇宙も非常に意味深くなり、人生も非常に味が豐になる。物質と生命とばかりで成り立つた人間の生活ならば、其の意味もなく、之に樂みも乏しい。然し此に神の心を見神の活動を見る。宗教者には人生は非常に味深く、人間活動は無限の價を有する。從つて此の宗教は生活の主義となる。宗教者には理想がある。神と合つて物を思ふもので、神の永遠の活動の指す所に自己も達し世界をも達せ

させんとする。

けれども宗教は哲學以上のものがある。宗教は基督の靈に接し、其の內容の充つる聖と愛とを沃き入れられ、人の人格の內容が次第に基督の靈の內容を以て充たさるゝに至るものであるから、基督信徒の生活の美は自然自己の品性の流露より來るものとなる。

此に宗教生活の價がある。何事をなしても神と合ひ基督と合へる人格の發動として之を行ふ個人の內面は此に於て淸い、こゝに於て喜びが充ち平和が充つる。更に他人に對しては他づから愛が流れ出て、慈愛獻身の活動となるのである。社會の改善を企つるにして、此所より發して之を企つる。其故間違ひもなく力も强い。

要するに宗教は靈の活動の最高のものである。人は宗教あつて人たることが全い。又宗教あつて個人の生活は圓滿幸福である、社會は又美はしい。

最後に附言す、此の論文は時間と餘白とが全く無かつたゝめ唯だ筋書のみである。然も極めて組織的でない、委しくは何時か論じたいし、又私の著書に徵して頂きたい。

感想

野村兼太郎

中央公論から社會の哲學化、又は宗教化の傾向に就いて、若しくは國民哲學の樹立と云ふやうな問題に關して、卑見を求められたが、斯くの如き大きな問題に就いて論ずる材料も、資格も、餘裕も全然缺如してゐるので一應辭退し

が更に勤められ、拒み得ざるゝまゝに單なる感想として以下の一文をつゞる。

近頃多くの人が文化生活と云ふことを口にする。余自身も又文化生活なる言葉を使用してゐる。吾人々類の生活が、何等かの理想を思念する限りに於いて、それは其の理想實現の目的を追及する努力の生活でなければなら　い。眞の生活はさう云ふ努力の上に建設さるべきである。此の意味に於いて眞の文化生活は貴族富豪の物質的に豐富なる贅澤な生活を稱するのではなくして、カント、マルクス等の絶えざる努力の生活を指すのである。内容なき富める生活よりも、貧しけれども内容ある生活を高しとするのである。吾人の生活をより高く、より深く、より廣くしてゆくのには、吾人の人格をよりよくすることに依つてのみ到達し得る。

あらゆる社會問題の解決の出發點として、先づ我は何をなすべきかと云ふことに想到するのは、最も自然であらう。又眞面目に自己を反省する者にとつて先づ第一に思考すべき問題であらう。即ち個人と云ふ立場から見ても、果た又社會と云ふ見地に立つても、先づ我は何をなすべきやと考へるのは當然の歸結と云へるだらう。其の深淺、高低、廣狹の差違こそあれ、何人と雖も、苟も眞に生きんと欲する者は此の事に就いて考へない譯にはゆかないだらう。クロポトキンが其の著「青年に對する一つの訴」に於いて、當に世に立たんとする青年に向つて、先づなすべきものは何であるかと云ふことを示さんとしたのも、更に又トルストイが自己の生活に對する忌憚なき解剖を試み、自ら「我は何をなすべきや」と云ふ一書を著して世に問はざるを得なかつたのも、其の立場の差違これあれ、人生に忠實なる者の思考せざるを得ない途であつたのである。社會全體に對しても、又自分一個にとつても、如何なることをなすべきやと云ふことを更に一歩進めて考ふる時、必ず自己の生活は果して正しいか如何かとか云ふ問題に逢着するだらう。其の日常の生活が自己の「善き意思」に對して十分な滿足を與へるか如何かと考へなければならない筈である。若し多少とも不滿を感ずるなら直ちに改善しなければならない。少くとも改善に努力すべきである。我々の生活がすべての不滿や苦痛から解放されて、魂の平靜を得しめ、生活の中心が自己の中に、理性の中に展開されてゆき、生活それ自身が藝術であり、宗教である境地に到達することが眞の理想である。吾人自身の生活を離れては、藝術も、宗教も、哲學も、倫理も其の本來の

面目を發揮することは出來ない。然し斯くの如き理想の地に到達することは極めて多くの努力を必要とする。トルストイが其の晩年の日記の一節に「自分は書き且つ考へる。……毎日自分は努力する。そしてもつと其の習慣をつけよう」と記して居る。かうした言葉はトルスイトイでなくとも、多くの人達——殊に青年時代にある人達が常に云ふところであるかも知れないが、トルストイのやうな人物が、而も一八九五年と云へば、六十八歳と云ふ高齢で、尚ほ努力しなければならぬ、考へなければならないと自ら日記に書き付けた其の心持を想像する時、何となく人生に對して悲壯の感じがすると共に、我々青年は更に努力を要すると考へざるを得ない。アダム・スミスやカアル・マルクスの晩年の物語を聞いても、如何に眞理の探求者が孜々として努力したか想像するに餘りある。

然し單に努力すると云ふ點のみを考ふれば、惡事の遂行に骨を折るのも矢張り努力である。然しさうした努力の生活は、決して其生活が直ちに宗教とも、哲學とも、藝術ともなり得ない。我々の生活自體が自己にとつて本質的である時には、必ず其の生活は純粹であり、又眞面目である。我々が未だ子供であつた時、其の遊戯が如何に自己にとつて本質的であつたかと云ふことは、極めて不幸な人を除いて、實感したことゝ思ふ。我々が夢中になつて遊んでる際に、食事の爲めとか其の他何かの理由で其の遊戯を中止しなければならなくなつた時、如何につまらなく、如何に空虚な感じが全身に滿ちたことだらう。即ち遊戯三昧の境地が破壞された時の心細さはかなり忘れられぬものである。其の三昧の境地に入る時其の生活は即ち宗教であり、倫理であり、哲學であり、藝術である。即ち我々の生活は子供の時の遊戯と同じ程に自己の全體を以つてぶつかる位本質的であり、眞劍でなければならない。余は芭蕉の生涯を思ふ時、其の生活が直ちに藝術となつて現れ、倫理、宗教の規範を超えず、又彼獨特の哲學觀となつて居ることを羨ましく思ふ。彼の生活は決して物質的に裕かでなかつた。然し彼は奪つても奪ひ盡し得ない程豐富な生活の所有者であつた。此の點から見ても我々の眞の生活が決して徒に物質的に豐富なることに依つて形成されるものでないことが解る。若し富に依つて眞の生活が煩はさるゝやうなことがあるとするならば、斷然それを棄つべきである。人間の一生は人間全體から見れば殆ど無數に存在するものであるかも知れないが、自分自身にとつては後にも先にも唯一つより存在してない。而も一瞬毎に

過ぎてゆく時間は如何にしても、繰返すことの出來ないものである。其の生涯の行程を歩むに當つて、徒に物財に拘泥し齷齪として過ぎ去ることは、餘りに悲しむべきことではないだらうか。

若し社會の思潮、傾向が哲學的になつたとか、宗教的になつたとか云ふことがあるとすれば、それは各人が眞の生活を志すやうになつたことでなければならない。余は現在の日本の社會にかう云ふ風潮があるか如何かに就いては、始めに述べたやうに少しも知らない。又其の傾向を證すべき材料も有つて居ない。唯我々青年の間に哲學に對する眞面目な思索を欲求する少數者が在存することを、分達の周圍に發見する許りである。我々の限られた仲間以外に於いてどれ程熾烈な哲學的、若しくは宗教的要求があるか全く解らない。哲學書が賣れるからと云つて直ちに哲學が普及されたと解するならば、大なる誤解である。アインシユタインの本が何萬部賣れたから、何萬人の人が相對性原理を理解したと稱すれば、明かに滑稽であらう。更にカント、ヘーゲル等と云ふ大哲人の名前が一般に知れ亙ると云ふことは、必ずしも社會の各人の生活が哲學化されたとふことと一致するものではない。哲學とは哲人の名を知ること、同一ではない。哲學者は哲學々者ではない。講壇に立つて哲學を説く者を哲學者 Phylosopher であると解するならば大なる誤謬であらう。哲學とは哲學的知識を所有することでなくして、自己の生活を本質的たらしめんとして思考努力することである。故に何が吾人にとつて正しい本當の認識であるかと考へることが、あらゆる偉大なる哲學者の出發點であつた。恰も何が吾人にとつて正しい本當の社會生活であるかと考へることがあらゆる偉大なる經濟學者の出發點であるが如く、又何が吾人にとつて正しい本當の生活行程であるかと考へることが、あらゆる偉大なる宗教家の出發點であつた如くである、素より社會全般に哲學的知識が豊富となり、行亙ることは大いに喜ぶべき現象であらう。然し世人がプラトーやカントの名前や學説を喋々するよりも、更に望ましいことは、假令それ等に對する知識が皆無であつたとしても、自己の生活を眞劒に本質的に吟味するやうになつて與れることであると思ふ。學者と稱せらるゝ人々の中にも、自己の學説の正しさを説明せんと欲するに際し、其の論理的若しくは實證的の正確さを證明することには、少しの努力もなさずして、プラトーが正しいと云つた、カントもさうだ、誰も然り、彼も然りと唯徒に權威者の名前を以て自己の説の正

しきことを力說する者がある。斯くの如きは何等實質的の說明とならないものである。恰も怠惰な者が自己の怠惰を是認せしめんとして、「甲も怠けた、乙も何もしなかつた」と云ふが如く、少しも其の事柄自體には說明が與へられて居ないのである。是はプラトーとかカントとか云ふ權威者の名前のみを餘りに重視した結果に外ならない。更に極言すれば、恐らく斯くの如きはプラトーや、カントを本當に理解して居ないことを證明するものであらう。此のことは恰も是等の權威者の名前を紊りに口にする者が、必ずしも哲學的思索の高いものであると云へないのと同樣である。若し人々が哲學的傾向を有するやうになつたと云ふならば、朝にカントを知つて、夕にマルクスに向ふが如き哲學的知識の富瞻なることではなくして、先づ自己に就いて本質的に吟味解剖を試みんとする正しき哲學的思索に向つたことであつて欲しい。

卽ち我々の文化生活は決してあらゆる文明の利器を縱橫に應用して、多數の人間を驅使しなければ、形成されないものではない。自己の物質は如何に單純な要素であつても、其の生活と自分とが全く融合するやうな境地にあるならば、最もよき文化生活であると云ひ得る。斯くの如きは三越、白木屋の陳列品を以つて大正文化の精髓であると心得、其が獲得に心を奪はるゝものゝ到底理解し得ないところであるかも知れない。恰も哲學とはカント、プラトーの名を心得て空莫と要なき議論に耽けるものと解する者が、眞の哲學と生活と基本が全然相一致するものたることを解することが出來ないやうなものである。

更に若し國民哲學と云ふやうなものがあるとするならば、それは日本國民だけに適用さるゝと云ふやうなものでなく、すべての人類が奉ずべきものではないだらうか。若し我々の生活は前に述べたやうな問題を出發點として、同じく前に述べたやうな境地に到達することが眞の文化生活であるとするならば、さうして其の生活が直ちに本當の哲學を生ずるとしたならば、それはある一個人に――カントの哲學はカントのみ是を解し得ると云ふ意味に於いて――限らるべきものであるかも知れないが、國民哲學と云ふが如きは如何なる意義 Bedeutung を有することが出來るだらうか。然し此の點に就いて、余は何等提唱すべき哲學をも有して居ないし、從つて此の種の議論をする資格を缺いて居る。否そ

れ許りでなく自己の生活さへ平靜なるを得ない。唯多くの努力精進を必要とすることだけを痛感するのみである。自己の日常生活にさへ多くの缺陷を有する自分が、をこがましくも斯くの如き問題を喋々するのは決して正しいことであるとは云へない。唯自分が其の生活に就いて如何考へて居るか、又如何しなければならないと思つて居るかと云ふことに就いて述べ、本當の生活、本當の哲學とは何かと云ふことに關して感想の一端を記しただけである。云はば自問自答である。中央公論の希望するところに添ふか如何か全く怪しいものである。況んや一般讀者にとつては何等得るところなく、甚だ御氣毒のことに思ふ。

（大正十年九月廿一日）

予は斯く行ひ、斯く考へ、斯く信ず

法學博士　吉野作造

與へられたる問題に對して當るか當らないか分らないが、自分一個の心掛けを以つて答へて置く。

自分は平素現在在るがまゝの自分の生活を充實したいと心掛けて居る。職業から云へば自分は大學で政治史の講座を擔任して居るが、どうせ大した事は出來ないまでも、この大切な任務を辱しめない丈けの相當な成績を擧げたいと努めて居る。此本務以外、公人としていろ／＼の方面に關係を有つて居るが、此等の方面に於いても自分の常に心掛けて居ることは、行く所に於て自分が常に缺くべからざる一分子たらんとすることである。居ても居なくてもいゝと云ふやうな無責任な地位に居りたくないと云ふのが、若し野心と云ふべくんば野心と云はれてもいゝ。若し自分が商賣人であつたら、ウンと金を儲けようとしたらう。新聞記者なら朝から晩まで驅け廻つて正しい報道の蒐集に骨折つたらう。「中央公論」に毎月愚論を公けにするのも、自分としては一つの公人としての務めだと考へて居るから、閑談冗話に貴重な誌面

を鬪かしめないと云ふ丈けの考は有つて居る。更に又家庭の人としては父母妻子に對しても出來る丈けの滿足は與へて遣りたい。要するにいろ〳〵方面は異るが、それ〳〵課せられたる分擔を十分に盡くして行かうといふ心掛け丈けは欠はない積りだ。

併しながら自分は又常に自分で反省する。斯くして自分を充實するに努むることが、熱心が餘りヒヨツと他を傷けるやうな事がないか。兎角人は一事に熱中すると公正の立場を外れ勝ちのものである。自分の惡口を云ふものを惡人と決めて了ふやうな俗情からは超脫し得ても、時として自分一個の大事を天下の大事なるかの如く妄想することは稀でない。自分が損をすると、日本の實業が困るかの如く考へたり、自分達の內閣を攻擊するものがあると、國家其物に對する攻擊なるかの如くに考へたりする。斯う云つたやうな間違つた考へ方は殊に軍人の社會に多いやうだ。併し之は軍人に限つた事ではない。ウツカリすると人は誰しも其現に居る所の境遇に囚へられ勝ちのものだ。小にしては市井の射利の徒より、大にしては所謂國家主義者に至るまで、皆大局より物を觀るの明を缺くものである。而して此大局より物を觀るといふ態度を常に持するが爲めには、我々はどうしても哲學的敎養が無ければならないと考へる。現在の地位に囚へられて居つては、醫者は何時までも病人の多からんことを欲し、僧侶は堪えず人の死亡を希ふことになる。自分一身の利害と相衝突しても、大局から觀て人の健康と壽を希ふやうになるには、どうしても深い廣い敎養の上に見識を磨いた人でなければならない。自分の生活を充實するに全力を盡くすはいゝ。けれども我々は常に自分の生活が大きな世界の生命の如何なる部分を擔任するやを忘れてはならない。物事を考へるのでも、常に之を大きな出來事の中の小さい一つの方面として考へることが必要だ。專門家は兎角見識が局部的に偏する。之を廣くして全體に於ける相當の地位を明かに理解するには、どうしても哲學的敎養が必要だと考へる。

併し自分は自分の生活を進めて行く上に、其れ丈けではまだ足りないやうな感がする。何故なれば、物事を常に大局から觀るに慣れても、大に其物の判斷を根本に於て誤つては駄目だからである。我々の知つて居る人の中にも、廣い見地から物事を觀る人は、夫れでも此社會人生を妙にひねくれた眼で見る所から、結論がどうも我々の氣に入られないと云ふ

事がある。そこで自分は常に更に進んで、人生に對する信念が大事だといふ事を沁々と考へさせられる。此點に於て自分は自分の人生觀を基督教の信仰によつて作り上げたことを密かに滿足に思ふものである。斯く云ふは必ずしも其反面に佛教や儒教を信じなくつてよかつたと云ふ意味ではない。此等の教でも同じやうな情操を養ひ得たかも知れないが、兎に角自分としては基督教によつてすべての人を同胞同類と見るの氣分に深く沁み込まれて居ることを滿足に思ふものである。自分は世上多くの問題について慷慨もすれば悲憤もする。けれども結局に於て自分は人類社會の前途に常に光明を望み、歡喜の情に溢るゝものである。而して斯くの如きを自分は未だ曾て悔ゐない。自分はいろ〳〵の人からいろいろの説を聞いて常に考へさせられるのは、細目の異見は如何樣にも調和の道はあるが、どうしても和合することの出來ない終局の差異は、人類を相合し相援くるものと觀るか、又相離れ相鬪ふものと觀るかの點である。相離れ相鬪ふものと觀れば、合ふ筈のものまでが相鬪ふやうになる。相和し相援くるものと觀る信念で押し通せば、離るべかりしものまでが和合して來るやうに見えるので、自分は常に自分の立場の誤らざることを信じて疑はない。何故に斯く信ずるかそは議論からも確め得るが、自分に取つては最早や議論ではない。動かすべからざる一個の確信だ。而して此確信は何によつて造られたかと省れば、即ち宗教的信念である。宗教的信念は少くとも自分にとつて生活の方法を明白に示したものである。

自分は此世の地平線上に於て爲すべき當面の務めを怠りなく果さんとしつゝある。而して多少の哲學的教養は自分を一段と高い所に引上げて、洽く天下の形勢を展望し得るの地位に置いた。只それ丈けでは茫として人生の正しき進路を識別することが出來なかつたのに、宗教的信念は天の一方に理想の光を輝かして、自分を正しき方向に向はざるを得ざらしめた。正しいか正しくないか、人の之を爭ふものあらば之を爭ふに任かせる。兎に角自分は固より其器甚だ小なるものであるけれども、小さいながらに惠まれたる生活を營みつゝあることを密かに悦ぶものである。



ロシヤ全土をボルシェヴィキの天下たらしめた諸原因の歴史的考察（下）

小野俊一

ロシヤ建國のはじめから十五世紀前後に到るまでのノヴゴロドの歴史は、實にいろ／＼な點に於て特長があり興味があるので、ロシヤの本國に於ても、一流の歴史家で特に此の時代の此の「市（ゴロド）」を各種の立場から研究し浩瀚な書物として發表してゐる人が少くない。大勢の人が突ついてゐるだけに、それだけまた異論があり、今日までも、まだ意見の一致せぬ點も多いのであるが、幸にして、さういふ點は我々の議論をすゝめる上には餘り大した關係をもつてゐない。まづ最初に、談しの舞臺となる可き地理上のことを、もう少し述べて置く必要がある。

「ノヴゴロド」といふのは「新しい（ノヴ）、都市（ゴロド）」といふ意味で、今日もペトログラードの南にあるまちに附けられた名稱である、（但し「グラード」といふのも「都市」と云ふ意味の古語だ、「彼得（ペトロ）の、都市（グラード）」またコンスタンチノープルにつけたロシヤ流の別名「皇帝（ツアリ）の、都市（グラード）」の如し）。元來は斯くの如く、一つのまちにつけられた名であるけれども、此の「ノヴゴロド」なる名稱は、其の都市（まち）を起點とし中心として、ど偉らく領土を押し擴げた一つのくにの意味としてもまた用ひられた。時には、なほ「大（ヴエリイキイ）」と云ふ字を冠せて「大ノヴゴロド」とも云ひ、或ひはま

た人間の如く待遇して「ノヴゴロド大殿様」と云ふ様な名前でも呼んだ。其の當時のロシヤでは、或る意味に於て、都市即國家、國家即都市といふ場合が多くノヴゴロドなども現に其の一例だつたのである。此の中心であつた市を建設し、また領地を四方へ擴げて行つた人間達即ち所謂「ノヴゴロトツイ」が果して如何なるスラヴ系の、種族であつたか？　が既に學者間には問題なのであるけれども、我々は單に彼れ等を今日の「大露西亞人（ヴエリコルース）」の先祖となつた人間の一部分だつたと考へてをればよい。ノヴゴロドの位置が既に北に偏してをる上に、後ちに其の領土は白海、北氷洋までも延びて今日のフインランドの東半を含んでゐたから、彼れ等に、多少乍らも、（其の以前から北方に住んでゐた）フインの血が混つたことだけは察するに難くない。歴史上普通は、ノヴゴロドの傍にある湖の名を冠せて、「イルメン、スラヴ族」と呼ばれてゐる。

さて此のイルメン、スラヴの人間達が最初居を定めたノヴゴロド附近の地は、少し詳しいロシヤの地圖をひろげて見れば直ぐにわかることだが、小さな沼や湖が恐しく多い、到る處森林で覆はれてはゐるが、南の小部分の土地を除けば耕して農業をやるには適しない。此の地勢上の關係からも。彼れ等は初めから外の地方の人間達とは、多少異つた方面に向つて發展して行つた。彼れ等は農作に從事する代りに沼湖に漁どり、毛皮を得る爲めに狩獵に從事した、また森から木材を伐り出して、其れで各種のものを製作した。其の中でもドシドシと船を作つた。土地が耕作に適せず少くも食ふ穀物だけは何處からか持つて來なければならぬ境遇に置かれてゐた上に、然らずとも元來勇敢にして企業心に富む、生氣潑剌たる人間共であつたから彼れ等は其の「ウシターイ」と稱する船に乘つて自らドンドンと各方面へ出掛けて行つた。其れには第一、ノヴゴロドの位置が、前にも云つた様に、ヴアリヤギの國たるスカンヂナヴイアと東ローマ帝國のギリシヤとを最短距離で連絡させてゐた彼の「大水路（ヴエリイキイ、ヴオドヌイ、プーチ）」の上にあつた事も勿論大いに關係がある。自然彼れ等の間には、先づ、有力なる商人の階級が生れた。然し乍ら、名は同じく商人と云つても、それは決して、後世に於ける「商人」の如きお手柔かなものではなかつたのである。其の頃の様に、物々交換制度で盛んに商賣をやり外國貿易を行はふとすれば、是非とも自分の方から出す貨物を集める爲めに廣く國内の各地に出掛けて行かねばならず、之れが間接にまた、領土擴張、植民地設置、……と云ふ様な原因ともなつた。彼れ等の或るものは、黑貂、青黑狐、白狐、水獺……其の他各種の珍貴なる毛皮獸を自らも獵しまた土着民からも仕入れる爲めに、北へ

北へと進んで終ひには北氷洋の岸まで出、其處に到るまでの全ての區域を自分等の版圖の中に加へた。彼れ等は其の乘り込んで出掛けた小船の名に因んで「ウシクイニキ」("Ushkuiniki")と呼ばれたが、此れがまた「河賊」といふ樣な異名に使はれるのを見ても、大體、如何なる商ひ振りであつたかゞ察せられる。勿論、多少は領土征服慾とも云ふ可き一種の本能も手傳つたことであらうけれども、彼れ等が遠征の主なる目的や動機は實に北寒の森林中に産する此れ等の貴重なる毛皮を手に入れるといふ事であつた。以下暫くの間、はなしが大分、えだみちにはいる。

幸か不幸か今まで毛皮といふものと殆どまるで關係を持たずにやつて來た我々日本人の心には、貂だとか、狐だとか云ふ樣な小獸の皮が一國の歴史の上に非常に重大なる關係を持つてゐたなど〻云つても、だうもよく其れ等の事情が腑に落ちぬ樣であるが、實はロシヤが後にあの廣大なるシベリア全土を手に入れたことなども、確かに此れ等の毛皮獸を得樣とした爲めだつたのであつて、「牛にひかれて善光寺詣り」と云ふ事があるが、彼のドン、カザツクの頭目（アタマン）エルマツク及び八百五十人ばかりの其の部下は、云はゞ、黑貂や黑狐等にひかれて、荒野を越え、大河を泳ぎ渡り土着民とも戰ひ、また其の他の非常な困難とも戰ひ乍ら、一五八一年十月二十六日遂ひにイルチイシユ河の岸にあるシビーリ（別名イスケル）を首都としたシベリア汗國を滅ぼして西部シベリアをロシヤの領土に加へたのである。シベリア汗國と云ふのは今日のロシヤの版圖内に一番最後まで存在したことのある蒙古民族の國家であつて、彼の欽察國（キプチャク）、及びカザン汗國の滅亡後ウラルの東側に起つたのである。今日のシベリア（即ちロシヤ語で云へばシビーリ）の語源となつた其の國の首都シビーリは今のトボルスクの直ぐ近くにあつた。其の頃のロシヤ人に取つて毛皮と云ふものが如何に重大な意義を持つてゐたかと云ふ事は、シベリア汗國を滅ぼした後、エルマツクがイヴアン、カリツオなる自分の副將に若干のカザツクを附して首都モスクヴアに遣し、時の皇帝イヨアン四世（雷帝）に自分等の征服したシベリアの國土をロシヤの統治下に加へられむ事を乞ふた時、持參せしめた獻上物がシベリア産黑貂の皮六十枚、黑狐の皮二十枚に、獵虎の皮が五十枚で、全て貴重なる毛皮類ばかりであつたことを見ても知られる。流石に、雷の樣な雷帝も其の時ばかりは顏の相好を崩して、御機嫌極めて斜めでなかつたと云ふ事であるが、其の喜びの對照物が、シベリアといふ領土を得た事が主であつたか、或ひは其處から得られる結構な毛皮の方が主であつたかは、今のところ大なる疑問であるのだ。エルマツク一味の　のの從來の罪を赦し、（彼等をはじめ一

般にカザツクなるものは元來、盜賊を本職としてゐたのであつたから）、さて「之れは朕が腹心の印までぢや」と云つてエルマツクに與へた贈り物の第一にやはり「毛皮の外套」と記してある。其れから「銀製の大盃が一つ」と、「甲冑が二た組み」此れだけが實に西部シベリア全土をロシヤに併合した殊勳者エルマツクの賜つた御褒美であつた。其の時までに、最初八百五十人ばかりだつたエルマツクの同勢はまう大部分やられてゐたので、モスクヴアの方からは直ちに若干の援軍を送つたのであつたが、其れ等の軍勢をはじめとし、其の後、次第々々に東及び北に向つてシベリアを鎭定して行つたロシヤ人の、頭の中にあつた第一のものは何かと云へば、其れはやはりあれ等の土地が産み出す毛皮だつたのである。エルマツク自身は一五八四年に、彼れが曾て逐ひ出した、シベリア汗國の君主クチユムなるものから突然襲はれた復讐戰で敢なくも討死してしまつたけれども、毛皮に引つぱられたロシヤ人（殊にカザツク）の東侵は年と共に進んで行き、一五八六年にはトボルスク、一六〇四年にはトムスク。同じく二八年にはクラスノヤルスクのまち（城砦）が築かれ、またレナ河の流れを東北に下つて一六三二年にはヤクーツクの市を建て、同年既にカムチヤトカ半島をも手に入るゝに到つたのである。一六三六年トムスクのカザツク達がはじめて黒龍江を發見したので、ヤクーツクの總督だつたゴロヴインは多くの探險隊を派遣して、レナの上流地方から黒龍江にかけての地を踏査させ、其の後僅かに十年程を經た一六四六年頃には大體、黒龍江の左岸はまうロシヤ領に歸してゐたのであつたが支那人と衝突することを避けて右岸にはまだ敢て踏み入つて行かなかつた。

談しが岐路に入つた序でにまう少し書いて置けば、レナの支流であるアルダン、マイア、ニユドマ等を南東に溯つて、後にロシヤ人が今のオホツク海にまで顏を出したのは一六三九年、丁度日本では三代將軍家光が島原の亂に懲りて耶蘇教と海外渡航とを益々嚴禁したばかりでなく、支那、朝鮮、和蘭陀人以外のものとは全然外國貿易をも禁止してしまつて、所謂徳川二百餘年間の鎖國政策を確立した寛永十六年であり、また支那では滿州の太宗が國號を淸と稱し、先づ朝鮮を征伐して南下の氣勢を示した時から三年後であつた。支那人が「俄羅斯」としてはじめてロシヤなるものゝ存在を知つたのも實は此の前年あたりであつたのだ。東に進むと同時に、ロシヤ人はまた北の方でもレナ、エニセイをはじめアナドィル、コルィマ、ヤナ、……等の諸河を下つて其れ等の河口に達し北氷洋に出た。また東の方でも、更らに一六四九乃至五〇年の頃には、カザツクの隊長ハバ

ーロフなる者、黒龍江（アムール）と烏蘇里（ウスリイ）河との合流する點にまで達し、其れよりなほ下流の地をも占領し、雅克薩（アルバジン）に要塞を築いて、ロシア人の根據地と定めたので、玆にはじめてロシヤ人と、支那及び滿洲人との衝突を見るに到つた。丁度明朝が亡びて清の康熙帝が立つた頃で、日本では四代將軍家綱の世である。彼のイルクーツク市のはじめて建てられたのは一六五二年であつて、バイカル湖へ到る黒龍江一帶の地方が事實上、モスクヴア政府の統治下に歸したのは一六六〇年代ピョトル大帝の祖父に當るアレクセイ、ミハイロヴィッチの時代である。

然し乍ら、玆に我々の注意す可き點は、ピョトル大帝以前のロシヤが、斯くの如くウラルから太平洋の岸に至るまでの廣大なる土地を獲得したに就て、本國なるモスクヴァ政府併びに其の主權者の意志とか力とか云ふものは殆ど其れに關與してゐなかつたと云ふ事である。之れ等の廣い土地は、事實極めて少數の冒險的商人と、千里の荒野に馬を走らせ、土着の諸民族と戰ひ乍ら、まだ見たこともきいた事もない様な地の涯（はて）を探らうとする事其れ自身に、無限の快樂を感ずる彼の哥薩克（カザック）と稱する特殊の人間共とによつて、いつの間にかロシヤの繩張り内に入れられてしまつたのであつて、時の統治者や政府などは、只、事が既に成就してしまつてからあとで、「御手柄々々々」と云つて、其の勿怪の幸ひたる收得物を嘉納したに過ぎない。例へば、はじめエルマツクがイヨアン四世に援軍を乞ふた時にも、モスクヴァの朝廷は丁度ポーランドと苦しい戰ひの最中であつたから、極めて僅かの軍隊より送ることが出來なかつた、イヨアン四世の死後、一五九八年から一六一三年は後に說く如きロシヤの大混亂時代で、たとひ誰れがどんな希望を起したからと云つて其の間にシベリアの遠征などと云ふことが夢にも行はる可きものではない、然るに其れにも拘らず、ロシヤ人のシベリア東漸は實に此の間にも着々と步を［進］めてゐたのであつて、現にトムスクの市の如きも一六〇四年に建てられてをる。即ちピョトル帝以前に於けるロシヤ人のシベリア獲得は、殆ど十中八九まで、政府とか國家とか云ふものから離れた、一部少數の人間の一種の氣まぐれによつて成就したのであつて、其の東漸の直接誘因たるや、實に前にも述べた如く、あれ等の土地が豐富に産み出す所の、珍貴なる毛皮類を得ることであつた。昔はよ［く］子供等が春の野原に摘み草に行つた時の様な心理狀態だつたのだ。毛皮といふ、ツクシやタンポポや蓮華草……などに氣をとられて、思はず知らず家路はるかに太平洋の岸、東察加にまでも來てしまつたと云ふわけである。其のみちくで、自分等に邪魔する、土族等を征伐して來た事は、惡童等が、草の中

ら這ひ出て來る蛇、蜥蜴、毛蟲などを面白半分に退治して行くのと同じ樣であつたらうけれども、「土地の所有權を握らう」などゝ云ふ樣な深入りした考へは、其の當時は毛頭なかつた樣である。遠く太平洋の岸まで來て、まう一寸、家に歸るに歸られず、普通の小供等ならば早速泣き出す所であるが、其處は、生れ落ちて以來、大陸育ちでニチェヴォー主義の腕白者揃ひであつたので、其のまゝ腰着をきめこんで極東に居坐つてしまつたばかりでなく、後に到り、エカテリナ二世、乃至はニコライ一世、アレクサンドル二世の如きロマノフ朝歴代の帝王が出、また彼のムラヴィヨフ、アールスキイ伯の如き其の方での傑物が東部シベリアの總督となつて盛んに帝國主義軍閥政治を高調し、領土侵略を敢行するに及んでは、やはり其の尻馬に乘つて一時はベーリング海峽を越えて北米アラスカの地にも侵入し（一七八〇頃エカテリナ女帝の時代、但し一八六八年に到り、僅かに七百貳拾貳弗にて合衆國に賣り渡す）また支那より韃靼東部の黑龍、烏蘇里兩地方九拾萬余方哩を舌のさき一つでユスリ取つて其處に今日のニコラエヴスク、ヴラヂヴォストック等の港を開き（一八五八－六〇年、愛琿（アイグン）、及び北京條約）、或ひはまた我が千島、樺太をさへも蠶食しに來たのであつた（一七〇〇年代の初めより）。

今日現存せるロシヤ人中での日本學者で精力絕倫でもあり、また最も政治家型（タイプ）の人間でもあるドミトリイ、ポズドネエフ氏は「北日本の歴史及び其の亞細亞大陸併びに露西亞との交渉に關する史料」と題する三部千頁に近い書物を曾て横濱から出してゐて（彼れは長らく支那に、また日本にも住んでゐた、特に自分の著書を出版する爲め、横濱にロシヤ語の印刷所を設けた程、日本の各方面のことに關して非常に多くの著書を出してをる）彼れは其書物の中に、如何に古くからの日本の著者達がロシヤ人のシベリアに於ける領土擴張に對して讀むに堪へざるまで言葉を極めて侵略、掠奪呼ばりをしてゐるか、と云ふ事を自分の同胞達に紹介して大いに顏をしかめてをるのであるが、たとひ誰れが何と强辯して見たところで、また何處かに不凍港を得ねばならぬと云ふ苦衷は充分察してやり得るにせよ、ピヨトル大帝以後、エカテリナ二世、ニコライ一世、アレクサンドル二世等……を頭に戴いたロシヤの支配者階級が、世界に於ける官僚、軍閥、領土侵略者中の一巨魁であつたと云ふ事實はどうしても否むわけに行くまい。但し東察加より南下して屢々我が北疆を侵した幕末に於ける所謂「おろしや人の來寇」なるものが、或る一部の人々が怖れた如く、果して、其れ程までに領土侵略的の動機を含んでゐたかだうかは、可成りに疑問としなければな

らぬのであつて、彼れ等が既に彼のペルリの渡航以前にも度々我が國に使をよこして（一七九二＝寛政二年、松前にラツクスマン。一八〇四＝文化元年、長崎にリイエザノフ。一八五三＝嘉永六年米使ペルリと殆ど時を同じくして長崎にプーチャチン）互市開國を要請した事情などをも、我が東大の渡瀨庄三郎教授の如きは、（其の特に從事されたる毛皮獸の研究の方からして）やはり只單に彼れ等ロシヤ人が極東シベリアに於て得たる所の毛皮類を、海路によつて、ヨーロツパに持歸る爲めに是非とも必要な寄港場の便宜を、日本沿海に得様と希望して試みたことに過ぎないと解して居られ、またロシヤ側の當時の記錄を見ても、どうも其れが眞に近い様に思はれるのである。

自分の談しの脫線も、バルト海の岸から遂ひに日本の天草洋あたりまで來てしまつたわけであるけれども、自分が玆に述べ度いと思つたことは、其の昔し、（十二世紀から十四世紀の間に）ド偉く擴がつたノヴゴロドの領土なるものも、丁度其の後（十六世紀の末から十七世紀の中葉までに上述の様な事情によつて）モスクヴァ朝の版圖に入つたシベリア大陸と同じく、殆ど、中央政府とか、主權者とか云ふものゝ意志とは何等の交渉をも持たなかつた個々の人間達の、冒險心、企業心、また一種の氣まぐれ心によつて獲得せられたのであつて、さうして、其の冒險的遠征の主なる目的物たるや、（まだ鑛石などゝ云ふものには慾のない時代であつたから）實に土地などではなくて毛皮であつたと云ふことである。

之れに多少、似通つた事情は我が國にも決してなかつたわけではない。只、我々の祖先はまことに毛皮といふものに淡白であり、少しも其れを珍重することがなかつたものと見えて、如何に立派な毛皮が手にはいるにして北の寒い方へは自ら好んで出掛けて行くだけの獵の心が起らなかつたのだ。脫線序でに少し日本側の事をも述べて見るならば、例へば、彼の阿倍比羅夫といふ人などにしても（尤も彼れは本來から中央政府の任命を受けた「越の守」として、勅を奉じて行動した人間ではあつたが）三十七代齊明天皇の御世、日本曆の一三一八から一三二〇年の間に三度まで、毎回船艦約二百艘ばかりを率ゐて肅愼國（アシハセ）を伐つてゐるが、いつでも所謂肅愼賊とぶつかつて「官軍擊戰收ム之」といふので大變結構ではあるけれども、さて其の結果はと云ふと單に「大勝得虜而還。」とある（日本書紀）位の數かと云ふと三十五人から五十余人ばかりの俘虜だ、第一回の遠征の時には其の外に生きた羆を二頭と羆の皮七十張を獲物として歸つて之れを朝廷に獻じたとあるが、朝廷の方でも

う少しから云ふ毛皮が欲しいものだ」とも何とも仰せられず、また比羅夫遠自身も、其の後毛皮の爲めに肅愼まで行く氣にはならなかつた、(抑々何の爲めにわざ〳〵行つた遠征なのか原因が頗る不明瞭であるが)其の後の第二、第三回の遠征に際してはまう氣の利かぬ羆の皮の土産をさへ持つて來てゐない、況んや黑貂、黑狐の皮をやである。阿倍比羅夫が討伐したと云ふ肅愼(アシハセ或はミシハセ)といふのが果してどこであつたか、さうして日本書紀に所謂「以二陸奥蝦夷一令レ乘二己船一到二大河側一於レ是渡島蝦夷一千餘、屯二聚海畔一向レ河而營、……云々」とある「大河」と云ひ「渡島」といふのが今の何河、何島に當るかと云ふことに就ては今でも歴史家の間に多少の議論がある様だ。一説によれば大河といふのは今日の石狩川であつて、比羅夫は北海道のアイヌ征伐したにすぎぬと云ふ、更らに一層ひどいのになると、玆に肅愼とあるのは越後の足羽の事で、渡島とは即ち今の佐渡島であり、太古は日本の此の邊まで却つて肅愼の人間がやつて來てゐて、其の爲めに足羽なる地名も生じたのであるなどゝいふ説さえあると云ふことであるが、如何に其の頃の日本の船が貧弱なものであつたと云へ、さうまで馬鹿にしたものではなかつたらうと思ふ、やはり玆に「肅愼」とあるのは女眞即ち今の滿州、及び露領沿海州の一部と解す可く、「大河」とあるのは黑龍江のことであつたらう。

比羅夫の遠征があつてから六十年の後元正天皇の養老四年(皇紀一三八〇年)にも渡島津輕の津司、諸鞍男等六人が命を奉じて靺鞨國に赴き、其の風土を觀察したと云ふ記錄があり、其れから更らに七年經つた聖武天皇の神龜四年には「渤海ノ使者來り翌年入朝ス、」とある。少しく飛んで皇紀の一七一〇年代には、彼の前九年の役を起した謀反の張本人だつた陸奥蝦夷の大酋長、安倍賴時が一旦、戰ひをはじめながらも、「既ニシテ王師ニ抗ス可カラザルヲ料リ、家ヲ擧ゲ、糧ヲ載シ、海ヲ超エテ北方ノ一國ニ至リ大河ニ溯ル事三十餘日、岸上ヲ望ムニ皆ナ蘆葦ニシテ絕エテ人跡ナシ」と云ふ、「一日忽チ大地ノ響ヲ聞ク、乃チ急ニ船ヲ蘆中ニ徙シテ之ヲ覗フ、其ノ人、馬ニ騎シ、貫ケル胡人ノ如シ、凡千餘騎、江ニ臨ミテ相語リ、歩兵其ノ左右ニ、伴行ス、一隊河流ヲ濟リテ去リ、其ノ往ク所ヲ知ラズ、賴時謂ヘラク、必ズ淺處ノ涉ル可キアラムト、就テ之ヲ測ルニ深往シテ其ノ底ヲ得ズ、賴時懼レ、纜ヲ絕チテ還リ、意ヲ決シ衣川ニ據リテ、戰死ス……云々」とあるのは確かに今の黑龍江あたりまで出掛けてゐたのであるが、不幸にして、安倍賴時などと云ふ男でもまだ〳〵其の横着さが足らず、すぐに怖氣を起して自分の家の方へ歸つて來たのだ。想ふに此の島國の上にゐた我々

の祖先達(アイヌも何も彼も含めて)が、もしもう少しでもロシヤ人の如く、其の當時から毛皮といふものを珍重し、毛皮といふものに對してもつと强烈なる貪欲心を持つてゐたならば、自然寒い事などをも苦とせずして北方發展に努力したであらうし、從つて彼の東夷と稱せられたアイヌ民族の如きも、丁度ロシヤのドン、カザツクがモスクヴァ朝に反抗することを止めてシベリアに進入した樣に、より立派な毛皮を產する北方の地を征略した方が、武藏や陸奥あたりにうろついてゐるよりも遙かに利巧であるから、自然、無意識的の利害打算に動かされ、朝廷に叛することとなどは、いゝ加減に息をつけて、ドン〳〵と今の沿海州からシベリアの方へ移住して行つたことだつたらう。もしさうであつたとすれば、たとひ海に隔てられて居るとは云へ、距離の狹い海峽だけを選んで渡れば何れも朝鮮海峽などより遙かに狹いのであるから、今日の沿海州乃至東部シベリアなどが、遠いヨーロツパにゐたロシヤ民族によつて占領される以前に、直ぐ隣りに住んでゐた我々の祖先によつて開發され得たらうと云ふプロバビリチーは、常識で考へて見ても極めて大きなものであつたのだ。(支那人、滿州人ならばなほ更ら容易に發展し行けたらうけれども、之れは自分の領地だけでも既に大きく、また毛皮等の供給も豐富だつたのでやはり北に行くことを億劫がつたのであらうか)。

さう云つた樣な事情で、北の方への發展が一向に成就されなかつたと云ふことは、我々日本民族の主幹となつた所謂天孫大和民族なるものが、元來、南の暖かい國の方から次第に北上して來たものであり、今は兎も角もとし、千年以上も前の昔しにあつては、まだ其れ以前からの風習が強い惰性として殘つてゐた爲めに、どうしても北の方に引かれる事が弱かつたのであると考へれば、まづだうにか諦らめもつくけれども、之れに反し、我等の祖先による南の方への發展が、其の時々の爲政者の無能淺見によつて、極めて不自然的に壓迫され、阻害され遂ひに頓挫してしまつた史實を考へる時は、いつも嘆息せざらむと欲して、やはり長嘆息を禁じ得ざるものがある。南北朝分爭の始まつた日本紀元の二〇〇〇年(西暦にて第十四世紀の初め)頃から、我が西南諸國の豪族及び流民等相率ゐて續々と東洋の諸沿岸に私征を行つてゐる。所謂倭寇といつたのが其れである。但し出掛けて行つた目的物が毛皮以外のものであり、且つ上記の如く北の方へは氣が進まなかつたので、彼れ等が活動の舞臺は今の朝鮮以南に限られてゐた。元軍十萬が太宰府に迫つた彼の弘安四年を去る僅かに二十一年なる後二條天皇の嘉元二年(西暦一三〇二年)に、此れ等の中の或る者にまゝ五

こちらから元の領土を侵して其の一城を燒いてゐる。朝鮮の方では盛んに（當時の高麗の）沿岸を荒しまわり、楠正行が四條畷に戰死した正平の初年から足利義滿が隱居して道義と改名し、彼の金閣寺を建てて茶の湯などをやつた應永の初年に到る約六十年間にあつては每年高麗の海岸の荒されなかつたことがなかつた。高麗人の方でも、元中六年（西暦一三八九年）には逆襲して我が對島を侵した位であるから、決しておとなしく荒されてゐたわけではなく、防戰大いに努めたのではあつたが、倭寇の方が敗走せしめられたのは此の間に僅に一二回である。正平九年（西暦一三五四年）即ち國內に於ては足利尊氏が自分の弟直義をはじめ高師直、同師泰を殺しなどして……北朝側に內訌が起つたのを機とし、其の前年、官軍が一時京都を回復し得たのを、尊氏の子、義詮再び京都を犯し、續いて尊氏後光嚴院を奉じて入京し、後村上天皇は已むを得ず再び吉野に幸し給ふた年であるのだが、其の年にも高麗まで出掛けた倭寇達は敵船四十余艘を分捕つて凱旋して來てゐるし、其の翌年には高麗船の奪はれたるもの二百余艘、同じく正平の十三年には其の爲めに燒かれたる高麗船の數が三百を超え、彼れ等は八道の到る處に、焚掠を恣にした。日本で南北朝の對立が終つた元中の九年に高麗は滅亡し、李王家の先祖なる李成桂が立つて國を朝鮮と號したのであるが（立國の五年後）、高麗を亡ぼした主なる原因の一つは確かに此の斷え間なき倭寇の禍ひであつた。然し乍ら、彼れ等が侵掠を逞くしたのは決して高麗の沿岸ばかりではなく、數十の所謂「八幡船」は舳艫相銜んで屢々支那の沿岸をも襲ひ、山東、浙東、溫州……等を熾んに侵掠したのである。元が滅びて、明が起つたけれども、（正平二十二年、足利二代將軍義詮が死んだ年である）彼れ等の活躍には別に何等の變化もなく、明人をして「國家の患は倭寇にあり」とつくづく嘆ぜしめ、明末（十六世紀半）に至つて其の勢ひ益々猖獗を極めた。

自分が前號に、ロシヤの戰國時代と我が國の其れとを比較して、（五七頁參照）群雄割據の封建の世にあつては、同じく他人の領土を侵略するに、成る可く勞少くして效果の多いところを誰れでも望むから、主として內亂ばかりが起ること丶なり、まかり間違へば、國外の力を借りて來て、自分の同胞を斃す事さへもやり兼ねない、之れが、我が國にあつても、逆賊の惡名を甘受し乍らも、朝鮮征伐などを初め樣とは思はず、ひたすらに京都ばかりを念がけた足利尊氏などの心である……云々といふ樣なことを書いたところ、或る人は、「其れは、兎に角我が國が四方環海の島國で、朝鮮など丶云つても、やはり一寸直ぐには力

を延ばすわけにゆかなかつた爲めではあるまいか」と反問されたけれども、歷史上の事實を見ると、丁度此の尊氏自身のゐた時代が實に上述の如きものであつたのだ。大逆人とは云へ、兎も角もあれだけに作戰の才もあり、また政治家としての手腕もあつた尊氏の如き男が、少し、自ら進んで、其の當時國の內部から外にまで溢れ出して居つた、幾多精悍の氣力を統一し、眼を海の外に轉じて立つたとしたら、恐らく朝鮮は愚か、大明國も何かあらむと云ふわけではなかつたらうかと思ふ。(尊氏、直義の兄弟が一と度び敗れて九州に走り延元元年再び東に攻め上つて來た時は水軍の舟師七千艘、直義の率ゐたる陸軍は步騎二十萬、或ひは一說には五十萬とも云ふ。要するに「事あれかし」と祈つてゐた所謂「武士」の群れが、常に國內に滿ち充ちてゐたのだ。)

足利三代の將軍義滿は、其の本心は如何なるものであつたか知らぬけれども、明の惠帝から「爾ヲ日本國王ニ封ズ」と云ふ持た辭令書をさへ甘んじて受けてゐた樣なわけで、永樂錢の强請る爲だか何だか、兎に角、大いに。明の甘心を求め樣と努め、あちらから請求に「誠に御尤の儀」と合槌を打つて、應永九年以來、明國倭寇を禁じ取締つた。然し乍ら倭寇の勢たるや中々に一片の禁令位では屛息せず、殊に彼の應仁の亂(皇紀二一二七―二一三七年)の後には國內紛亂を極めて流賊の數々益々多く、倭寇は一層其の勢を强めたのであつた。さうして此の勢たるや、嚴密に云へば、實に其の後約百五十年、遠く德川幕府の初期にまでも及んでをるのである。凡そ當時の戰國の世にあつて、武運拙なく、國內に於て敗者の位置に立ち、逆境に陷りたる武人達の中には、眼を海外に轉じ、國の外に乘り出して行つて、まう一度運命の骰子(サイコロ)をふり直ほして見やうと決心した人間が尠くなかつたのである。慶長、元和の項、其の當時の所謂「暹羅(シャムロ)」に渡つて、終ひに彼の國の封侯の一人とまで出世した山田仁左衞門長政の如きは其の中での尤なるものであつたのだ。實に我が國から産れ出た彼の倭寇といふものには、較べれば較べる程、八世紀の頃ヨーロッパ諸沿岸を侵略しまわつた海賊氏ノルマン族、また其の中からロシヤに侵入して支配者階級となつた所謂ヴァリヤギなるものと互ひに似通つてをる所が多い(上篇四一頁以下參照)暹羅に於ける山田長政は中世紀のロシヤに於けるヴァリヤギの「コンヌング」(上篇七〇頁、參照)其のまゝの人物であるし、また實に暹羅一國のみに止らず、其の當時「南蠻」と總稱された今日の南洋諸島をはじめ、或ひは印度の一部にまでも見られたる日本兵の私軍勢は之れ卽ち中世のロシヤに於ける彼の警護武士團、「ドルヂンヌ

イ」に相當するものである。或ひはまた、其の雄飛したる舞臺面が一つは大陸であり、他は大洋であつた差別はあるけれども、後に（十五世紀の中葉、恰かも應仁の亂の少し以前から）ロシヤに現出した彼の「哥薩克」と稱する特殊の武人階級は之れをロシヤに於ける倭寇であつたと解釋することが出來る。只、彼の國に於ては、時の政府當局者が、曲りなりにも、あとから幾分の協力、聲援を與へて、領土擴張の手先きとし、また其の後も特別な保護恩典を與へて此の階級を利用することを努めたに反して、幸か不幸か、我が國に於ては、歷代の爲政者が倭寇に對し何等、補助或ひは善導的の方策を講じなかつたばかりでなく、却つていつも其の力を屏息せしめ樣といふ事のみを努めたのであつたから、今日となつては別に目に見える程の功績をも遺し得ず、一時空に燃えた花火の如くに消え去つたのであつた。此の十四世紀のはじめから起つた我が國の倭寇によつて、主として如何なるものが、其の頃の支那、朝鮮或ひは遠く南蠻の國々から掠奪して持つて歸られたか、また其れ等の品物の中で、どう云ふものが今日まで殘つてゐるか……といふ樣なことは門外漢たる筆者が本職の歷史家の方々にきかせて頂き度いと希望するところであるが、兎に角に、彼れ等の手によつて我が國に取り込んで來られた金銀の量だけでも實に莫大なもので、日本が其の後、西班牙、葡萄牙南國人、また德川鎖國の二百年間にも依然として荷蘭陀人や支那人と、殿樣氣分になつて大まかな商賣をし、喩へ樣もない暴利を貪られて、年々歲々、多額の金銀や銅を持ち去られ乍らも、まだ國內の金銀をまるで空にするに至らなかつたのは、實に以前、此の當時に倭寇が取り込んで置いてくれたからだと云ふことである。新井白石の著した「本朝寶貨通用事略」の記するところに從つても、慶長六年から寶永五年に到る約百八年間に、單に長崎一ケ所を經て交易貨物の代價として國外に持ち出された量だけでさへ、實に金六百拾九萬貳千八百兩以上、銀百拾貳萬貳千六百八拾七貫目以上、同じく銅が貳億貳萬貳千八百九拾萬七千五百斤餘と云ふ實に非常時としては莫大な額に上つてゐる。葡萄人が、鐵砲を持つて、はじめて例の種子ケ島に來た天文十二年は其れよりもなほ約七十年以前の昔であつて、交易に味をしめた彼れ等は其の後も毎年各種の貨物を載せた船をよこし、反對に日本の方からは金銀のみを積んで歸つて行つたから（一般の船で黃金百噸以上持つて行てつた樣なこともある）此れ等の時期全てに亘つて合算して見たならば、其の持ち出された金銀の額たるや、從つてまた當時の日本に保持されてゐた額たるや實に莫大なるものであつたに違ひない。勝海舟翁は彼の氷川清話の中に足利義

満を擁護して一大人傑とこし、世間の毀誉褒貶などは屁とも思はず、只、其の當時の日本に取つての一大災難であつた(一寇の戦以來の)經濟難を救濟せむが爲めに、自ら甘んじて明から「日本國王に封ず」の書を受けたりし乍ら、所謂問題の金錢の方で、あちらからウンと貢がせたのであつて、彼れの本心は知る人ぞ知る、頼山陽などはまだ談ずるに足らぬ、と云ふ様な事を述べて居られるが義満の人物如何は別問題とし、彼れが言はゞ臣下の禮をとつて支那からねだり取つた永樂錢の總額と、彼れによつて其の後嚴禁された八幡船が堂々と大旗を振つて持ち歸つて來た金銀の總額とどちらが多かつたと云ふことは一寸わからぬ問題である。筆者は只、此の義満以後、徳川家康に到る迄の爲政者が、やはり國内のことばかりに氣をとられて海外に於ける倭寇及び其れから誘導されて現れ來た外國貿易商の階級を利用し其の善き發展に助力するだけの心の餘裕を持つてゐなかつたことを惜しむのみである。

亞細亞の諸沿岸に於ける倭寇飛躍の歴史は、如何に其れが雄壯であり、或る意味に於て痛快であつたにせよ、また其の起つたのが、まだ世界到る處他國の領土切取り御免の弱肉强食時代であつて、陸土の大部分なる南北アメリカ、アフリカ、濠州及びポリネシア、また印度、シベリア等を含むアジアの過半部が、未だ今日の如く白人から侵略されなかつた時代のことではあつたけれども、兎に角最初から掠奪といふ事を目的として出掛けて行つたものであるから、其のあれ以上に成功發展しなかつた事を殘念がる必要ないとしても、後年、彼れ等の跡を承け繼いだ我が國の貿易商人の海外に於ける目覺しい發展が、やはり時の爲政者の淺見、短慮によつて、偉大なる芽生えのまゝで、理不盡にちぎり棄てられてしまつたといふ事は、單なる國家的見地からばかりでなく、全人類共通の理想とす可き「東西文明の融合」「四海の諸民みな同胞」といふ様な立場から考へて、實に惜しみてもなほ餘りある不幸であつた様に感ぜられる。貿易商人といつても其れは何も必ずしも、今日我々が用ゆる如き意味に於ける貿易商ではなかつた。素より「○○屋○兵衞」とか、「□□屋□右衛門」とか……云ふ様な純然たる商人も其の中にはいつてはゐたけれど、また其の多くのものは封建時代、各地に割據した、群雄、豪族乃至は所謂「浪民」と稱せらる可き部類の人間であり、即ち要するに彼の倭寇なるものが、溫和となり、上品となつて、其の組織性質を多少變へて來たといふに過ぎず、從つて其の出産地なるや、やはり主として九州地方であつた(例へば大きなところでは、豐後の大友であるとか、肥前の有馬、鍋島、松浦であるとか、薩摩の島津であるとか、また

後には肥後の加藤清正であるとか……）。弱肉強食の戰國の世にあつては、他から侵略されまいと思ふだけでも、武を練り陣容を整へて置くのに、常に莫大なる軍備費が要つた、況んや、こちらから進んで他をも侵略し樣とした連中に於てをやである。其の當時の群雄なるものが軍事費に苦しんでゐた事は、恐らく何れも今日の我が國以上であつたらう。彼れ等は勿論所領内の人民から租稅を取りたてゝ勝手に其れを使用することが出來たけれども、其の租稅の額と云ふものには自ら一定の制限があつた。既に德川幕府といふ樣な有力な中央政府が出來て、其れから諸侯なるものが、實質的に云へば單に徵稅權を與へられた官吏たるに過ぎぬ所の諸方の「領主」として任命される樣になつた後代に於てこそ、權力を笠に着て、苛税を賦し、たとひ、其の結果百姓一揆など起つたところが、情け容赦もなく一蹴に壓服して、すましてゐることが出來たのであるが、まだ群雄が割據してゐた時代には、中々さういふわけにゆかなかつた。自分の人民に不平不滿を抱かせ、人望をなくすといふことは、直ちに隣接せる敵に襲來の好機を與へて、自分の位置を失ふ危險を伴つたのであるから、まるで利害得失のわからぬ樣な、よく／＼の馬鹿でない限りはやはり相當の仁政を敷いて、あはよくば他領の人民までを自分の德に懷かせ樣と努めたのである。即ち、進化論的の言葉を借りて云へば、戰國の世、群雄割據の時代にあつては君主の臣民淘汰とも云ふ可き事が自然に行はれてゐたのである、（但し茲に「臣民」と云つた中には、各英雄が手下に率ゐてゐた部將や兵卒なども勿論みな含まれる、彼れ等だとても、餘り附きがいのない主人であると見れば、去つて他方の英雄の麾下に馳せ參ずるのが常であつたから）。斯う云ふ樣なわけで、一つには租稅だけでは不足勝ちな軍事費を手に入れる爲めに、諸方の群雄が、其の當時非常に利益の多かつた海外貿易に自分自らも從事したといふことは實に當然の事なのであつて、秀吉でも家康でもやはり、盛んに之で儲けたのである。秀吉が國内を統一して天下を取つた當時、諸大名の所有に屬してゐた大船の數が十何艘かあり、また文祿元年（西紀一五九二年、即ち彼のエルマックが八百五十人ばかりの部下を以て西部シベリアを取つた十年の後）に始めて「御朱印」なるものを秀吉からもらつて公然南蠻に往復して貿易に從事し得た私人所有の商船が長崎に籍を有するもの五艘、同じく京都に三艘、泉州の堺に一艘あつて俗に之を稱して九艘船と云つた。長さが、大きなもので二十間、幅が九間、乘組員の總數約三百八十人、貨物、約二百萬斤を積む事が出來たと云ふ。余程、利益の多かつたものと見えて、希望者も夥しく、免許の數にやか

ましい訴因があつたにも拘らず、やはり許さねわけにゆかぬ人間も出て來て其の數が次第に殖え、家康がはじめて天下を握つた慶長九年以後、寛永元年に到る二十一年間に免許を受けた所謂「御朱印船」の總數が百七十九艘に上つてゐる。其の中でも最も多いのが暹羅通ひの三十五艘、呂宋（即ち今日のフィリッピン群島）に赴くもの三十艘、交趾に赴くもの二十六艘、柬埔寨二十三艘、安南十四艘、東京十艘、占城、太泥各五艘、また遠く西洋に赴くもの十八艘であつた。此れ等、公明正大に大洋を航行してゐたもの以外に、天下の御法度であつた八幡船も、依然として支那、南蠻の諸沿岸を横行して、其の或る者は以前の如く掠奪を事とし、また他の或る者は、前にも述べた様に、幾分氣品を上等にして、所謂「バハン」即ち「拔け荷」を商賣としてゐたのだ。今日の言葉で云ふと、コントラバンディストである。

上記の暹羅、呂宋……等の諸地方には、此處に言ふ、之れ等コントラバンディスト系の人間や、また例の警護武士團とも云ふ可き私軍勢、さては山田長政の如き人物なども入り込んでゐて、到る處に有力な日本町を形成した。殊に呂宋即ち、今のフィリッピン群島の如きは、まだ其れを西班牙人が確實には占領してゐなかつた永祿の頃から、日本人の在住するもの三千人の上を超えてゐた樣な狀態で、不幸にして、當時日本の本國は足利の將に潰れむとし、然かも信長の天下統一にはまだ未成だつた時代であつたので、天主教政策でよくオルガナイズされてゐた西班牙の爲めに先きをこされ、遂ひに元龜三年（西紀一五七二足利將軍の亡びた前年）はじめて今のフィリッピンなる名を附して向ふの植民地にされてしまつたのであるが、其の後も日本人の勢力が盛大だつた結果として之を奪つて日本領とし樣と謀つた人物は鎖國の禁令の出る頃まで再三ならず現れたのである。其の中でも秀吉に策を獻じて、西方から襲つて來る勢力、（即ち其の當時にあつては天主教を頂いてやつて來たスペイン人の勢力）に對抗して日本の獨立を保たむが爲めには……と云ふ所謂國防的の立場から呂宋獲得の必要を力說した原田孫七郎の計畫の如きは前後七八年に亙り最も念入りにねばり強いものであつたが秀吉は丁度朝鮮征伐に熱中してゐた所で其の方に力を割く事が出來ず、また他の事情も、いつも生憎くと行き違ひ續きで遂ひに失敗に終つたのであつた。

一般に秀吉の方は、少くも自分が日本國外を統一し終へた後には、當時異境に在住し、海外に雄飛してをつた日本勢力といふものをも出來るだけ充分に利用し活用して、國威を發揚し度いと云ふ、國家的熱情に燃えてゐた樣に見えるけれ共

之に反し家康の方はたとひ自分自身は海外貿易の大利あることを知つて、早くより呂宋等とも交易し、更らに長崎より呼び寄せたる阿蘭陀人「ヤンヨーステン」なるものを顧問役として(略して「ヤヨース」とも呼ぶ、其のもらひたる邸宅のあつた附近が今の丸の内、八重洲町となる)今日の墨西哥とも通商する志を起し、其の目的の爲め同じく日本橋安針町に其の名を殘す、所謂「按針アダムス」を應急の造船技師として(英人、ウヰリアム、アダムス、元來航海師であつたから「按針」と云ふ)八十噸及び百二十噸の洋式の船を進水せしめ、慶長十五年其の百二十噸の船に使者を乘せ、首尾よく墨西哥(即ち當時の「濃毘數般(イビスパン)」)Acapulco の港まで行きつかせ、初めて我が國人及び日本の船舶が太平洋を横斷して亞米利加に達したといふレコードまで作つた次第ではあつたが、然し、外の日本人達の國外發展に對しては、一向、力を添へる氣がなかつた樣に感ぜられる。否、啻に、助力する氣がなかつたばかりでなく、自分の貿易だけは別とし、國威の萎縮することなどは少しも意としなかつた樣にさへ思はれるのだ。例へば呂宋に對する彼れの態度にしても、只通商によつて、自分等の利益を得む事のみを考へ、いつも、呂宋太守の殆ど言ひなり放題となつて、「本邦ヨリ八幡舟ヲ出ス、惡徒、賊ヲ作スノ輩ハ悉ク誅殺ス可キナリ」と相槌を打ち、進んで倭冦を殲滅に努め、殊に慶長十三年の如きは、(其の時呂宋太守の甘心を得て、新たに自分が墨西哥と通商する手蔓を求め度い爲めでもあつたが)太守の更迭を機として向ふから「……當所數年逗留之日本人徒者(イタヅラモノ)候て、所々騒に罷成候間、當年は一人も不二相殘一歸國之儀申付候、云々」といふ樣な、實に無法極まる通牒を送つて來たに對しても、唯々諾々と承認を與へたばかりでなく、高が西班牙から任命されて來た一役人に過ぎぬ呂宋の太守に『なほ、(即ち追放されるばかりでなく)本邦の人間にて、貴地に於て無道を致したる者は盡く誅戮せられてよろしく』といふ樣な書面まで送つて、向ふから要求もせぬに公然、我が國人の處刑權までを委任してをる始末である。

もし今日、此の家康の樣な「征夷大將軍」か何かゞ日本にゐて、外務大臣といふ樣な役目でも司り、亞米利加の方で、例のジョンソンといふ樣な人間が、カリフォルニアに新知事として就任し、先づ其の手腕を中央政府に示す可く、自分でも無理と思ふ程の徹底的排日案を出し、「……さて、年來、當加州に在住の日本人は徒ら者に候て」と云ふ樣な理由で「當年は一人も不二相殘一歸國の儀申付候」と通牒して來た時に再びかう云ふ「さばけた」處置に出たものとしたら、亞米利加も、加奈陀も濠州も、……狂喜雀躍し、恐らくハーディングなども太平洋會議の催しを取り消してくる事かも知れないが、兎に角、事實は

三百余年前の昔、家康がこんな處置を取つたが爲めに、呂宋から、其の頃强大だつた我が國人の勢力が驅逐せられて其れが確實に西班牙人の手に收められ、また土地も人民も思ふ存分スペイン流にスポイルされたる後、今から僅かに二十三年前になつて亞米利加に併合されてしまつたのである。

玆に著者は只、呂宋の事だけを述べたのであるが、斯う云ふ事は何も、此のフィリッピンばかりに限らなかつたのだ。公然と免許の御朱印をもらつて商賣をした豪商達の活躍、また南アジア一帶、到る處に著しいものであつたのだ。さう云ふ樣な事情は、明治二十六年に經濟雜誌社から出された渡邊修二郎氏の「世界に於ける日本人」と題する著書のなかに秩序正しく、書かれてをるから讀者の御一讀あらむ事をすゝめて置き、また筆者の記述も其の書に負ふ所多きを附記して置く。只、「天竺德兵衞」「呂宋助左衞門」「濱田彌兵衞」、「錢屋五兵衞」「高田屋嘉兵衞」……といふ樣な、よく人口に膾炙した名を列擧しただけでも其の當時、或ひは更らに幕府によつて海禁の宣せられし後までも、豪膽なる貿易商等が千里を遠しとせず飛躍したる有樣の幾分を想見することが出來やう。實際もし、あのまゝで、あの偉大なる芽が育ち、葉を出し、枝を延すに到つたものと假定したら、十中の八九まで、我々の祖國は、少くも經濟的の方面に於ては眞實に、「東の英國」になつてゐたにちがひない、そして日清戰爭だとか、日露戰爭だとか云ふやうな戰ひの起る理由も、あれより疾くの昔しに消滅してゐたにちがひない。錢屋五兵衞の如きは濠州に到り、其の某地に「大日本錢屋五兵衞領地」なる標本を建てたといふ形跡まである、（濠州に一番最初に出來た英人の植民地は Port Jackson に於けるもので西紀一七八八年德川十一代將軍家齊の天明七年、丁度五兵衞が十七才位の時分に當る）然し彼れは德川幕府の立てた「海禁」なるものを犯して亞米利加と貿易してゐた事があらはれて（表面上の理由は別であつたけれども）其の家の諸共、獄に投ぜられ、當時八十一歳だつて彼れ自らは牢死したので屍體を鹽漬けにした上、後に磔刑を行はれ、また家族以下のものも、其れ〳〵に處刑せられ、家財は全部沒收されたのであつた。現金凡貳拾四萬兩、外に貸掛け及び貸付け、貳拾七萬余兩、船大小貳拾五艘、倉庫八拾棟、現米三萬五千余石、珍貨の外國品其の他の器具極て夥しく、人の耳目を驚したとあるから、兎に角、國家的の大貿易商であつたにちがひなかつたのだ。

別に斷るまでもなく、著者が玆に五兵衞の死を悲しむのは、決して何も、一個人としての錢屋五兵衞の其の後が悲慘だつたといふことに同情した爲めではない。自分の友達だつたわけでな

いからわかる筈ないが、既に「錢屋」といつて代々身代を渡世とした家に生れ、まだ若年の頃既に主人の金千兩を持ち逃げして投機に手を出し、共れをなくしたと云ふ様な男であるから、ゼニの外には何の考へもなく、一攫千金的の計畫のみを立てゝはいつも自分の財産を殖やす事ばかりに苦心してゐた様な人間だつたのかも知れない。或ひは自分の部下などに對しても冷酷でケチで、さうして、彼れも加賀藩の用達だつたから、よく御用商人といふかに有り勝ちた悪辣な方法で自分の私腹を肥やしてゐた様な、實に社會の風上に置けぬ人間だつたのかも知れない。然し乍ら、萬一さうであつたとしても、自分はやはり、海禁といふ制度が直接日本にもたらした損害の一つとして彼れの沒落した事を次ぎの如く極めて複雑したる理由に基いて心から悲しく思ふのである。

「道ハ通ズ天地有形ノ外」といふ。

我々は先づ十四世紀以後、白色人種によつて、亞非利加に亞米利加に、また濠州に亞細亞に徹底的に行はれたる侵略、暴虐の罪惡史を顧みねばならぬ。世人はロシヤに侵入した蒙古族を野獸の様に云ふけれども（前篇六一頁以下、参照）此の最近の四五百年間に、世界の五大洲にまたがつて白人等が所謂「有色人種」なるものゝ上に加へて來た行動と、共の行動とを一々引き合はせて考へて見る時、其のどちらの方がより大なる獸性を帶びて居つたかと云ふ事を判斷するに迷ふ。さうして、さう云ふ獸性といふものは今も決して其の力を人間界から失つたといふわけではなくて、依然、歐米人の社會、國家にも大權力を振つてゐ、支那でも國内に漲つゐ、また勿論お互ひ日本人の間にも（個人各自の胸にも又社會全體の中にも）やはり多量に含まれてゐるのだから、要するに人類全てに、まだ種々なる強さの獸性があつて、只共れが時と場合によつて、強く現れもし又弱く現れもするといふ事に歸するのだ。

人類が遠い々々進化の道程を辿り、群居的生活を營んだ原人の状態を經て今日にまで到つた過去の遺産として、また彼等が今日もなほ心の中に保持してをる獸性が、依然として日夜生み出して行く生産物として、我々は現在、自分等の眼の前に實際の價値に一致せざる異種族間の不平等を見、また同様にして、正直正味なる實力に相當せざる、不合理なる階級制度を各一種族の社會の中にも見出すのである。（合理なる不平等、不自然ならざる階級制度の存在を筆者自身は否定せぬ人間であるけれども、兎に角、さう云ふ理想的のものが今日、極めて稀であることは事實だ）。然し乍ら我々は何も失望落膽する必要はない。今の人類社會の缺陷がたとひ如何に大きくあらうと、また人間の

持つて居る獸性が、今日まだ如何に强からうと、兎に角、野獸の域を脫して既に今日のところまで進化して來た以上、さうして（過去の進化を司つてゐた力がたとひ何であつたに拘らず）人々の胸に過去に滿足し得ず、又現狀にも甘んじ得ざる心の宿る限り、我々人類は尙一層の向上を遂げ、彼の「獸性」といふものをも淨化して、社會は一歩々々理想の域に向つて進んで行く事を信じないでは居られぬ。

此の人類の『獸性といふもの』と、同じく其の人類の胸に、いつの昔よりか植ゑ付けられた『過去及び現在にあきたらざる心』との關係は、『火といふもの』と『火を消す人』との關係に、一寸、似てゐる樣に思はれるので此處しばらくは其の譬へによつて說き進む。

火事が起つて、焰が切りに燃え上つても、一人も、其れを消し止めねばならぬと思ふ人間がないなどゝ云ふ事はまあ滅多にして現實の人類社會にはない。あつても、其れは極めて稀な例外であつて、大抵の場合には、彌次馬も多いことであるが、やはり其の中に混つて、眞面目に火を消し止めねばならぬと思ふ人々も驅け付けて行く。例へば今度の世界大戰は人類社會古今未曾有の大火事であつた、一セルヴィア靑年のピストルから發射せられた人間獸性の閃光が忽ちにしてドイツ、オーストリイ、セルビヤ、ロシヤ……と、其れから其れへと燃え廣がり、遂ひに、人類の獸性の火焔は全歐州は愚か、山を越え海を越えて、殆ど地球の全面を包み四ケ年の間燃え續き燃え上つたのであつた。然し乍ら、其の火事が怖ろしく大きなものであつただけに、其れだけ「火を消さねばならぬ、」「かう云ふ火事を二度と再び起してはならぬ」と心に深く感ずる人間の數も多く、其れが一方では「國際聯盟」といふ樣な消防隊を組織して行かうではないかと云ふ發案が成立し而して其れが幾分は具體化された理由でもあり、また地方に於てはロシヤ、ドイツ……等に一大革命を勃發するに到つた原動力ともなつたわけであつたが、困つた事には、何分大火事のあつた際であるから、素より彌次馬や小盜人も多く、消防隊を組織し、防火裝置の爲めに謀らうなどゝ云ふ相談に、用もない、まだ獸性に滿ち〳〵て、いつでも機を見て火位ゐ朝飯前と心に思つてをる連中まで仲間入りをしてゐるので、中々相談が纏らぬのも無理のない次第なのである。實に今日の我々は。まだ一面に煙が空を立て込めて、其處、此處にはなほ焰も燃え續いてゐる、誰もない燒け跡に立つてゐる樣なもので、其の燒け跡に境界線を引き直ほす位許りであつた巴里の會議は、どうやら大した大喧嘩もなくて濟んだ樣なものゝ、今や其の焦土の上に新しき家を建築しつゝある人々は、各々自分等の家屋の今後の構造や間取等に就いて、或ひは互ひに相談

し、或ひは相議論し、或ひは罵詈怒號し、或ひはまた血眼となつて毆合つて居るのである。火元のセルビヤだとか、オーストリーだとか、或ひはトルコだとか……見るも哀れに裸で燒け出されてゐるのもあれば、また中には同じく燒けたにしても所謂「燒け肥り」らしい國々もある。

大きな家の中で一番ひどく燒けたのはロシヤで、此處は多少燒け殘る可き筈の部分までも家のもの自身がぶち壞して、新規播き直ほしに「ボルシェヴィズム」なる新式家屋を建てやうと、此の約四年來やつてゐるのであるが、其のボ式なるものは、云はゞ學校の大きな寄宿舍の樣な平等一天張りのシステムなので、今迄樂な生活をしてゐた連中はレーニンといふ監督に反對を唱へるし、また、まわりの家々からも、「其んな殺風景なものを建てゝくれては困る」云ふ苦情が出て、建築材料なども一向融通してくれぬものであるから、だうやら棟上げだけは、すんだ樣に見えるけれども未だに屋根も葺き終へず、壁も塗り終へず、雨にぬれ、風に揺られ乍ら暮してゐるらしい。(今度の火事を機として、ロシヤから暇をとつたフィンとか、ポールとか云ふ連中は、同じく比較的に平等な共同生活乍ら、まづ安ホテルといふ程度の家を建てた。)

ロシヤの問題にはまた後段でもどるとして、さて我々の日本はどうかと云へば、まづ、外のひどくやられ連中に比べて殆ど類燒の仲間にも入られぬ程の輕い損害であつたと云へやう。何分火元からは幸ひ非常に離れてゐたので青島まで飛んで來た火の粉をもみ消しに行つて指さきを燒けどした位のもので、あとは只、年來の兄弟分たるイギリスに義理を立て、向ふ鉢卷襷かけとなつて、一生懸命濠州地中海邊りまで手傳ひに行つてやり、また焚き出しに努めてもやつたのだが、自分の家　火が付いたわけではないから、こちらの家族のもの全體について云つたら、可成り彌次氣分の著しい者があつたからと云つて、其れはだうも致し方がない。

大火事が一まづ鎭まつて、さて、早速にいろ〳〵の相談が開かれた時、大家株の中でロシヤだけを仲間ぬけにして英米佛伊は兎に角火事中の日本の働きに對し日本の顔を立てゝ、五人の評議人中に加へてくれたものゝ、こちらの頭に今後の「防火」といふ立場からして、ヨーロッパ乃至は全世界の家作を一體だう造り改めたらよいか、と云ふ樣な問題に關して別に役に立つ樣な考へなどもない事を覺知するや、結局「ヨーロッパに於ける燒跡の繩張り問題等には貴家は無關係でゐらつしやるから」と云ふ口上を述べて、日本には五大國の一つと云ふ虚名だけを與へて體よく幹部から仲間ぬけさせてしまひ、また愈々、亞細

亞の問題となつては、恐々ながら、膠州灣併びに南洋の小さな島々を奉書に包んで贈つてよこしたのであつたが、其の二つの贈りものに對し、其の後、臍を曲げて故意に連名人の中から脱けてしまつた彼の亞米利加が、最初から如何なるケチを附けたがつてゐたかは、誰れもよく知る所である。

巴里會議の結果を日本の政府當局者は外交上の大なる成功であつたかの如く說く。成程、其の後亞米利加のランシングが公表した例の「平和會議秘錄」の「山東問題」といふ章などを讀んで見ると「かう云ふ我儘な理屈を他にも强要せむとする人間達と一緒では、相談といつても中々骨が折れるわい」と感じて、多少出かけて行つたこちらの代表者達に同情を表し得る次第でもあるのだが、然し我が政府當局者及び出掛けて行つた代表者達が、(既に會議の場所に行つてから後の成功、不成功などは論ぜずとも)、最初あの會議に參加す可く出掛けて行く以前に、果して「あの場合。あの席上で我々日本民族なるもの、また我が日本國なるものが、眞に主張し、固執し、高唱す可き國策」の全てを充分なる理解と確信とを以て自分の頭の中に整理して入れ置くことが出來てゐたか、だうか? はまた一つの別問題である。否、其の後二ケ年半を經た今となつても、我々の日本が、我々の代表者達を通してあの時提出した要求なるものの全てが、果してあの際、我々日本民族が、眞に世界に向つて要求す可き條項のすべてであつたか、だうか? やはり依然として直ちに判定することの出來ぬ別問題の樣に思ふ。政府の反對黨は、素より、古今未曾有の大失敗、大屈辱なるかの樣に言ひ立てたけれども、其れは敵黨の事ならば、何でも味噌をつけ樣と云ふ今日の政黨政治家の言ふ事故、決して信用するわけに行かない。筆者は概括的に云へば、同じ代議士でも、「東方時論」なる言論機關を主なる根據として、政治的には孤軍奮闘して居られる、あの中野正剛氏や、また同じく同誌に筆を執らるゝ伊藤正德氏の議論等に最も多くの共鳴を感ずる人間であるが、然し外の方面の問題に就ては、たとひ自分一個で心に不同意を唱へたり、或ひは共鳴を感じだりしゐたところが、「確かにさうの樣だ」と云ふ事さへも、人の前で言ひ得る資格を持たない、只、其の内で一度びロシヤに關する問題と云ふことになれば、身は純然たる日本の國本主義者であり乍ら、ロシヤといふ隣國と、既に過去、現在、未來を通じて、特殊、關係を持つ可く運命付けられた自分として、默ださむと欲して默だす能はざる或るものゝ、常に胸中に蟠るを覺えるのだ。

我田引水の說であると云ふ人があるかも知れないが、「日本といふ此の我々の祖國に取つて、——今日の場合は素より、更ら

に遠き將來の時代に至るまで、――恐らくロシヤといふ國ほど對外的に重大なる意味を持つた隣國はあるまい』と云ふ說は、實に此の小さな筆者一人ばかりではなく、實に幾多の尊敬し信頼す可き人々によつても既に從來唱へられてをる所である。然し乍ら、それでは國內一般の人々によつて、果して其の重大さが相當に理解され、また其れに比例するだけの注意が拂はれてをるかと考へて見るに、もとより以前よりは遙かにましであるけれども、まだ不幸にして今日に於てもロシヤといふ國に就ては所謂「レニンの國」「過激派の國」或ひは「氣の毒にも今將に亡びむとしてをる國」……といふ樣な漠然たる印象以外に何等の智識をも持たず、況んや向ふの國情などに對してはまるで無理解なる人々も決して〱僅かばかりの數ではない樣に見えるのである。

幕末時代から所謂「おろしあ」として我々日本人の心に怖ろしさを抱かせてゐたロシヤなる國は、更らに彼の明治八年の樺太、千島交換事件、二十八年の三國干涉遼東還附の事件……等を經て、丁度日露の戰端が開かれ樣とした三十七年の頃にはもう、我々の心に殆ど忍ぶ可らざる程の憎惡の念を加へてゐたのであつた。一つには、古來シベリアを通して極東に移住して來た所の、(從つて我々と最も多く直接交渉を持つたところの)ロシヤ人の分子が、主としてあちらでも餘り香しからぬ樣な種類の人間であつた爲めもあらうが、更に亦、其の當時の日本人の頭に描かれてゐたロシヤ人の姿は、「恐い露國に住んでゐる毛モクジヤラの鬼」とでも云ふ樣なものであつたのだ。もしも、ロシヤ國民中の、有識階級(インテリゲンツィア)を含む大部分が、國の內部にあつて暗に日本の方に同情し內應することなく、(七月十五日發行本誌定期增刊號の拙稿一二三頁以下參照)彼れ等が今度の對獨戰に際して表はした樣な熱心さと執拗さとを以て、あの日露の戰爭に參加してゐたものとしたら、あの戰爭の結果が果して終局に於てどうなつたかと云ふ事は一向にわからず、少くも、あゝ易々と(其の實、こちらの內情は隨分苦しく、其れが連戰連勝したにも拘らず講和を急がねばならぬ理由であつたのではあつたが)決して二年や三年の短日月で鳧をつけさせてくれなかつた事だけは確かなのであるが、兎も角も表面上に於ては殆ど一點の打ち處もない樣なスバラシイ大勝利であつたし、また一般の國民には苦しかつた戰局者の腹のなか等はわかりもせず、またわからせもされなかつたので、「なあんだ、今迄で鬼だと買ひ被つてゐたら、案外、意氣地のねえ露助野郎だな!」と云ふ氣になつて、今度はまた、まるで馬鹿にする樣な傾きとなつて來たのである。實は斯く申す筆者自身も、世界大戰の勃發する直前、ドイツへ勉强に行くつ

もりで、ロシヤに入つて行つた時には、やはり、から云つた樣な一種の輕蔑の念と、且つまた一種の敵愾心とを持つてジロ〳〵とまわりの露助共を眺めながらシベリアから歐露を旅して行つたのだ。長い間、多くの年長者から吹き込まれた誤つた偏見が既に先入主となつてゐたのであるから、之れは何とも致し方ない。加ふるに第一自分のロシヤ入國なるものが極めて手數のかゝつたものであつた。其の當時は全世界中ロシヤ一國の外にはまだ何處の國でもやつてゐなかつた、厄介極まるパスポルトの「裏書き（ヴィーザ）」なるものを、故國を出る時、つひ失念してゐたが爲め、自分は支那領から露領に移る彼のマンチュリアの驛で汽車から引き下され、同行の上田萬年教授やエリセエフ君等からとも別れ、また再びハルビンまで領事の「ヴイーザ」を取る可く逐ひ返された。豈に憤慨せざるを得むやである。然し乍ら、其の後妙な因緣で終ひに自分がドイツの代りにロシヤに腰を落ち付ける樣な運命となり、親しくロシヤ人ばかりの間に入つて暮して見てゐる中に、實社會上の方でも、また自分專門の學術の方面でも「是れは」と思ふ樣なロシヤの偉大なる點が段々とわつて來て、實に敬す可く愛す可き國だと思ふ樣になり、大正七年の春、獨軍が露都に迫つたといふので大使館と同時に引き上げなければならぬ樣になつた時などには、戰亂と革命とのあとで日常生活が可成りに不自由でもあり不安でもあつたに拘らず、たゞロシヤに別れることを限りなく心に悲しいと思つたのだ。から云ふ自分一個の過去に於ける經驗からしても、記者は深く信ずる、既にロシヤといふものが、敵としても或ひは身方としても我が國に取つて最も恐る可く、また最も頼もしき隣り國であるならば、兎に角、我々の祖國は其の一般の國民をして、ロシヤに關する智識を出來る丈、より多く吸收させ、また其れに關し、出來る丈、正確なる理解を得させて置くことが是非とも必要であると。

長年、ロシヤ其のものゝ研究に腐心してよく其の事情に通じ、また自らも親しくロシヤに生活して、ロシヤ人の心を[illegible]なく知り拔いて居る樣な人々は幸にして日本には決してそんなに少ないわけではない。例へば自分の知つて居る範圍内でも、最近に在リヴォニアの代理公使となつて巴里からリガに赴任された上田仙太郎氏の如きを筆頭として、昨年勞農露國から歸られた大坂每日の布施勝治氏の如き、或ひは今夏、モスクウァにまで達する計畫を立てゝ早くも入露された彼の大庭柯公氏の如き、……其の外にも、軍人、外交官、商人、文學者、思想家の各方面に亙つて、其れ〳〵相當の數の人々がある（殊に其の中の過半數が、まだ白髮も生えぬ樣な若い人達であるといふ事は

日露兩國將來の爲めに一層我々の意を強くする所である）。之れ等の我が提灯持に較ぶれば此の筆者の如きは實に幕内力士に對するペイ／＼たるに過ぎぬのであるが、然し其れにも拘らず、自分がおほけなくも、ロシヤ問題に筆を執る所以のものは、實に今日の日本に取つては、たゞひペイ／＼たりと雖ども、社會一般の人々に向つてロシヤ智識の普及に努む可き場合なるを確く信ずるが爲めなのである。少しく誇張して云へば、たとひ「ロシヤ」と云ふ言葉だけを限りなく書き連ねて、毎日の新聞や毎月の雜誌に出しただけでも、其れでもまだ、出さぬよりも我々の祖國に取つて有益であるとさへ信ずるのである。其れ程までに一般の世間の人々の注意を只の一分、一厘、一毛だけでも餘計に、ロシヤと云ふ隣國に轉向せしめる大必要があるのだ。然し、そんな原稿では新聞社や雜誌社でも迷惑をするであらうし、また讀む人の數も少ないであらうから、其處で筆者も止むを得ず自分の鈍い頭から、いろ／＼な題を考へ出し、またいろ／＼な文句をひねり出して、まわらぬ筆を進めて行く。「歴史的考察」とか何とか、此の稿なども大げさな名を附けられてゐるが、之れははじめから決して論文などゝ云ふつもりではないので、論文ならばロシヤの事でもやはり各自が自分專門の方面ばかりを擔當して書かなければうそである、顯微鏡で動物の微細な組織を調べるのが本職の男に「歴史的考察」などが書けてたまるものか、要するに、顯微鏡をのぞく間々に、斷續的に書いて行く隨筆たるに過ぎない。（だから自分では、はじめから「隨筆」と銘打つて置いたのであるが、後に編輯者の忠告によつて除いてしまつたのだ）。隨筆であるから別に何等の秩序もない、加ふるに筆者生來の脫線性を斷えず發揮するから、結局、最初につけた題と內容とがまるで一致してゐない樣な事も多いだらう。然し、それでも自分が筆を取るはじめからの目的には適つてゐるのだ。たとひ結論まで達しないうちに打ち切つてしまはれてゐる場合にしても、なほ幾多の小結論は到る處に書きつけられてゐる筈であるから。要するに今も、また今後も、自分の書くものは、「ロシヤ」といふ大きな題の下にダラ／＼と非常に長く書かれた隨筆の、一とちぎれ／＼であると思つて讀んで下さればよい。

下らない事を澤山書く。下らなくない樣なものを書く爲めには別に多くの幕內力士が控えてゐる。一つのペイ／＼たるに過ぎぬ自分の書くものは、元來が「ロシヤ」といふ三つの字を出來るだけ數多く一般の人々の眼に觸れさせ樣として、只、此の三字に附け加へて行く文字たるに過ぎないのであるから。「下らぬ」と思ひ、「馬鹿らしい」と腹を立てられる讀者に對し、自分

に豫め恐縮して御詫びを云つて置く、けれども元來、自分の書くものは、さう云ふ方々の爲めに書かれたのではなく、不幸にして、事實、まだロシヤの事では極めて平凡な日常の茶飯事をも心得て居られぬ様な、我が同中胞の外の人々の爲めに、同じく日本人の一人なる自分が書いた土産ばなしに過ぎないのだ、だから、「下らぬ」と思はれる方々は、勿論はじめからこんなものを讀まれる必要がない。本誌の讀者がみな悉く、さういふ感じを抱かれたとすれば、其の時は即ち、此の自分にまう、御土産ばなしをする義務や責任が消滅したと云ふことであつて、其の時こそ、自分は心から安んじて、自分の本職たる顯微鏡をのぞく方にばかり沒頭し得るわけなのだ。

さて、斯くの如く、たとひ如何に下らぬ隨筆でもあれ、或ひは土産談にでもあれ、兎に角、既にロシヤ問題に筆を執り、また今後も（暇と機會とさへあれば）いつでも進んで筆を執らうと決心したる以上は、一ぺイ〳〵相撲たる筆者にも、また多少、自分の「ロシヤ」といふものに對する態度の根底となつてをる考へに就て述べて置く必要がある様に感ずるのであつて、其れがまた一方に於ては上述の如く、自分が徳川幕府のとつた鎖國主義を千載の遺憾であると思ひ、また當時其の隨一の犠牲となつて斃れた錢屋五兵衛の死を悲しいとも思ふ心である

のだ。

さて話頭を一段だけ元へもどして、世界大戰の後始末といふところ（一九頁以下）へ還る。實に古今未曾有の怖ろしい、世界的大火事であつたにも拘らず、我が日本は幸にして、殆ど何等の程度の類燒にもかからずして濟んだのではあるが、然し今や燒け跡に立つて、其の昔、大厦を立て並べてゐたドイツ、オースタリイ、ロシヤ……等の今燒けとなつたヨーロッパの天地を望み、また其れ等をはじめとし、外の國々でも、やはり直ちに取りかゝつた彼等が今後住む可き家屋の改築、増築、新築、有様を見、其の構造や配置に關して各戸の人々が互ひに論じ合つてをる聲をきいては、たとひこちらの家には焦け疵一つも出來たわけではないのだが、其れに運よく火元から遠く離れて居たといふ偶然の原因によるのであるから、心あるものに取つてはどうしても今後、將來のことが氣懸りとなり、また勿論、一方では周圍の普請場から傳つて來る音や響きに自然と刺戟された氣味もあつて、「燒けはしなかつたが、今度親しく眼の前で見た經驗に基き、やはり我々の家も今のうちになる可く適當な模樣變へをして置かねば、火事を起す危險がないとも言はれぬ」といふ様な動議が、「日本」といふ我々の家の一十家族のあちこちの者から言ひ出されたのである。之れが、廣い意味に於ける、我々

家庭の改造及び解放運動である。

　同じ肉親の一家族の間ではあつても、年齢や個性の異ひによつて、やはり意見がいろ〳〵に分れることを免れない。然し、元來がみんな互に血を分けた人間同志なのだから、ゆつくり落ち付いて、お互に胸襟をひらいてか穩に自分達の思ふ處をはなし合ひさへすれば、結局、互ひに氣持よく讓り合つて、然かもみんなが各々滿足する樣な歸着點が必ず見付かり、問題は圓滿に解決さる可きものなのだが、ともすれば冷靜なる態度が缺けて、人と人との心の間に獸性の火花が飛び交ふのを見る。あれ〳〵、何番目の兄貴だか知らぬが、年上だといふ權威を笠に、一寸不平を云つた弟の横面を張つた男がある。其の結果は直ぐ、毆られた當人ばかりでなく、年下の弟や妹達みんなの頭にも一齊に反抗心が表はれたではないか。誰かが「女等が口を出す事柄ではない」と叱る聲もきこえる。年の若い人間は元氣に滿ちてゐるから、それだけ激し易く、言葉なども亂暴になり易い、然し其れは年に免じてゆるしてやつて、もし彼等の考へが實際に突飛であり、間違つてをるならば年長者は彼れ等が徐ろに納得の行くまで諄々と說いてやる可きである、其れ位の度量があつてこそはじめて兄貴たり或ひは叔父たるの資格があると云ひ得るのだ。年下の者が獸性を發揮して起ちかゝつて來ても、もし年長ものに世の現狀にあきたらず、常に向上せむ事を希ふ「火を消さむるとする人」の心さへあるならば、如何なる場合にも焰は燃え上らずして治まるのである。もし全ての年長者が、かう云ふ心を持つてをるとしたら、其の家にはもう防火の裝置などはなくてもよい、何故なれば其の心そのものが、何よりも完全なる防火裝置であるのだから、然し乍ら若年者の獸性に對し、年長者も亦、おとなげなく、獸性を以て答ふる時、其時に忽ち炎々たる焰が燃え上つて、家をも人をも燒かうとするのだ。もし、はじめから年長者が獸性を發揮して若年者を威服壓迫し樣とすれば、焰の燃え上る事は更らに一層速かであらう。何故なれば此んな場合に若き年下の者共は、殆ど本能的に其の獸性のみを刺戟せられて蹶起するのが常であるから。其れ故、家の内部に人間社會生活上の火災を起す起さぬといふ責任の大半は一つに懸つて年長者の部類に屬する人間の心の持ち方と態度とにある。

　聰明にして慈悲の心に滿ち々々たる我れ等が家の父母は、いつも默つてぢつと子供等みんなが議論する樣を見、其の各自が述べる拙い言葉をきいてゐて下さる。みんなが仲よく、一緒になつてよろこばしく暮して行く時、父母の顏には、幸福なるほゝ笑みがあるが、兄弟のものが意見を異にして論爭する時、其の顏の上には憂愁の雲がかゝる。あゝ然し全ての子供等の聲を

して、希はくは其の何れをも遮るものなく、彼れ等が兩親の耳に達せしめよ。然らば父母を衷心より深く敬愛し、信頼し切つてたる子供等は、たとひ自分等自身の間には如何に多くの異説が現れた時にも、其の判斷をば兩親の聰明に一任し、其の裁きに服して、彼れ等はいつまでも樂しき一團を成して生活し、勞作して行くであらう。

大火事の慘禍がひどかつただけに、今や世界には、之れを機として將來再びかゝる大火を勃發せしめざらむが爲め、各國民の家々が互に相協力して、其の豫防に當らうと云ふ「國際聯盟」なる消防隊組織の企てもあり、また、今度開かれむとしてをる「太平洋會議」なる寄り合ひなども全く其れと同じ主意によつて催されるものなのであるが、其れ等の協同計畫の外に、また何れの國家に於ても、なる可く完全に近い防火の裝置、防火の設備を施して家屋に、改築或ひは新築せむとして各々工夫を凝して居る。其れ等の新しい家屋の構造や設備は、其れを建てつゝある人間達各自の國民性や歴史の異なるに從ひ、また其れ等の人々の間に抱かれて居る「火を消さむとする心」の眞實さ加減……等に從つて、自然、互ひに相異なつて居るのであるが、其の全てを通じて認められる事實は、家屋の構造や設備が何れも著しく神經化されて居るといふことである。

此等のことは、其れを全く、民族各自の工夫や選擇に一任して置けばよいのであつて、「己れの家がかうだから、他人の家もまた斯うでなければならぬ」などゝ考へるのも正しくなければ、同時にまた、其れと反對に、「人があゝ云ふ家を建てたから、こちらでも是非あゝ云ふ家を建てねばならぬ」などと考へる事も誤りである。要は民族各自が、自分等の國民性や歴史を慎重に考慮した上、出來るだけ其れに適當し、然かも發火の危險の最も少ない樣な家を工夫し案出して建てればよいのだ。但し其れに際し、他人の工夫したるものをも、いろ／＼と比較研究して自己の參考とすることは、勿論何等の妨げなきのみならず實際其れが最も賢明なる方法であるだらう。

華麗善美を盡した宏大なる宮殿と、其れを取り圍む、恰かも豚小屋の如くむさくろしき百姓家から成り立つて居つた以前の所謂「ロシヤ大帝國」は（新聞雜刊號の挿圖「ロシヤ都市とロシヤの田園」參照）戰爭と革命との猛火に一たまりもなく燒け落ちてしまつて、今や其の跡には、其の代りとして、「ボ式」と稱する、（極めてぶざいくであるが、然し全部鐵筋コンクリートとも云ふ可き）耐火性の家屋が建ちかゝつてをるのを見る。さて然らば其の家のなかに住む家族の組織には、此の間に如何なる變化が起きつゝかと見ると、其の大火事や改造の騷ぎに際し、驚く勿れ、子供等の中の或る者

によつて、兩親が二人乍ら殺されてゐ、また多くの兄弟の間にも或ひは殺されたものがあり、或ひは自ら他に去つたもの、逃去つたもの……等が出てゐる。實に恐ろしくもまた、悲慘な事だと思つて、抑々如何なる理由によつて其の樣な慘劇が行はれたのであるかと、よく／＼事情を調査して見ると、先づ第一に、其の兩親だと稱してゐた人間が、決して誰れの生みの親でもなかつたと云ふ事がわかつた。澤山をつた子供の中の百分中六十五ばかりが家附きの人間であつて、殘りの三十五に當る人間はみんな後に他所から連れて來られた養子や養女であり、さうして兩親と稱してゐるのは、まるでまう血も續いてゐない樣な遠緣の親戚のもので、其れがいつの間にかロシヤといふ家の主人であり双親であるとスマシこんで、養子や養女をはじめ、家附きの子供までを思ふ存分に自分の食物にしてゐたわけなのであつて、長い年月の間、其の虐待に堪へ兼ねてゐた其の子供達が今度の大火事に際して、其の贋せ親を放逐し、はじめは決して殺す意志などはなかつたのであつたが、遂ひ或る事變の勃發した爲めに偶然其のいのちをも縮めると云ふ結果になり、また從來、其の贋せ親に阿諛し、若しくは其れを煽てゝ利用し乍ら、他の殘りの多數の兄弟達をいぢめて私慾を滿たしてゐた少數の兄弟をも葬つてしまつたと云ふ次第なのであつた。兄弟の中でも「エストニア」だとか「リヴォニア」だとか、乃至は「ポーランド」「フィンランド」……と云ふ樣な、元來、よそから無理に連れてこられた養子や養女達は、此の際ロシヤ家から、離れて各々別に分家を立てることになつたが、あとにまだ殘つた澤山の兄弟達の間にも、何分生れの異ふいろ／＼の子が混つてをるので、兎もすれば一致の行動を取り、協力を續けて行くことが難しくなる。「親殺しの大罪を犯しよつた實に怪しからぬ奴等である。とてもあんな奴等と人間並みの交際をして行くわけにはゆかぬわい」と云つて、周圍にある家達では、未だにボイコツトを續けてゐる樣だが、よく事情をきいて見ると、ロシヤ家にあゝ云ふ騷動が起つたと云ふことは決して無理もないはなしである樣にも思はれ、「何とも已むを得なかつたのであらう」と考へてやる事も決して出來ないわけではない。否、自分等自ら、立派なる兩親を持つてをる我々日本といふ家の子供等に取つては、不幸にして生みの親の愛を感ずる間もなく、冷酷な贋せ親の手に引きとられて、いつも生涯の絕ゆる暇もない樣な苦しい境遇の下に育つて來た、ロシヤといふ家の子供達のことを、實に可哀相であると同情をこそすれ、決して其れを咎めるなど〻云ふ樣な氣にはなり得可き筈でないのである。ロシヤ家の子供達に取つても、昔は、我々の兩親にも較らべられる樣な

彼れ等自身の生みの親があつたのだが、其の「王者」とも稱す可き生みの親は不幸に十二世紀の諸葉に、早くも死絶えてしまつたのである。（上篇五十九頁參照）實に「樹靜まらむと欲すれども風やまず、子、仕へむと欲すれども親すでにゐまさず」といふわけなのであつて、悲しい哉今日のロシヤの子供等に取つては、仕へて孝養を盡さむにも、さう仕ふ可き彼れ等の生みの親は既に何處にも存在してゐないのである。たとひ一見今日の彼れ等が親不孝者の樣に見えるとしても、其れは決して、實際、彼れ等にははじめから親を思ふ子の心が缺けてゐる爲めではないのだ。見よ、彼れ等の多數は、如何に彼の僞せ親にすらも、長の年月、模範的なる孝養を盡して、なほ其の足らざる事のみを惶れてゐたか!!

上に述べたる如く一つの國家內部のことは、大體、其の國家を立てゝをる所の民族自身の工夫や監督に委ねて、出來るだけ他からの干渉を避けることゝし、各民族は、自分等の歷史や國民性等を愼重に考慮した上、自分等一民族の間に於て、人間の獸性によつて起さるゝ諸々の不幸を出來る丈完全に豫防し抑壓し得る樣な設備、制度の實現に努力することゝ定め、さうして今假りに、今日此の地球上に於て、苟も一つの異民族として認められてをる多くの民族達が各々、其の主義を異にして、非常な

る努力を致した結果、一種族、一民族の內部に於ては、今日皆見られる樣な、階級的の增惡の念なども消滅し、人の心と心との間に獸性の火花が飛び交はる事なども止み、……地上の到る處に、今よりも遙かに樂しく、人間の暖か味に滿ちた社會團體が、現出した事と假定する。さて、然らば其の時には此の世界は全體としても極樂淨土の樣になるだらうかと反問して見るに、決してまだ〳〵簡單にさう云ふわけには行かない。此の世界の上にはまだ、我々人類が、原人的の生活をしてゐた時以來からの遺產である所の、他種族、他民族を極力排斥せむとする感情が可成りに强く張つてをる。此の排外的の感情は、若し、全ての民族の地上に於ける生存權が同一であり、彼れ等の受くる待遇が平等であつたならば、交通機關といふものが、斯くの如く發達して來てをる二十世紀の今日、決していつまでも存在し得可き性質のものではないのであるけれども、不幸にして、此の地球上には、現在に於ける實際の價値や能力といふものと一致せぬ、異民族間の不合理なる不平等の事實が今なほ我々の眼前に存在してをる。而して此の「異民族間に於ける不合理なる不平等の事實」たるや、彼の「一民族の內部に見らるゝ自然たる階級制度の事實」と同じく言ふまでもなく、人類の獸性が生み出した產物なのであつて、只、一つに其の獸性の力が個人

は異家族の間に働くことによつて生れ、他は其の力が、個人、家族等の集合團體たる異種族、異民族の間に働くことによつて生れた、即ち言を換へて云へば之れは異民族間に於ける不自然なる階級制度である。不幸にして此の不自然なる階級制度の維持されて行く限り、たとひ、一つ一つの種族や民族の内部に、如何程暖かく柔かき、融和、協力が見られ・相互扶助の精神が横溢するに至るとも、人間の野獸性に基因する次ぎの大慘禍から決して地球を免れしむることは出來ない。何となれば此の制度の維持は即ち異種族、異民族の間に發揮せらるゝ人間野獸性の是認であり、國際的良心、四海同胞的思想の上に依然として人間の獸性が覇權を持しつゝある事の證左であるから。而して一種族、一民族なるものが其れ全體として外部に向ひ發現する人間の野獸性の威力的總量は、其一種族一民族の内部に不和があり、嫌惡があり、爭鬪がある時よりも、其處に平和があり、親愛があり。一致協力の事實がある時、却つて遙かに大きく、且また辛辣であるといふことは、我等が歴史的經驗に基いて既によく熟知せる所である。東部シベリヤから中央アジヤにかけての草原の上に、家畜を逐ひつゝ互ひに部落的爭鬪を事としてをつた間、蒙古民族の獸性たるや世界の民に取つて殆ど顧慮するに足らぬものであつたが、一度び成吉思汗の麾下に、彼れ等一大民族の融和團結を見るに至るや、彼れ等の獸性はアジヤの殆ど全部を侵略したる後、なほ力餘つて終ひにヨーロパの大部分にまでも及んだ（前篇六二頁以下參照）。また今度の世界大戰に先立つて、ドイツ帝國内における文物制度が如何に國家社會的に精化し整頓されてゐたかは、皆よく人の知る所である。支那が今日の如く、日夜督軍間の内爭のみに耽つて居る間、其れは所謂「一老大國」たるに過ぎず、お愛相よくして然かも中々に拔目所なき商人、低廉なる勞銀で必要とあらば幾らにても多數に傭ひ入れ得る苦力、巧みに賄賂を取つて私腹を肥し居る役人達、……と云ふ様なものゝ集團であるといふ事以外に、世界の他の民族に對して、殆ど何等の交渉をも持たぬのであるが、殊に近年になつて益々其の數を增して來た彼の國に於ける覺醒せる若き人々等が、他日其の志を遂げ、彼れ等の國の寄生虫たる現時の役人や軍人共を追ふて自ら天下を料理するとゝなり、さうして、少くも彼れ等の中の主なる者が、（前の革命に從事したる人物などゝは異ひ）一旦政權を握りたる後にも決して豹變などする事なく、書生時代に考へたる理想其のまゝの事を實現す可く努力するものと假定して、さて幾十年かの後に實際支那の再生が完成し、一つの文明的大共和國が東アジアの大陸に出現したとすれば、人種不平等の事實がもし其の時までも存在す

る限り、其れは却つて世界の平和に對する一大恐怖であり、禍ひであるのだ。

此の大いなる矛盾、卽ち全世界の「平和」の爲めには一つ一つの民族の内部に、平和には非ずして、憎惡、不信、爭鬪……等の狀態が續いた方が都合よく、各民族内部の親愛、協力、融合……など丶云ふ事は却つて世界を戰亂に導くと云ふ一大矛盾は、どうしても今日我々が見る如き、異民族間に於ける、正當なる實力に相一致せぬ不平等と云ふ事が消滅し、地球の全表面がすべての人類の爲めに開放されて、彼れ等が銃劍によらず正當なる勤勞努力による所の自由競爭の舞臺、また對等なる人間の資格を以て互ひに相倚り相助け得る仕事場とされた後でなければ決して除くことが出來ない。此の一大禍根を其のまゝに生かして置く限り、たとひ千百の平和協會を設立して世界の隅々に到るまで平和宣傳をやつて見たところが、また如何に寄り合つて會議を開き軍備縮小の申し合はせをし、制艦費……戰費等を削減して全部教育の方に使はせて見たところが、其れ等の努力は秋草の枝や葉を切り拂つて、土には肥しをかけて置く樣なもので、一時は片がついた樣に思はれるかも知れぬが一度び春が來れば草はまた一齊に天をも衝く樣な勢ひで、延び出して來るに違ひないのである。最も大なる、人間獸性の產物たる人種不平等の制度が固執されてをる間、世界に眞正なる平和といふものは來ることが出來ず、またほんとうの意味に於ける文明といふものの有り得ない。もし今日の所謂「平和」併びに「文明」なるものが眞―ほんとうの「平和」であり「文明」であるとして永遠に限りなく續けられて行くものとしたら、其れは卽ち我々人類の理想が既に自殺したことを証據立てるに過ぎない。

七月二十九日、慶應の講堂で行つた「文明の再建」と題する講演の中に於て、ラッセルは先づ「文明とは一體何を意味するのであるか?」といふ問ひに自ら答へて、

「私の意味する文明とは、近代的進歩の物質的方面の事ではない。私が意味するものは其れ以上の或る物、卽ち人生の外面的設備よりも、人の思想や感情の中に存在する、精神的、知識的な或る物のことである。私は藝術、科學、個人同士、團體同士の間の圓滿な關係、及び一切の人々に取つての、能ふ限り十分な、幸福な生活、と云ふ樣なものが、文明を構成する事柄だと考へるのである。」と云ひ（「改造」九月號所載の譯より自由抄）今日の物質的文明の弊害的方面を述べたる後、

「工業主義は旣に世界を一變させた新しい力である。工業主義は善に對する無限の可能性を含蓄してゐる力ではあるが、其れが昔からの二つの古い事柄と結合してゐる爲めに、今では

事實上、却つて無限の害惡を可能ならしめてゐるのである。そして私は、若し工業主義が吾々の召使となる可き、あるならば、若し其れが人類の中のあらゆる良いものを掃滅する代りに人間の生活に奉仕す可きであるならば、吾々は全世界の大國民の間に於ける、私有財產と國民主義とを廢止することが絕對に必要であるといふことを、諸君に說得したいと思ふ。」と云つて一國內に於ける私有財產の廢止併びに階級打破といふ事と全世に彼れの所謂「國際的共產主義」といふ事を高唱して、

「其の國際的共產主義の社會に於ては、總ての人々が平等であり、世界の勞働の生產物が等しく分けらるる爲めに、もはや競爭は存在しない。又其の社會に於ては世界の原料は國際的に管理せられ、各國民の間に必要に應じて割宛てられる、現在の害毒を生んだ競爭の精神は、正義の精神に依て消されてしまふのである。過去から繼承した文明の中で吾々の總て尊重してゐる所のものを保存することが出來る樣に現在の制度を變更する道は、唯だこれ一つあるのみである。」と說いてゐる。

人類が終局に於て如何なる制度の社會を組織す可きか、といふ問題はしばらく之れを措き、少くも人間の心理狀態が、まだ今日の如く濃厚に自己といふ色彩を帶びて居る時代に於て、直ちに絕對的なる共產制を普偏的に採用せしめむとする、性急なる態度は、ロシヤに於けるボルシェヴィキ中の理想家達が實際に行つて見て、はじめて其の未だ不可能なることを悟つた苦き經驗に鑑みても、切に終局の大成に心を希望する人々の取る可き賢き方法ではないと筆者は信じてゐる者であるが、彼れラツセル氏が、「國際的共產主義」なる名の下に、熱心力說して居る所の、全ての人類に向つて、(其の民族及び國籍の異同を論ずる事なく)地球上の全ての門戶を開放し均等なる機會を與へるといふ主旨は、實に心ある人々の、みな、力を協せて實現に力を盡さねばならぬ緊急事項である。外部に於ける國際間の關係がさう云ふ風に變つて來たあとでなければ、如何程騷いで國內の事情だけを平和的の組織や制度に改造して見たところで、結局其れによつて生み出されて來るものは、やはり鳩ではなくて蛇である。其の適切なる實例を我々は矢張り今日のロシヤに見る。

彼のボルシェヴィキの連中は最初から無併合、無賠償を極論し、たとひ如何なる事情があるとしても、そんな事情などに顧みず先づ何よりもさきに、流血の慘害をやめさせ樣とした平和論者であつた。然し乍ら今度の戰爭は前の日露戰爭などゝまるでわけが異ひ、有產階級をはじめとしてロシヤ一般國民はドイツに對する敵愾心ははじめから極めて旺盛であり、彼れ等は心

から全じくドイツ血統だつたロマノフ王朝と年來グルになつて彼れ等を出來るだけ無智盲昧の半獸的境涯にいつまでも留め置かうと努めてゐたドイツをば、自分等ロシヤ國民の仇敵として惡んで居つたのであつて今次革命の導火線となつた彼のユスーポフ公による怪僧ラスプーチンの暗殺、またKD黨の袖領ミリューコフによる。時の宰相シュチュルメル及び內相プロトポーポフの大彈劾演說、何れもみな爲政者の親獨政策に對する國民の宣戰であつたのだ。一方に於ては、（たとひどの位の程度まで眞劍に力を入れてゐたかは明かでないが）確かに、此の排獨親英的なるKD黨（Konstituzionnaya Demokratiya の頭文字をとる）を援けてロシヤに一種の革命を行はしめ、以て單獨講和締結のおそれを除き、ロシヤをして聯合國の爲めに、何時までも椽の下の力持たる役割りを演ぜしめ得る樣にとイギリスやフランスなどが謀をめぐらした形跡があつた。例へば上記ミリューコフが首相を致命的に彈劾した後ち、直ちに拘束される恐れがあつた時、イギリスの大使ビュツケナンが、自分の自動車に乘せて議會から連れ去つた事實の如き幾分這般の消息を語つてをると、其の當時一般に考へられてゐたことであつた。然るに之れと同時にまた他方に於ては、實に奇妙ではあるが、親獨派だつた政府當局者の方でも自ら故意に革命を誘發せしめたと云ふ形跡があるのであつて、つまり、此の正反對の目的の爲めに兩方からたくらまれた二つの計畫が、たま〳〵一ケ所にぶつかつて革命の勃發を見るに到つたといふのが事實に近いらしいのである。聯合國は其の所謂「ロンドン協約」の中に於て、「最初まで一同堅く團結して獨墺方に對抗し、決して單獨に平和を締結せぬ」と云ふ堅い盟約を結んだのであるが、只、ロシヤにだけは、其の從來からの國情を參酌して一つの除外例を設け、「但し、ロシヤのみは若し。其の國內に內亂の勃發を見たる時、此の限りに非ず」と云ふ樣な但し書きが附せられてゐたと世間では云ふのだ。ドイツ生れで、ロシヤ嫌ひの皇后が、全じく親獨派だつた彼のラスプーチンなどを無二の股肱と賴んで非常なる權力を振つてゐたロマノフ家の皇室が、止むに止まれぬ或る事情と勢ひとに乘ぜられて一旦ドイツとの戰を開きはしたものゝ、戰爭が長引くに從つて、如何に其れに對して氣乘りがしてゐたかつたか、また心の中で、「だうかドイツが餘り敗けてくれぬ樣に、何ならば少し位、聯合國の方が敗けてもよい……」と祈つてさへもゐただらうと云ふ事は、ロシヤ人ならぬ外國人の我々にすら、戰時のロシヤに在つて其れとなく萬事に察せられたことである。此の戰爭以前にロシヤがドイツ人の傀儡にかゝつてゐた程度は、「骨がらみ」と云ふ言葉でもを用ゐて評す可く、當時の

内部から、軍隊から、また商業、製造工業……方面の各社會から、更らにまた國内に於ける諸鐵道をも侵し、其れに沿ふて既に滿蒙あたりまでも延びて來てゐたので、遠き昔にロシヤ化せられ終つた獨系の露人達は除外するとしても、まだ近々ロシヤに移住して來たばかりで二重國籍を有してゐ、或ひはまだ立派にドイツばかりの人間である樣な連中が、其れ等の政治、軍隊、商工業、鐵道、通信……等、各方面の要處々々にプロシヤ一流の複雜なるシステムを立てゝ配置せられてゐたのであつた。之れ等ロシヤ人の假面を被つた敵國からのまわし者、及び其れ等の巧妙なる運動によつて、敵方に國を賣る可く約束した政治家や軍人等によつて、お人好したる大のロシヤ人が如何にあの戰爭中、國の内部から無慈悲に翻弄され苦しめられたかといふ事は殆ど筆紙につくされない。さうであらう、肝心の陸軍大臣であるスホムリーノフなどゝ云ふ將軍までが、ドイツから買はれてゐた人間だつたのであるから。戰線に於ける鐵道輸送の設備がドイツ側よりも數等劣つてゐた事によつてロシヤ軍はいつも苦しんだのであつたが、其の不滿足なる鐵道すらも完全には其れを利用することが出來なかつた――ドイツの大軍の急激なる襲撃を受けたA方面に援軍を送る必要がある、然し其の請求によつて送られた援軍は如何なる間違ひか遠くCの方面に送りつけられて、其の誤りだつたことかわかつてAに驅けつけた時には、まうA方面は獨軍の手に落ちてをる。また例へば兩軍が全線に亙り今を限りと互ひに砲火を交へてゐる時、後からあとから、急速に彈藥の供給を受けねばならぬのだが、其の供給が中に捗々しく行はれない、之れが漸くにして送つて來られたので、「それ!!!」と一同勇氣百倍して使はふとすると、何れも砲彈は如何なる手違ひからか其の場所の大砲とは徑の異つたものばかりが送られて來てゐるので、いくら眼の前に群がつてゐても、打つ事が出來ない。さういふ樣な殆ど不可解なる「手違ひ？」によつて、いつも徒らに何千、何萬といふ人命が空しく餘分に損ぜられて行つたわけであるから、政府に對する不信任の念は、先づ、何處よりも早く、軍隊自身の中に發生して來たのである。勿論、國民の憤慨も漸次に其の熱度を高めて來た。然るに皇帝の方では折もあらんに、其の反獨熱の高き時に當つて、新たに Stürmer といふ如き、名からして純然たるドイツ系の人間であり、殊に遠き以前、縣知事として辛辣なる手腕を振ひ、幾多の義人をシベリアに送つたといふ樣な汚れた經歷より持たぬ男に新内閣組織の大命を下されたのであるが、其の時、世間一般では彼れの任命はラスプーチンから皇后に推薦された爲めであつて、其れに先立ち、ラスプーチンは自己に對す

るシュチュルメルの誠意をためす爲めに「貴樣がほんとうにおれに對して忠實なる人間ならば、其の證據にいま跪いて、このおれの靴に接吻して見ろ」と云つた時、彼れは唯々として其の命に從ひ、ラスプーチンの靴を頂いて接吻し、共れによつて彼れの信頼を得たのであるなど〻、うそか眞か、言ひふらされてゐた。まことに、ロマノフ朝の末路の樣たるや、彼のファウストの中で、メフィストが酒場でうたふ「蚤の歌」の文句を其のま〻現實に見せられた樣な氣がする。

ラスプーチンが殺された頃には、皇后自身が　凡ての親獨的陰謀の張本人であり、ツァルスコエ、セロの宮殿内には戰爭中もドイツからいろ〱の人物が賓客としてやつて來てをり、そし毎日、特設の無線電信で、種々なる通信が行はれてゐるのだ……など〻云ふことを恰かも公然の秘密に過ぎぬもの〻如く、人々が談し合つて、まう少しも怪しまぬ程にまでなつてゐた。革命の口火に火をつける役を演じたプロトポーポフといふ男は、元は民黨の人間であつて、議會に副議長までも勤めてゐたのであつたが、如何なる天魔から見込まれたのか、一旦内閣に入つて、シュチュルメルの下に内相の地位につくや、今度はまるで從來とは反對の極端なる官僚肌と早變りをし、非常時他の議員と共に彼れがロシヤの國會を代表してイギリスに使するや、暗にシュチュルメル一派の内意を受けて、其の途中ストックホルムに於て、ドイツ側から出て來た委員と會見し、單獨講和に關する打合せをやつた形跡があるのである。此の陰謀を前記の如く、KC黨のミリューコフが議會でスッパ拔いて其の罪を彈劾し、共れを機として議會は政府から休會を命ぜられた。此に於て、形勢益々容易ならずと見て取つて、プロトポーポフは斷然次ぎの樣な芝居を打たうと決心したらしい。即ち彼れは極めて秘密に、憲兵並びに警官の總動員をやつて、何萬といふ多數のものをペトログラードに集中させ、また戰線に於て武器の欠乏してゐた際なるにも拘らず、夥しく何萬といふ數の機關銃をペトログラードに持つて來て、豫め市中の重だつた建物の屋根裏其の他に、殆ど洩れなく、部署を定めて之れ等の警官に、各々城砦を造らせて置いた。また萬一を慮り、多數の大砲等をも準備した軍隊を密かに市中の到る處に配布して置いた。さて、さう云ふ風に充分良の方の準備を整へて置いて、愈々革命の誘致に從事したのであるが其の主なる方法といふのは故意に勞働者に對するパンの供給を段々と惡くして行つたのだ。ペトログラードには大小種々なる軍需品製造所があり、從つて從業者の數も極めて多數に上つてゐたが、パン其の他の食糧品が切符制度になつてから後でも、さういふ工場に戰爭の爲めに

て居つた。筋肉勞働者への配給は、一般の市民に對するそれに比して遙かに餘裕のあるものであつた。其の當時丁度自分の家の女中の弟が、やはり田舍から出て來て、プチーロフといふ東京の砲兵工廠に當る樣な工場で働いて居つたが其れからきいたはなしによつても、先づ第一には分量を減少させた、其れから今度は給與する時間を極めて不規則にし、工場で働いてゐて少しウツカリしてゐると其の日はもう一片のパンにも有りつけず、従つてみんなが、「いつパンが來るか／＼」と思つてイラ／＼した氣分で暮す樣になつて來た。さういふ氣分で朝からパンを待つてゐても、終ひに夜になるまでパンの影を見られぬ樣な日も出て來た。「わつち等の樣に獨り者なら、まただうにか、辛棒も出來やすが、女房や大勢の子供のある人間ちやあ……」とても堪へられぬ苦痛であつたと、其のニコライといふ作男上りの職工は自分にはなした。一方でかう云ふ風に、勞働者を其の家族と共に言葉通りに飢ゑさせて置いて、また他の方では陰謀の嫌疑があるといつて、中央戰時工業委員會の委員の中、勞働黨に屬してゐた十一人のものを捕縛して投獄し、また勞働保險や消費組合に對しても非常なる壓迫を加へて、其の會員等を拘束した、只にさういふ勞働者ばかりに對してゞはなく、一般の市民同樣に暮してゐた我々などにも、「まだ之れでもか我々は我慢するのか？」「之れでもか？」「まだ之れでもか？」と云ふ樣に當局者がことさらに人民の不平不滿を大きくし樣と試みて居ると云ふより外に殆ど解し樣がなかつた、若しあれが故意にやつたのではなく、爲政者として盡す可き所を已に全力を以て盡した上での結果であつたとすれば、時の當局者が餘りに愚鈍であり餘りに無能であつたと云ふ事になる。何となれば其の頃、ロシヤ國內に蓄へられてゐた食料の量はまだ可成りに豐富なものであり、そして鐵道や河川等による運輸機關もまだ相當により働かせ得る狀態にあつたのだつたから。

然し乍ら、爲政者の採つた、かう云ふ方策は、勿論其の効果なくしては終らなかつた。勞働者は處々所謂「會合（スホーカ）」なるものを催して、はげしく議論を闘はした末、終ひに斷然、官憲に反抗するといふ決議をした。さうして其れに社會革命黨（エスエル）や社會民主勞働黨等の連中が馳せ加つて、過激なる宣傳ビラを　りまいたりした結果に益々事態を惡化せしめ、一方では勞働者の總同盟罷業となり他方では一部の工場の閉鎖となつたのであるが、もし多くの人々が其の當時考へてゐた如く、斯くすることがはじめから政府豫定の計畫であつたとするならば、實に彼れ等當局者の計畫は著々として實現されて行つたわけなのであつた。

一九一七年露曆の二月二十二日の晚方からペトログラードの市

餓ゑたる勞働者や其の家族の生氣なき老若男女の群れが「ダイチィエ、ナム、フレッベ!! ダイチィエ、ナム、フレッベ!!(「私達にパンを與へてくれ!」)」と呼び乍ら不秩序な行列をなして通るのが見られたが、其の翌日からは諸工場の勞働者がみな一齊に罷業して此の群集に加はつたので、まう市の到る處が殺氣立つて來た。然し乍ら茲に自分が「殺氣立つて」と云ふのは、決して之れ等の人々の顔に、銃や劍を取つて積極的に挑戰し様など、云ふ荒立つた氣分が、眉宇の間に現れてゐたと云ふ意味ではない。汚れたる雪に埋れた二月の街々を、之れに飢ゑたる人々の群れが、口々に「パンをくれ、パンをくれ」と叫び乍ら通つて行くのを見ることは確かに凄慘な光景であつたけれども、髮やヒゲが無精に延び、日夜の心勞に何れも面窶れのした、服裝がまち〳〵た勞働者――、其れに從ふ鶴髮の亂れた老人、小さな子供の手を引いたおかみさん、きたない風呂敷で頬かむりした小娘……など、云ふものゝ其の時の顔や足並みには、決して小指のさき程も「革命の爲めの鬪士」とか、「自由の爲めに起つた勇士」とか云ふ樣な感じはなかつた。嗄れた聲で「パンをくれー パンをくれ!」と叫び乍ら、其の行列が次第に遠のいて行く時、自分は恰かも、雨にショボ濡れた羊の群れが、羊飼ひを見失つて、鳴き乍らさまよつて行くのを見る樣な

感じがした。さうして其れは確かに、今から考へて見ても、人間の心に堪へ忍び得る屈從の極限までを能く堪へ忍ぶスラヴ民族性の一面を最もよく現してゐる斷面であつた樣に思ふ。もしもあの時、政府當局者中の誰れか一人がみんなの前に出て行つて、自分の誠意を披瀝して食糧の不足なる理由を説明し、たとひ一言でもよいから同情や慰めの言葉を彼れ等にかけてやつたとしたら、恐らく彼れ等は胃袋の空虚なることを感じつゝも、「ニチェヴォー!! 大丈夫、御安心なさい、私達もまう少し我慢しませう」と云つたかも知れない、さうして其の同情ある言葉を「おかず」として、平生の半分或ひは三分の一のパンを食べたけでも喜んで仕事場に歸つて、食糧狀態の改善さるゝのを待つたかも知れない。然し其の時の政府は決してそんな暖か味のある政策は選ばなかつたのだ。いま燈裡に獨りペンを走らせてゐる際にも、筆者の頭の中には、其の當時、革命勃發の後數日間の光景が、今なほ生くるが如くにまざ〳〵と現れて來る。然し其んな事を記述して行つては殆ど際限がなくなるから、茲には、事實の大半を飛ばして置く)。政府は一方に於ては「罷業して仕事に復せざる勞働者は一刻の猶豫もなく戰線に送らる可し」といふ樣な何等の思ひ遣りなき布告文を辻々に貼り付け、また他方に於ては漸次に軍隊を出動せしめて、市街の警衛に當らせ、

……要するに民心の激昂を意とせざる頭からの高壓手段に出たのであつたけれども、其れにも拘らず、最初の三四日の間、勞働者達の態度は純然たる無抵抗主義であつた。軍隊が彼れ等の行列を遮つて、其れを解放せしめ樣とする時、彼れ等は少しも其れに抵抗せず、只三々伍々の集團となつて、整列して居る軍隊の傍らに立ち留り、其の中から、多少口の利ける樣な連中が士官のところなどへ出て行つて、極めて打ち解けた態度で談しかけてゐた——「あなた方も私達も、兄弟であり友達である、だから、お互ひにみんな談しがよくわからなければならない筈だ。」と云ふ。また「自分達は別にだうし樣の、かうし樣のと云ふ樣な大それた希望があるわけではない、行列を作つて街を歩くことなど決して自分達自身でもし度いわけではないのだが、然し何分パンがなくては生きて行くわけに行かないし、また一生懸命働いて戰線にゐる兄弟達の爲めに軍需品を造ることも出來ないではないか」と反問する。——眞面目になつて議論し之れを說得し樣としてゐる士官もあれば、只、苦笑して默つてゐる士官もあつた。然し自分はどの兵隊や士官の顏にも、さう云ふ勞働者を憎々しく思つてゐる樣な素振りは未だ曾て少しも認める事が出來なかつた。「ロシヤで動亂と云へば、いつでも鎭壓の役を引き請けて齒を出す事にきまつてゐる彼のカザツク兵も、ニィエヴスキー、とか、リテェイヌイ、とか云ふ樣な目拔きの大通りには旣に堂々たる當直部隊を作つて、或ひは徐ろに、或ひは速に、馬首を揃へて巡行して居たけれども、一九〇五年の革命の時、彼れ等が、いつも好んで用ゐる「ナガイカ」と稱する、さきの方に鉛を入れた長鞭を振りかざして、群がる民衆を蜘蛛の子の如くに逐ひまくつたとは異なり、今度の革命に際しては、はじめから殆ど何等の積極的行動をも取らなかつた。後になつて考へて見ると其の時愛嬌のない怖ろしい面相をして、馬を御してゐた彼れ等の顏にも、「余り有難くない役目だが、だうも御役目だから仕方がない」と云ふ樣な意味が僅かに觀取された樣に思はれるのであるが、然し、幾多の偏見に心か滿され、心眼昧くして一寸先きもわからなかつた政府の當局者等は、旣に哥薩克にさへも彼れ等が斯くまで信用を墜し、同情を失つてゐるなどとは夢にも知らず、依然、自分等が準備し置きたる鎭壓の手段に萬々遺漏なき事を確信して、故意に民衆を動亂、騷擾の民に逐ひ込んで行つたのであつた。政府の流血が見られたのは、たしか露暦の二月二十六日だつたと思ふ。また廣く國内各部に亙つて思想の惡化を見ない今のうちに早く、ペトログラードを中心とする小區域だけに小さな事件を起させて、其れを口實に單獨講和をやらうと云ふ魂膽だつたのであらう、

此際にも最初の火蓋を切るに際して、政府側からのまわし者が却つて民衆を煽動したらしい形跡があるが、然しまた他方に於ては、多数の労働者に不満のある此の機を利用し、彼れ等を統率して、全国に亘る革命を一挙に成就せしめむと、社会革命党員や、社会民主党員等が挑戦的の態度に出て活動するに到つた事も、勿論暴動の原因であつた。「それつ!!」と云ふので、扨て市内の要所々々(主なる大建築物の屋根裏など)に潜ませてあつた警官達は、早速各自の隠れ家の中から機関銃で、何等の防禦もない民衆の群れに向つて弾丸の雨を降らせる、其れに憤慨して民衆の方でも不充分作ら、何処からか武器を狩り集めて来て應戦する、斯くして到る処の目抜きの場所に、市街戦を演出するに至つたのであつたが、實に何人も豫期しなかつた様に、既に其の翌二十七日の日に、元来所謂「暴動」の鎮壓の任に當る可き軍隊其れ自身が、殆ど何等の内輪喧嘩を見ることもなく、民衆に加擔して政府を覆へす事に衆議一決し、プリィエオブラジェンスキイ近衛聯隊を筆頭として続々、革命軍に加はつて來たので、忽ち首都に於ける勝敗の大勢が定まつてしまひ、終ひに二百人ばかりの死者を犠牲としただけで僅か数日の間に大革命が實現されたといふわけなのであつた。此の際ペトログラードに集中されてゐた数萬の警官達はロマノフ家に對する親衛隊であつた、とでも云はふか、一つには連絡等などに謬つてゐて下界に突發した事變の成行きを知らなかつた為めもあらうけれども、彼れ等は革命が成就してから既に数日を經たる後にも、なほ未だ、其の屋根裏の城砦より執念深き射撃を續けて民衆を悩まし、終ひに其の大半は殺されたのであつた。

一と度び首都に於ける革命成就の報が傳へらるゝや否や、國内の他の都市や地方などに於ても、また人々が最も心配したる戦線に於ても、軍隊はみな挙つて革命軍側に忠誠の意を表したので、もう政府當局者の逃ぐ可き途は何處にも見付る事が出來なかつたのだ。多くの都市に於ては、舊政府の忠犬だつた警察隊でさへ、もうはじめから無條件降服してしまつたので、流血と名付く可き程の流血はペトログラードの市一ケ所だけを除いて、殆ど何處にも見られなかつたのである。

實に其の當時のロシヤ國民全部の歡喜といつたらなかつた!一寸目さきが變つただけでさへ、新しい力や希望を胸に覺えるのが人間の常であるのに、現に今、数百年來の壓制、歴代の惡政、青天を蔽ふてゐた暗雲が、殆どあつけない位の犠牲者を出しただけで、一時に拂ひ除けられたと云ふのであるから、革命の心臓となつたペトログラードの市なぞでは、天も地も人の心も、一寸相聞躍れといつた様な心持ちで、殊に、其の日はまだ早

シュヴイキも頭をもち上げず、歡喜に滿ちた多くの人々の頭には時に其の存在さへ忘れられてゐた樣な有樣であつたから、皆なまう喜んで赤いリボンを胸につけては街を步いてゐたのであつた。

勿論、其時の第一次革命に際しても「自由」とか「解放」とか「階級打破」、「平等」と云ふ樣な事が主なる標語として叫ばれたのではあつたが、然し其の時のロシヤ人の心には確かに次の樣な感じや希望も混つてゐた、即ち『我々は今迄、あの譯のわからぬ、厄介な政府から支配されてゐた爲めに、折角、偉大なる能力を持つてゐるにも拘らず、其れを心で思ふ十分の一も發揮することが出來ないのであつたが、まう一旦かう云ふ樣に、ロシヤがロシヤ國民のロシヤといふ事になつた以上は、憚り乍ら今迄とは少し譯が異ふから、まあ世界の外の國の方々、大きな眼をして見て居て御覽！　あの生意氣な獨逸の奴原など、今までこそ、おとなしくしてをれば、良い氣になつて散々におれ達の膏血を絞りとつたが「一寸の蟲にも五分の魂」今度こそは、おれ達にどの位でかい魂があるか、見せてやるぞ！！』。即ち其の當時は一時非常に、國民主義的の考へが旺盛となり、まかり間違へば汎スラヴ主義の限界をも超えて廣く世界を睥睨し樣とする心持ちまで出かけてゐた樣なわけであつたから、勿論インターナショナリズムの如きものは當分影を潜めてなければならなかつたのだ。また實際、其の時、臨時政府を組織した人々、（即ち、第一次革命自身は、其れ等の人々の努力と直接何等の關係なく、殆ど指導者なき勞働者と兵卒との力によつて偶然に成就されたのであつたが、然かも從來の行きがゝり上、革命黨の名高き鬪將として一般國民から一時政權を委ねられた人々）の過半數は「ロシヤ國民の經濟的利益擁護」「其の特殊權利擴張」といふ事を考へ、殊に獨逸を徹底的に屈服させねばならぬと考へたばかりでなく、やはり戰勝後コンスタンチノープルなどの獲得をも夢みて居た樣な人達であつたのだ。此れ等の、例へばミリューコフ、ロジアンコ……等の如き人物が、最初、胸に描いてをつた所の革命といふのは、要するに宮廷に巣を食つてゐた親獨派を逐ひ、そして議會の權限を擴張して、ロシヤをイギリスの如き、憲君主國にし度いと考へてゐたに過ぎないのであつて、もし此れ等の政治家があのまゝ引き續いて政治家的生命を保ち得たものとすれば、ロシヤには未だ、皇帝と同じロマノフ家の人間で然かも其の弟であつたミハイル、アレクサンドロヴィッチ太公などにさへ、帝位に即き得る可能性が殘されてゐるわけであつたのだ。もし、あの當時、即ち臨時政府乃至はリヴォフ公の内閣時代に、ロシヤの國體を如何に決めるかと云ふことと

を全國民の投票に問ふたとしたら、無智な農民などには其の意味はよくわからぬにしても「やはり皇帝(ツァール)が要る」と云ふ希望と、「共和國(レスプブリカ)にし樣」といふ答へと、恐らく、半々位の割合ひではなかつたらうか？

然し乍ら、一度び坂路をころび出した丸石が、止まる所まで行かねば、中々止まらぬ樣に、此のミリユーコフ等の持つてゐた、穩健ではあるが然しまだ不徹底な、妥協的革命思想は其の後久しからずして彼れ等自身の政治的運命と共に、多數の國民から見棄られてしまひ、其れに代つてあのケレンスキイといふ男の時代が來たのだ。其れは誠に、空に打ち上げられた花火が、一時パット燃えたばかりで消え失せてしまう樣に、頼み少ない男だつたのであるが、然し彼れによつて代表されてゐた其の當時のロシヤ人の革命に對する思想は、確かに以前よりも一歩さきへ、進んでゐるものであつた。少くも其れは從來の國民主義一天張りから多少蟬脫しかゝつてゐるものであり、「ロシヤ」といふことゝ同時に「世界の他の國」といふ事をも考へ、自己といふものを忘れたわけではないが、然し「萬人總ての利益」といふ事をも考へてゐる態度であつた。「無併合、無賠償」といふ事をロシヤがはじめて交戰諸國に向つて宣言し、唱道したのも、また實に此の時であつたのである。さうしてまう此の頃となつては、國民中の大多數のものが、新たにまたツアールを還立などするよりも、やはりロシヤに此のまゝ共和制を布いてしまつた方がよいと云ふ樣に考へて來た樣であつた。要するにケレンスキイの時代は後に來る可きレーニンの時代の前提たるに過ぎず、彼れの本意が果して何であつたかは知らないが、其の事實上の結果に現れたところを見ると彼れはロジアンコ、ミリユーコフ時代の利己的國民主義にこり固まつてゐた土地を、後に國際的共產主義の種子を蒔く可くやつて來たレーニン一派の爲めに、豫め荒ごなしに耕して置いてやつた樣な關係となつてゐる。

世間では、英米人等の偏見的口禪を眞似て、何かと云へば「ドイツの軍國主義」と呪ひ、「ドイツの侵略主義」と罵る。れども、地球の表面の大部分がまだ今日の如く一部少數民族の專有物として、他の民族に向ひ開放されて居らぬ限り、其の禍ひの、より大なる責任は寧ろ軍國主義の如き手段に訴へざれば其れを開放せぬ民族の方にあり、最も初めに、他に先立つて軍國主義を發揮し、其れ等の土地を早くも自分等のみの繩張りであると獨り決めにしてしまつた民族の方にある。此の見地に立つて冷靜に考へて見れば、今日のイギリスやアメリカなどが、彼れ等が平生、口を極めて罵る所のドイツ等に比し、優るとも劣ら

らぬ戰爭主義、侵略主義を依然、今日までも維持して居る國家であるといふことが實に明白なる事實として理解される。此の意味に於て、ドイツと同じ様に「他に後れて今日の世界に生れ出た」と云ふ悲哀を持ち、其れと同じ様な境遇に置かれて居る我が日本などは、強者に阿諛する今日世間一般の偏見に反對し寧ろ正々堂々とドイツに對する同情を聲明す可きが當然であらうと、自分などは考へる

一部の人々から酷い叱りを受けるかも知れず、また筆者は最近の支那に極めて短い間より親しく生活したことがないから自分の其れに對する考へが間違つてをるかも知れないが、地理上に於ける特殊の相互關係、過去の長い年月の間に於ける血統上併びに文明上の交渉關係、更らに相對的に見たる民族性の關係……等から考へて、此の自分にはだうも、「ロシヤとドイツ」、「支那と日本」と云ふ二つの關係の間に極めて相類似する點が多い様に考へられる。(或ひは、誤解を避ける爲めに、此の場所で特に、「ロシヤ民族とドイツ民族」、「支那民族と日本民族」と云ふ様に云ひ直ほして置く方がよいかも知れない。)自分のかう云ふ言葉を早呑み込みして、アメリカの在支宣教師の人々などが糠喜びをされても困るし、また筆者自身も支那の青年の間におつて居る自分の尊敬せる友人達に多少なりとも誤解を與へる様な事があつては遺憾至極であると考へるので、多少其の意味を此の場で明かにして置く必要があると感ずる。

今度の世界大戰の勃發を見た頃、ロシヤに於ける有識階級をはじめ一般の國民が、如何なる程度まで、ドイツ及びドイツ人に對し反感を持つに到つてをつたかと云ふ事は既に上段に述べて置いた。然し乍ら、國が互ひに隣接してゐたと云ふ特殊の事情はあつたにせよ、ピヨトル大帝以後二百年間に亘つて、ロシヤに於ける實生活の上に、彼のドイツ人なる者が漸次に強い勢力を扶植するに到つた原因、理由といふものは決して其れを近年のドイツ帝國が採つゐた様な「國威發揚式」の侵入政策ばかりに歸してしまうわけにはゆかないのである。成程ピヨトル大帝、乃至エカテリーナ女帝等の歐化主義に迎へられて、他の西歐諸國の人間と同じく、ドイツからも多くの人間がロシヤに入り込んで、其處で、宮廷などの好遇により、各種の特權を與へられたる支配者階級の地位に列した(増村艸堂稿一二頁參照)さうして其れ等のドイツ人達は、一つは他の外國人よりも數が多かつた事により、また二つには勤勉で、忍耐強くて、月なたフランス人などゝ異ひ新しい郷土に土着、順應する性質に富んでゐる爲めに、ロシヤに入つた多くの外國人中でも次第に最も重要な位置を占むるに至り、最初は『ロシヤ語を解せざる唖』の意味

て外國人一般に附けられた「ニィエムツイ」なる言葉をも終ひには「ドイツ人」と云ふ二次的の意味に變へて獨占する樣にさへなつたのであつたが、然し其の當時に於ける此れ等のドイツ民族の發展は少しも本國に於ける中央政府の意志などといふものとは何等の連絡を有せず全く、一個の人間、一つの家族といふものが自分等の生れた故國を去つてロシヤに移住し、其處を第二の故國と定めたと云ふに過ぎなかつた。否、何れかと云へば、其の當時に於ては、非常に優秀なる才能を持ち乍ら不幸にして自分の故國に於て其れを認めらるゝ機會がなく私かに悶々の情に堪へなかつた各方面の人物が、ロシヤに來て其處にはじめて思ひのまゝに自己の才能を發展さす可き天地を見出したと云ふ場合も尠くなく、さうして我々は其れ等の人々の獻身的努力が西ヨーロッパ流となつた其れ以後のロシヤの文明が土臺を築かるゝに當つて、實際、大なる功績あつたことを認めねばならぬ、彼れ等の子孫の大部分は勿論有產階級、支配階級としてロシヤに殘つたのであるから、彼れ等の中にも、隨分手ひどく百姓などを虐め付けた地主などもあつたであらうし、またオルガニゼーションの才があるといふので諸處の領地(イメーニエ)に差配として雇はれてゐた樣なドイツ人の中などには、實際に差配人根性の腹黑い人間が尠くなかつた樣であるけれども(「ロシヤの都市とロシヤの田園」一一三頁參照)然し其れ等のことは勿論、彼れ等が特にドイツ人であつたからと云ふわけのものではなくて、只彼れ等(多くのもの)が、やはりロシヤに於ける一般貴族階級、支配階級たる例に洩れず、人民の上に多少の橫暴をやつてゐたといふに過ぎない。一方に於ては、後年、十九世紀の初葉に至つて所謂「インテリゲンツィア」なるものの發生を見た時、一方の頭目として立ち、全生涯をロシヤの改造運動に捧げた彼のヘルツェンの如きも、また其の名の示す如くドイツの血を受けた人間だつたのである。之れを要するに、十九世紀の中葉頃までにロシヤにはいつたドイツ人なるものは、何れも只、一個の人間、一個の家族として仲間入りをしに來たのであつて、もとより善い性質を具へてゐたと同時にまた惡い點をも持つてゐたであらうが、然しロシヤ人達は彼れ等に對して何等の反感を抱くこともなく、彼れ等が以前の國籍のことなどは忘れて、互ひに人間と人間とのつきあひをして行くことが出來たのであつた。

ロシヤ人とドイツ人との民族性の對照が極めて巧みに書き出されてゐるものにゴンチャロフの書いた有名なる小說「オブローモフ」がある。筆者自身は、此の所謂「民族」なるものが、果して如何なる程度まで固定的のものであるか？ 人間が若し新しい環境に移つて、從來と異なつた生活をはじめる時、果して

位まで、其のまわりの自然の力や境遇の力に屈服せられずして永續するものであるか？ といふ事に、就て疑問を抱いて居る者であり、また自分が今迄に親しく出會つた過去の經驗から考へて見ると、ロシヤの如く天然力の大きい國土、またロシヤ人の如く同化力の強い民族の中にはいつて來ては、如何なドイツ人も三代目位にはまゝ殆ど完全にロシヤ化されてしまふ様に見えるのであるが、然し、一般的に云ふならば、確かに此の二つの民族の間には著しい性質上の差別がある。一つはゴンチャロフの描き出して居る主人公オブローモフ自身によつて代表され、他は其の友人の獨逸人（ニィエメッツ）たるシュトルツによつて代表される。然し此のオブローモフの如き人間たるや、何も地主や貴族階級の間にばかり見られるのではなくて、或る程度までは勞働者でも小賣商人でもロシヤでは何れもみな一種のオブローモフなのである。あゝ、自分等が直接に親しく知つてをるロシヤ人、（そして今、日本に來てゐて、自分の家に出入してをる人々）の中にさへ、如何に其の顯著なる例が多いことであるか！！ 趣味が極めて廣くて、何にでも、たまらぬ位の興味を感じ、やたらにあれや、是れやと手を延ばし、さうして或る程度までは、一寸素人の域を脱して、其れ等の各方面の事に通達するのであるが、其の智識や技術の全てを統一して利用するだけの組織的才能には乏しく、從つて實利的の見地から云へば、寶の持ち腐れといふ様な感じのする場合が多い。宿命的の考へが強く所謂「ニチェヴォー」主義だ。何故か女の方には勤勉な人間も多い様であるが、男の方は、大抵は懶い者で、其れは何も、必ずしも寢てばかりゐると、いふわけではないが、要するに腐敗に於てノラクラとしてゐるのだ。然し一旦、自分の氣が向き、油が乘つて來たとなると、まう飯を食ふことも、眠ることをも、ほん うに忘れて、晝も夜もぶつつゞけに、何日でも仕事をしてゐる、さうして其んな時に奴等の出す精力といふものは、實に怖ろしい程大きい。——凡てロシヤ人が今迄にやつてのけた大きな仕事といふ仕事は、大抵みな、かう云つた様に、風の吹きまはし工合で、懶け者の心に油がのつて來た の産物なのである。——要するにロシヤ人は其の時々の感興に生きてゐる人間であつて、彼れ等は實際生活上の利害には極めて疎いのだ。之れに反しドイツ人の方は、誰れでもよく知つてゐる様に、非常に勤勉であり、規律も正しい。殊に彼れ等の特性中、 も著しいのは其のオルガニゼーションの才能である。天惠に富んだ土地の上に住むロシヤ人の生活に萬事非常なるムダの多いのに反し、セチ辛い國に育つた彼れ等の生活は、燐寸一つ、煙草の吸ひ殼一つでさへも只で捨てゝは置かぬ程の儉約さである、其の主義

が、物品ばかりにではなく人間の方にまで適用される様になつて、昔しはゲーテの様に多趣味多方面、極めて人間味の強い人間もゐたのだが、其の後は萬事分業システムとなつて、人間も幾らか機械化され、一人々々の人間はや丶ともすれば馬車馬的に視界の狭い、一方面だけの專門家となる様な傾きを持つて來た。……要するに、ロシヤ人ほどの面白味はないが、萬事に秩序整然たること、また實務上の能率の高きこと丶にかけては、とてもロシヤ人などと同日に語るわけに行かないのだ。即ちロシヤ人の民族性にも、またドイツ人の民族性にも、何れも一長一短がある。さうして、世の中といふものはロシヤ人の様な人間ばかりが揃つてゐたのでは餘りに無秩序となつて住み難く、さりとてまた、ドイツ人の様な人間ばかりでやつたのでは（勿論人によつての好き々々はあらうが）餘りに人生が機械化され過ぎて面白くない。其處で、自然と、然らば兩方が一緒になつて有無相通じ、互ひに力を協せてやつて行つたらだうか、と云ふ問題になる。

實驗遺傳學の方で、いろ／＼な動物や植物の異種属の間に交配を行つて其の結果を調べて見ると、其の兩親たる種類の組み合せ方によつて、兩親の何れよりも遙かに優秀なる子孫の出來る事もあれば、或ひはまた之に反し、まるでなつて居らぬ片輪者の出來ることもある。生物界に於けるさういふ現象の理由や説明は茲には省略すること丶して、今、ロシヤ民族とドイツ民族との一致協力といふ事を考へ、合同、融和といふ問題を察して見るのに、一人の人間と一人の人間とが一緒になつて、其の血が混じた場合にも、または假りに血を混ずる事なく、單にさう云ふ人間達が相會つて一つの社會、團を作つた場合の事を考へてみても、實際に於て、大抵其の結果が良好であるもの丶様に感ぜられるし、また其れがだうも自然の理屈にも、合つてゐる様に思はれる。さうして、實際、昔のロシヤでは、さう云ふ兩民族間の合同、協力といふ事が、何等の弊害をも伴はずなく、新しき文明の建設の爲めに行はれてゐたのである。其の頃はロシヤの全國土がドイツの移住民に對して只單に開放されてゐたといふばかりではなく、ロシヤ人はいつでも歡んで、其れ等ドイツからの兄弟を迎へてゐたのだつた。不幸にして其の相互扶助的の精神がすたれ、ドイツ人が自國本位となり、近世に至るまで續いた帝國主義領土侵略主義の色彩を次第に交へて來たのは、丁度十九世紀の半頃、彼の鐵血宰相といはれたビスマークの軍閥政治が始まつた頃からの事である。

一八六二年、軍備擴張案の不成立の爲め辭職したるホーヘンローヘ公の後を受けて、ビスマルクがパリ駐劄の全權公使から

首相となつて其の任に就くや、彼れは直ちに豫算委員會の席上に於て、靜かに世界の大勢に關する自分の意見を開陳し、大いに議會の態度を非難攻撃して、軍備擴張の一日も忽せにす可からざる事を痛論し「プロシヤが全ドイツの爲めに爲す可き最大の義務は今、諸君等が努力して居られる樣な自由主義の普及ではなくて、實に國力の充實といふことである、我々ドイツ人が此の最大急務を怠つてゐた爲めに、從來、乘ず可き好機の多かつたにも拘らずいつも其れを逸してしまつたのは實に遺憾の極みではないか。故にもし苟も、將に來らむとする次ぎの好機を利用して一大飛躍を試みむと欲するならば必ずや先づ實力の養成に最も努力を盡さねばならぬ……」と云つて所謂「鐵と血」との國是方針を高唱したのであつたが、然かも衆議院に於ける投票の結果は大多數を以て軍備擴張案、及び聯隊增設に對する臨時費の否決といふ事に終つてゐる。之れ等の史實によつて考へても、後年「軍國主義の權化」として世界から爪彈きさるゝに至つた彼のドイツ帝國も、僅かに半世紀の昔たる一八六〇年代には。まだ此の如く自由思想の極めて盛んなる國であつたことがわかる。此の自由主義を征服して、ドイツを武斷的の侵略國と化し、"Deutschland über Alles" を標語として大いに國威發揚主義を國民の心に吹き込む事に成功したのは主として、彼れビスマルクの行つた高壓的專制政治の「賜物」である。誰れも知る如く彼れは曾て露都にも全權公使として駐在し大いに辣腕を振つた事があるので、よくロシヤの乘ず可き弱點や短所をも洞察して居つた、さうして其の後今次の世界大戰に至るまで、いつもプロシヤの軍閥的爲政者が夢みてをつた「ウラルまでをドイツに」といふ遠大なる侵略の計は實に其の時以來、ビスマルクによつて遺されて行つたものだつたのである。

兎に角、ロシヤは西歐文明と云ふ立場から見れば我々の日本と同じく他よりも後れて生れた後進國であつたし、殊に近年に至つて、其の物質的文明が縱々一切のものを機械と秩序との力によつて遂行する樣に發達して來てからは、元來其の方が餘り御得意でないロシヤ人は、自然、國内に多くのドイツ人を招致して、其れ等の協力を求め、まだ其れ等の人々から技術を傳授してもらふ必要が增して來たのであつたけれども、然し不幸にして、一と度び、ビスマルクによつて宣傳せられたる帝國主義に共鳴し「相互扶助」「共存」の大義を忘れて、あくまでも自分等が「カイザーの國」を本位とし初めた之れ等、後年に於けるドイツからの移住者は、もうロシヤ民族に取つて決して助け合ふ爲めの朋友や兄弟ではなくて、實に彼れ等の國を食ひに來た寄生蟲だつたのである。さうして其れ等の寄生蟲達は皆、ペル

リンの政府や參謀本部によつて統一され、其の中央官廳の意志に從ひ、非常に綿密なる考慮を費して組み立てられた一定のシステムに基いて、ロシアを食ひ、ロシヤ人を食ひ、力を協せて彼れ等が終局の理想だつた「ウラルまでをドイツへ」の一刻も早き實現に向つて努力したのであつた。彼れ等はたとひロシヤに歸化して表面上ロシヤの人間となりすましたる場合にも、カイザーの爲めになる二重國籍なる制度によつて依然として忠良なるカイザーの臣下であつた。まう、かうなつて來ると、彼れ等は、ロシヤの人間が彼れ等の入國を歡迎すまいと、また迷惑がらうと、其んな事には一向頓着なく、甲は乙を呼び、丙は丁を招き、同類同族相引き合つて、遠慮もなくロシヤのお臟六腑の中に共棲みを續けて來たのだ。だからロシヤにはいつて、ロシヤ人となつたドイツ系の人間、即ち所謂「ルスキイ、ニィエメツ」なる人間の間には一般的に論じて、二つの大きな區別のあることを知つて置かなければならない。一つはビスマルクなどの出て來たよりも更らに古い時代にロシヤにはいつて來て、既に完全にロシヤ人化してしまつたドイツ系の人間で、之れ等の多くのものには、實際多少ロシヤの血が混つてゐるのが通則であるし、また宗教なども大抵は新教を棄てゝギリシヤ正教に改宗してをつた樣なわけであつたから、たとひ名だけは依然ドイツ系のものたるを裝してをつたにしても、既にロシヤ人の心を心とし、純粹なるロシヤ人と同じく、後年輸入して來たドイツ人を惡む事も甚だしく、今度の戰爭などに際しては奮つて、ドイツ討伐の爲めに力を盡した。之れに反し、主としてビスマルクの出現後、新たなる主義綱領を提げてロシヤに入つて來た第二の部類に屬する人間達は、まうはじめからロシヤ人の長所を模倣したり、其れに親しまうと云ふ考へなどはなく、彼れ等は平生ロシヤ人の事を「ルスキイ、スヴィンニイ」(「ロシヤの豚共」)と罵り、風俗をも習慣をも、言語をも宗教をもみな堅く在來の自分等のものを固守して、たとひ國籍だけは便宜上ロシヤのものを受け入れたにしても、自分等同類のドイツ人ばかりでいつも一團をなして生活してゐたのである。男子の方は、何分外に出て働かなければならぬので、たとひはげしいアクセント附きではあつても兎に角ロシヤ語をもはなすのであつたが、家にばかり引き籠つてゐる所謂ドイツ流の「ハウス、フラウ」達に至つては、何十年とロシヤに住んだ後、まだ碌にロシヤ語のはなせぬ樣な連中が決して稀れでなかつた。かう云ふ連中の息子達が今度の戰爭が勃發した時「此のまゝロシヤに殘つて志願兵とならうか? それともすぐにドイツに歸つて志願兵とならうか?」と暫く思ひわづらつた手合ひ

たのだ。

もし彼れ等が才能上の實力を比較して見、彼れ等がロシヤに於て成し遂げた建設的仕事の總量を比較して見たら、或ひは後年入つて來た此れ等第二種のドイツ系移住者の方が、昔しやつて來た第一種の人間達よりも、遙かに勝つてゐたかもしれない、然し乍ら、其れ等の仕事がロシヤ國民に對して持つた意義と云ふものを考へる時、我々は其れが殆どまるで正反對のものであつた事を認めざるを得ない。一つの方はたとひ其の總量が小さかつたにせよ、兎も角も其れ等の仕事はプラスの性質のもであり、ロシヤ國民との共同生活、共同文明の建設の爲めになされたのであつたが、第二のものは、其の働きが大きければ大きかつた程、其れだけ、ロシヤ國民の福祉、其の順當なる文化的發達といふ事の爲めにはマイナスの方にも餘計に作用して、寧ろ障害の方が大きかつた。何となれば此れ等第二期の移住者達は、西欧文明に於て彼れ等の後輩であり弟であつた所のロシヤ民族を開發し指導せんが爲めに來たのではなくて、最初から其の國土に於て自分等自らは十二分なる利潤を味ひ乍ら、其の一度び獲得したる優越なる地位、有利なる特權を永久に確保し行かむが爲め、あらゆる方策を講じて、ロシヤ民族自身の物質的向上、併びに精神的の發達を出來るだけ阻止せむと努めたのであつたから。さうして此の點に於て、彼れ等は、動機や目的こそ異へ、同じ様な希望を持つてゐたロマノフ朝の宮廷と其の官僚政府に大なる身方を見付けて、いつも其れと行動を共にしたのである。以上の如き事情が即ち、元來平和主義者である有識階級をはじめとし、ロシヤ國民中の苟も自覺ある分子は、其の商人たると勞働者たるとを問はず、ドイツの軍國政府及びドイツ人なるものを自分等の仇敵であると信じ、進んで戰爭を主張した所以であり、また我々が實際にドイツの罪を責めねばならぬ所以でもある。

三月革命が起つて首尾よく其の專制的だつた官僚政府は倒れ、政權が主として、以前の十月黨員(オクテアブリスト)或ひはKC黨員の如き穩健なる民主々義者の手に落ちた時、殊にリヴォフ内閣の組織と同時に、親英主義を以て知られたるミリューコフが外相の椅子を占めて、熱心に戰爭の繼續を説き、當時の國民多數の意志を代表して、「一度び革命戰に勝利の月桂冠を克ち得たる我等自由の露國民は今より捲土重來の勢ひを以て徹底的にドイツの軍國主義、侵略主義と戰はむとす、我等は我等の親愛なる聯合諸國とよく一致協力して、世界永久の平和の爲めに心より呪ふべき獨墺の勢力を完全に屈服し終らざる間は、決して我等が正義の戟を收めざる可し……」と云ふ様な調子の宣言を内外に發布した頃

には如何にイギリス、フランスの當局者等が、相好を崩して喜んだことであつたか。

リヴォフ、グチコフ、ミリューコフ……等の穩健派が其の後間もなく國民の熱望、信賴を失つて、世はケレンスキイの時代となつたが彼れは徒らに理想を追ふに急にして、幾多の矛盾、自家撞着的の政策を行つた爲め、國内の秩序は暫くの間に大に紛亂し、また同時に戰線に於ても軍隊の戰意俄かに衰へて、戰鬪力の著しき失墜を來たしたのであつた。然し其れにも拘らず、少くも表面に現れ、人の口に上つた言葉のうへでは、ロシヤ國民一般の意嚮は、其の頃でもまだ、戰爭の繼續といふ事であつたのだ。メンシヴィキの頭目プレハーノフが歸つて來たけれども彼れもやはりロシヤ民主々義の擁護の爲めには對獨戰爭の已むを得ざる事を告白し、機關紙 "Edinstvo" の誌上で其の續行を說いた。シベリアの牢獄から歸つて來た、所謂「革命のお祖母さん」ブレシュコ・ブレシュコヴスカヤ老女史、また全じくロンドンから長年の流謫生活を終へて凱旋將軍の如く、解放されたる祖國に還つて來たアナルヒストのクロポトキン翁なども、やはり戰爭の續行を主張した人達の仲間であつた。(もし其の頃のク翁がさう云ふ說を主張せずレーニン一派の如く、徹底的の國際主義平和主義無抵抗主義を持して居る人間であつたと知つたら、勿論イギリスの政府がさう容易く彼れのロシヤ入りを許可したはづがない。)

さう云ふ人達の間にあつて、最初から終始一貫「全ての戰線に亘る戰鬪行爲の卽時終結」といふ事を理想とし、其の主義を眞甲に振りかざして奮鬪してゐたのは今日政權を握つてゐるボルシェヴィキの連中のみであつた。レーニン、ジノヴィエフ、以下三十餘名の同志が、故國に三月革命の勃發後、其の亡命中であつた瑞西から、歸心矢の如く、直ちに露都に歸らむとして、然かも英佛諸國等の防害に會つて歸ることが出來ず、亂暴にも當時の敵國だつたドイツ政府に交涉し、ドイツを橫斷してスカンヂナヴィアに出、フィンランドを經て歸國したと云ふはなしは一般によく知れわたつてゐることであるが、彼れの歸國に關聯し、其の頃ロシヤで言ひふらされてゐた諸說を、少しく玆に書いて見ると、先づ「レーニンはドイツを橫切つて歸る途中、ベルリンに於てドイツの政府當局者と會見し、歸國後非戰論の鼓吹、單獨講和の宣傳に對する費用として莫大なる資金をもらつて來たのだ」と評判され、一部の人々は更らに其の細目にまでも立ち入つて「其の時ドイツの參謀本部でも、實は說が二つに分れ、一部の人達は、ロシヤにレーニンを放つ事は延いてドイツ自身にも赤色の危險が及ぶ可能性を有すと云つ

て、其の餘りに强烈なる藥品であることを警告したのであつたけれども、其の時、プレハーノフ一派のメンシヴィキ等が、戰爭繼續に贊成を表したことが知れてゐたので、他に代る可き藥品がなく、已むを得ずレーニンを利用することにしたのだ」と說き、或ひはまた「ドイツは戰時中、特にロシヤ紙幣の贋造をやる爲めに一工場を設けてゐたので、今度レーニンがもらつて携へ歸つた札などもみな獨逸製の贋せ札のみである」などゝ云ふ樣な事をも云ひ、……要するに彼れ等の輿論は「獨探!!」「賣國奴!!」と云ふ如き罵詈讒謗の叫びによつて迎へられたのであつた。既に其れ以前から、ボルシェヴィキの連中は、石島(カメンノオストロヴヽキイ)街の一番端に近く建てられてゐた、ニコライ二世の寵妓クセシンスカヤの邸宅を占領して自分等の本部としてゐたのであつたが、レーニンも直ちに此處を根城として其の主義の宣傳に努めた。其の主義といふのは要するに一、には「ブルジョイを倒せ!」と云ふことであり、また二には「戰爭を中止せよ!」と云ふことだつたのだ。

筆者は丁度其の當時、其の場處から程遠からぬ同じ石島街の二六番地に住んでゐたので、よく散步がてら、時には一人で、また時には大使館の上田仙太郎氏などゝ、樣子を見物に出かけたものであつたが、其のクセシンスカヤの邸の門前からニィエヴァの岸にまで達するトロイツキイの廣場は、いつもまるでお祭りの樣な人だかりで、門の傍らにある椽臺とも云ふ可きものを其のまゝの演壇として、入れ替り、立ち替り、朝から晩まで、いろ〳〵の辯士が現れては各自に說を述べて居た。多くは無造作にロシヤ流のルバシカを着てゐる樣な純然たる筋肉勞働者風の人達であつたが、何れも實に堂々たる演說振りで、彼れ等が雄辯の才には眞に驚くの外なかつた。(レーニン自身は、何分まだ、其の當時餘りに世間の反感が强かつたので、萬一、身に危險の及ばむ事を恐れたのであるか、或ひは他にもつと重大なる要件が多くて其の發行に追はれてゐたのか、不幸にして自分の行つた時には一度も演壇に顏を出さなかつた)。廣場は大きいし頭の上は青天井であるし、且つまた辯士の聲はみんな嗄れ切つてゐるので、門の近くに立つてゐる數百人の人々の外には、其のはなしをよくはつきりと聽き取る事が出來ない。然し、其の演說の聲のきゝ取れぬ處には、また廣場の到る處に各々、二人乃至四五人の人間を中心として數十人づゝの聽衆が人垣を作つてゐるので、聽衆は一つの人垣から他の人垣へと、次第に步を移し乍ら、其のうち自分の興味を引く樣な議論の行はれてゐる處に來れば足を留めてまんなかで言ひ交されてをる議論に耳を傾けもし、また意見があれば自分も中に割り込んで行つて、討論者の

仲間に加はるのである。地主らしい鷹揚な紳士達もをれば、田舎から飛び出して來たばかりであるらしい百姓顔も見える、金のある商人らしい男もをれば、政變で地位を失つた役人らしいのも居り、さうかと思へば、まう一廉のスキルド、レーボアらしい手合ひ、乃至はボルシェヴィキの院外團とでも云ふ様なものが混つてゐ、其の他將校あり、學校の先生らしいのがあり、戰線から脱走して來たらしい兵卒あり、毛皮の外套に包まれた夫人令孃あり、勞働者のかみさんらしいのがあり、また大學生中學生あり……と云つた様なわけで、其處には實に社會のあらゆる階級からの代表者が、自然に集まつて來てゐ、あらゆる種類の職業が代表されてゐるのであつた。自分の様な男も居れば、聯合國の武官らしいのももぐり込んでゐる、支那人の女や子供は人混みの中を押しくゞつて紙製の蝶々や風車を賣つて歩き、大道商人の婆さんは。堅麵麭や、林檎や梨を並べて賣つてゐた。

最初の議論の種子は、演壇の上で自分の意見を述べてゐるボルシェヴィキ辯士の文句にはじまる。例へば演說をきいてゐた一人の有産階級らしいのが「馬鹿云つちやいけない！ 其んな事があつてたまるものか!!」と私語するのを、傍らに立つてゐた勞働者がきゝ「いや、實際あの同志の云ふ事がほんとだ」と反駁して、其れを機として二人の間に烈しい議論が開始される。其の中にまわりに集つた聽衆の中からゲオルギー勳功章を下げた若い士官が口を出して、「自分は今朝戰線から歸隊の命を受けてやつて來たばかりであるが……」と云つて、戰線に於ける事情を述べて兩人の議論に批評を加へると、またそれを聽いてゐた勞働者のかみさんらしいのが堂々と反對を唱へて自分の意見を吐く……と云つた様な調子なのだ。すべての階級、すべての職業に屬する人々が、互ひに顏と顏とを向ひ合はせ、自分等の智識、經驗のあらむ限りを曝け出して、互ひに他を說服せむとして議論を鬪はす。討論者の數が多くなれば、其れにまた自然と二組みに別れて、各々別々なる人垣きの中心となる。斯くして其の當時、ボルシェヴィキ本部の門前にあつた此の大廣場は、或る意味に於て、自然に出現し、組織せられた一つの國會議事場であつたと云つてもよい。恰も、過ぎ昔、ノヴゴロドの市などに最も著しく發達してゐた彼の「ヴィエッチエ」なる市民會議の如く、其處では市民の一人々々がみな直接に自分の意見を述べて、議論を鬪はし得る平等の權利を持てゐた。男も女も、老人も中學生もみなムキになつて自分等の信ずる考へを言ひ合つてゐた。只でさへ響きの強いロシヤの言葉に情熱の熱誠をこめ、口角泡を飛ばして相對して居る二人の人間を

と、我々日本人であつたら、まう疾くの昔しに腕力沙汰に及んで居るだらうと思はれる程の眞劍さであるけれども、彼れ等ロシヤ人は、たとひ兩眼は血走り、呼吸は迫り、顏色が蒼白になるまで、互ひに激して來た時でさへ決して手を擧げたり、唾を吐いたりする樣な事はない。最下級の勞働者に至るまで（酒を吞んでをらぬ限り）其の議論する態度たるや何處までも極めて紳士的である。

ボルシェヴィキ辯士の演說が皮切りの役を勤めて、廣場の上で人々の間に鬪はれた議論の題目はまづ主として次ぎの樣な事柄であつたのだ。「士官と兵卒との區別撤廢の可否」、「ケレンスキイが一度び廢止して置き乍ら後に再び復舊せしめた死刑制度の事」、「戰地に於ける獨墺軍との交歡（ブラタニエ）」「農民に對する土地の分配」、「無併合、無賠償の問題」、「講和問題」「軍隊の解散」」「現在の政府の施設の可否」……而して其の當時のボルシェヴィキ側の人間達は堅く次ぎの樣な事を主張してゐたのだ。「士官と兵卒との階級制度は素より撤廢す可し」「また死刑は如何なる事情ある場合にも非常なる蠻行であるから、一刻も早く再び其れを廢止せねばならぬ」、「戰爭といふものは只、軍閥や資本家に取つてのみ必要なのであつて、其れに勝つと敗くるとに論なく、無產、賤民階級はいつでも只其れによつて苦しみを増されるばかりである、だから、勞働者、兵卒及び農民の爲である今日のロシヤは、萬國の無產階級者の爲めに結局百害あつて益なき此の戰爭を中止せしめが爲め、あらゆる方法を講じて努力せねばならぬ」、「我等は衆に先んじて、平和は無併合、無賠償、併びに民族自決の主意に基かねばならぬといふことを豫め內外に宣明し、要請す可し」「獨墺……等をはじめ、凡て軍國主義、侵略主義は、國の爲政者及び資本家の罪であつて、一般の國民に罪はない。獨墺の無產階級たる勞働者及び兵士等も皆我々の同僚（タワーリシチ）であり兄弟（ブラーチア）である。彼れ等は今こそまだ、カイザア政府の壓迫の下にあつて本意ならずも我等と戰ふ可く戰場に出て居るが、然し、早晩彼れ等もまた我等の示した例に倣ひ、カイザア及び其の一味の軍閥を逐ふて國の政權を掌握するであらう。我々は其れ等兄弟の自らを解放せむとする努力に對し出來る丈けの力を貸してやらねばならぬ。だから全ての戰線に亘つて、まう彈丸を飛ばし兄弟互ひに相殺し合ふ事を罷めよ、而して其れに代ふるにロシヤの兵士と獨墺の兵士との間の盛んなる交歡を以てせよ」「我等は早速交戰國の全てに對し、殊に其れ等諸國の無產階級に對し、即時に戰鬪行爲を中止す可き事を勸告す可きであるが、其れに先立ち、我等自身まづ獨墺と休戰し、同時に一般講和の主義綱領に關する協定を遂ぐ可きである。」

「絶對的に平和を尊重し戰爭を罪惡なりとする我等に取つて軍隊は既に無用である。兵士は須らく、其の銃劍を棄て、各自の郷土に歸り、平和なる土地の耕作、其の他の職務に復歸す可きである。」「總ての土地は其の從來の地主より之れを國家に沒收したる上、自ら土地を耕す農民全部の共有財產として附與す可きものとす」「只然し乍ら、以上の如き理想的諸計畫を遺憾なく遂行し實現せむが爲めには、我等は是非とも今なほ現に我等の上に君臨しつゝある、而して依然自己の私產併びに特權に執著して徹底的態度をとり得ざるブルジュアの政府を轉覆して、國土と政權との全てを、我等勞、農、兵、三種の無產階級者の手に掌握してしまはねばならぬ」……。

之れ等ボルシェヴィキの連中が、まだ政權を獲得しなかつた其の當時、自らの理想とし目的としてゐた所のものが、其の根本に於て如何なる誤りを含んで居たかと云ふ事は、今玆に論ずる必要がない。只、其れが徹頭徹尾、啻にロシヤ一國內のみに止まらず、世界全體に亘る終局の平和といふ事を念としてゐた事だけは、何人も認め得る事だらうと思ふ。其れは所謂「社會主義」を極端まで持つて行つたものであり、さうして彼のラッセルなどが、地上に「眞の文明」を建設せむが爲めに絶對に必要であるといつて提唱してをる（上段頁參照）私有財產と國民主義との廢止を實際忠實に行はむとしたものである、然るに、如何にロシヤだけが、ラッセルの如き改造論者などから考へて實に隨喜の涙がこぼれることだらうと思はれる樣な、さういふ理想的の制度を實際眼の前に採用し樣としても、其れを取り卷く、まわりの國々に今なほ厳然と存在して居る民族不平等の事實、また其れに附隨して起る各國の所有領土擴張慾といふものは他國の事であるにも拘らず、ロシヤに只暫しの安靜を與へて、其の平和的理想實現の基礎を置くことをさへ許さず、既に幾度びか東西南北より横槍を突き入れて、其の內部を攪亂し以て其の順當なる發達を出來得る限り阻止せむと努め（最初ドイツの武力的威嚇、また其の後は英、佛、日、米等による幾多の反革命軍やポーランド軍の援助）實は既に今日に於てすら其の理想を半殺しとなし、其の制度が[illegible]のものとしてしまつたわけであるから、一時ロシヤを出發點として全世界に感化を及ぼし得るかの如くに見えた人種平等、領土開放の平和的思想も（各國の內政は勿論各民族の意に從つて如何なる體裁が維持さるとも可なり）或ひは再び彗星の如く消え失せて世は從前にも勝る烈しく弱肉強食界を現出する樣になるのかも知れないが、自分はあくまでも、我々の祖國たる日本の天職といふものを萬人に對し地球の全表面を開放し、其の到る處に各民族をして各々

の長所を持ち寄らせ、自分達もまた彼れ等と共々に世界といふものゝ全部を一つの共有の家の如くに見て其處で歐亞文明を同化し融合する事によつて作り出したる我等の新文明を他の人々にも頒ち與へ様とする事であると信ずる。愚なる事に徳川二百年の間鎖國の蒲團をかぶつて太平の夢を見てゐた爲め、今はまだ不幸にして其んな大きな事を云ひ出すだけの押出しも實力も充分にないのが殘念であるけれども、徒らに既往は問はず、今後一方に於ては國内の組織制度を我々日本民族にとつて最も適切であつて然かも最も大なる能率の出る様に革新し改善し、其の制度の下に擧國一致して日夜奮勵力行すると同時に、他方に於てはまた我々の理想に心からの共鳴を感ずる友人達を世界の各地に一人でも多く見付けて行かねばならない。さうして我々日本人が膽玉を小さくして些々たる領土慾などを出さゞる限り、また今迄の過去に於けるが如く主として醜業婦や、乃至は一攫千金を夢見る人足、山師などばかりを送り出すのではなくて、眞に同胞の間にても優秀なる人物を選んで其れを先頭とし、「共存」と「相互扶助」の精神を同持して入つた行つたならば、恐らく今日のところでは、世界のどこの土地に於てよりも、我々は、革命後のロシヤに（一見した所では我々の帝王崇敬主義と相容れざる様に見えるかも知れぬが之れは説明さへすれば向ふでもすぐに納得が行くのであつて）最も多数の頼もしい協力者を發見するだらう事を信ずる。一方に大連會議開かれ、他方にまた太平洋會議開かれむとする時、筆者は特に此の事を記して敬愛する同胞諸士の注意を促す責任のある様に感ずる次第である。仍、、いま試みに、筆者が兩會議に對し一日本人として、自ら「善し」と信ずる主義方針並びに希望を宣明して見れば、

一　ロシヤを除外して世界の平和や戰備の縮小などを論じても要するに結局、大した効果は期待出來ぬ。其れ故、互ひに隔意なく議論を闘はせて見るだけでもよいから、いつまでもペトロフの如き二三流の人物のみを相手にせず、レーニン、トロツキイ級の袖領株を招いて會議に列席させて見るがよい。

二　たとひ膠州灣或ひは樺太の北半の如きものと雖ども日本は「新領土の獲得」などゝ云ふケチな慾望を出す可きでない。只人種平等の大義に基き、何處までも、「門戸開放」「機會均等」主義を高調す可し。「特殊利權」などいふものは、多少は地理的の關係にもよるが、主としては我々と相手の民族との間の「互ひの心の打ちとけ方、」「共鳴の深さ」による結果でなければならぬ。共に「世界の解放」「新文明の建設」を理想としての協力、共存の主意に基かなければばうそである。

（五ヶ月の旅を終へて、父支那より歸りたる日の翌朝、兎も角も一段落をつけて、此の稿の筆を擱く）

雲州家に遺る古美術を觀るの記

森口多里

(一)

「常眞居士今泉雄作」と刷つてある名刺の裏をかへしてみると、「一名彰字有常號文峰又也軒」と十二箇の文字が二行に列んでゐた。ひとりで五つも六つも名前を持つてゐる人は、私のやうな若い者にとつては可成り珍らしいので、私は、二等待合室の明るい電燈の光を眞當面に受けてゐる常眞居士のお顏を、そツと傍から偸み見た。そして私は、居士の鼻の下のお髭が未だ胡麻鹽と呼ばれる程度のものでありながら、長く垂れた顎髯の方は、黑絽の紋付羽織の下に召して居られる白絣の單衣と殆んど其の色を同じくしてゐることに氣がついた。それから、壯年者を凌ぐほどのお顏の血色や如何にも健かな肩の丸みなどを見てゐると、私は自分の細い弱々しい身體が段々恥しくなつてきた、で、其の妙に物恥しい心持を何んとかして紛らかさうと思つて焦慮しかけたとき、常眞居士が私を顧みて口を開かれた。

――わしが明治九年に佛蘭西に渡つたときには、あちらには、例の旅行案内といふやつがちやんと出來てゐて、日本などには何時になつたらこんな便利なものが出來るやうになることかと思つたものが、さて今になつてみると、日本にも立派な旅行案内が出來て……

斯ういふ回想談を聞いてゐるうちに、私は、何の目的で斯うして東京驛の待合室の長椅子にかけてゐるのか分らなくなりかけてきた。明治九年と云へば、其の時から十五六年も經つて、ヤツと私が此の世の日の光に觸れたことになる。といふやうな事を私は考へてゐた。そして居士が來途の支那團扇で風を呼びながら物語られる明治初期の不思議な雰圍氣に、私の心は段々と深く惹かれて行つた。しかし一緒に旅をする人々の集るに從つて、いつしか話題の中心は、松平不昧公の逸話や出雲の國の事などに移つて行つたので、斯うして汽車を待つてゐる目的が漸くはつきりと意識されてきた。何故といふに、私共は、これ

からはるばる雲州の松江まで下つて、其の地の松平家に傳はる寶器の數々を拜觀しようといふのだからである。

寶器と云つても、主として茶道の爲めの名器である。そして茶道とか茶器とかいふものは、當年卅歲の私にとつては、明治初期の人情世態と同じやうに奇妙な別世界である。茶碗の鑑賞には七ヶ所の肝どころを吟味しなければならぬといふやうな事を教へられても、なかなか其んな表面的な智識だけでは此の別世界の神秘に觸くことも出來ない。其の神秘の扉を開くためには、私などには到底知ることも出來ない一種特殊のカルテュアとセンシビリティーとを具備してゐなければならないのである。今となつて俄かに皮相の智識を仕入れてみたところで間に合ふわけのものではない。寧ろ赤裸々な一個純眞のストレンヂアとして出向いた方が、案外な扉口を見つける僥倖に出會ふことになるかもしれないのである。茶道起つて既に幾百年、名ある茶入にしろ茶碗にしろ、みづから斯道の通人を以て任ずる諸の鼻の先で有り來たりの讃嘆の聲を聞かせられることには、相當に飽きてゐることであらう、されば天下の名器と雖も、時折は私のやうな全然の素人の感受性によつて、稚純な處女的鑑賞を受けるのを、必ずしも拒まないのみか、寧ろ樂しみにして待つてゐてくれるにちがひない。——といふやうな獨り合點の事

を考へながらも、私は、何んとなく、是れからいづくとも知れぬ仙鄕へでも連れて行かれるやうな、不安な期待と樂しい好奇心との交錯する心持になるのであつた。しかしながら、私共一行十餘名の團長格であるところの當員居士の老ひて而も健かなお身側に近づき、其の豐富で快活な座談を聞いてゐると、何故ともなく、私共の旅が穩かな幸福を惠まれてゐるやうな氣がするのであつた。そして事實に於て、私は祖父の手にひかれて見知らぬ道を行く孫であつた。一行の滯留すべき松江の町の出身で、一行の案內役であるところのN君とM君とを除けば、他は、七十餘歲の團長、六拾歲の「香蝶仙生」(正木東京美術學校長)を始めとして、すべて四十歲の所謂危險年齡を通過した人々であつた。それ故に其等の人々に較べて獨り餘りに年の少ない私は、此のやうな場合に於ける小心翼々たる後輩の心理をみづから可笑しく意識しながらも、また他面に於ては、手をひかれて行く者の安易な心境をひそかに樂しむことが出來たのであつた。

私は、松平家秘藏の寶器を愈々拜觀するに至るまでの過程を、もツと長く精しく書かなければならない。何故といふに、電車か自働車に乘つて新聞一枚讀み終るほどの時間も費さずに兩國橋際の美術倶樂部に着き、市會議員が市役所の階段を上る

ときのやうた顔をして會場にはいり、列べられてある入札品を無雜作にひねくりまわしたり眺めたりする事に慣れた人達に、私共の今度の拜觀が、いかに長い道程と、いかに面倒な手續と、いかに敬々しい儀禮とを要したかといふ事を知つて貰ひたいからである。そして拜觀の際の印象を書く前に、其處に至るまでの過程を一の「序曲」として叙して行くことが、古名器や其の所藏者の好意に對する禮であらうと思ふのである。

（二）

日本海の水の色を始めて見るといふ事は、私にとつては心の躍るやうな期待であつた。京都から松江までの汽車の旅は、この裏日本の海光によつて慰められるといふ事を、私は豫ねて聞いてゐたのである。しかし關東から南の事は殆んど知らず、また地理を調べてから旅に出るほど心がけの殊勝な私ではないから、汽車が京都の驛を出さへすれば、間もなく窓から海が見られるやうな氣がして、恰度明るい野原に放たれた駒馬のやうに、そは〱するのであつた。是までは絕間なく動搖する狹い腰掛の上で皆な離れ々々に坐睡半醒の息苦しい一夜を送つて來たのであるが、山陰線に乘換へてからは、一同一室に團欒談笑して行くのであるから、解放された者の晴れやかな喜びを感じたのは、決して私ひいとりではなかつた。

「先づ大和尚の座席を決めなければ……」と香蝶仙生が早速提言に及ばれる。

「始めていらした方は、そちら側がいゝでせう、海が見えますから、」と案內役のN君が智慧をつけてくれる。

そこで所謂大和尚即ち當眞居士をば西側の腰掛の中央に據ゑ奉つて、その左右と、反對側の腰掛とに、一行十餘名が並んで、愈々山陰線十二時間の汽車の旅が始まつたのである。

「わしが未だ十七八の時だつたが、」と當眞居士は車中の雜談を續けられる。「わしよりも五つか六つ年上の友達があつて、それがまた大へん茶道に熱心な男で……。」

或日その年上の友達が當時未だ廿歲に滿たなかつた當眞居士を誘ふて隅田川に舟を泛べた。昔から、隅田川の眞中の流れの水でたてたお茶は特別に佳い味がするものだと言ひ傳へられてゐるが、その年上の友達の意見によれば、「隅田川の眞中の流れの水」といふのは、昔から信じられてゐるやうな、兩岸を起點とした中央の流れの水を意味するのではなく、實際は、立體的の意味で、即ち、川底と水面との恰度中間頃の水の事だといふのである。この水なれば、底の濁りからも表面の汚れからも遠ざかつてゐるので極めて淸澄だといふのである。そこで此の

見を實際に證據立てるために、さてこそ一日常眞居士を誘ふて隅田川に舟を泛べたのである。それから其の友雄は舟を停めて苦心の新發明にかゝる德利を水中に投ずる。德利には錘がついてゐて水中に沈む。恰度うまく水底と水面との中間頃に沈んだ時に、仕掛けの紐を引つぱる、さうすると德利の蓋が自然と開いて所謂「眞中の流れの水」が一杯にはいる。再び仕掛けによつて蓋が閉ぢる。それを引き上げて注文通りの「眞中の流れの水」で早速舟のなかでお茶をたてゝ、年上の友は頻りに其の味のよいことを賞揚する。そして「逈に違つたものだ、君はどう思ふ。」と常眞居士にもすゝめる。ところが年少の常眞居士には、どうしても其の異常であるべき筈の味が分らない。

「どこがいゝんだか、ちつともわしには分らないので、」と居士は話を續けられる、「あたりまへの水と變らないぢやないかと言ふたら、そんな舌を持つてゐるから駄目なんだと大いに叱られたんだが、いや實に變つた事を思ひつく男でね。」

當代に於ける茶道の宗匠常眞居士も、そのむかしお茶の味が分らないので叱られた事があつたのかと思ふと面白い。ところで、十七歳當時の常眞居士に其の味の分らなかつたのと同じ程度に於て、茶道の傳習的な玄妙味が卅歳の私に分らないのであると思ふと、少なからず面はゆい氣がするのであつた。

溷濁の緩やかに流れる川の向ふ岸に、無數の角柱が束ねられたまゝに薄黑く化石したやうな有名な玄武洞の眺められるところまで來た。汽車の停つたところには、夏の間だけ使はれるのだといふ假小屋のやうな停車場が寂しく小雨に濡れて立てゐた。

間もなく海が現はれた。私には始めての裏日本の海である。

小雨はいつかやんで銀白の光を含む曇り空の下に廣がる海原は、沖に飽くまでも濃い紺青の色を堪え、たれが次第に裾ぼかしになつて、岸に近づくに從つて物悲しい銀鼠色に變る。思ひなしか知らぬけれども、どことなく沈默と瞑想とに引き入れるやうな海の色である。空の光も、水の面を賑はさないで、そのまゝ紺青の浪の底に寂しく吸ひ込まれて行くやうに思はれる。

トンネルの送迎は漸く頻繁なツてくる。停車場の數よりもトンネルの數の方が多いと言はれるだけあつて、海の眺望は忽ち暗黑のスペースによつて切斷される。しかし此の邊の海岸に特有のものであるといふ砂丘の眺めは、うるさいトンネルの送迎を償ふて餘りあるものである。嬰兒の寢息よりも尚柔かい觸覺を與へさうな明るい小麥色の肌をそのまゝ日の光に曝しながら、砂丘は、なだらかな若々しい曲線を描いてのび〳〵と横はる。その裾の方を緑の松の密林が覆ふてゐることもある。そして其の明るい小麥色の肌を益々鮮かに美しく見せるためのやう

に、砂丘の一端からそろ〳〵と紺青の海が現はれる。

海や砂丘にも少し飽きて來た頃、誰れかゞ、常眞居士の腰にさしてある矢立をこッそりと拔きとつて一同の觀覽に供した。それは二股竹を應用して、二本の筆を入れるやうに作つたものであつた。それを品評してゐると、同じやうに二股竹で出來た矢立が「香蝶仙生」の帶の間から取出された。それに附いてゐる小さな印肉入れは、子供の掌の中にも隱れてしまいさうな小さな鐵の角函で、蓋には唐草が銀で象眼されてゐる。どことなくエクゾーティックな感じがするので開いてみると、もとは伊太利か何處かで出來た嗅煙草入れださうである。

「さあ矢立の品評會だ、」と誰れやらが戯談に叫ぶと、其の聲に應ずるやうに、T氏の鞄のなかゝら新たに一本の矢立が現はれる。古い支那製の眞鍮のもので、象徵的な模樣が一面に線刻されてゐる。

今の世の中に十餘人の間から三本も矢立が出るといふ事は、思ひがけないことなので、皆んな興がつてゐると、K氏の手によつて、更にもう一本の矢立が取出された。鐵製銀象眼のもので、筆入は肋骨の形に彫り透かされて、なかの筆が透いて見えるやうになつてゐる。

「せんだつて青森から歸るとき」と常眞居士は言はれる、「寢臺の下に此の矢立を置き忘れてきたので、ボーイに斯うかういふものがある筈だから持つてきて貰ひたいと賴んだら、歸つてきて、どうもさういふものがありませんといふ。無い筈にないと思つて私自身行つて見たら、矢張りあつた。……今のボーイなどといふものは、矢立と云つたところで分らないと見える。」

「もうボーイ位の年頃の者には、全く矢立など見た事の無い者が多いでせう、」と誰れかゞ答へた。

「兒島高徳の話をするとき、小學校の先生は說明に困るだらうになア、」と私は心のなかで呟いた。そして平常硯箱を持つてゐないので、小包を出すときや願書などを書くときに何時も當惑するほど墨や毛筆に緣の無い自分が、斯うして四本の矢立に取卷かれて、長い旅をするのかと思ふと、ひりでに微笑が唇に浮ぶのであつた。

十二時間の汽車の旅は隨分長い。

「まだもう二時間か。」

「長かつたね、」

「日本の國が廣いと思はれるね。」

「ひとり旅だつたら堪らないね、長くて、」

といふやうな言葉が交はされる。

出雲の國にはいつたのは、春雨の霽れかゝつた中の海の水

に對岸の山ふところの一つ家の灯の一筋ちら〱と映ずる時刻であつた。

　松江の停車場には町の有志の人達が出迎へに來て居られた。私共は俥を連ねて末次本町の岩田屋支店に行くことになつた。俥の梶棒が上げられて、暗い廣い通りが目の前に現はれたとき、なんとなく眞實に自分が郷土の無いボヘミアンであるかのやうな淡い哀愁が湧いてきた。茶屋の二階の窓には半裸體の角力が退屈さうに凭れて外を眺めてゐた。空地の前を通たとき、假板塀に幾本も立てられた東京大相撲の幟が、暗い夜の風に寂しく吹かれて居た。

　停車場前の通りを越すと、兩側は急に景氣のよい商家になる、そして左右の店から溢れ出る電燈の光が、街路の中央で交錯し合ふほど。路幅が狹くなる。それ故に明るい。明るいけれども賑かな町である。都會にあつては、夜になると其の街上に別種の活動が現出され、店頭の飾窓（シヨウウヰンドー）も、其の活動と相呼應することによつて始めて存在の意義を高調するものであるが、松江の町の人々は、たとへ其の店に煌々と電燈をつけて帳場の周圍に端座してゐるにしても、眞に夜は夜として靜かに睡る時刻を待つてゐるものゝやうに見える。街上を歩く人影も疎らで、其の人達とても、夜の街の景觀を樂しむために歩いてゐるものゝやうには見えない。そのために明るい華かな店頭の飾窓も、聽衆を失つた歌姫のやうな物足りなさを思はせる。（私も他の時季の他の時刻には都會の夜らしい賑やかが現出されるのかもしれないが、茲では單に到着の夜の印象を述べたに過ぎない。）

　俥は長い木橋を渡る。勾欄には恰好のよい青銅の擬寶珠がついてゐる。橋の左には宍道湖が渺茫とひろがる。湖の水は、此の橋の下で、右手に遙かに延び行く河の水に変るのである。河の岸には「うなぎお料理」の招牌をかゝげた屋形船などが泛んでゐる。河は一里餘の間を東に流れて中の海に通るのである。「妾しや中海あなたは宍道、契り深みを通ふ船、」と安來節に謳はれてゐる船の路は卽ち此の河である。橋は「大橋」と呼ばれて長さ七十七間、「松江大橋小唄で戻りや、沖にのこつた朝の月」または「主を松江の大橋下で、外へそらさぬ白魚網」と安來節に謳はれてゐる。

　旅宿は湖畔にあつた。二階は湖水の眺望を恣にすることが出來た。下の庇に沿ふて藤棚が作られてゐて、其の繁り合ふた葉の間に仄白く狂咲きの花房が浮んでゐる。左に長く黑く大橋の横はるのが見える。藤棚と大橋とを裾として、周圍十一里の湖が南から西へとひろがつてゐる。湖の水は月の無い夜の空を映したまゝ靜かに沈んでゐる。水面に射す向ふ岸の人家の灯は、

恰も拭き磨かれた椽側に映る火影のやうに少しの揺るぎも見せない。神經質な某君の如きは、食事中に、「どぶの香がする」と叫んで鼻をうごめかして忽ち常盤居士から「千里鼻」といふ特稱を與へられたほどである。どぶの香がするほど淀んでもゐないが、とにかく此の湖の水は殆んど少しの波動をも見せないで、恰も黑耀石の大平盤のやうに横はつてゐる。

藤棚の陰になつて見えないが、縁の直ぐ下は遊び舟の發着點になつてゐるらしい。そして空いてゐる舟のなかで、遊んでゐる少女達であらう、聲を揃へて西條八十のカナリヤの唄を歌つてゐる。はるばる山陰道の水都に來て未だ安來節の一くさりをも聞かぬさきに、此の新しい童謠の合唱を聞かされやうとは思ひもかけないことであつた。私は湯あがりの身體を藤椅子に休めて、快いノスタルヂアに浸りながら、少女達の美しい歌聲に耳を傾けた。旅の第一の夜の情緒を、綺麗なカナリヤの唄の旋律で彩つてくれた幼い少女達を、私は寧ろなつかしく思ふた。しかし私の聽覺はやがて黑い湖面の一角から傳はつてくる微かな絃歌の方に惹かれて行つた。絃歌は次第に近づいてくる。そして私は、小さな金鈴のやうに並んだ四つの提灯の光が遠くの湖上をゆるやかに滑つてゐるのを見いだした。すると、いつの間に用意されたものか、一艘の屋形舟が、軒に赤い提灯を吊し並べて、直ぐ足もとの藤棚の陰から、する〳〵と滑り出たのであつた。

（三）

松江に於ける第一の朝を迎へた私共は、天下の名器を蒐集して今の世に傳へてくれた松平不昧公や、其の蒐集品のうちの最も貴重なるものの拜觀を私共に許してくれた松平伯爵家に、深い敬意と感謝とを表したいと思ふて、先づ松平家の廟所を參拜することにした。

廟所は外中原の歡喜山月照寺にある。寺はお維新後燒失してしまつて、廣い方形の土塀だけが小松と茅との生ひ繁るに任せて遺つてゐる。廟墓は藩祖直政公から九代まで、すべて鬱蒼とした山を負ふて石の籬をめぐらし、塔の形の墓石が安置されてゐる。そして入口には其れ〳〵彫刻の意匠を異にする廟門が立つてゐる。最も幽邃な地域を領してゐるのは藩祖直政公の廟墓であらう。其の廟門に導く石敷きの道は、樹立の繁りに天日遮られ、青黑い苔に石の面を封じられて、ともすれば滑らうとする足の下から、古めかしい濕氣の香が湧いてくる。

門は唐破風で、前後の兩破風の下には、各々外側に竹に虎、内側に雲龍が彫られてゐる。欄間の彫刻裝飾は、表が芭蕉

で、裏が棕櫚の葉である。いづれも勁い生き〳〵した手法のものので、どことなく未だ桃山時代の風格をしのばしめるところを持つてゐる。彩色はもとから無かつたのか、それとも消滅したのか、今は分らない。

門をくゞると、境の一杯に繋つてゐる細長い池があつて、小黒い蛙が游いでゐる。池にわたされた短い石の橋を渡ると正面に石の華表が立ち、木柵をめぐらした石壇が築かれてゐる。この壇の上に更に一段高く石で疊んだ壇が設けられ、石の瑞籬をめぐらし、そのなかに二基の石燈籠を前にして五輪塔に似た形の墓石が安置されてゐる。そこには鶏頭の花が赤や黄に疎らに咲いてゐた。

大圓庵即ち不昧公の廟墓の門は、高い石階の上に立つてゐた。矢張り唐破風で、扉には見事な花桐の紋の浮彫が附いてゐる。梁の持送りは、精密な透彫の葡萄唐草が綿綿と連なり絡み合ふておのづから目籠のやうな中空の球を成したもので唯一本の木を彫り抜いて作つたものださうである。

是等の廟門に限らず、此の地方の建築彫刻には優れたものが多い。城山公園の松江神社にしろ、玉作温泉の玉作湯神社にしろ、出雲大社の拜殿や八足門にしろ、其の細部(ディテール)を飾る彫刻は、すべて活氣のある精妙な自然主義的作品で、しかも其の用ゐられた場所に如何にも快適に當てはまつてゐるので、建物をして不自然な虚飾に陷らしめるやうなことはない。

此の地方は明治になつてからは荒川亀齋といふ木彫の名手を出した。私は安來町の郊外宇賀莊の名刹清水寺を訪れて、其の供本堂の入口の軒下を飾つてゐる亀齋の彫刻を見た。それは小島を配した蓮の群落で、もともと古くから存在する建物に後で附け加へた彫刻であるから其の場所に快適に當てはまつてゐないのも無理のない事であるが、それにしても此の彫刻を加へたといふ事は、この建物に何等の効果をも齎らしてゐないのである。此の彫刻と背中合はせになつてゐる所にも亀齋の木彫がある。框を中途で切斷して、屋根裏に長方形の空間を作り、其處に蓮池の水の底に示現する觀世音を鏤刻した板が嵌め込まれてゐる。蓮は浮彫にして、葉脈などは沈彫で表はし、木理を利用して巧みに水の靜かな波動を感じさせ、觀音の御姿は、いかにも絶間なく搖れ動く水を透して拜まれるものゝやうに刻んである。洵に巧妙な手法である。しかし建築彫刻としての第一の條件であるべき「謙譲な自然の効果」を無視してしまつて、寧ろ寫實的巧技の誇示に陷つてゐるところがある。殊に、構造上自然に生じた空間を利用したのではなく、框を切斷して無理に空間を作つたことなども、不快を覺えさせる。私は此の彫刻を

見たとき、建築の一部分とはどうしても感じないで寧ろ堂内に矢田にかけられた繪馬の一つを見るやうな氣がした。それにつけても、前に舉げた廟門や神社などに於ける無名の工匠の謙譲なそして協和的な努力の効果は、今の世に於ては容易に求めることの出來ない寶であると言はなければなるまい。

彼等は無名に安んじた。ロダンは「カテドラルの建造者達が自分の製作に名を書かなかつたのは、丁度今日の勞働者が自分の造つた道路に名を書かないのと同じです、」と言ふたが、彼等も亦歐羅巴中世の工匠と同じやうに製作に其の名を誌さなかつた。唯だ或る場合に二三の者の名が人の目につかない棟札に書かれたに過ぎなかつた。然し彼等とても自己の創作に對する愛と誇りと執着とに於ては今の世の藝術家と變りが無い。そして彼等が時として或る人知れぬ方法によつて製作に其の名を誌した事もあつたといふ證據を、私共は偶然月照寺の廟門に於て發見したのである。

松平家四代の源林院の廟門をくゞらうとして、ふと私は扉の金具の取れた跡に一列の文字を見いだした。始めは誰れも無意味な樂書だらう位に思つたらしかつたが、よく見ると、それは此の門を作つた工匠達が、自分等の名を人知れず記念するために金具の下に墨書して置いたものであることが分つた。「寶永四年亥八月二十日出來之如件」と始めに誌して、次ぎに「井門嘉四郎、平八、瀨八、金左エ門、甚兵衞、吉兵衞、野夫平、清六」と九人の工匠の名が列べて書いてある。金具が取れてから間も無いと見えて、墨書は未だ鮮かである。何の因縁か分らぬけれども、二百餘年が間も物の陰に隠れ潜んでゐた製作者の謙遜な記錄が、はるゞ東都から訪ねて行つた旅人によつて始めて讀まれたのである。墨書はやがて消え失せるであらう、しかし旅人の手帖に移された彼等の名は、少くとも彼等の製作の存在する間は存在するであらう。

(四)

松江は堀川の多い町である。そして堀川に沿ふて平らな道がついてゐる。その向ふ岸には人の手の加はらぬ森が静かに水に迫つてゐることもある。人家が裏側を見せて立ち續き、水に下る石階の上で女房が籠のなかのものを洗つてゐることもある。堀川の静かな水の面には野生の睡蓮が小さな丸い葉を澤山泛べて、その間に星のやうに白い小さい花を撒らしてゐることもある。「咲いてからまるあの藤よりも、みづに焦るゝ萍の花」といふ安來節の抒情は、藤と堀河との多い松江の町の人々の心におのづと湧きおこる實感であらう。

松平家の事務所も此のやうな堀川沿ひの道の傍にあつて、其の質素な長屋門は常に堅く扉を閉ぢたまゝ、水に向つて立つてゐる。

私共は小門からはいつた。何心なく頭上を仰いで見たとき、門の屋根裏に古い木造の箱樋筒の吊されてあるのが目についた。こゝからずつと奥に導かれるやうな氣がして五六歩行くと思ひがけなく直ぐ左手に玄關があつた。右手には土藏か立つてゐた。

私共は廣からぬ庭に面した十一疊の座敷に通された。床の間には松花堂の白描像の幅がかゝつてゐた。庭の一隅には赤い朝顔の花が咲いてゐた。

座敷の中央に緋の毛氈が二枚敷かれて、其の上に牧溪の繪が展げられた。横長の絹に描かれた濃紺の龍である。畫面の左半分を占める物凄い雲龍の暗澹たる騰擾と右半分を占める波浪の白い動搖とはエフエクティーヴな對照を見せてゐる。由來名家所藏の寶器は、大名物、中興名物、名物並、上の部といふやうに等級附けられてゐるが、牧溪の此の龍は名物並のなかに分類されてゐた。しかし續いて展げられた三點の牧溪は小幅ながら總べて大名物であつた。その第一のものは縱長の絹に竹に鳩を描いたものであつた。畫面の一隅に「牧溪戲作」といふ四字が讀まれた。第二のものは果物の一部を切り取つたかのやうな横長の大きからぬ紙に三つの柘榴の實を描いたものであつた。柘榴に恰も窓を隔てゝ見るシエルエツトのやうである。房のやうになつてゐる頭のところに湛へられた濃い墨色の末が、うつすらと朧ろに脹らんで丸い實となる。三つ並んだうちの左の端の一番大きいのだけが、裂目から粒を見せてゐる。極めて保存がよいので其の柔かな墨色は今刻染められたもののやうに香やかで、明るい光の下では微妙な桔梗色を帶びて見えるほどである。第三のものは縱長の紙に蓮に燕を描いたものであつた。蓮の實だけが唯一莖、畫面の左下から中央に[illegible]迄に突き出てゐる。淡墨の此の蓮の實の上に濃墨の燕が右向きにとまつてゐる。水墨が笹の葉のやうに一抹されただけで、それがそのまゝ燕の尾となる。微細な二つの線と一つの半圓とが加へられただけで、燕の頭は完全に眼と嘴とを持つ。まさにシンプリフィケーションの極致である。上の方に、蘭の伸び出たところであらう淡墨の線が二本斜めに引かれてゐる。そのほかには何も描かれてゐない。

次ぎに蒲生氏郷傳來、千利休被褙といふ南楚師說禪師の墨蹟(名物並)が取出された。是は經濟史の上から興味を與へる。何故といふに、此の墨跡の代價の受取證が遺つてゐて、明歷の

の時に於ける貴重な骨董品の相場の一端が分るからである。猶生家は大郷の曾孫出知の早世によつて家系が維絶したので、後室正壽院が此の虚堂の墨蹟を土方河内守に讓つた。その時の手形に斯う書いてある。

うけ取申金子事
一ゑつなんのかけ物代金貳百八拾枚也小判にして貳千三拾両みぎの金たしかにうけ取あひすみ候也
みやうりやくひつじ七月二日
正しゆ院
ひちかたかわちのかみ様參る

其頃いかに高價に取引されたかといふ事が是で分る。寶永二年に江戸麻布に失火があつて土方氏の菩提所天眞寺が類燒したとき、その再興のために土方氏は此の軸を寺に寄進した。寺では其れを松平家に讓つたのである。そして此の墨蹟一枚の價で立派な本堂が作られたのだといふ事を聞いては、驚かさるを得ない。墨蹟は「大無外小無內」云々の句を書したもので、其後に「至正二年秋中呉永天師説」と署してある。

私共は一先づ休憩してから更に幾つかの陶器を觀た。それから翌日と翌々日とにわたつて繪畫と書と陶器とを觀ることが出來た。しかし以後は便宜上并視し、順序を追はないで、繪畫は

繪畫、茶入は茶入といふやうに分類して記述することにする。

二日目には私共の前に支那の彩色風俗畫（名物並）が展げられた。箱には「任康民雜貨擔兒圖」と書いてある。雜貨を擔ふて賣り歩く男の意である。定齋屋の擔いで歩くやうな箱に玩具などを一杯に飾り出したのを、男は地上に下して、群がる子供達の相手になつてゐる。ひとりの婦人が乳呑兒を抱いて傍から其れを眺めてゐる。こまかい屈折の多い線で描かれてゐる。顏が、殊にも婦人の顏がよく出來てゐる。當眞居士は線に力が籠つてゐると嘆賞される。筆者の任康民は餘り聞くことの無い名ださうである。「香蝶仙生」のお説によれば、此の村は元末明初のもので、仇英などの先驅をなしたものであらうとの事である。表裝の中風帶は白地大牡丹の古金襴であるが、其の大牡丹は普通のものよりも大きくて珍らしいと當眞居士は言はれる。

「徐熙」と書かれた箱のなかから取り出された餘り大きからぬ軸を緋毛氈の上に徐々に展げられたとき、未だ僅かに其の上部しか現はれぬうちに既に香蝶仙生は「おゝ宋の香がする」と喜びの聲を擧げられる。折れ殘りの梅の黒い古幹の先が左手から發放に現はれてゐる。ふちが鋭いギザ〳〵をなして、しかも勁ひよく突き出てゐるので、岩に衝き當つて跳ね返る浪を連想させる。白い花を少しばかり斷々とつけた黒い細枝が一本ほど添

へられてゐる。白鷺が一羽、黒い古幹の上に、左向きにとまつたまゝ後ろを振り返つてゐる。鷺の身體には古幹の放膽な描き振りに似もやらず細かな毛がきが施されてゐる。繪は名物並である。「これなどは宋畫のお手本だ」と常眞居士は私共を顧みて言はれる。そこで特に此の繪だけは床の間にかけて眺めることにした。成程下に置いて見た時よりは一段と冴えわたつた効果が會得される。しかし繪にも劣らず私共の目を惹くのは、其の表裝である。上下の萌黄紬地に梅唐草を大きく出したもので、いかにも大膽で、しかも落ついてゐて、極めてインプレッシヴな模樣である。古いものでありながら新しい味がある。此の模樣ならば何に應用しても直ぐに私共の生活に取入れることが出來さうである。梅唐草の色は帶黄の茶の褪めたものらしい。

（五）

大名物のうちでの大名物「油屋肩衝」の玄妙な美に醉ふたのは、拜觀第三日の朝のことであつた。此のやうな名器は普通凡人の前に容易く取出されるべきではない。當代の茶人常眞居士の臨席を條件として始めて拜觀を許されたのである。是に限らず、總て豫め東都の本邸の許可を得て來た人々でなければ一點の品と雖も見る事が出來ない。土地の數人の有志者が此の機を利用して拜觀の席に連らうとして詰めかけてゐたが、本邸の許可を得てゐないので空しく歸つて行く姿を、私共は見た、是程の律義と嚴格と敬意とによつて護れて居ればこそ、稀代の寶器も永代に傳はり得るのである。

他の品々は豫め藏から持出されて次の間に置かれてあつたが、油屋肩衝ほどの名器は愈々其の時にならなければ藏から取出されない。私共は縁側に出て水で手を淨め、居ずまひを正して緋の毛氈を圍んだ。

藏の入口は玄關と向ひ合つてゐる。家從のH氏は袴の股立を甲斐々々しく取つて藏の入口の石段に腰を下した。H氏の背後には薄暗い内部が口を開いてゐる。その薄暗いなかから一箇の笈が現はれてH氏の脊に乘つた、H氏は笈の皮紐に兩手を通して立上る。そして忍從そのもの、律義そのものゝやうな氏の顏は、大きな責任のためにおのづから俯むき、足元に氣をつけながら默々と玄關に近づく。

私は何故となく淡い哀愁を感じた。其の理由は自分にも分らない。ミレーは田舍で薪束を擔ふて小徑から出てくる人の姿を見て人間生活（ヒューマンライフ）の憂愁に囚はれたといふ。彼は運命に對する默從の姿を見たのである。しかし笈を擔ふてくる人を見て私の心に湧いた哀愁は、必ずしもミレーの憂愁と理由を同じくしてはゐ

ないらしい。時々何故とも知らぬ哀感に打沈められるのは私の性癖である。

桐白木の笈は座敷の一隅に安置された。そして紫縮緬入和巾で包まれた外箱が取出された。厚さ一寸三分もあらうかと思はれる春慶塗の桐の角箱で、嚴茸な鐵金具の錠前が付いてゐる。このなかに更に藍天鵞絨の紐ツカリの付いてゐるフスベ革袋に納められた桐白木の箱が入つてゐる。そしてこの内箱のなかゝら印傳革の袋が現はれる。袋の遠州茶の紐が解かれると中から一閑張（黒たゝき内黒塗）の挽家が出てくる。挽家の中から更に茶の紐ツカリの付いてゐる鳥襷緞子の御物袋が取出される。——是だけの順序を追ふて始めて御物袋の中から世に二つと無い唐物の茶入「油屋肩衝」が顯はれるのである。

緋毛氈の上に拗入の四角な若狭盆が置かれた。盆の澁い朱の色の上には若紫の縮緬の袱紗が四つに折られて柔かに泛ぶ。そして其の上に御秘蔵の茶入が安置される。此の茶入は宋代のもので、支那の今の景徳附近の土で作られたものだといふ。其の寸法は略左の通りである。

高、二寸七分半
胴、二寸五分位
口、一寸三分
肩、二寸二分半
盆付、一寸四分半
懸目、三拾壹匁四分

胴は、殆んど平らな肩の下から直ちに勁い曲線を描いて應揚に脹らみ、やがて其れが徐々に底の方へと窄まつて行く。糸底の地肌は少し背味を帯びてゐる。私共は身體を低めて凝視した。——澁い落着いた鐵錆色の瀬戸釉が全體にわたつてかゝつてゐる。そしてその上に黒い釉が怪雲のやうに漂ふてゐる。殊にも肩には一面に黒い釉が豊かに溜つてゐて、刷目のやうな觀を呈してゐる。「唐物には威嚴が乏しいものであるが、此の茶入だけはさうでない。」と常眞居士は言はれる。此の茶入の威嚴は、肩の下から起る曲線の勁い應揚な脹らみに大部分源因してゐるやうに思はれる。私共は、此の小さな物體が限りなき威嚴を以て如何にも泰然と沈着に端座してゐるのを見て、唯だ驚嘆するよりほかなかつた。恐らく平らな肩に黒い釉の一杯に溜つてゐることも、全體を泰然と落着かせる上に効果があるであらう。そして其處に附いてゐる口の割合に廣いことが、全體に何となく豊かな感じを加へる源因となつてゐる。しかし全體の形の上には何らの奇も變哲もなく極めて眞面目なものである。由來眞面目なものは變化に乏しく、きまりきつてゐて面白味の尠いも

のであるが、此の油屋肩衝に限つては、其の眞面目なことが却つて威嚴と沈着とを齎らし、しかも釉に自由自在の變化が顯はれてゐるので、其處に云ひ盡せぬ妙味が發揮されてゐるのである。

私共は、南から射し入る日の光をあてながら、茶入を、盆にのせたまゝ靜かに廻してみた。すると、光を受ける面の變るにつれて、釉は思ひがけない樣々の微妙な色彩と光澤とを其れから其れへと顯はして、恰も曙靄でも見るやうな氣がするのであつた。黒い釉の流れも、或は龍卷の如く、或は飛雲の如く、或は煤煙の如く、泡沫の如く、さまざまの形となつて鐵錆色の面に漾ふてゐる。そして其の黒い釉の間に、深い代赭の色を帶んだ、小さな輪が、妖星のやうに顯はれてゐるところもある。少し晴れた空をポチリと小さく映して、青く明るく光つてゐる部分もある。私共は、あらゆる玄妙な天界現象の渦卷く一の小さな宇宙を見てゐるやうな思ひを抱いた。「數多くの名物を見たけれども、形はともかく、釉の是程優れたものを曾て見たことがない。」といふ常眞居士の評言を、誰も拒むことが出來なかつた。

此の肩衝の茶入は、始め堺の油屋紹滴（常完？）といふ者が持つてゐたので、油屋肩衝と呼ばれるのである。「名物類聚」北野茄子の條に左の記事がある。

北野茄子茶入と申は永祿年中太閤樣へ從左海住油屋常完油屋肩衝と申茶入被差上候時爲其代此北野茄子ならびに鳥目三百貫文油屋常完へ被下候其後當寺隔其横僧正日現聖人之時被寄進之候此度爲諸堂相續間北野茄子唯今其方へ讓候者也以上

寛永九年子八月五日

妙國寺

日現 花押

西宗眞老

後に此の茶入は徳川家の所有に歸したが、茶事年表によれば、寛永三年十一月朔日徳川秀忠から土井秀勝に與へられたとの事である。それが何時の世にか雲州家に傳はるやうになつたのである。雲州家の參勤交替には、必ずこの茶入が笈に入れられたまゝお伴の列に加はつて、山陰道幾十驛、東海道五十三次を物々しく上下したものださうである。私共は、茶入を見ながら、此のやうな舊幕府時代の珍らしい物語に耳を傾けた。また、細川幽齋が矢張り參勤交替の度毎に、利休から贈られた石燈籠を行くにも歸るにも行列と共に運ばれたといふ傳說を面白く聞いた。そしてはるばる九州から擔ひ運ばれた石燈籠を江戸の屋敷の庭に立てて眺め、それからまた其れを再び擔がせて長

い道中をする時の有様や、さう言ひ傳へられる因齋の眞の心境などを、いろ〳〵と想像してみた。

松平不昧公は偉大なる蒐集家であつたが、數多くの蒐集品の中でも最も此の茶入を愛された。或時公儀から此の茶入を是非にと所望されたが、何十萬石とかとなら交換してもよろしいと答へられたので、遂に公儀も手を引かれたといふ傳説さへもある。

共れほどまでに此の茶入は天下に稀れなる名器である、然し支那の工匠は、名器を作らうといふ意識を以て此の壺を作つたのでは決してなかつた。彼は唯だ常に多くの實用品を製産するのに忙しかつたのである。然るにその多くの製産品の中に偶然にも是が交つてゐた、そして其の茶器としての優秀な價値が偶然或る茶人によつて認められたのである。言はゞ偶然に作られ偶然に見出されたのである。「偶然」といふ見えない神は、人間の生活に思ひがけない戀の喜びを齎らし、思ひがけない別離の悲しみを齎らすばかりではない、また藝術の世界にも思ひがけない榮譽を齎らすのである。

私共は此の茶入に白い象牙の蓋を載せてみた。すると茶入は一種の愛らしさを以て見られた。蓋はフチが少し高くなつてゐてツマミが盃形になつてゐる。是れ古來からの蓋ださうである。これを取つて次ぎに第二の蓋をのせてみた。是は利休好みのものださうである。ツマミを圍んで閒が引いてあるだけで何の奇もないものであるが、技巧に技巧を重ねた末の深遠な平凡といふ感じがする。「利休はどこがいゝんだか分らないものを作る」と香蝶仙生の言はれたのを、私共は成程と頷いた。この二つの蓋には黒い斑が入つてゐる。それは象牙の心をと用ゐたからである。象牙の心は堅くて細工に困難であるから普通捨てるのであるが、わざ〳〵共れを利用して蓋を作つて黒い斑の現はれを喜ぶ、といふところに、如何にも茶人らしい思ひつきがしのばれる。

第三の蓋は織部好みのもので、三つのうちで最も露はに技巧的である、殊にツマミを圍む二つの同心圓の刻線に強い注意をつけたところなど。

がこの三枚の象牙の蓋を交る〳〵のせると、蓋の變る毎に茶入の外貌からくる感じが變るのである。是等の蓋は各々由緒の袋に入れられて、治郷公御筆の書付が添へられてゐる。

油屋肩衝は唯是れだけの品と共に筥のなかに納められてゐるのだと考へてはならない。油屋肩衝は秘藏の名器である。共故に秘藏の愛娘に幾棹かの箪笥と夥しい衣裳とが附屬してゐると同じやうに、此の秘藏の愛器にも、共れ相當の附屬物が設けら

ばならない。私共は、此の茶入に幾つかの貴重なキレの袋の附屬してゐるのを見た。いま其れを列擧しよう。

一、丹地裏紋古金襴裏萠黄海氣緒ツカリ紫。
一、紺綾地花兎古金襴裏紫紋海氣緒ツカリ茶。
一、正光好本能寺緞子裏紫紋海氣緒ツカリ紫。
一、宗甫緞子裏紫紋海氣緒ツカリ遠州茶。
一、下手緞子裏紋海氣緒ツカリ紫。
一、太子廣東裏紫紋海氣緒ツカリ遠州茶。
一、縫切裏茶緞子緒ツカリ茶（古挽家袋）。

また添盆として前に擧げた若狭盆（裏に德の字がある）、添掛物として、利休文と圓悟禪師墨蹟と日東岩禪師跋墨蹟とが附屬してゐる。そして是等の附屬品全部が本尊の茶入と共にあの笈の中に納められてゐるのである。

（六）

矢張り笈のまゝ運ばれた名器がも一つあつた。それは大名物の茶入「鎗ノ鞘」であつた。笈には、白い大きな葵の紋のついてゐる紺の覆ひがかゝつてゐる。笈の中からは黒い光澤の美しい漆皮の角箱が取出される。更にその中から錠前付の白木の箱が取出される。**この箱は桐の根のところで作つたものださう**で、亂雲のやうな大きな木目が現はれてゐる。この箱の中から取出された漆ぬりの間筒のなかに名器が納められてゐる。茶入は高さ約三寸餘。形は魚形とでも呼ばうか、恰度落花生の實を大きくして其の兩端を切つたやうな形である。胴の曲線は新月のやうに少しの弛みもなく張つてゐる。稍黒い深淵の水面に夕燒の赤い空が仄かに映つてゐるやうな肌の色である、そして其の水面の一部に闇のやうに黑い底の水があや／＼と湧き上つたかのやうに、釉の溜りが漂ふてゐる。胴の眞中頃には細い線がめぐらされてゐる。下端の一帶は青味を帶びた地肌のまゝになつてゐる。所々に火間（ひま）が付いてゐるので、此の地肌の部分は、恰も花の蕾を交へてゐる莓のやうに見える。さう云へば 此の壺の形は木槿の花の蕾に似てゐるやうにも思はれる。

此の茶入の名の由來に就いては二三の傳說がある。――本能寺のあの騷動の最中に、信長に鎗を突き出した者があつた。信長は其の敵兵の鎗の先に、此の茶入を結びつけて言ふた、「俺は死んでも構はないが、此の茶入は天下の名器であるから失はれてはならない。よろしく保護してくれ、」と。

松平家の元家從のM氏の物語るところは是と異つてゐる、――栄といふ茶道の宗匠が或る大名の邸に伺候した。座敷を通るとき、突然さつと前面の襖が左右に開かれて、鎗が突き出され

た。鎗の先には此の茶入が結びつけられてゐた。宗匠は少しも驚いた色を見せないで落つき拂つて會釋して其の鎗の先の茶入を受け取つた。殿様は其の態度に感心遊ばされて其の茶入を宗匠に賜はつた。

勿論單なる傳說に過ぎない。恐らくは「鎗の鞘」といふ名は、此の茶入の形から思ひついたものであらうといふ事に、私共の意見が一致した。

此の茶入の添附物は、虚堂（宋末元初の人）の墨蹟と郭東陽禪師の消息とであるが、前者の表裝の中風帶（茶地大紋羅紗）の模様は目をそばだゝしめるものである。支那製で、茶地に強い色の糸で以て、岩、草花、水鳥、及び蝶を刺繡したものである。其の壯快な裝飾化と豐麗な色彩計畫とは眞に快哉を叫ばしめる。水鳥や岩は大膽にも金色のシュルエットとして現はされてゐる、そして水鳥には單に嘴と足とに紫紺を用ひ、岩には裂目に淡綠の簡單な草を置いたゞけで充分快適な變化を與へてゐる。蝶も鬚と翼は輝かしい金でつぶし、しかも翼の根もとに黄色の紋と水色の紋を付け、胴を紫紺で彩つて、絢爛たる裝飾美を現はしてゐる。私共は此の刺繡を見て直ちに光悦や光琳の藝術を思ひ出さゞるを得なかつた。恐らく光悦にしろ光琳にしろ、此の種の支那の刺繡の大膽な形態の裝飾化と豐麗な色彩の諧調とから、其の藝術上の最初の暗示を得たであらうと想像されるのである。

（七）

大名物の茶入に「山の井肩衝」と呼ばれるものがあつた。大瀬戸で、形は「鎗の鞘」に似てゐる。胴の中央より少し下ると思はれるところに線がめぐらされてゐる。

同じく大名物の茶入に「長谷川文琳」があつた。文琳とは林檎のことで、林檎の形に似た壺であるから斯う呼ばれるのである。勿論唐物で、光澤の美しい代赭の面に黑い釉が口元から下へ一筋の細い煙のやうに流れてゐる。

「思ひ河」といふ銘の茶入は芋の形をして横に幾つかの筋が繞つてゐる。香蝶仙生をして「これならば吾々平民でも傍に置いて使へる」と言はしめたほど質樸なところに魅力を持つてゐる。この壺は古唐津で、朝鮮の工匠が朝鮮の土で以て日本で燒いたものである。箱に「おもひ川きれなる中になのるなりこれにもわたせ鵲の橋」と書かれてゐる。

「毀江」――この茶入は面取になつてゐる。形は横ひろがりで口が大きい。肩には光澤のよい鶯茶の釉がかゝつてゐる。胴は濃ひ赤紫の地肌に黑褐色の釉がかゝつてゐる。不昧居士の

るゝところによると、是は黄釉の充分に發達した時代の作、卽ち恐らく藤四郎三代目あたりの作であらうとの事である。是の入つてゐる桐の箱がまた得難いものである。水もたまらぬ程つややかな其の面に、正目が恰も靜かに降り注ぐ春雨の絲のやうに密に美しく揃つてゐる。この種の桐の良材は、古錢を入れる箱などを作るに用ひられるが、大抵一寸の長さの間に正目が十二本あるのが普通であるさうだ、然るに此の茶入の箱には十三本乃至十四本ある。以て其の正目の密である事が分るであらう。

「初祖」――この茶入は利休時代の正意の作である。黑い釉の間に蒔繪の村梨子地でも見るやうに金色がゝつた粉末が散點してゐる。「潮路庵」といふ銘の茶入は澁紙手で、其の名の示すやうに澁紙色をしてゐる。形は僅かの脹らみを持つ筒形で、そして肩衝である。銘は「潮路避塵衛、結庵掩門柴」といふ詩句から來てゐる。

「鈴鹿山」といふ銘を持つ大瓶手の肩衝の茶入は、箱を中央から切つた其の下半分のやうな形をしてゐる。そして黑い裡に見てゐると仄りと赤味が湧いてくる。この妙味は古瀬戸特有のもので、新しいものにあつては其れが單なる茶色になつてゐる。この赤味を出すことに最もよく成功したのは朝日春慶だとの事である。花桐の挽家の胴には金粉で「えにすぎぬこれや鈴鹿の關ならんふりすてがたき花の影かな」と書かれてゐる。鈴鹿といふ銘は此の歌に連なつてゐる。

以上の五種の茶入はいづれも中興名物に屬してゐる。

（八）

茶碗は成り澤山觀せて貰つた。そのなかに「志野」が二つあつた。一つは名物並の紅志野で、足利末期の志野宗信の作である。一面に蜜柑の中味のやうな赤い色がにじみ出てゐて、何となく溫い感じがする。も一つの志野は上の部に屬してゐるもので、「梅の香」といふ銘を持てゐる。灰白色の面に曙の空を見るやうな赤い錆が漾ふてゐて、いかにも紅梅の香を思はせる。

「一體昔から志野は少しでも赤い錆が出てゐると珍重されたものだが、此紀州家の志野は殆んど全體にわたつての錆が出てゐる。こんなのは全く珍らしい。近頃では此の錆を故意に出すので面白くない。」と常眞居士は茶碗を眺めながら私共に話された。

「古三島」の茶碗が一つ取出された。名物並に屬してゐるもので、煤んだ白臘色の肌に淺黄色が現はれてゐる。普通に三島と言はれるものは天正頃の作であるが、此處にあるのは眞實の古

三島で、即ち四百年乃至四百五十年前の朝鮮物である。淺黄の色が古三島特有の侘い味を出してゐる。此の古三島も、元來は雜器として一日に五百も六百も作られたもので、そのなかに偶然茶人の愛玩に價するものが一つか二つ出來たのである。そのやうに工匠自身は無意識に作つたのであるから、茶器として優れたのを唯だ一つ作らうとしても不可能である。唯だ「偶然」の神様の氣まぐれに賴るよりほかない。

「粉吹(コフキ)」は「廣澤」といふ銘を持つてゐた。朝鮮物で、名物並に屬してゐる。片口の口を缺き、其の跡を塞いで茶碗にしたもので、缺いた痕跡のよく分るところが却つて素樸な感興を與へる。全體白鼠色で灰色のムラが出てゐる。

「刷毛目」の茶碗は三つ觀た。そのうち「清水」といふ銘の古刷毛目は名物並で、刷毛目が夕立のやうな勢ひを以て全面に渉つて走てゐる。

大名物に屬する「加賀井戸」の茶碗も一つ取出された。是は「半使」(判司)の地に「井戸」の釉をかけたものである。青みを帶びた肌に雨雲のやうに灰色のシミがにじみ出てゐる、そして其れに交つて赤みがゝつた淡いシミが所々に見える。この赤いシミは土に含まれてゐる鐵分のために生ずるもので、半使の特徴である。

香合は三個觀ることが出來た。菊形の赤繪の香合は蓋の頭にプリミティーヴな兜の繪が描いてある。明代の作である。此の香合は上の部に屬し、「福野」といふ銘を持つてゐる。「伊賀伽藍」の香合は角形で鶯の羽根のやうな色をしてゐる。約二百年以前のものだらうとの事である。是も上の部に屬してゐる。寳器帖に「呉洲臨」と誌されてある古染付の香合は、プランが方形の四瓣形を成してゐる、そして其の中央に鷹が描かれ、各瓣には七寳模様が描かれてゐる。此の香合に名物並に屬してゐる。(斷つておくが、是まで「銘」と呼んだのは總て其の器物に刻まれた款識の事ではなく、其の器物に與へられた一種の雅號の事である)。

鑄金のものとしては朝鮮産の沙張(サハリ)の花入を觀た。是は「松本船」といふ名が暗示する通り、鎖で吊す舟形の花入である。元來沙張といふのは、朝鮮の古い食器の名であつて、其れが其のまゝ同じやうな形式用途の他の銅器の名ともなるに至つたものらしい。然るに日本では形や用途の如何に拘らず、銅と錫とを主とする合金で作つたものを總て沙張と呼び慣はしてゐる。即ち元來は形式用途を意味する名であつたのが日本にきて質を表はす名となつたのである。常眞居士のお考へによれば、この松本船も元來は食器であつたのを其のまゝ利用して鎖

を付け鎖をつけ花入としたものであらうとの事である。舟の兩端は等しく蓮瓣のやうに鋭く尖つて、高く反り上つてゐる。いかにも湖の水の波に輕快に泛ぶべき扁舟を思はしめる。香蝶仙牛は是を「ゴンドラ」と呼ばれた。またニムフが潜む沼の黄昏の水面のやうな其の淡い青みを含んだ燻金の色澤は、普通の金屬器共には容易に見ることの出來ないもので人間の意識的焦慮を超越せる玄妙な自然の效果である。勿論是は大名物に屬してゐる。私は、四周の壁を黑く塗りつぶした室の空間に此の松本船を故意と何も活けないで吊し、一方から細く射し入る日の光で仄かに照らしてみたいと思つた。

（九）

松平雲州家の御寶器の數の莫大であることは、其の所藏目錄が幾冊となく積まれてあるのを見ても想像される。今から四代前の藩主不昧公は數々の逸話を遺して居られる、しかし私共には舊幕時代に於ける最も偉大な蒐集家として最もよく記憶されなければならない。公は能ふ限りの財力と機會とを利用して普ねく古今の名器を其の手に納めようとされた。雲州家所藏の寶器の大部分は恐らく不昧公の時代に集められたものであらう。私共が三日間に亙つて拜觀し得たのは全く文字通りの九牛の一毛に過ぎないのである。しかし私共は、博物館の硝子窓を通しての鑑賞に於ては到底求めることの出來ない感興に觸れることが出來たのを喜ばなければならない。緋毛氈を取圍んで、恰度流れくる盃を待つてゐる時の大宮人のやうな心持で居ならぶ私共の前を、古雅そのものゝやうな作品が靜かに順々にめぐる。私共は其れを、毛氈の上を擦るやうにして、そろそろと注意深く引き寄せる。そして柔かな袱紗の上から其れを支へて、徐ろに器物の神秘と自分の魂との親しい照應を味ふのである。膝の上に抱いて初めて小兒の可愛さが本當に分ると同じやうに、器物と雖もまた直接の接觸を俟つて初めて人間らしい親しみを私共の心に通はせるのである。

私は松平家の事務所の門を出て、堀川沿ひの道を歸りながら、此の三日に亙つて味ふた幾つかの名器の不思議な魅力を回想してみた、それから、不昧公の趣味生活が此の松江の人々にどのやうな感化を遺されたらうかといふ事も考へてみた。私共は、屢々不昧公御好の煙草盆を見せられた。今でも作られて賣られてゐるが、是などは茶人の洗練された趣味が純眞のまゝで日常の實用品に應用された實例の一つであらう。また茶の席には、矢張り不昧公御好の「松葉」とか「山川」とかいふやうな菓子が出された。私は後ちに買求めた山川の函を開けてみて其

のなかに和歌の書いてある紙を見いだした。「ちるは浮き散らぬは沈む紅葉ばの影はたかおの山川の水、」と私は其の歌を幾度となく口吟んでみた。そして松江の效外の菅田庵といふ不昧公經營の茶室を訪れたとき、この桃色の種菓子をわざと不規則にボク／＼と打ちかいて鉢に盛つて出されたときの快感を思ひ出した。

このやうな日常の使用品にさへ不昧公の洗練された趣味が其のまゝ傳つてゐるのを、私共は松江の人達のために喜びたいと思ふ。しかし現在此の土地で製産されてゐる工藝品の作者の多くは、此の洗練された趣味から何物をも求めようとはしてゐないやうである。安來節に「樂燒の茶碗見たよな姿の顔に迷ふたあなたは茶人かい、」といふのがある。いくら茶道の盛んな松江の町でも、茶人の趣味を不思議たものと考へる人達がゐないわけではあるまい。そして其の人達に此の安來節が面白さうに歌はれるやうなれば、人々の感受性も次第に鈍い眼を閉ぢるであらう。しかしさうなるのを私共は信じたくない。私共は、この地方の工藝品の作者が不昧公の趣味生活を純眞のまゝに理解して、其處から制作の感興を引き出すやうになるのを願はざるを得ない。そして其の製作によつて松江の人々ばかりでなく他地方の人々の日常生活にも、或る美しい影響を與へるやうにしたいものである。昔は名器を一つ觀れば茶人の資格が得られたものださうだが、さきに茶道の門外漢と自稱した私も、松江に來て幾つかの大名物を拜觀したお影で、あつぱれ茶器美の推讃者になつてしまつた次第である。

服從と反抗の心理

寺田精一

一

(2+3)と(3+2)とは、それを數量的に見るならば、3と2とが相前後して居るといふ丈けで、5となるのに何等の變化も

認められない。一つの物體に3の力と2の力とが、相殺して加はるといふ際にも、何れが前になつても又後になつても、加へられる力の總和に何等の相違はない。けれども吾々の精神作用に於ては、この關係が大に問題となる。そこに吾々の精神作用と數理や物理の關係と、興味ある相違點が見出される。

「お蔭で昨日の交渉は誠に結構に進んだ、一寸外の人ではあれ丈けに手際よくは出來まいよ、どうも有難う。時に序にいつて置き度いが、先達の事件ね、あれは大變な君の思ひ違ひで、再三あんなことをやつて與れては困る」

「先達の事件ね、あれは大變な君の思ひ違ひで、再三あんなことをやつて與れては困る。時に序にいつて置き度いが、お蔭で昨日の交渉は誠に結構に進んだ、一寸外の人ではあれ丈けに手際よく出來まいよ、どうも有り難う」

數量的に考へるならば同じことである、褒めることと貶すこととが語られて、前者は褒めることゝが前で後者は貶すことが後になつて居る丈けの相違である。けれどもこの二つの事實を語られるものの身になると、前者と後者とでは全然相違した結果を經驗する。卽ち前者では先づ褒められて居るから、內心頗る斜ならずで、貶されることがよく耳に入り、善意を以て受け取られる。然るに後者では先づ貶されて居るから、次に褒められることが出て來ても、「何を勝手なことを拔かす、いい程骨折らして置いて」とか、「下らぬ機嫌を取るな狸爺め、どこまでも喰へぬ奴だ」位にしか取られなく從つて、褒められて居ることが、一向に耳へ這入らぬばかりでなく、却つて反感を以て迎へられるのである。卽ち後の場合では眞實褒める意志であつて、何等機嫌を取つたり媚てたりするのでなくても、好意が好意として通らなくなるのである。

私が、服從と反抗といふやうな問題を捕へて興味を持つのも、要するに上のやうな機微な事實それは吾々の有する精神作用に特有な、さうして——それが吾々の社會の種々相に色々な色彩を與へる點を認めるからである。

二

動に對する反動は、總ゆる活動に見られる。吾々の精神作用も、亦一つの活動であるから、この動に對する反動といふことがある。只物理現象などに見られるやうに、動に對する反動は反對の方向に於て相等しといふことは出來ない。

その精神に加へられる動の與へられ方で、又其の動の受け容れられ方で、假令同じやうなものが加へられても、頗る相違した反動を生ずるものである。同じく「さうであらう」といふ語

であつても、初めの方へ力を入れ抑揚をつけていはれると、それは詰問的な又强要的なものとなつて、多くは何等かの不快を加味して受け取られる。それに反して滑かに語尾を少しく上げていはれる時には、單純に贊同を求めるやうな優しみを加味して受け取られる。又全く同じ語であつても、それを受ける人の其の時に於ける氣分で、少からぬ異つた反動を經驗する。例へば「今日屑屋が來ましたが、厭な男でしたから何も賣りませんでした」といふやうな語が、夫君に向つて妻君から發せられるとする。若しそれが穩な心持の時に受けられるのであると、簡單に「さうか」位ですむ。けれども若し苦煩狀態にあつて、氣分が何となく焦々(いらいら)して居るやうな時に受けられると、「何だ下らない、早く飯にでもしないか」とか「馬鹿な奴だ」位に、一言の下に撥ねつけられてしまつて、全く取り容れられない。

服從と反抗とは、共に對他的關係に於て起るものであつて、必ず自他の對立を條件として居る、そればかりでなく兩者共に力の爭鬪拮抗を假定して居る。從つて服從を考へるにも又反抗を考へるにも、力の働く動とそれに因つて發する力の働く反動とを注意しなければならない。且又服從と反抗とは、兩者が全然對立的存在をなすものではない。或は一方に次いで他方が起つて來るか、或は一方が要求されるから他方が生じて來るといふやうに、相關係せしめることによつてのみ考へられるものである。その意味で、服從と反抗とは、動と反動とから惹起して多くの興味ある事實が得られるのである。而もその精神上に於ける動と反動とが、一般の物理現象に於ける動と反動とに見られるやうに行はれないところに、この服從や反抗も起つて來るといふことも出來るのである。

三

このやうに服從と反抗とは別々にして考へることの出來ないもので、服從のあるところに反抗が見られ、反抗のあるところに服從が見られるのである。けれども一方の力が他の力よりも優勢であつて、どうしても弱いものが服從しなければならないといふ場合にも、亦一般の物理現象などのやうに、比較的に單純に、推移しない。

なぜとならば吾々の精神作用は、時には恰も水が高きより低きに流れるやうに、力の加へられたまゝ、或ところまで滯りなく特殊な方向を以て進むこともないではないが、多くの場合は、殊に其の推移の間に幾分の時間的の餘裕や、加へられて居る力からの餘裕のある場合は、假令特殊な方向を以て進みかけて居ても、創造能力や建設能力や破壞能力を有して居る吾々の

精神作用は、內的に湧いて來る力で以て、其の進みつつある力の方向を轉換せしめ得るものである。かの流れて居る水が、それ自らに力を有して居るのでなく、重力といふ外力に依つて力の得られると異つて、吾々の精神作用は、それ自らに力を有し、他の外力に向つて內發的に拮抗し又屈服するものである。そこに服從や反抗の問題が、複雜に起り得るのである。

このやうに服從と反抗とは、時間的に見ると特に複雜な推移と變化とをなすものといはねばならない。例へば現在示されて居る服從が必ずしも永續的な服從でもなければ、又現在示されて居る反抗が、必ずしも永續的な反抗でもないのである。即ち時には現在の服從が、却つて來るべき反抗の素地として示されて居ることもあれば、又時には現在の反抗が却つて來るべき服從の素地であることもある。そればかりでなく、形式上に現はされた服從が、何時も眞實の服從として認めることの出來ないと共に、又形式上に示された反抗が何時も眞實の反抗として認めることの出來ないこととすらある。

吾々の精神作用は、表面的な現はれでのみ察することは出來ない、かの企てられた現はれの如き其の適例である。他人の所有物を悪口するのが、必ずしも悪くて悪口するのでなくて、實はそれを我が物としたさに、捨てしめやうとの企みであることもある。或婦人と或男性との間に、何等か深い關係のあるやうに罵るものが、却つて其の婦人に痛切な執着を持つて居るやうなこともある。そこで人の心は、謀り難いといはれるのである。

四

反抗には、一種の興奮と快感とがある。特別な意地張りを以てするでなくても、反抗することは自らに、吾々の要求を滿足せしめるものがあるのである。

反抗はいふまでもなく力の發表である、假令微弱であつても又其の微弱なことを意識して居ても、反抗して居る間は極めて明確な力の經驗を得て居る。吾々は精神上に於ても、又身體上に於ても、樣々に力の運用をして居る。そこに生物たるの本領もあるのであるが、その力の運用に少からぬ無理があつても、運用されることと自らに生の深刻な滿足が味はれる。のみならず無理なところに向つて行く程、力の運用に伴ふ力の意識が伴つて來る。恰も爆藥が炸裂するに際して、何等抵抗のない方面へ向つては、殆んど其の偉力を示して居ないのに、堅牢な抵抗のある方面へ向へば向ふ程に、其の猛威を逞しうするやうに。吾々の反抗の心理が、力の經驗に基くものである以上、亦この例に類したもののあるは當然なことである。

會議などの時に、何とか一つ難癖をつけないと居られない人がある。この種の人は、自己意識を如何なる場合でも強く經驗しないと滿足されない人であつて、會議の目的よりも難癖をつけることが大切とされるやうな場合もある。從つて何等かの難癖をつけることが出來て、同席の人々に議論を起こしめでもすれば、其の跡始末などは如何やうでも論ずるところではない、滿足げに「一寸、お先きに」などと無責任にも引き上げてしまう。

これは所謂反抗の爲めの反抗であつて、その事自らが云はゞ享樂の對象である。從つて先方がそれを反抗せしめないやうに取扱ふと、頗る物足らない感を懷いて來る、何となれば自己の力の發展が、それで以て阻礙された形となるからである。而して自己意識や力の滿足に、日常充分な經驗を持ち得ないやうな弱者は、些細な方面に出でても、其の經驗を味はうと、悲哀を感ぜしめる迄でに努力する。勿論かかる努力の多くは知らず識らずの間に行はれて居る。例へば官衙の門衛や受付や小官吏などが、自己よりも職務上弱者と見る所謂人民に面した場合に、愚にもつかぬことに突掛つて、權威を示さうと威張り散らす如きそれである。社會上失脚したものや、亡國の民などが、殊更に反抗的態度に出でるが如き、大に味つて見なければならない心理が存在して居るのである。

五

服從せしめやうとすればする程反抗する氣質のある如き、反抗の爲めの反抗と相類して、興味ある精神作用である。服從せしめやうと強ゐるでなければ、何等反抗するのではないが、服從せしめやうとする外力の加はることで、反抗といふ自己の力の發動ともなつて進むのである。この點に於ては決して打算的ではない、自己の屈從に伴ふ苦惱を厭ふ本能から、假令直に後悔するやうな破目に陷つてまでも、服從の強要に對して反抗を試みる、ここでは理知は殆んど働いて居ない、衝動である、感情である、それ丈けに無謀であると共に強さに強く出る。

固より無理な強い反抗は、表面的經驗として普通の意味に於ける享樂的快感では決してない。時には苦しみに苦しみ惱みに惱み拔いて、而も反抗して居る、時には自己を殺してまでも反抗する。けれども彼等は其の不快を捨てない、一所執拗にそれを追つて行く。只已むに已まれぬ內的の力が、それを捨てしめない、さうしてそれを追はしめる。その內的の力こそは、吾々が一つの個體を有し、又價値の自我を有する上に生ずる特殊な力である、或は自己意識として或は我執として或は優越慾と

て經驗するものがそれである。この經驗は、個人から民族にまで至る廣い範圍に及んで現はれて居る。

從つて弱者の反抗を以て、無益な愚劣な態度と笑ふべきでない。事の善惡は第二として、又其の現はれ方の適否は第二として、反抗者の生活から觀るならば、それは極めて眞劍なものであり、又極めて人間らしいものである。服從せしめやうとするのが、最も眞劍な又最も人間らしいことであると同じ意味に於て。反撥のないところに存在や生存の意味がないとするならば、服從の强ひられた際に現はれる反抗は、存在や生存の詐りなき現はれである。そこに吾々が生物としての、又自己に發する力の所有者としての、貴い經驗が味はれる。

若し吾々の力の問題が、何時も單純に數量的に處理されるならば、人生は極めて無味に終らう、優勝劣敗の實も極めて單調に終らう。けれども到底勝ちみがないと外觀的に考察されるものに向つても反抗するところから、人生に色彩が豐となり、優勝劣敗の實が複雜になる。數量的の强者が、必ずしも常に總べてに向つて强者でないといふところに、弱者の發奮と希望とが繋がれて行く、そこに又反抗の無意識的根柢も生じて來る。

六

けれども時には反抗し拔いたものが、突如として又極めて脆く、服從し終ることがある。服從に至るまでの粘り强い執拗な反抗から觀て、それが餘りに急激な變化だと、疑問にされるやうなことがある。

反抗が、力といふ事實であるところから考へるならば、この反抗し拔いたものが突如と服從に轉ずることは、別に不可思議なことではない。何となれば反抗に費される力は、如何なる場合でも無限であるとはいはれない、無限でないならば、それが努力を以てされればされる程、早晩力の衰弱を認めなければならない。而して早晩衰弱すべき力は、眞劍な努力で支へられて居れば居る程、愈々となれば忽焉と其の力を失つてしまう。體力を競つて居るものが、或ところまでは頗る優勢に出でるけれども、そこを過すと、餘りのあつけなさに驚く位に、容易に敗れるが如きそれであつて、角力などに好適例は見られる。戰鬪の對陣に於てもさうである

而してこのやうに飽くまで反抗したものは、其後に極めて脆く服從し終ることがあるけれども、其の服從が自己の内部に發する力の消耗に基くものである丈けに、必ずしも永續的の服從とは限らない。從つて征服者は、往々この力の消耗を永引かせんが爲めに、服從者に向つて種々苛酷な負擔を課し、さうして

其の消耗の恢復されるのを防ぐことがある。

服從や屈從や諦めが、中年以後のものに於て多く行はれるのに對して反抗や叛逆や謀叛などが、青春の血に燃えたものによつて企てられることの多いのは、又上述の事實の側面を語るものである。中年以後のものは、もはや其の心身の力に餘裕がなく、猛烈に反抗する丈けの可能性を缺いて居る。これに反し青春の血に燃えて居るものは、其の精神も身體も、潑溂たるものがあつて、生々ときび／＼した力が有り餘つて居る、何處かへそれを放散しやうと、無意識ながらに努めて居る。かくて青年者は、他を服從せしめてそこに力の滿足を味ふか、それでなければ相當な對象を求めて反抗しつつ、そこに力の滿足を味はうとし勝ちである。

即ち餘裕の力があるならば、其の力を以て自己發表の經驗を得やうとするのが、最も自然的な又最も強い欲求である。そこで反抗し拔いて屈服したものが、何時までもの屈服であるとは限られない、內的に力の發動するや否や、何等かの形式で自己を出さうとする。其の最も單純な手早いものは、いふまでもなく反抗である。而して明瞭な反抗的態度に出で得るまでの力はないが、而も崩し來た力が欝勃として居るやうな場合には、それが陰忍の苦惱として經驗されるのである。

七

服從と反抗との區別は、一般に極めて明瞭なやうであるが、實際上は必ずしもさうではない。即ち時には服從と見せて居るのが、必ずしも眞の服從でないこともあれば、又反抗と見せて居るのが、必ずしも眞の反抗でないこともあるのである。

弱者には、往々虛僞が伴ふ。それは動物界の弱者に見られる保護色や擬態のそれのやうに。善いことをして居る人と惡いことをして居る人とでは、後者がよく虛僞を試みる。この弱者に現はれ勝ちな虛僞は、可成り差し迫つた場合にも現はれる。昆蟲や蜘蛛などが、他の強敵から迫害を受けた時に、死を假裝する本能を有するやうに、吾々人類も勝ちみのないと思はれる強者に向つた時には、極めて容易に服從した態度を見せる。而もそれは何時も力の比較や利害の打算からのみ行はれて居るのではない、それは自己の保全へ向つての根強い欲求からである。子供などが大人に叱責されやうとする時に「ご免、ご免」を連發して居るのに拘らず、ぶつ／＼いつて居たり、申譯や辯解を急いで居るが如き、叱責されるのを恐れての作僞であることもあるが、必ずしもさうばかりではない。

元來餘りに安價な手輕な服從は、其の服從者の力が極めて

弱なものでない以上、問題である。外部から自己に加へられる力に對して、相當の反抗をするのが、力を持つて居るものの自然の現はれ方である。それを極めて安價に又極めて手輕に服從し終るのは、力の一般的法則を裏切つたものであつて、そこに何等かの企てられた又は無意識な虚僞がなければならない。尤も世上容易に屈服する癖の人がある、かかる人は極端な自我感の薄弱な人か、それでなければ眞實の屈服をしない人である。殊に大袈裟に反抗はしないが、ちりぢりと又こそこそと反抗的態度を續けるやうな人に、この容易に屈服する癖の人が見られる。これはいふまでもなく、正面的な反抗から受ける強烈な力を恐れての結果である。

而して服從を他に強要しやうとする人の心理からすれば、反抗するもの程服從せしめ甲斐がある。反抗者の心理からいふならば、服從したと見せて服從して居ないところに感興が湧く。何れも自己の力の餘裕を自分に於て認め、そこに各特殊な滿足を味つて居るのである。假令そこに力の爭鬪に際して見られ勝ちな虚僞や虚勢が加味されて居るにしても。

八

裝はれた服從と共に、吾々の興味を惹くものは、裝はれた反抗である。換言すれば、反抗はして居るのであるが、[illegible]その反抗は普通の反抗ではない、即ち反抗せんが爲めの反[illegible]はなくて、反抗によつて他の欲求を滿足せしめやうとするものである。從つて反抗の爲めに反抗して居たり、努力しつつ反抗して居る場合と異つて、力の經驗としては其處に少からぬ餘裕が見られて居るのである。

この種のものの中最も餘裕あるものは、享樂的反抗ともいはるべきものである。男女間の愛の爭鬪や技巧に現はれる一種の反抗の如き其の主なものである。性的愛の享樂は、有頂天になつて陶酔することも主な一面であるが、性的愛の生活が個館を別にした間に現はれる點は、愛情の發露たる力の交渉にも、少からぬ憧憬の一面がある。この愛情の發露たる力の交渉は、やがて服從にも向へば、又反抗にも向ひ得る。固より性的愛の生活に於ては、絶對的服從に特殊な滿足と快感とを味ふこともあるが、それと共に表面反抗として示された主觀的服從にも、亦特殊な滿足と快感とを味ふものである。

即ち性的愛の交渉が、異性間の爭鬪によつて行はれることは、自然其の爭鬪に特殊な感興が經驗されるやうにもなるのである。殊に吾々人類のやうに、其の情的生活が極めて纖細に複雜に發達して居ると、爭鬪として現はれる愛の交渉に、作爲的

に様々な迂餘曲折を生ぜしめて、其の間に愛の享樂が味はれるのである。私が前に擧げた享樂的反抗の發生は、其の根柢をここに有して居る。愛の交渉によつて、自己が異性よりの愛に胸の時めきを經驗せしめられ、その爲めに普通ならば盲目的な服從に至るのを、故らに服從の表示を不明瞭に繕つて居るのである。これは盲目的な服從によつて、異性から受ける熱烈な緊張した努められた愛の力を、弛緩せしめ沈靜せしめることが、物足りないのである。そこで主觀的には充分に愛の求めに對する服從を感じて居ても、尚この物足りない境地に自己を陥れることの惜しさと心淋しさとに支配されて、虚偽な反抗を敢てして、餘裕のある愛の技巧と得意と感興とを味つて居るのである。

　生物の本質として、外部の刺激を受け、それに順應して行くのが、其の生活の頗る多くの部分である。そこで何等の刺激もない時には、一般に生物の生活々力は萎微して行く、故に普通にはかかる場合に、自ら進んで刺激を求めやうとする。その事實は吾々の社會でも、心身の疲勞したものや、無聊に苦しむものが、常に何等かの刺激を求めて居るのでも知ることが出來る。刺激の知覺、それは生存の認識である、性的愛の刺激の存在は、性的愛の生々として居る認識へ吾々を導く。ここに虚偽的な裝はれた反抗が、性的生活に於て往々見られるのである。それが愛の技巧と呼ばれるものの一つである。

九

　このやうに服從と反抗との關係は、頗る複雜になつて現はれて居るが、而も其の何れもが吾々の最も痛切な經驗を以てする自我の問題である丈けに、時には甚だしい諦めの悪るさを以て現はれることがある。

「どうせ私共は無教育なものですから、あゝのこうのとは申しません、おつしやるやうになります、致方がありません」

「お偉うご座います、どうも恐れ入りました」

「長いものには卷れよてね、結局その方が得なんだ、はいはいといつて居れば間違ひはないさ」

　これ等の言葉は、何れも強者に對する服從を示したものである。けれども單純な素直な服從ではない、「どうせ私共は無教育なものだから」とか、「致方がありません」とか、「お偉うご座います」とか、「結局その方が得なんだ」といふやうな條件づけた語には、眞實の服從には、何も言はなくてもよい語である。それ等を發しなくては居られないところに、服從の中に反抗の要素を加味して居る。それ丈けに自己を屈する場合には、強い未練や執着や因循が經驗されるのである。

けれども自我の範圍の侵されると氣づかれた場合と、さうでない場合とでは、服從の現はれ方が決して一樣ではない。卽ち服從が赤裸々に強要されて居るやうな場合には、被強要者は明かに自我の侵されたことを心づくから、其の強要に向つては、餘程偉大な力でない以上は、何等かの反抗が現はれて、そこに幾分でも自己の領域を保たうと努める。これに反して服從が何等強要されて居るやうに見えない場合には、自我の侵されることに心づかない丈けに、寬容な穩健な態度を以て向ふやうになる。個人を對手とする時にも、民衆を對手とする時にも、又大きく民族を對手とする時にも、これを巧妙に制御して服從せしめ得る人は、殆んど常に赤裸々に服從を強要しない人である。勿論時には絕大な力、例へば武力や信仰の力などを以て、極端な強要を以て服從せしめやうとして、それに成功した偉人は、歷史上決して稀有ではない。けれども、その服從に無理な強要のあればある程、被服者の衰滅と共に、今度は極端な反動を以て反抗が現はれて來る。而して其の最もよい例は、武力的天才によつて服從せしめられた民族などに見られ易い。武力的國家の興亡の跡を尋ねるならば、何人も其の適例に接することが出來やう。いふまでもなく武力に依る強要は、直接吾々の生存に關係するものであるから、假令それが假裝的又は打算的に行はれるでなくても、無理な服從と反抗の不可能とが伴ひ易い。そこに反動としての反抗の熱烈と滿足とが起つて來るのである。

一〇

武力に依る強要は、痛切に吾々の生存を脅威するものであるから、それ丈けに吾々の精神を支配することも著しい。が、それにも增して吾々の精神を力強く支配するものは宗敎的のものである。武力は如何に巧妙に又如何に奇蹟的に行はれるにせよ、それは要するに人の業(わざ)である。のみならずそれは人の或欲求、殊に民衆の自我感を最も深刻に侵害して厭かない征服慾の爲めに行はるものである、そこに被征服者の已み難い反抗と不滿と憤怒とがある。

然るに宗敎的のものは、假令或野心家の個人的欲求を滿足せしめやうとするものであつても、少くも其の表面に示されたところは、人類の上に立つ神のことである、人類の運命を左右する神のことである。それに加へて何人もが有して居る宗敎的情操、卽ち依從の感と神秘の感とを伴つた力強い感情は、渺たる人類自らの無力と運命の無知と不解に對する疑惑とから、機會のある每に絕對の力に縋らしめやうとする。そこには人と人との間に見られる力の爭ひや、利益の受授や、淺間しい自己的の

姿を認めない。宗教の力に依る服從、換言せば信仰を以てした服從は、ここに詐りなき强みを持つて居る、眞劍みと眞實みとが現はれて居る。何となれば其の服從は、自我の侵害ではなくて、自我の加護であり、其の反抗は他人への力の表示ではなくて、神への冒瀆である。

　劍戟に立つた征服が、短年月の間に反逆を以て迎へられて居るのに、神理に立つた征服は、可成りに永い間の服從として留まつて居る。固より假令信仰の力に依つたものであつても、それが被征服者の精神に信仰として生きるでなければ、その征服は武力に依るものと大なる隔りはない。即ち信仰が如何に神聖な神の力を以てするものであつても、幼稚な粗野な强要を以てされるならば、それは一時的に形態を整へた服從として終るに過ぎない。從つて被征服者の形態即ち何等の力を持つて居ない外面は、或は打算上服從として保たれて行くけれども、其の個人や民衆を眞に動かして行く誠の力は、反對に反抗となつて現はれる外はない。何處までも內的に確實に培はれ生かされた信仰でなければ、永遠の服從は認めることが出來ない。

十一

　かくて如何に貴い善良な動機から發したものであつても、それが强ゐられる時には、何人もそこに自我感の壓迫に伴つた不快を經驗するものである。假令一見した時には、自分の物としたかつたものでも、餘りに遣らう遣らうと强ゐられる時には、複雜な考慮を費さない前に先づ厭氣（いやき）がさして來る。それに反して別に望みはしなかつた物であるが、餘りに人に呉れることを厭ふやうであると、何となく我がものにしたいとの欲求が起つて來る。理解不理解は要するに知の問題であつて、比較的にこれを處置することが容易である。然るに好きとか厭いとか、快とか不快とかは、全く情の問題であつて、これは比較的に處置が困難である。服從や反抗の關係に、難點の附け加はつて來るのは、要するにその情の問題が絡まつて來るからであつて、理解不理解を以て決せられる間は、未だ難點の輕度なものといはねばならない。かくて服從や反抗の事實は、常にこの點に注意されねばならない。

　吾々人類が野心を去り利己を離れることが出來なければ、又優越や權力を憧れて居る間は、服從とか反抗とかいふ事實と無關係になることが出來ない。さうして人と人との關係や、國家と國家との關係や、民族と民族との關係も、其の少からざる部分は、服從や反抗といふことで綾なされて進まなければならない。而も其の服從や反抗が、如何なる形式と內容とで進むかは、今後の人類の文化に俟つて觀なければならない。藝術や道德や宗教は、從來かうした人類の綾を、樣々に綜ぜしめる上に役立つたが、將來も亦樣々に綜ぜしめて行くことであらう。

秋風の前に

――四十を過ぎた男の悩み――

松崎天民

◇

「おい、悲哀はもう宜い加減にしろよ。歡樂の方へ轉業したら何うだ。え、松崎……」

と、何時ぞや田中貢太郎に逢つた時、しみじみ忠告してくれたことがあつた。何かの雜誌に、「中年の悲哀」と云つたやうな事を書いた時にも、逗子に居られる德富蘇峰先生が、わざわざ長い手紙を下されて、「何だ、四十やそこらで、悲哀も惱みもあるものか。眞に人生の事や世の中の事が判つて、充實した心持で、男が活動し得るのは、四十歲の坂を過つてからだ……」と、深切に諭して下された。その後、國民新聞の應接室で、久し振りにお目にかゝつた時にも、話が其の事に及んで、私は冷汗を流したことがあつた。

その蘇峰先生や、貢太郎には、甚だ濟まぬ事だけれど、秋風吹く頃になると、私は何時でも、涙ぐましい、心細い、沈むだ心持になる。四十四にもなつて、體量が十九貫八百もある豚のやうな松崎が……と、笑ふ人には笑はれても仕方が無い……

◇

「秋風が吹いて來たよな町の色、麥藁帽の褪せた色かな」――

四五年前の秋に、私はこんな歌を詠むだやうに、毎年、秋になると私の心持は、不思議に滅入りこむでしまふ。甘い木犀の香が、私を感傷的の氣持から誘ひ出してくれるやうに、流れ匂ふ頃になつたが、秋風は底が冷たくて、何と云つてもうら哀しい。二十歲を頭に、十六と十二と、男の子が三人あつて、四十四にもなつて居ながら、秋風の前に立つと、私は何時でも、涙ぐましい氣持になる。

「何も彼も、四十を過ぎてからのことだ」と思つて居た。その四十が來て、考へるのも、讀むのも、書くのも、働くのも、遊ぶのも、飲むのも、食ふのも、「今だ」と思つて居たが、

非の「今」に、何とも云へぬ空洞（うつろ）のやうな頼りなさを感じて居る。甘い木犀の香に誘はれても、小色の一つを漁り歩くやうな浮かれ心にはなれなくて、ともすれば暗い沈んだ心持になる。「うんと讀むのだ」と思つても、近眼三度が難儀なる。「うんと書くのだ」と力んで見ても、十枚、二十枚と書き潰すばかりである。松茸や栗や大根などが、美味く食べられる時候になつたが、チビリ〳〵飲で居ると、自分で自分が判らない心持に引張られて、涙がホロ〳〵とこぼれて來る。「こんな事ではいかん……」と、強く大きく笑つたり、はしやいでみたり、唄つたりしてみても、果は自分で自分の聲に誘はれて、追分節、安來節、磯節、浪花節、すべてが涙の種になる。

「秋風のせいなんだ。私の知つたことではない……」などゝ云つてみても、惻々として迫り來る哀感を、私は私の力で、何うすることも出來ない。

◇

それで居て「老た」などゝは、夢にも思つたことはない。私の「青年」が私の心の一隅にあつて、常にピン〳〵して居ることを、私は私の健康、境遇、職業に向つて、心から感謝して居る。秋風に面して、涙ぐましい氣持になるのは、四十四の私ではなくて、「青年の私」のセンチメンタルなんだと、さう思ふこともある。

新聞記者に、年齢は無い筈だ――。よく先輩扱ひされたり、老人階級視されたりするが、額が廣くなつたと云つても、頭は未ださう禿げたと云ふのではない。東宮殿下の御歸朝を、横濱に入港した御召艦上に奉迎して、他社の連中の氣づかぬ雜觀を拾はうと、近眼をショボ〳〵さして居ながら、いざ、殿下を中心に、宮様方や、大臣や、元帥や、大勳位などゝ共に、三鞭の盃をあげる刹那になると、涙が止め度もなく頰に流れて落ちた。さうなるともう、雜觀も何も無くなる程に、私の中には未だ若々しい感激性が、強く濃く流れて居ることを知つた。「それは彼の場合、君ばかりではない、國民性なんだよ」などと云ふな。刹那の見聞を忽緒（ゆるがせ）に出來ない大切な職能發揮の立場に居ながら、私の若い心は、眼前に展開された稀有の光榮に、感激し陶醉してしまつたのである。從つて私の奉迎記事は、無殘にも失敗に終つたが、その失敗に依つて、私の中に流れて居る若い感情に、私は喜びの胸を波立たせることが出來た。

二十二三年も新聞社に衣食して、いろんな事件や問題を取扱つて居ると、神經は宜い加減に痲痺してしまつて、大抵の事には心を動かされなくなる。怪我、病、餓、死にも、哀別にも、離苦にも、様々の惡の記録にも、平然として月並の筆を運ぶだ

けの訓練が、何の省察もなく習慣づけられて來た。「淺間が爆發した」と云ふと、「ほう、又やつたな」と笑ふ。「何處其處が火事だ」と云ふと、「この風なら燃えるだらう」と云ふ。「何々博士が死だ」と云ふと、「二號標題で宜いだらう」などゝ語る。甚だしいのになると、「濱田榮子が自殺した」と云つても、それを大袈裟に大問題らしく取扱つて居る他新聞の態度を、馬鹿〳〵しい事に眺めたいやうな氣持にさへなる。初號、一號の大活字が行列して、二段抜き、三段抜き、四段抜きと云ふ花々しい編輯上の技巧や體裁などが、淺間しいことに眺められたりする。

それで居て、鐵筆版の通信を見て居ると、何でも無い市中の一些事に、ひどく心を打たれることがある。六十歳位の老人が行倒れて居たのに、通行人は誰も介抱して遣らなかつたと云ふ記事を見て、落涙したこともあつた。ポーランドの孤兒が、嬉々として東京驛を出立する記事を、赤インキで添削して居ると、涙がこぼれて困つたこともあつた。何でもない人の葬式の記事を書いて居る時に、「幼い遺兒が笑つて居た」と云ふ一段になると、咽ぶやうな氣持になつた事もあつた。

一方の私は、もう「老」に一歩を進めて居るのであらう。けれども他の一方には、まだまだ「若い私」が生きて居ることを、私は私の職業の上に、日毎のやうに體驗して來た。

◇

大地の上に、シカと兩足を踏み締めて、ほんとに充實した心持で働き得るのは、四十を過ぎてからだと、私も心からさう信じて居る。何時ぞや田山花袋氏に逢つたら、「人間も四十と云ふ聲がかゝらなければ、色も戀も苦勞も人情も、世の中の事は判らない」と云ふ意味の事を話して居られた。「五十になつてから酒や莨を廢してからは、爲事が世俗的になつて、感興に動かされると云ふことは少くなつたが、然し反つて若い男女の物語などは、忌憚なく書けるやうである」とも話して居られた。

人に依つて、早熟、晩熟の差はあらうが、私の三十代は、今から思ふと、何事も無我夢中と云つて宜かつた。一人よがりの何も彼も知つたか振りをして、自分の事や他人の事を書いて來たが、思へば、花道の七三に立つて、舞臺に着かぬ危なかしい足どりで、凡優の凡藝を臆面もなく、暴露したに過ぎなかつた。大向ふからの冷嘲や熱罵やを、大喝采と聞き誤つて、一人で氣を遣つて居る大根役者に過ぎなかつた。さうした私は、四十と云ふ聲に脅かされると、俄に老が迫つて來たやうに感じて、「四十だ、四十だ、これからだとは思へども、何だか哀し、秋の風吹く」と云ふ歌を、扇子に書いたほどであつた。そして四十になつた年の中央公論新年號には、「醉ざめの悲哀」と題して、四

十になる時の心持を、悲觀した調子で書いたのである。

その頃、新橋の博品館前で、舊友小川煙村に逢ふと、「僕も君のあの心持は經驗したが、四十が一か二になつて見給へ、また若い心持になるから……」と慰めてくれた。その時は、「さうかなア」で別れたが、今になつて見ると、煙村私を欺かず、全く三十代に還つたやうな若々しさを感ずることもある。「二十代三十代の世の中は、まだ足が大地に着いて居なかつたのだ。自分では何んなに確りして居た積りで居ても、未だほんとに掴むものを掴んで居なかつたのだ」と云ふ氣持も起つた。世間で人を使ふ側に立て居る者は、四十を過ぎると、もう老人扱ひにして、ものゝ役に立たぬやうに云ふが、使ふ側には五十、六十の老人が、何時までも時を得て居ると云ふ奇觀が、何の方面にも見受けられる。我が杉村楚人冠の如きまでが「探訪に出かけるのは、若い間のことだよ。四十を過ぎてはなア、分別臭くなつてはなア、尻が重くなつてなア……」などと云ふから心細い。「日本の新聞紙界も、二十代の若造を、一人前の記者で候と世間へ送り出して居る間は駄目だ。三十から五十までの壯年、中年が、事件や問題を扱はねば駄目だ」と、私は言ひたい氣持になる時もある。

けれども、斯うした心持は、若い人の側から見れば、淋しい負け惜みを云つて居るとしか思はれまい。政治家や實業家や軍人は、齢を重ねるに從つて、重味も加はり、金も出來るし、勳章の數も殖えるけれど、文章で衣食して居る者の上には、原稿料と月給の差別を問はず、襲ふものは老と不安と衰へとばかりである。人を眺め世を見る眼で、いよ〳〵本舞臺にかゝらうとしても、何處やらに自分を裏切る冷たい手が、ヒヤリと氣遲れさせるのである。そのヒヤリとした味が、秋風の心ではあるまいか。

「四十だ、四十だ、これからだとは思へども、何だか淋し、秋の風吹く」と歌はざるを得ぬ私はほんとに心細いのである。

◇

たまにカフェーへ行つて、給仕女の姿を見て居ても、何だか世の中が變つて來たやうた氣持がする。ビールやウヰスキーに醉つて、春めいた浮かれ心になつて、口笛を吹いてみたり、戯談を云ってみたりしても、何だか空氣銃をポン〳〵射つやうで、ドーンと的中する硬い反應と云ふものが無い。

「私達はもうカフェーの客ではない」さう思ふと、折角、春めいて居た心持が、俄に背負投げを食はされたやうな、味氣ない失望を味ふのである。それで居て、若いとか美しいとか云ふ見た目の感よりも、派手なゴテゴテした風姿よりも、クリームの

匂と、白粉の香と、香水と、肌いきれとなど、異性が醗酵する刺戟を、嗅覺のみに強く感ずるやうな氣分になる。醉つた勢ひに乘じて、「君、握手しやう」と手を差出すと、大抵の給仕女は「ほほほ」と笑つて、白い手を答へるが、握つた感は氷のやうに冷たくて、そこには少しも色香の血が通つて居ないことを覺える。二圓餘の御會計に五圓紙幣一枚出して、「おつりは君に……」の場合に限つて、秋波に似た目顏の答禮を受けるやうでは、私のカフエーも、世界が末になつたらしい。

「もうカフエーの女の視野から、外へ逸し去つてしまつた私なのだ」と、さう思ふと全く四邊が暗くなつたやうな氣分に沈む。飲むことゝ食ふこととの他には、他に需めることを許されて居ない日本のカフエーやレストランだと云つても、そこに若い美しい戀盛りの娘が居て、自由に接觸することが出來て居る以上は、そこに出入するいろんな男が、飲食以外の興味と好奇心と要求とに引ずられて居る事實を、無視する譯にはいかない。從つて「四十を過ぎた中年者だ」と云ふ自覺に、或る程度の引け目を感じて居ても、その雰圍氣の中に入ると、飲まぬ前、醉はぬ前から、既に心の若やかさを感ずるのは當然である。その若やいだ氣持に乘じて、年齡を超越した三昧の快樂に、一歩を深入してはしやいで居ると、やがて酬はれるものは、「旦那」であり、「先生」であり、お世辭笑ひであり、冷たい握手ぐらゐなものである。それがライオンやプランタンや、アメリカばかりでなく、堀末町の「トンカツ一丁」や、重友の浪花節がレコードで唸る所でも、同じやうにさうであるから心細くなる。

歡樂を追ふ心に、沸え切らぬ裏切を見せられるのは、淡い寂しさを覺えるものである。しかたが無いから、今度は怪し氣な小料理屋を漁り歩いて見る。そこには必らず、若い女中とか酌婦とか云ふ類の女が居て、觸らば落ん風情を見せながら、カフエーの女よりも、より接近して、より深切らしく、話相手になつたり、酌したりしてくれるが、結局は其の場の淡い快樂に終るのである。尾久のラジユーム、五反田の鑛泉宿、新井の藥師柴又、玉川、目黑、市川、船橋、調布、板橋、飯能、川越、熊谷、秩父と云ふ風に、カフエー程度の御會計で遊べる歡樂郷は、何と云つても近郊に多くなつた。市内では鷄料理屋に、脂粉の香漲る家が澤山出來たが、思はせ振りの表情にのみ修練を重ねて來た女中種族、酌婦階級の女に依つて、半夜の享樂を貪らうとする四十男の彷徨は、哀れにも餘り圖の好いものではない。

性慾歡樂の對象は、何と云つても花街と遊里であるが、そこにも秋風に嘯く男の影は、次第に薄くなつて、すべてを「金」に依つて解決しやうとする古い因習が、幻滅の悲哀を感ぜしめ

る。追つて行くべき歡樂の世界は、廣ふして深いけれど、享樂の月日から捨られやうとして居る男の上には、この秋にして、既に冷たい風が吹く。

◇

公娼廓へ入り浸つて、「虚僞」で飾られた色香の世界に、一顰一笑する男の姿は、若くて溌溂として、無分別な時に限る。四十を過ぎた男の廓遊びは、戸惑いした犬のやうで、折角醸されさうな遊びの情趣を、中年と云ふ引け目や、金勘定や、いろいろの分別が壞してしまう。「もう遊廓などへ、足踏みすべき齡ではない」と、たゞさう思ふことだけでも、一つの世界を狹められたやうな味氣なさを覺えさせる。

東京は便利な都會である。新橋、烏森、神明、芝浦、麻布、赤坂、荒木町、富士見町、神樂坂、講武所、天神、數寄屋町、淺草、柳橋、葭町、蠣殼町、浪花町、日本橋、白山、向島、深川、龜戸、目黑、五反田、道玄坂、何處へ行つても、藝妓の群が巢くうて居て、所に依つては鷄屋の二階でも、蕎麥屋の離れ座敷でも、當世流行の鴨緑江節が、賑かに聞える世の中である。秋風の前に心傷む折々、謂ふ所の歡樂を脂粉の方面に求めやうとならば、一擧手一投足の勞と、數十金の浪費に依つて、春の心を喚起すのは、眞に易々たりと云つて宜い。けれども、其り場面に沒頭すると、青年時代のやうな興趣は、何としても湧いて出ずに、反つて樣々の見聞が、「遊びも詰まらない」と云ふ反對の結論を、醉ざめの心持へ引き付ける。

何んな方面へ行つても、快樂を快樂として、心から享け入れることが出來ないのは、痛ましいことである。その時その場では、人並の悦樂を感じたつもりで居ても、それは僅に刹那か一瞬のことで、後から〳〵頭を擡げて來る感情は、アツ氣なさと悔と充されぬ不快とである。それにはいろ〳〵な事情や理由が、自分にも氣付かぬ程度で、手傳つて居るにせよ、第一に爭れぬものは、自分自身が「もう其の齡でない」と云ふ潛在意識が、ヒヨイと飛び出て居るためではなからうか。同時に中年者と云ふ引け目や、遠慮や、分別や、鷹揚さやが集つて、歡樂を求める心を、傍から〳〵壞したり裏切つたりして居るためではないか。考へて見れば、さう氣がついて然るべきであり、覺悟して居るが當然でありながら、承知しないのは、道理で抑へられぬ感情である。「藝妓を相手にして遊んで見ても、一向に面白くない」と云ふことになるのは、何としても自分の月日が、享樂の世の中から見放されて居るからであらう。

けれども、斯うした方面に於ける歡樂的設備や條件が、中年者を主要な相手に置かずに、青年を第一位に算へて居る目的の

上にも欠陷は淺からずあらう。第一、藝妓の群にしたところで、その大部分がねらつて居るのは、二十歳から四十までの男性で、青年壯年の他には、情感を動かさうともしないし、また動かされやうともしない。いろ〱の營業者にしたところで、分別盛りを相手にすることの收支決算と、無分別者をチヤホヤ煽てゝ得るところの決算とに、格段の相違があることを承知して居る以上は、中年者を第二、第三に數へるのは爭はれない事實である。自分自身の心柄のみでなく、凡ての機關が、若い者本位に運轉されて居る以上、私達は寄食者か寄生蟲のやうな立場に居て、歡樂を求めるやうな事になる。

「私はまだ若いのだ」と氣張つて見ても、若きが上に若きを求める世の中では、何としても四十男の惱みに落ちるのが例である。別な歡樂の世界を求め、別な安住の世界を探ね出さぬ限り、この淡い心の一部に漲る空洞のやうな感情を、何とも片附けることが出來ない。私は今や、何も彼も中途半端のやうな狀態の中に居て、木犀の香にも醉ひ得ぬ秋の姿に、涙ぐましい男になつて居るのである。

「若い時には、電車の中でも、劇場の中でも、道を歩いて居ても、若い美しい女が目についたり、先方も少しは注視したものだが、今は何んな女を見ても、さう心を動かされないし、先方などは、頭で存在を顧みてくれないのだ」私は斯う云つて、同じ中年の男と二人で、酌み交しながら語つたこともあつた。

◇

「落ち着く所は、家庭の他にはない」

さう思つて、私は身近な私の秋を、こゝで初めて眺める段取になつた。暑い夏に虐げられて、心も身もヘト〱になつて居る私のために、秋風は甦生を意味した喜びの音づれである筈だのに、何うして底冷たい、淡い哀しさに、脅かされたり、慄へたりするのであらう。

「大正二年の秋が、祟つて居るのだ」と、私は直ぐにさう思ふ。九月十五日に妹が死でから、その病氣が私一家にまで傳播した陰慘な思ひ出は、流れ行く歲月に反比例して、何時までも新しく生々しく、秋を喜ぶ筈の私の心持に、一脈の暗さを投げかける。明日は彼岸の中日だと云ふ今、中澁谷の貧居の二階で、萬年筆を走らせて居ると、欠伸一つする間に過ぎた十年の月日でありながら、たつた今そこに經驗して居る「秋」のやうで、すべてが昔日の見聞に浮び上つて來る。

妻が死でから十年、妻を娶つてから七年、私の生活は何うやら落着いて來た筈であり。落着かねばならぬ筈であるのに、殆ど每日のやうに、脅かされ通しに來た。「何も彼も私が足らぬ、

らだ」と、事もなげに諦めてしまうには、餘りに大きい悶えと悩みとが、何んなに私の春や秋を、さいなむだことであらう。私は此の六七年間に、妻と子と私との三角形に似た關係に依つて、何んなに心臟を痛め損ねたことか。子に對する父の愛、妻に對する夫の情に、何の變化もあらう筈はないが、生みの子二人を家に殘して、私の許に嫁いで來た妻のためには、その事が旣に不仕合せである上に、生さぬ仲の子三人と云ふ二重の桎梏に、彼の女は人知れぬ苦勞を嘗め通して來た。彼の女自身では、「私に別な子供がある筈はありません。こゝの三人の子が、私のほんとの子です」と云つても、それは唯さう思ふのみで、根ざすところ深い血肉の事實は、次から次へと彼の女の幻影を破つて行く。

私の三人の男の子にしたところで、七年の間に習慣づけられた心持から、「お母さん」と呼び做つては來たものゝ、別な母が麻布善福寺の墓地に眠つて居ることを、何うして忘れることが出來やう。さうした妻と、さうした子とを、噓の母と子供に結びつけて、その一角に立たせられて居る私の立場は、感情を先にせずに、理智の分別と抑制とで、一切を處理せねばならぬ。一方に厚く一方に薄いやうでは、不等邊三角形の一角が、妙な形に壞れるのみでなく、波紋はすべてに渡つて苦しい悲しい紛雜を生じやう。この夫としてのみ立れぬ境涯、父としてのみいかれぬ身分は、私のやうな感情の單純な男にとつて、かなり重い負擔である。右の腕には三人の子を抱き、左の手には妻を引いて行くと云ふ、餘りに平凡な事實でありながら、行路の難は反つて平坦な道に多い。巧く遣つて行かうとあせればあせるほど、何處かの一角が常に動搖して、波瀾重疊の大渦卷を起す。私と云ふ船頭が、海圖には明るくても、確りした手腕が無いために、一寸した風雨にも、臨急の施すべき策を知らず、遂には飛でもない破滅を招來しさうな豫感が、何時も私を脅しつける。

「何も彼も、自分が足らぬからだ」と、先づ私自身を鞭打つけれど、船頭一人にのみ艪櫂の苦勞をかけて、他の乘込が平氣な顏をして居る樣子を見ると、思つてならない事でありながら、時には投げやりな氣持にもなる。けれども其の「何うにでもなれ」が、行くところまで行き得ずに、其の日暮しの中途半端にふらついて居ると、結局は二重にも三重にも苦勞を倍加して、いよ〱難場を凌いで出ることが、一層の大爲事になる。

今まで七年の間、私は何をして來たのかと、自分で自分の過ぎ去つた月日に、たとへ難い悔を感ぜずに居られぬ。「何うにでもなれ」と、一方の心では思つて居ながら、その「何うにでも

なれ」にこだはつて、何時まで今のやうな生活をつゞけることか。

◇

或る男が來て、次のやうな話をした。――

「私の妻は、八月上旬から、腸胃を病み煩つて居ました。下旬から九月上旬には、快復期に向つたけれど、心の煩ひは一層激しくなつて、強度のヒステリー症狀を見せたのも、一日や二日のことではありません。時には餘りに大きな聲で、暴れ狂つたりするので、家の前の塀外には、近所の人達が十人も二十人も、異樣な表情をして立つて居たりしました。

おも湯がお粥になり御飯になつたら、一緒に伊豆の溫泉へ行つて、二三週間を靜に過さうと、話し合つて居ました。本人も其の氣になつて居たらしかつたが、九月十日の晩になると、俄に一人でも行くと云ひ募つて、鞄二個に着換を詰めた後、八時過ぎに出かけて行きました。あの病氣が募ると、事の理非を說いても、叱つても諭しても、萬事を自己中心に考へて、何うにも手が着けられぬので、私は其の儘に放つて置きました。華嚴の瀑より他に、死場所はないなどゝ云つたり、私や子供や、實家に宛て、長い〳〵遺書を認めて見たり、サメザメと泣いて居るかと思ふと、朝から晩まで怒鳴り續けて見たり、彼の女の心の平靜は、一方ならず失はれて居ました。

伊豆の溫泉へ行つてからは、二三度手紙が來て、カステラや葡萄酒を送つて下さいと云ふかと思ふと、すぐ離婚の手續きをしてくれと云つたり、身體は少し丈夫になつたらしいが、心の病氣は治らない樣子であります。費用は私が持つて居ますと云つて、貯金から幾らか引出して、勝手に出て行つてから、今日で二週間にもなるが、「私に對する子供の態度が變らぬ以上は、半年でも一年でも歸りません」と、手紙で云つて來たりしました。子供に對する自分の態度に就いて、少しも內省しやうとはせずに、何處までも自分を優越の立場に置いて、私の感情を一擒一縱するやうな態度も、病氣がさせる業でありませう。長い間苦勞をかけた妻に、この儘で別れてしまうことは、未練などゝ云ふ感情の他に、何だか善い事ではないやうな氣持もします。然し私の妻であると共に、子供達の母であつて見れば、此の際、子供達の考へや感情を無視して、この上不徹底な、三角關係を續けて行くことは、自他のために、大に熟慮せねばならぬ事であります。理智と感情とが錯綜して、未だ何ちらにも旗幟を鮮明にすることが出來ないのは、私が愚なためでありませうか。」――

或る男の話を聽いて、私は能く似た話もあるものだと、感心

もし驚きもした。私の妻も今、病氣保養のために、伊豆方面の溫泉へ行つて居るが、今日で十日餘の間、二三度來た手紙に依ると、矢張り妻としての感情と、母としての理智に、苦しみ悶えて居る樣子が見える。靜な山の中の溫泉宿で、久し振りに心身を孤獨の境涯に置いて、過ぎ來し方や行く末の事を考へて居ると、涙が止め度もなく流れることとであらう。そして一方の心では、何の報ゐられることない苦勞の渦卷に、この上、道連れになつて溺れてしまつては、一生涯、立つ瀨が無いぞと、囁くものがあるに違ひない。同時に他の一方の心は、過ぎ去つた六七年の月日に對する思ひ出や愛着やに引張られて、容易に今の渦卷の中から、這上らせまいとする感情の囁きに傾くであらう。

妻がさうであるばかりでなく、現在の私の心持が、さうであることを知つて、私は中ぶらりんの狀態の中に、落着きのない昨日今日を送つて居る。一日も早く何れかへ、片付けてしまはねばならぬ心持でもあり、事柄でもあるかと思ふと、何だか怖しいものにでも觸れるやうで、謂ふやうのない不安が、私を臆病者にして居るのである。

「えゝ、面倒だ、何うにでもなれ」が、「これではいけない」に私の心持を一層、冷たくする。

◇

何うにもならなくなつて、妻と別れてしまつた後の事を想像すると、私はかなりに寂しく味氣なくなる。子供達の心の生活のために、もう斷じて「母」と呼ばせる異性は近づけまいと、今の私は考へる。經驗に教えられた私の感情が、その事は大して困難でなく、實行し得られさうだと囁きもする。けれども私自身の生活は、四十男の孤獨な月日は、何だか斯うみじめさが纒綿するやうな哀れを感ぜずには居られない。

そこに、私の心の鬪ひが始まる。子供達と共に、何の煩ひされることない世の中を送り得ることは、幸福な事に違ひないと共に、正しいことであり、眞實の事であるかも知れない。三角關係が不等邊に、何のこだはりもなく、このまゝ續けて行かれるものなら、平凡であつても無事であるが、そこには何としても、虛僞の感情が手傳つて、妥協を迎へたり、不純を加へたりする。父が父としてあり、子が子としてあることに、何の煩累さるゝことなく、一直線に大手を振つて、愉快に樂しく、生活を生活するには、何としても現狀を破壞せねばならぬと、私の理性は教えてくれる。今では感情の動きまでが、「眞實に復れ」と、弱い私を急き立て居るやうでもある。

けれども別な感情は、「子供達ばかりと共に、ほんとにお前は

暮して行けるか」と、嘲けるやうな氣持がする。「四十を過ぎたと云つても、未だ性慾の營みから、老ひさらばつた齡でもないお前が、何うして獨身生活を送れるものか」と、一方では又云つて居るやうに聞える。「何うせ、三度目の細君を娶るのが落であることは、チヤンと判り切つて居る。そして今の苦勞を、二重にも三重にもする愚を、お前は敢て厭はぬ積か」と、笑つて居るものがあるやうにも思はれる。「お前の愛が足りないからだ。お前自身の內省が、まだほんとに徹して居ないからだ。別れやうと思ふ前に、なぜ今の細君を、もつと〳〵愛さうと思はないのか」と、他の心持は、私にさうソツと囁きもする。「細君は心の病氣に取つかれて居るのだ。それを治療する者は、君の心の他に無い筈である」と、次から次へ、いろんな囁きが聞える。三角形の家庭關係と云ふことは、十年前の妻の死から、私の上に運命づけられた生存上の桎梏なのであらうか。

男女の心と云ふものは、不可思議である。斯うした場合に、他に隱し女か隱し男でもあると、すべての道理を閑却して、直ぐその方へ引張られて行くものらしい。そして案外平然として、何の苦慮もなく、何も彼も解決することが出來るらしいのは、世間の實例に、度々見せつけられて來た事である。けれども幸か不幸か、他にさうした異性を有つて居ない私は、何時までも妻に對する色香の愛着に引つけられて、愚圖〳〵とこだはつて居るのである。妻にしたところで、いろ〳〵に言ひはするものゝ、六七年を私の妻として送つて來た月日の上に、思ひ出が獨らず愛着から、全然、逃げ切れずに、何時までも〳〵悲い感情が、こだはつて居るのではなからうか。

斯うした經驗を、不幸だと云つてしまうには、餘りに苦い犧牲を拂ひ過ぎて居る。私の生活が、これから後、何んな風の變化を見るにしても、私にこれだけの省察を與へた月日に對しては、心から感謝せねばならない。そして妻も、子供も、自分をも、愛しこそすれ、心から憎いと思ふものは、一人もあつてならぬことを、私は上帝の前に誓はう。

秋風が吹いて來た——、斯うした私であるが故に、木屋の脊にも胸が疼く。

◇

有樂座の久米秀治君が、初日の觀覽劵を贈つてくれたので、廿一日の夜を女優劇に興じた。谷崎潤一郎氏の「十五夜物語」と、田中純氏の「廐舍の悲劇」が、何と云ふことなしに私の胸に或る響を與へた。

馬丁と通じて子を生むだ爲めに、武人氣質の父の憤怒にふれて、生みの家へ女中として厄介になつて居る姉娘よりも、日

に育つた其の子のいじけた、こまちやくれた性格が、遂に盜みを働く破滅を見せられて、私は鉛のやうな重い氣持になつた。「既合の悲劇」は、世間の何處にもある。一歩を過れば、私の子供達の心の上にも、さうした暗い影が……と思ふと、私は急に暗い心持になつた。

「十五夜物語」では、浪人に扮した松本幸四郎が、あの調子で事を壞して居たけれど、それでも夫婦の戀心を裏切る眼前の幻滅に、永遠の戀を死に望む心の徑路が、私には同感することが出來た。何んなに慕ひ合つて居る戀仲の夫婦でも、いろんな事情に依つて、冷たい溝が横はると、その戀心が切なれば切なるだけ、反比例に何うにもならなくなるものである。其の浪人や女房は、蟲の聲哀しい月明の夜に、相抱いて刄に斃れたけれど、大正年代の男や女は、そのまゝ有耶無耶に過してしまうか、別れてしまうが、大問題である。「何だ、人の事ではないぞ。自分達の心の或る影を、見せつけられて居るのだ」私はさう思つて、急に胸苦しさを感じた。

さうかと思へば、岡本綺堂氏の「子供役者の死」のやうに、自分の愛妾が役者狂ひをしても、綺麗サツパリと思ひ切らせるやうに、乙な取扱ひをする大親分もある世の中である。何れも此れもが眞實の人間愛の流れであるにしても、表へ見える形象には、樣々の迂餘曲折があつて、感の度合に濃淡厚薄の差別があるのも面白い。そして「十五夜物語」の浪人にもなり得れば、「子供役者の死」の大親分にもなり得る性情が、私の上にも流れて居ることを、私は如實に知ることが出來た。たゞ私は何處までも、生きて居たいことを思ひ、樂しい月日を送らんことを願ひ、幸福な生涯を辿らんことを、翼ふのである。月が何んなに美しいと云つても、蟲の聲が何んなに哀しいと云つても、私の死にはまだ／＼長いゆとりがある。そして何んな事でも、堪え忍ぶことが出來るなら、何も彼も現狀のまゝにして、たゞソツとして置いて、その日／＼の一顰一笑に、屈托のない世の中が送りたいやうな氣持にもなる。――

芝居を見て、こんな心持になつたことは、私にも珍しい。何處へ行つて、何んな芝居を見ても、滅多に藝術鑑賞の三昧境には引入れられずに、反つて樣々の暴露された生活苦に、惻隱の情を催すぐらひのものである。「彼の役者も自分では、一角の名優であるやうな思ひ上つた態度で、自分一人だけの科白を誇大に表現して居るが、何と云ふ淺間しい藝能なのであらう」と、私は大抵の場合に於いて、實感から來る破滅に、芝居を芝居として娯しみ眺めたことはなかつた。それが前夜の有樂座では、事毎に身につまされて、暗い氣持を感じたのは、我ながら可笑

じいほどである。

快樂を快樂として享け入れることが出來ない性分は、年齢は、不幸な生れあはせであり、不幸な廻り合せである。寄席に入つて、くだらない落語を聽かされても、ゲラ〳〵と笑ふことの出來る善男善女を、私は心から羨ましいと思ひ、幸福だなと思ふ。

◇

「何も彼も、年齢のせいなんだよ。自分でいろ〳〵理窟をつけて見ても、矢張りそれだけ、老の入口に近づいて居るのだよ……」

と、誰であつたか、私に云つたことがある。この心の空虚を充すために、他力信仰に馳せて行く人々もあれば、運命觀の上に立つて、諦めの宗に歸依して居る人々もある。神や佛の加護に依つて、大觀大悟の上に生きて居る人達までが、滑稽至極に見えるやうな、餘裕のない私の生活では、たゞ秋風吹く前に立つて、様々の哀苦に自問自答するのが、せめてもの慰藉であり、宗教であるかも知れない。斯うした十年の體驗の上から、私の「生活哲學」を創造しやうなどゝ、そんな大それた冒險を、私は夢想だにして居る者ではない。

爲事の上に、歡樂の上に、家庭の上に、私の生活の諸相は、何處へブツつかつても、裏切られてばかり居る。所詮は「其の日〳〵の生計を、勤勉と努力とに依つて、充實して押し進めて行くより他はない」と云ふ月並に、結着することは判り切つて居ながら、もつと他に何か、別なものがあるやうな、たゞそれだけでは物足りないやうな感情の空洞を、片づける途はないものであらうか。爲事に勵しんでも、酒色に馳せても、家庭生活を凝視しても、心の一部に巣ふところの空虚な感情を、充し難いと云ふことは、大きな不幸の一つであると云へやう。四十を過ぎた男の心持の中には、それと明ら様に氣づかぬ程度で、何人の上にも共通して居るのが、この淡い戀ざめであり、酔ざめであり、たいくつなのではあるまいか。

何んな小説を讀んでも、ピーンと來たり、ギクツと來るやうなものが、容易に私を狼狽へさせてくれぬ。皆さんが名文家で、小器用で、藝當が上手なことには、ホト〳〵感心して居ながら、「まだ苦勞が足りないな」などゝ、一人極めにタカをくゝつてしまう。人一倍、何でもないことに、感心する性癖で居ながら、兎角アラや缺點ばかりが眼について、それを自分の行つて居るものに比較し、「先づ宜かつた」と安心する。若い仲間から傑い奴が出ると、それが自分の存在には、何の動揺も及ぼさない事實でありながら、平靜な心持では、賞賛に附和雷同しか

ない心持にさへなる。

耶蘇教の傳道や、女學校の教室で、婚期を過した老嬢の何人でもが、夫婦者や若い女に有つところの反感性が、四十を過ぎた男の心の中にも、何時の間にか巣うて居ないとは云はれない。カフエーの女や、藝妓や、女優などに關係して、うつゝになつて居る男の姿を見ると、自分の過去に思ひ合せて、同情しやうよりも、先づ撲つて遣りたいほどの馬鹿馬鹿しさを感ずる。これなども、老境に見る厭な型が、男の中にまで巣つて居る一實例と云へやう。

若い氣持で居ても、直ぐ傍から〱と裏切つていく魔の手がある。それが異性に對する時、歡樂に向ふ時、爲事に面する時、同じ度合で作用するから、怖しいのである。

◇

「興味が無くなつて來たのだ。相手の態度そのものよりも、先づ自分の中に、生きて動いて居た浮かれ調子と、おつちよこちよい味とが、次第に影を薄うしたのだ」と、私はそのやうにも、考へてみることがある。

「自分の興味の動き方一つに依つては、何んな若々しい場面をでも展開して、その渦の中に沒頭し得られる齢である」と、私はさうも考へて見た。けれども折角の場面に登場しても、何でもない一擧手一投足に、ひどく感情を刺戟されて、直ぐに屈托しさうな心持になる。それをグツと引立るだけの興味と勇氣とが、何時の間にか失せて居ることに心づくと、もう出端をくじかれて、タヂ〱とへたばつてしまう。

何んな事に對しても、興味を失ふと云ふことは、怖しくて痛ましい。生き甲斐ありと信じて居た自尊心を、遠巻きにして剝ぎ取られるやうなもので、感情生活の大半は、衰殘の病人のやうに、へト〱になつてしまう。日常生活の單調を嫌つて、變つた場面に出沒したいとの好奇心は、かなりの度合で崩して居ても、いざ當面にぶツつかると、底冷たい不思議な感情がわざをして、次第に尻込みさしてしまう。興味が無くなつたことに感づくと共に、一通りや二通りの刺戟では、容易に動かなくなつた歡樂慾の老衰に、いらだゝしい哀れを覺えることが多い。

斯うした時に、金の有餘る人が辿るべき道として、書畫骨董の世界もあらう、建築設計の方途もあらう、蓄財もあらう、蓄妾もあらう。旅行悦樂に、慈善行爲に、何か知ら慰めを求めて歩く中年者の心持は、貧しさと富とを論外の沙汰にして、結局は淡い哀愁の中に、溺れ落ちてしまうが例である。その先人の通つた跡を、私は今、歩いて居る。私の歩いて居る轍の後から、若い人達が續いて來る。——

笑ふことを休めよ。舞文曲筆して居るのでもなく、自分の感情を弄んで居るのでもない。中年者の心の底から迸り出るものは、これを要するに「生活の大きな欠伸」なのである。

◇

久し振の好晴が、また少し曇つて來た。明日は彼岸の中日だと云ふのに、故人を偲ぶに適い秋の雨が、シトシトと降るのであらう。

學校で洋傘を失くして來た幼い子供に向つて、「お前が不注意だからだ」と叱つて居る間に、私は涙ぐましい氣持になつた。子供の不注意を叱る前に、先づ父として私の上に、叱られるやうな事はなかつたか……と、私は自分が哀しくなつた。親であり子であると云つても、たゞそれだけのことに依つて、威猛高になつた私の心に、恥らう何ものもないであらうか。

來春、大學の法科を出ると云ふ青年が、ノソリと來てノソリと歸つた。「家の子供も三人ながら、上の學校へ遣りたいものだが……」と、善良な父の心よ、その時はさう動く。私の興味も好奇心も、歡樂も、生活も、すべてが子供の上に繋がつて居るのかと思ふと、更に新しい重苦しさが、私の心持を追立てる。何としても、私は「私」であることを恕されない。

秋風が吹いて來た。「ほんとに、これからだ」と思つても、底冷たさに頬を撫でられると、謂はふやうの無い寂しさに、氣分は沈みゆくのみである。

斯うした惱みが、何時まで續くことか。

――彼岸の二十二日夕――

輕便・快適なる新式都市住宅アパートメント・ハウスの話

工學博士　佐藤功一

アパートメント・ハウスは英國ではフラットと呼ばれる。幾つもの家族の住んで居る貸家である。も少し精しく述べると、数

階の大きな建物を仕切つて、數戸乃至十數戸に分け、各戸には普通の家と同じく、寢室、廚房、浴室、便所等を持つて居て、――種類に依つては客間、食堂は勿論、書齋、圖書室、音樂室等を有するものもある。――そうして共同の表玄關、及び共同の階段に依つて出入するやうになつては居るが建物の中に於ては各戸が別な入口を有し、此入口に依つてでなければ其各戸の内に入る事が出來ぬやうに、各戸が獨立して居るものである。もつと解り易く云へば丁度海上ビルディングのやうな事務所建築の各室が、其内部に於て一家族の生活の出來るやうに、寢室、廚房、浴室、便所等に分れて居るものと見れば宜しい。即ち平家建の住家が左右上下に組合さつて出來た大きな建物である。

アパートメント・ハウスは既に古代から、地中海に臨んだ當時の文明諸國に於て、城壁を以て圍まれた都市や、或は背面を山で限られた港などに、是等の土地が漸々繁榮を極めて人口が增加するに從て、此の限界せられた地域に多數の市民を容るゝ爲めに必然的に生じた住家の方式であつた。中世紀の歐洲に於てもまた、此の如き狀態の下にあつた市街には、同樣に此の方式の建築を生じて居る。しかし是等の共同の住家は孰れも、其設備に於て甚だしく、不完全なものであつて、使用上不便極まるものであつた。火藥の發明は十六世紀以後都市の城壁を殆ど無用のものたらしめ、遂にこれを廢するに至らしめたが、また一方に於て、近代の工業の發達と此れに伴ふ交通機關の進歩とは、益々都市の人口集中を齎らし、是等商工業の隆盛なる都市に於ては、又此の種の住家の建築を馴致するに至つた。しかも是等の發達せる工業は、不便ながらも止むを得ずして生じたる不便にして不愉快なる古き此の種の方式を、頗る便利にして快適なるものに早變りせしめたのである。斯の如き住家の思切つた改良は、高層事務所建築と同じく孰れも米國人の手に依つてなされたものであつて、歐洲に於ける最新式の此種の建物に悉く米國式に則つて製作されたものであといふても差支はない。

大體の判斷に依つて、都市の大さは、其の周圍の住宅地域より中心街に至るに約一時間の距離を以て限度とするもので、市内に何等の交通機關なく、人々皆徒歩に依れる時代には、都市の地域は其の中心商業街衢より半徑四哩以上に發達する事が出來ぬものであるが、交通上に乘合馬車が用ゐらるゝやうになつて、歐洲の隆盛なる都市は中心より六哩乃至八哩に達し、鐵道が出來てからは、其の地域は半徑十哩乃至十二哩の距離迄擴り得る事となり、其の線路に沿ふて八方に其腕を突出すに至つた。斯くの如くにして、一時間三十哩の速度を有し料金の低廉なる郊外鐵道を利用し得る都市は、今や其中心より半徑三十哩

の圓周迄延長し得可き事はいふ迄もない事である。斯ういふやうにして、交通機關の發達に依つて生じた都市の人口集中は、また更に交通機關の完備に依つて、地域が横に擴げられて緩和せられるやうになりつゝある。併し住家が遠心的に單に郊外に向つてのみ發達し行くと見るのは大きな誤りである。都市が横に膨張し行くに從つて、其中心地は更に繁榮を極め、地價は中心地を頂點とし郊外に向つて漸次に低く傾斜をなす圓錐體を描くものであつで、建築物の高さも亦これに比例すべき筈のものである。即ち都市の周圍に郊外住家の發達すると同時に、中心地に近く高架的の集合住家の起るのが近代都市の一般の趨勢である。

日本の都市が中心點より周邊に至る交通機關の設備が未だ完全に行き渡らぬ爲めに、現在特に利便の地にある郊外の地價高きに過ぎ、これに比して中心地の地價は比較的低廉のやうに思はれる。ために郊外住家の發達著しからざると同時に、中心地に近き住家の改造も行はれざる様な狀態にある。然し乍ら是等の問題に對する施設や政策に付ては、これを當路の識者に譲り、玆には單にアパートメント・ハウスの如何なるものであるかといふ説明を主として述べたいと思ふ。

アパートメント・ハウスは、階數多き高架的建築であるために、其の地代が各階に割當てられるといふ事から、第一に地價の問題を解決し得るのみならず、經濟上猶ほ各種の利益がある。即ち第二には建築費の輕減である。建築は若し同じ程度のものが造營せられる際には、各戸の小家屋が建てられるよりも、集合的大建築をする方が、設計及び監督の勞力に於ても、材料の價格に於ても、工費に於ても、竣工の期間に於ても遞減を見る。從て地代の輕減と相伴つて、これが家賃の減小を來す事になる。第三には各戸の集合よりなる斯くの如き建物に於ては瓦斯、電氣、電話、熱湯等の供給の機關を一箇所に集合する事が出來て、從つて近代的設備を十分に利用し得るのみならず、此費用を各戸に割り當てる事が出來るから其パーセンテージは比較的安價である。第四には全家屋の保管を玄關近くの中央の事務所に在つて之れが取り扱ひをなしてくれて、且つ近代的設備が各室に遺憾なく整へられるから居室の保管と、傭人に要する費用の節減も出來、又時間に於ても經濟に行くのである。第五には郊外住宅と異なり、市の中心地に近いと云ふ利益を擧げる事が出來るのである。

斯う云ふアパートメント・ハウスは勿論最新式のものである。先きにも述べたやうに、遺憾なく最新式の設備を應用したアパートメント・ハウスは米國のものである。其の小さいものに

あつては、一床二戸づゝのもの三階、即ち三階六戸のものもあるが、大きいのになると高さも十數階で數十戸に別れて居るものがある。

一戸の室數は、厨房を加へて四室――便所を含んだ浴室を別として四室のもの最も多く、これに次ぐものは三室、五室、二室、六室などのものである。其の一戸の大きなものでは富者の居住のために二十四室に至るものがある。一戸一室のものもないではないが、一般アパートメント・ハウスとしては、小さなものでも二室以上のものを舉げなければなるまい。

二室のものは普通一方が居間(リビング・ルーム)で一方が寝室になつて居る。寝室には二人用の寝臺が置かれ、これに附屬してバス・ルームと稱して浴室と便所とを兼ねた小室が付いて居り、又居間の方は此所で食事もするのであつて、其の一方の壁の所には、小さな瓦斯竈と、食器棚と、冷藏函(アイスボックス)と、下から食料や器物などを搬ぶための小昇降器(リフト)がついて居るのであるが、少し注意した設計のものには、是等の全設備を一つの押入ふうの小室の内に納めて小厨房(キチネット)と呼んで居る。

要するに居間(リビングルーム)と寝室(ベッド・ルーム或は單にチャンバーなど〻呼ぶ)と厨房(キチエン)との三つからなり、これに浴室兼便所の小室がついて居る型を、先づアパートメント、ハウスの中の一戸の最も小さく纏まつて居る形式と見てよからう。

そして其の各室の大さは、居間が日本のものにして八疊から十疊位、寝室が六疊から八疊位、厨房が四疊から六疊位である。浴室は幅六尺に長さ八尺を最小限とする、勿論浴槽は臥浴槽(スリーパー・バス)で普通長さ五尺五寸程であるから、此の室は竪に長い方が宜しい。此の位の大さで浴槽一つと、洗面臺(ラバトリー)一つと、便器一つと、歯磨や石鹸などを入れる淺い棚を取り付ける事が出來る。

これより大きくなると厨房と共に四室――浴室を入れて五室のもので、それには厨房を除いたあとの三室の内一室を居間に、他の二室を寝室にしたものもあるが、一般としては、一つを客室(パロル)、一つを食堂(ダイニング・ルーム)、一つを寝室(チャンバー)に取るのである。此の組合せを先づアパートメント・ハウスの最も普通なる一戸の形式と見るがよい。勿論寝室には巧みに押入が取られてある。

斯ういふ各室の組合せから成る各戸が、共通の正面玄關と、共通の階段及び昇降器(エレベーター)と、共通の廊下或はホールに依つて結び付けられて、大きな高架的の建物を構成する。そして各戸に入るには、是等の共通の廊下或はホールからするので、是等の廊下或はホールが、地上の建物ならば道路に當るものである。各戸の入口は此の廊下或はホールに向つて唯一つある丈けで、此の入口を入れば其所には一寸した玄關或は廊下のやうなものが

あつて、これから居間や食堂や寢室や厨房などの各室に行き得るやうになつて居るのである。單にこれ丈けの話では、入口の所を他人から窺かれるやうに思はれて不安心のやうではあるが此の入口の戸は、內部からは握りを捩ねれば自由に開き得るが外部からは鍵を以てせなければ開き得ぬやうになつて居り、此の錠前が又異つた形の薄い鋼板を幾枚も合せて作つたもので、相鍵は到底用ゐ得ぬ事になつて居り、鍵は家の人と管理人とが持つて居る丈けであるからその心配はない。

此の四室の程度のもので各室の大さは、先づ客間が八疊位で普通圓卓子と書棚と長椅子と肱掛け椅子二つと、それから並椅子數個位が置かれる。食堂は大さ八疊位で、それも長方形のものがよい。之れには幅九尺五寸に長さ十三尺位のものもある。そして常には圓卓子であつて、兩方へ引けば中央から割れて、其間に板を入れて長いテーブルとして使へる所謂テレスコーピング・テーブルを据ゑて、並椅子數箇と、皿棚一つ位を置かれれる。それから寢室の大さは既に述べた如くであつて、玆には勿論二人用寢臺の外に、衣類箪笥と鏡付きの小箪笥と小卓と二三の椅子位が置かれる。寢室には大底押入が付いて居る、押入の戸は引き戸になつて居つて、其戸自身が又中央から所謂觀音開きに開くやうになつて居て、それを兩方へ開けば正面と兩側とに、三方に鏡があつて、たやすく體全體の合せ鏡をする事が出來るやうになつて居るものなどもある。

厨房には瓦斯用鐵竈と、陶製の洗流しと、食器棚と、冷藏函とが置かれ、洗流しの上には冷水と熱湯との二つのコックがあつて何時でも自由に、適當の溫度の水を洗ひ流しに充すことが出來るやうになつて居る。中には脇に洗濯器の付いて居るものもある。冷藏函は食料品容れで、夏は之れに氷を入れて冷藏するやうになつてゐる。そして厨房の一隅には所謂啞給仕（ダムウエーター）と呼ばれる小昇降器（リフト）が押入れの中について居て、これに依つて品物の搬入が自由に出來る、例へば注文した買物が下に屆くと、下からベルがなる、そして押入れの戸を開けて下と話の交換をして、宜しいとなつて注文品に下から昇つて來る。代金を入れて下に下げる事も出來るし、朝の掃除の塵の如きも之れから下に下げるし、食物などの上下にも使用出來るし、洗濯したものは之れに依りて屋上の物干しに上げられるやうになつて居る。又台所には常に眞空掃除機が置かれる。實際米國の台所と風呂場のやうに完全なものはない、殆ど實驗室といはれてもよい程に遺憾なく科學を應用して居る。風呂場には先きにも述べた通り普通浴槽と洗面台（ラバトリー）があつて、何時でも湯と水とを自由に出す事が出來る。便器は浴室の內にむき出しに付いて居るが水洗のもの

であるから、何等の臭氣を發散する事もない。

一戸が更にもつと大きくなつて五室のものになると之れに寢室が一つ增すのが普通である。勿論贅澤なものになると、寢室は一つでありながら食堂と客間と書齋などをとつたものもある。斯うして六室、七室となつて行く。其大きくなるに從ひ別に小さい女中室をとる。女中室も極めて大きなものになると必しも一つとは限らないし、各寢室に一つゝ附屬の浴室のついて居るものもある。又階下にあるものでは、地下室の自己專用の物置きに出入し得るやうな便宜を持つたものもある。富者の居住用のアパートメント・ハウスに於ては、室客なども大きくとつたのもあるし、其他の設備の複雜したものもあるが之れらを一々述べる必要もあるまい。

以上述べたものは最も設備の完備した種類のものを擧げたので、小さいアパートメント・ハウスで高さも三四階、エレヴェーターもなく、煖房なども自ら地下室に行つて石炭を燻べなければならぬやうなものもある。

次に之れらのアパートメント・ハウスの表玄關がどうなつて居るかを述べよう。設備のよいアパートメント・ハウスに於て、比較的小さいものでは訪問者が玄關に立つて訪問せんとする人の階と室の番號を見出して、そこのベルを押すと、之れに從つて室の中からベルを押かへす。すると電氣裝置に依り、錠前の所のカチ／＼鳴つて居る間に戸を開ければ戸は自由に開く。又訪問者がベルを押して、更に管に依りて訪問せんとする室の居住者と來訪の趣きを話して後に、前同樣の裝置に依りて戸を開けて入り得るやうな仕掛けのものもある。斯の如くして玄關より屋內に入つて或る階の其の室に達せんとするには、エレヴェーターに依る事勿論であるが、エレヴェーターにボーイが居らずに三階に行かうとするならば、エレヴェーターの三階と云ふ所のボタンを押せば自動的にエレヴェーターは動き出して三階に止まり、自動的に戸が開く。來訪者は三階の床に下り立つて、更にベルを押せばエレヴェーターは自然に又元の一階に歸るやうになつて居るのもある。

大きなアパートメント・ハウスになると玄關はホテルと同樣に常に開いて居て、其所に事務室があり、事務室の脇に電話交換台があつて、訪問者の云ふ所を交換手が電話で其室に通じて、そして後にエレヴェーターに乘ればエレヴェーターのボーイが所要の階に送つてくれる。若し訪問した居住者に一寸差支へがあつて、面接が遲れるやうな場合には、其間事務室の傍にある共同應接室で待つて居る事も出來るし、また若し不在であるならばそこにある各戸の番號別にした郵便函に名刺を置くやうにも

なつて居る。
　地下室には家番人(ジャニトル)の住居と、機關室と、物置きとがあつて、こゝから煖房や、冷水や、熱湯、電氣などが各室に行き亘つて居るのである。
　以上は中流及び中流以上のアパートメント・ハウスであるが、猶ほ勞働者のために作られたアパートメント・ハウスがある。それは一戸の間數は一室から五室位のものであるが、一室、二室のものが最も多くを占め、斯う云ふ小さい室のものは厨房はなく、浴室は共同であるし、一戸三四室以上のものに至つて初めて厨房と浴室とが各戸に附屬する。面積を節約するために公共用の廊下と、階段を持つて居らずに、何れも中庭にある鐵製の階段により外から各自の室に行くやうになつて居る。
　又獨り者のために一室或は二室の各戸に分けたバチェラース・アパートメント・ハウスと呼ばれるものもある。
　アパートメント・ハウスは椅子や、テーブルや、寢台などの家具は自分で持つて行つてもよし、又貸家具をつけて貰ふ事も出來るのである。
　約十五年前程前からカリフォルニアに起つたアパートメント・ホテルと云ふものがある。之れが初めは西部地方の都市に多く建てられたものであるが、此數年間東部地方に於ても盛んに建設せらるゝに至つた。之れは一戸の室數が少なく、設備の完全なアパートメント・ハウスの利便と、ファメリー・ホテルの高級なものゝ設備とを結び付けたもので快適と便利と、經濟との大きな利益があると稱せらる。一階に共同の大食堂をとつたものと、斯くの如き食堂のないものゝの二つに分つ事が出來る。
　今日此アパートメント・ホテルの各戸の標準方式は二室のもので之れに小厨房(キチネツト)と浴室の附屬したものである。アパートメント・ホテルの方は普通寢台を用ゐず、二室の各には隱し寢台がついて居る。實際生活の簡單を元とすれば寢室と稱して寢台を常置する室を設ける事は頗る不便なものである。此點に於ては日本のやうに何の室でも床さへ布けば夜間丈け寢室になる方が便利と思ふ。米國のアパートメント・ホテルでは之れと同じ工夫が行はれて居る。隱し寢台には二三の種類があるが、近來用ゐらるゝ一般のものは金屬製の脚部を疊み得る形のもので、脚を疊み込んで竪に起して立てて押入れに容れるか、或は化粧室との間の戸に此寢台の一端がついて居て、之れを立てゝ、戸に着けて戸の方を押せば、戸は所謂龕燈返しに回轉して化粧室に藏せらるやうになつて居るものがある。或は又作りつけの戸棚の引き出しのやうな所を引出せば、車に依りて其後に押込んである寢台が前に出てくるやうになつて居るものもある。勿論之れ等の

晝間寢台を隱藏する押入れの如き部分には特に通風の如き裝置がついて居て、寢具を常に清潔に保ち得るやうに出來て居る。

兎に角前に述べた二つの室には此隱蔽式寢台があつて、一方を食堂、一方を居間などゝ名づけて居る。

最近のものには厨房の冷藏函なども一々氷を容れるのでなく、地下の中心設備の、アンモニア・コンプレッサーから、ここにパイプが來て居て本當の冷藏庫のやうになつて居るものもある。

之れらのアパートメント・ホテルにはリーヴィング・ルーム一つ丈けで、之れに浴室と小厨房のついて居るものもなか／＼多いし、又小厨房（キチネツト）の代りに厨房兼用の小さい食事室のついて居るのもあり、又大きなものになると一戸六室に至るものもある。何れも電話、煖房、換氣、照明、給水、給湯、冷藏裝置から、塵埃處理の方法等悉く完備して居て、器物は食器用陶器から麻布類に至る迄貸して呉れるばかりでなく、食料品や雜貨の運び入れから塵芥の掃除に至る迄給仕がやつて呉れるやうになつて居る。それのみならず中級のアパートメント・ホテルでも、階下には共同應接室があり、屋上に庭園がある。中には舞踏室、讀書室、球戯室などのついて居るものが中々多い。更に高級のものになると、是等の設備が一層充分になる事勿論である。」

米國のアパートメント・ホテルは以上のやうに、室の容積を出來得る丈け切詰めて、そして出來得るだけこれに便利な裝置を施したもので、所謂必要にして充分に何から何まで行き屆いて居る。

これほど行き屆いて居りながら、なぜか夏季の暑熱を柔げる方法はついて居らぬやうである。煖房裝置はありながら冷房裝置に至つては考へられて居らぬ。

以上述べた、アパートメント・ハウスや、アパートメント・ホテルは、其の建物の性質上孰れも耐火構造である。

米國には斯んな進んだ住家建築が出來て居る。これを現在の日本の一般住家と比較して見ると、其所には大なる相違がある。それは勿論斯くの如き住家を日本に建てる事に付ては必ずや各種の方面に議論のある事と思ふし、また吾人のいふ所は日本の都市住家を總て直ちに斯くの如く改造せよといふのでもない、たゞ一日も早く斯くの如き建物が一つなり二つなり建築せられて生活の實驗に供せられる事を望むのである。住家の改善に付ては既に幾多の論議が行はれた、或は論議は既に殆ど盡くされたといふてもよかろう。しかもそれは單に紙上の論議に止まつて、一向實驗がなされて居らぬ。總てのものには實驗が必要である、殊に吾人の取扱ふ工學上の問題に付ては更に其の然

る所以を感ずるのである。

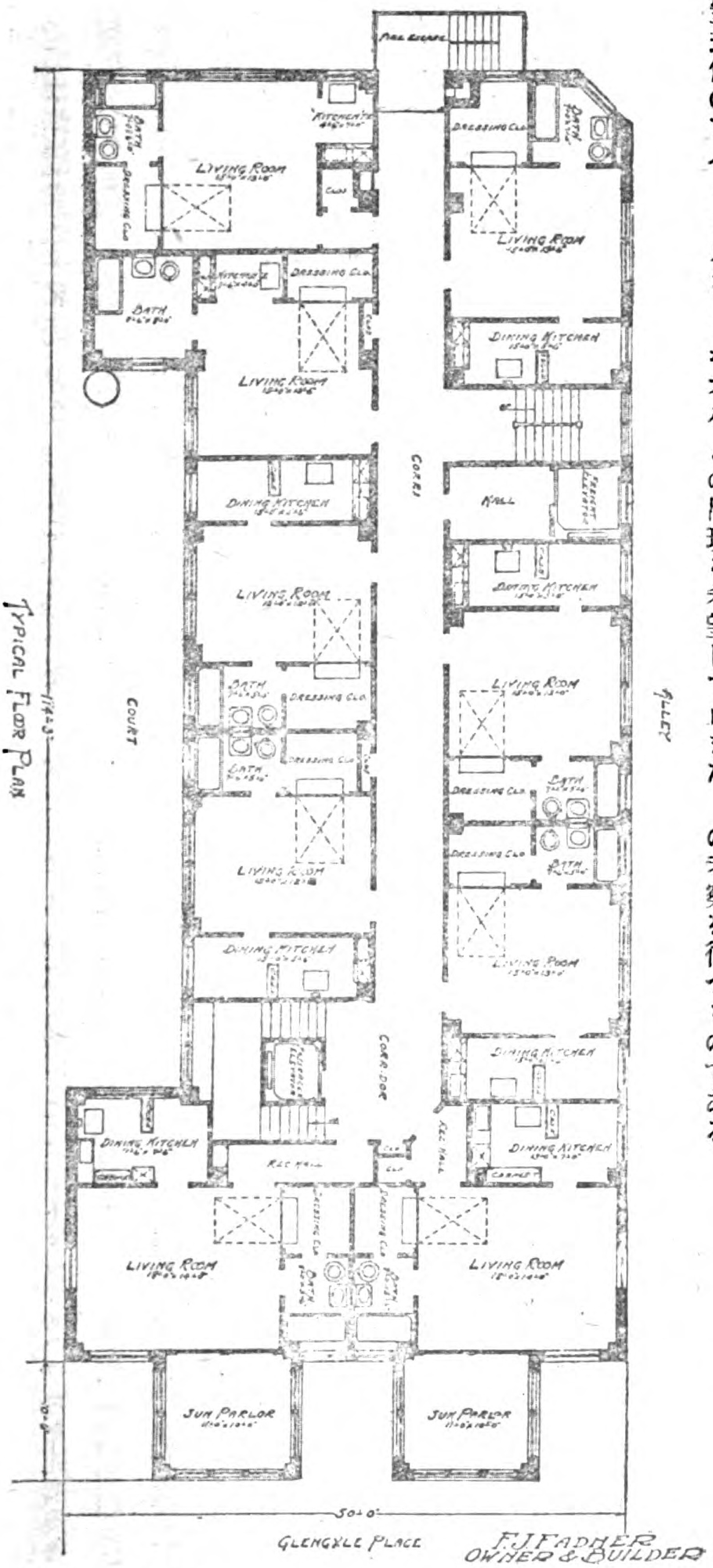
實驗といふても各個人が各自の趣味に依つて思ひ〳〵に家を建てゝやるやうな事では、到底理想に近いものは得難い、これは一般住家の質の問題もさうであるが、量の問題の如きも到底解決する事は難事であると思ふ。どうしてもこれは國家なり、公共團體なり、公益的の大建築會社なりの手に依つて、大資本主義の下に經營されるのでなければ改善は望み得可らざるものと考へられる。それには爲政者や經濟學者や社會改良家や建築家などが中心となつて、一定の企劃の下に多數の住宅が建てられて、各人がこれを借入れるなり買取るなりして、其の家に依つて新しき生活方式を敎へられるといふやうにするのでなければ、住家の眞の改善は不可能である。若し斯くの如く新に計劃せられた住宅の一團が出來て、各人がこれに居住して見て、もし環境や邦人の性情や經濟上などから何うしても忍び得ざる點があるならば、次に建築さるゝ一團に付ては是等の點を充分に研究して、これを除いて更により良くするやうに進めて行く可きであつて、當初から和洋折衷などゝ首をひねつて居るのでは何も出來るものではない、最初が最も肝要である。最も進んだ外國の形式を先づ實驗にかけて見る可きである。嘗て邦人が汽車を採用した時（狹軌式の採用は或る折衷案から出た爲めに根本に誤謬に陷てしまつた）自働車を採用した時、邦人の生活程度や坐式の方法などを考慮に入れなかつたではないか、しかも今日誰一人として是等の汽車や自働車を日本に適せぬといふものもないのである。

今日、我國の都市にアパートメント・ハウスを建てるとして、事實如何なる程度のものが必要であらうか、此の問題に付ては嘗て佐野博士が力說せられた事がある、それは若夫婦二人或はそれに子供一人位の家族の爲めに、アパートメント・ハウスを造る事が急務である。確かに一戸獨立した住家では、是等小家族に丁度適したものを求むる事は困難であるが、アパートメント・ハウスであると、自由に此の種の希望を充たす事が出來、戸を閉さして外出しても盜賊の恐れもなく、別に女中を雇ふにも及ばず、一寸考へると家賃の高價を來すやうにも思はれるが、それは新しく簡易生活を欲する若い人々を必ず滿足させるし、生活の複雜さを切り棄て得る爲めに、比較的消費を少くし得るやうに考へられる。或は是等小家族の人々を滿足させるには却つてアパートメント・ホテルの方がよいかも知れぬ。

聞く所に依ると東京市は、深川に勞働者のアパートメント・ハウスを、淺草には小賣商人のアパートメント・ハウスを、本鄕右京ケ原には俸給生活者のアパートメント・ハウスを建築す

劃を持つて居るといふ事である。寔に喜ぶ可き事である。吾人は一日も早く其出現を望むと同時に、一面に於ては先きに述べ來つたやうな、完備したる四室式位のアパートメント・ハウスと、二室式位のアパートメント・ホテルとの出現を希望して止まないのである。如何なる形式の投資に依つてこれが實現せらる可きかは、今吾人の玆に論ずる問題以外であるが、大原氏の設立になる社會學研究所や、住友氏の寄附になる鐵鋼研究所や、其の他斯の如き種類の研究所が澤山ある、是等の研究所のやうに、何人かの寄附に依つて斯くの如きアパートメント・ハウスの實驗的に提供せらるゝ事は出來ぬものであらうか、深く世の識者の考察を待つものである。

今實驗的に建てらるゝアパートメント・ホテルの例として、餘り大きいものでも不便であるし、さりとて餘り小さな不完全なものでも不都合であるから、試みに右の圖の如き平面のもの



TYPICAL FLOOR PLAN　　GLENGYLE APARTMENT HOTEL.

を掲げて見た。これは現在桑港に建つて居る實例で餘り大きくはないが設備は完備したものだ。建物の間口五十尺、奥行七十五尺、左右に中庭がとつてあり、日本の坪數にして九十坪二合弱になる。若し之れと同じ大さのものを東京市内に建てるとするなら、日本の市街地建築法では、住居地域内では建坪は敷地の六割を最大限度としてあるから、其敷地として百六十七坪程を要する。高さを何の位にするかに就いては住居地域内の建物は六十五尺を最大限度としてあるから、地階、即ち地下室の採光其他のために一階の床を地上から三尺位にとり、屋上を平らな屋根にして、其檐まわりの相扶壁（パラペット）の高さを三四尺にとるとして、先づ地上の階數は五階丈けとれると見てよからう。道路幅と之れに面する建物の高さとの關係は住宅地域に於ては建築物敷地前面道路の對側境界線までの水平距離の一倍四分の一以下と規定してあるから、六十五尺のものを道路に接して建てやうとするには其道路敷地の幅が八間半以上なければならない事は勿論である。

それで前に述べたやうに九十二坪弱の建物を建てるとして約百七十坪の敷地を要し、各階に一戸二室のもの四組と一室のもの二組とがとれる。これが五階で合計二室のもの二十組と、一室のもの十組とが出來る譯である。地下室には使用人の室や、煖房、冷藏、給湯等に對する機械設備をとり、洗濯室などをとつても未だ餘りがあるから、共同食室や、共同應接室をとつてもよからう。共同食室は外來者をも入れる事が出來るやうにし、仕出しなどもするやうにしたなら營業上の利益も多くはあるまいか。又給湯の設備も出來て居るのであるから、外來者のための小奇麗な浴室をとつてもよいし、或部分に理髮室をとつてもよからう。或は一階の前面を文房具や日常の雜貨を賣る店にするのも一つの工夫だと思ふ。

兎に角何等かの方法で斯う云ふアパートメント・ホテルを一日も早く實現する事を世人に望む者である。嘗て東京に大事務所建築の起らうとする時も、何かあぶなつかしいやうに考へられたものださうだが、一度建つて見ると投資者に對してそれ程利益のないものでもなく、借り主に對しても相當の滿足を與へて居る。そして其後續々として大事務所建築の出現を見て居る完備したアパートメント・ハウスやアパートメント・ホテルの最初の建築は或は實驗的試みだなぞといふ事でなく、事務所建築と同樣に投資者に對しても借主に對しても充分に滿足を與へ得るものであるかも知れぬ。

想華

旅中小感

阿部次郎

1

八月七日の朝新宿をたつて信濃の奥に入り、木崎湖畔に旅寢すること七日、歸途有明中房の温泉を經て燕岳にのぼり八月十九日の朝に東京に歸つた。越えて二十五日又東京をたつて山形と莊内とに父母と祖父母とを歸省し、再び東京の家に落付いたのは九月八日の朝、豪雨のあとで庭の草木の靡き伏してゐる日であつた。前後旅にあること一ケ月、固より多くの人の知つてゐる他奇なき地方の旅行ではあるが、それでも少しは閑談の材料がないこともなかつた。

2

中央線の汽車は東北の諸線と共に最も虐待されてゐる鐵道の一つである。私の知つてゐる汽車の中で、今になつてまだ二等にも三等にも便所のないものを使つてゐるのは、新莊から酒田吹浦の方に通ずる線路だけであるが、中央線の粗惡も多くこれに讓らず、朝六時飯田町發名古屋行といふ、同線では最長距離の列車にさへ、二等車が半箱しかついてゐ

ないといふ有樣である。それにトンネルが多くて、長いトンネルになると窓を悉く閉してさへ煙で室内が一杯になり、而も漸くトンネルを出て急いで窓をあければ、石炭が悪いのか石炭屑が砂礫のやうに車中に飛び込んで來る。東京から諏訪邊に着くまでの間には、着物も手も鼻の穴も眞黑になり、手を入れて掻きまはして見ると髮の毛の中さへジヤリジヤリするやうになつてゐるのである。

併し信濃に入る二つの鐵道の中で、私は信越線よりも寧ろより多くこの粗悪な中央線を愛する。信越線の景色は汽車が横川についたときに始めて山間の溪流に接する喜びがあり、輕井澤から小諸の邊まで、淺間山の山容とその裾野とは流石に旅客の眼を輝かしめるものがあるが、其他一體の景色は寧ろ平凡に過ぎる。さうしてその淺間山の眺めさへ、輕井澤から草津へ通ずる輕便鐵道の景色の美しさに較べれば殆んどいふに足りないのである。中央線も淺川から甲府に出る間の山中の景色は山が深い割合にそんなに特色があるとは云ひ難いが、それでも信越線よりは幾分の變化と深みとがある。併し私が中央線のうちで最も愛してゐるのは日野春の邊から富士見へのぼり着くまでの車窓の眺めである。線路を挾む大樹の茂り。のぼるに從つて明かに肌に感ぜられる空氣の爽涼。殊に兩側から車窓を壓する八ヶ岳と甲斐の駒ヶ岳との姿は、まだ雪のある頃の夕暮と月夜とに於いて特に云ひ難いものがあることを覺える。小淵澤の停車場あたりまで登つて行けば、吾々は自分が今高いところに立つてゐるといふ自覺を持つことが出來る。吾々の眼は、眼前次第に低くなつて行く谷の行衛を暫く追跡したあとで、その谷を隔てゝ急に奥深く限りなく高まつて行く駒ヶ岳を、雲間に、而も肩を壓するばかり近く、描き出すのである。それはより高きものに對する瞻仰であるが、この瞻仰は自らも高き所に立つものの品位と雅量とある瞻仰である。自ら卑屈になることとなしに他の偉大を承認するときの廣々とした心の胖かさが、駒ヶ岳を目睫の間に見る吾々の心の中に生れて來る。單に汽車上の眺めのみについて云へば、私は此處ほど吾々の心を悠然たる

崇高の境に誘ひ行く場所を知らない。自ら立つ場所の高さと、仰ぎ見る山の近さとが、この特異な印象を決定するのである。

3

松本から信濃鐵道に乘りかへると、吾々は輕便といふ名にふさはしい色々の滑稽と快さとを感ずる。私の乘換へたのは、夕暮と云つてもまだ日が大天井の遠山の上に高くかかつてゐる五時過であつたが、丁度同じ箱に乘合はした同鐵道の役員らしい人は、驛に着く毎に驛員と「お休み」、「お休み」と挨拶してゐた。まだ日が赤赤と照つてゐるうちのこの「お休み」が、滑稽の中に溫かさと寂しさと靜けさとを融かした牧歌的情調を私の心に惹き起した。汽車が二三の驛にとまると、汽罐車が列車を離れて其處に待つてゐるマッチ箱のやうな貨物車を自ら迎へに行つて、それをひつぱつて來て再び列車に連結して、それからそろ／＼發車となるのなども長閑なものである。かうなると吾々はもう便不便の問題を離れて、文明の外に遊ぶところにのんびりとした喜びを感ぜずにはゐられない。

私の乘つた汽車は有明驛止りであつた。私は驛前の旗亭で、大天井の連山に夕日の沈む頃から、眼前に廣がる田畑の面が全く闇に包まれる頃まで待つて、八時過また大町行の汽車に乘つた。吹晒しのプラットフォームに、山間の風が薄ら寒く、二三の汽車を待つ人の話が秋の夜更のやうにヒソ／＼と響いて來る。私は遠くに見える有明温泉の電燈のチラ／＼するのを、狐火を見るやうに見入りながら、自分の待つてゐるのが汽車だとは思へないやうな心持になつてゐた。西行法師の

信濃なる有明山を右に見て心細野の道を行くかな

といふ歌の心がしみ〴〵と自分の胸に響いて來ることが感ぜられた。私達の汽車はその細野をも通つて、晝ならば柞葉を飾つてゐる灌木林と、白い石の間を流れる青い水とを見ながら、緩い傾斜を大町までのぼつて行くのである。私は數年前木崎に遊んだときの晝汽車の印象を以て眼前の闇を補ひながら、十時大町の驛についた。

4

木崎湖を繞るものは深い林ではない。左岸は端山が直下して直ちに湖岸に臨んでゐるが、その山の木は小さくて未だ云ふに足らぬ。右岸には湖口に近く四五軒の茶屋があり、少しく行けば田があり小さい村があり、湖に添つて自動車の通ふ白い道がある。幽邃の點から云へば、此湖水は更にその奧二里のところにある青木湖にはとても敵はない。併し奇麗な青い水が深く湛へて、山村と相親み相抱き、自然と人事が打解けて溫かい交渉を保つてゐるところに、この湖水のなつかしい可哀らしさがある。さうして端山の一角にその顏を覗かしてゐる鹿島槍の峻峯は、夏でも融けぬその雪を天に捧げて、この湖水に單純な溫秀以上の威嚴を賦與してゐる。

自働車の通ふ白い道から爪先上りに暫くのぼれば、其處に夏期大學の大講堂と寄宿舍とがあつて、湖水の全景を一眸の中に收める。更にその寄宿舍の奧を少し行くと、人に隱れて丘添ひに樹陰を通ふ古い道がある。朝は朝露が繁く置き、夜は新月が葉の茂みを漏れてさし込むその道を、私は起きぬけに、又眠りに就く前に、日課のやうにして屹度散步した。朝は寄宿舍も割合に靜かで、たゞ老鶯や郭公の鳴音がきこえるだけであるが、夜は尺八や謠や寮歌などで賑つてゐるその物音を遠く木葉越しに聽きながら、木の間を通して隱見する湖水を間近に望んで漫步するのは靜かな心持である。丁度月のいゝ頃だつたので、夜遲くまでボートを漕いでゐる若い人達もあつた。私は湖上を渡つて來る伊那節をき

ゝながら、自分も亦時には夜遲くまでさまよひ廻つた。

その古道から更に山中にはひる細徑は、朝露の特に繁く置くところであつた。私は毎朝浴衣が肩まで濡れるところまで、薄をわけてその山懷に入つて見た。さうして其處に自分の特に愛する二三の小景を見付けた。(一)小さい木の切株がある。それを取卷いて桔梗五六株、草叢の中に何氣なく亂れ咲いてゐる、私はその一間四方ばかりの場所を頭の中で他からきり離して、その可愛らしい自然さを飽かず眺めた。(二)七八尺ばかりに延びた木がある、それに蔓草が一杯に這つてかぶさつて、その蔓には莖の長い、花瓣の白くて厚い、小さい花が一面に咲きこぼれてゐる。この白い花の露を帶びた白さも亦私の心をひきつけた。(三)矢張七八尺ばかりの低い木ながら小暗いまでに葉が繁つてゐる、その下にはこれもあたりを暗くするほど雜草の葉が盛んに茂つてゐる。その上と下との間を明るくして、淸らかな女郎花の黄色が草叢の上に奥深く延んでてゐるのも私の眼を脱れることが出來なかつた。口で云つて見れば何でもないやうなかういふ小さい景色が朝毎に私の心を強くひきつけた。愛は別離を重くする。七日目の朝木崎に別れを告げるとき、私の心を重くするものゝうちには、一生のうち又逢へるか逢へぬかも定かならぬ講習生との別れの外に、又此等の小さい景色や小さい花と別れなければならぬ悲みもまじつてゐた。

5

有明山は大天井一帶の九千尺に餘る連峯を背景として見れば決して高い山とは云へない。併しその富士に似た山容と峭峻な崖壁とがこの山に一種の性格を與へてゐる。この有明山を半廻りして、中房川の溪流に沿ふて森林の間を登り、丁度有明山の背後に出た海拔五千尺の高みに中房溫泉がある。淸冽な溪流を右に渡つたり左に渡つたりしながら、常に有明

山の險しい峯を右に仰いで、濶葉樹の林を辿つて行く道は、自分がこれまで歩いた道のうちでも最も美しいものゝ一つに屬する。路傍に多い石楠はもう花の時節を過ぎてゐたが、信濃坂の栂林の美しさは夏でなければ見られぬものであらう。有明溫泉から三里の間二軒の茶屋があるばかりで他に人家と云ふものがなく、益々山深くわけ入ることを覺えるのみで人里に近づくといふ豫感なしに、吾々は中房の入口の橋に到達する。私が登つた日はまるつきり一片の雲もなく飽くまで晴れ渡つた日であつた。六十度位の仰角をなして聳えてゐる兩岸の山と山との間に、あれほど深い青色を凝して高く〳〵懸つてゐる天を、私は未だ曾て見たことがなかつた。この濃青の空の眞中から眞直に落して來る眞晝の太陽の光を、大きい白い岩と碧緑の溪流とがまともに受けてゐる。その間に無限の空間を挾みながら、極めて緊密に極めて的確に呼吸を通はしてゐる蒼空と大地との映發――この映發の光景を、兩岸に聳える三千餘尺の高峯と、この高峯に生ひ茂る暗綠色の樹木とが緣取つてゐる。私は寧ろこの奥深い道が盡きて遂に溫泉場に到着したことを悔んだ。

6

中房から更に四千餘尺をひた登りに登つて、吾々は燕の小屋に到達する。最初の間、熊笹の繁つた道や、猿をがせの垂れ下つてゐる針葉樹の密林は、中房に來る道の、明るい、柔かみのある奥深さに對照して、一種の狹苦しさと單調とを感じさせるが、嶺に近づくに從つて、登攀の道は次第に緩傾斜となり、眼界は次第に廣濶となる。這松と交互して廣く生えひろがつてゐる岩梅(?)の葉の美しさ、底知れぬ谷底まで生え續いてゐるらしく見える柔かな草原の斜面に、白樺の大木の所々群をなして立つてゐる姿の力强さ、青草の原を斜に貫いて見えかくれしつゝ緩かに嶺を目ざして行く道の兩側に、白や黄や淡紅や淡紫の花をつけた高山植物の咲き亂れてゐる氣高きいじらしさ――總じて高山の上にある

一種特別な柔かな美しさは、豐かに登山者の眼前に展開される。私の登つた日は、嶺に近づくに從つて、東北から吹く風が谷から濃霧を吹きあげて、白樺の幹を遠く見せ、草原の廣さを限りなく見せてゐた、さうしてこの霧の中に隱れて雷鳥のなく音が間近にきこえてゐた。私は大天井と燕の絶頂との追分に立つて、覺束なく四邊を見廻したあとで、漸く咫尺の間に建つてゐる燕の小屋を霧雨の間に認めることが出來た。

7

燕の小屋は山岳會の赤沼氏の手によつて今年新築が出來たばかりで、全アルプス中最も完備してゐるものだといふ話だつた。實際、菓子がありサイダーがあり酒があり、綿の新しい蒲團があり大型の毛布があり、九千尺の山上としては勿體な過ぎるほどのものである。私が小屋についたのは晝前だつたが、風が益々吹募り雨が時々強く打つけて來るので、その夜は此處に一泊することにきめて、榾火の傍で偶然に落合つた色々の人の話をきいてゐた。十四と十六の娘を連れて、これから大天井東天井を縱走して槍ケ岳に登るといふ京都の會社員がゐる。今朝强風に逆つて常念から來て、中房へ降りる中休みにこの小屋に寄つたのだといつて、二合の酒をのんで喜多八式太平樂を並べてゐる江戸兒の水兵がゐる。燕に登る道を拓いたといふ六十七歳の老父を連れて矢張槍ケ岳まで行つて見るといふ亞米利加歸りの地方紳士がゐる。その他强力や學生の二三の人も往つたり來たりして、或者は降り、或者は泊り、雨の聲風の音の中に山上の日は暮れて行つた。蚤に責められて眠り難かつた夜のその曉の二時半頃、便意を催して外に出て見ると、もう風はすつかりやんで月が雲の間からその光を漏らしてゐる。昨日一日霧のために見えなかつたアルプスの山脈がこの分ならば見えないこともあるまいと思つて、小屋のうしろの觀測臺豫定地になつてゐる臺の上に登つて見る。さうすると月光を半ば受け半ば

遮られて、ほのかな白銀の綿のやうにふわ〳〵と眼下に浮んでゐる雲の間から、墻壁のやうに連なつた山々が見えかくれして、西南の端近く、高塔の聳え立つやうな槍ケ岳の大槍が、直眼の前に天を刺さんとしてゐた。私は山上の月夜を見むとする願ひの遂にかなへられたことを喜んだ。この怪しく明暗の陰の入り亂れた月光の中に、肅然として、一萬一千尺の峻峯と、これを掠めて徂徠する雲とに對して立つ心持は、實に何とも云へなかつた。

この嬉しさに寢てゐる人も皆起きて來て話し合つてゐる間に、もう曉が近づいて來た。東が次第に白んで來て、丁度そちらに向いてゐる硝子窓にほのかな色がさして來る。急いで外に出て見れば、淺間の左戸隱の右、名を知らぬ山の峯とすれ〳〵に帶をひいてゐる黑雲の間から、旭が將に出ようとしてゐるところだつた。昨日はあんなに仰ぎ見て來た有明山の峯も、今は脚下に、低く黑く見えてゐるに過ぎない。振返つて西の方を見れば、昨夜の浮雲は悉く晴れて、大天井や東天井の峯續きと燕岳の絕頂とを兩端の框とした前景の中に、南は穗高から北は立山まで、槍や東鎌尾根や西鎌尾根や双六や野口五郎や烏帽子等の諸峯が嵌め込まれて、谷から始まり複雜な襞を刻んで巓にのぼるまでの全山容を露出しつゝ、直眼の前に一萬尺を出入する峻峯を障壁のやうに列ねてゐる。私達がこの大觀に見惚れて前を見たり後を見たりしてゐる間に、日は黑雲との戰ひに勝つて、その眩しい姿を現はして來た。さうしてその最初の光が脚下に投げられたとき、この大きく峻しい北アルプスの主脈を背景として、何といふ可憐な光景が眼前に展べられたことだつたらう。今まで影にゐて眼立たなかつた高山植物の花が、宿つてゐる露と共に急に輝いて來た。而もその中でも最も眼立たぬ部類に屬する「雀の稗」(?)や、鳥の柔色をつけたやうなぼや〳〵とぼやけた花などが、その數多い小さい實や毛に無數の日光を反映して、とりわけ美しい輝きを見せた。私は此處にも亦高山の上にある特殊の清らかな愛らしさを發見して嬉しさに堪へなかつた。

併しこんなに快く晴れたのも僅かに早朝の一二時間であつた。始めに槍ケ岳の槍の頭を照した日の光が次第に這ひ下つて周圍の諸山の巓にも光がさし始める頃には、霧が又立こめて來た。さうして私がその朝燕岳の絶頂にのぼつて其處から下山の途に就く頃は、花崗石の石砂が砂漠のやうに廣がつてゐる白い斜面の上を、灰色の霧が行衛も知らず這ひ過ぎて、たゞ處々天狗のやうに突立つてゐる巖石の影が、ボカリボカリと霧のまぎれにその姿を見せてゐるに過ぎなかつた。

8

郷里の自然と人事とに對する愛が自覺的に私の心の中に生れて來たのは、つひ四五年來の事に屬する。今年の初秋の歸省も亦この愛を深めるために役立つことが出來た。そうしてまだ腦裡に明かな信濃の景色との比較は、二三の點について私に、郷里の風光の特色に關する觀念を明かにした。

板谷峠は中央線の笹子附近に比較すべきトンネルの名所である。奥羽線の列車内の不愉快も亦中央線に決して讓らない。併し夕暮板谷峠を越えるとき、私の頭には不知不識これと甲州に入る汽車との異同が浮んで居た。山の深さから云へば板谷峠は笹子峠に較べて云ふに足りないが、此には彼になかつた登山の感じがある。汽車がのぼるに從つて山の嶺に近づく感じは、下の方次第に深くなつて行く溪流と、次第に仰角を減じて來る山頂の近さとによつて確かめられる。吾々は段々山の威壓から解放されて、心持が自由に輕やかに爽かになつて行くことを感ずる。漸く穗に出でゝまだ鮮かな赤色を光らしてゐる薄の豐かさや、その間に點綴する桔梗や女郎花や萩などの新しい花の色が又この印象を助けた。自由な、ふくらみのある和かさが、煤煙責の汽車の中にあつて、私の心をすつきりとさせた。

汽車が置賜の平野に出てから、夕暮の靜かな光がまたこの景色の特徴を際立てて見せた。平野を程よき廣さに限つて

左右に連つてゐる山々は、決して日本アルプスの連山のやうな高さを持つてゐるものではない。併しこの高からぬ山は甲信の山に比較すればおのづから彼自身の性格を持つてゐる。山骨稜々たるアルプス、諸山は論外として、それほど高からぬ前山でも、彼にあつては空と境する山の輪廓が、ジグザグを右にひんまげたり、左にひつぱつたりしたやうで角張つたものが多い。併しこれにあつてはその輪廓が優柔の感じを與へない程度に於いて和らかに曲線的である。又彼にあつては、山とは一つの屏風のやうに連る連山（ゲビルゲ）で、一つ一つの山の名は、屏風の高くなつてゐる隅に名けたやうなのが多いが、此にあつては一つ一つの山がそれ自身の中腹と麓とを持ちながら起伏してゐる。從つて見る人に山の數が多いといふ印象を與へる。而もこの數多い山が、層々として重つて次第に背骨をなす山脈に朝宗してゐるがために、山又山の奥にあこがれる心持が自然に人の心に萌して來る。山の彼方を思ひやるこのあこがれは、一列に高く空を限つてゐる信州の高山よりも、寧ろ奥に奥があつて幾重にも重つてゐる東北の山々によつてはぐくまれ易いことを覺える。豪壯奇拔峭峻の感じに於いて東北の山は到底信州の山の敵ではないが、和かな、奥深い、優柔と纖弱に流れぬ程度の大らかな優しさに於いて、それは獨自の地歩を占めるに足るであらう。

9

板谷峠を越して關根の驛を出る頃、私は夕暮の覺束なさの中にくつきり浮んでゐる煙草の葉と花との美しさに驚かされた。山形についたのはもう夜だつた。低い屋根とひつそりとして廣い道との上を大らかに見護つてゐる山々の姿を、親しみを以て車上に仰ぎながら、私は父の家に急いだ。さうしてその翌る朝、私は櫻桃の葉がもう黄ばんで落始めてゐるのを見て、落葉をはく箒の音に秋を感じた。櫻の葉が先づ黄ばんでチラホラと散り始めることは、初秋の墨田堤の散

歩によつても前から知つてゐたが、櫻桃は普通の櫻よりもまだ早く黄葉することは今度始めて知つた。又一歩門前に出れば、朝は特に遠近の際立つて見える山々が、少くとも七八層の遠近を自ら區別しつゝ國境に向つて重つてゐるのが見える。さうしてこの秋に先つて散る木の葉と、日の出る前に鎮もつてゐる山々の姿とが、私の心に沁みとほる靜けさを覺えさせた、此夏休に入る前に、しみじみ味ひたいと思つた靜寂が、深夜に與へられずに、夕暮の汽車の中や曉の秋の色によつて與へられることは、私の豫期せぬところだつた。併し兎に角私はそれが又與へられたことを覺える。さうして私はそれに滿足する。(九月十九日朝)

時論

愛蘭問題の世界的重要意義

法學博士　吉野作造

華盛頓會議の論議に隱れて愛蘭問題は一寸我國論壇の視聽に遠ざかつた形になつて居る。愛蘭問題は英吉利にとつて重大な問題であるばかりでなく、其最近に於ける發展の模樣は實に世界の將來に向つて非常に重大な關係を及ぼすもの〻やうに思はれる。其成行如何によつては、華盛頓會議にも劣らない程の大きな意味を有つことになるかも知れない。經世家の注目を怠るべからざる所以である。

單に之を英國丈けの問題としても自稱大統領デ・ヴアレラとロイド・ジヨーヂとの最近の交渉は國技館の横綱角力にも比すべき壯觀である。由來愛蘭問題は英國政界の暗礁と稱せられた程の難問題であつた。戰前に於けるアスキス内閣も之が爲めには大いに困迷して居つた。而かもそれはシン・フェーン黨の擡頭以前の事である。戰爭開始後間も無く愛蘭國民黨は跡形もなく消え失せ、愛蘭人はつまり自治の要求を以つて滿足せず、絕對的獨立を主張するシン・フェーン黨に傾投すること〻なつた。自治を與ふべきや否やについてさへ困り切つて居つた英國が、今や絕對的獨立の要求に會つて困り切つて居るとは想像に餘りある。シン・フェーン黨の執拗なる、英國今日の内外兩面に涉る苦境と相交錯して英國政界の陰影をさらでも一層濃厚ならしめて居る。併し流石にロイド・ジヨーヂは偉大なる手腕の所有者である。此難境に處する彼の手捌きはなか／＼鮮かなものだ。之に對して自稱大統領デ・ヴアレラの不屈の態度も亦嘆賞に値する。たとへ南亞の人傑スマッツ將軍の仲介を恃んだとは云へ、此の堂々たる二大英雄が從容迫らず、一歩一步問題を解決の彼岸に進めて行く有樣は、朝鮮に於いて同じ樣た問題を有つて居る我々に向つて大いなる教訓を與ふるものである。

併し僕が此問題を事々しく此處に持出すのは、我々日本人に

學ぶべきものありとするが爲ばかりではない。況んや英國多年の懸案であつたが爲めではない。此問題の陰に將來の世界の運命に重大な關係を及ぼす問題が潜んで居るからである。他の言葉を以つて云へば、現に現代を動かしつゝあり、近き將來に於て強く世界的解決を迫つて來るに相違ない、或る重大問題の先驅をなすものと思ふからである。

前にも述べた如く、愛蘭問題に於ける今日の爭點は最早や自治ではない、絶對的獨立である。英國政府の相手方は最早や國民黨にあらずしてシン・フェーン黨なることを記憶しなければならぬ。然らば彼等の要求は如何。委しい事は今玆に述ぶるの暇を有たないが、最近スマッツ將軍の調停によつて細目の點に多くの一致點を見出し、餘程解決の曙光を認めたと云はれたけれども、肝腎な點に於て遂に双方の間に根本的の不一致を發見した。其事はロイド・ジョーヂの八月廿六日の書面に對するデ・ヴァレラの回答に明白である。其中に彼は一歩も讓ることの出來ない根本的主張として二點を擧げて居る。一は「愛蘭人民は斷じて英國との任意的結合を認めず、自己の運命を自ら自由に決定するの根本的權利を主張する。絶對的大多數を以つて獨立を宣言し、共和國を設定したる所以である。」二は「英國政府が愛蘭を遇するに恰かも單獨に分離するを許さざる結合の盟約あるかの如き態度を取ることを極力排斥する」。從つて英國政府が愛蘭に自由なる獨立國家として英國聯邦中に加はらんことを勸誘し來るのならいゝ。ロイド・ジョーヂは此點に於いてデ・ヴァレラの立場を完全に承認しないから細目の討議に入るも無効だと主張するのである。而して双方此點を固く執つて動かないのは、已に讀者の知る所であらう。

妥協的政治家は細目の點に於いて一致するなら、こんな形式的な面目問題はどうでもいいではないかと云ふだらう。英國政府が愛蘭の言ひ分を立て難きは云ふまでもないが、デ・ヴァレラの意氣込は又此點に於いて斷じて讓歩せざらんとするの態度を固執して居る。又之を讓つてはシン・フェーン黨のシン・フェーン黨たる面目も立たない。而してこれ豈彼の所謂民族自決主義の極端なる固執ではないか。玆に我々は此局部的問題の世界的重要意義を看取するものである。

今度の戰爭が米國の參戰、露國の革命の二大機運に釀成されて非併合主義、無賠償主義、民族自決主義の國際的三大原則を產んだことは屢々說いた。戰爭に伴ふ至大の慘禍が歐米の民心に及ぼせる影響は實に怖るべきもので、彼等は自ら此等の道德

的原則によつて世界的紛爭を永遠に絶滅せんと熱求するに至つた。此要求が或る意味に於いて獨逸の崩壞を促し、戰爭の終結を速かならしめ、總て又講和會議を支配する根本動因となつた。講和會議の開催に至るまで、國際關係の主動的原則としての前記三大主義の勢力は實に偉大なるものがあつた。不幸にして講和會議に集まつた各國の代表者は、多く舊時代に活躍した政治家であり、政治家は又常に餘りに現實に執着するところから、一般民衆の如く單純に時代の要求に應じ得ない傾がある。之に加ふるに戰爭の終結に安心して新に起り初めた各國の國民主義的精神、又戰後社會改造の要求切なるに對して起つた一部の保守的精神等が互に結び合つて、理想的原則の其儘の實現を少からず妨げた。故に巴里講和會議の成果は戰爭終結の前後、さしも優勢であつた道義的要求を大いに裏切るものであつた。それでも今度の講和條約は從來のあらゆる戰爭に伴ふ講和條約と異る要點は、兎も角も不完全ながら彼の三大原則の要求を根柢とする點にある。此事は條約の各條について論證することが出來るけれども、今一々之を列擧するの煩を避けて置く。

講和條約は歐米の民衆の道義的要求を裏切つた。此事實は隱すとは出來ない。輕卒なる論者は之によつて今尙國際關係を實際に支配する原動力は各國の利己的希望だと云ふ。けれども公平穩健なる見解としては道義的要求が、あれ丈け各國の利己的希望を抑へた點を買つてやらねばなるまい、事一度國際間の問題になると、法律も條約もないといふのが、十九世紀百年間の狀態であつた。玆に非常な苦悶が起り、遂に歐洲戰爭の一大破綻を來して世界の民衆が深刻なる經驗を積み、其結果局面を轉回していよ〱新生活に入らんとするその最初の事業としてあの程度の講和條約は已むを得まいと考へる。個人の生活に於いても過去の惰性は容易に拔き難い。況んや國際社會に於いておや。我々は舊い勢力の今尙多少跋扈するを憂ふるよりも、新しい生命の已に鬱勃として起り來りつゝあるを悅ばねばならない。否、進んで其新しい生命の健全なる培養に努むるところなければならない。此點に於いて昨今の民衆が寧ろ微溫い講和條約に不滿を表して、更に三大原則の徹底に動きつゝあるの現象を悅ぶものである。

講和條約締結の當時と、昨今の狀勢とを比較すると、實に思ひ半ばに過ぐる者がある。條約締結の當時は可なり舊時代の傳統に遠慮したものであつた。之を民族自決主義の適用を例として見ても、委任統治の原則を採用した點は兎も角も新しい考の要求を容れたものである。獨逸から取つた植民地を國際聯盟

れ〱各國の委任統治に附したけれども、結局は其民族の開發を促し、他日獨立の出來るまで之を誘導するの責任を負うたからである。それでも此主義の適用は今度の戰爭に關聯して問題となつた植民地に限ると云へ、此限られたる範圍内に於いても、大いに關係諸國の利己的要求を顧慮するところがあつた。餘りに各國の要求を無視しては、徒らに事態を紛糾ならしむる恐れがあつたからである。然るに今日は如何。已に愛蘭問題に於いても顯はれて居るが如く、講和條約締結當時に遠慮した線を飛び超えて民族自決主義は露骨に主張されて居るではないか。之を單純な愛蘭人丈けの要求と思ふならば、極めて怖るべき短見だと云はなければならない。

政治家の造つた講和條約には、締結の當時から已に其不徹底を非とする民衆の聲は高かつた。時の進むと共に民衆の良心に芽生えた道義的要求はどん〱生長發達して已まない。獨り民族自決主義ばかりではない。領土の分配についても賠償金の問題についても、歐米の民衆は講和條約の決定如何に拘らず、どんどん新しい問題を提供して行く。我々は何日まで之を不問に附することが出來るか。東洋には歐米ほど澤山問題が複雜して居ない。けれども我々にはまた我々相應に六つかしい問題が無いではない。どう之を解決するかは固より彼我同一なるを得ないけれども、疑のない一事は、何時までも惰眠を貪る事が出來ないといふ點である。一葉落ちて天下の秋を知るといふ意味に於いて愛蘭問題が我々に取つて大いなる敎訓であると共に、問題の解決は其度毎に世界に磅礴する思想と要求とを培ふものである事を忘れてはならない。

所謂既成事實及び特殊國間の問題とは何ぞや

今度の華盛頓會議で討議せらるべき問題の範圍につき、日米兩國の間に意見の交換があつた事、並びに其間完全なる一致を見なかつた事は既に我々の知る所である。而して其主たる爭點が所謂既成事實及び特殊國間の問題なるものに係つて居ることも亦公知の事實である。日本の言ひ分は山東問題及びヤツプ島問題の如き、既成事實及び特殊國間の問題は今度の會議で再び討論したくないと云ふのである。我輩一個の考としては既成事實及び特殊國間の問題だからと云つて、絶對に之を再議に附すべからずといふ理窟はないと思ふけれども、幸にして米國は此種の問題を再議に附せないと云ふ主義については日本と意見

を同じうして居るやうだ。けれども米國は山東及びヤップ島の問題を今度の會議で再議に附すると頑强に主張して居る。そこで我國の通說は、それでは旣成事實及び特殊國間の問題を再議することゝなるのではないかと云ふのであるが、こゝに俗間の輿論の燥急なる誤解がある。我國の通說は初めから山東及びヤップ島の問題を旣成事實及び特殊國間の問題と決めてかゝるから誤解が起るので、爭點は寧ろ此等の問題が所謂旣成事實及び特殊國間の問題と云ひ得るや否やにある。之がさうだと云ふ事に初から疑ひがないなら、米國は何も日本の言ひ分を斥けるのではない。旣成事實及び特殊國間の問題でないと云ふ確信の上に立つて居るから爭ひが起るのである。此點に關する米國の立場が正しいかどうかは自ら別問題として、日本側が旣成事實及び特殊國間の問題再議不可論一點張りで進むのでは、少しも米國の所信を動すことが出來ないのである。

尤も兩國政府の間に交換せらるゝ數々の外交文書や、又は其大要を報道する新聞の記事の文字の上には、我輩の云ふやうな風に爭點がハッキリ明示されては居ない。日本側から旣成事實や特殊國間の問題に觸れたくないと云へば、米國側ではそれはさうだが、若し之に多少利害關係を有する國があつて、其國が旣定の解決に十分滿足することが、出來ないと云ふやうな場合には、其儘之を承認する譯にも行くまい、などゝ婉曲た文字が使れて居る。けれども我々が此等の文字の奥に潜む双方の見解を嚴格に推詰めて考へて見ると、畢竟前に述べたやうに旣成事實及び特殊國間の問題の意味の取り方の相違に歸する。米國が日本の立場を適當に理解して居るかどうかは我々の此處に論ずる限りでないが、日本側が米國の據つて以て立つ所の理論的根據を十分に諒解せずして、的外れの空砲を放つて居ることに對しては、到底之を默視することは出來ない。云ふ迄もなく、物事の有効な解決は常に其關係の正當なる理解の上に根據しなければならないからである。

斯くして我輩は我國民に向つて此問題をもう一度考へ直して貰ひたい。昂奮を鎭めて冷靜に山東、ヤップの懸案が旣成事實及び特殊國間の問題にあらずとする米國の立場を研究せられんことを望まざるを得ない。

最初に日本の通說が其主張の根據とする所如何を觀やう。

先づ山東問題について云つて見よう。日本は獨逸から靑島を取つた。靑島の獲得は、戰勝の當然の結果である。併し靑島はもと〳〵支那のものであるから、靑島に對する日本の權利を確定する爲めには、講和條約に依つて獨逸から形式的讓渡を受け

た後更に又貸主たる支那の承認を得なければならない。此のやうな手續は日露戰爭の時にも取つた。併し今度の場合は當時講和條約は何年の後に開かるゝや分らないと云ふ狀態であつて、而して何時までも不定の狀態のまゝに放任することが不便であつたから、後から得べき支那の承認を事前に得ると云ふ手續を取つた。支那で矢釜しく問題にする廿一ケ條云々の日支條約は其中の一ケ條に於て、山東に於ける此日本の權利を認めたものである。だから日本の權利は後日講和條約に於て獨逸權利の承繼を日本に認めればそれで終局的に確定するものであつた。而して講和條約第百五十六條乃至第百五十八條は此承繼を認めたものである。斯くして山東省に對する日本の權利は確定した。故に之を嘗て聲明した還附の公約に基き支那に還すと云ふのは、日本と支那とのみの問題になる。兎に角一旦日本のものになつたのだから、之を還す還さぬは日本の自由であつて、又如何なる條件の下に之を還すかは理論上日支兩國の所謂特殊的問題に外ならない。第三國の與るべき問題ではないのである。

次にヤツプ島に關する日本の立場は如何と云ふに、之は一般獨領南洋諸島と共に、日英兩國の力によつて獲得した。而して此兩國は赤道を境として南北に其領域を分つた。予輩の想像する所並びに多くの人の信ずる所によれば、此分配並びに領有に對しては、佛國其他の同盟國も何等かの形に於て承認したと見られて居る。故にヤツプ島に對する日本の權利は、大體事前に解決して居つたので、獨逸よりの讓渡が、講和條約で確定しさへすれば終局の決定を見る筈のものである。講和條約第百十九條は獨逸が其海外屬地に關する一切の權利及び權原を主たる同盟及び聯合國の爲めに拋棄すと決めた。更に最高會議はヤツプ島を含む赤道以北の獨領植民地を全部日本の委任統治區域に割り當てたから、日本の主張する意味に於ての對ヤツプ島の權利は所謂既成事實たる事明白疑ひを容れない。今更ら之に文句を附けるのは不當だと云ふのである、

所が此議論を米國は承認しないのである。既成事實たり、特殊國間の問題たるに相違ないが、只日本の云ふ通りにするのが嫌だと云ふのではない。假りに腹がさうだとしても、少くとも表向きの理窟は、其特殊國間の問題たり既成の事實たりとする理論を爭ふのである。我々は先づ此點を明白に諒解しなければ問題解決の爲めに堂々たる論陣を張ることが出來ない。

先づヤツプ島について米國の立場を考へて見よう。獨逸は前揭の條約にもある通り、其海外に於ける權利を主たる同盟及び聯合國の爲めに拋棄した。米國も其仲間の一人として獨逸の拋

來した一切のものゝ上に、他の仲間と同等の權利を享有して居る。而して其對當に關する最高會議の決定を承認しないのだから、所謂既成事實とは最高會議の決定に拘束さるゝ限りに於て云ひ得るので、米國にとつてはヤツプ島の處分は未だ終局の解決を告げたものと見ることは出來ない、と云ふのである。自分も平等の權利を有して居る以上、自分の權利は自分の承認せざる他の仲間の決定によつて拘束さるゝ必要はないと主張する。故に米國の見地からすれば、米國とヤツプ島（ヤツプ島には限らないが、）との關係は、講和條約締結以前の狀態のまゝである譯になる。條約締結以前の狀態は云ふまでもなく聯合國の共有物で、日本の事實上の占領の如きは、之を全體の爲めにする臨時の占領と觀なければならない。

同じやうな事を米國は山東問題についても主張する。山東に於ける獨逸の權利は講和條約に於て特に專ら日本に與へられた。併し米國は講和條約を批准しないから（批准拒絕の一つの理由は矢張り此點を不都合と考へた事にある）之れに拘束さるゝ必要はない。從つて山東の地位は、米國から觀れば今尙條約締結以前の狀態を繼續して居るものと云つていゝ。條約締結以前の事をいへば今度の戰爭は米國も參加國の一として最後の勝利を得るに與つて力あるものであるから、戰勝の結果として得たものは總て參加國共同のものである。成程日本は事實上山東を占領して居る。けれども之は味方全體の爲めにする臨時占領で、之が處分權は聯合國全體の上になければならない。即ち之が終局の決定の爲めには、米國の參加乃至承認が要るので、單純に之れを支那日本限りの問題と云ふ事は出來ないのである。

之を要するにヤツプ問題にしても、山東問題にしても、米國は日本の獨占獨斷に反對して自分も一部の分配に與らうと云ふのではない。若しさうなら我々は米國の立場其物を理由として彼の主張を容易に粉碎することが出來る。彼の所謂權利の主張は此等の問題に對する發言權の無視を默過することが出來ないと云ふ主義の問題である丈け、其取扱には愼重の態度を要すると思ふのである。

理論上の一問題として冷靜に之を觀ると、米國の立場にも相當の理由あることを許さない譯には行かない。併しながら政治上の實際問題として觀れば、ヤツプ島に對する日本の權利、山東に對する日本の立場は多數國家の承認を得て略ぼ既成の事實たり、特殊國間の問題たる關係は事實上に於て固まりつゝある。理論上がどうであらうが、事實上に固つた關係を覆すことの極めて不便であり困難であることは政治上の常だ。それを單純な理

宿で兎や角云ふのは亂暴な仕打だとされて居る。姑く一歩を讓り、率直に米國の立場を承認したとして、改めて米國の參加の下に相談をし直した所が、どの道ヤツプ島は日本の委任統治に割り當てられ、山東も亦日本から支那に還附すると云ふ事になるだらう。全然同一でないとしても、結果に於て大した違ひはあるまい。そんならそれ程矢釜しく爭はなくてもいゝやうに思はれる。況んや米國は之を爭ふ事の上に何等重大の利害關係を有せざるに於ておや。それにも拘はらず米國が特に之を爭つて一歩も讓らさんとする態度を取るのはどう云ふ譯か。日本の一部の論者は之を米國の横暴と稱し、又は日本に對する迫害と昂奮するものあけるども、予輩は必ずしもさうとは思はない。よしそれがあつたとしても、只それ丈けなら何も之を怖るゝ理由がない。併し予輩の觀る所によれば之には更に肝要な他の二つの理由があると思はるゝ。

一つは最近に於ける我外交の失策である。山東問題につても、ヤツプ島問題についても、帝國政府の今日現に取つて居る立場を初めから取つて居つたらなら、こんな問題は今頃起らずに濟んだに相違ない。緣日商人の掛引のやうに、取れる丈けは取らうと云ふ態度をとつて問題の公平なる所置をなすの誠意を疑はれたから、そこで對手方は後日の爲めにギコチない根本的な主義の問題を持ち出したのである。見樣によつてはかゝる困難な問題の發生は帝國政府自ら之を挑發したのだともいへぬではない。

更にもう一つ大事な點は、日本の立場を其儘承認すると云ふ事は、今度の戰爭の結果として新に起つた大事な國際協調主義の徹底が蹂躙されると怖れたからであらう。國際　題を處理する根本思想が、戰前と戰後と大いに變つたと云ふ事は、戰爭の集合觀並びに渾一觀の方面から本誌に於て先に委しく說いた事がある。再び之を繰り返すことを避けて、七月號の時論欄の「日米交涉の一問題としての山東問題」を參照せられんことを希望して置く。こゝまで問題の內面的意義を突き詰めて考へると、今度の問題で我々が米國と爭ふのは、啻に米國政府を對手とするばかりではなく、潑剌たる勢を以て勃興しつゝある世界的一大思潮を對手とするものであることを忘れてはならない。

之れ丈けの事を念頭に置いて最近の形勢を觀ると、米國の當面の主張が有り來りの政治的慣例から觀て著しき傍若無人の態度なるに拘らず、何となく歐米の民衆から一種の道德的支持を受けて居る所以が諒解される。日本としては喜ばしい形勢ではない。ヤツプ島や山東の事が、華盛頓會議で問題となると云ふうな事も極めて不愉快なる事だ。偏狹なる國家主義者の眼には

我輩の此議論ですらが不都合だと映ずるであらう。併し世界を對手とする問題の取扱ひは我々の希望するやうに進行するとは限らない。希望は希望として問題を適當に取扱ふには、形勢其物を有りの儘に諒解するの豫備的知識が肝要だ。政府當局は徒らに米國の抗議に狼狽して此二大懸案を華盛頓會議開催前に解決するの方針を取つて居るやうだが、併し解決の前提は第一に問題の正しき諒解でなければならない。正しき諒解の上に基かざる解決は、決して完全なる終局を告げたものと云ふ事は出來ない、ヤップ島及び山東の問題が、假令一時的の解決を告げても、日本は此問題の蔭に潜む主義を諒解しない以上、否、主義を諒解せりと認めしめない以上、問題は必ず何等かの形に於て他日に貽るに相違ない。

再びヤップ島問題について

帝國政府が華盛頓會議開催前にヤップ問題を解決せんと努めて居ることは前段にも之を述べた。傳ふるところに據れば、八月末閣議に於て之を決定し、九月初め外交調査會の贊成を得たとの事である。それかあらぬか幣原大使が政府の訓電に基き米國國務卿と交渉中だといふ報道は其後頻々と傳へられてゐる。而して昨今新聞紙の報道する所に據れば、漸く協定が纏り、唯どういふ形で協定の趣意を表はすかといふ形式的問題だけが殘つて居るといふ事である。

併し乍ら米國の新聞に表はれて居るものに據つて觀れば、意見の合致を見たといふには未だ少し早いやうだ。ヤップ島問題が首尾好く解決したといふ最初の報道が我國の新聞に表はれた頃は、どういふ譯か米國側では頻りに之を打消さんとしたやうだ。昨今では問題は實質的に片着いたと見ていい、殘る所は唯些末な形式問題丈けだと日本側で主張するに對して、米國側は又頻りに委任統治に關する問題は後日の討議に殘すといふ意味を力説して居る。其の爲にや日本側で發表した一番新しい報道は海底電線については我、彼に讓歩したけれども、委任統治については表面承認を留保した形になつて居るけれども、事實上彼、我に讓つて承認した事になつて居る。畢竟双方互讓の結果圓滿なる解決を見たのだ。唯表面上委任統治に關する抗議を撤回したのではない事になつては居るが、之れも華盛頓會議の開かるゝまでには結局の解決が付くだらう、少くとも米國がヤップ島問題を討議に上さない事丈けは疑なからうといふ風に云つ

て居る。何だか奥底に物の挾まつたやうな云ひ方だ。そこに何等か怪しげな陰影が潜んで居るのであるまいか。政府側で示す曖昧な說明ではどうしても我々に滿足は出來ない。試みに此の間の關係を有りの儘に分析して見たなら、凡そ次のやうな事になるのではあるまいか。

抑もヤツプ島問題は曾ても述べた通り、今度初めて起つた問題ではない。長く紛糾して容易に融けなかつた事が、華盛頓會議に此問題の持越された所以である。然らば此問題に於いて米國の要求する一番主要のものは何かと云ふに、海底電線の國際化といふ事である。國際通信機關の獨占の否認並に此要求と委任統治との調和といふ事である。然るに日本は之を拒んだ。之を拒むが爲めに日本政府の取つた理由は、ヤツプ島が日本の委任統治區域として完全なる帝國の領土と同樣に整理する事が出來、從つて同島に於ける通信機關の管理についても、他國の容喙を容れないといふ點であつた。そこで米國はそんなら改めて云ふが、米國は日本の委任統治權を無條件に認めたのではない。最高會議に於いてもヤツプ島については、屢々留保の聲明を繰返したのだから、同島に關する最高會議の決議は留保附きにて決定されたものである、日本は之に對して統治的の權利を主張する事が出來ない筈だと云ふ。之に對する日本の答辯は簡單だ。米國は成程さういふ留保を度々繰返したらう、けれども一番大事な最後の決定の場合に條件を附加する事を要求しなかつた。ヤツプ島の地位を決定する唯一の根據たる最高會議の決議は何等の條件を附せずして同島を日本の統治に委任する旨を簡單直截に記載して居る。之を條件附きの決定と見るべき何等の據り所は無いと云ふ。此間米國は場合によつては日本の言分を立てゝもいゝから、日本は自發的に國際通信の設備を國際化するの考は無いかと聞いて來たのに、之に對しても我國は卒直に第三國の容喙を認め難き旨を手厳しく宣明した。そこで米國の要求はどうしても容られない。日本の態度は徹頭徹尾、米國の要求を斥くるにあるといふ事が明かになつたので、そこで米國が遂に最後の奥の手を出し、委任統治全體を否認する態度に出でたのである。

その此處に至る迄米國は兎に角委任統治に關する最高會議の決議を前提として議論を進めた。卽ち之は認めるが、只條件附きだと主張するのであつた。ところが日本の態度頑強なるを見るに及んで、遂に彼は論點を一轉して、そんならそも〱の初めに遡つて云ふが、自分は其最高會議の決議なるものを認めないのだと云ひ出した。一體米國は講和條約そのものを批准して

居ない。從つて彼は講和條約にも最高會議の決議にも拘束されないのである。從つて彼は前段にも述べたやうな理由によつてヤツプ島に對し、一部の所有權を主張するのである。米國が一部の權利を有する限り、彼の承認を經ずしては何等終局的の處分を付け得ない筈だ。卽ちヤツプ島に限らず凡ての委任統治に關する取極めは、皆終局的の解決を得たものではないと主張するのである。

かう考へて見ると理論としては米國の立場に相當の理窟はあるが、實際問題としてかうまで問題を引張つて來たのは、日本の挑發に出づるといつてい〻。見樣によつては日本の頑强なる態度は、一種藪蛇の嫌ひなきを得ないと云はなければならぬ。日本がどうせ今日讓つたやうに初めから讓つてか〻つたなら、こんな問題はとうの昔に解決を告げて居たらう。

一旦問題が此處まで發展した以上は、米國の當初の要求を完全に日本が容れたからとて米國はオイソレと手を引く譯には行かない。米國の承認なしに極めた委任統治の處分は、全部之を承認するといふ米國の立場を、兎も角も主義として承認して貰ふのでなくては米國の顏が立つまい。米國の容喙權が更めて認められたからとて、恐らく米國は今と甚だしく變つた解決を要求する積りはなからう。今まで定めた通りでい〻、が一旦自分に斷らなかつたのが手落ちだといふ事を承認して貰ひたいと云ふのだ。卽ち問題はさういふ主義の議論に入つて行つたのだから、海底電線の問題で日本の讓步を得ても、それ丈けで泣寐入る譯には行かない。從つて又先きに日本が頻りにヤツプ問題等を華盛頓會議の議題の外に置かん事を求めたるに對し、米國が毫も其の要求を顧なかつた所以も分る。問題の此處まで發展しなかつた昔は、それは日本と亞米利加と丈の問題であつた。けれども米國は今や國際聯盟理事會にも公文を送つてヴエルサイユ條約に定めたる各委任統治の修正を求めて居る。理事會は自已の權限外なる旨を答へ、米國に對して主たる聯盟國に直接協定を遂げられん事を求めて居るが、兎に角米國は今や日本並に他の凡ての國を相手として問題の回答を求めて居る。日本一國の要求があつたからとて之を議題から除外する譯には行かないのである。それを何時までも除外せよと求めたり、又は日本から他の點を讓步すれば除外して與れるだらうなどと考へたのは、短見も亦甚だしい。況んや彼が除外を肯ぜざるを不都合呼はりするに於いておや。尤も實際の政治問題として此種の問題を討議するのがい〻かわるいかは自ら別問題だ。けれども最近の形勢の推移を内面的に觀察して、米國の立場を正視するものに取つて、米國のあ〻した立場は初めから明瞭なるべき筈だ。

日本の政治家は常に此種の内面的洞察を缺くが故に、米國の此立場をどうしても理解しない。而して政府が最近新聞に發表せしめた所に據ると「政府部内に於いては初め既成事實及び特定國間の問題の除外を固執すべしとの意見頗る有力なりしが漸次緩和され、單純なる希望に止めんとする方針に變じ、更に一轉して今次の回答には帝國政府は必ずしも此種の問題に觸るゝを辭せずとの意味をそれとなく言外に含ましむるに至れるやに確聞す」とまるで問題の意味を諒解せず、緣日商人のやうに相手の顏色を見てチビリチビリ讓つて行き、結局先方の言分通りになつて行く有樣が極めて明白にされて居るではないか。此問題に對して我日本は盲目滅法な値段をつけた。結局取引きは米國のつけた正札に落ちて行くと云つたやうな形だから、今日の世界の形勢に照し、本來日本の得べきものは凡べて之を得、拂ふべきものは殘らず之を拂つたので、損德の計算から云へば、失敗も成功も無い、只大勢の歸する所を知らず、讓るべきを讓らず、得べからざるを得んとする態度を露骨に打撒けた點に於いて、政府の外交は確かに帝國の威嚴を甚だしく傷けたものと云はなければならない。

政府が新聞を通して時々發表せしむる所に據ると、只片務的に日本からばかり讓つたのではない、双方折合つて圓滿なる解決をつけた云ふ風に書いてあるけれども、之れ事實を糊塗するの甚だしきもので、我々は其の巧妙なる粉飾に瞞着されてはならない。政府は最初は米國の要求に一歩も讓る事は出來ないと斷乎たる態度で出て行つた。本年二月二十六日帝國外務省の米國に與へた回答は最も雄辯に此事を物語るものである。然るにも拘らず日本は結局此主張を完全に抛棄した、其癖米國に讓步せしめたものはと云へば實の所毫末も無い。議會の言論に見るやうな揚足取りの論をするなら、最初それ程國家に大事だと思つて讓步を肯ぜなかつたのなら、何故に今之を捨てたかと質問したい。今讓つたのはそれ程大事なものではなかつたと云ふのなら、それ程でもないものを頑強に固執する事によつて、帝國の外交的地位を此處までの難局に引張つて來た當局の責任を糺したい。何れにしても本問題の取扱ひに於いて政府の失態はどうしても之を蔽ふ事は出來ないのである。併し乍ら翻つて之を考ふるのに、此失態を原內閣のみに責めるのは又當を得ない。何故なれば失態の原因は內面的洞察の欠缺に在り、而して此種の欠缺は政界一般に共通する現象であるからである。朝野兩黨の如何を問はず、由來我國政治家の見識の淺薄なるは云ふ丈けが野暮だ、せめて我々國民は是等の點に活眼を開いて、健全なる輿

論の作興に努めたい。

山東問題の直接交渉の拒絶

盲目滅法の主張を固執して徒らに解決を困難ならしめたものは、ヤップ島の問題ばかりではない。所謂山東問題も亦之である。九月廿日過ぎの電報によれば、北京政府の外交部ではいよいよ直接交渉の拒絶に決定したと云ふ事である。此事は必しも豫期せられない事柄ではない。日本の論壇の一部には直接交渉の要求を受け入れたいが山々であるけれども、輕佻なる民間の暴論に壓倒されて終に拒絶の回答を與へねばならぬ外交部を氣の毒に思ふと云ふ風に同情の言葉を寄せたものもある。又中には支那がいやだと云ふなら日本は山東を還さないまでだと豪語するものもないではない。併しながら山東をあの儘にして置いては必ずや華盛頓會議の矢釜しい問題に上るであらう。之が議題に上れば遡つて日支條約の締結當時の事情までが詮索され、日本の外交的立場が甚だ不利益なものとなる、之を避けんが爲めに日本でも直接交渉を急いだのであらうが、對手の支那が之に應じないと云ふ事は、冷靜に此問題の意味を考へるものにとつて、又一つの頭痛の種たらざるを得ない。尤も假りに支那が直接交渉の要求に應じたからとて、それで之に關する問題は全然華盛頓會議の話題に上ることがないとも限らない。此點我々に於て豫め準備する所あるを要するが、併し爲め日本の外交的立場が頗る便利になる事丈けは豫期し得る。故にどの途斯う云ふ問題は極めらるゝものなら早く極めた方がいゝ。問題夫れ自身は大した事ではないけれども、之が偶々我國從來の政策一般に對する糺彈の種となるの恐があるからである。併し此問題を圓滿に形附けるには時期既に後れた。茲に我々は我國從來の外交的失態について深く反省する所なければならない。

山東問題を所謂既成の事實にあらずとする議論に一應の理由ある事は已に之を説いた。從つて本問題を華盛頓會議の議題に上すといふ案は、一概に之を不當と見る事は出來ない。併し同じく之を華盛頓會議の議題に上すといふ主張の中でも、支那政府自身の立つる所の理由は必しも正當ではないと思ふ。支那の之に關する輿論は日支條約の無效といふ事にあるやうだ。例の廿一ケ條問題が即ち之である。大隈内閣の時日本が廿一ケ條の要求を最後通牒で押しつけて、主もなる箇條を承認させたのが即ち日支條約だ。其中に山東省に於ける權利確認の條項もある。而して此條約は暴力によつてもぎ取つたものだから本來

効だといふけれども、之は甚だ亂暴の議論だ。締結當時の事情からいへば無論日本に道徳上非難さるべき失態はある。併し兎も角も獨立國が締結調印した條約である以上、今更之を無效とする議論は通らない。支那の主張する論據は、日支條約修正の理由にはなる。直ちに無効と宣言するの理由にはならない。此點については英佛は勿論、米國と雖も恐らく日本と同感であらうと信ずる。

併しながらさうかといつて我々は直ちに安心してはいけない。日支條約は法律的解釋に於て有効なる存在を主張し得る。換言すれば必ずしも之を無効だとは爭はない。けれども今日のやうな變轉の時代に於ては、かゝる昔の條約によつて事件を處理することが如何なものであるかといふ疑ひが起つて居る。法律や條約の規定がどうだらうが、それが今日の實際の要求に合はないなら、暫く之を高閣に束ねて別の新しい基礎に立つて事件を處理しようぢやないかといふのが、現代人心の大半を支配する一大底流である。此點を十分に諒解する爲には予輩は再び本誌七月號に掲げた予輩の論文を參照せられたい。日支條約によつて山東に於ける獨逸の權利を日本が確實に得た事、並びに之に關聯する幾多の條約や取極めは、いはゞ舊い時代に適切な處方箋であつた。丸で違つた健康狀態にある現代に於ては更に違つた處方箋によらねばなるまいぢやないか。斯ういふ所から山東に於ける獨逸の權利の如きも一旦は之を聯合國協同のものとするがいゝといふ考が起るのである。

殊に米國は山東に於ける權利の承繼を規定せるベルサイユ講和條約を批准して居ない。從つて權利の確實なる承繼を前提とする日支條約の山東條項は米國の眼から見れば、全然一空文に過ぎない。故に日本は少くとも米國に對しては、山東に於ける權利を有效に主張し得ないと言はなければならない。支那に對しては日支條約の有效は主張し得る。講和條約の山東條項は支那も米國と同じく承認を拒んでは居るが、已に日支條約の締結を承認した以上、日本に對する權利の承繼をも又先きに豫め承認したものと見なければならない。但し支那が米國などと同じく形勢の變化を理由として新時代に於ける新解決を要求するのなら又自ら別問題だ。

米國及び支那の論據は實際上同一ではないけれども、只抽象的に觀て、山東に於ける獨逸の權利を今や其儘或一國の獨占に歸すべきではないといふ議論には一應の理由ある事丈けは之を認めなければならない。併之を認めると、次に起る問題は一旦共有物となつた山東を今度は誰に還るかといふ點である。而して冷靜に考へて山東の割當につき一種の請求權（クリーム）を有

つて居る國は二つある。日本及び支那なる事はいふ迄もない。

日本の請求權の根據は日獨戰爭である。多大の人と金とを犧牲にして東洋に於ける獨逸の根據を覆した。努力と功勞とは何等かの形に於て酬ひられねばならぬ。若し支那が今度の戰爭に於て徹頭徹尾中立であつたなら、恐らく日本は山東に對する唯一の權利者として承認せられたらう。けれども途中からではあるが支那も此戰爭に參加した。數十萬の兵隊を歐洲の戰場にまで派遣した。形の上丈けでも戰爭に對する支那の貢獻は決して少いものとはいへない。此貢獻は支那にも相當の權利を與ふるものであるが、其中で敵國に占領せられたる地域の恢復といふやうな事は第一に着眼せらるゝものでなければならない。さうすると山東省に對しては日本よりもより多くの權利を支那に認むべきではないかといふやうな考へも起り得ないではない。若し支那が日本の仲介を排斥し、列國の承認の下に獨逸から直接に山東を回復したいと熱望するなら、彼は只此根據からのみ其主張を裏附け得る。日支條約の無效といふ事に拘泥するのは間違つて居ると思ふ。併し支那や亞米利加の具體的要求を是非するのは予輩のこゝに目的とする所ではない。此等の具體的要求から離れた所謂直接交渉の拒絶といふ一案件が現代の世界的思想の上から觀て、一つの重要な意義を有することを明かにしたい。實際問題としては日本にとつては不愉快な出來事だ。けれども世界の平和の爲めに道義的原則の確立を希ふといふ考へからすれば、我々としても亦此問題に對しては、冷靜愼重なる考量を加ふる必要があると思ふ。

日本はどの途永く山東を占領する考はない。還附の聲明は日獨戰爭の當時から發表して居る。只還附條件の極め方如何によつては痛くもない腹を探らるゝことがないと限らないが、併し九月七日帝國公使より支那外交總長に提出した九ケ條の還附條件の如きは先づ大體に於て極めて公平穩當なものといつていゝ。此位の條件なら支那にも大體異議なかるべきだが、併し今となつては遲い。何故遲いかは日支條約締結以來今日に至るまでの歷史を觀ればよく分るだらう。詰り我國は初め還すには還すが之にはそれ〳〵の條件を容れて貰ひたいというて可なり重い負擔を支那に需めたのであつた。否、當時は還附反對論もなかなか優勢であつた事は今尙人の記憶に鮮かであらう。漸やく〳〵ながら還附の聲明を發したのは外國に對する思惑も與つて力あつた事は明かである。其後も山東鐵道問題や、專管居留地問題やで、隨分支那の疑惑を增さしめ、其の反感を排發したのであるが、最近外交界の形勢がいよ〳〵行き詰つて思ひ切つた讓步をしても早く之を解決するを利とするを悟つた後でも、尙ほ、

を弄して淡白に日本の求むる所を打ち明けなかつた。其中に支那には直接交渉拒絕論が段々盛んになつて、而して終に今日の形勢となつたのだから、今となつては餘程思ひ切つた讓步をしても快く支那の承諾を得ることに頗る困難の事であらうと察せらるゝ。

斯ういふ場合に於て形式論に拘泥し、支那の中央政府のみを唯一の對手方とするのは、極めて拙劣な方策である。問題の速かなる解決を必しも我に於て要求しないのならいゝ、苟も之を必要とするなら、問題を實際的解決に導くやうに骨折らねばならない。之が爲めに何よりも必要なる事は、第一には支那民衆の輿論の開拓であり、第二には日本政府の最小限度の要求を公表して世界列國の道義的贊同を求むる事である。而して政府は二つながら全然之を怠つた。のみならず之等の點に關する民間の議論に耳傾けず、時としては之に反對の行動をさへ取つた。そして突如として支那政府に向ひ我々の希望を容れよと迫る。圓滿なる解決を見ざるは寧ろ當然ではないか。

今度提出した還　條件は可なり公平なものである。之れすらも始め秘密に附し、輿論の要求に促されて餘程後になつてから公表したといふにも我々は不平がある。軍閥が斯くの如き條件と並びに其公表とに反對したといふ噂も聞くが、ハツキリしたことはいへない。兎に角條件は可なり公平だ。之には他の列國も同感であらう。之に對してすら異議を唱へて支那が問題の解決を無用に遲延するといふなら、今までに得た列國の同情をも失ふかも知れない。併しながら茲に一つ我々の注意せねばならぬ點は、日支兩國の爭點は或は條件の實質の點から一轉して條件提出の主客の問題に發展して來はしないかといふ點である。條件は之でいゝ。けれども此條件を許すのは獨逸から山東を取つた日本が支那に認むるのか、又國際聯盟か山東を引繼いだ支那が日獨戰爭以來の功勞と犧牲とに對して日本に之れを認るのか、其主義の立て方が大事だといふ事になると問題は面倒になる。ベルサイユ條約を批准した各國は無論日本の立場を後援するだらう。が併し、其反對の立場にも相當の道德的根據と世界的な支持のあることを我々は忘れてはならない。

何れにしても政府が山東問題の結局の落ち附くべき所を丁學に見定めずして、縱まなる俗衆の滿足から餘程し　漸次實際的形勢の必然に押されて、一步〳〵後退りし、終に問題の解決をこゝまで困難に入れしめたのは我々の甚だ遺憾とする所である。政府が如何に方策を誤つても道理上當然受くべかりしものを失ふ樣な事はなからう。只世界の舞台の上に日本をして、常に思想的特殊部落たらしめた責に至つては斷じて之を許すとは出來ない。

小題小言六則

◎人口増殖と特殊地位　或る併合で日本の人口増殖の甚しきは世界普通の例を超えて居る。従つて其捌け口を他に求むるのは民族當然の要求で、こゝに満蒙に於ける特殊地位を要請する道義的根據がある。此根據から又同じく北米合衆國の移民政策や、白濠洲主義などを論破することが出來る。と云ふ様な議論に花を咲かせて居るのを聴いた。此議論は多く世人の無反省に唱道する所であるけれども、よく考へて見ると果して科學的根據に宿むや否や甚だ疑はしい。日本の人口が急速に増加しつゝあるの事實は疑を容れないやうだが、之を以て世界無比と云ふのは當らない。尤も人口増加率の激しきは未開の黒奴で、増加率の大小は文明の程度と反比例すると云ふ説さへが學界に行はれて居る。日本も文明の進歩につれて人口の増加率は段々下りつゝあると聞いて居るが、兎に角今の所は英佛のやうな悲しむべき狀態でない事丈けは明かだ。が然し日本丈けが特に増加率の著しい譯ではない。況して増加率が年々大きくなると云ふのではない。次に地積に對する人口の密度であるが、之も居たゝまらぬ程密集して居ると云ひ得るかどうか。日本が永く農業國として立つて行く積りなら別問題だが、工業國として立たうと云ふなら、日本の國土は今ある丈けの人口は固より近き將來に於て増加する所のすべての人口を包擁して餘りあると考へる。而して日本のやうな天惠に乏しき國の結局の運命は工業立國にあつて斷じて農本にない事は極めて明白の事である。故にどうしても人口の捌け口を外に求むる必然の要求があると云ふ議論は少くとも科學的でない。又若し單に之れ丈けの根據で海外發展の要求を貫かうとするなら、對手方からアベコベに朝鮮並びに北海道は如何と逆襲されて答辯が出來なからう。予輩の視る所を以つてすれば、若し日本に海外發展の要求を必然的ならしむるものありとすれば、それは幼稚なる工業を保護する爲めの專屬的勢力範圍の必要と云ふ事にあらう。幼稚なる工業を優勢なる外國の競爭から免れしむる爲めに海外に獨占的勢力を設定するの必要がある。此事を措いて日本に海外移住の正當なる口實はない。而して此根據よりする海外發展策が從來の形で各國の承認を得ることが出來るや否やが當面の問題だ。よしんば假りに人口が收容し切れないからと云つて無理に他の國を犯すと云ふ事は許されない。人口稀薄にして而も廣大なる地面を有するものに對して何等の要求權がないとは云はないが、對手方の意に反して我必要を無理に認めしむると云ふ事はオイソレ

許されないのである。況んや人口の激増以外の原因よりするに於てをや。何れにしても人口の激増を以て理由とするの說は甚だ科學的根據に乏しきものなるを反省しなければならない。

◉華盛頓會議に對する思想問題の顧問　華盛頓會議に思想問題方面の顧問として僕が行くと云ふ噂が新聞に出たとやらでいろ〳〵な人から問ひ合せが來る。一括してこゝに誌上を借りてお答するが、そは跡形もない無根の流說に過ぎない。一體考へて見るがいゝ。僕達のやうに頭から軍閥の打破を叫び、政府當局の失態を論ずるものが、何んの間違で政府の顧問等に擧げらるゝことがあらうか。若し僕が隨員として行くことがありとすれば、そは政府當局が全然從來の謬見から完全に脫脚した時でなければならない。政府の考が今の儘で、僕達の顧問が間違つても唱へられやう筈がないではないか。併し此事はどうでもいゝ。只かゝる噂の流布せるについて見逭すことの出來ない一つの大事な出來事は今度の様な國際會議には是非共思想方面の顧問が要る、と云ふ事を國民が考へ初めた事である。國際會議を所謂樽俎打衝と観た時代は過ぎた。思想的背景の下に合理的結着點を發見することが主なる任務であるが故に、どうしても思想上の見識が國際會議に於ける重要な役目を勤めねばならぬ事になる。國民が何となく斯う云ふ必要を感ずるに至つたと云ふ事は當然の事とはいひながら、我々の大いに注意して置くべき點であらう。只不幸にして政府には之れ丈けの理解はない。成る程專門的顧問は澤山連れて行くやうだ。併し家を造るに大工、左官、瓦屋等それ〳〵の部分的專門家の類は揃へるが、建物全體の具合がどうと云ふ方面に通ずるものは要らないと考へて居る。よし斯う云ふ全體の批判の出來る人を連れて行くとしても、自分の作物を故らに巧いと云ふ人か、或は西洋から彼處がわるい、此處がまづいといはれた時に、イヤまづいのではない、と云ふ風に巧みに敵の批難をあしらひ得るやうな能力を調法がる。本當に世間で其作物をどう観るか、或はどんな物を作れば世間一般の贊同を得るかの點については更に意見を聽くの必要がないと極めてかゝる。思想問題の專門家が顧問として行くなどゝ云ふ說の信ずるに足らざるは固より云ふを俟たないのである。

◉此迷ひより覺めよ　冷靜なる客觀的態度は個人間の交渉に於ても大事なやうに、國際交渉に於て殊に大事な事だ。我國の主張が全部道理に協つたと云へない他の半面に於に對手方の言ひ分が一から十まで不當だとも考へられない。彼我を通じて是を是とし、非を非とするの明白なる見地に立つて冷靜に事件を批判するでなければ、國際問題の圓滿なる解決は出來ない。此點に於て我々は新聞などの報道に常に多くの遺憾を感ず

るものである。何か我國の言ひ分を對手方が容易に承認しないと、報道は直ちに云ふ、彼は我の誠意を諒とせず云々とか、又彼に誠意さへあれば速かに解決する筈だと云ふ。少し談判に目鼻がついて來ると、彼初めて我の誠意を諒解したとか、我が公平無私なる態度を認めたとか云ふ。斯う云ふ妄想より覺めてもつと事件を冷靜に觀るやうになれないものだらうか。

◉**勞働者學校の開設**　勞働運動に知識階級の指導が入り用か否かは前號に於ても可なり多くの人から說かれた。何れにしても今日までの我國勞働運動は、外國の初期のそれの如く、知識階級に指導され、又其指導によつて大いに發達したのである。けれども彼等の指導による勞働階級の訓練を觀るに、遺憾ながら予輩は徹頭徹尾鬪爭氣分に囚へられて居つたと云はなければならない。尤も知識階級が立ち入つて勞働階級と接觸し得るのは主として勞資對戰の場合に限るのであり、從つて又勞資對戰に於ける方略を立つる上に知識階級の指導が入り用なのであつた。併し知識階級の指導が單に此方面丈けに偏しては、國民敎育を偏狹なる軍人に托したと同じやうに、所謂戰時的訓練で一貫される。併し我々の生活は其常態に於て平和である。臨時非常の事は平時に於て之を訓練するの必要はあるが、併し全然平時的訓練を犧牲に供する丈けの値打はない。此意味に於て勞働者に對する平時的訓練の缺乏は實に昭代の一大缺陷であつた。此時に方り、友愛會の人々も勞働者學校を設立するに至つたのは、寔に機宜に適した事業であると云はなければならない。而して予輩は友愛會幹部諸君の最近の思潮が勞働運動の外形的發展よりも其內容の充實に專念するに傾きつゝありしを知るが故に、一方實際問題の主張と解決に東奔西走しつゝある傍此學校計畫を立てたるを異とするものではない。我々は切に其發達と成功とを祈つて止まない。只窃に聞く所に據れば、官憲は之を以て友愛會の危險なる運動の方略一大に過ぎずとなし、更に一層猜疑の眼を以て嚴しく之を監視して居ると云ふ噂である。無用の監視干涉によつて折角の美擧を傷くるにやがて又我國勞働運動の健全なる發達を阻害するものである。もつと冷靜な愼重な態度を取られんことを希望する。

◉**勞働運動と外國の金**　最近の勞働運動に外國の金が入つて居ると云つて當局が騷いで居るといふ風說を耳にした。予輩は第一に外國の金を使ふと云ふ事夫自身は何故惡いかと反問したい。と云つて予輩は外國の金が昨今の勞働運動を援けて居るといふ事實を信ずるものではない。只若し假りに其事實があつたとしても、それを直ちに曲事とする譯には行くないと云ふのである。要は其金を用した目的如何に係る。金に

る或る不法の報酬を求むるとか、或は不法なる目的を援けて日本の不利を圖るといふ動機に出づるものなら、此金を使ふ事夫れ自身が悪いに相違ない。斯う云ふ不正の金を使ふやうな人が、今日の勞働運動家の中になからうと云ふ事は予輩の信ぜざらんとするも得ざる所である。予輩は數多くの勞働運動家を知つて居る。而して其獻身犧牲の精神に向つて無限の尊敬を拂つて居るものである。當世の政治家は思ふに此犧牲獻身の精神が分らないのであらう。其證據に彼等自身何か少し働くと、何時でも不當の報酬を食つて居る。瓦斯問題でも市疑獄事件でも此等の點はよく現はれて居る。而して彼等は已れを以つて人を量り、只で無駄骨折りをする筈がないからと云ふので、鈴木文治君以下の勞働運動家が神戸の爭議に駈け附けた日當が每日十圓乃至廿圓だと云ふやうな噂も立つ。之をウツカリ信ずれば次に起る問題は、其財源は如何といふ事である。斯くして外國の金又出資せる當該外國の目的如何と云ふやうな事になる。若しこんな事に警察が餘計な力を入れて居ると云へるなら、そは以ての外の誤りだ。肝腎の刑事事務が一向捗らないのも畢竟無用の精力を此方面に浪費するからだと云ふやうな下馬評に耳を藉す積りはないが、兎に角官憲の覗ひ所は少しく的を外れては居ないかと云ふ懸念がある。

◎或る將軍との話

旅に出て某將軍と汽車の中で話した。今日のやうな非常な時に方つては擧國一致が必要だ。國民が皆手足のやうに働くこと軍隊の如くでなければ到底國難に打ち勝つことが出來ない。規律の亂れ、服從の念の乏しいのが、我國今日の最大の缺點だと、彼は熱心に主張した。今日の世界を物騷と觀る點に於て、又國民全體が器械のやうに動くのがいゝと云つた點に於て、彼の見識は甚だ低いものであるが、よし軍隊的の規律と服從とが結構な事だとしても、それは軍隊といふ組織の中で初めて可能な事柄である。軍隊は抑も上官の命令に絕服從していろ〱の仕事をする事を訓練さるゝ爲に出來たも對にのだ。其代り不完全ながら衣食の料を官給して物質的生活の不足を告げしめない。だから服從も要求し得れば規律も立て得る。規律と服從とは斯くの如き特殊の社會的條件の上に立つて居るのだ。此條件が無ければ規律も服從も立ち得ないのが當然なのに、世人は動もすれば一定の條件の下に可能であつた事柄を、全然違つた條件の下に移轉せんとする。之れ多くの懷古的保守思想家の陥る所の過ちである。勞働問題などについても溫情主義者などの誤りは正さに之れだ。

その日暮しをする人

佐藤春夫

「人生はまあ何といふその日暮しであらう。」

或る本にそんなことが書かれてあつたのを見たことがあるやうに思ふが、全く、その言葉はそのころ――と言つたところでさう遠いことではない――の私にとつて眞實であつた。「私の人生はまあ何といふその日暮しであらう。」さう言つて私は私のその日暮しの心を自分自身　劬つてゐた。――でも、私を慰めようといふ人はもう私のそばにはゐなかつた。そばにゐないばかりではない、その人のところへ私が行つて見ても多分その人はもう私を慰めようとはしてくれられなかつたらう。私はもう誰も人を頼まうとはしなくなつた。さうして私はまだしも、しよざいない時には取るにも足りない書物を出して見たり、その揚句にたとひ一句でも心にとめたり、又それによつて自分で自分を慰めたり劬つたりすることが出來るぐらゐに、やつと回復して來たのである。さうして全く心の暮しの立たなかつた私は　どうやら「その日暮しをする人」にまで漕ぎつけたのである。

或る事件で二年間も私は身も心もすり減らしてしまつてゐた。そこへもつて來て

はもう一ぺん或る事件によつて、少しばかり回復してゐた私をすつかり使ひ果さざるを得なかつた。そのまま滅入つてしまつて私といふものはもうこの世のなかから消えて無くなりはしないかとさへ思へた。實際、私は心苦のためにわけのわからない熱が毎日出たりした。この世のなかから私が消えて行くならば結局それでもいいとも思つた。そんな自分を、私は敢て盛りかへさうとさへしなかつた。いや、したくとも出來なかつたのである。でもどういふ方法でそれをしたものだらう！　私には心をたのしませる何ものもなく、又その心を鞭つための何のよりどころもなかつた。――旅へ行つて見ようと思ふことがあつた。さうしてさまざまなところをその對象として空想して見たが、どこもかしこも遠すぎた。そのくせ遠すぎるほどのところでなければ私が旅を企てるといふ意味はなくなる。その遠すぎるやうなところへ思切つて出かけて見たら？　と、更に空想を假りにすすめて見ると、私は多分ノスタルジヤで氣が違ふだらうと思へた。さうして、「せめてはどちらかが死ぬ時には逢ひたい」と言つた約束は果せなくなるやうに思つた。「兄さん」とその女は手紙のなかで私を呼んでゐる「兄さんが外國へ行くことは私もやめて欲しいと思ひます。たとひ何百里へだててゐても同じ日本に兄さんがゐて下さると思へば私もまだしも心強いのですから。これは私からもきつとお願いたしますよ」――さういふ女の心持はそつくりそのまま私のものでもあつた。――さういふ取扱ひ方のない心持を鞭つて、それによつて私はえらい心境をつくらうなどといふ心は少しもなかつた。一たい、えらいとかえらく無いとか、善いとか惡いとかそんな標準は私には一切なかつた。さういふ標準を人々が持つことは各自の勝手だが、そんなものを持つてゐてそれを複雜な人間の心の働きの批判としてふりかざすことの出來る人間を私は羨しくも思つた。私の考へでは人間のなかには善い者、惡い者、えらい人、えらくない人、强い者、弱い者などその外そんな區別があらうとは思へない。强いて區別をしなければならなければ、唯、次のやうな二種類があるであらう――自分自身によつて或は他人によつて煽てられ甘や

かされて來た人間と、その對蹠的な人間と。私だつて以前には、私相應な尺度をもつてものごとを度つてはゐた。しかし、あまりこみ入つた人ごころを見るにつけて私は私の尺度がやくに立たないことに氣がついた。さうして人間といふものが自分を度るときの尺度と人を度る時の尺度とのまるで違ふことに氣がついた。私は私のすべての尺度を折り捨てなければならなかつた。私は人に對しては沈默し、自分に對しては――さう、その自分に對してはどうしていいのやらわからなかつたのである。ここで私は言つて置きたいのは、或る氣質の人間にとつては言ひ分のある時でも沈默する事もあるものだといふ事である。さうして私は言ひ分がいくらでもあるやうな、されぱと言つて無いやうな氣持ちもして沈默した。自分のなかにすべての標準を失つた人が、どうしてえらい人間にならうなどと志す筈もない。私はただ一途に「幸福な市民」になりたいとだけ思ひつづけた。さうして私のいふ幸福といふことは結局――論理はへんだけれど笑つちやいけない――その幸福はあの女と一緒に住みたいといふ事であつた。さうしてその女は私ではない外の男と住んでゐるのであつた。さうして何時までもさうするのであつた。その女がその女として出來る限り(それは何といふ窮屈なことであらう!)の自由で考へる結果は、どうもやはりそれより外には仕方がないといふのであつた。その女がさういふのであつて見れば、私は、それを或る程度までは「いかにも」と思つてやらないではゐられなかつた。――頼みがひのない戀人だと思ふよりさきに、「いぢらしい母」を感じて認めてやらなければならない。その女にはそのころ五つになる女の子があつたのである。――外の人間のことは誰も彼も、時としては自分自身をも(!)憎まずにはゐられない感情になる時にでも、どういふものか私はその女を決して少しでも憎んだり疎んだりする氣にはなれないのだから困る。どうするのを見るにつけてもその女は私にはただいぢらしかつた。――こんないぢらしい女を身のそばに置きながら「名ばかりの妻」にして、その代りには妻としての義務だけは一つ殘らず負はせながら、「馬鹿だ」と公言し、「善良な動物」

だとして過し、「意地も張もない女」だと言ひ、さうしてこの小娘のやうな女を二重に三重に、しかも五年に近い月日の間を欺き通して來た一人の男、さうしてそのいぢらしい妻を殺したらと冗談に、ふとゝがあつても彼の生活のなかにある複雑なかくしごとを何時如何に處分しようかと眞劍に考へつづけたことはなかつたらしい一人の男、さうして今更になつてこの女は自分の妻だと言ひ張ることの出來る男――その人には何れそれ相應の正義も見つけ出すことが出來るであらう。人生の批判に何の標準をも持たない今の私が、且つは彼自身の良心ではない私が彼を誹謗する權利も必要もないことであるが、ただその氣の強さには驚歎されたのである。まるでドンキホーテと對面をした時にハムレツトがするであらうやうに。さうしてその彼を見るにつけても、さういふ夫のところへ歸へらなければならないと心を決めた女を見ることは私には益々その女をいぢらしく思はせるばかりであつた。私はそのいぢらしさをどうかして完成させたいやうな氣持さへすることもいくらかはあつた――私はほんとうに可憐な妹をもつた兄のやうな心もちをふとかすかながら自分のなかに見出しては、その自分までがいぢらしかつた。私の立場は、されぱと言つて苦しいものであつた。――その上に私は、友達の家庭が亂れてゐるのにつけ込んで、その友達の妻を誘惑したのだと噂されてゐるといふことも聞いた。なるほど、私は私と何の深い交際もない人たちからはさう疑はれても仕方のないやうな立場にあつた。人々は彼等自身の生活ぶりから推して彼等に面白いやうに物事を觀るのであらう。それによつて人を批判しようとするのでさへなければ、それは一向、その人たちの勝手である。さうして恐らくは恥は彼等の方へ自づと返つて行くであらう。ただ私としては、私はどうかすればそんなこともし兼ねまじい人間であつたにしても、あのあれほどまでいとしい女を誘惑することを、私が敢てするものか。――それは誰の手前でもない。又彼の女のためばかりでももとよりない。又、道徳とか徳義とか法律とかその外それに似たやうな何ものの爲めでも決してない。ただ私自身の好みのためだ！　さうだ、

私には何の生活信條もない代りには、好みがある。それだけは今も殘つてゐて、却つて以前よりはその度合が强くなつて來るやうに思へる。さうして、あの女が今でもどれほど私の好みに合ふことか！——又さうして、あの場合あの女があの男をふり捨てて私のところへ來てゐたとしたらば、それはそのためにいくらか私の好みから遠ざかつてゐたことであらう。何といふ矛盾だらう。私は、して見れば、一人の女を失つたやうな、またそれによつて得たやうなものである——この出來事は何と、初めから仕舞ひまで矛盾だらけである。ボタン穴を最初に一つ間違つて掛けたために一つ殘つたボタン、そのボタンが私だつたのであらう。だから、をかしな道化芝居——「操持の豹變するドン・キホーテ」やら「人生に熱意と透察とを缺いてゐるハムレット」やら「（善良な動物）なる貞操の妻」やら「奸智の少しもない、人にだまされる蕩婦」やら。その他の人物が登場するをかしな道化芝居だと言つて、第三者がきつとするであらうやうに、私も聲を合して笑つて仕舞はうか。その笑聲と一緒に私の心持があとかたもなく消えてしまふならそれもいいであらう。それにしても私が、また私の外のすべての人だつてそれ相應にこのをかしな道化芝居のなかへ注ぎ込んだその「眞實」をどうしよう？　ほかの人のことは知るべくもないが、その「眞實」が今だつても私にのこつてゐるのをどうしよう。「神よ、本當にこれをどうしよう」——ただ修辭としてでなく、本心からここへかう書けたら、私には又なにか今とは全く別な心持もあり得るであらう。だが私は、くどくどといふやうではあるが、私の人生には今のところ何のよりどころもないのである…………

こんなことを書き流してゐては盡きない。こんな偶擬をいつまで言はうとする私であらう。私は言はずともいい無駄な書き出しをして、おまけにわき道へそれてしまつた——私は告白體の小説を書かうとしてゐるのではなかつたのに。私になんの、そんな野心があるものか——少くとも今の私に。たとひ野心だけあつたにしたところで、その氣力とても

ないし、それよりは第一に、人生の批判に使ふ何の尺度もない私にどうしてそれが出來得るか。それ故、私はほんの私のなさけない生活のおほまかなスケッチをして、それを小遣錢にしようと思つてゐるのである。私はいつのころからか、これもやはりあの事件のなごりであらうが、ずいぶん小使錢のかかる人間になつてしまつた。で、今でこそかうしてだらしのない文章も書けはするが、その當座は人の話の速記みたやうなものを發表したり、さては五六年前にあてもなく、しかしいくらか華やかな氣持で書いて置いた未定稿のそれもやつと半分出來てゐるかゐないかといふ代物をよそへ持込んで金にしたりした。そのおかげで私はこんなたよりない心をもちながら、そのへんに華やかな厭味な作品のづつきを毎月喘ぎ喘ぎ書きたしたりするのである。私はそんなにしてまで金をこしらへて、何の爲めに使ふかと言うだらうが、と言つて別に酒を飲むわけではない。女を買ふわけでもない。そんな買ひものはどちらかと言ふとまあ私には些不向きである。そんなことを面白からうと思つた時もないではなかつたが、もう私の好みは變つてしまつた！　で、酒の方はといふと、私はずいぶん時々にそれを嗜んで見たいと思つて飲まうとすることがある。だが、ビール一杯飲めば私は眞赤に――腹立しいほど眞赤になる。それだけならまだしもいい。私は少し飲むと所謂泣き上戸といふのであらう、聲を上げこそはしないが目から水が滲み出てくる。何といふみつともない事だ。では私は何のためにそんなに金が入用か。打ち明けるのも羞しいのだが、實は、重に、私はネクタイを買ふのだ。ネクタイを、それからそれに類した自分自身の身につけるものを。――つかぬことを言ふやうだが、私は以前は入浴することが大嫌であつた。それがこのごろはよくお湯へはいるやうになつて、お湯へ這入れば耳をよく洗つた。あの女が、お湯へはいるやうに、耳を洗ふやうにと私にさうよく言つたものだから。それに私はなるべく時間を費すやうに、全く時間を費すといふことが私の入浴の重要な目的だつたから、私は體のどこの部分をもよく磨いた。そんな瞬間に、初夏のひるすぎの明るい人氣のない廣い板の乾

いてゐる錢湯のなかに、何とも捉へどころのないさびしさが湧き漂うてゐることがあつて、私は手拭を使ふ手をやめて、しやぼんのくつついた臑をいつまでもそのままにして、十分ばかりもしよんぼりと何もない或るものを考へ込まねばならない事もあつた。私はまたすることの無い人の衰れた丹念でこくめいに自分の髭を剃つた。或る日のことであつたが、私は以前からもよくそんなことがあつたやうに、ふいと氣まぐれに蓄へてゐる髭を剃り落して見た。そんなことでもすれば幾分か氣分でも變らうかと思つて。

「あら。何だか變だと思つたら、兄さん、髭を落しちやつたのね。」妹——弟の妻が、それを見つけた時にさう言つた。

「うん。いい男にならうと思つてね。」私はいくらか氣の輕い時でもあつたし、氣の優しいこの女にそんなことを答へた。

「をかしいわ。やつぱりあつた方がいいわよ。」

私はそれにはもう答へないで、いつかの時にあの女も同じやうなことを言つたと思ひつづけながら、鏡を見入りつつ私は言つた、なかばはひとり言の句調で——

「人間の意志で變へることの出來るものは、せいぜい自分の髭を剃つたり生したりするぐらゐのことだけさ。——それだつて、やつぱりあつた方がよかつたと言つて直ぐには生えても來ないのだ。結局は勝手にして勝手に出來ることはネクタイをとり代るぐらゐのことだらう。」私は冗談のつもりで言ひ出した自分の言葉に、あまり本當がありすぎたやうでさびしかつた。そんなこともあつた。——で、私はネクタイやその外の自分の身につけるものを買つては、それによつて私は精一ぱいに自分の身のまわりをきちんとした。何のためのおめかしでもない。私は身すぼらしい装をしてゐると心の底まで見すぼらしくみぢめになるやうで堪えがたかつたのだ。——一体私は、五厘錢ほどの穴を決して人には氣づかれないほど上手に母がかがつてくれた絹の靴下を穿いた事があつたが、その見えもしない又何の不快な觸覺をも決して與

へないその靴下が、ただかがりがしてあるのだと自分で思ふだけのことで、そのかがり目から悪影が忍び込むやうでその日一日は折角の散歩――といふよりは旅行といふ方がいいやうだが、兎も角もその一日は氣が滅入つた。さういふわけだから私は自分自身のために、武裝をするやうなつもりで身なりをととのへた。それから懐には相應な金をなるべく缺かさないやうに用意して、事情のないかぎりは無論ひとりで初夏の東京市街をよく旅行するのであつた。――私は青山南町四丁目の家から出て、四谷信濃町まで市内電車で行つた。さうしてそこの驛から省線で、最初のうちは直ぐ新橋驛へ行つてたが、それでは歩くことや夕方に食べるものや歸り途などの都合がよくないことに氣がついて、私は三回目から神田驛で省線を下りることにした。神田驛まではあまり近すぎたけれども、いづれは世の中にそつくりこちらの望むとほりた都合があるものではないと思ひあきらめてゐる私には、無論そんなことは仕方がないとして、神田驛を出ると銀座の方へ私は歩いた。私は前こごみになり勝ちな自分に注意して出來るだけ胸を張つて何の屈托もない人のやうな足どりで歩きつづけた――私にだつていくらかの見えもあつたし、それ以上の事にはかうして愉快さうな様子をしてゐる軀のそんな姿勢にだまされでもするのか、心がどうやら輕くなるやうに思へたからである。こんなに行き來する人々のなかでほんとうに滿足してゐる人は幾人あるであらうか――世の中に今日たつた一日だけでも心から樂しいと思つてゐる人があるだらうか、――あるならばどんな人がそれだか見たいものだ。そんなふうに思つて私は行き來の人の、色をちらちらと偸み視た。輕快な足どりののんびりした紳士もあつた。ひとりで微笑をうかべてゐるちようど私ほどな年ごろの男をも私は見た。が私はうつかり彼等の足どりやひとり笑ひなどにだまされるものか。私はちやんと知つてゐるよ――君たちがいくら呑氣さうにしてゐたとて、にやにやと笑つてゐたとて君たちにも君たちの苦勞がある筈ぢやないか、――それを今ふいと忘れてゐるだけだらう、それに見かけで人を決定しようものなら大間違ひだ。見かけだけなら私

だつて氣らくさうな青年紳士、少くともうちへ歸れば、それほどいやぢやない妻君に三つぐらゐの子供までありさうに見えるだらう……………いけない！　いけない！　かういふ考へをつづけちや。そこで私はひよいと立とまつて一つのショウヰンドウを覗き込む。それから頁だつたショウヰンドウを一つ一つ見詰めた。呉服屋の店頭だけはやつぱり見ない方がいいことにも氣がついた。そこには二十五六ぐらゐな女物がよく見せつけてあるのである。さうしてそれは私には決して用のないものである！　私は何か自分に用のあるもの、自分自身の武裝に役立つものを見つけなければならない。それで一ばん安くつて一ばん私を樂しませたものはネクタイであつた。――それいしんから氣に入つたものを見出した時には馬鹿馬鹿しいやうではあるが私はいくらかなぐさめられさへした。――私にはそれに就て、いかにも私らしくひねくれた幾つかの理由もある。だが、そんなやすつぽいところにお前のなぐさめがあつたかと笑ふとの出來る人は、大きな聲で私を笑殺してくれたがいい……。ネクタイのこと、後に讓るとして、かういふ風に、歩行によつてやつと空腹をおぼえ出したところで私は自分の食慾を感じ得ることを喜びながら、レストランか何かのあまり初めての客などに慣々しく口を利かない女のゐるところを求めて、そこの一隅で食事をした。私は出來るだけ――一たいが人の半分ぐらゐしか食べない私としては出來るだけ大食をした。それが神經衰弱のいい療養法だといふから。私は豚のやうに食つて、豚のやうな神經を常に持つてゐたいことを願ふ。鷹揚に金を支拂つてゆつたり椅子から立ち上がると、再び私は新橋驛の待合室を目あてに歩き出して、そこの椅子へどつかりと腰を落ち着けた。私はつひ三四ケ月前に鎌倉へ行くためによくここから乘つたり或は下りたりする自分を思ひ出した――思ひ出すまいと抑止してゐるかたはらから、直ぐ考へ出してゐるのであつた。私はまたそこで、鎌倉の彼の女がその夫と一緒に偶この驛におりるとか、乃至既に東京に來てゐてここから乘り込むとかいふやうなこともあつたらば……とおろかしい空頼みをもした。一度などは、ふりかへつたところを見

れば似ても似つかない他人のそら似に胸を打たれたりした。私はかういふふうに、かがやかに灯のともつた時刻を、一時間以上もひとりぼんやりと、見しらない活氣に滿ちあふれた群集のなかで自分もさもさういふ仲間の一員でもあつたかのやうな顏をして、このなやましい時刻をどうにかかうにか過した。私は屢〻さういふふうにそこに居たのであるが、あの女を見かけることはもとより一度もなかつたが、改札口のよく見えるあたりに腰をおろしてゐた私は、或る日、ゆくりなくも意外な人を見出したのであつた——數年前に私と一緒に暮したことのある或る女の横顏であつた。それが改札口へ這入つて行つた。以前にはかけてゐなかつた眼鏡をかけてゐたが、たしかにその女に相違はなかつた。私は數年前にその女と別れたきり、數年目に始めてその女を見かけたわけである——そんなところにそんな心を抱いて、自分自身をもちあつかつてゐる私が。

「どうしてゐる！——たつしやだつたか。」

私は心でさう呼びかけながら、目でそのあとを追うた。私はその女を、互に心を傷け合つた女を懷しく見送ることが出來たのである。さうして歲月といふものの力と、人間の心に惠まれた不思議な作用に實際、感じ入つた——あのころの憎は全くあとかたもなく消えてゐて、愛だけはかすかに殘つてゐるではないか。いい着物の好きな、かろはづみな、——かろはづみならばこそあのころの私のところなどへ飛んで來たのでもあつたらうが、——そんな女ではあつたが、心は惡い女ではなかつた。——女は勿論、こんなところで私がこんなことを思つて見てゐやうとは知るまい。悴れはなかつたやうだつたが、どうしてゐるのだらう。ちやんとした身なりをしてゐたと思つたが、氣樂に暮してゐてくれればいい——だがちやんとした身なりをしてゐるといふことが、なんで氣樂な暮しの證據にならう。まあ早い話がこの俺はどうだ……私はまたしても自分のことを考へ始めてゐたのであつた。さうして、あの女——昔の女はどちらの方角へ

乘つて行つたかは知らないがもうとにかくプラットホームにはゐないだらう。と、さう思つて私は自分自身も改札口から出た――いつものやうに、ここから品川までもう一度、省線に乘るのである。さうして品川驛からタクシイを青山墓地の入口まで走らせた。――これが私の一日の旅行の定期行程だつた。今までは人通りや停車場の雜沓のなかに、兎も角も普通の人間として通用しさうに振舞つて來た私が、たつたひとりになつてあの早く動く箱の隅にしよんぼりと身をよせる時には、私は私の心にも體にも最も自然な姿勢たる前こごみになつて、私は誰憚る人もないここで聲を忍ばずに泣き出して見たい。この車のゴム布の埃つぽい床の上に涙をぽたぽたと落して見たいと思ふのが常であつた。「わたしは泣蟲ね。貞吉さん、あなたは涙は出さないで心で泣くわね」――そんなことをあの女が言つた事もあつたが、あの女は私を知つてゐてくれた。私にはどういふわけか澤山の涙は出ない、ほんの少し滲み出すぐらゐなものである。それもなるべく人がゐない方がいい。涙だけではない、私は人の前でどなつたりすることも出來ない――何か生理的な關係があるのであらう。私はものの本で見たことがあるが、外國の或る小説家で心にもない身の上噺をかたり出して女の前でぽろぽろと涙をこぼすことを道樂にしてゐた人があつたといふことであつた。なるほどそれは道樂にするだけの値もあらう。だがタクシイのなかでひとりで泣くことは道樂にしてはあまり氣が利かない。それは私だつて知つてはゐるが…………。

何だかもう書くのはいやになつて來た――何でもいいからとつとと書いてしまはふ。兎も角も私は、決して二度とはない生涯――私にも生涯は二度とはなく、あの女にも生涯は二度とはなく、それゆゑ私とあの女とは一生涯一緒に暮す日はなく、卽ち永久に別々に生きなければならない、さう思へば人の生涯の二度ないことを一さう痛切に考へるのだが――その決して二度とはない生涯の再び呼びかへす術のないどれほど惜しんでも惜しみ足りない筈の日々を、無役な命

をつかつてこんなふうに暮してゐるのであるが、私はどうにかして早く月日が經つてもらひたいのであつた。實際、私のやうな心境は歲月より外のものがどうすることも出來まい。三月か半年か一年かそれはわからない。何にしてもただ賴みにいふのは歲月である。私はその間にまあ出來ることならばなるべくは萎縮し切つてしまひたくはなかつた。私にだつてまだその程度ぐらゐには自愛も殘つてゐたのである。そのためには兎も角も今日といふ永々しい一日をどうにかして何かにとり紛らせて消し去らなければならないのであつた。さうして、大ていは午后三時前に出かけて夜の九時には歸つて來るこの半日の旅行によつて私は、私の一日の命を惜みながらもうまくごまかして、疲れ切つた體をもつて寢に安眠することが出來た。安眠！安眠！それが祝福された人生の唯一のものでは無いにしても、祝福された人生の一部分なることは、いかに確かな事であるか！　お湯へ毎日這入ることもかうした奇妙な人知れぬ漂泊をすることもただ安眠を得るための充分な疲れが欲しかつたからである。心のなかに凝り固まつてゐる鈍重な勞苦を、私は肉體の運動によつて消散させようと企てたのであつた。さういふ毎日が一ケ月以上もつづいたであらう。さうしてその都度毎日一本づつ買つたネクタイは三十三本あつた。私は百五十圓ぐらゐのネクタイを買つたわけである。精神のさびしさはネクタイによつて（！）でもすこしは慰められる――私は奇嬌なことを言つてゐるのぢやない。恥を忍んで眞實を述べやうとしてゐるまでである。――人間に對してよりも動物に、動物に對してよりも植物に對して一さう本當の愛をささげるやうに思へる私は、いつしか物品に對して深い愛を持つやうになつて來てゐた。それとも世界に幾つしかないとか、製作者の心血のあとが歷々としてゐるとかそんな立派なものはいけない。それを持つといふことにはどれだけ深い責任があるか知れない。私はその責任に堪えない。氣紛れな私が愛好するにはネクタイぐらゐなものが精一ぱいである。ネクタイ一種の意匠を考案するのに誰が懸命な努力をしよう。その意匠者たちは、それがしばらくの間人人に氣に入られてやが

ては皺くちやになつて顧られなくなる彼等の製作物の運命を萬々承知してゐてつくるのである。しかも彼等とても決してそれ相當の苦心なしにそれをファンタヂィレンしたのでないことは明である。赤だとか青だとか綠だとか黑だとか紺だとか黃色だとか白だとか——大して種類もない糸の組合せから、ともかくも人の目にいみじさを訴へるだけの効果をつくり出して置きながら、彼等はその工夫に就て何らの名譽をも人から要求してゐない。私にはその意匠者の心が何となくなつかしまれるのであつた。おそらく彼等はその日のたつきを得られるといふ事以上に大した事を望まずに、しかも彼自身の仕事をたのしむ心があればこそ、私をたのしませるものをつくり出しもしたのである。私はひどく氣に入つたネクタイの一本を手にとつてしばらくそれをひねくつて見てゐるうちに、意匠者のその卑下した心根を思つて見ずにはゐられなかつた。さうして私は、「私はこのネクタイを愛する」と言はうと思つた——「愛」といふ言葉の前でしばらく躊躇してから敢て言ふのであるが。——が、さういふ理窟を私はいま人に認めてもらはうとはしない。ただ私にとつて一本のネクタイには三度のよろこびがあつた事を聞いてもらへばいい。先づ私がそれを見出した時である。——私はその時、私と同じような趣味の人のあることを知るのである。——それの意匠者とその意匠を採用した人とさうしてさまざまな種類のなかからわざわざこれを擇んで求める幾人かの人と。さて彼はそれを買ひとつて、前に述べたやうな方法で家に歸ると、その買物をとり出してそれがどうしてから都雅な、乃至はグロテスクな美しさの効果をもつてゐるかといふことをひとりで出來るだけ精密に研究した——大てい三十分から一時間もかかつて。かうして後に、それこそ完全に私のものである一本のネクタイを私は大事にかたづけながら私は思ふのである——「この次に出かける時には、あのシャツへこのネクタイをつけて出よう」と。「この次に何々する時には……」から言つて私は私自身に約束をするのである。私はそれ故に「この次」といふ希望を持つ事柄が出來た。最後には、私がそれを始めて身につける時のよろこびがある。

れは言はば摘草の少女たちが氣に入つた野の花を髮にかざすやうな子供らしいものであつた。しかし人生のよろこびのなかで純粹なものと言ふのはどれもこれも子供らしいものではないか。一本のネクタイにある私の三つのよろこびに就て、これだけの說明を聞いてもまだ私を嘲笑ふ人があつたならば、私は憫りはしないけれどただその人を嫉むつもりである——その人はきつと人生の孤獨と倦怠とを全く知らない人に違いあるまいから。彼はかういふわけで三十何本かのネクタイを買つた。銀座の通りでいいネクタイの集つめられてゐるのは尾張町の四つ辻から遠くないM.Kといふ店が一番だといふことを自然に知るやうになつた。また私が氣に入つて手にとる品は期せずして大ていの場合にJ.H.Buckinghamといふロンドンにある會社のものであつた。この會社のものはなかなか意匠にすぐれてゐて一樣に愼みぶかい華かさを持つてゐた。唯、品質はあまりよくない。品質の點ではやはりロンドンのWetch Margetsonといふが最も堅實でまた意匠もすこし大まかであつたが澁いものである。私はアメリカのものにはあまり同感しない。それはあまり惡く華美だからだ。唯アメリカのものでは何と讀むかしらないがQuixlideといふ品だけは深みのあるグロテスクな味のものがある。——私は人に笑はれようと思つてこのとほり名譽にもならない通をふりまわしてゐるのであるが、私は實際今までにもう笑はれた——最初に私が五六度ネクタイを買つて來た時には、私はそれをうちの人みんなに見せて、「美しい」と同意してもらつたが、それ以上度かさなつた時には、妹は、

「兄さん。またネクタイなの」と笑つた。

母は、

「また、あんな頸へ卷くものを買つて來た」と笑ひながら輕く咎めた。それゆゑ、私はその後はもう、自然見つかれば仕方がないが、でない限りは誰にも見せないでひとり自分の部屋に籠つて それを樂しむやうになつた。私は私のその

よろこびがどんなに馬鹿げたものであるかはよく知つて居る、知りすぎてゐる。さうしてこんなものに慰めを見出さなければならない自分を惱んでゐた。しかし私たちが傳へ聞いたり或はごく稀に見ることの出來るやうなえらい人の深い喜びは別として、普通の人間の普通の人生の喜びが、私のこのネクタイに對するそれよりも一歩だつて高尚だ或はおろかしくないものであり得るとは信じ難いのである。――私は本氣にさう感じる。――これがもし奇を弄んだ末に思ひついたものなら（！）私はしたりげにほくそ笑みして自分の機智を見せびらかせばすむ。但、本氣でそんなことを考へさせなくたつて來た自分。その自分が私はどういふふうにあやしたらいいものやら。人間たるものが人生を一本のネクタイ以上には愛し得ない。笑ひ事にしてはあまり悲しすぎる。悲しいと言はうにはあまりをかし過ぎる。……（この點線の間で私は昔々惱んで三日間書いたり消したりした）――こんなことをたどりたどり書いてゐたうちにどうやら私の考へも少しづつは變つて來てゐるらしいからである。今度、原稿料をもらつても私はもう無邪氣にネクタイなどは買へないかも知れない。――今思ひ出したから書くことであるが、この間のことであつた。私は「現代青年」といふ雜誌社から「貴下は現代　青年に何を要求せらるるか」と言つてたづねて來たことがあつた。現代青年社は私を一とほりの名士か何かのやうに思ひ込んでゐる。現代青年社には氣の毒なことだけれども、私にとつては感謝しなければならない事である。――たとひ　の人たちが私といふものを知らないからにしろ、私はその人たちの目にはやはりいくらかはどんな意味ででも兎に角「必要とせられてゐる人」らしいからである。私は「誰からも愛せられもせず必要ともされない不幸な人門だ！」などと歎くこ　で身をおとしてよろこんでゐない方がいい。私はその時、自分自身でさう自重して、それで現代　年社へは次のやうに答へて置いた事であつた――

「探海燈のやうな理智と裝甲自動車のやうな意志とを持つた高邁の精神を！」

ところで、こんな心の生活をしてゐる私が、そんなことを答へたと言つて人が私を嘲笑するのではないかと思ふ。私は嘲笑にはもう飽和狀態になつてゐるが、がらにないことを言つたと言つて私を笑ふやうな人があつたら私は反問しようと思ふ。本當に私はがらにないことを言つたらうか。私としては全く反對に――私こそ前の言葉を言ふがいゝの第一人ぢやなからうかとさへ思つてゐる。たとへ話をするが、假に「私は丈の高い美丈夫が濶歩するのを見たい！」と言つた背蟲の小男があつたとする。人は彼を笑つていいだらうか。あんまり理におちて話はつまらなくなり――それは今更かまわないが、私の心が妙に苦しくなつて來た。利き目があるか逆の反應があるかは知らないが、せめてはれ後にだけ冗談を一つ言つて、それから燈を消して私は眠ることに努力しよう。――今度、原稿料をもらつたらもうネクタイはやめて、その代り骨董屋をあさつて、私適い精神の出ものでも無いか聞いて歩かう。

屋上の雜草

上司小劍

一

二階の窓からは、靖國神社の大鳥居が、遙かに眺められた。

『あれ、招魂社ね、わたしの兄さんも、あすこに居るのよ。』

『あなたの兄さん神主?』

『あらいやだ。……………生きてやしないのよ。日露戰爭に死んだのよ。』

『死んだ人がどうして九段に居るの?』

『ほゝゝゝ。…………頭がわるいわね、瀨川さん、死んだから、招魂社に居るんぢやありませんか。神さまになつて、……祀られてるんぢやありませんか。解つて。』

『さう。…………隨分窮屈でせうね。』

『何を言つてるのよ、瀨川さん、あなた今日はほんとに變だわ。どうかしてるわ。』

『だつて、さうぢやありませんか。あすこのお堂は、淺草の觀音さまより小さいでせう、淺草の觀音さまは一寸八分のお像が一つ祀つてあるんださうですが、招魂社は何

萬何千人からの兵隊さんが祀つてあるといふから、狹くて窮屈だらうと思ふのよ。』

『ほゝゝゝゝ。』

『ほゝゝゝゝゝ。』

非番の電話交換手が二人、窓に凭りかゝりながら、他愛もない對話をしては、笑ひ聲の合奏をやつてゐるのを、春田は微笑みつゝ佇んで聞いてゐた。

『ほゝゝゝ。』

對話の一人は、不圖後を向いて、春田の姿が間近く立つてゐるのを見ると、きまりわるさうに、事務服の袖でおちよぼ口を押さへて、婀娜かしい笑ひかたをした。

『ほゝゝゝゝ。』

今一人も窓から此方を振り向いて、同じやうに笑つたが、これは大きな口を其のまゝ押さへもしないで、雀斑の顏をくづして、まともに春田を見た。春田の方が却つてきまりのわるいのを感じた。

『今日は。……』と、春田は少し顏を赧くして言つた。

『今日は。……』

『今日は。……』

二人の交換手も口を揃へて、同じことを言つた。

『電池はまだ大丈夫でせうね。』と、春田はてれかくしに、交換臺の方を覗き込みながら言つた。其處では、四人の交換手が、銀色に光る受話機を、リボンか繃帶かのやうに頭へ卷き付けて、プラグを差しかへる手も忙がしく、赤や白やの

豆電燈が、點いたり、消えたりしてゐた。

『だいぶ光りが強くなりましたね。話も聞えにくいでせう。明日詰めかへませう。一昨日詰めかへたんでしたね。明日は朝のうちに早くやつちまひますよ。』と、春田は首を長くして、いつまでも赤や白やの豆電燈の點いたり消えたりするのを覗き込んでゐた。

『おや、中山さん、暫くでしたわね。お變りもなくつて、相變らずお忙しいんでせう。あなたの方の女學校はどう。…………駄目ですつて。駄目はわかつてるわ。あれは囮ですもの、あんなものに引つかゝつて。……えゝさう、さうなの。……いゝえ駄目よ、……ミス・セガハ……相變らず輕躁いでるわ……さう、いづれまた。……あつ、ちよいと、ちよいとあのね、………』

交換臺では、局の方の交換手との私談が始まつて、長つたらしく續いてゐた。

『またわたしのことを報告してゐるのよ、ミス・セガハだつて、覺えてゐらつしやい君塚さん。』と、雀斑の方が、雀斑とともに顔を膨らした。

『いゝぢやないの、瀬川さん。あなただつて、隨分人のことを報告するぢやありませんか。』と、靖國神社の内陣に兄をもつといふ羞かみ屋の方は、宥めるやうな、窘めるやうな物の言ひやうをした。

二

『此處から見ると、隨分、方々の屋根に草が生えてますね。』と、春田は二人の非番交換手と、いつの間にか位置を入れかはつて、自分が窓に凭れるやうになつてゐた。

『えゝ生えてますよ。』と、雀斑の方が側へ寄つて來た。さうして、『草ばかりぢやなくつてよ、木も生えてますわ、御覧なさい。』と、青い筋の薄く浮き上つた柔かさうな白い手で指さす方角を、一丁ばかり先きに眺めると、成るほど崩い崩れ落ちかゝつた土藏の棟に近いところへ、二尺あまりにも伸びた木が、活々と枝葉を繁らせてゐた。草ではないかと思つて、春田は滅多に掛けない度の弱い近眼鏡を取り出して、其の玉の力でヂツとよく見なほしたが、確かに木で、どうやら漆の木らしく見えた。

『ね、北村さん、去年の秋は、あの木が紅葉して、綺麗だつたわね。』と、雀斑の人はまた白い手で指さして、後を顧みた。手に雀斑のないのを不思議としなければならないほど、顔がきたなくて、手が美しかつた。

『えゝ、綺麗でしたわね、萬年町ハイ……』と言ひかけて、羞かみ屋は、長い頸を縮めつゝ、『……カラさんは、あの木が紅葉したのを、毎日〳〵この窓から見に來て、あれを貰つて盆栽にしたいなア、と言つてたわ。』と、嘲るやうに言ひ終つたところへ、ひよつこりと、其の萬年町ハイカラと綽名に呼ばるゝ飛永機關夫が、原料香水の匂ひをプン〳〵させつゝ、立ち現はれた。羞かみ屋の交換手はだいぶ狼狽の色に、白い顔をさつと染めて、横に向くなり、赤い舌を少し出した。

『春田君、此處に居たのか、此處が一番眺望がいゝね、南も東もまるで駄目だ。近くにデカい白煉瓦なんぞがドツサリ建つたからね。早く新館が出來上らないと、折角の大銀行も背くらべぢや負けつゞけだ。』と、飛永は交換嬢の方を見い〳〵、例の輕い調子が咽喉骨の高い咽喉から轉がるやうに出た。

『方々の屋根に草が生えてるから、それを見てるんです。草ばかりぢやありませんね、木が生えてますよ。あれに花が咲いたら、この窓から花見が出來ますね。』

實際春田は、皮肉でもなんでもなく、さう言つた。この美しく立派な東京の家々の屋根の上に、かうも雜草が繁つた

り、山中の廢寺かなんぞのやうに、漆の木までが瓦の下に根をおろしてゐようとは、今まで全く思ひ設けなかつたから、スッカリ感心してしまつたのであつた。

『これを見ると、日本も情けなくなるね。第一の大都會がこれだもの。街路樹は痩せたり枯れたりして、屋根の上の……屋上樹が繁つてるのは滑稽で、皮肉だ。重役は脂ぎつて、機關夫が骨と皮になりかゝつてるのと同様だ。』と、飛永は事の序でに輕い氣焔を揚げた。

『飛永さん、交換手は？……』と、もう一人非番の小づくりな、小まちやくれた顔をした交換手が、何處からか立ち現はれて、黄色い聲を出した。

『交換手はいゝさ。上の御ぼえ芽出たしでね、……君ツこんな人たちでも、我々より待遇がいゝんだからね。』と、飛永は春田を顧みた。

『こんな人たち、だつて。……こんな人たちのところへ一々名刺を持つて挨拶に來たのは誰れ？』と、衛班の人が後の方から嘲つた。春田は電氣の係りでもない飛永機關夫が、交換手の總べてに懇意らしいのを不審に思つてゐたのであるが、成るほど新任の初めに名刺を持つて交換室にやつて來たのか。如何にも飛永のやりさうなことだと思つて、ひそかに微笑んだ。

『君ツ、西洋の都會にはこんなことはないね。市街の中樞の屋根の上に草が生えてるなんて。』と、飛永は半身を窓から出して、外を眺めながら言つた。

『また飛永さんの十八番が始まり／＼。……西洋はいゝところね。』と、衛班の人が囃し立てるやうに言つた。

三

『でも飛永さん、わたし局に居る時、みなさんと横濱へ軍艦の見學に行つたのよ。日本の軍艦を觀てから、イギリスの軍艦とフランスの軍艦を序でに觀たんですが、日本の軍艦は隅々まで掃除が行き屆いて、ピカ〳〵光つてましたが、西洋の軍艦は、イギリスのでも、フランスのでも、皆汚なかつてよ、掃除が行き屆かないし、磨きが足りなくつて。……』

と、羞かみ屋は、心持ち顔を赧くして、考へ〳〵言つた。

『はゝゝゝ、幾ら磨いたつて、軍艦は藝術品になりませんや。拵へる時には、殆んどこの銀行の資本金の全額ほどかゝるが、要するに、消耗品ですからね、一定の年限――それも僅か十年か十五年ぐらゐ――を經過したら、廢物になる消耗品ですからね。……西洋では、…………』と言ひかけると、交換手たちは皆々くす〳〵笑ひ出した。飛永は構はずに語りつゞけた。

『…………西洋では、…………幾ら金がかゝつても、軍艦には消耗品の待遇しか與へません。だから餘り磨き立てないのです。消耗品を磨き立てたつて、詰まらないと思つてるんでせう。立派な古い建築に雨を漏らしたり、都會の大劇場の壁が剝げかゝつてゐたり、一等市街の屋根の上にペン〳〵草を生やしたりしておいて、軍艦ばかり磨き立てゝるのも、西洋人が見たら可笑しいか知れませんよ。藝術品よりも消耗品を大事にするのは、冠履顚倒ぢやないでせうか。……』

と、飛永は誰れに言ふともなく、演說口調でやり出した。

『始まり、始まり。……理窟屋さんの理窟の卸ろし賣りが、始まり、始まり、……』と、調弄ふやうに言ふ術班の人を先きに立てゝ、交換手はぞろ〳〵と交代を始めた。

『武器を大事にする遺風でせう。家重代の寶刀といふところなんですよ。消耗品でもなんでも、汚ないより綺麗な方がいゝぢやありませんか。』と、春田は宥めるやうに言つた。

『さうだ、交換手だつて、汚ないより綺麗な方がいゝからね。』と苦笑しながら、飛永は遂の屋根の上の雜草を見詰めて妙に感激してゐた。

『飛永さん、交換手も消耗品ですか。』と、交代して來た交換手のうちの一番大柄なのが、横合ひから薙刀か何かで斬り付けるやうに言つた。飛永は身も輕々と、其の薙刀の刃先きをかはすやうにして、

『消耗品ですとも、この銀行に居る人間は、重役のほか、皆消耗品ですよ。其のうちでも、機關夫なんか、毎日〳〵身體を擂り減らして、時々は春田君のやうに、死にはぐるんですからね。消耗品も消耗品、擂こ木みたいなものでせう。幾ら働いたつて、年功が積んだつて、床の間へは上れつこなし、一生臺所の代物でさア。』と、早や口にペラ〳〵喋べつた。

『萬年町……』と言ひかけて、大柄の交換手は、ハット氣が付いたやうに、口をもぐ〳〵させながら、『……理窟屋さんと言はれてるだけに、理窟の立てかたがうまいのね、それに比喩が上手だから。……』と、態とらしく感心した風をした。

『飛永さん、機關夫が擂こ木なら、交換手は何？』と、小柄な、こまちやくれたのが、飛永の顏を覗くやうにした。

『さうですね、まア鰹節かな。毎日〳〵削つて出汁を出してるんですね。これもまア、桐の箱へ入れて水引きでもかけなければ、床の間へは載せられない代物だ。』と、飛永はチット腕組をした。

『心細いわね。』と、大柄な交換手も、沈んだ顏をして冗談らしくはなく言つた。そこへ春田が一步進み出て、

『飛永さん、立派な古い建築に雨を漏らしたり、劇場の壁が剝げたり、目ぬきの街の屋根の上に草を繁らしておきながら、あなたの所謂消耗品の、軍艦ばかりに金をかけて、綺麗に磨き上げてゐるやうに、この銀行でも一つ、床の間の置物のやうな重役を地下室へ下ろして、我々消耗品の機關夫なんぞを、一日でもいゝから、床の間へ上げてはくれませんかね』

と、これも冗談らしくなく言つた。

『軍艦は不生産的の消耗品だから、一向感心しないが、我々機關夫は立派な生産的の消耗品ですからね、別に床の間や貴賓室におさまりたくもないが、空氣ぐらい人間並みに、新らしく冷たいやつを吸つてゐたいものですね。』と、飛永は妙に言葉を丁寧にして、そろ〳〵と、得意の理窟を捏ねかゝつた。

『あんまり長く道草を食つてると、監督に叱られますよ。』と、大柄なのが、流眄(ながしめ)をして言つた。

『違ひない、さア行かう、森田君。』

『左樣なら。…………』

『左樣なら。…………』

四

『あゝツ、森田君、素敵(すてき)、素敵。』

通りかゝりに、二階の或る窓から、正面車寄せの方を見おろした飛永は、躍り上らんばかりにして、かう叫んだ。森田も附き合ひに、同じ窓から飛永と重なり合ふやうにして、玉いやうな小砂利を敷詰めた車寄せ前の廣場を見おろすと、其の廣場をば一人で占領した風に、レース張りの美事なパラソルの蔭から、浮き彫りのやうに鮮かな時代粧が現は

れて、強烈な夏の太陽に長く影を引いてゐた。

『おゝ、暑い。』

大柄な交換手は、いつの間にか背後へやつて來て、廣い額ノ汗を拭きながら、さも〳〵暑さうに、から言つた。みんな暑くはないのかと、人一倍暑がりの春田はさう思つて、先刻から、淺黄色の作業服の背中を汗に濡してゐたのであつたが、この時初めて、『暑い』といふ言葉を他人の口から聞いて、稍安心したやうな氣になつた

『此處はあなたがたの來るところぢやない。……女人禁制です。』と、飛永は玉を敷き詰めたやうな小砂利の上に影をおとした美人の姿ばかり見てゐた眼を、香水くさい髮の長い頭とゝもに、引き拔くが如く窓の内へ移して、大柄な交換手をさげすむ風に見ながら言つた。

『だつてあなたは、男禁制の交換室へ、始終ふら〳〵やつて來るぢやないの。何んの用があつて?』と交換手は、戯れながら、大きな口を尖らして言つた。其の途端に、下の小砂利の上の美人は、パラソルを傾けて、雲を出た名月のやうに、麗はしい顏を仰向けつゝ、二階の方を見た。成るほど美しい人であると春田は思つた。遠目でよくは分らないが、あれだけの粉飾を加へたら、大抵の女は美しくなるであらうとも考へた。あの衣裳とあの持ち物とを、亡き愛人濱江の生前に與ふることが出來たら、濱江の方があの人よりも綺麗になつたであらうとも考へた。しかし此處に居るこの口の大きな、鼻の低い交換手なんか、駄目だ。曾て讀んだ源氏物語に、『おなじ目鼻ともおぼえず』といふ詞のあつたのを思ひ出した。全くこの交換手と、あの美人とでは、同じ目鼻ともおぼえず、だと、春田は獨りにツこり笑つた。

『春田君も、女好きだね、これで。……夢中になつて見惚れてゐるぢやないか。』と、飛永は、ピシヤリ春田の淺黄色の背中を、汗の上から叩いた。

『あらいやだ。あなたがたは、松島理事の奥さんに岡惚れてるのね。』と、大柄な交換手は思ひ切つて下品張つた言葉で言つた。一歩銀行の門を出たら、こんな言葉ばかり使つてゐるのであらうと思はれた。

『あゝア、あれが松島子爵の奥さんか。有名な美人だね。もう三十六だといふ話だが、まだ二十二三に見えるぢやないか。随分若づくりだね、あれでも側へ寄つたら、顔に皺があるだらうか。』と、飛永は眼をくしや／＼さして、双眼鏡でも欲しさうな風をした。

『いやな飛永さん！皺があるかないか、側へ寄つて拝んでいらツしやいよ。』と、大柄な交換手は流眄に飛永を見た。

『あの人ぢやないかね、君ツ。△△△苑の観桜△會に、シャンパンの瓶を裾模様の袂へ忍ばせて、歸りの自動車の中で、瓶が破裂して、裾模様に汚點を拵へて泣き出したのは？』と、飛永は不圖想ひ出したらしいことを、折角の夫人にケチを附けようとする風に言つた。

『眞逆。……』と、春田は笑つた。彼れはもとよりそんな事の眞僞は知らないが、去る四月△△△苑の観桜△會が、あられもない淑女紳士の不作法によつて、食品や食器の掠奪會に終つたといふやうな記事を、今は亡き愛人の濱江と頭を並べて見た新聞の上に讀んで、共に眉を顰めたことがあつた。しかし、假りにも子爵夫人ともあらうものが、御菓子の一つぐらゐなら兎に角、シャンパンの瓶なぞを、長い袂に忍ばせようとは信じなかつた。これも一寸した話に長い柄をすげて、面白くさへ見せればよいといふ新聞記者の軽業であらうと思つてゐた。

『なに、ほんとだよ。考へて見たまへ、掠奪は彼等の本能ぢやないか。彼等の先祖が槍一筋で隣國を切り取つたやうに、彼等は……………………取るんだ。花見に行つて酒を奪ふぐらゐは、お茶の子サイサイだ。そこへ行くと、こちとらの花見は磊落なもんだぜ。なけなしの酒でも、まア君一杯飲みたまへと、見ず知らずの人間にでも、盃を突き附けて、

正宗の四合瓶を傾けるんだ。大變な違ひぢやないか。』と、飛永はまた聽き齧りの小理窟を始めた。ほんとうにこの男は、交換手たちの言ふ通り、どんな話でも理窟へ持つて行つてしまふ所謂理窟屋さんだなアと、春田はほと〳〵感心した。

『あツ、動き出した、動き出した。』と、飛永はもう好きな理窟も何も打つちやらかして、一心に窓の下を覗いた。

パラソルの美人は、待つてゐた人が漸く來たらしく、そろ〳〵と歩き出すと、其の後から純白の洋裝をした中老の紳士が、パナマ帽子を傾けつゝ、黃金の飾りの光る洋杖(ステツキ)を振り〳〵、美人の影を踏んで、大跨に歩いた。綺麗な自動車がのろ〳〵と其の後から動いて、隨き從つた。

『あゝツ、動いた、動いた。』と、飛永はまた同じことを言つた。

『そら動いてよ、生きてるから。……』と、大柄な交換手は、厭や味らしく言つた。そして『三越よ、きツと。……よく誘ひに來るの。あの奥さん、御亭主を。』と、睨むやうに窓の外の淑女紳士を見詰めた。

『飢ゑてるからなア、我々はこれで、……あらゆるものに。……』と、飛永は慨嘆する風に言つた。熱い晷が窓から射し込んで、居たまらないほど、此處も暑くなつた。

五

『上野さん、またお芝居が始まつてゝよ。ロミオとヂユリエツトですつて。……』

小柄(こがら)な方の交換手が、妙に足音を忍ばせて來て、聲を密めつゝ、大柄な交換手に告げた。

『さう、發行女子室?……國債女子室?』と、大柄(おほがら)な交換手は、別段珍らしいとも思はない風で問ふた。

『いゝえ休憩室よ。』と、小柄な交換手は、ほく〳〵笑ひながら言つた。

『休憩室は分つてるぢやありませんか、どッちの人たちがやつてるんですと訊いてるのよ、幾ら何んでも事務室でお芝居が出來ますか。』と、先輩の威を振ふらしく、大柄なのが、小柄なのを叱るやうに言つた。小柄な交換手は、頰を膨らして默つてしまつた。

『君ッ、窃ッと行つて覗いて來よう。こッちだ、こッちだ。』と、飛永は二階から一階への近か路になつてゐる、二つの大きな建物の接ぎ目の方へ春田を導いた。

其處の女事務員の休憩室では、成るほど芝居が始まつてゐた。事務服を着けたまゝの若い娘のキイキイ聲の臺詞が聞えた。

『志のあるところに道がある。チノス殿のお情けで、あなたの、…………』

春田は覺えず、くす〳〵と笑ひ出した。飛永は手を振つて『シッ、シッ』と制した。二人の交換手は、何處か別に、隙見をするのに都合の好い場所でもあつて、其處へ潛り込んだのか、ふいつと姿が見えなくなつた。

『……わたしはもう、あらゆる人間の嫉みの眼から離れてしまふて、あなたの手に抱かれて死ぬのぢや。』

『わしの手に抱かれて死ぬといふのか。こんな清い美しいそなたを、この土の牢で殺さねばならぬのか。辛い悲しい心の苦しみをした末に、花の其の身を殺さねばならぬのか。あゝそなたは死んではならぬ。』

古くさい調子の臺詞が、キイ〳〵聲でつゞいた。

『君ッ、ロメオとジュリエットぢやないよ。あれは、アイダの土牢の場だ。』と、飛永は春田の耳に口を寄せつゝ、物識り振つて囁いた。

『厭やだよ、こんな芝居。……もつとほかのをやらなくつて。……何か痛快なのを。』
『痛快なのつて、どんな』
『男を散々に擲り付けるやうなの。』
『そんなのはないわ。』
　内部ではアイダになつたのと、ラダメスになつたのとが、こんなことを言ひ合つて居た。この問答の方が自然で、近代劇の舞臺面のやうに見えた。
『闇の力はどう。』
『わたし、知らないわ。』
『今はそんなことを言つてる時ではないんだよ。ニキイタ、お前、どうして强情を張るんだね。さア早く行くだ。今どうしようツてんだね。』
　もう、闇の力の臺詞が始まつた。
『齊木さんは、何んでもよく覺えてゝね。……それから。』
『これは、マトリヨーナといふお婆さんで、ニキイタといふ男の阿母さんの臺詞なのよ。それから、ピヨトルといふ百姓の後妻アニイシヤの臺詞だよ。……まアこの立派な御人體を御覽よ、……あの人はお厭やなんだツとさ。長え間、あたしを取つちめやがつて、さんざんつぱらいぢめ拔きやがつて。……さあ今度はわしの番だ、行けツて言ふに。さもなけや、今言つたやうにするぞ。……そら鋤を持ちな。さあ行くだ。』
　一息にアニイシヤの臺詞をば、踊みなりになつて、芝居らしい身振り手振りとともにやり終つた一女事務員は、可亦ん

坊を生きながら土の中に埋めさせるのよ。』と、痛ましい表情とゝもに說明して、『今度は、ニキイタよ。……』と、急に床の上へ腰をおとして、片足を立てながら、
『畜生ツ、どうしても逃がさねえだな。……』
と、やりかけた時、不圖、扉のゆら〳〵するのに氣のついたこの俄か女優は、
『いけないわね、誰れか見てゝよ。』と言ふなり、隅の方へ逃げ込んでしまつた。

六

其の夜、春田は到頭監督に引ツ張られて、門衞の兒島爺さんの家へ、女髮結をして居る娘のおかうちやんを見に行くことになつた。氣は進まなかつたけれど、監督が頻りに促し立てるので、牛に牽かれて……といやうな氣になつて、碧光寺まゐりでもするつもりで、漸々監督の後に隨いた。
『君ツ、毎日かうおそくなつちやたまらないね。』と、大きな石の家を出がけに、監督は嘯くやうにかう言つた。
『えゝ、でも明日あたりから、相木君も出るでせうから、僕はもう少し早く歸れませう。』と言ひ〳〵、春田は空を仰いだ、長い日も暮れかゝつて、空では濱江の亡魂のやうな、美しい星が瞬きをした。
『どうだかね、あいつ現金なやつだから相棒が休んだゝけ休むかも知れないよ。それだけ日給が減るんだから、つまり損なんだがね。』と、監督は門衞室の方を見い〳〵、ペツペツと唾液を吐いてゐた。ところ構はずよく唾液を吐くのが、この人の癖であつた。門衞室の薄暗い電燈の下には、異つた爺さんが居て、夕刊の新聞を擴げた上に頰杖を突いてゐた。鉢植々の朝顏も淋しく萎んで、育てゝくれた兒島のお爺さんがゐないので、遠慮しい〳〵、蔓の先きを壁の方へ伸ばして

ゐるやうであつた。

『すべてが舊式だね、兒島の爺さんは。今は君、こんなに莖を伸ばして朝顏を作ることは流行らないんだぜ。』と言つて監督はつと朝顏に近く進み寄るなり、爪先きで一番長い莖を一つ摘み切つたが、それには明朝咲く蕾が一つ附いてゐた。春田は言ひ知れぬ痛ましさを感じて、また亡き濱江の哀れ深い最後を思ひ浮べた。

電車に乘るがものもないといふことで、春田と監督とは、鐵軌を挾んだ石だゝみを踏んで、鎌倉河岸を歩いてゐた。だん／＼殖えて來た星の影が、汚ない濠の水に映つて、崩れ殘りの石崖の上へ幹をくねらし枝を伸ばした松の樹には、貧苦に迫つた人間が、首を縊つてゐそうに思はれた。

『休んだら日給が貰へないんですか。』

春田は先刻から幾度も咽喉まで出かゝつたことを、この時漸く思ひきつて、監督に問ふてみた。其の聲は妙に硬かつた。

『當り前よ、君。……休んだら呉れなからうぢやないか。お坊つちん出身は、これだから厭やになつちまふ。』と、監督は嘲るやうに言つた。向ふから電車の反射燈が近づいて來るので、二人は惡い路を濠端の方へ避けて歩いた。

『しかしね。銀行の仕事で怪我でもして休んだのなら、それや呉れるよ。…………君のこないだの休みなんかは、矢ツ張り駄目なんだよ。……まあ來年の六月の昇給期まで、成たけ休まないやうにして、勉強するさ。……相木みたいに、始終部長のところへ泣いて行くと、何か知らいゝことがあつて、日給を貰へないのを承知で休みやがるがね。』と、監督は何か意味のありさうなことを、憎々し氣に言つた。さうして、『部長のお爺さん、お人好しだから、泣き付いて行くに限るんだよ。君も來年の五月頃になつたら、盛んに泣き付いて行きたまへ、六月が一年一回の昇給期だからね。』と、し

みく〳〵した調子で言ひ足した。

『來年の六月になつたら、幾らぐらゐ昇給するんでせう。』

かう言つて春田は、幾度か傍に向つて唾液を吐いたが、どうしても水まで屆かなかつた。

『さうさね、まあゝ錢だね。』と、監督の聲は凜としてゐた。

『五錢？』と、春田は呆れてしまつた。

『五錢ならいゝはうなんだ。三錢といふのがあるからね。よッぽどいゝんで十錢だ。それより上はない。』と、監督の聲は、また嚴かに響いた。

春田はつく〴〵考へて、スッカリ感心してしまつた。日本一の大銀行へ來て、初めて、五錢といふ金の有りがた味が解つたやうな氣がした。一度に何千萬圓といふ紙幣を燒き棄てるところでなければ、五錢の眞價も分らないのだと思つた。それにしても來年の六月まではまだ一年ある。——

七

門衛の兒島爺さんの家は、なか〳〵遠かつた。定めし朝顏、鉢植ゑ、ドッサリあるであらう。『娘はくれてやつてもいゝが、朝顏はやらない。……』と言つてゐるくらゐだから、と思ひながら、春田は近頃脚氣の初期とも思はれて、變に重く感ずる足を引摺りつゝ、トボ〳〵と歩いてゐた。

狹く寂しく汚ない町に、唯一軒、古風なガスが點つて、硝子蓋の破れた駄菓子の箱や、ごた〳〵と置き並べた少しばかりの玩物類を、蒼白く、哀はれ氣に照らしてゐる店頭に、夜遊びの子供が四五人ガヤ〳〵と騷いでゐる前を通つた。

『文明開化のヨーロッパ……』といふ歎がこゝでも聞かれた。

春田が不圖眼を上げて見ると、カーキー色の日よけがまだ疊まれないで、『濱野商店』の四字か黒く、ぼんやりと讀まれた。春田はハッとして、歩みを停めた。

此處だ、此處だと思つた。二度ばかり來たことのある濱江の母の家ながら、つひうつかりして通り過ぎようとした不覺を恥づる心持ちが身を責めた。濱江の亡魂が星になつて天から見てゐたら、定めて怨むであらうと考へた。

もう監督と連れ立つてゐることなんかは、忘れてしまつて、春田はつか〳〵と、子供たちに占領されてゐる店頭に近づいたが、奧へ通るにはどうして上ればよいかと工夫(くふう)しなければならないほど、足の踏み込み場所もなかつた。ミゾもなにも磨滅した砂だらけの敷居の上に立つて、奧を覗くと、

『小母(をば)さん、お客さま。』と、唯一人混つてゐる女の兒が、奧に向つて呼んだ。

『あいよ。』といふ聲を聞くのも、久し振りであつた。

『あゝ、彰彦さんか。さあおはいり。蟲が知らしたのか、今夜あたり來やしないかと思つてたんだよ。』と言つた母親は、近頃滅切り老けて、貧しい町のおかみさんらしくなつてゐた。

『あゝア、お前たち、また夜遊びかい。子供が夜遊びするものぢやないよ。明日(あした)また來とくれ。』と母親は手にしてゐた撞木を振り〳〵、子供たちを諭すやうに言つた。さうして、春田を顧みると、『まるで幼稚園の保姆か、託兒所の小母(をば)さんみたいだよ。』と、寂しく笑つた。

『小母(をば)さん、あばよ。』

『また明日(あした)!』

子供たちは、それでも素直に歸つて行つた。

『みんな、おとなしい子ですね。』と、春田は星明りに小さい後姿を見送りつゝ言つた。

『なあに、みんないけなかつたんだよ。あれまでに感化するのは、大變な骨折りだつたからね。まだいけないのが、居るには居るがね、今歸つたのなんかは、だいぶものになりかゝつてる方だよ。』と言ひ〳〵、母親は涙ぐんで來た顔をそむけた。

奥の四疊半の、見慣れた簞笥の上に、手遊品のやうな佛壇が載つかつて、燈明がチラ〳〵揺いてゐた。其の前で母親は今まで鉦を叩いて、看經をしてゐたのらしかつた。さう思ふと、先刻幽かに聴いたやうでもあ　鉦の音が、耳の底に殘つてゐるのを覺えた。

『春田君、春田君。』と、呼ばはりながら、監督が後返りして來た。

『お連れ？……………銀行の方。……さう。』と、母親は春田の頷くのとゝもに頷いて、亂れた鬢の毛を搔き上げつゝ、寂しい顔にも、にツこりと愛想笑ひを浮べて、

『あなた、どうぞ、むさくるしい　ところですが、お上り下さいまし。』と、監督に言つた。しかし其の愛想笑ひも、憔けた頬から直ぐ滑べり落ちさうであつた。

監督は眼を圓くして、ぴよこりとお辭儀をした。

――長編『東京』第二部『勞働篇』の第五節――



煙れる心臓

大泉黒石

——PROLOGUE——

見えたよ〳〵この世の果が、命の旅の一と宿にと云ふやうなオペラ唄が流行る時分だからかれこれ四年にもなるとすれば、さうだ！刑事の津田光造が〇と云ふ社會主義者の尾行を命ぜられてゐた頃、戀が絞りの浴衣で車に乘つてゴロ〳〵と消えてなくなつた！さりとは不思議な西王母の傳説見たやうだが、いかさまその西王母とは由縁のある洪雲館と云ふ支那人の下宿屋に起つた事件であるからだ。——

一

兩國橋際の風湖堂と云ふ私には勤め先の赤本屋から頼まれて飜譯した原稿紙三百餘枚の探偵小説を懷ろに入れてその朝私は、本郷座裏の家を出たのである。その原稿料金五十圓也のうち三十圓はお仙へ、二十圓は國の三輪子へ送るために、金と引替へに行くのであつた。私は本郷一丁目から電車に乘つた。電車は珍らしくガラン

と空いてゐた。私の心は、雨ぐもりの朝空の、その朝空の灰色の夏の夜の幻の妖術にかゝつてまだ充分に醒め切らず、わなく／＼と顫へ乍ら一と處に凝乎と淀んでゐる重苦しさと同じやうな動かぬ据りを持つてゐた。松住町のカーヴを曲る頃私は輕い眩暈を覺えたが、それは、いつからとなく襲ひかゝる微かな憂愁に襲はれるときの私の癖であつた。もしも誰かゞ、かうしてベンチに掛けてゐる私を見ることならば、實際私は見詰めてゐるものを見てゐるのではなくて、そこにはない處の他のものゝ上に遠い遠い視線を投げてゐるのだらうと思ふに違ひないほどことほど左樣に實際そこには何にもないがしかし、全くは今日まで續いて來て、そして今日限りでお了ひになるところの長々しい退屈な過去を考へてゐたのであつた。

私と云ふ平凡な思想や眠れる心や、一度も斷乎として動いたことのない手足や、一切合財そんなヤクザものゝ持主であるまことに恥かしい男の一年あまりの事柄が、今日限りお別れだ！歪める世界よ。支那人よ。作れそこなひの仙人よ。お前達には二度とお目にかゝりたくない！そのために今金を拵へに行くのだ それからお前達の處へ叩きつけに行くのだ。幽靈どもよ。一昨日來い！と、泥のやうな記憶が丁度電燈線の切れる刹那のあの最後の閃きめのやうに私の心に映つつて來るのであつた――――。ふと考へることに――――、もし私がこの不思議な話を誰かに向つて始めるなら、ね、君君は奇蹟を信ずるか？いや成る程奇蹟を信ずるのは縦令北六ケ敷しいことで、もし信ずると云へば最早問題はないし强制もいらないが、何しろ君にしろ僕にしろ現在この通り何の信仰もないと云へるのだから、こんなことを云へば、奇蹟は子ども衆のお伽噺だとしか答へまいが、しかし、それがお伽噺か、さうでないか、よく僕の饒舌ることを聽いてから返事をしてくれ給へ。などゝ例のロープシンでも云ひさうな口上を尤もらしく云ふだらう――――ところの奇蹟と云ふのは、お仙と云ふ女――――以前にさうでもなかつたのに、今は早これまで！と黄色く痩せて、女の二十三四だ、即ちこれからだと云

五年なのに哀れなことにはおつつけそこら一面が縮緬のやうな小皺で埋められさうな顔の無恥な女が、これもきたお化けのやうな支那人のお爺さんと幾久しくも共お化けよ！片や醜女よ！灰になるまで生活しませうと夫婦になつて了つた事件の顛末なのであるが、と、ふと津田光造の顔が浮び出た。大體津田光造なる刑事――のんだくれの太つ腹の、酔つ拂へば、海の上でも跣足で渉つて見せると云ふやうな出放題の男なんだが、あれでたか／＼親切な腹の底に何となくしつかりした締めくゝりのある人間で、私達夫婦が彼の家の二階にゐる時分、かれこれ半年あまりも間代をためた時だつていや味一つ云はないし、未だに拂はないが苦情も云はない、催足もしないのである。そうして職務にはなかなか忠實で、すぐ近所の警察署部内でも確かに評判がいゝのである。その津田光造が保證人兼仲人になつてお仙と支那人――翔と云つた――と夫婦になるのだから随分に彼女は安心が出來るわけだが、實の處、津田光造にそんなことが云へたものでないことは、すれつ枯しの彼女が今までの放埒な生活の惰性で、こんな不思議な關係なんだもの、出鱈目な縁なんだもの、さう／＼いつまでも面白くつゞくものか？と云ふやうないつもの氣まぐれから、又例によつてサラリと別れねばいゝが、と云ふお仙本位の心配なので、それは津田光造とて、もとより大體のところで彼女の身の上に私と同じやうな同情を持つてゐるに違ひないのである。それと云ふのも、お仙と云ふ女の、親のない、そんなら、いつそなければどんなにましか知れないやうなたつた一人の兄を持つたそのお仙――山出しのボンツクが神戸在の箕面山からこつちへ出て來て、當時佃島木船工場で働いてゐた兄の鐵造に千東町の銘酒屋に賣られやうとしたり、その後私の妻には義理の叔父に當る瀨戸物屋・川島と云ふ半老人の妾になつて、私達の家へその半老人の川島が死ぬ迄囲はれたことからして、ちやんと知つてゐる筈であつた。で、最後に神田三崎町の洪雲館と云ふ支那留學生相手のちつぽけな下宿屋に傭はれて行つたのも津田光造の世話であつたが、津田光造が上海で巡査を勤めた昔から洪雲館の主人 翔と知り合つて、その偶り者の翔が

がこつちへ渡つて來て玉﨑町に下宿屋を始める時などは隨分骨を折つてやつたらしいのである。それは私が津川光造を知る前の年の話らしいから、かれこれ四年にはなるかも知れない。その翹が恐ろしくしみつたれで、おまけに女が好きで、或時私の家へやつて來たお仙の話を私は思ひ出すのである。それはつまり

「下宿人いふのは、みんな若い支那人の書生はんやで、わたしと翹はんと翹はんのお神さんの三人で世話しますのやが、そのお神さん云ふのがもう五十あまりのお婆さんどすしやろ？（と彼女は一寸そこで口を歪めて笑つたのだ）あれは屹度お神さんの方で惚れ込んで夫婦になつたもんや思ひまんが、それはそれは奇妙に働きまんが、ほんまの夫婦やおまへんことにな、時々給金くれえ云ふて談判しよりまんが、いつもおきまりだんね、お了ひは喧嘩どす。するとお神さんはぷりつとして何處へやら飛び出して三日もよう戻りまへんけど、翹はんは平氣なもんやで、支那の唄うたふて、なにお仙はん、あの婆さんは私のお神さんどすさかい給金やることはありやへん、まあ見てたはれ、いまに歸りまんがとさう云ひよるとほんまに三日もたつとのこのこ戻つて來よりまんがな、そのお神さんがおやはりまへんと翹はんは極樂行たやうにセイセイした顏しをつて、もう直ぐわたしにいやらしいこと云ひ寄ります。お婆はんはあかんさかい、いづれ近いうちに追ひ出して、わたしをお神さんにする云ふてな、それはそれは五月蠅うおますわ、なんとけつたいた夫婦だつしやろ？」それから、平生は至つて無口なお仙としたことが、一席饒舌り出すと、また次のやうに止めどもなく喋舌るのであつた。

「翹はん云ふ人は年中そないなことばかり考へてゐる人だんね。いつかお神さんの留守にな、お神さんにくれたらしい指環――いふと、結構なものやが、その實、萬年金いひまつしやろ？御存じないか？一圓もしますかいな？そや、神戸の新開地行きますと露店に兩置いて賣つとりまんね」とお仙はその邊から自分の舌に乘つて走るやうな、なかなか大

した態辯なのである。「サア指環どうだす！錺や眞鍮やおまへんぜ！何とか博士發明の萬年金や、一名大正金や、ほんまの金やつたらなか〳〵一圓そこらで賣りやへん！安いな。買ふ人はおまへんか？一つ買ふて見なはれ、女房はんに大もてやぜ。まあチヤツとから藥指にはめて見なはれ、別嬪に見えまんね。サア別嬪になる指環――あれだんね？あの萬年金に赤い硝子玉鏤めたのや。一反お神さんにやつたものを取り返して、わたしにくれますさかい、お神さんが可哀さうでな、內證で戾してやりますと、ふんとした手つきで取りましたが、大方妬くのだつしやろ？そや、妬くのや！それはな、わたしが用事で下宿人の部屋に入りまんね。チヤツトでも手間取ると、もう對はんが怖い顏しよつて呼びに來ますのや、お神さん　わたしに野心ある思ふて妙な目で睨むやうに見まんが、チエツ（と彼女は唾でも吐きつけるやうに嘲つた態度で）何呼饒り者のわたしかて、あほらしい！まだ支那人の相手にはなりまへんわ。で、支那人云ふものは皆あゝなんだつしやろか？わたし、あんな家によう居つきまへんがた。ほんまにお了ひにはどない目に逢はされるか知れまへんもの」とまあ呆れたことに、つまりその支那人の網と一緒になる約束が出來上つてゐたに違ひない所彼女が管にさう云つたのである。考へると、さても女――少くとも六仙の嘘の多いことに、お神さんが、どうして追ひ出されて、お仙が何と巧みに網を絡取つたか？それとも網に籠絡されたか？そんなことはどうでもよいだしかし、最初そんな複雜ないきさつを「いや、君、そんなに鹿爪らしく構へる女ほどあてにならぬものだよ、ところで」と云つた風に、何と一科の世間師然とした彼の口から聞いたときに、たゞわけもなく驚いて了つたので、その驚きの中には彼女に對する何物より寧ろ深い憫れみがあつた。

「それはほんたうでせうか？」

と私は云つたのである。

「いや全くの話なんだ」

と彼はその時いかにも眞面目に口を切つた。

「あの男は、あゝケチだがそれだけ正直で、殊に女には親切な性なんだよ。尤もあの婆さんの一件には別に込み入つた事情があつてのことだがね、あの通りの顏でよく女が云ふ事を聞くもんだと思ふが、どうもかう云ふ問題は別だと見えるね。尤もさうさ。女が男の綺羅に惚れるやうぢや、まだ浮氣と云へるんだが、しかしお仙さんは流石に苦勞人だけに」

と津田光造は醉つ拂つたときのやうに、ぽん！と胸を叩いて「こゝに惚れたのさ。また刺にしたところでさうだよ。お仙さんとでも添はなくちやね」とさう云ひながら、例の彼の癖の、いきなりゲラ〳〵と笑ひ出して「好き手があるまいからつまるところ二人は、美男美女が一緒になるのと、ちつと、變らない同じ幸福を感じてのことなんだ。」

だがいくらあの麹と云ふ支那人が女に甘くて、親切で、お仙の目から見ると、さて名目だけが日本人で、しかも鼻つから油斷の出來ない男と添ふよりは氣樂でいゝだらうが、兎も角も夫婦になると云ふことなのだから、いくら棄て鉢の彼女だつてちつとは考へる筈なのに、ことに麹と云ふ男、大體どこに籍があるのか？今日いつしよになつて明日振られても尻の持ち込み場もないやうな人間ではないか？その瞬間はさう云ふ氣がして、そして、またおきまりの別れ話と來るのだらう。あいつのことだ。あんな自墮落な境界に落ち込んで了ふと、自然さうなるのかどうだか知らないが兎に角熱も悔も個性の力もない、打ちとけて、白粉の一瓶も買つてやれば、犬のやうに自由になつて來る代りに、愛相をつかされやうが忘れやうが恨みも未練もないし、面倒も執着もないし、同時に面白くもない、お早う！然らばサヨウナラと云つた氣質なのだから、どうでもいゝやうなものに違ひないが

「して見ると、ほんとにさう決めちまつたのでせうか？」

と、また疑ひ深く尋ねたもので、しかも、その時、「さうさ！」と愈々眞劍に津田光造が「僕が仲人に頼まれてゐるんだよ。僕はそれがために」と口を尖らせて力強く「夢中なんだよ」と云つたときに、私はほんとにつくづく私の先刻の驚きの中に一つの憫みと一つの同情とを發見せずにゐられない——と云ふのが、つまり、泌々とわが身の上を考へて、そして、ほんたうに自分の身の落ちつく處が、そこより外にないと思つた彼女の——その百年にたつた一度と云つたやうな、しほらしい心、淋しい心が、ついそう決めて了つたと云ふことが、私にはいろ〳〵と考へられたのである。あの、ぐうたら童子のやうなお仙に、しかし、よくそんな、しみ〴〵とした決心がついたものだ。不思議なものだ。大體、彼女の兄の鐵造がまだ西伯利へ行く迄は、なかなか、それでも感心なところのあつたのだが、

「ほんまに犬畜生のあいつめ、監獄へでもぶち込んでくれるお巡査りさんはないかいなつ、でもえゝことだんね、あいつめ西伯利へ行くことになつてまんが、人に散々心配かけよつて、何しろ、えゝ氣味どす」と云ふところのお仙の希望通りに鐵造は間もなくブラゴヹシチェンスクの戰線へ行つて了つた！で、それまでは川があつても怖がつて容易に戸外へ出なかつた彼女がこれで厄拂ひが濟んだやうに、近所の芝居へ出掛けたり路次の中のおでん屋に入り込んで半日位も喋つてゐたり、芝居のハネ時には役者達の素顔を見に行くのだが、何しろ、この春木町の路次裏の風俗と來ると流石に陽氣なもので芝居小屋に關係した人達が集まつて何とも早崩れさうな騒ぎである。氣樂な身分のお仙が晩はその通りの宵つ張りに朝に朝で一生涯早起きなどはしたくもない！と枕へ頭の心まで粘りつけてお仙一人の夜のやうに、大方殺されたやうに、日の出の時刻まで寢てゐるのであつた。が、漸く起きて鏡の前に張り込んだが最後「わて自分の髮結ふのに二時間もかゝりまんね」と云ふ調子で髮に膏を塗つたり、櫛を入れたり、白粉をつけたり兎に角長々しい身づくりが一通り切り上がるとぽつ〳〵臺處の仕事にかゝつてくれるが、それもまあ何と云ふ活潑な歩るきやうだらう？襟も足袋もたま

つたものがやたい!とさやうに生々した立居振舞に全く若い女學生のやうであつた。尤も彼女は顏つきからして本の一つも讀んだ女學生のやうには見えたがその實——と云ふと或時——產褥に就いてゐた妻が枕もとに積んであつたチエホフの飜譯小說の一つをお仙に讀んで聞かせたことがあるのである。(實を云ふと妻はチエホフが大好きで、チエホフの議論になると夫の私を苦もなくやり込めるほどで、どう云ふわけでさうなのかと云へば私と妻とが京都で結婚する前に彼女は大阪の川口近在の或る羅馬加持力宗の女學校に通つてゐた頃彼女と彼女の友達の間に、何だと云ふとガルシン?あきまへん!アルツィバ中シーフ?あきまへん!チエホフに限りまんね!と云ふ風にチエホフが流行つてゐたさうで、そんなわけから私のところへ持ち込まれた只一冊の棚の底へそれが入つてゐたのである。尤もその他に妻と結婚——と迄は行かないけど、あつさりした親達同志の話が纏りかけてゐた彼女の最初の戀人から貰つた寫眞やら手紙やら(それは實に薄記用紙にローマ字で百枚あまりもあつた)が入つてゐた。その戀人と云ふのは大阪の或有名な商家の倅で、その倅の云ふには、ね、お三輪はん、わてえな、おまはんがわてえに尻まくつて電車の後追つかけて走れ云ふたら走りまんね!千日前の樂天地のテツペンから跳べ云ふたら跳びまんね!何でも云ふこと聞きまんね。(と私達夫婦の間に事があればいつも彼女がその熱心な昔の男の話を持ち出して殊更に私へ恩着せがましく出るのである)で、そんな不愉快なお化け見たやうな一切の物を破つて棄てさせて、その頃のかたみにチエホフだけやつと殘つてゐると云ふ隨分苦い譯で)それを讀んで聞かせて、「ねえお仙さん。チエホフの小說は面白いでせう?」と云つた。すると一心に聞きとれてゐたお仙は流石に嘆息する風で、「ほんまに奥さん、面白うおます。でも何どすえ、講談倶樂部も馬鹿になりまへんがな。えらうセンチメタルやで」と云つたのである彼女は、たしかにそうした何にも知らない鷹揚な性であつた。大體がつまり何を見ても、何を聞いても大した感激も興奮もないがまた一方では何を見ても、何を聞いても濟むらしいので、その後一年と經

たぬうちに田島老人が或夜泥醉して店へ歸つた、そして、それを酒と思つたのか水と取り違へたのか兎に角徳利の中へ入つてゐた商賣用の揮發油を呷つて土間へ倒れて血を吐いて、それきりになつて了つた事が大した心の打撃ともならぬらしく、物の一と月も私の家で生活してゐたが、奉公口を見つけてそこへ行つて了つたのである。それから凡そ半年ばかりは、大袈裟に云ふと行き當りばつたりに奉公先を取り替へたり、何とお了ひには如何はしい男に騙されて十日と持たない二階世帯を張つては例の調子で、お早う！然らばサヨウナラと別れて了ふのであつた。私が後でお仙の着物を持ち出すために彼女の梱をあけて見た時、そこに發見した五六枚の、職人風の男の寫眞と云ふのが、恐らくお仙と一時間でも一日でも夫婦であつた人々の顏に違ひない。そして其うちの一枚が田島老人と五十歩百歩の年配のお爺さんで、何でも彼女と關係した京橋附近の或銀行の小使ひに七人の子どもがあるのを內密で彼女と暫く一緒になつてゐたと云ふお仙自身の話に符合するやうな肖像なのである。何とかいふ口入屋が立派に保證をするし、やもめのお爺さん自身は十も十五も年を隱して眞面目に彼女と連れ添ふつもりであつたのが、ふとした事でぼろ〳〵！と、七人の子どもに飛び出されて樂しい世界は破壞されて了つたのださうで、何ぼ何でも七人の繼子があつては辛棒も何もあつたものではないと、さつさと出て了つたのださうであるが、刑事の津田光造の世話で神田三崎町の洪表館に傭はれて行つたのがつまりそれからであつた。で、その飛び飛びの行先から彼女は絶えず遊びに來て、ざつと半年の間に渡つて歩いた家の噂をするのである。しかし、自分に利害關係のある話は曖にも出さなかつた。私達としても、以前の水々しさを失つて、皮膚は何處となく乾び、目は疑ひ深いうるみを帶びて、一口に云ふと、少かの月日に恐ろしく荒んで了つた彼女の容貌や言葉つきを見ると、彼女が何をしてゐた位のことは想像がつくのである。そんな息のつまるやう　苦勞話だと、魂の方で飽き飽きだ！と殊更に聞かうともしなかつた。話のない時は田島老人の娑時代以來私の家の押入れの中に預けてある。

の梱を引出して着物の出し入れをして歸つたりなどした。

で、その梱を預つてゐたと云ふことが、恐ろしい迷惑であつた。私達は田島老人の死後ひどく困つて了つた。家賃は滞るし、そこら一帯の食ひ物屋は話し合ひで芋一ツ貸してくれなくなつた。おまけに子どもは一人殖えてゐるし、主人の月給はお話にならぬほど安いし、そこへ、これも又同じやうにお仙が奉公先を失敗る度に七日十日と居候に來て、しかも彼女も折角苦しい樣子なので、と云ふのは、自分の梱の中からコソ〳〵と一枚、二枚引出して小使錢を拵へてゐた。ある時私が、「ねえお仙さん」と我ながら不思議に、かう――と云つても今一口に云へないやうな顏――つまり、半分は恐るゝ恐るゝお仙の樣子を窺つて、お前さんはなか〳〵親切で思ひやりがあると云はぬばかりの表情と半分は、このお仙の一人よがりの、その位のことは氣がつきさうなもんだ。かうした相談をかけるのに大の男が見たくもないやうな目つきで、可笑しな手つきで、ほんとに山出しポンツクに違ひない！と云ふやうな、なか〳〵面倒な六ケ敷い顏をして、さては彼女の着物を一寸貸せ直ぐ返す――と出て見たのであつた。もつとも、そこまで突きつめた氣もちになるまでには、隨分と三輪子とも談合したもので、で、三輪子としては、例の見識屋の痩せ我慢の、腐つても鯛のやうな顏をして「およしなさい。いくら困つたつて、あんな人から物を借つちや、いつまでも馬鹿にされますよ」などゝは云ふものゝ實の腹はなか〳〵そんな悠長なものではなかつたに違ひない――ところが、これも又實の腹はなか〳〵さう淡白ではあるまい？しかし、案外氣もちよく、サア〳〵とは云はぬまでも、私に貸してくれたのが、一枚二枚とずる〳〵べつたりに到頭お了ひには、苦しまぎれに彼女の梱をすつかり内々であけて了つた！そしてお仙に發見されたのである。けれども、その位の苦境なんだから、迚も一枚だつて返せないし、また返す見込みもないし、げつそりして了つた。ところが、そも〳〵食ひ違ひの多い世の中の一面にも幽か乍らに筋の通つた明るみがあつた證據には、そうした絶望的

の心の中に私達はいつまでも鎖されて苦しむ必要はなかつた、と云ふのは、勤め先の風湖堂で西洋物の探偵小説を月に一つづつ出版することになつて、その飜譯方を月給の二倍にも當りさうな原稿料で頼まれた——と云ふより寧ろ惠まれたのである。細微から云ふとそれほど有頂天になるほどの收入ではないけれども、何分つい先頃まで向ふ島のNK活動寫眞會社に勤め乍ら、そこの座つきの脚本作家の代作を頼まれて、左樣、扇太郎とか璃勸とか、そんな役者達の、昔々の昔噺の芝居を書いて、片手間には自分まで狩り出されてレンズの前に晒されたのである。凉しい仕事とは云ひ條、あのぼろ／＼の撮影場の杉木立の堤から、「ヨーシ」と云ふ撮影監督の合圖と一緒に、駈け出して行つて隅田川から流れ込む眞つ黒い溝川の中へ飛び込んで、やあ／＼貴殿ハ！などゝ可笑しな口をあけて斬られて溺るる眞似をして一回にありつけたやうな哀れな仕事でも厭だと云へば外に能のない夫婦のことだからほんとに首でも縊らねば遁れる道がないほど事ほど左樣に星の光りも其處までは屆き兼ねる暗黒の生活に大きな鎖で連がれてゐる苦痛をハッキリ感じ且つ怖れてゐた夫婦であり私であり妻の三輪子であり、さうだ！その三輪子が、ね、あなた。と云ふ騒ぎやうだ、實際それまでの一切の苦勞を忘れ、一切の顏の曇りをどこかへうつちやつて、と云つて、私は何とその時に目撃した虹のやうな頬の色と、寶石のやうな目の輝きと、この數年間隱れてゐた微笑とを形容していゝか？と彼女はいそ／＼として、たとへばかうである。ね。あなた。こんな罅裂だらけのお茶碗なんか見つともないから、あの横町の店にあるやうなロベリヤ模樣のコーヒー茶碗を一揃ひと、それから菓子鉢と、それからお茶道具と」と云ふ風に、それから、それからと、飾り物がないから序に二十五錢奮發してトルストイの首とを買ひませうと云ひ乍らいそ／＼としたもので、勿論私だつて、よからう！と云つた答だつた。すると彼女は云ふ。「まあ。妾隨分馬鹿だわ！その段ぢやないのですよ。ね、あなた」と三輪子は着物の袖を引つ張つて見せて、さて子どもを顧みて、さて私を眺めて「こつちから先にしませう？！」と確かに彼女の目には三

丁目あたりの呉服屋が映つてゐた筈だ、と思ふと、突然名状の出來ないやうな憂鬱な陰影が彼女の顔を蔽ふて了つたのを私は發見した。同時にその瞬間丁度彼女の上に襲ひかゝつて來た一つの陰暗な幻影が私の目にもパツと映つた。それは勿論お仙の影であつた。押入れの中から、夙の昔私のために空つぽにされてゐる彼女の柳を引つ張り出して、引つ掻き廻して、引つぱたいて、恨めしげに覗き込んで、「見なはれ！わてえが十年もかゝつて、ようやつとこさへたものを」とやがてにもワツと泣き出しさうな顔つきで「ようま。綺麗さつぱりと持ち出し居つたものや！旦那はん。ほんまにあんたは大した旦那はんや。一體どないにしておくれやすか？」と、もうこれ以上は怒りやうがないと云ふ風に怒りぬいて私（その時妻はゐなかつた）に食つてかゝつたお仙の姿であつた。かくて、コーヒー茶碗も着物も煙のやうに消えて了つたのである。牢獄に封じ込まれてゐる囚人が浮世の夢を見たかと思ふと直ぐ目が醒めて落膽するやうな態度で彼女は、お仙の着物を受け出すことが忘れられてゐたと云ひ出した。ところがそんなぞツとしない考へには五分間と堪えられないと云ふ風に「こんな仕事はいつまでもあるんでせうか？」と云つた。萬一これきりでお了ひになつた場合の呆氣なさと、悲慘とを想像するやうに、わざとらしく考へ深かさうに考へ込むのであるが、しかし、私としても、そんな氣のつまるやうな明日の日の暗い事が、ほんとに考へたくもない！との様子だと仕事の方は先づ先づ大丈夫だらう？いやなにさ大丈夫だよ、と、ついさう云ひ乍ら、風淵堂に頼まれてゐる飜譯の豫定を次々に描いて見ると、何と云ふこともなくそこに大きな廣々とした頼もしい世界が私の開拓を待つてゐるやうな氣がしたのである。すると彼女は、さうでしたら、あの人には濟まないけど、お仙さんの着物はこの次にしませう。どうせ急に要るものぢやないんですからと云つて、さう獨りで決め込んで了つた。「ね。そんなことを考へて騒ぐのはよしませう」「それも左様だ。」しかしお仙のことは何處までも氣がゝりになつた。三輪子とても同じことである。が、結局お仙の方は後廻しにされたのである。と云ふ

のが、こんな有頂天の中に、流行に一息でもつかずにゐられなかつたのである。これまでの痛過した反動は私達を前へ前へと押し出して、決して過去の事をしみ〴〵と振り返つて考へさせなかつたに違ひない。私は朝から晩まで、實に倚呂利怪嘗と云ふ私の文名が世間に響いて、もつと氣の利いた本屋から仕事を頼みに來ることばかり考へて、それを妻にも頻りに語つた。こんな穴の中の蛙のやうな生活も長いことではないし又、迚もこの先一年と辛棒が出來るものではないと云ふ意味の話を眞面目に話し合つたもので、彼女は又彼の女で、實際摑んで見なければあてになつたものでないところの奇蹟を描いて、さてもその奇蹟の花に包まれるのも近い中だと信ずる彼女が天幅に狂喜して、あゝ。あゝ。この人と連れ添ふて、ほんとによかつた！としみじみ考へる風で、さてはかう云ひ出した一件である。「おばあ樣を國から呼び寄せませうね、おひとりで屹度淋しがつてゐらつしやるに違ひないわ。いゝと仰有れば、わたし明日でも子どもを連れて行つて來ますわ。わたしだつても十年も國へ歸らないから行つて見たいんですもの。ねエいゝわ、ねエ」と、それは私がどうにか食へるまで故郷に殘して來た盲目の祖母で、勿論私は又よからう！と云つた譯柄には、一つは祖母は一日でも早く呼び寄せることが當面の義務ではあるし、而もこの調子で行けば大丈夫だと考へたことだし、一つは幾年ぶりなのか兎に角、その時分妻と彼女の話をしては無性に會ひたかつた矢先だつたからである。すると、それに忽ち事實となつて現はれた。たつぷりした餘裕こそなかつたが、三輪子は、二人の子をつれて、ほんの往きだけの汽車賃で、復りの路用はあつちで私から送るのを待つことにして、さて愛宕の山の下から三百五十里の九州の西の果——いや、實はその中途行くうちに屹度クタ〳〵になるやうな浴衣一枚で出掛けて行つた！

その時私は例の探偵小説のコナン・ドイルの「黄色い顔」の脱稿に近づいてゐたのだが、不意の恐慌は不意そのもののやうに、不意の權化のやうにドン！と落ちて來た。それがつまり、お仙と支那人の結婚なのだ。ある日津田光造[illegible]

の路次口の本郷バーで、いゝ加減に醉つ拂つて來て、その話を殘して行つたのであつたが、あまり馬鹿氣てゐるので半分も信用しなかつた。すると間もなくお仙が、あゝ云つて散々に支那人を罵つて、またそこから明日も飛び出し兼ねない日ぶりだつたお仙が、突然しやあ〳〵と落ちつき拂つて、やつて來て云ふ。即ち近いうち――それが正に確實に今日今晩なんだ――お化けの鼬と夫婦になりまんね。仕方がありまへんね。生れるときからそんな運があつたのや。もつとも、始めから解つとれば、わて、生れまへんがな。もう〳〵わて、自分の身の上のこと、何も考へません、考へてもゐ　まへん　へてどうなるもんや？と云つた意味のことを列べた揚句に、例の着物をそれまで、そつくり出してくれと云つた。支那人には打ちあけたくない。でないと、私とお仙との仲に忌はしい關係でもあるやうに疑はれますと云つたのであつた。私の計畫――この泥の中のやうな浮世に美しい天國を建てやうとする素晴らしい計畫は見ごとに鼻を挫かれて了つた！蟻の塔のやうに一崩れに崩れて了つたのである。だが、その時の仕事の金をそつくり妻へ送ることが出來なくても、お仙に取られて了つても、また一月たてば出來ない次第ではない？そこで取り敢へずさう決めて、お仙がその後、殆んど二日に一度と催促に來る度に、私は機械のやうになつて書きなぐつてゐた仕事を見せて、確かに、彼女を安心させるために、その日まで、出來得るだけの質受けを約束したのであつた。そんな、ことは勿論妻へは云つてやらないのだ。それが、そんな面白くもないし張り合ひ拔けのした日が、到頭今日まで續いた次第であつた。そして今日限りお了ひなのだ。

二

淺草橋で下車りた私は、電車の交叉點に面した小さい三角形の公園を突つ切つた。いつも朝霧の底に白い日の光りを浴びて慄えてゐるやうな三本の白楊樹の蔭のベンチの上に、食ひ殘されたアン麵麭の屑や、握り飯のこぼれを突つつい

たり踊び廻つたりしてゐる瓦雀は見えなかつた。その代りにそこに、労働者風の女と男が蹲んでゐた。そこからごた〳〵と續く所の狭苦しい唐物問屋の通りを五六丁ばかり通り抜けて一寸左へ折れた角に前面だけが薄つぺらな白煉瓦の――人間なら差し詰めおしろいを塗つたやうな風洲堂があつた。店先から上り込んだ私の前には、剝げちよろの金庫と背中合せに、女主人公の、金歯のお神さんや、番頭の常どんなどが、頻りに算盤を彈いたり、荷造りをしたりしてゐた。そして私を見て、例の毒々しい口一杯の、唐獅子のやうな金歯を見せて、ニタリと笑つた。つまりこれが彼女の癖なのである。

「近ごろは馬鹿に早く來ますね？」

と常どんが云つた。「なに、さうでもないよ」と私が云つた。「與さんがゐないから、家にゐたつて仕樣がないんだとき！」と、そこに積んである淨瑠璃や長唄本をヒイ、フウと數へてゐた「歩兵少尉」がクスリと笑つた。

「時にお神さん」と私が例の原稿を懐ろから出すのを怜悧な口で、チラと見たお神さんに「次のがやつと出來ましたがどうでせう？」と氣の弱い私は、金をくれるばかりが能でないと云つたやうな癖のお神さんの顏色を伺ふのである。一つは、少々荒つぽく毆り書き過ぎたことに氣がさしたのであつたところが、平生そんな女でもなかつたお神さんが、「それは〳〵お苦勞樣」と云ふ風に氣安く金をくれた――十圓紙幣で五枚――で、何となく無氣味に私は、その次の肝腎の仕事に着手するが、どうだらうと、また恐るゝ恐るゝ彼女の顏色を窺ふた。「處がどうだらう

「それがね、伊昌利さん」とお神さんは無暗に氣の毒さうな表情をした。「ちよいと譯があつて暫く控へて貰ひたいのですよ。云ひ難いから默つてたんですけれどね」

私はどきんとした。そこで咳み込むやうに

「どうして？どんな譯ですか？出版を廢めるのですか」

「いえ、さうぢやないですが」とお神さんは全く云ひ難くさうに、チラと番頭の顔を見た。

「ぢやどう云ふわけでせう」

すると、番頭の常どんが、鐵ぶち目がねの下から、何となく私を嘲けるやうな、例のギロリとした眼を向けて

「實はね。骨沾利さん」とさも宣言するやうな冷淡な口調で云ふのである。

「ある人が、と云つて、店の知り合ひの吉江春房と云ふ古手の新聞記者なんですが、その人が新聞をやめて今仕事がなくて困つてゐると云つて泣きついて來たんですよ。つい二三日前もやつて來て何か仕事をくれと云ふんですが店の仕事と云つたところで、ほら、あなたも存じの翻譯しきやないんだ。あとは皆取次物ばつかりなんだから、で、一度断つたんですけど、あんまり再參うるさくやつて來るので、お神さんと」と云ひ乍らお神さんをチラと見て「相談の上で、當分の仕事をくれてやつたのです」

と云つた。するとその後を引とつて

「ほんとに骨沾利さんにはすまないんですけど、家に勤めてゐらつしやるうちには此處何かで埋合せをする積りですから何卒あしからず………」

「すると僕は當分遊ぶことになるんですか」

耳の底に沸き上る血の音が聞えてゐた。全身が微かに顫え出した。やがて、私は、ほんとに木偶の坊のやうに其處に突つ立つたまゝ、ボツと映つてボツと消えて了つた儚ない夢をつく〴〵呪つてゐる私を發見したのである。次の瞬間には、「まあ暫くお遊びなさいよ。あなたには店の雑務で澤山だ。そつちの方を一生懸命にやつて下さい」と云ふやうなこんな商賣人としていゝやでもこの位思ひ切りのいゝ單純な、人を小馬鹿にしたと云ふより寧ろ、その道にかけては成る

程初心ではあるかも知れないが兎に角安い給料で書記まで勤めてやるところの私から命のやうな尊い仕事を萬事わけもなくサラリと吳れて了ふやうな無法な、不人情な、自分勝手な話があつてもいゝのか？とこの二人の暴君のやうな恐ろしい人間の、そこに毛筋ほどの悪びれもなく一切合財浮世はこんなもんだといふ風にノホヽンとして又忙しさうに算盤を弾き出した彼等の上へ、最後の視線を投げつけると一緒に二階の事務室――と云つて六疊の眞中に卓子と椅子とあるきりの部屋へ駈け上つたところの蒼褪めた私を發見したのである。「一體どうしたものだらう」私は椅子にかけて、取り散らされた書類の上に頬杖ついて了つた。すると、金歯のお神さんや常どんや、見たこともないがしかし、悪魔に近いやうな春房と云ふ新聞記者の顔がひつきりなしに私の頭を往來した。すると、その時刻になると毎日きまりきつて擔ぎ込む大束の郵便物を抱へて二の番頭の「歩兵少尉」が二階へ上つて來るのである。この男は鼻の下にチョンピリとした赤い髭があつた。「歩兵少尉」と云ふ名前は金歯のお神さんに貰つたと云ふ話で彼は正にどこかの聯隊の歩兵少尉に違ひないのであるが、ある年の簡閲點呼に彼は武器操縦の説明役を命ぜられたのである。そして點呼召集者を前に並べて置いて、さてドイツの機關銃が一分間に三百人を射殺する能力があるのだと、そこに青島から持つて來たやつをグル〱廻して見せて、未教育兵！氣をつけ！さあ此中に社會主義者が居るなら手を上げろ！一分間に三百人が解るか？と怒鳴つたのがほんとの原因でどう云ふわけだか、體のいゝ免官なのである。「歩兵少尉」は書類を卓子へどさりとあけながら「サア。整理だ。だが、君、悄氣ちやつたね？」と私を見てまたクスリと笑つた。

「氣の毒だねえ。困るだらう」と卓子の上へのしかゝつて來たかと思ふと、さも私に同情めいた小聲で、「こいつにや事情があるんだよ」と云つた。「あの春房は太い野郎なんだ。」と實に私の耳には奇怪なその事情であつた。

「君の最初の本をあいつがケナシつけてお神さんの前でかう云つたんだ。」

と彼の云ふ事は何でも私が探偵叢書の第一篇として手をつけたホフマンの「スカレー夫人」の翻譯を見て、こんなヘナ〱のヨチ〱の文章で原作の妙味を出すなどゝはおろか、目の高い世間樣のことだから、下手するとそれがために賣れが止まるかも知れない――と云ふのである。私はそこで即ち

「それやヘナ〱のヨチ〱だらう！だが餘計なお世話ぢやないか、何しろ三百枚でたつた五十圓の報酬と聞いちや、憚りさま、偉いお方はチョックラ手を出しませんよ。第一時間の問題だからね」

青白い私の頬に熱の籠つた血の氣の騰るのを感じた。

「ところが君、春房の云ひ草がかうだ。ねえお神さん（と一寸その春房の口眞似らしい蚊のやうな聲で）原書なんかと首つ引してゐるやうぢやまどろこいもんです。それをやるやうぢやまだ〱素人でさ。すると常どんの云ふ事が、尤もさうかも知れない。あなたは以前から頭がよくて筆が達者でしたから、何でせう、原作を一通り讀むと、もうひとりでにスラ〱と書けるでせう。すると今度はお神さんだ。すつかり感心しちやつてね。しかしそうなるまでの修業がなかなかでせう？こんな仕事は才子でないと、チョット骨なんだから。とまあ、かうなんだ。春房と常どんは何でも中學時代同級だつたらしいから、そんなことで、早い話が共謀でお神さんを口説き落したも同じことだよ。詳しい話は知らないがね。いやな奴等だよ。おべつかで、陰險で、男らしくないから俺は大嫌ひさ」

「有り難う。そんなことだつたら、僕が惡いんだから諦めるより外に仕方がない」

さう云つて私は默り込んだ。「歩兵少尉」は私の味方であるやうに、春房の惡態をつくのである。で、その話によると彼は私よりも二年ばかり前から此店とは知り合ひで、獨り者で、地方の新聞社を食ひ詰めて歩くので、筆は本人が自慢するだけになか〱達者ではあるが、しかし酒癖が惡くて、何とか云ふ日比谷の自動車屋の窓ガラス――それは一枚二

百圓もする——をステッキで叩き壊して、名古屋あたりへ逃げ出したのが極く最近なのださうだ。そんな男をどう云ふ次郎でお神さんが信用して仕事をくれるかと云へば、「そこにはまた底ありだよ」など丶「歩兵少尉」が悟つた口調で「あいつには大部貸しがあるらしいので、そいつをいくらでも差し引く了見なんだらう」と云つたのであつた。

「どうせそんなことだらう？人間なんて御手前の都合さへよければ地球なんか粉微塵になつてどつかへ吹き飛んでも構はないけだものなんだからね」と呟くのである私は、さうだ！ほんとに人間はみんなけだもので畜生で狼なんだ。食ふためには生命なんざうつちやつても平氣だ。況んや他人の命は猶更よけいなものだらう、だが、しかし、それだけは私とて面白くもない！いや妙なことかも知れない——のは、私とても他人の品物が決して欲しいと思はない日はないのであるに拘はらず一度だつてこつそりと引つ掠つた覺えはなかつた。と云ふのが、私の考へによると、今のところ私と云ふ男は世の中で一番ぐうたら坊で、やくざな人間なのだ。そうして私よりもずつと偉い人達の品物を盗んでも、恐らくより幸福とは思へさうにないのである。だが、彼奴は、古江春房はと私は考へて來ると、私ほどもない下等なやつで、いや、そんな氣が、するので、理屈ではない。全くその仕事と云ふのは私に取つて唯一の慰めでもあるし、私の生命や其他のあらゆる物はそこに含まれてゐた。放浪者春房には五十圓の金であるかも知れないがしかし私達親子には一人々々が五十圓だけの惠みを感ずるに違ひないのだ。私の手にある仕事は彼の手にある仕事よりもずつと立派なものだ。ふと、さう思つた私の耳に突然こんな微かな聲が聞えた。

「おい君俺はヒョツとしたハズミで君の仕事を引つ掠つたが、今返すから取つてくれ玉へ。俺は君がこの仕事を、そんなに大切に守つてゐやうとは思はなかつた。若しこのまゝだと君は屹度怒るだらう？ことによると自殺するかも知れない。うつちやつて置けないから俺は返しに來たのだ」

だが結局それは私のヒユマニタリアンの夢で、五分間の後には、この小さい事件が、どう云ふ性のもので、そして來るべき結果がどんなものだと云ふことを考へ乍ら、

「畜生！猶婆め、疥房め。何て想像力のない泥棒なのだ。今にお前達にもこんな恐ろしい日が落ちて來るから見てゐるがいゝ！」

せめて、さうした罵りを絶望的に腹の中で繰り返した次第であるが、間もなく、彼等の驚きには、サヨウナラ！とも云はずに店を飛び出した私が、凡そ一時間まへ迄、そこに築かれてゐた美しい頭の中の天國――そこには妻の三輪子や二人の子や盲目の祖母が、放ち飼はれた仔羊のやうにのび／＼と戯れて、その笑ひ聲さへ聞くことの出來る世界の代りに、そんな何處かの遠い遠いお伽噺にあるやうな美しい幸福な國とは似ても付つかないところの、牢屋のやうな不快な町、厭はしい家、退屈な生活の持ち主になつてゐたことは勿論であつた。若松町の露次から淺草橋公園を突つ切つた電車の交叉點にぼつと立つてゐた私は呟いた。

「俺は眞實あついの拳骨で脾腹をドンと突かれて打つ倒れたのだ！」

そうして、これこの通り確かに蝶のやうな骨ばかりの大きな拳が俺にもある筈と、しかと握り詰めたもので、その時その後ろから不意に、危ない！と云つたやうな恐ろしい大きなダミ聲が、疾風のやうに飛んで來て、ハツと思ふ瞬間に山のやうに氷を積み上げた兩自動車が、地震のやうな地鳴りを立てゝ通り過ぎたのである。さうだ！俺にも拳があつた筈だ。と力んだので、そして私はクワッと上氣せたが、おやおや！何と又ゲッソリと悄氣て了つた私を發見したのである。そしてまた「神樣。この拳を誰に翳したものでせう？」と――

それは想像するだに怖ろしかるべき三輪子達の幻が浮び出るのである。漸く一人口をすごしてゐる盲目の祖母に縋り

ついてゐる彼女達の――迚もお仙の手へ渡してやらねば、訴へるかしら？そんな馬鹿なことがッ結婚が打ち毀れるかしら？嘸肩味が狭いし、私としては心苦しく、人に知れては随分不面目で、いつまで 口五月蝿く、小矢ケ間敷く言られ、恨まれるに違ひないところの金、ふところの金、それをしめ無駄に待ち侘びてゐる彼女等のことを考へると私は、ほんとに氣が狂ひさうだ。そして私は先刻さう決めて了つたことに、恐らくお仙に五十回でもこの際不満足だらうが――ところが、この次、私の手には、いつまた金が入るのか？でも、仕方がない、私はお仙の方を片づけずにはゐられないやうな必死な場合なのだ。三輪子や子どものことなんか暫く忘れることだ。さうだ。忘れて了はねば、法がつくまいと云ふときだ。何の、あいつ等だつて生きてゐるんだから歸らうと思へや道具でも叩き賣つて來るさ！今どき餓え死しやしまいし、いや、飢え死しやうと大江山の酒顚童子に持つて行かれやうと惜くもない人間だし、ことに彼女と來ると、私の亭主甲斐のないことを知り抜いてゐるやうに左様に私も彼女の、迚も虚榮心の突つ張つた、迚もお郷の目方の御館になるやうな途方もない夢を見ては年中ウカとしてゐる！そう云へばいつもおきまりの、エ、。どうせウカ／＼者でせうよ！お氣に召しますまいよ！などゝ畜生。この奴、石にたれ！とばかり心から張り倒したくなる女の頭から足の爪先まで知り抜いてゐる私ではないか。ハテナ？この機會は？ハテナ？ことによると神様のお思召なんだ…何か？何でもいゝ百年の年月がこのまゝブイと經つて了ふなら――と全く私の考へにはそうなので、俺は又何だつてあん畜生に引つかゝつて子まで拵へちまつたんだらう？俺は又どう云ふハズミであいつに接吻なんかしたんだら…？あの面構を拵へて、ほんとに俺はお前を一生涯愛してやるよなどゝ、見えすいた嘘をつき乍ら、何てえ法外に太つてやがるんだらう！と腹の中で苦笑し乍ら、抱いてやつたり、おんぶしてやつたり、あゝあ骨の折れた話だ、だから、そんな三輪子のことなんぞ、今日をかぎりにと忘れちまへ――先づ私は、そんなことを考へ出して彼女等の幻影を追つ拂はふと試み…

であつたが、要するに無駄な努力に過ぎないことには、夫婦とか親子とか名乗るもの丶、げに私には合點の行かないところの、不思議な、そして目に見えぬ大きな鎖で、あべこべに、そつちへグイ〳〵と引つ張られて行かうとするのだ。そうして私に、それ大きな山蚊が喇叭のやうな唇を立て丶やつて來る！ぽろ〳〵の壁からそれ〳〵靴のやうな蚤が飛んで來る！云はないことか、到頭天井から青大將が落ちて來た！そして子供が天井を覗いてゐる！あ丶。あ丶。と藁葺の祖母の家がぽツと浮んで來るのだが、何と云ふ不思議な人間の魂だ？その魂は、屹度私のいつも駈け足をつづけてゐる心臟――時々、思ひ出したやうにドクンと止つて、ハツと思ふ心臟のあたりにあるらしい哀れな魂は、突然頸のやうな刺痛を覺えたのである。「お前は不幸な人間だ。絶望、悲哀、愁嘆――それがお前の命の旅の道づれではないか？お前のやうな弱い心の人間を誰が愛するものか？お前は造物主の過失だらう？」そんな囁きが聞えたかと思ふと、「お前はそれを自分で造り直すのだ。そこにお前の全生涯が横つてゐる。お前は少年時代から誰にも何物にも屈服しなかつたではないか？お前はそれを忘れて、こ丶で退却するのか？哀れの野武士よ！」とまたそんな囁きも聞えるのである。こんな二つの波のやうに矛盾した感情が私の離れる魂の中で衝突した。そして、それは異様な願ひと間歇的な痙攣に怯え込んで沈默してゐた。いや、胸の中のすべての物は沈默してゐた。それから？

三

九時過ぎだと云ふのに、お仙はまだ彼女の部屋の蚊帳の中に轉がつてゐた。

「わて、隨分寢坊だつしやろ？でも晩おそうおますさかい、なか〳〵起きられませんわ」

と、枕元に落ちてゐる櫛だの簪だのを掻き集めて、呆けたやうに出て來たその蚊帳の奥に、それは天井の低い四方が

壁の、眞ん中に仕切られた色ガラスの窓から流れ落ちる薄あかりに、はつきりこそ見え兼ねたが、たしかに、目も鼻も煙草の脂で黄色くなつた、例のお化けの顔に違ひない男が寢てゐたのである。彼女は、また例の、いけしや〳〵と落ちつき拂つて私をそこの油臭いぼろ〳〵の應接部屋に引つ張つて、そこで、

「どうだすね？」と云ふのだ。「旨く都合がつきましたどすか？」

「あまり旨くもつかないが」兎に角と、私は「これだけ、やつと出來たよ」と右の袂から紙幣を掴み出して、そつと彼女に渡したのであるが、彼女は、それを一寸見て、「三十圓？」

と云ふ。

「三十圓？これだけではあんた、羽織と帶と傘と、下駄と受出せば、お了ひになりまんが？もチヤツと何とかして貰はんと、どむならんがな、他で立て替へて貰ふことはありまへんかいな？」

勿論そんな家は一軒だつてありつこないと云つたのだ。そして、私は今度だけこれで我慢して貰つて、いや、まことに申し譯のない話だが、この次には何とか片をつける、それも遠いことではないと云つた。お仙と向き合つてゐることがいかにも苦痛で、なるべく早く切り上げて逃げ出すつもりだつた。いやその時の私としては、他に術がなかつたのであるな。すると、彼女はいきなりベソ掻いて「やんなつちまふ！」と、豫想通りに、ぐつと澁つぽく、しかし一息もつかないでから訴へ始めたのだ。

「旦那はん。わて、こない云ふたことおまへん。云ひたいとも思ひまへんけど、身の皮剝いてまでもあんたや奥さんに盡すことありやへん！ほんまだつせ？ほんまに自分云ふたらこない家で食ふもの食はずにアクセク働かんとならん云ふのか？さう思ふて齒くひしばることもおます。あゝ。あゝ。わて、何しよつたらこない彼方此方で虐められる運どすや

ろ？いつそ諦らめやう思ひまんが、口惜しうてな」その時の私と云へば、ぽかんと突つ立つて、すまない、すまないの百萬遍に、腹の中では、おゝ主よ！この場を救ひ給へ――とも云ひ度のいだ、

「旦那はんも罪な人や、今日わての身の決らう云ふのに着物一枚持たいで見えんたはれ今にバチ當りまほに、

さう云ひ乍ら、彼女は一頻りムツツリとして俯向いてゐた。見窄らしき睫の下から、ぽろぽろと涙の溢れるのが見えた。そして又、

「そない愚痴こぼしたかとショムないことだんね？旦那はん、ほんまに駄目だつか？もう一文もおまへんか？何ぼ何でもこれだけではわて我慢なりまへん！後生どすさかい、もうチヤツと何とかしてくんなはれッ・な？・どうだす」と必死に拝み倒して泣き倒して、ことによれば武者ぶりつきさうな有様のお仙に、あゝ、あゝ、やつぱり駄目だと、かくあるべきところの氣の弱い私は、追ひ剝ぎに出逢つたやうに、左の袂の二十圓を摑み出して、ぶるぶると身ぶるひして、到頭やつて了つたのである。

「それ見なはれ。大きに助かりまんね！」

お仙はあたふたと帶の間へ入れて了つた。そして、あの千束町の銘酒屋の女のやうに、ガラリと態度を代へたのである。かくて彼女は私を待たせて、部屋へ引返して、甜を叩き起して、そこへ私を引き立てるやうに連れて行つたのである。

「お早う！」

と甜が例のお化けのやうな顔を崩して笑つた。たゞ、それだけである。尤も、間もなく、今日肝入の仲人の津田光造が「やあ」と云ひながら神妙に袴羽織で鹿爪らしく威儀をとゝのへてやつて來たときも、「お早う！」と、それつきりで、

別段に、いろ〱とお世話になるとも云はないのである位の支那人と、それから、その支那人とたんと變らない無口の私とが向き合つてお互に相手の顏をチラ〱と見るだけで、堅苦しく押し默つてゐたら、お了ひには泣きたくなるほどの寂寥と退屈に襲はれたかも知れない。しかし、間もなく、話好きな津田光造が例に依つて、出鼻からゲラ〱〱と笑ひ乍らやつて來たことによつて全く救はれたのであつた。で、その間にお仙はまるきり姿を見せなかつた。其處では水音がしてゐた。下宿人の部屋とは大部か離れてはゐたが、不思議にひつそりとしてゐた。恐らく彼等も同じやうな背つ張りで、十時までも十二時までも寢てゐるのかも知れないと思つたものである。津田光造は、昔から〇の尾行に行くのであつて、その前に型だけの結婚式を舉げさせるつもりで出掛けたことは先刻解つてゐるのだが、さても呑氣なことに、そんな支度としては、何一つ用意がしてなつかた。で、もとより私とした人間はこの場に當つて全く不用なものに決つてゐる。ことほど左樣に考へて、さつさと引揚げる筈なのを到頭津田光造に引つかゝつて、やけ糞半分に座り込んで了つたのである。津田光造はこの目もなか〱如才のない男で、お仙を追ひ廻して、ビールを買はせたり、牛肉の罐詰を買はせたりして、誰を持なすともなく散財を始めたものであつた。そして一口に云へば、大方これがお仙の結婚式として久遠に渡つて彼等の頭に殘さるべき性質のものであつたらう？と私は考へたものである。お仙は寢卷一貫で其處とこの奥まつた一番隅の部屋との間を行つたり來たりして忙しさうに立ち働いた。翁は時々、私達との話の間に、實に賴もしく働くところの彼の妻のお仙をチラと見て、そして、その瞬間に、彼の廣々とした、アバタ一面の、左樣、一口に云へば、漬け過ぎた茄子の肌のやうな色艶の、しかし、何となく善良な顏は愉快さうで、その小さい干葡萄のやうな眼は哀れつぽく、ぼんやりと瞬くのであつた。

「津田さん」と私は云つた。「あなたはもう引き揚げる時刻でせう？」

するど彼津田光造は、テカ〴〵の額に滲み出る汗を拭き乍ら、「いや、まだいゝ。も少しつき合ひ給へ。どうもかう暑くつちや、仕事も出來ないね。とか「いや、〇のことなら大丈夫だ。あいつ今日は外出しないことを探知して置いたからね」とか、いやそれどころの落ちつきやうでなかつた證據には、部屋の隅に片づけてある碁盤を指して、「どうだい君、一番差さうか？あゝさう〴〵君は丸きりいけないのだね。ぢや、まあ、ゆつくり飲み給へ。家へつ居たところで仕様がないのだらう？」などゝ、なか〴〵洋盃を放さないのであつたが、私にしても勿論、家へ歸つたところで始らない話なのだ。そして、私の癖として、酒は大きな茶碗に波々と注いて、冷のまゝで、まるで馬が水を飲むやうに、がぶがぶ呷ると云ふ無風流な方で、しかし、そんな仕事は夙の昔飽き果てるほど續いて來たので、かうした風の變つたところが何となく妙に棄て難く思はれて、さらに又幾時間か居据つてお了ひにはおきまりのやうに醉つて了ふので、さうなると津田光造や私や支那人やお伽がいくら無學でも、いやは驚いたことには、オムスク政府がどうのホルワット政府がどうの、日米戦爭がどうのと、なか〴〵行き屆いて細密を極めた話をお互に心得えてゐたのであつた。尤も、一日中、支那人やお伽のことに限られてはたまつたものでなかつたが――しかし、流石にそれ以外に話の種があるとすれば、それは大抵何かの雜誌にでも載つてゐたことの受賣りに過ぎなくて、從つて一向面白くもないに決つてゐる。ところが、津田光造の不思議な物には、ふつと、醉ひが醒めたやうに、ほうッと苦しさうな熱い息を吐き出してから云つたのである。

「どうも商賣の話をしちや興が醒めるけど實は一昨日のことなんだ。」と彼は喋り出した

「近頃何となく〇の暴動が不穩に思はれて、ことによると、また何か惡いことでもおつ始めるのでないかしらと云ふ點があつたもんだから、氣をつけてゐると、先生一向お存じなしで、頻りに八方へ電話をかけるんだね。と云つた僕は實

の處、あのK館の、それ、君知らないかい。玄關口に素晴らしい姿見がある――あの後ろが、チョイトした部屋で、そこに一日踏んでゐると、電話室の話は、はつきり聞き取れるんだ。」と云つて息つぎに、がぶりと一口飲むのである。「ところが君、奴等もなかなか用意が周到だよ。どうも云ふことがちつとも通じないと思ふと、これが君、フランス語と來てゐるからね。解らう筈がないぢやないか」

　さうして、多分その數日を馬鹿げた徒勞に費したことが、彼ながら滑稽であつたと云ふ風に、ニヤニヤと笑つてゐたが、翻と私とがぷつと噴き出すのに釣り込まれて、例の油蟬のやうなゲラゲラゲラ！と肩を揺り出した……かと思ふと、しかし、と彼は俄かにその顏にぞつとするやうな鳥肌を立てた。

「僕は決してOを、いやOばかりではない、Sでも、Sの乾分でも、憎いとは思はない。」と突然妙なことを云ひ出した。何となくその聲が感極まつた時に出て來る、一種異樣な息聲であつたのに私はおやと思つたのである。もつとも私や津田光造が醉つ拂へば、忽ち世界中の人間が――人間ばかりではない、犬でも、猫でも馬でも――心底から可愛くなるのだ。そしてそのすべての生物を愛したくなるその瞬間の不思議な心もちがどうしても忘れられないで、また醉つ拂ふのであつたが、しかし、津田光造と云ふ男が、たみへ、彼が日毎夜ごとに附け狙つてゐるOや其他の社會主義實行運動者――つまり敵のお陰で生命をつないでゐると云ふわけで、そう云つたのであれば、成る程當り前のことだと思ふと、彼はつゞけた。

「僕はあいつ等の書いた本の熱心な讀者なんだ。だがしかしあいつ等の顏を見ると、再參毆られた憶えがあるから復讐したくなるがね、本を讀むと、そんな感情はポツと消えちまうよ、どこかに僕の魂を和らげてくれる大きいものがあるんだ。そして、そんな時に、いつも僕は自分の仕事をいろいろと考へて見るよ。」

それは勿論私には初耳で、その意味がはつきり解らなかつたのであるが、何と云ふこともなく、彼のグツと沈み込んで一點を見詰めてゐるやうな態度に引きつけられて行くやうな氣がしたのであつた。支那人は煙草を燻らして、例の蒋人の笑ひを笑つてゐたが、かう云ふ具合に話が行き詰つて來ると、ぷいと、何處へか行つてしまつた。お仙も見えなくなつた。すると、下宿人達の話し聲が高らかに廊下を傳つて、油の煙が鼻を衝いて來た。いつかお仙が云ふには「支那人の書生はんは吞氣なもんどつせ。始終、唄うたひよると思ふたら、それがあんた、學問や、何やら唱歌云ひまんのや。」と、そのチョンスらしいお經のやうな聲も聞えてゐた。私は、色ガラスの窓下の壁に倚りかゝつてゐた。そして、「津田さん。どうです。何か一つやりませんか?」と云つたもので、「やりますかな?しかし、」と彼は唄でも始まらないと云ふ風だつた。

「いつも、いつもおきまりの奴で、飽き飽きだ」

「いゝですよ。あなたの唄は幾度聞いても飽きませんよ。」

幾分白けて來る部屋の單調を破つて貰ひたいので、事實私はおだてたのであつた。

「ぢや一つ演るかな。」と津田光造はビールをぐつと飲み干して、床の間にどかんと腰をかけて、舌なめずりをした。

「えゝと。何をやつたものかな?オペラでもやりますかな?」

それから、床の間から辷り落ちて一寸咳拂ひをして、やがて、默つて了つた!と思ふと、彼は餘り數のない持ち唄から、最も新しさうなところを、例の油蟬のやうな聲でやり出した。

へ見えたよ。見えたよ。この世の果が――

命の旅のひと宿に――

今、津田光造の額から油汗が流れるのである。苦しげに寄せた眉のまわりには悲しげな影が寄つてゐる。少し前につけた——と云つて實は朝から點いてゐたのを途中で消して、またつけた電燈の傘に照り返される光の中に、私とても恐らく彼同様に險しく異様に見えたであらう？

「巧い？實に巧い？」

さう云ひ乍ら私は頭をポンと叩いた。それは例の、淺草金龍館で今やつてゐる『あゝ戀の夢』の中唄らしかつた。ふん！へ何をクヨクヨ川ばた柳と來らあと津田光造はそんな文句を呟き乍ら疊の上にゴロリと轉つて、

「どうだ君！」とビールの栓をぽんと拔いて二人の洋盃に波々と傾け乍ら「一緒にやらうか——」と云ふ具合にやがて妙に心の角も失せて、氣の和らぎを感ずることには、私と津田光造とが不思議な聲で、つかぬ歌の二ツ三ツを唄つたのであつた。「どうだ君！」と彼は又始めた。「今度は一人でやつて見たまへ。やつぱり、最初のがいゝね」と、そこでふら／＼と私は唄ひ出す。

『こんなよい日はあともなく

命の旅は半分過ぎた——

ところが、どうした氣の加減であつたか兎に角、唄つてゐる私の聲は、中頃に至つて押も制し切れぬやうな悲しみに響いたのである。そして、それから先は咽喉に絡まつた涙聲がまるきり出なくなつて了つた！いや其ときは津田君！と私は心の中に叫び出したのだ。「命の旅は夙の昔に過ぎ去つて了つた！半分どころか？萬事一切は過去のものとなつて了つた。希望も信仰も。しかし、それが何だ？泡の消えぬ間にビールでも飲み給まへ。」そうしてまた唄ひ出さうと努めたが、しかし、事は旨く行かなかつた。

「何だ君！」

津田光造は瞑つてゐた目をぎろりとあけた。そしてまた居眠りを始めた。唄のなごりは又私に古い記憶を呼び起したものであるが、その昔の俤はいづれも美しく華やかなものでこそなかつたが、しかし、現に何私はその往時の中に微笑――悲しき微笑を忍ぶことが出來るのである。成るほどさう云へば、そこには希望と信仰があつた。あつたと云ふだけで、しかも今以てあるとすれば、もう黴が生えてゐるに決つてゐる、私の心は呟くのである「俺はかうして氣まぐれに思ひ出して後悔するやうだが、それが、どうなるんだらう？そんなものは昔あつたと云ふだけで、今はないのである。要するに命の旅はお了ひになつた。そして今自分の仕事と云ふのは酒を飲むことに違ひない。尤も、以前は私の前に輝かしい未來が廣々として望まれ、力と云ふものは妻の頭を毆るために與へられたものではないやうに思はれ、生きてゐることが何と貴く有難いことであつたか？研究したり思索したり、いろ／＼な心の火花を散らしてゐたその心――見たまへその心は暗い洞穴のやうに冷たくなつた。そしてそこを叩いても、もう昔の物音は反響すらしなくなつた――見たまへ、そこに燃えた焔は何故消えて再び燃え上らないのだらう？私はどんなに苦しんでゐるか？何故生きて行くことが、かくも苦痛なのだらう？ほんとに俺は不幸だ！だが、しかし、それを氣にしても始らないではないか？さう考へると津田光造だつてお仙だつて、そして三輪子にしろ同じことで、お互に銘々の不幸を痛切に感じたり苦したりするこの、げに馬鹿げたことだらうと云ふ風に何事も云つたことがない。しかし、もし、そんな苦しい話を云ひ合ふことだつたら私達現在の眞面目な事業と云ふのはやつぱり酒をのむことだ！と云ふ全く正確な言葉の中に、いかに悲痛な、涙をこぼして長々しく說いても說き盡すことの出來ない眞理を發見し、且つハツキリ感ずるだらう！――幾本かのビール瓶――肉の罐詰――足の短いチヤブ臺――すべてのものが空虚な困憊に包まれてゐた――。

ところで津田光造としては、今頃、夢を見てゐるのだらう？――その夢と云ふのが、私が作居の路次口の本郷バーにゐるところの大體の感じが腐つた冬瓜のやうな、そして年中客の酒に醉つ拂つてゐるウヰトレスなのである――多分さうだらう？と云ふのは、つまりそのウイトレスのおたみさんが、あなた隨分お見限りだわねえ、いゝ女が出來たのでせうよ、さあ煙草に火をつけませう？ちよいと一口と云ふ具合に客の側へ押しかけて來て、どうかした拍子には、あの梅毒三期のガサ〳〵した腕をのべて首つ玉に嚙りついて容易に動かないので、さて、いつも津田光造が、そこへ、へたばり込んで、「おい、たみちやん。さう悲觀するなよ。俺がついてゐるんだ。なあ晉呂利君！」すると、彼女がふら〳〵とやつて來て「アラ、いゝわね。サア一緒にどつかへ行きませう」と上の客のお世辭に違ひないが、津田光造としては、なか〳〵しみ〴〵と惚れてゐるのである。――そんな夢だ。恐らく――。ところで、又、支那人の翹はどこへ行つたのか？そうして障子の硝子に鼻を擦しつけて、其處から、その邊一帶を見廻すと、さても汚ない板の間に、三國一の花嫁の翹が蓋のやうに轉がつたまゝ手枕ですや〳〵と眠込んでゐたのである。そして五六匹の大きな蒼蠅が、ペロ〳〵と顏を舐めたり、足摺りをしたり、兎に角そんな狀態で、又、「お仙は、一體どこへ行つたのかしら？」さう思ふと、今度は彼女のハイカラに結ふた髮がチラと窓の影に見えた。それはあとで、解つたのだが、お仙は翹の寢た間に、おハチに一杯も支那饅頭をふかしてゐたのであつた。お仙は、それを抱へて、こそ〳〵と入つて來た。

「おすきやどうか知りまへんけど、チヤツと上つて見たはれ」

そう云ひがら、大きな躰を搔いてゐる津田光造を見て、「おや〳〵。津田はん汗びつしよりや」とそこにあつた團扇でバタ〳〵と煽いでやるのである。

「どれ一つ貰ふか」そのフワ〳〵した出來たての黄色い饅頭を頰張りかけて、ペツペツ

「まづい。まづい」と吐き出した。

「あんたおきらひか？」

とお仙はおしろいの剝げた顔にぽかんと口をあけて、鳩のやうに凋びた目を見張つた。しかし、右の手は、まへ〳〵から南京蟲に食はれて膨れ上つてゐる足の指を、ポリ〳〵掻くのである。

「まるで甘味がないよ」すると彼女は「それはマア〳〵えらうお氣の毒やな？そうだつしやろ。甘味がおまへんやろ。」と彼女はいかにも尤もらしく點頭いて「砂糖いらずのおマンだんね。あの剝はんが砂糖儉約やで、使ふたら一一量計にかけて嚴重にしまひよるさかい、砂糖なしで造りましたのどす」

と云つた。そして、そこに列べてあるビール瓶を引つたくるやうにして、「ほんまに旦那はんはお酒でないと始まりまへんな？」

「そのお酒ももう澤山だ。少し眠くなつた。何時だらう」

「まだ早うおますわ。」

「でも何時だらう？」

「まあ、まあ、えゝがな。わて、お酌しますさかいチヤツと飲んでいんなはれ。わてのお酌あきまへんか？

これがお仙の口癖で、妻が國へ立去つて二週間か三週間目に、ひよつこりやつて來て、そこに私が酒をのんでゐたのである。すると彼女が、例の竹箒のやうな手を出して同じやうなことを云つたのである。そして私が、あまり五月蠅かつたので、一口も聞かなかつたところが、彼女は私が一人で醉いでゐるのだと早合點をしたのか？それとも上の客のお座なりなのか兎に角、一寸例のショボ〳〵とした目尻を下げて、

一旦那はん、何を考へ込んでなはるのや?やつぱり奥さんのことだつしやろ?わて、旦那はんの心もち、よう解りまんね。」とそこで、愈々助からぬことには「ヒト――リ、ネ――ルヨ――ノ―だつしやろ?まあ〱、しほらしい旦那はんや、奥さんやボンチも早う呼びなはらんと、可愛相や。」それでお了ひかと思ふと、まだ饒舌らうと云ふのだ。

「な。旦那はん。わてもそない御親切な旦那はんを持ちたいもんや」

私の云ふ。

「俺はどうだい?」

すると彼女の云ふ、

「よろ――しい!結構や。」

それだけで私はお仙の手を引つ張つて、そんなところを三輪子に見せたら、多方翌朝は飯炊くことを斷つて、終日どこへか姿を隱して了ふに決つてゐるやうな奇體な格好をして、おい。お前さんと散歩しやう!などゝ、三丁目の交叉點でまんまと突き放して了つたこともあるが、いや、その時だつて、騷ぐと云ふほどでもなかつた。只妙にクサ〱して仕事がとんと進まなくて、わけもたくいらついてゐたので、實を云ふと、この女がもう少し小綺麗で、いくらでも教育があれば、此女と一緒に浮世よ!妻よ!あとは野となれ、と云ふ風に山の中へでも飛び込んだかも知れないのだが、いゝ鹽梅にお仙には私を迷はすだけの何物をも持たなかつたか?いや、三輪子に發見するところのものも、彼女に無いところのものも、同時に並せて持たない始末なのである。――で、

お仙は、間もなく、キヨロ〱と部屋の外を見廻し乍ら、彼女の亭主が相變らず蒼蠅に舐められて、正體もなく寢てゐることや、この部屋の中に私以外に正氣な人間がゐないことを確めると、何と思つたのか、今朝ほど私から受取つた

金を帶の間から、コソ〳〵と取り出して、今度は「ちよいと失禮」と云ひなが、後ろ向きにペロリと着物をまくつた。そして、腰卷との紐をプツリと解いた。おや！と思ふ途端に、可なり大きな眞つ黑な、ふわ〳〵とした財布が足下に落ちたのである。何をするのだらう？ さう思つて私は彼女の動作に一心に見惚れてゐた。プツリと切れたのが腰卷の紐だと考へたのは違つてゐた。腰卷は依然として赤々と彼女の半身を包んでゐる。で、切れて解けたのは黑繻紗の財布に縫ひつけてあつた別の細紐で、彼女はそれで財布を肌に、と云つて丁度あの灸の跡の沁みついた背中と腰の間程に、ピタりと縛りつけてゐたのである。何だつてこんな可怪しな場所に藏して置くんだらう？と思つてゐた私の五十圓は、そこへ電光石火のやうに入つて了つて、くる〳〵と卷きつけられた次第である。

「ども、失禮、わて、これから」とお仙は急に聲をひそめて、「㊉屋へ往んで來ますさかい、待つとくんなるか？直ぐ戻りまんね」と云つた。その○屋と云ふのが、つまり私の手で着物や帶が曲げ込まれた春木町の、活動寫眞館裏の質屋なのである。

「受け出しに行くのかい」

「さうや」

彼女は津田光造の寢顔をチラと見て、「待つとくんなはれ。な？ 今日はええ具合に暇でわて手すきどすさかい？ 歸りにえゝ物買ふて來て上げまんね。鮓？ えゝやろ。そのうちに津田はん起きやはつたら、湯行つて來なはるとえゝがな。

そんな風にも子供をだますやうにだら〳〵と饒舌り乍ら、一寸、身づくりをして、わざわざ俥で出て行つたのである。尤も歸りには大きな梱の荷物があるには違ひないが――しかし、彼女はなか〳〵戻つて來ないのである。

「津川さんはまだ起きてゐますか？」――

と云ひ乍ら、いつの間に起きたのか、翹がのそ〳〵やつて來た。五六人の支那人が、部屋の前を炊處の方へ、ソロソロと通がつて行つた。と思ふと、金盥の響や水の音がザブ〳〵と聞えた。ところで私である。もしもこの男がお仙の出先を尋ねたら、何處にしやう？知らないと云ふか？だが、いづれにしろもう戻る時分だから構やしないなど〻考へてゐたのである。すると不思議に、そのとき津川光造が目を醒して、やがて、何を頼むつもりだつたのか、「お仙さんは？」と呟いた次第であるが、翹は例のお化けのやうな顔の中に目を細くして隨分よく寝ましたねえと云ふ風なゆつたりとした微笑を浮べながら

「お仙はさきほど質屋に行きました」

と云つた。

「もうぢきに戻りませう」

とつけ足したのである。

ドキンとした私の心臓は、やがて引きつゞいてドキ〳〵と動悸を打ち出した。顔と耳が一時に火照つて來た。同時に私は今までのやうに翹の顔へ正面からの大膽な視線を浴びせることが出來なくなつて了つた。今までこの支那人の手前だけでも隠してあることゝばかり信じ切つてゐた秘密――恥かしい秘密が私達の間に投げ出されて、そしてその冷笑と輕蔑との渦の中へ私自身を發見したとき、お仙の仕打ち、と云ふほどのことでもないが、兎に角彼女の嘘に對して深い

深い憎惡を感ぜずにゐられなかつたのだ。考へるまでもなく私はその秘密を護るべく支那人に悟られまいと考へてかくは馬鹿げた苦心をして來たのであつたのだ。でそれは勿論お仙とても心得てゐた筈である。それだのに、彼女は何の必要があつてこの支那人の耳へ質屋の話までしたのだらう？私は慚愧の中にそんなことを考へてゐた。ところが、この、のつぺらぼうの、お人よしの支那人だとばかり信じてゐた鯢が、何と皮肉なことに、質屋にあるところの着物の話を始めたのである。縮緬の綿入が五枚の—紋羽二重が七枚の—朱珍の丸帯が一筋の—十圓のパラソルが何と目の醒めるやうだと—七圓もするフイ〳〵ゴムの草履が一足あつて、そいつが蒸餅のやうにふわ〳〵してゐるのと—冗談ではない私は全く眩狂の騒ぎだつた。と云つて、そんな恐ろしいやうな品物を私とても彼女とても質へ曲げ込んだ覺えがないに決つてゐる事ほど左様に實際はじめからそんなものは彼女の桐の中になかつたのである。で、勿論私はハチナ？と云ふ狐につまゝれたやうな氣持ちで貪るやうに鯢の話を聞いたのであつた。そして最後に、私達へ、自分の妻の物もちであることを支那人らしく誇るやうな、子ども子どもした様子で、例の鯨のやうな目尻を下げて、ニコ〳〵とさも得意らしく、

「それが皆質に入つてるんですよ。そしてそれを皆受け出してやるのに私は——」

とそれが、馬鹿に大仰な表情で、こんなことは私にも津田光造にも、とても出來る藝當ではなからうと云はぬばかりに叫んだのである。

「百圓も出してやりましたよ！」

勿論私は驚いた話だ。同時に、と云ふのか、次の刹那と云ふのか兎に角、この鯢が騙されて百圓の金をくすねられてニコ〳〵とさも幸福な人間のやうに、その空虚な幸福を感じてゐることを發見したとき、この半老人に對する氣の毒より

も、お仙と云ふ女——白痴と云つても構はない。山出しの、ポンツクの女のあさましい心根が俄かに私の義憤を起したのである。その夜、更けても更けても彼女の姿が洪雲館に二度と再び現はれなかつた時に、「あゝ。逃げたな！」と、さう私は秘かに感じたものだ。逃げたな？ 左様だ？ その通りだつた！ お仙は到頭いつまでも歸つて來なかつた。全く意外な奇蹟であつた。（完）

——と皆に私は語り終つたのである。

——EPILOGUE——

——私に取つては此物語を書かない方がよかつたと思はれることもある。私はこの物語によつて忘れ得ない事を餘りに澤山に見た。今まで忘れなかつたことは將來も忘れないものである。それを私は書いた。いや 書いた」のではなく爲したのだ。さうだ！「爲した」のだと私は云ひ得るであらう。（メレジコーフスキー）

船醫の立場

菊池寛

一

晩春の伊豆半島は、所々に遅櫻が、咲き殘り、山懐の段々畑に、菜の花が黄色く、夏の近づいたのを示して、日に〳〵潮が蒼味を帶びて來る相模灘が、漂渺と霞んで、白雲に紛ぎれぬ濃い煙を吐く大島が、水天の際に、模糊として横つて居るのさへ、のどかに見えた。

が、さうした風光の裡を、熱海から伊東へ辿る二人の若い武士は、二人とも病犬か何かのやうに險しい、憔悴した顏をして居た。

二人は、頭を大束の野郎に結つて居た。一人は五尺一二寸の小男だつた。顏中に薄い痘痕があつたが、目は細く光つて、眦が上り、鼻梁が高く通つて、精悍な氣象を示したが、そのゲツソリと下殺げた頰に、ちり〳〵生えて居る髭が、此の男の風采を淋びしいものにした。一人は、色の黒い眉の太い立派な體格の男だつたが、憔悴して居ることは、前者と異らない。

小男は、木綿堅縞の浴衣に、小倉の帯を締め、無地木綿のぶつさき羽織を着、鼠小紋の半股引をして居た。體格の立派な方は、雨合羽を羽織つて居るので、服装は見えなかつた。

小川の方は、吉田寅二郎で、他の一人は同志の金子重輔であつた。

二人は、三月の六日から十三日まで、程ケ谷に宿を取つて、神奈川に碇泊して居る亞米利加船に近づかうとして、空夜肝膽を碎いた。

最初、船頭を賺して、夜中潜かに、黒船に乘り込もうとしたけれども、いざその場合になると、船頭は悉く尻込みした。薪水を積込む御用船に乘込んで、黒船に近づかうとしたけれども、それも毎船與力が乘込んで行くために、便乘する機會はなかつた。

八日の日には、米利堅村人が、横濱へ上陸したと聞いたので、兼て起草して置いた投夷書を手渡す機會もと、馳け付けたが、彼等は既に船へ去つて、米利堅人を見た村人達の、かまびしい噂を聞いた丈だつた。

九日の日は、金子重輔が、舟が兎に角漕げると云ふのを幸に、漁舟を盗んで、黒船へ投じようとした。が、豈州舟の在處を見定めて、夜行つて見ると、舟は何人かゞ乘り去つたと見えて影もなく、烈しい怒濤が、暗い岸の砂を嚙んで居る丈だつた。二人が、失望して茫然と立つて居ると、野犬が幾疋も集つて來て、けたゝましく吠えた。

「泥棒をするのが難しいことか、初て分つたぜ」

勝氣な寅二郎は、さう云つて笑つたが、雨が間もなく降り出し、保土ケ谷の宿へ、丑滿の頃歸つたときは、二人の下帶まで濡れて居た。

十一日十二日と二人は保土ケ谷の宿で、悶々として過した。

十三日は空がよく晴れ、横濱の沖は、春の海らしく和み渡つた。今夜こそと思つて居ると、朝四つ刻黒船の甲板が、急に氣色ばみ、錨を捲く容子が見えたかと思ふと、山の如き七つの船體が江戸を指して走り始めた。海岸警衛の詰役人が、すはやと、思つて居ると、羽田沖で、急に轉回し、外海の方へ向けて走り始めた。

一隻はその儘本國へ、他の六隻は下田へ向つたと云ふ取沙汰であつた。

寅二郎と重輔は、黒船の動き出すのを見ると、口惜泣きに泣いたが、下田へ向つたのを知ると、直ぐ保土ケ谷の宿を拂つて、その跡を慕つた。

鎌倉、小田原に熱海と宿つて、今日三月十七日熱海を立つたのである。——

二人が、伊東へ一里ばかりの海岸へ來たときに、道の兩側に蜜柑畑があり、その中には早しらじらと花の咲いたのがあつて、香ばしい匂が、鼻を衝いた。二人が蜜柑畑の中の畔に腰を降して、割籠を開かうとしたときだつた。蜜柑の畑の中に遊んで居たらしい子供が聲を上げた。

「やあ！　千石船が通るぞ。やあ千石船よりも、まだ大きいぞ。しかも二艘ぢや。」

寅二郎は、何の氣もなく海上を見た。見ると、海岸から一里も隔つて居る海上を、異樣な怪物が、黒色の煙を揚げつゝ疾驅して居るのだつた。それは、夢にも忘れない黒船だつた。今日は。その三重の帆を、海鳥の翼の如く擴け、しかもそれにも足りないで、兩舷の火輪を廻して、やゝ波立つて居る太洋を、巨鯨の如く走しつて居るのだつた。

「見られい！　あの勢を。

寅二郎は敵愾の心も忘れて、嘆賞した。

「毛唐め！　やり居る！　やり居る！　あのやうに皇國（みくに）の海を人もなげに走り居る！」

慷慨家の金子は、罪なき身を口惜しむやうに、足摺りしながら叫んだ。

「なに、今に米利堅へ渡つて、あの術を奪つてやるのだ。夷人の利器に依つて、夷人を追ひ拂ふのだ。」

貞二郎は熱海の湯の宿で作つて呉れた大きい握り飯をほうばりながら叫んだ。

二

二人が、下田へ着いたのは、翌十八日の午後であつた。昨日途中で見た二艘の火輪船は、港口近くに碇泊して居た。

二人は、宿を取ると、直ぐ港を警衛して居る役人達に会つて、それとなく黒船の容子を訊いて見た。

役人達の話に依ると、この二艘は先發隊で、大將彼理はまだ來て居ない。その上、漢語ばかりでなく、和蘭語を話す通辭さへ居ないので、薪水積込の應答にさへ困まつて居ると云ふことであつた。通辭が居ないとすれば、密かに乘付けて、事情を陳べて、便乘することは、絶對に不可能である。二人は、彼理が乘つて居る將艦が、入港するのを待つより外はなかつた。

二十日の朝だつた。貞二郎は、自分の指の股や腕首に、四五日前から出來て居る腫物が、膿を持つて居るのに氣が付いた。

鎌倉の宿を立つた朝、彼は自分の指間や腕首や、肘に、小さいイボのやうなブツ〳〵が幾つも出來て居るのを知つた。その夜小田原の宿で宿まると、小さいブツ〳〵の各々が、虫の這ふやうな、いちりがゆさを與へた。彼は之れを幾度も掻いた。掻けば掻くほど、痒さが增した。

それが、三日と四日と經つ裡に、數が多くなり、殊に昨夕は痒さのために、よく眠られなかつたが、今朝見ると、白

く膿を湛へて居るのが、幾つも出來て居る。それが、手指ばかりでなく、腹部にも腰の廻りにも、腿にも、數は少いが擴がつて居る。紛ふ方もなく、疥癬である。

考へて見ると、保土ケ谷の宿で、給仕に出た女中が、頻りに手指を掻いて居たのを思ひ出した。あの女中から、傳染されたのだと思つたが、どうすることも出來なかつた。彼は、大事を決行する前に、たとひ些細な病にしろ、かうした病に罹つたのを悔んだ。彼は、黒船に乘るまでには、少しでも治療して置きたいと思つた。彼は、下田から一里ばかりの蓮臺寺村にある湯が、痔瘡や、疥癬に、いゝと云ふことを聽いたので、直ぐその日、蓮臺寺村に移つて入湯した。

翌廿一日の午後、彼理の搭乘して居る旗艦ポウワタン船は、他の三隻を率ゐて、入港した。

廿二日から、二十六日まで、寅二郎と重輔とは、日に夜を次いで、黒船に乘り込むことを計つた。廿四日の朝二人は下田の郊外を歩いて居る夷人を追かけて、豫て認めて居た投夷書を渡した。蓮臺寺村の湯の宿へは、下田へ行つて宿ると云ひながら、二人は毎夜海岸へ出て、黒船の容子を窺つた。そして疲れると、その儘海岸で、露宿した。

廿五日夜には、下田の村を流れて居る川に、繋いであつた舟を盗み、川口の番船の眼を忍んで海へ出た。が、その夜は波が荒く、重輔の未熟な艪では、舟が同じ處を、ぐる／＼廻轉する丈で、何時まで經つても、沖へは出られなかつた。綿のやうに疲れて、柿崎の濱へ引返す外はなかつた。二人は、濱邊の辨天堂で、夜が明くるをも知らずに熟睡した。

その間も、寅二郎の疥癬は、少しも癒えないばかりでなく、どれこれも、無氣味に白く膿んでしまつた。彼は、大事の前の些事としてなるべく氣にすまいと思つたが、身體中に漲る感覺的不快さを、どうともすることが出來なかつた。

廿七日の夕方、柿崎の濱邊へ出て見ると、意外にも、ミツスシツピイ船が、海岸から二町とない沖合に、碇泊して居るのを見た。それから、半町も隔てずに旗艦のポウワタンが、碇を降して居る。二三日前から、港内を測量した結果、

碇泊の位置を換へたらしかつた。寅二郎と重輔とは、雀躍して欣んだ。その上、辨天堂の直ぐ眞下の渚に、一艘の漁舟が繋ぎ捨てゝある。丁度その舟を盜めと云はぬばかりに。

二人は、直ぐ蓮臺寺村へ歸つて、夕食を認めた。下田の宿へ移ると云つて、航海の準備をした。寅二郎は、着換の衣類二枚と、小折本孝經、和蘭文典前後譯鍵二冊、唐詩選掌故二冊、抄錄數冊とを小さい振分の荷物にした。それが、千里の海を渡つて、亞美利加へ行く彼の荷物だつた。

夜の五つ刻、辨天堂の下の海岸へ出て見ると、降るやうな星月夜の下に、波は思の外に凪いで居た。六艘の黑船は、銘々に青い碇泊燈を揭げながら、小島のやうに、その黑い姿を並べて居た。二人の心は、躍つた。が、昼間見た小舟を探して見ると、それは引き潮のために、砂濱高く打ち揚げられて居るのだつた。二人は懸命になつて、押して見た。が、それはビクとも動かなかつた。

潮が、再び滿ちて來るのを待つより外はなかつた。二人は、辨天堂の中へは入つて、寢てまつた。目が覺めたのは、八つを廻つた頃だらう。星明りの裡に、潮が堂の眞下まで滿ちて居るのが分つた。

二人は欣び勇んで舟に乘つた。が、櫓を取つて、漕ぎ出さうとすると、肝心な櫓臍がないことが分つた。驚いてもう一つの舟に乘り替へて見た。が、その舟も同じだつた。周章た。が、突嗟な場合、二人は下帶を脫して、櫓を兩方の舷へ縛り付けた。が、半町と漕がない內に、弱い木綿は、櫓と舷との强い摩擦のために、磨れ切れてしまつた。二人は小倉の帶を解いて、櫓を縛り直す外はなかつた。

漕ぎ出して見ると岸に立つて見たときとは違つて、波濤が荒かつた。ともすれば、舟は波に煽られて、顚覆りさうになつた。その上、寅二郎は今まで、舟を漕いだことがなく、只力任せに櫓を動かすのだから、二人の調子が合はず、一

番所近のミスシッピイへ向けた舳は、くる〳〵廻つて、舳の前へ下田の村の灯火が現はれたり、柿崎の濱の森が現はれたりした。舟は前へは進まないで、同じ所を廻つた。

二人の腕が脱けるやうになつたとき、やつとミスシッピイ船の舷側へ着いた。二人は、蘇生した思がした。

「米利堅人！　米利堅人！」

重輔は、小舟の舷に、足をかけながら、大聲に叫んだ。

船上に怪しい叫び聲が起り、人の氣勢がしたかと思ふと、ギヤマンの燈籠が、舷側から吊し降された。見上ぐると、船上から數人の夷人が、見下して居る。寅二郎は矢立を取り出し、燈籠の光で懷紙に、「吾欲ㇾ往二米利堅一君幸請二之大將一」と、手早く認めて、その紙片を持ちながら、舷梯をかけ上つた。が、不幸にもその船には、通辭が居なかつた。老いた夷人は、寅二郎からその紙片を受取ると、別の紙に横行の字をかいて、二つの紙片を寅二郎に返しながら、ボウワタン船を指して、手眞似であの船へ行けと云つた。二人には、その意味が直ぐ解つたけれども、乘つて來た小舟で、更に一町の沖合へ進むことは至難のことであつた。寅二郎は、船上に吊つてあるバッテイラを指して、手眞似であれで連て行けと頼んだが、聽かれなかつた。

疲れ切つた身體で、二人はボウワタンまで漕いで行つた。沖へ出れば出るほど、波が荒くなつた。寅二郎も重輔も、手掌に水泡が、いくつも出來た。が、舟は容易に、彼等の思ふ邊にならなかつた。内側へ付けようと思つたのが、外洋へ向つた波の荒い外側に付いてしまつた。しかも舷側と舷梯との間に挾まれ、烈しい波に煽られ、凄じい音を立てながら、舷側へ幾度も叩き付けられた。

船上に立つて居る番兵に、その音が聞えたのだらう。手に長い棒を持つた夷人が、怒り罵りながら、舷梯を馳け降り

て來て、二人の乘つた舟を、その棒で突き出さうとした。突き出されては堪らないと思つたので、寅二郎は素早く舷梯へ飛び移つた。重輔は纜を梯子に移つた寅二郎に、渡さうとした。が、夷人は容捨もなく、舟を突き出すので、重輔も周章て舷梯へ飛び移つた。そして、小舟の纜を手放してしまつた。

舟には、二人の大小と、荷物とを殘してあつた。が、旗艦に乘つた以上、兎も角もなると思つたので、小舟の流れ去るのを顧みなかつた。むろん、顧みる餘裕もなかつたが。

二人を船上へ拉した夷人は、二人が船を見物に來たのだと思つたのだらう。二人に羅針盤を見せたりした。二人は首を振つて、筆と紙とを求めた。矢立も懷紙も小舟へ殘して來たのである。

間もなく、日本語の通辯ウヰリヤムスが出て來、そして二人は船室へ導かれた。ギヤマンの洋燈が、室内を真晝のやうに、煌々と照して居た。

室内には、通辯の外に、二人の夷人が立ち會つた。一人は副艦長のゲビスで、他は外科醫のワトソンであつた。彼は、蘭語を解する上に東洋通であつた。

寅二郎は、生來初ての鵝筆を持つて、米利堅へ行きたいと云ふ志望を漢文で書いた。ウヰリヤムスは、早口の日本語で、それは何國の字ぞと訊いた。

寅二郎が、日本字なりと答へると、ウヰリヤムスは、笑つてそれは唐士の字ではないかと云つた。ウヰリヤムスの明晰な日本語と日本に就いての智識とが、寅二郎達を欣ばした。二人は、初て慈母の手を探り得たやうな心持になつて、その心の内の火のやうな望みを述べ始めた。

三

間もなく、ボウワタン船の提督の船室で、二人の日本青年の希望を容れるか、どうかに就いて、會議が開かれた。

彼那提督とその參謀と、ボウワタンの艦長と副艦長のゲピスと、外科醫のワトソンと、通辯のウキリヤムスが、それに加つた。

十一時を過ぎて居たが、事件が異常であるために、誰も彼も興奮して居た。殊に、副艦長のゲピスは、二人の日本青年を見て、その熱誠に動かされた丈に、誰よりも興奮して居た。

「ぢや、我々は此の青年達の請を斥けた方が、無難だと云ふのですか」

會議の傾向が、拒絶に傾いて來ると、ゲピスは躍起になつて居た。

「我々は、こんな些細なことで、日本政府と事端を構へるのはよくないことだと思ふ。」

艦長は、先刻から拒絶を主張して居た。ゲピスは、艦長の言葉を駁さうとして思はず自分の席に立ち上つた。

「が、然し私は、縦令日本政府との間に、少しの面倒があつても、あの青年達の請を容れてやることが、どんなに正しいことであり、いゝ事であるか分らないと思ふ。私は、先日あの青年達が、我々の士官の一人に渡したと云ふ手紙の飜譯を讀んで、彼等の聰明な高尚な人格にどれ丈感心したか分らない。彼等の熱烈な精神は私の心を打つた。私は、有色人種の心の裡に、こんな立派な魂が、宿つて居るとは知らなかつた。その上、飜譯で讀んでも、その原文が、どんなに明暢であつて、理路が整然として居るかゞ分る。その頭腦の明晰さは、私にとつて、一つの驚異であつた。かうした聰明な青年を、我國へ連れて行つて、わが文化に接せしめると云ふこと丈でも、私の心は躍り上るやうな歡喜を感ずる。私

は提督閣下が、この青年の請に耳を傾さんことを切望するものです」

まだ三十を越して間もない、ゲビスは若い眸を輝し、卓を輕く叩きながら叫んだ。

「貴君は、あまりに興奮し過ぎる。貴君はもつと現實を見なければいけない。」顎鬚を蓄へた五十近い艦長は、若者を宥めるやうに云つた。「貴君は、物事を表面丈で、解釋してはならない。彼等の申分はよい、我々の同情を得るに充分だ。が、然し彼等が、申分以外の卑劣な動機で、動いて居るかも知れないと云ふことを我々は、一應考へて見る必要がある。日本人との短日月の交渉に依つても、彼等がどんなに怜悧であるかと云ふことが分つた、しかも悪賢いと云つてもよいほど、怜悧であることが分つた。私は、先日の手紙を見た時から、こんな疑を起した。あの青年二人は、日本政府の間者ではないかと考へた。あんな立派な文章を書く日本青年が、日本政府に依つて、重用されて居ない譯はないと思ふ。彼等は日本政府の役人に違ない。彼等は、見すぼらしい青年に扮して、我々を試さんとして來たのである。日本の法律は、日本人の海外へ渡航するのを禁じてある。我々は、その事を横濱に、碇泊して居た頃、林大學頭から聞いて知つて居る。從つて、我々は此法律を遵守して日本人の海外渡航を扶助すべきではない。思ふに、彼の二人の青年は、我々が日本政府に忠實であるかどうかを試さんとして、遣られたる間者である。若し、我々が彼等の志望を許したならば、直ちに日本政府から抗議が來るだらう。そして、我々は日本政府に、不忠實なるものとして、折角平和の裡に得た通商の許可も取り消されないとも限らない。」

「いや、貴下は疑ひ過ぎる」副艦長のゲビスは、毅然として屈しなかつた。「貴下は、あの青年達を見ないから、そんなことを云はれるのだ。かの青年達の眼は、海外の智識を得ようとする熱心さで、血のやうに燃えて居る。それは、決して間者の眸ではない。彼等の衣類は濡れ、彼等の手指には、無數の水泡を生じて居る。それは彼等が、潜かに本船に近

づかんとして、どんな犧牲を拂つたかを語つて居る。もしも、彼等が日本政府の間者であつたならば、彼等はもつと容易に我々の所へ來たに違ない。その上、彼等は本船へ乘り移るときに彼等に取つて生命よりも大切な大小を捨てゝ居る。彼等は海外へ渡航するために、生命をさへ拂はふとして居る……」

「併し、ゲピス君！」平素は武骨な提督彼理が、重々しい口を開いた。「私も、あの青年達の希望を遂げさせたいと云ふ感情に於ては、君と異らない。が、然し私は横濱に於て、合衆國の國家と日本の國家との間の條約を結んだ。その私は、私情を以て、日本の法律に背かうとする日本人を扶けることは出來ない。が、私は望む、智識に渇えて居る日本の青年が白川に我國へ到來する日が、間もなく來ることを。そして現在この二人の青年に對する庇護を拒むことは、却つてさう云ふ未來の近づくのを早める所以ではないかと思ふ」

ゲピスは一寸頭を傾げたが、又直ぐ叫んだ。

「閣下、貴下の言葉は私を首肯させる。が、然し公明正大な好奇心に依つて、わが國へ渡航せんとする、此の愛すべき青年の身の上を考へてやつて下さい。われ〳〵が、彼等を拒絶することは、彼等を斷頭臺へまで追ひ上げることを意味して居る。我々は、彼等を陸へ追ひやれば、彼等は直ぐ政府の役人に依つて捕縛されるだらう。そして、日本の峻嚴な法律は彼等の首を身體から、斬り放つだらう。我々合衆國人の渡航に依つて、好奇心を起し、我々の故國を慕ふものを、我々の手に依つて、斷頭臺の上へ、追ひ昇せることは、亞米利加合衆國の恥ではないか。われ〳〵の大統領が、われ〳〵を日本へ送つた所以は、形式的な條約を結ぶためではない。孤島の裡に、空しく眠つて居る可憐な國民を、精神的に呼び覺すことではないか。然るに、今我々の喚問に、最初に答へた此の愛すべき先覺者、國民全體の覺とも云ふべき聰明叡智なる青年の哀願に、耳ひたる耳を向けると云ふことは、われ〳〵が帶びて居る眞の使命に對する反逆ではな

からうか。二人の青年を、日本政府の役人の眼から隱くして、日本政府の感情を傷くることなしに、本國へ送ることは若しそれをやらうと思ひさへすれば、甚だ容易なことである。私は、提督がわが國建國以來の精神たる正義と人道との名に於て、此の青年の志望に耳を藉さんことを切望するものである」

ゲビスの熱辯は、凡ての人々を動した。剛腹な、曾て自說を曲げたことのない艦長でさへ暫らくの間は、默つて居た。提督の顏にも、著しい感動の色が浮んだ。彼の心が、二人の日本青年の利益のために、動いたことは確からしかつた。彼は、やゝ苛みがゝつて居る顏を上げて、一座を見廻した。

「外に意見はありませんか。ウキリヤムス君！ ワトソン君！」

そのとき、ワトソンはふと、先刻日本の青年の一人が洋燈の光で字を認めて居るときに、その手指に無數に發生して居た傳染性皮膚病のことを思ひ出した。

「私は船醫の立場から、たゞ一言申して置きたい。彼の青年の一人は、不幸にも Scabies impetiginosum に犯されて居る。それは、わが國に於て稀有な皮膚病である。殊に艦内の衞生に取つては一つの脅威である。私は、艦内の衞生にする責任者として、一言丈云つて置く。無論、私は此の青年に對して限ない同情を懷いて居るけれども」

ゲビスの正義人道を基本とした雄辯も、此の實際問題の前には、タヂ〳〵となつた。

提督の顏色が再び動いた。彼は青年の哀願を拒絕するために、感ずる心の寂しさを紛ぎらす、いゝ口實を得た。可なり長い熟考の後に提督は云つた。

「ゲビス君、私は此の青年に對する同情に於て、決して貴君に負けはしない。が、私は疑はしき人道よりも、もつと尊重しなければならないものを持つて居る。その上、彼の青年達の志望よりも、艦内に於ける衞生の重んずべきことに就

ては、諸君が一致して居て呉れるだらうと思ふ。それではウヰリヤムス君！彼の青年達を宥めて、陸上へ返して下さい。ゲビス君！、君は彼の青年達を送り返すために、短艇の用意を命じて呉れたまへ」

そして、その命令は即時に實行された。

外科醫のワトソンは二人の日本青年が、舷梯から降されるのを見た。二人は眼に涙を湛へながら、合衆國人の仁義心に訴へたが、それが容れられないと知ると、穏かなわづかな抵抗を試みた後、その不幸な運命に服從した。彼等のつゝましい悪怯れない態度を見たワトソンはその夜船室の寢臺で、終夜眠られなかつた。

四

不幸な日本青年に就ての事件が起つてから、三日目の朝、ワトソンは、他の一人の士官と一緒に海岸に上陸した。よく晴れた一日だつた。二人は海岸を散歩してから、市街の裏手の方へ廻つた。子供が五月蠅く隨いて來るので、手眞似で追ひ拂つたが、執拗に何處までも隨いて來た。

彼等はふと番所らしい建物の前へ來た。日本の兵卒らしい人間が、棒のやうなものを持つて、その門を守つて居た。見ると、その番所を圍む木柵に多くの男女が集つて居た。ワトソンが行くと、彼等は此の異邦人を恐れるやうに避けた。ワトソンは木柵に身を寄せながら、番所の中を覗き込んだ。木柵から、一間と離れないところに、獸を入れるやうな檻があつた。檻の中に、何かうごめいて居るやうな物があるので、ワトソンはぢつと見詰めた。すると、その格子の間から、青白い二つの人間の顔が現はれて、彼を見てニツと微笑した。ワトソンは、恐ろしい戰慄が、身體を通じて、流れるのを感じた。彼は、その人間の顔を認知（リコグナイズ）した。それは、紛ぎれもなく、先夜自分達の船を訪れた彼の不幸なる日本

青年達であつた。その檻は、二人の人間を容れるべく、あまりに狭かつた。二人は膝を付き合はしながら、窮屈さうに坐つて居た。

二人の可憐な有樣が、ワトソンの心を暗くした。彼は思はず英語で、

「おゝ可憐な人々よ。君達は如何にして捕はれたか」と、大聲で叫んだが、無論通ずる筈はなかつた。

が、ワトソンが叫ぶのを見ると、二人の青年は、ワトソンが彼等を認めたのが分つたと見えて、可なり欣んだ。そして、一人の——かの scabies を患つて居る青年は、自分の掌を直角に、頸部に當て、間もなく自分の首の切斷せられることを示しながら、然も哄然と笑つて見せた。羅馬人カトウを凌ぐやうな克己的な態度が、ワトソンを壓服した。ワトソンは、木柵を掴んで居る自分の手が、ある畏怖のために、かすかに顫へるのを感じた。彼は二人の日本青年の生命を救ふために、どんな事でもしなければならないやうな氣になつて居た。

ふと見ると、笑つた青年は、手で字をかく眞似をしながら、筆紙を與れと云ふ意味を示した。ワトソンは、懷中を探つて、一本の鉛筆を探り當てた。が、身體中に何の紙片もなかつた。すると、一人の日本少年が、何處からか、薄い木片を拾つて來て與れた。が、一間も隔つて居る檻へ、如何にして、差入れようかと考へて居ると、老人の牢番が、それを受け付いで渡して與れた。

彼の青年は、鉛筆を受取ると、それを不思議さうに一瞥した後、何の躊躇もなく、木板の上に流暢に書き始めた。十五分間の後、餘地もないほどに、字を書き詰められた木片がワトソンの手に返された。

ワトソンは、青年達に目禮し、心の裡で此の不幸な青年達の冥福を祈りながら、船へ歸つて來た。そして、その木片を支那語の通辭である廣東人羅森に示した。

羅森は次ぎのやうに譯した。

英雄一度その志す處に失敗せば、彼の行爲は、奸賊强盜の行爲を以て目せらる。吾等は衆人環視の裡に捕へられ、縛められ、暗獄の裡に幽閉せらる。村の長老は、侮蔑を以て、吾等を遇し、吾等を虐待すること甚し。

六十餘州を蹂破するの自由は、我等の志を滿足せしむる能はざるが故に、我等は五大洲を周遊せんことを願へり。これ我等が宿昔の志願なりき。我等が多年の計策は、一朝にして失敗せり。而して今や我等は、陋屋の裡に禁錮せられ、飮食、休息、睡眠凡て困難なり。我等は、此の囹圄より脫する能はず。泣かんか愚人の如し。笑はんか惡漢の如し。嗚呼、吾等は默して已まんのみ。

提督彼理を初め、先夜の會議に列した人々は、揃つて此の譯文を讀んだ。そして、銘々に深い感激を受けずには居られなかつた。

「何と云ふ英雄的な、しかも哲學的な安心立命であらう。」

提督は深い溜息と共にさう呟いた。

不意に歔欷の聲が、一坐を駭かした。それは、若い訓練長のゲビスであつた。

提督は、ゲビスの傍に進みよつて、その肩を輕打した。

「さうだ。君の感情が一番正しかつたのだ。君はこれから直ぐ上陸して呉れたまへ。そして、此の不幸な青年達の生命を救ふために、私が持つて居る凡ての權力を用ふることを、君にお委せする。」

ゲビスは、それを聞くと、勇み立つて、出て行つた。

ワトソンは、心の苦痛に堪へないで、自分の船室へ歸つて來た。が、其處にも、ぢつとして居ることが出來なかつ

た。彼は、自分の船醫として主張した一言が、果して正當であつたかどうかを考へずには居られなかつた。彼の心には scabies が、此の高貴にして可憐な青年の志望を、犠牲にしなければならないほど、恐ろしい傳染病であるかどうかと、疑はれて來た。彼は、皮膚病學の泰斗が、それに就いて、何う云ふ解說を爲して居るかを知つて、自分の烈しく動搖する良心を落着けたいと思つた。彼は悄然として、船の文庫（ライブラリイ）の方へ歩いて行つた。

中央公論大賣捌所

◉定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

◉本號特價　金八拾錢

郵稅金貳錢五厘

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一替振貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替小包の取扱は一切謝絕す

一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十年九月三十日印刷納本
大正十年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區本郷三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.